

数え上げた 浅川流域の野鳥Ⅲ

八王子・日野カワセミ会 30年間の観察記録

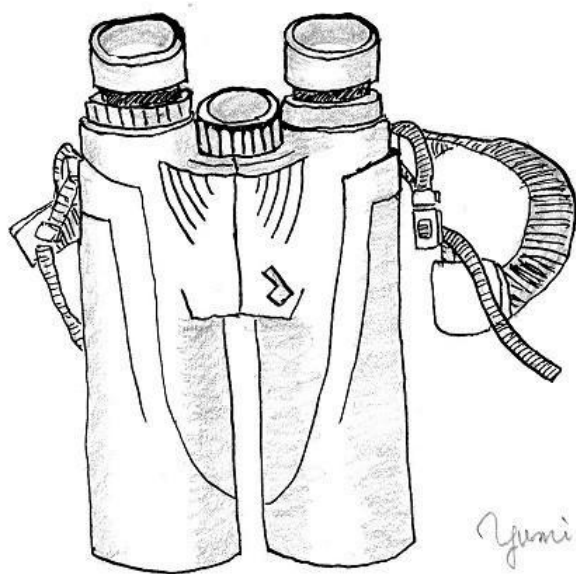


2016年12月

八王子・日野カワセミ会

数え上げた 浅川流域の野鳥Ⅲ

八王子・日野カワセミ会 30年間の観察記録



2016年12月

八王子・日野カワセミ会

はじめに

2006年に「数え上げた浅川流域の野鳥 2」を発刊してから10年が経過しました。八王子・日野カワセミ会は、地域限定の野鳥を観察する市民団体で、野鳥の観察を基礎に羽数のカウントに重点をおいた活動をしています。

活動の範囲は東京都八王子市及び日野市の全域で、浅川流域、程久保川流域の全てと、多摩川及び大栗川の一部が含まれています。この区域には高尾山を始めとする山地、多摩丘陵他の丘陵地、浅川、多摩川等の河川、丘陵と河川間の台地などの多様な環境があり、多種類の野鳥が生息しています。

活動の基本となっている野鳥のカウントとは何でしょうか。私達の住む身近な環境にどのような野鳥がいるか、その野鳥が増えているか、減っているかなどを明らかにするのが定期カウントです。本会は20コースを設定して担当者を決めて月1回の定期カウントを行っています。その他に毎年1月に冬鳥一斉カウント、初夏にオオルリを始めとした夏鳥調査、カルガモ・イワツバメの営巣調査、秋にサシバ等の渡り調査、緑地保全地域の野鳥調査などに取組んでいます。これらの活動は全て鳥の羽数のカウントが基礎になっています。このような膨大な調査を長期間継続することは、専門家では成し得ないと思いますが、私達が取組むカウントの結果は科学的なデータといわれるものでなければなりません。そこで本会では、マニュアルを作成し、カウント担当者間の共通認識をより深めること、担当者が交替する時の引き継ぎ資料として前任者がどのような方法で、どのようなことを工夫して実施していたかを知る資料として活用できるようにしています。

野鳥のカウントによって得られた膨大なデータの紛失や改ざんを防ぎ、またデータ活用の促進を図ることが必要です。そのために、2012年に「八王子・日野の野鳥の記録」という生データを収めたDVDを作成し、会員はもとより、近隣の公共図書館、自然保護団体に配布しています。

本書は、「数え上げた浅川流域の野鳥 2」の続編ですが、1985年の本会発足後のデータを整理して冊子にまとめたものです。減少傾向にある野鳥は16種もあるのに対し、増加傾向にある野鳥は8種だけであることが明らかになりました。

本会では、本書の作成と同時に「八王子市・日野市鳥類目録」を発刊しました。鳥類目録とは、その地域で確認された全ての鳥を網羅的に掲載した、いわば「鳥のカタログ」です。この鳥類目録は「30年間にわたり積み重ねてきた本会の野鳥の観察記録」と「外部文献資料」の二つをソースとしています。

本書と鳥類目録の作成は本会の発足30年記念事業として取組みました。野鳥は地球規模で行動しますので、両書がローカルな範囲の野鳥の観察（調査）記録でも、地球規模での自然環境の動向を見守る資料の一部としても貢献できるのではないかと考えています。

本書の刊行に当り費用の一部を公益財団法人とうきゅう環境財団から支援を受けました。私達の活動に理解を示し応援して頂いた同財団に感謝致します。

2016. 12 八王子・日野カワセミ会
会長 粕谷 和夫

発刊に寄せて

樋口 広芳（東京大学名誉教授、慶應義塾大学特任教授）

八王子・日野カワセミ会発足30周年、おめでとうございます。また、30年間にわたる貴重な観察記録が収められた報告集の出版、おめでとうございます。一つの地域でこれだけ長期にわたって活発な調査活動を続けておられるというのは、正直いって、とてもおどろきです。20周年記念の時にも書かせていただきましたが、通常、長年観察を続けて一段落つくと、その後、同じような努力はなかなかできないものです。あるいは観察そのものは続けられても、その結果をまとめることはなかなかできません。

会員数二百数十名の八王子・日野カワセミ会。決して多いとは言えない規模ですが、活動は実に多岐にわたっています。浅川流域を中心に20コースで毎月1回の定期カウント、冬鳥一斉調査、多摩川のカモを中心とした越冬鳥調査、カルガモ繁殖調査、オオルリ他夏鳥生息数調査、家の庭にきた野鳥調査、秋のサシバ渡り調査、ツバメ集団ねぐら調査、緑地の保全地域における野鳥の生息調査、内陸のイソヒヨドリ繁殖調査などです。しかも、これらが長い年月にわたって実施されているのです。

今回の報告書には、そうした諸活動の内容が簡潔明瞭に示されています。結果には興味深い点がいくつもあります。たとえば、地域によって多少の違いはあるものの、多くの地域で記録された種数に大きな違いはないのに個体数の方は減少している、スズメやヒバリ、カルガモやオナガガモなど身近な鳥が減少している、一方、アオサギやダイサギ、外来種のガビチョウなどは増加している、といったことなどが見てとれます。結果はむりに集約せず、地域別、季節別、鳥の種別などに整理されているので、時間的、空間的な推移、鳥の種や種類による違いを知るのに都合がよい内容になっています。これらの記録は今後、対象地域内での鳥とその生息環境の保全を考える上で重要な資料となるに違いありません。

これまで長年にわたってすぐれたリーダーシップをとってこられた会長の粕谷和夫さんと、観察を続けてこられた数多くの会員の方たちの努力に敬意を表します。今後さらに活動が継続され、新たな情報が蓄積されていくことを望みます。

凡 例

本書は八王子・日野カワセミ会が実施してきた 30 年間の野鳥の調査研究の成果をまとめたものである。調査研究の主体は毎月 20 コースで実施している「野鳥定期カウント」と毎日の野鳥の観察記録を蓄積した「鳥信」であるが、この他にも冬鳥一斉カウント、オオルリ他夏鳥調査、カルガモ、イワツバメの営巣調査等各種調査結果も含まれている。

1. 本書では、「八王子・日野カワセミ会」は「カワセミ会」、「野鳥定期カウント」は「定期カウント」と表記している。
2. 鳥名と掲載順は日本鳥学会「日本鳥類目録第 7 版（2012 年）」に準拠している。
3. 年号は原則として西暦、数量はメートル法による。
4. 人名は敬称を省略している。
5. 河川名で「北浅川」は本来の名称は「浅川」であるが、「南浅川」との区別を、明確にするため「北浅川」と表記した。
6. 「陣場山」は「陣馬山」という表記もあるが、「陣場山」と表記した。
7. 「ヨシ原」の中には「オギ原」を含むが、一括して「ヨシ原」と記載した。
8. 用語の解説

(1) 定期カウント

ある場所にどのような鳥がいたかを調べて記録しておく、時代の変化とともに出現する野鳥がどのように変わるかが分かる。このような調査を定性調査という。定性調査だけでは種別の野鳥についてのくらの羽数がいたか、増えたか、減ったかなどことがわからない。そこで、定性調査に加えて「鳥の羽数を数える」という調査を行う。これが定量調査である。コースを決めて野鳥の定量調査を定期的に行うことをカワセミ会では「定期カウント」と呼んでいる。

カワセミ会では八王子市・日野市内に 20 コースを設定している。各コースに担当者を決めて月 1 回の定期カウントを行っている。20 コースの調査区間及び各コースの開始年は次表のとおりである。浅川は最上流部の大沢橋（現在は松竹公園西に変更されている）から多摩川合流まで約 21km を 7 区域に分割してコースを設定しているが、7 コースは全て連続している。多摩川は 3 コースあるが、各コースは連続していない。高尾山は小仏城山までの奥高尾を含み 5 コース設定している。

開始年はコース番号 4 が最も古く、カワセミ会設立年の 1985 年、最も遅いのがコース番号 11 と 20 の 1998 年で、この年から 20 コース体制が整った。20 コースで八王子、日野市の主要な野鳥生息地をほぼカバーしている。開始年が異なるのはごく小人数で発足したカワセミ会の会員のその後の増加とともに定期カウントを担当できる会員も増加したことに対応しているためである。担当者が高齢、転居等の理由で担当できなくなったコースは次の担当者に引き継がれている。

定期カウントのコース別開始年

番号	ブロック	コース名	開 始 年						
1	浅川上流	北浅川(松竹公園西～陵北大橋)					1990		
2		北浅川(陵北大橋～松枝橋)					1990		
3	浅川中流	北浅川(松枝橋～鶴巻橋)		1986					
4		浅川(鶴巻橋～大和田橋)	1985						
5		浅川(大和田橋～長沼橋)		1986					
6	浅川下流	浅川(長沼橋～一番橋)					1990		
7		浅川(一番橋～多摩川合流地)					1990		
8	浅川支流	川口川(川口橋～明治橋)					1992		
9		湯殿川(白旗橋～時田大橋)					1992		
10	多摩川	多摩川(滝山城跡下)		1987					
11		多摩川(谷地川合流付近)							1998
12		多摩川(浅川合流付近)					1992		
13	都市公園	小宮公園		1987					
14		片倉城跡公園			1988				
15		長沼公園					1992		
16	高尾山	高尾山(小仏川)						1996	
17		高尾山(蛇滝コース)						1996	
18		高尾山(琵琶滝コース)						1996	
19		高尾山(大垂水コース)						1996	
20		高尾山(日影沢コース)							1998

定期カウントの結果は科学的なデータといわれるものでなければならない。そこで、カワセミ会では定期カウントマニュアルを作成し、このマニュアルに基づいてカウントの実施手順、方法などを統一している。このマニュアルが定期カウント担当者間の共通認識をより深めることに役立ち、さらに担当者だけでなく定期カウントに同行する会員にとっても定期カウントの意義や方法の理解を深めるための参考資料として活用されている。また、担当者の引き継ぎ資料として前任者がどのような方法で、どのようなことを工夫して実施していたかを知る資料として役割を果たしている。

カワセミ会の定期カウントは、ラインセンサス法に準じて行っているが、コースによって環境条件が異なるためセンサスルート長、観察半径、歩行速度について、厳密な適用は行っていない。具体的には以下の①～④を基準にしている。

- ①コース毎に設定したルート歩いて、概ね半径 200m の範囲内に出現する野鳥を姿や鳴き声により識別し、種別毎に羽数をカウントする。鳥種の識別および羽数の確認が困難な場合は、双眼鏡または望遠鏡を用いて確認する。
- ②定期カウントは毎月、月前半の 1 回のみとし、同一月に同一ルートを複数回または他の日にカウントしてもその結果は反映しない。
- ③通行止めなどにより設定ルートが歩けない場合は、迂回などを行ってカウントし、その旨を特記事項に記入、報告する。
- ④隣接する他コースとの境界を越えて見えた野鳥はカウントしない。

(2) 年最大値

野鳥が増えたか、減ったかを定期カウント結果から経年的に表現するための「各年次の総羽数」は本書では 1 月から 12 月までの合計値を使用していない。「各年の年最大値」を用いている。各年次 1 月から 12 月までの種別のカウント羽数のうちから種別に最大羽数を記録した月の羽数をその年次の年最大羽数としてピックアップして、これを該当年次の「年最大値」としている。したがって、最大羽数を示す月は種によってもコースによっても異なる。

「年最大値」によって表現される経年変化は「傾向を読み取る」ためのものであり、実数とは完全に一致せず、「おおよその羽数」である。なお、定期カウント以外は最大値でなく、実数を使用している。

(3) 季節区分

野鳥は季節によって渡りをする種と季節が変わっても渡りをしない種がある。ここでは八王子・日野を基準にして鳥の季節区分を以下の表のようにしている。これはあくまでも便宜的なもので、同一種でも二つ以上の区分に該当する種があり、この場合は観察機会が多い方を当該種の季節区分に当てはめた。例えばヒヨドリは春と秋に通過するグループがあり、これは旅鳥となるが、1 年中生息していて繁殖もしているグループの方が観察機会が多いので留鳥としている。

観察された野鳥の季節区分

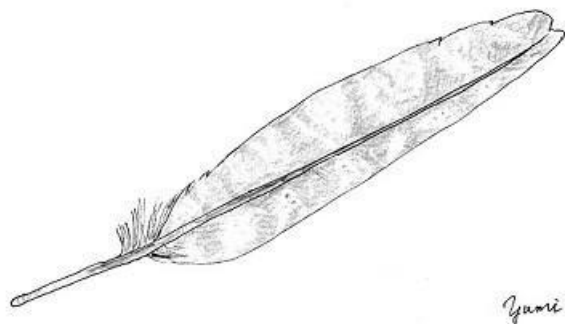
季節区分	季節区分の説明
留鳥	1 年中生息して繁殖している種
冬鳥	秋に渡来、越冬して春に渡去する種
夏鳥	春に渡来、繁殖して秋に渡去する種
旅鳥	渡りの途中に通過する種
迷鳥	本来の渡りのコースを外れて舞込む種
参考種	種の同定に疑問が残る種

9. 鳥信の解説

カワセミ会では、八王子市内、日野市内の「鳥等の情報（次の（１）～（８）の内容）」を会員から収集・記録している。集った情報は、会報「かわせみ」の鳥信欄に載せるとともに、過去のデータと合わせて、浅川流域の野鳥データベース（エクセルファイル）に蓄積して「DVD 八王子・日野の野鳥の記録」に収録している。2015年までの記録件数は2万件を超えている。

なお、記録性をさらに重視したフォト鳥信を2010年から開始した。これまでの鳥信の情報にデジカメで撮影した写真をプラスした鳥信であり、証拠写真が添付されるので、鳥信の信頼性を一層高めることができた。ただし、野鳥の繁殖に悪影響を与えるような写真は掲載しないという従来からのカワセミ会の基本方針を踏襲している。

- (1) 渡り鳥の初認、終認、通過等の記録
- (2) 野鳥の繁殖に関する記録
- (3) 希少種（定義はない）の記録
- (4) 猛禽類、シギ・チドリ類、托卵鳥の記録
- (5) 野鳥のねぐらの記録
- (6) 野鳥の特徴的な行動（定義はない）の記録
- (7) 人との関わりに関する記録（外来種、密猟の状況、飼育されている野鳥、野鳥の死体、交通事故、ガラス衝突事故、農薬事故、防鳥網事故等）
- (8) 鳥以外の動物の記録（キツネ、タヌキ、イノシシ、ムササビ、リス等の哺乳類、カジカガエル、トウキョウサンショウウオ等の両生類、ゲンジボタル等の昆虫類など、鳥以外の環境指標的な動物等）



目次

はじめに

発刊によせて

凡例

カラー版（野鳥の写真）

第1章 八王子・日野カワセミ会の調査研究活動・・・・・・・・・・ 15

第2章 定期カウントで分かる野鳥の増減

- I. 定期カウントで観察された野鳥の種類数と季節区分、出現頻度、総羽数・・・17
- II. 種類数と総羽数の増減動向・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19
- III. 主な野鳥の年次変動・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19

第3章 コース別の定期カウント

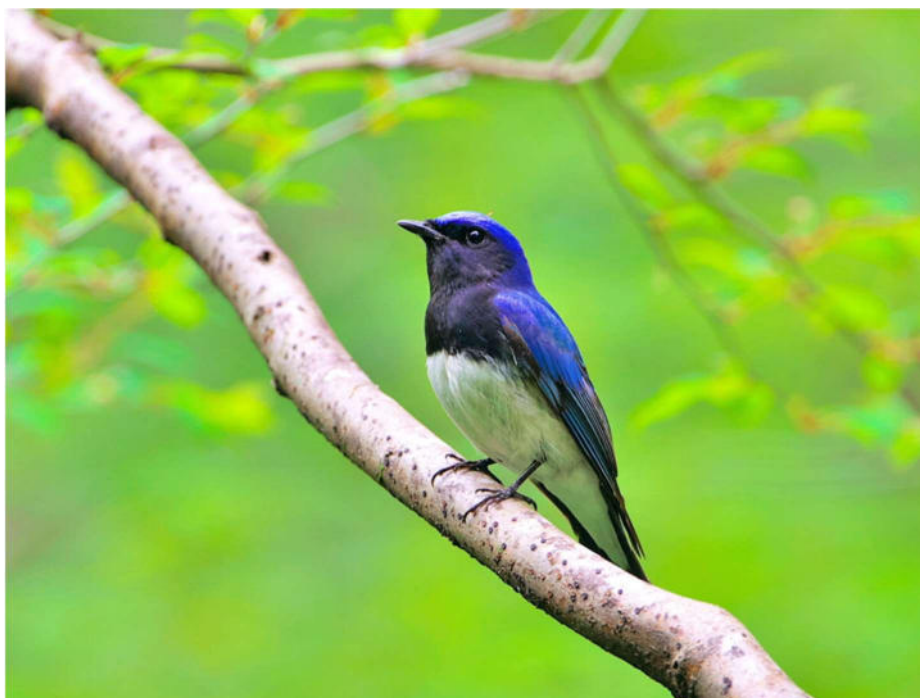
- I. 浅川上流部・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27
 - 1. 北浅川（松竹公園西～陵北大橋）・・・・・・・・・・ 31
 - 2. 北浅川（陵北大橋～松枝橋）・・・・・・・・・・ 33
- II. 浅川中流部・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35
 - 3. 北浅川（松枝橋～鶴巻橋）・・・・・・・・・・ 38
 - 4. 浅川（鶴巻橋～大和田橋）・・・・・・・・・・ 41
 - 5. 浅川（大和田橋～長沼橋）・・・・・・・・・・ 44
- III. 浅川下流部・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 47
 - 6. 浅川（長沼橋～一番橋）・・・・・・・・・・ 51
 - 7. 浅川（一番橋～多摩川合流）・・・・・・・・・・ 54
- IV. 浅川支流
 - 8. 川口川（川口橋～明治橋）・・・・・・・・・・ 57
 - 9. 湯殿川（白旗橋～時田大橋）・・・・・・・・・・ 60
- V. 多摩川・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 63
 - 10. 多摩川（滝山城跡下）・・・・・・・・・・ 67
 - 11. 多摩川（谷地川合流付近）・・・・・・・・・・ 70
 - 12. 多摩川（浅川合流付近）・・・・・・・・・・ 73
- VI. 都市公園・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 75
 - 13. 小宮公園・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 78
 - 14. 片倉城跡公園・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 81
 - 15. 長沼公園・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 84

VII. 高尾山	87
16. 高尾山 (小仏川)	90
17. 高尾山 (蛇滝コース)	93
18. 高尾山 (琵琶滝コース)	96
19. 高尾山 (大垂水コース)	99
20. 高尾山 (日影沢コース)	102
第4章 冬鳥一斉カウント	105
第5章 緑地保全地域の野鳥調査	110
第6章 野鳥の種類別調査	
I. オオルリ他夏鳥調査	123
II. サシバ等秋のワシタカ他の渡り調査	126
III. カルガモ親子の調査	134
IV. ツバメの巣の調査	137
V. イワツバメ営巣の調査	145
VI. ヒメアマツバメの調査	150
VII. ヒバリの調査	153
VIII. イソヒヨドリの繁殖調査	155
IX. ガビチョウ他の外来鳥の分布拡大調査	162
第7章 その他の調査	
I. 猛禽類の繁殖調査	165
II. 野鳥の集団ねぐら調査	166
III. 浅川野鳥サンクチュアリ地域の調査	172
IV. 我が家の庭に来た野鳥の調査	176
V. 片倉城跡公園巣箱設置調査	181
VI. 自宅軒下の巣箱にシジュウカラ、ヤマガラが17年連続営巣中の記録	185
第8章 長期間継続調査結果から分かる野鳥の動向と環境変化との関連の考察	187

(コラム)

河畔林	30
ハシボソガラスのクルミ割り	40
浅川にチフチャフ飛来 2007年	53
思いがけない出会い アオシギ	59
1960年代は田んぼにヒクイナがいた	62
子ども達はカラスが大好き?!	66
カワウの集団採餌とそこに集まるサギ	69
若山牧水が日野市のウズラを詠む	77
キジバトのマチバト化	80
奥多摩のハイタカが八王子城主 北条氏照に献上された	83
野猿峠と鳥屋場	92
「鳥類目録」について	95
共存したムササビとブッポウソウ	98
コサメビタキの繁殖	101
野鳥のさえずりを聞きなしで覚える	109
石橋入緑地の野鳥達	122
城山湖のタカ仲間たち	133
表紙 ブッポウソウ	191
八王子・日野カワセミ会とは	192
本書の制作に協力して頂いた方々	197
編集委員と編集後記	198
あとがき	201

●八王子市、日野市の鳥



オオルリ：小津町（八王子市） 2012.4.29



カワセミ：多摩川・浅川合流部（日野市） 2007.10.6

<八王子市の鳥 オオルリ>

オオルリは、夏鳥として東南アジアから日本に渡来する。その美しい姿やさえざりから、1991年に市制75周年を記念して八王子市の「市の鳥」に制定された。「市の鳥」制定は、八王子・日野カワセミ会による八王子市への要望により実現したもので、最終的には市民による投票でオオルリに決まった経緯がある。

<日野市の鳥 カワセミ>

カワセミは、一年を通して浅川などの水辺に生息する。緑と清流のまちを目指す日野市のシンボルとして、1983年に同市の「市の鳥」に制定された。

●主な留鳥



キジ：北浅川 2014.4.13



カルガモ：浅川・山田川合流 2009.5.16



ダイサギ：北浅川 2009.1.1



トビ：浅川長沼橋上流 2010.10.23



コゲラ：小宮公園 2008.2.27



メジロ：長池公園 2009.1.18



ムクドリ：多摩川・浅川合流部 2008.11.22



スズメ：浅川長沼橋上流 2008.12.20

●主な夏鳥



ツバメ：大和田町 2008.6.28



キビタキ：小宮公園 2007.5.19



コチドリ：浅川大和田橋 2008.5.17



オオヨシキリ：浅川暁橋上流 2008.5.15

●主な冬鳥



コガモ：通称さいかち池 2006.12.17



ジョウビタキ：多摩川・浅川合流部 2007.12.31



ツグミ：通称さいかち池 2012.2.11



ベニマシコ：多摩川・昭和用水堰付近 2015.1.2

●主な旅鳥



アマサギ：高月水田 2011.5.26



サシバ(鷹柱)：遠矢堀公園上空 2013.10.10



キアシシギ：浅川大和田橋下流 2008.5.17



ノビタキ：秋川・東秋川橋下流 2004.10.24

●近年少なくなった、又は見られなくなった主な鳥



オナガガモ：湯殿川 2003.12.7



ハマシギ：浅川平山橋 2001.3.11



ユリカモメ：浅川暁橋 2008.11.22



ヒバリ：大谷町 2007.5.31

●近年多くなった、又は見られるようになった主な鳥



イソヒヨドリ：高尾駅南口付近 2014.4.7



ガビチョウ：長池公園 2009.12.29



アオサギ：多摩川多摩大橋下流 2008.6.14



ヒメアマツバメ：浅川一番橋下流 2009.1.15

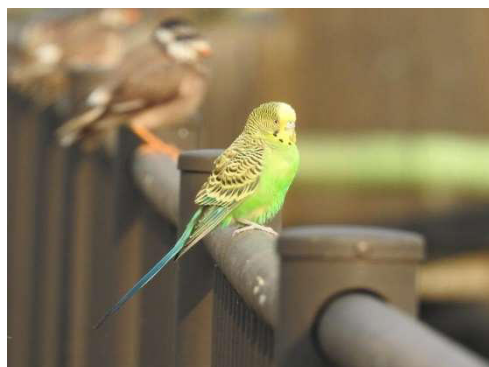
●外来種



カワラバト（ドバト）：大和田橋 2009.4.19



コジュケイ：小宮公園 2004.7.26



セキセイインコ：城山川 2016.2.28



ソウシチョウ：小仏川 2009.1.7

●稀にしか観察されない鳥



チフチャフ：東豊田1丁目 2007.2.1



マガン：多摩川・浅川合流部 2010.11.6



カムカイヅブリ：多摩川日野用水堰 2008.12.4



アカガシラサギ：西寺方町 1996.3.8



ヤツガシラ：多摩川 2008.4.3



ハイチュウヒ：谷地川・多摩川合流 1997.1.14



アカエリヒレアシシギ：浅川大和田橋 1993.5.15



オオマシコ：上川町 2013.2.1

第1章 八王子・日野カワセミ会の調査研究活動

1. 調査研究活動の意義と目的

八王子・日野カワセミ会は、八王子市と日野市に生息する野鳥を観察する市民グループである。野鳥の観察を通じて自然に接し楽しむこと及びそのために野鳥が安心して住める環境を作ることに協力することが会の目的である。

この目的を達成するため、「浅川流域とその周辺の野鳥の種類、数、行動、繁殖などを継続的に観察、記録し、分析しておくことは、将来の浅川流域とその周辺の自然環境を考えるうえで、貴重な科学的データになるはずだ」との基本認識のもとに取組んでいる。

当会の会員は野鳥の専門家として野鳥の学問的な研究を主眼に取り組んでいるわけではない。したがって観察（調査）結果に疑問の残る部分も含まれることは承知のうえで活動を行っている。「先ずカウントして、記録し、公表してデータを次の世代に残そう」が、当会のモットーである。このような活動は少数の専門家や研究者ではなし得ないことで、多くの市民（アマチュア）の活動の集積によってなし得ると確信している。

このような活動を成功させるためには、「長く続けること」と「多くの会員が参加すること」が必須である。では、どうすれば長く続けられるか？多くの会員がこの活動に参加する意味は何か。週1回とか、月2回以上の頻度の調査では参加者の負担が大きくなる。しかし、月1回程度の調査として、無理の無い範囲で行えば長期間継続することが可能である。野鳥の観察力、識別力が高い人がいないと調査にならないが、初心者でも、ベテランの会員とともに調査に参加することによって次第に力がついてくる。このことにより個人単位でなくチームで調査を行うことができるようになり野鳥を観察する眼と耳が多くなるので調査の精度が格段に上がる。

当会の調査活動は地道で、長期的で、総合的であることが最大の特徴である。その結果、実証科学的な調査実績が着実に積み重ねられているとの評価を多くの関係者、関係団体から受けている。

2. 調査研究活動の内容

八王子市、日野市域を調査範囲として以下に掲げる野鳥定期カウント、各種調査を継続して行っている。また、個別の観察結果を「鳥信」として取りまとめている。

- ①野鳥定期カウント（20コースで毎月）
- ②冬鳥一斉調査（19コースで毎年1月）
- ③オオルリ他夏鳥生息調査（19コースで毎年4月～7月）
- ④カルガモ繁殖調査（20コースで毎年4月～7月）
- ⑤イワツバメ繁殖調査（30ヶ所以上の営巣地で毎年4～8月）
- ⑥サシバ等秋の渡り調査（3地点で毎年9～10月）
- ⑦ツバメの巣調査（年により調査地が異なるがほぼ毎年4月～8月）
- ⑧ツバメの集団ねぐら調査（多摩川で毎年6月～8月）
- ⑨巣箱利用状況調査（片倉城跡公園で毎年12月）
- ⑩我が家の庭にきた野鳥調査（会員の自宅で毎年1～12月）
- ⑪ヒメアマツバメの生息調査（年により調査地が異なるがほぼ毎年1月～12月）
- ⑫鳥信（個別の野鳥観察結果の記録、毎年1月～12月）
- ⑬その他（イソヒヨドリ繁殖調査、ヒバリプロジェクト、コガモプロジェクト、スズメねぐらプロジェクト等）

3. 調査研究活動の結果のまとめと公表

調査結果を広報し、また一般社会での活用の促進を目的に以下の①～⑦のような方法で公表している。

特に①は調査結果の紛失を防ぐため、またデータの改ざんを防ぐために会員が共有することを目的に記録集DVD版を作成し、配布している。このDVDにはカワセミ会発足以降の全調査記録（生データ）が収録されている。

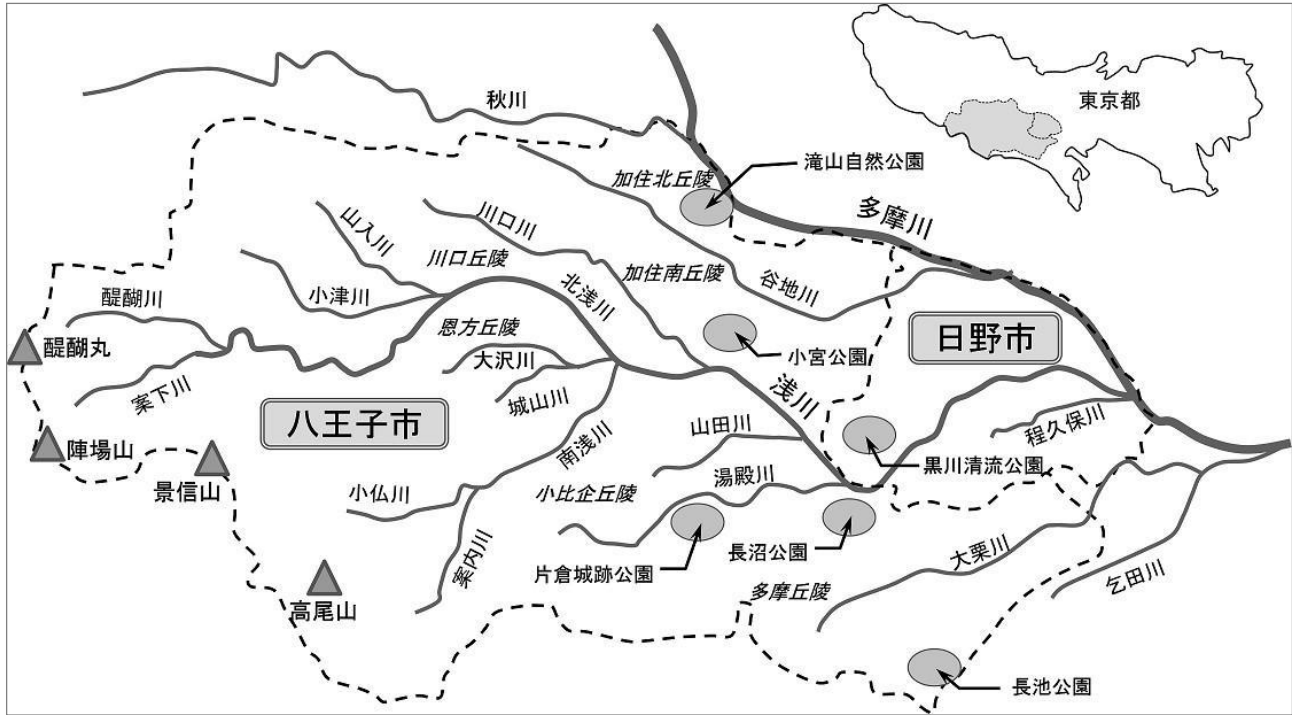
- ①八王子・日野の野鳥の記録（DVD版、八王子・日野カワセミ会発足以降の全調査記録を収録）
- ②会報かわせみ（年2回発行、2015年で通巻54号、八王子、日野市内の図書館はもとより近隣の市区立図書館、大学図書館、小学校、自然保

護団体、ネイチャーセンター、行政機関、マスコミなどに配布)

- ③八王子・日野カワセミ会ホームページ
- ④数え上げた浅川流域の野鳥(10年毎に冊子として発行)

- ⑤八王子・日野の鳥類目録(2016年発行)
- ⑥企画展(発足後5年毎に開催、活動結果を発表)
- ⑦その他(新聞、各種団体等の会報・機関誌で公表)

八王子・日野カワセミ会の主な調査範囲



第2章 野鳥定期カウントで分かる野鳥の増減

確認した野鳥リスト 31年間・174種 (1/2)

I. 定期カウントで観察された野鳥の種類数と季節区分、出現頻度、総羽数

(1) 種類数 (174種をカウント)

1985年から2015年の31年間に定期カウントで観察された野鳥の種類数は174種であった(次表)。これに外来種等19種を加えると193種となる。外来種等19種の内訳(出現頻度順)は、カワラバト(ドバト)、コジュケイ、アヒル、ガビチョウ、雑種ガモ、ソウシチョウ、クロトキ、セキセイインコ、カオグロガビチョウ、ベニスズメ、ガチョウ、ウスユキバト、バリケン、ハッカチョウ、コブハクチョウ、ワカケホンセイインコ、キンパラ、ブンチョウ、カナリヤである。

カワセミ会では、定期カウントの他に鳥信をデータベースとして収録している。鳥信とは、八王子・日野市内で会員が観察した野鳥(例えば渡り鳥の初認、希少種、繁殖、変わった行動等の観察)を種別に一定のフォーム(エクセルファイルを利用)に記録したデータベースである。2015年までに20,998件が収録されている。鳥信に収録されている種類数は野鳥216種、外来種等10種である。

定期カウントで観察された174種は、鳥信に収録された216種に含まれている。216種から174種を引いた差の42種は定期カウント以外で観察された種である。

本書と同時に刊行された「八王子市・日野市鳥類目録」には、八王子・日野の両市の自然分布種は244種、外来種25種、参考種8種と記載されている。174種と244種の差はカワセミ会の発足以前に観察されていたが、その後は確認されていない種、カワセミ会発足後でもカワセミ会の会員以外が観察した種で、文献等に記載されている種を含むことによる。244種に対する174種の割合は71%である。

季節区分別	出現頻度別(年)	年平均出現羽数(羽)			
留鳥	ヤマドリ	31	キジ	2419	スズメ
留鳥	キジ	31	ヒドリガモ	1267	カワラヒワ
留鳥	カルガモ	31	マガモ	1098	ムクドリ
留鳥	カイツブリ	31	カルガモ	1048	ヒヨドリ
留鳥	キジバト	31	コガモ	903	コガモ
留鳥	アオバト	31	キジバト	613	カワウ
留鳥	カワウ	31	ゴイサギ	600	カルガモ
留鳥	ゴイサギ	31	ダイサギ	550	ツバメ
留鳥	アオサギ	31	コサギ	410	アトリ
留鳥	ダイサギ	31	イカルチドリ	371	ユリカモメ
留鳥	コサギ	31	キアシシギ	359	シジュウカラ
留鳥	バン	31	イソシギ	340	ホオジロ
留鳥	ヒメアマツバメ	31	トビ	327	ツグミ
留鳥	イカルチドリ	31	カワセミ	315	キジバト
留鳥	イソシギ	31	モズ	307	カラダカ
留鳥	トビ	31	オナガ	305	ハシボソガラス
留鳥	オオタカ	31	ハシボソガラス	297	オナガガモ
留鳥	ノスリ	31	ハシブトガラス	267	コサギ
留鳥	クマタカ	31	シジュウカラ	263	イワツバメ
留鳥	カワセミ	31	ヒバリ	253	ハシブトガラス
留鳥	ヤマセミ	31	ツバメ	229	メジロ
留鳥	コゲラ	31	イワツバメ	225	ヒドリガモ
留鳥	アカゲラ	31	ヒヨドリ	211	エナガ
留鳥	アオゲラ	31	ウグイス	191	セグロセキレイ
留鳥	チョウゲンボウ	31	メジロ	182	ハクセキレイ
留鳥	モズ	31	オオヨシキリ	179	アオジ
留鳥	カケス	31	セッカ	168	オナガ
留鳥	オナガ	31	ムクドリ	113	ウグイス
留鳥	ハシボソガラス	31	ツグミ	109	ダイサギ
留鳥	ハシブトガラス	31	ジョウビタキ	106	イカル
留鳥	クイタダキ	31	スズメ	101	ハマシギ
留鳥	コガラ	31	キセキレイ	94	モズ
留鳥	ヤマガラ	31	ハクセキレイ	93	タヒバリ
留鳥	ヒガラ	31	セグロセキレイ	87	マヒワ
留鳥	シジュウカラ	31	タヒバリ	85	シメ
留鳥	ヒバリ	31	カワラヒワ	81	ヤマガラ
留鳥	ヒヨドリ	31	イカル	81	キセキレイ
留鳥	ウグイス	31	ホオジロ	78	コゲラ
留鳥	エナガ	31	カラダカ	75	イカルチドリ
留鳥	メジロ	31	アオジ	72	ジョウビタキ
留鳥	セッカ	30	カイツブリ	60	ヒメアマツバメ
留鳥	キバシリ	30	コチドリ	59	アオサギ
留鳥	ミソサザイ	30	タシギ	45	イソシギ
留鳥	ムクドリ	30	クサシギ	45	カワセミ
留鳥	カワガラス	30	コゲラ	45	キジ
留鳥	イソヒヨドリ	30	シメ	39	カケス
留鳥	スズメ	29	オナガガモ	38	トビ
留鳥	キセキレイ	29	アオサギ	37	ヒガラ
留鳥	ハクセキレイ	29	バン	36	キアシシギ
留鳥	セグロセキレイ	29	アオゲラ	35	マガモ
留鳥	カワラヒワ	29	チョウゲンボウ	33	セッカ
留鳥	イカル	29	カケス	32	ゴイサギ
留鳥	ホオジロ	29	エナガ	31	オオヨシキリ
冬鳥	マガン	29	シロハラ	31	ヒバリ
冬鳥	オオハクチョウ	28	セグロカモメ	29	ハシブトガモ
冬鳥	オンドリ	28	ノスリ	24	キビタキ
冬鳥	オカヨシガモ	28	ビタキ	24	サンバ
冬鳥	ヨシガモ	27	カワウ	24	カイツブリ
冬鳥	ヒドリガモ	27	ササゴイ	23	コチドリ
冬鳥	アメリカヒドリ	27	オオタカ	19	ルリビタキ
冬鳥	マガモ	27	ヤマガラ	17	アオゲラ
冬鳥	ハシブトガモ	27	ヒガラ	17	コシアカツバメ
冬鳥	オナガガモ	27	アカハラ	16	ヤブサメ
冬鳥	トモエガモ	27	ルリビタキ	16	セグロカモメ
冬鳥	コガモ	26	ホトギス	15	オカヨシガモ
冬鳥	ホシハジロ	26	ヒメアマツバメ	15	アマツバメ
冬鳥	キンクロハジロ	26	ユリカモメ	13	シロハラ
冬鳥	スズガモ	26	アカゲラ	13	ウソ
冬鳥	ホオジロガモ	26	コシアカツバメ	13	オオルリ
冬鳥	ミコアイサ	26	オオジュリン	12	コガラ
冬鳥	カワアイサ	25	カッコウ	11	ホトギス
冬鳥	カンムリカイツブリ	25	センダイムシクイ	11	オオタカ
冬鳥	ハジロカイツブリ	25	キビタキ	11	チョウゲンボウ
冬鳥	クイナ	24	ハシブトガモ	10	オオジュリン
冬鳥	オオバン	24	ハイタカ	10	クロツグミ
冬鳥	タゲリ	24	ヤブサメ	10	ササゴイ
冬鳥	シロチドリ	24	オオルリ	10	ノスリ
冬鳥	ヤマシギ	24	ウソ	9	ミソサザイ
冬鳥	タシギ	23	ミコアイサ	9	ショウドウツバメ
冬鳥	クサシギ	23	クイナ	8	ベニマシコ
冬鳥	オジロトウネン	23	アマツバメ	8	タシギ
冬鳥	ハマシギ	23	ピンズイ	8	ミコアイサ
冬鳥	ユリカモメ	22	クイタダキ	7	ピンズイ
冬鳥	ウミネコ	22	コガラ	7	ムナグロ
冬鳥	カモメ	22	ミソサザイ	7	センダイムシクイ
冬鳥	セグロカモメ	21	ツツドリ	7	バン
冬鳥	オオセグロカモメ	21	ハヤブサ	6	アカゲラ

確認した野鳥リスト 31年間・174種 (2/2)

季節区分	出現頻度別(年)	年平均出現羽数(羽)
冬鳥	ミサゴ	21
冬鳥	ハイイロチュウヒ	21
冬鳥	ハイトカ	20
冬鳥	トラフズク	20
冬鳥	アリスイ	19
冬鳥	オオアカゲラ	19
冬鳥	ハヤブサ	19
冬鳥	キレンジャク	19
冬鳥	ヒレンジャク	19
冬鳥	ゴジュウカラ	18
冬鳥	トラツグミ	18
冬鳥	シロハラ	18
冬鳥	アカハラ	18
冬鳥	ツグミ	18
冬鳥	ルリビタキ	17
冬鳥	ジョウビタキ	15
冬鳥	カヤクグリ	15
冬鳥	ビンズイ	15
冬鳥	タヒバリ	14
冬鳥	アトリ	14
冬鳥	マヒワ	14
冬鳥	ベニマシコ	14
冬鳥	ウソ	14
冬鳥	シメ	13
冬鳥	ホオアカ	13
冬鳥	カシラダカ	12
冬鳥	ミヤマホオジロ	12
冬鳥	アオジ	12
冬鳥	クロジ	11
冬鳥	オオジュリン	11
夏鳥	ヨシゴイ	11
夏鳥	ササゴイ	11
夏鳥	ヒクイナ	10
夏鳥	ホトトギス	9
夏鳥	ツツドリ	7
夏鳥	カクコウ	6
夏鳥	コチドリ	6
夏鳥	コアジサシ	6
夏鳥	ツミ	6
夏鳥	アオバズク	6
夏鳥	アカショウビン	5
夏鳥	サンショウクイ	5
夏鳥	サンコウチョウ	5
夏鳥	チゴモズ	5
夏鳥	ツバメ	5
夏鳥	コシアカツバメ	4
夏鳥	イワツバメ	4
夏鳥	ヤブサメ	4
夏鳥	センダイムシクイ	3
夏鳥	オオヨシキリ	3
夏鳥	クロツグミ	3
夏鳥	コサメビタキ	3
夏鳥	キビタキ	3
夏鳥	オオルリ	3
旅鳥	シマアジ	3
旅鳥	アマサギ	3
旅鳥	チュウサギ	3
旅鳥	ハリオアマツバメ	3
旅鳥	アマツバメ	2
旅鳥	ケリ	2
旅鳥	ムナグロ	2
旅鳥	セイタカシギ	2
旅鳥	オオジシギ	2
旅鳥	チュウシャクシギ	2
旅鳥	タカブシギ	2
旅鳥	キアシシギ	2
旅鳥	トウネン	2
旅鳥	アカエリヒレアシギ	2
旅鳥	ハチクマ	2
旅鳥	サシバ	2
旅鳥	ショウドウツバメ	2
旅鳥	メボソムシクイ	2
旅鳥	エゾムシクイ	1
旅鳥	ヨシキリ	1
旅鳥	コムドリ	1
旅鳥	マミジロ	1
旅鳥	マミチャジナイ	1
旅鳥	コマドリ	1
旅鳥	ノゴマ	1
旅鳥	コルリ	1
旅鳥	ノビタキ	1
旅鳥	エゾビタキ	1
旅鳥	サメビタキ	1
旅鳥	コジュリン	1
迷鳥	ウミアイサ	1
迷鳥	アカガシラサギ	1
迷鳥	コホオアカ	1
	トラツグミ	6
	クワジロ	6
	キクイタダキ	5
	アカハラ	5
	ヒレンジャク	4
	オオバン	4
	ツミ	3
	ハイトカ	3
	ツツドリ	3
	アオハト	3
	ノビタキ	3
	ゴジュウカラ	2
	コサメビタキ	2
	コムドリ	2
	クイナ	2
	カクコウ	2
	カヤクグリ	2
	ハヤブサ	2
	チュウサギ	1
	ヨシガモ	1
	ヨシガモ	1
	トラツグミ	1
	サンコウチョウ	1
	キンクロハジロ	1
	カワガラス	1
	エゾビタキ	1
	ミヤマホオジロ	1
	ミサゴ	1
	アマサギ	1
	カモメ	1
	ヤマドリ	1
	シロチドリ	1
	イソヒヨドリ	1
	ヤマセミ	1
	ホシハジロ	1
	キレンジャク	1
	アリスイ	1
	ハチクマ	1
	ホオアカ	0
	オシドリ	0
	タゲリ	0
	ウミネコ	0
	ハリオアマツバメ	0
	コルリ	0
	アメリカヒドリ	0
	ヨコシキリ	0
	ホオジロガモ	0
	アオバズク	0
	サンショウクイ	0
	オオアカゲラ	0
	マミチャジナイ	0
	チゴモズ	0
	コマドリ	0
	サメビタキ	0
	トウネン	0
	オジロトウネン	0
	キバシリ	0
	コジュリン	0
	マガン	0
	ウミアイサ	0
	カンムリカイツブリ	0
	ヨシゴイ	0
	ケリ	0
	タカブシギ	0
	コアジサシ	0
	クマタカ	0
	アカショウビン	0
	シマアジ	0
	トモエガモ	0
	カワアイサ	0
	ヒクイナ	0
	セイタカシギ	0
	オオジシギ	0
	オオセグロカモメ	0
	メボソムシクイ	0
	エゾムシクイ	0
	マミシロ	0
	コホオアカ	0
	オオハクチョウ	0
	スズガモ	0
	ハジロカイツブリ	0
	アカガシラサギ	0
	ヤマシギ	0
	チュウシャクシギ	0
	ハイイロチュウヒ	0
	トラフズク	0
	ノゴマ	0

(2) 季節区分

冬鳥が最も多く 37%、次いで留鳥、旅鳥、夏鳥の順である。冬鳥が多いのは、カモ類が以下のように 16 種が渡来することによる。オシドリ、オカヨシガモ、ヨシガモ、ヒドリガモ、アメリカヒドリ、マガモ、ハシビロガモ、オナガガモ、トモエガモ、コガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、スズガモ、ホオジロガモ、ミコアイサ、カワアイサ。

夏鳥の代表はツバメであり、八王子市の鳥オオルリも夏鳥である。

旅鳥が夏鳥より多いのは、シギチドリ類が以下のように 9 種含まれていることによる。ケリ、ムナグロ、セイタカシギ、オオジシギ、チュウシャクシギ、タカブシギ、キアシシギ、トウネン、アカエリヒレアシギ。

観察された野鳥の季節区分

季節区分	種数	割合(%)
留鳥	53	30
冬鳥	64	37
夏鳥	24	14
旅鳥	30	17
迷鳥	3	2
計	174	100

(3) 出現頻度

174 種は毎年観察される訳ではない。全調査期間の 31 年間のうち、90% (28 年~31 年) 以上の年数で観察された種は 57 種で全体の 33% である。代表種はスズメ、ツバメ、メジロ、カルガモ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ムクドリ、ハシブトガラス等の身近な鳥である。

逆に 10% (3 年~1 年) 以下しか観察されなかった種は 39 種で全体の 22% を占める。代表種はオオハクチョウ、ヤマシギ、アカショウビン等の希少種である。

(4) 出現羽数

出現羽数は各年の最大値をピックアップして 31 年間合計したものを 31 で除した年平均羽数であり、おおよその羽数である。

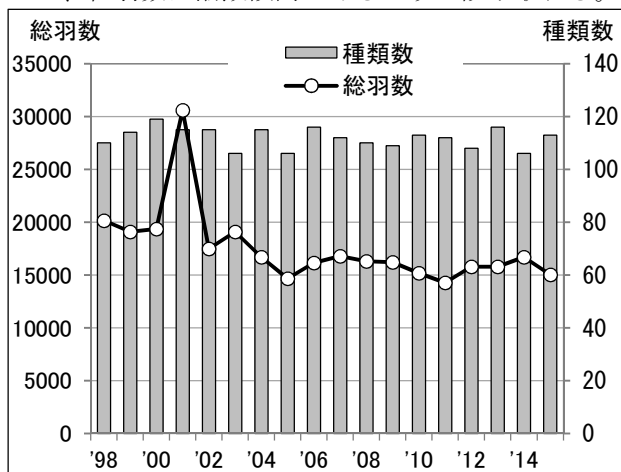
観察された羽数は種によって差が大きい。31 年間で平均すると 1 羽に満たない種 (「0」と表示されている種) は 51 種と 29% もある。

最も多かったのはスズメの 2,419 羽で 2,000 羽を超え、1,000 羽を超えたのはカワラヒワ、ムクドリ、ヒヨドリの 3 種である。

II. 種類数と総羽数の増減動向

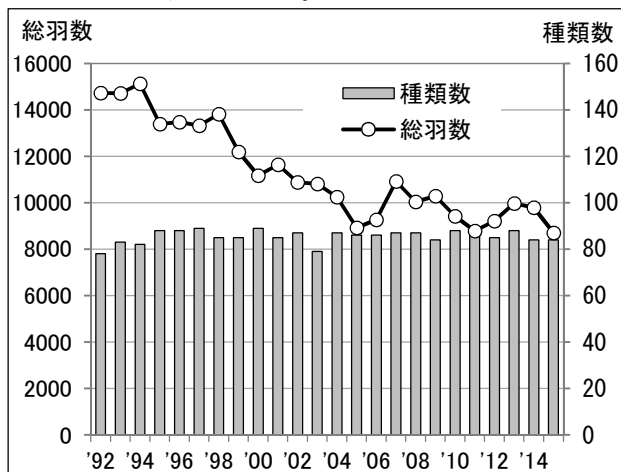
定期カウント 20 コースのカウント体制が整った 1998 年以降に観察された野鳥の年毎の種類数と総羽数の経年変化を以下のグラフに示す。ここにはコジュケイ、カワラバト（ドバト）、ガビチョウ等の外来種は含まれていない。2001 年が突出しているのは、高尾山（琵琶滝コース）でアトリが突出してカウントされたためで、この年の羽数計は 30,608 羽で、そのうちアトリが 12,000 羽を占めている。

毎年観察される種類数は 110 種程度で変化は少ないが、総羽数は漸減傾向にあるように読み取れる。

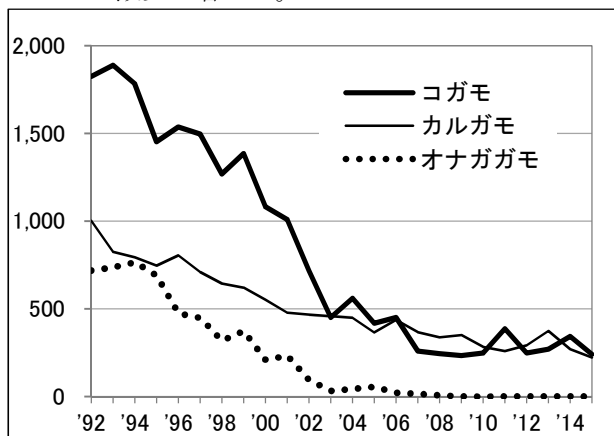


20 コースのうち浅川本支流 9 コースの体制が整った 1992 年以降の変化を以下に示す。

浅川本支流 9 コースの羽数計は明らかに減少傾向にあることが読み取れる。



浅川本支流 9 コースのうち、減少が顕著な種はカモ類であり、中でもカルガモ、オナガガモ、コガモの減少が著しい。



III. 主な野鳥の年次変動

定期カウントで出現羽数の多い野鳥は、減っているのか、増えているのかを種別にみるために年次別に整理した。ここでは主に河川を住处とする野鳥は定期カウントの河川コースが揃った 1992 年から、河川も山地・丘陵地も住处とする野鳥は定期カウント全 20 コースが揃った 1998 年からの年次変動を各年の最大値で整理した。

結果は下表のとおりで、減少傾向にある野鳥は 16 種もあるのに対し、増加傾向にある野鳥は 8 種だけであった。

主な野鳥（外来種を含む）の増減傾向

減少傾向にある野鳥	16 種	ヒドリガモ、カルガモ、オナガガモ、コガモ、イソシギ、ハマシギ、ユリカモメ、オナガ、ハシブトガラス、ヤマガラ、ヒバリ、メジロ、スズメ、タヒバリ、ホオジロ、カワラバト(ドバト)
増加傾向にある野鳥	8 種	アオサギ、ダイサギ、ヒメアマツバメ、カワセミ、モズ、ウグイス、ジョウビタキ、ガビチョウ
増減が少ないか又は増減の判断が難しい野鳥	27 種	キジ、キジバト、カワウ、コサギ、イカルチドリ、トビ、コゲラ、カケス、ハシボソガラス、ヒガラ、シジュウカラ、ツバメ、イワツバメ、ヒヨドリ、エナガ、ムクドリ、ツグミ、キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、カワラヒワ、マヒワ、シメ、イカル、カシラダカ、アオジ、コジュケイ

計 51 種

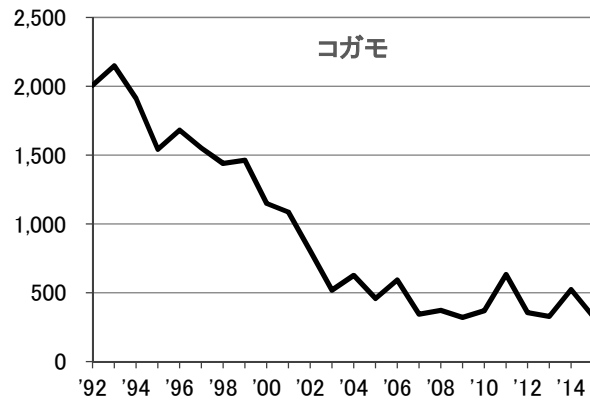
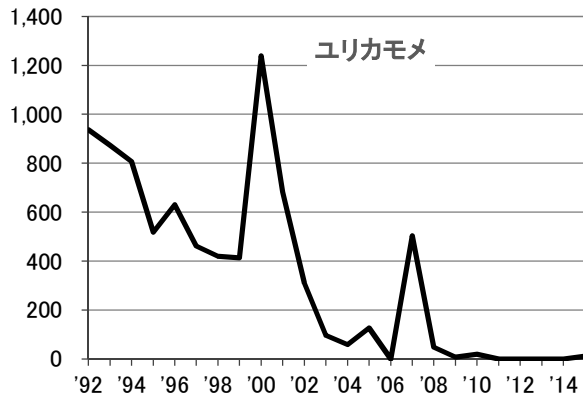
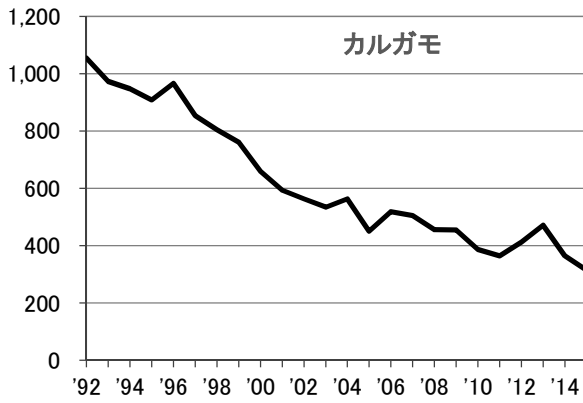
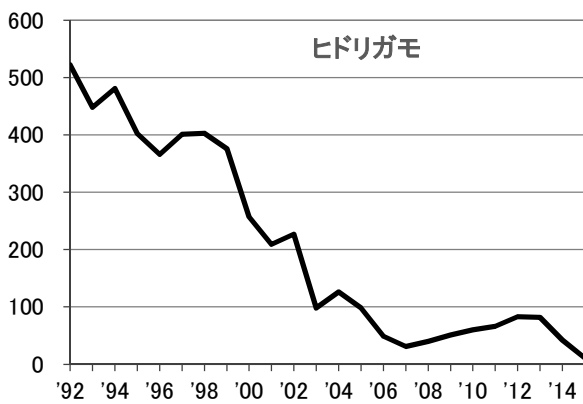
カモ類は全て減少している他、河川に依存するイソシギ、ハマシギ、ユリカモメ、タヒバリも減少している。河原の草地に依存するヒバリの減少も著しい。

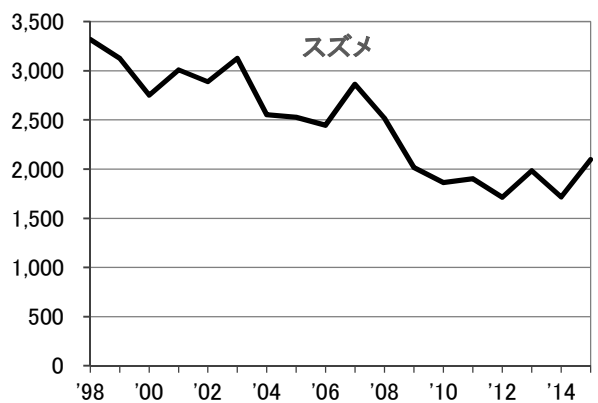
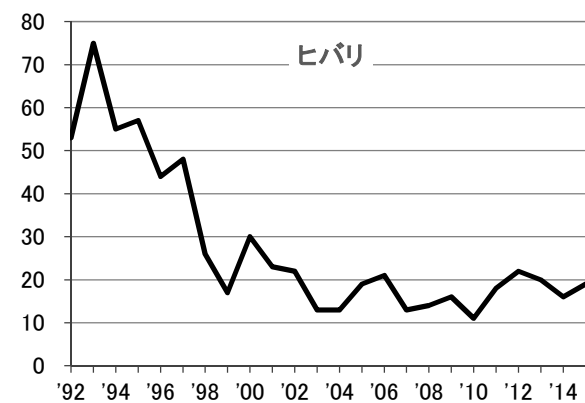
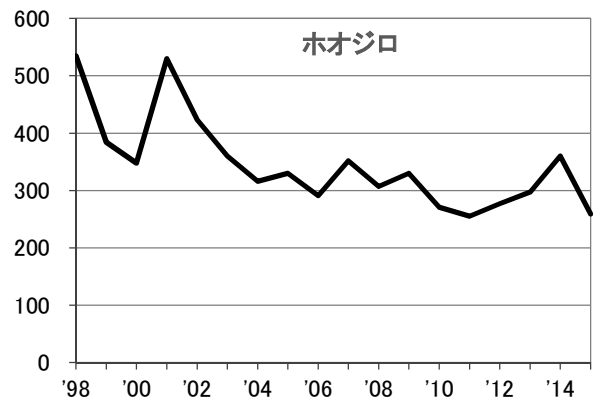
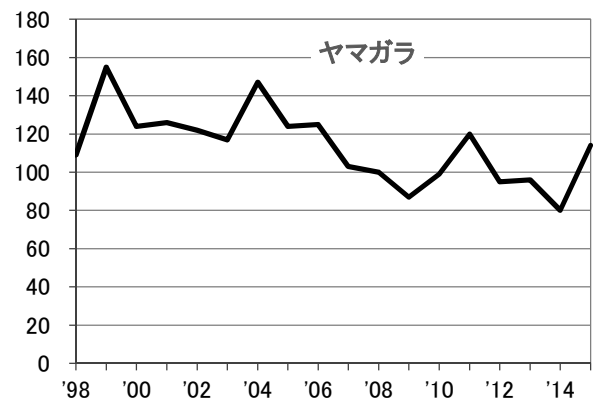
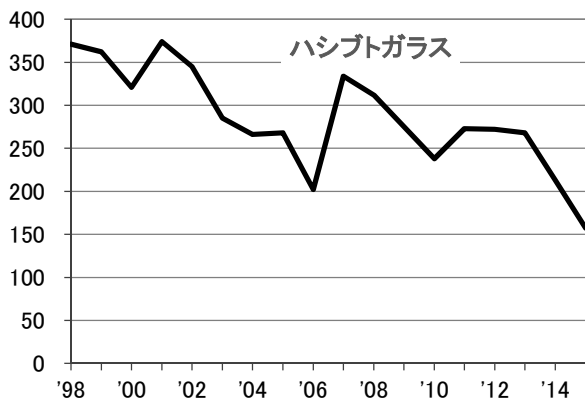
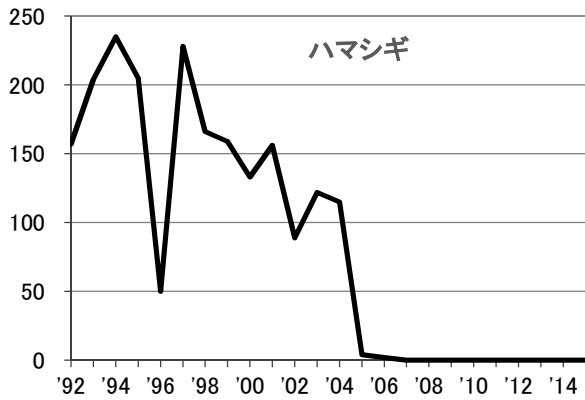
最近、スズメの減少傾向は全国的に知られているが、当地でも減少していることが明確である。草原的な環境を好むホオジロも減っている。森林的な環境を好む野鳥では、ヤマガラ、メジロが減っている。カラスの仲間のオナガ、ハシブトガラスも減っている。外来種のカワラバト（ドバト）も減少傾向にある。

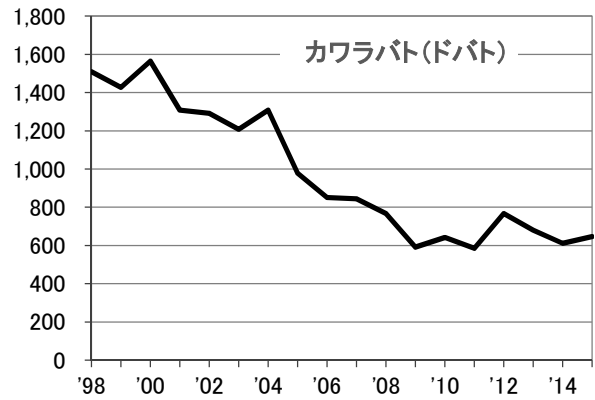
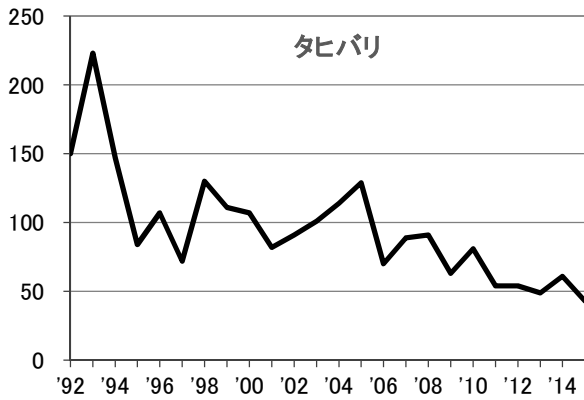
河川に依存する野鳥が減少傾向にある中で、アオサギ、ダイサギ、カワセミは増加傾向にある。モズ、ウグイス、ジョウビタキ、ヒメアマツバメは増加傾向にあるものの微増である。外来鳥のガビチョウの増加は著しいが2009年頃からは横ばい傾向にある。

以下は種別の増減を示すグラフである。

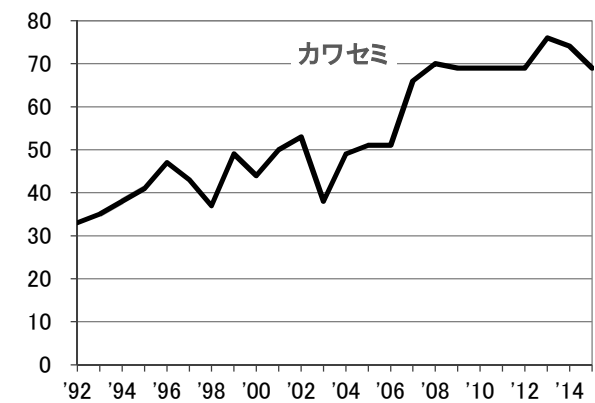
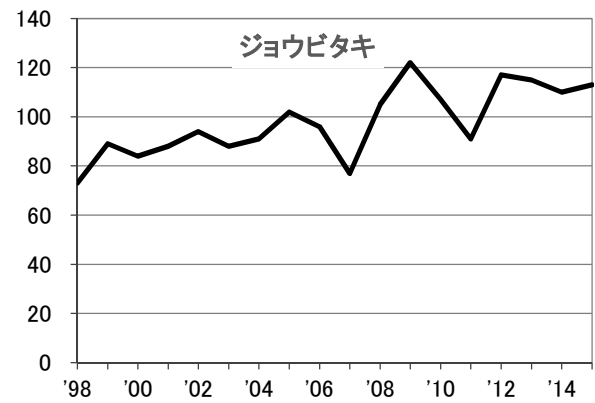
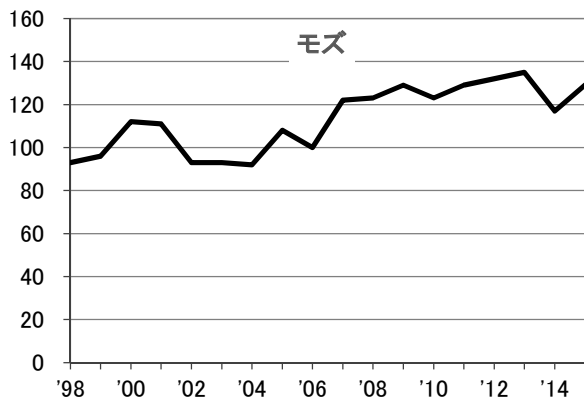
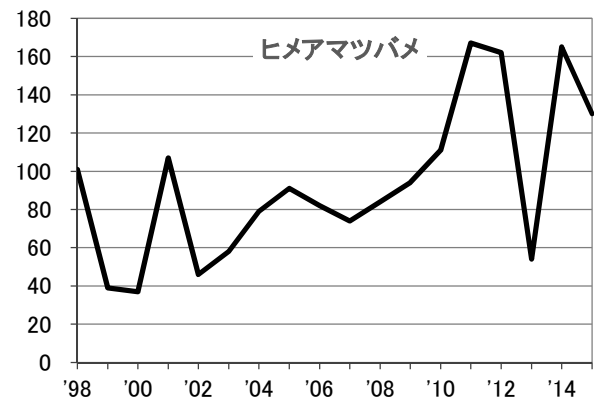
減少傾向にある野鳥

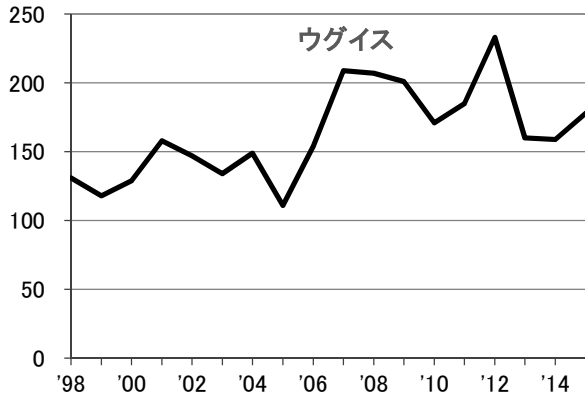




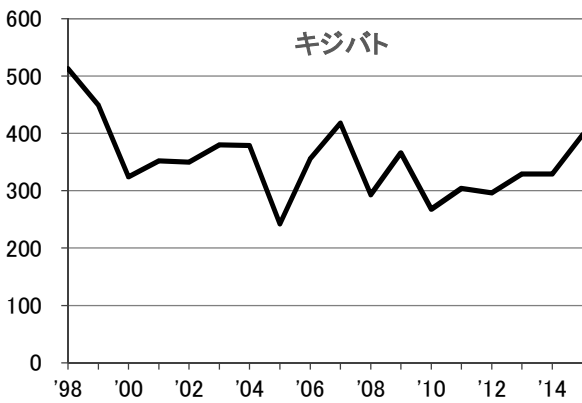
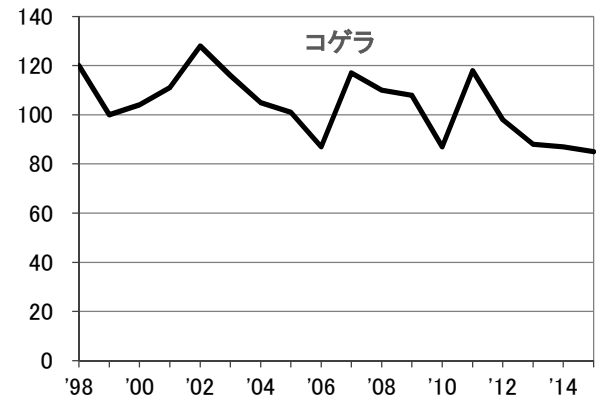
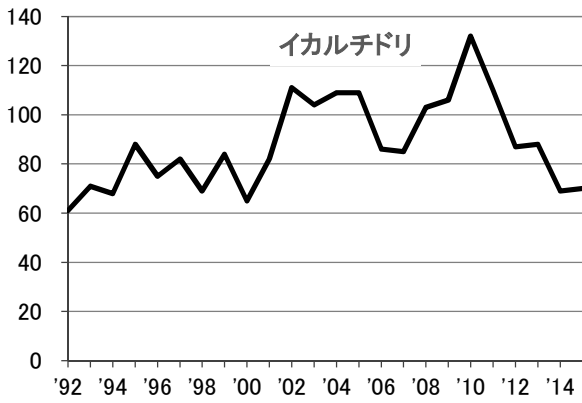
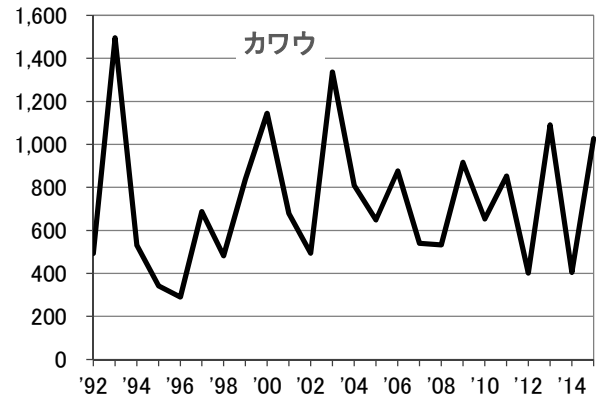
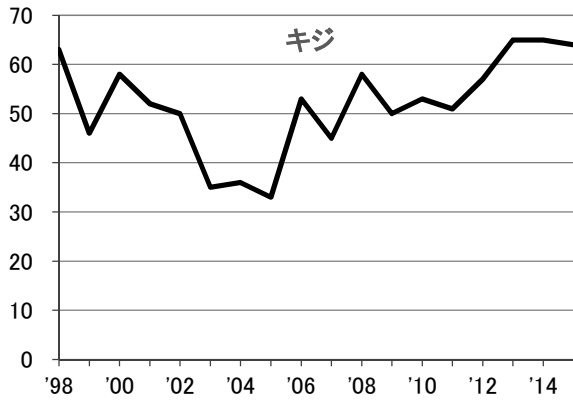


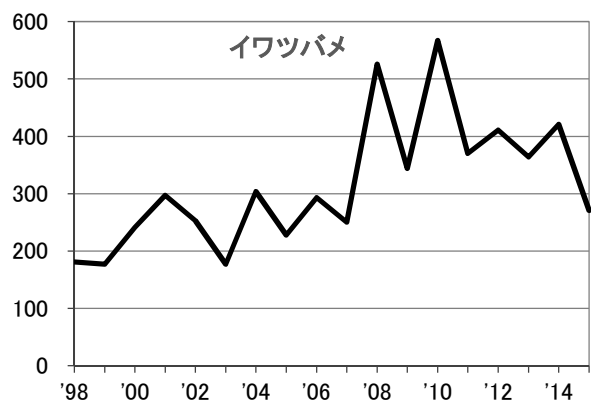
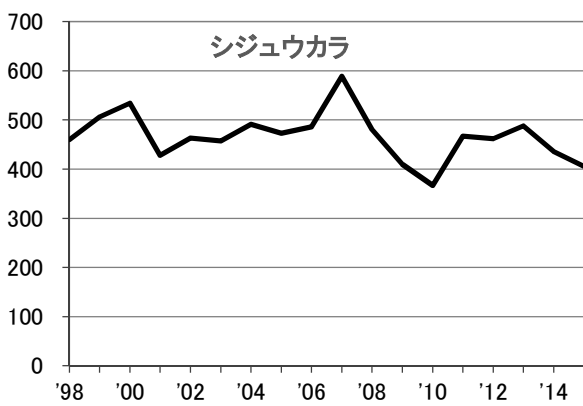
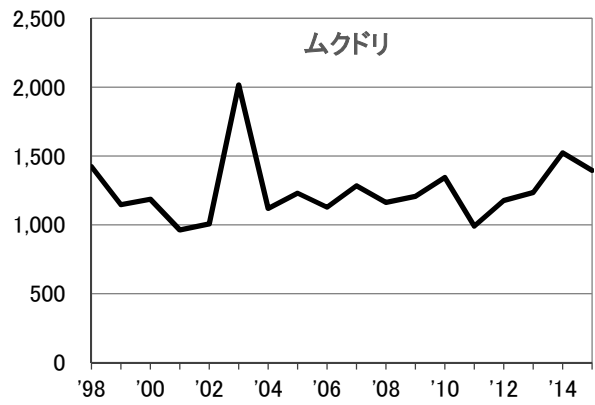
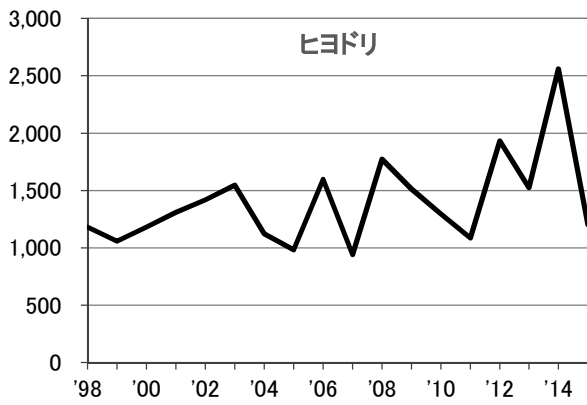
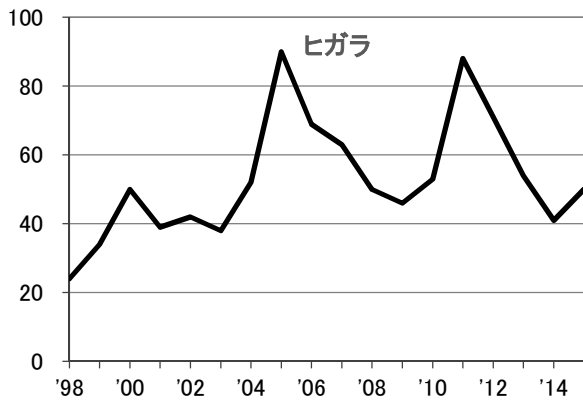
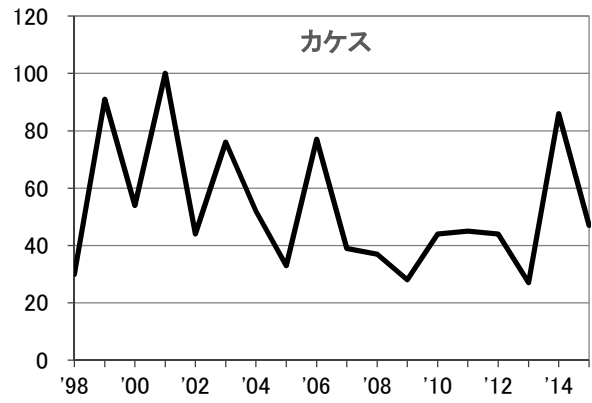
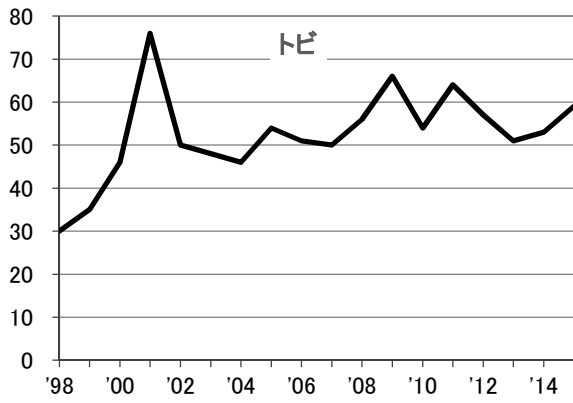
増加傾向にある野鳥

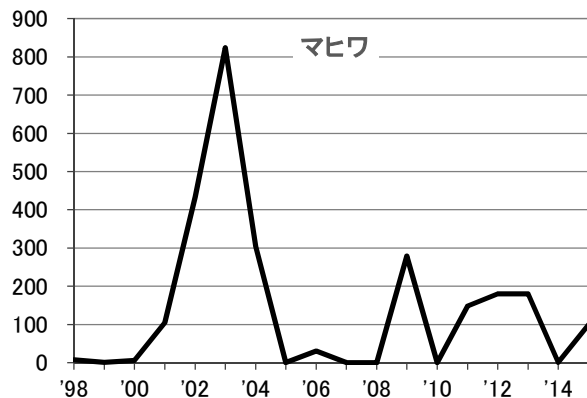
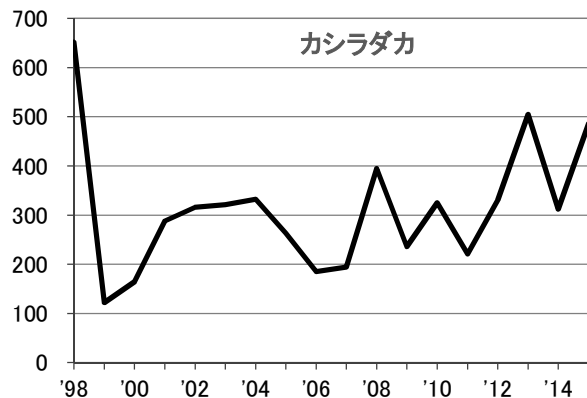
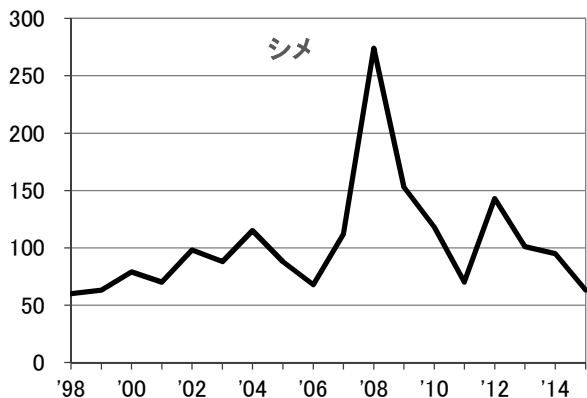
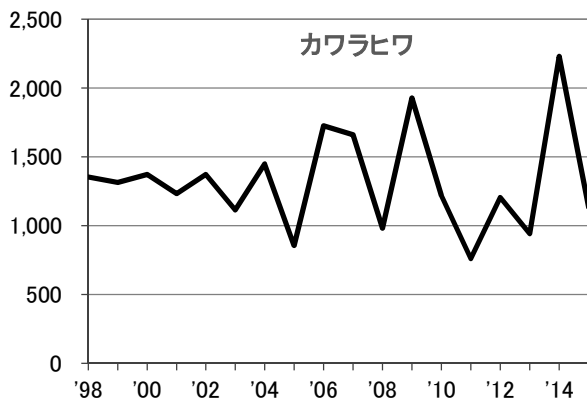
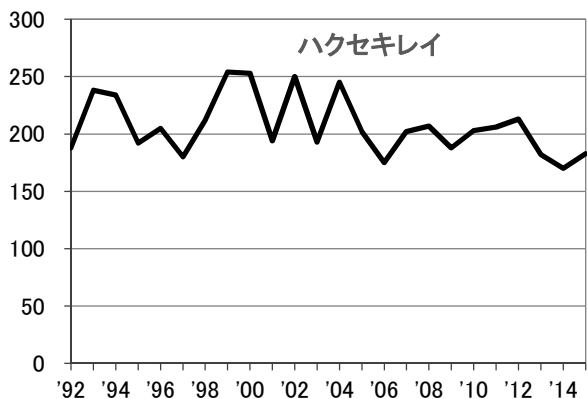
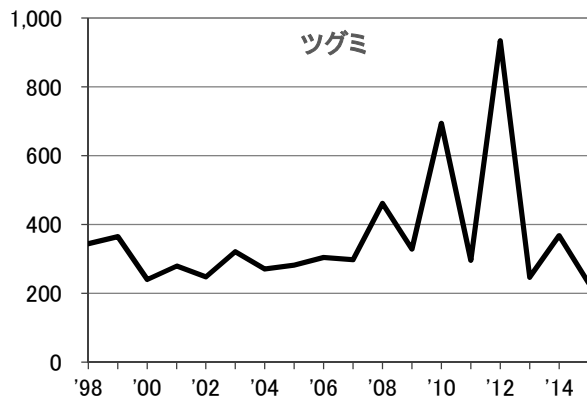
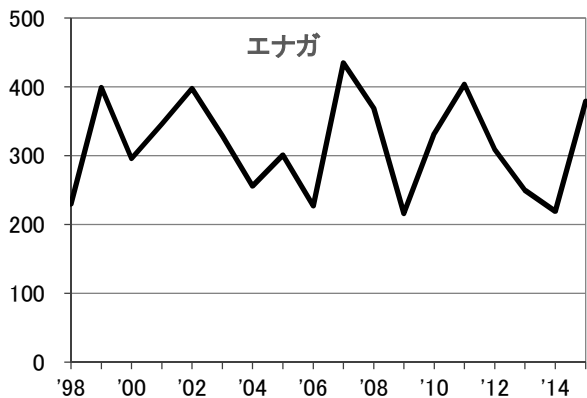


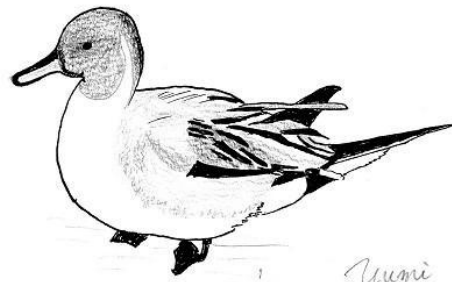
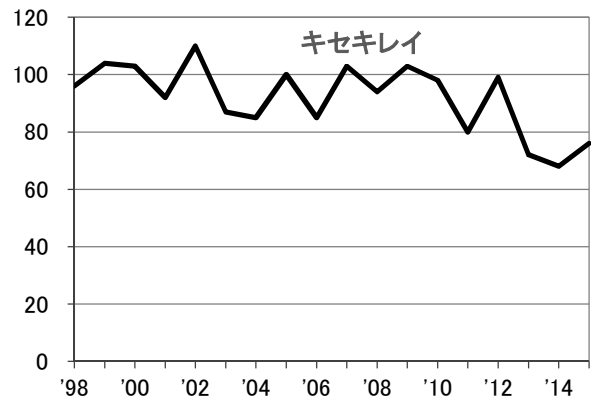
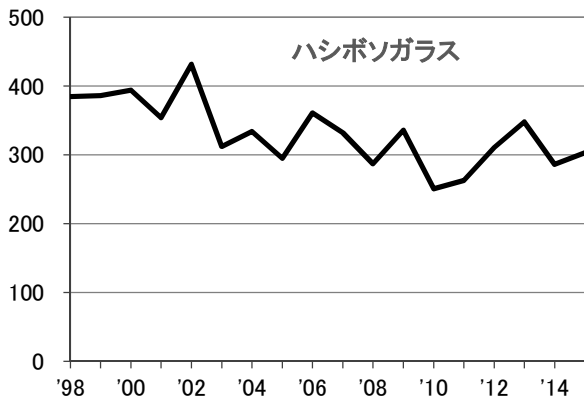
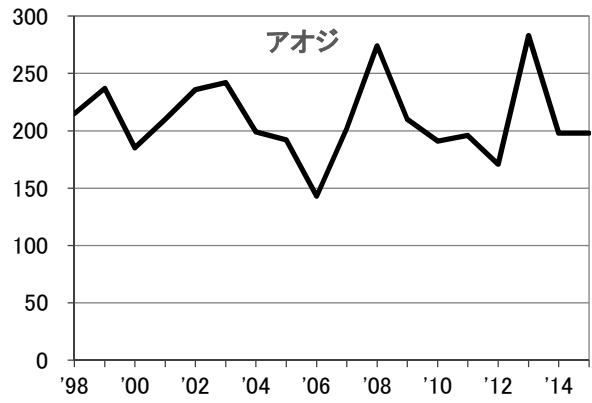
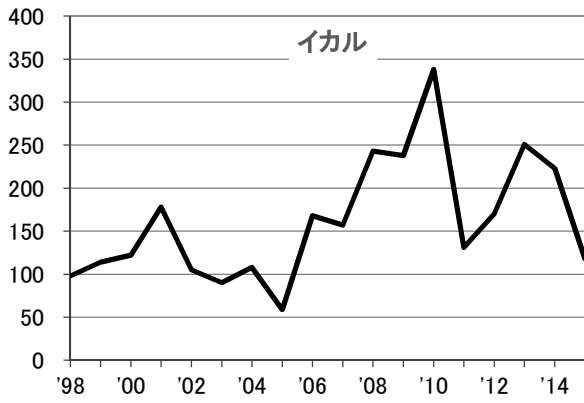


増減が少ないか又は増減の判断が難しい野鳥









オナガガモ

第3章 コース別の定期カウント

I. 浅川上流部（松竹公園西～松枝橋）

<調査地区の概要>

本調査地区は浅川本流の上流部にあたり、北浅川の松竹公園西に始まり陵北大橋を経て松枝橋に至る約6km 弱の区間である。

陵北大橋と松枝橋の中間部には通称「浅川溪谷」と呼ばれる場所もあり、上流部らしい風景が見られる。また、流域の周囲には雑木林も多く、猛禽類を含め山野の鳥もよく姿を見せる。河川敷およびその周辺地区には公園やグラウンドもあり、休日には子供たちが野球やサッカーに興じる姿も見られる。

この調査地区では1990年から会員による定期カウントが行われている。（①松竹公園西～陵北大橋、②陵北大橋～松枝橋の2コース。）当初の1990年から1999年までは300mほど上流の大沢橋がスタート地点であったが、2000年からは畑地の開墾などにより、下流の松竹公園西に変更された。



コース概念図

<確認された野鳥の概要>

(1) 野鳥の種類数

このコースで観察された野鳥の種類は次表のとおり、留鳥48種、夏鳥18種、冬鳥42種、旅鳥10種、迷鳥1種であった。その他にカワラバト（ドバト）など外来種が10種観察され、鳥種合計は129種類であった。

観察された野鳥の種類 119種

	種名
留鳥	キジ、カルガモ、カイツブリ、キジバト、カワウ、ゴイサギ、アオサギ、ダイサギ、コサギ、バン、ヒメアマツバメ、イカルチドリ、イソシギ、トビ、オオタカ、ノスリ、クマタカ、カワセミ、ヤマセミ、コゲラ、アカゲラ、アオゲラ、チョウゲンボウ、モズ、カケス、オナガ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ヤマガラス、ヒガラ、シジュウカラ、ヒバリ、ヒヨドリ、ウグイス、エナガ、メジロ、セッカ、ミソサザイ、ムクドリ、カワガラス、イソヒヨドリ、スズメ、キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、カワラヒワ、イカル、ホオジロ (48種)
夏鳥	ササゴイ、ホトトギス、ツツドリ、カッコウ、コチドリ、ツミ、サンコウチョウ、チゴモズ、ツバメ、コシアカツバメ、イワツバメ、ヤブサメ、センダイムシクイ、オオヨシキリ、クロツグミ、コサメビタキ、キビタキ、オオルリ (18種)
冬鳥	オシドリ、オカヨシガモ、ヨシガモ、ヒドリガモ、マガモ、ハシビロガモ、オナガガモ、コガモ、キンクロハジロ、クイナ、オオバン、タゲリ、タシギ、クサシギ、ユリカモメ、セグロカモメ、ミサゴ、ハイロチュウヒ、ハイタカ、アリスイ、ハヤブサ、キレンジャク、ヒレンジャク、トラツグミ、シロハラ、アカハラ、ツグミ、ルリビタキ、ジョウビタキ、カヤクグリ、ビンズイ、タヒバリ、アトリ、マヒワ、ベニマシコ、ウソ、シメ、カシラダカ、ミヤマホオジロ、アオジ、クロジ、オオジュリン (42種)
旅鳥	アマツバメ、ケリ、キアシシギ、ハチクマ、サシバ、メボソムシクイ、エゾムシクイ、コムクドリ、ノビタキ、エゾビタキ (10種)
迷鳥	アカガシラサギ (1種)

(2) 観察される頻度の高い鳥

観察された頻度の最も高い野鳥はスズメ、ハシボソガラス、キジバト、ヒヨドリの4種で、出現率100%であった。すなわち、これらの鳥は毎年必ず観察されていることになる。出現率の上位10種は次表の通りである。

種名	出現率(%)
スズメ	100
ハシボソガラス	100
キジバト	100
ヒヨドリ	100
セグロセキレイ	99
シジュウカラ	99
カルガモ	99
ホオジロ	96
ムクドリ	95
カワラヒワ	91

(3) 数の多い野鳥

全観察期間を通じて観察数の多い鳥の上位3種は、スズメ、カワラヒワ、ヒヨドリの順であった。以下に観察数の多かった鳥の上位10種を示す。

種名	年最大羽数 (累計羽数)	年平均羽数 (羽/26年)
スズメ	10,395	400
カワラヒワ	8,381	322
ヒヨドリ	6,551	252
ムクドリ	4,637	178
ツバメ	2,868	110
ホオジロ	2,522	97
カルガモ	2,285	88
カシラダカ	2,045	79
シジュウカラ	1,662	64
キジバト	1,587	61

(4) 数の少ない野鳥

対照的に過去に1羽しか観察されていない鳥は、以下の14種である。

種名	季節区分
ツツドリ	夏鳥
クロツグミ	夏鳥
サンコウチョウ	夏鳥
キレンジャク	冬鳥
ヨシガモ	冬鳥
キンクロハジロ	冬鳥
ミヤマホオジロ	冬鳥
ハイイロチュウヒ	冬鳥
タゲリ	冬鳥
エゾムシクイ	旅鳥
メボソムシクイ	旅鳥
ケリ	旅鳥
コムクドリ	旅鳥
アカガシラサギ	迷鳥

この14種には、ほかの環境では普通に観察される鳥も多いが、サンコウチョウ、アカガシラサギ、ハイイロチュウヒ、ミヤマホオジロなどの出現は注目される。

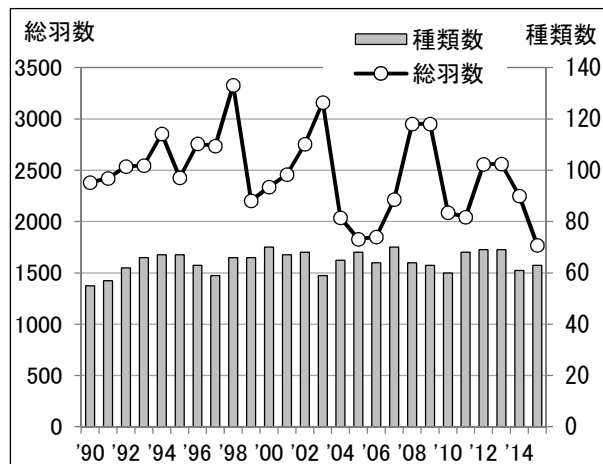
<年次変化>

(1) 野鳥総数と種類数

1990年から観察された野鳥の年次変化は、次のグラフのとおりである。

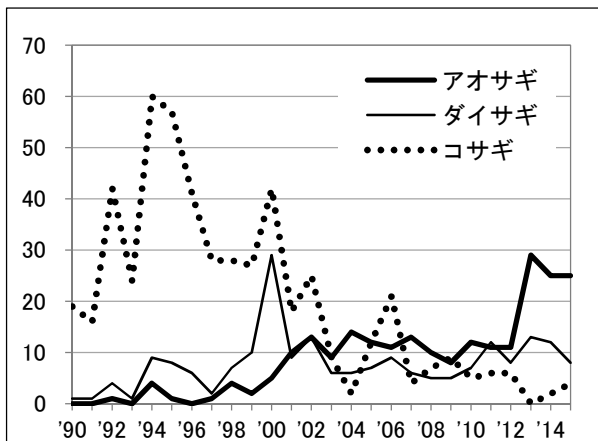
総羽数は、①コース、②コースの年最大羽数の合計値で種類数は2つのコースで重複しない種類を年間合計したものである。

総羽数を見ると1998年の3,329羽が最大で、その後減少し始め、2003年にやや回復しかけたが、その後は増減を繰り返しながらも漸減傾向にある。総種類数は2000年と2007年の70種がピークで、その後はおおむね60種台で推移しており、増減の判断は難しい。



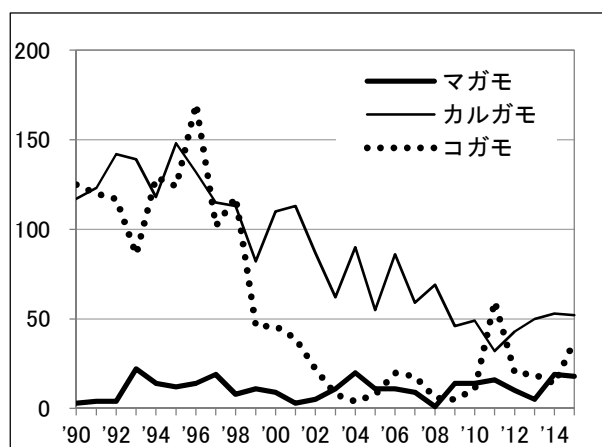
(2) サギ類

浅川上流域でのサギ類は、ダイサギ、コサギ、アオサギなどが主なものであるが、ほかにも数は少ないながらゴイサギ、ササゴイが観察されている。ダイサギ、コサギ、アオサギの3種ではコサギが多いが、ここ数年でコサギが急減し、アオサギが増加している。



(3) カモ類

代表的なカモ類3種（マガモ、カルガモ、コガモ）の年次変化を以下に示す。



マガモは3種の中では一番観測数が少なく、20羽以下である。

カルガモは、カウント開始以来1998年までは100羽を超えていたが次第に減少し、2009年以降は50羽前後を推移している。

コガモは1996年に170羽のピークを記録したが1999年以降大幅に減少し2004年には4羽となった。2011年に60羽まで回復したが、それ以降は14～38羽を推移している。

(4) 猛禽類

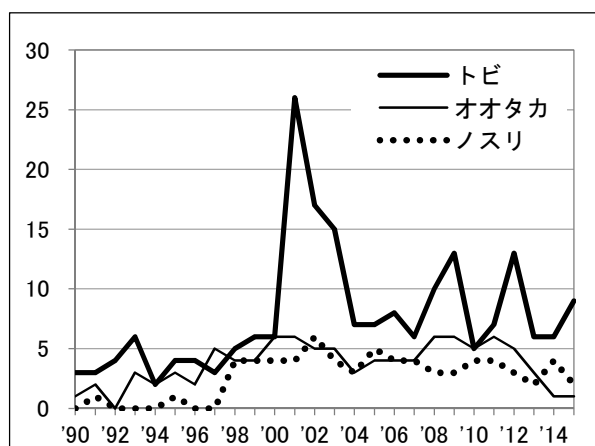
浅川上流部の猛禽類としては、トビ、オオタカ、ノスリが代表格である。

トビは2001年には26羽を数えたが、その後減少し、5～13羽を推移している。

環境省のレッドデータリストでは「準絶滅危惧種 (NT)」に指定されているオオタカは1997年以降、5羽前後を推移していたが、2014年、2015年は1羽のみの記録となっている。

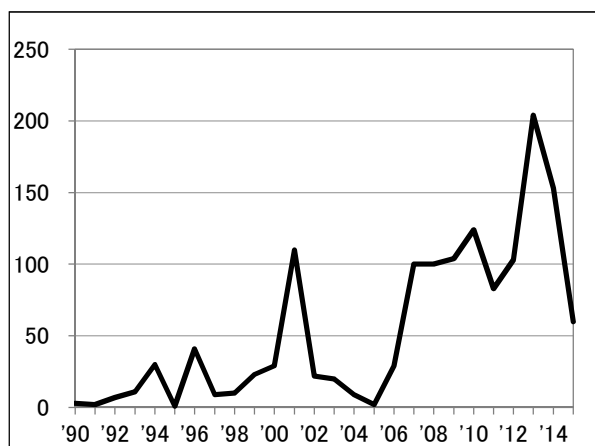
ノスリは、1990年代前半にはほとんど観察されていないが、2000年代に入ると3～5羽が記録されている。

北浅川上流部ではその水源地となる陣場山あるいは調査域の最終点、松竹公園でサシバ他、タカの渡りを観察しており、9月下旬から10月初旬にかけて壮大な渡りが見られることがある。



(5) イカル

イカルは1990年の観察開始以来記録されている。2001年に100羽を超えたものの、その後減少したが、2007年には同じレベルに回復し、2013年には204羽を記録した。しかし、直近の2015年には60羽に減少し、この後についての予測は難しい。



<最近の動向>

(1) アオサギのコロニー

陣馬街道が北浅川に最接近するところに「切通し」のバス停があり、そこに日枝神社の杉林がある。その杉林を利用して、近年アオサギがコロニーを形成し繁殖活動を行っている。大きなコロニーではないが10巣前後の巣作りをし、毎年ヒナが巣立っている。

(2) クイナ

本種は北海道および本州北部では夏鳥とされるが、本州中部以南では冬鳥である。

過去の観察実績は①コースで4回、②コースで5回記録され、希少種といえる。そのクイナが①

コースで 2016 年 1 月から 5 月まで連続記録された。場所は元木橋から上流 200m ほどの間。兩岸沿いに適度に草が生えている。

(3) ツミの営巣

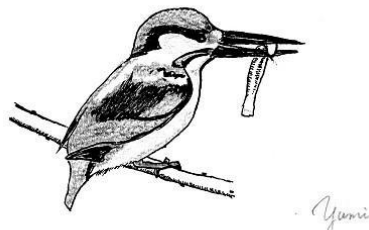
北浅川上流部は比較的多くの猛禽類を観察できる機会が多い。しかしオオタカ、ノスリなどに比べるとツミの観察機会はそれほど多くはない。近年、そのツミが河畔の樹林内で営巣し子育てをした。



浅川にはヤナギやハリエンジュの高木が川岸に生え、林を形成しているところがあり、モズ、ホオジロやオオタカが止まっているのが見られる。このような河畔林にはゴイサギが隠れるなど多くの野鳥が生息する。

都市化の進行とともに、河畔林は洪水時に流木となり、堤防を壊すとのことで伐採され残り少なくなった。浅川の中下流部で現在見られる河畔林は、多摩川合流部右岸のハリエンジュとオニグルミの並木、新井橋周辺のヤナギ、高幡橋右岸上流のクワ、オニグルミ、中央線鉄橋上流の左岸や大和田橋上流のハリエンジュの林などが認められるが「点」である。

八王子市は、みどりの基本計画で「浅川などの水辺の緑の保全や多自然川づくりにより中央地域（中心部）の緑被率 10.4%を目標」としている。日野市は、環境基本計画で「平成 19 年の緑被率 32.7%を平成 32 年も維持することを目標」としている。両市とも河畔林については触れていない。河畔林にはヨシ原とともに増水時には早い流れを弱め、堤防を守る機能があると言われている。河畔林は緑被率の増加の寄与は低いが、他の森林と同じように、新鮮な空気を供給し、二酸化炭素などの温室効果ガスを吸収減少させ、地球の温暖化を抑えるなど環境の質の向上に役立つ。また、野鳥をはじめ多くの生きものが生息する場ともなる。川幅が広く流量に余裕のある箇所には河畔林を、狭いところは堤防内（河川の外側）に公園等をつくり高木を植え、川に沿った緑の「帯」をつくってほしいものである。



カワセミ

1. 北浅川 (松竹公園西～陵北大橋)

(1) コースの概要

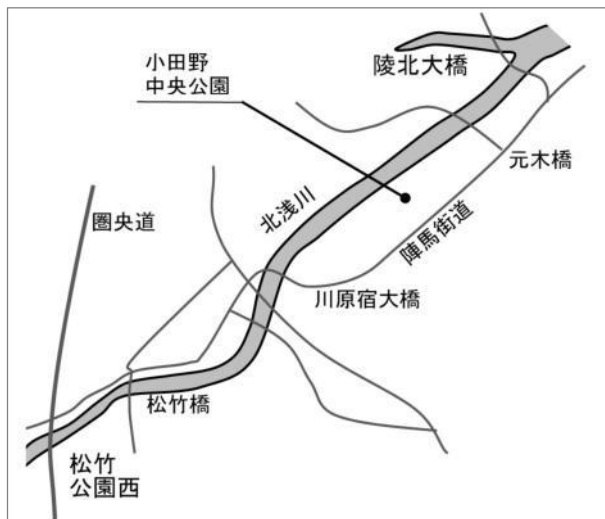
本コースのカウントは 1990 年に始まり今日に至る。当初は、大沢橋から陵北大橋間の約 3.5km で実施していたが、畑地の開墾などにより松竹公園から先が歩行調査困難となり、現在の松竹公園西までの約 3km までが調査エリアとなっている。

北浅川上流部は川が自然の状態に近く、その周辺も自然が多く残されており、野鳥にとっては恵まれた環境といえる。

コースの途中にはカワセミ会 10 周年記念植樹(ヤマザクラ)のある小田野中央公園とその先に八王子福祉園が続き、桜などの樹木が多く残されている。さらに進み、川原宿大橋を過ぎると次第に川幅が狭くなり、丘陵地が迫ってくる。

恩方第一小学校の先で松竹橋を渡り、松竹公園に進みテニスコートを左に見て圏央道をくぐると、まもなく終点の「松竹公園西」となる。

この圏央道は 1996 年夏ごろから工事が始まり、ほぼ 11 年(2007 年 6 月供用開始)かけて完成された。



コース概念図



元木橋から陵北大橋を振り返る 2015. 2. 21

(2) 調査期間及び担当者

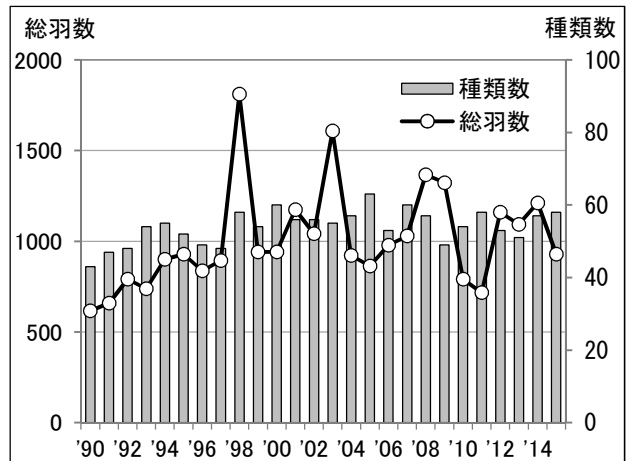
1990 年 1 月から調査を開始し、2015 年 12 月まで 26 年経過している。

1990 年～2001 年 今井達郎

2002 年から現在まで 丸山二三夫

(3) 確認された全野鳥の経年変化

総羽数は 1998 年をピークにして減少傾向にあるが、種類数は増えたり減ったりを繰り返し、増減は判断しがたい。



(4) 確認された野鳥の概要

確認された野鳥は 107 種(下表)で、これにカララバト(ドバト)、ガビチョウなどの外来種と雑種ガモなど合わせて 10 種を加えると 117 種となる。このうち留鳥は 48 種(45%)で約半数を占め、冬鳥が 33 種(31%)、夏鳥が 18 種(17%)、旅鳥が 8 種(7%)である。

確認された野鳥の種類数 : 107 種 (1/2)

季節区分別	出現頻度別(年)	出現羽数別(羽)
留鳥	キジ	26
留鳥	カルガモ	26
留鳥	カイツブリ	26
留鳥	キジバト	26
留鳥	カワウ	26
留鳥	ゴイサギ	26
留鳥	アオサギ	26
留鳥	ダイサギ	26
留鳥	コサギ	26
留鳥	バン	26
留鳥	ヒメアマツバメ	26
留鳥	イカルチドリ	26
留鳥	イソシギ	26
留鳥	トビ	26
留鳥	オオタカ	26
留鳥	ノスリ	26
留鳥	クマタカ	26
留鳥	カワセミ	26
留鳥	ヤマセミ	26
留鳥	コゲラ	26
留鳥	アカゲラ	26
留鳥	アオゲラ	26
留鳥	チョウゲンボウ	26
留鳥	モズ	26
留鳥	カケス	26
留鳥	オナガ	26
留鳥	ハシボンガラス	26
	キジ	133
	カルガモ	125
	キジバト	118
	ホトギス	70
	イカルチドリ	51
	トビ	50
	カワセミ	36
	コゲラ	33
	モズ	29
	オナガ	25
	ハシボンガラス	21
	ハシトガラス	20
	シジュウカラ	19
	ツバメ	19
	ヒヨドリ	19
	ウグイス	18
	メジロ	17
	ムクドリ	17
	ツグミ	15
	ジョウビタキ	13
	スズメ	12
	キセキレイ	12
	ハクセキレイ	11
	セグロセキレイ	9
	カワラヒワ	9
	シメ	8
	ホオジロ	8
	ヒヨドリ	133
	スズメ	125
	カワラヒワ	118
	ムクドリ	70
	ツバメ	51
	イカル	50
	カルガモ	36
	カシラダカ	33
	キジバト	29
	ホオジロ	25
	オナガ	21
	サンバ	20
	シジュウカラ	19
	アオジ	19
	ツグミ	19
	セグロセキレイ	18
	コガモ	17
	ハシボンガラス	17
	イワツバメ	15
	メジロ	13
	シメ	12
	エナガ	12
	キセキレイ	11
	ウグイス	9
	モズ	9
	ジョウビタキ	8
	ハシトガラス	8

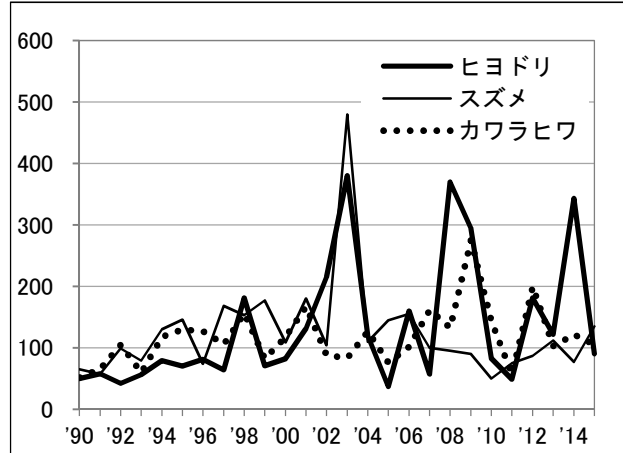
確認された野鳥の種類数：107種 (2/2)

季節区分別	出現頻度別(年)	出現羽数別(羽)
留鳥	ハシブトガラス 26	カシラダカ 7
留鳥	ヤマガラ 26	アオジ 6
留鳥	ヒガラ 25	マガモ 6
留鳥	シジュウカラ 25	オオタカ 5
留鳥	ヒバリ 25	エナガ 5
留鳥	ヒヨドリ 25	イカル 5
留鳥	ウグイス 24	コサギ 4
留鳥	エナガ 24	カケス 4
留鳥	メジロ 23	マガモ 4
留鳥	セッカ 22	アオゲラ 4
留鳥	ミソサザイ 22	イワツバメ 4
留鳥	ムクドリ 20	カワウ 3
留鳥	カワガラス 20	アオサギ 3
留鳥	イソヒヨドリ 20	ダイサギ 3
留鳥	スズメ 18	ノスリ 2
留鳥	キセキレイ 18	ヤマガラ 2
留鳥	ハクセキレイ 18	ビンズイ 2
留鳥	セグロセキレイ 16	アカゲラ 2
留鳥	カワラヒワ 15	ツミ 2
留鳥	イカル 14	チョウゲンボウ 1
留鳥	ホオジロ 14	シロハラ 1
冬鳥	オンドリ 13	ハイタカ 1
冬鳥	ヨシガモ 13	アカハラ 1
冬鳥	マガモ 13	タヒバリ 1
冬鳥	ハシビロガモ 12	サシバ 1
冬鳥	オナガガモ 10	ヒメアマツバメ 1
冬鳥	コガモ 10	クサシギ 1
冬鳥	キンクロハジロ 10	オオヨシキリ 1
冬鳥	クイナ 10	ルリビタキ 1
冬鳥	タシギ 9	イソシギ 1
冬鳥	クサシギ 7	カイツブリ 1
冬鳥	ユリカモメ 7	ゴイサギ 1
冬鳥	ミサゴ 7	アマツバメ 1
冬鳥	ハイタカ 7	タシギ 1
冬鳥	ハヤブサ 7	ハチクマ 0
冬鳥	ヒレンジャク 7	ミソサザイ 0
冬鳥	トラツグミ 7	キビタキ 0
冬鳥	シロハラ 6	ハヤブサ 0
冬鳥	アカハラ 6	コサメビタキ 0
冬鳥	ツグミ 6	ウソ 0
冬鳥	ルリビタキ 5	ヤマセミ 0
冬鳥	ジョウビタキ 5	センダイムシクイ 0
冬鳥	カヤクグリ 5	ベニマシコ 0
冬鳥	ビンズイ 4	オンドリ 0
冬鳥	タヒバリ 4	クイナ 0
冬鳥	アトリ 4	カッコウ 0
冬鳥	マヒワ 4	ヒガラ 0
冬鳥	ベニマシコ 4	オオルリ 0
冬鳥	ウソ 4	マヒワ 0
冬鳥	シメ 3	オナガガモ 0
冬鳥	カシラダカ 3	ササゴイ 0
冬鳥	アオジ 3	ユリカモメ 0
冬鳥	クロジ 3	ミサゴ 0
冬鳥	オオジュリン 3	ヤブサメ 0
夏鳥	ササゴイ 3	カワガラス 0
夏鳥	ホトトギス 3	ノビタキ 0
夏鳥	ツツドリ 3	エゾビタキ 0
夏鳥	カッコウ 3	クロジ 0
夏鳥	コチドリ 3	オオジュリン 0
夏鳥	ツミ 2	ハシビロガモ 0
夏鳥	サンコウチョウ 2	バン 0
夏鳥	チゴモズ 2	コチドリ 0
夏鳥	ツバメ 2	ヒレンジャク 0
夏鳥	コシアカツバメ 2	イソヒヨドリ 0
夏鳥	イワツバメ 2	アトリ 0
夏鳥	ヤブサメ 1	ヨシガモ 0
夏鳥	センダイムシクイ 1	キンクロハジロ 0
夏鳥	オオヨシキリ 1	ツツドリ 0
夏鳥	クロツグミ 1	キアシシギ 0
夏鳥	コサメビタキ 1	クマタカ 0
夏鳥	キビタキ 1	サンコウチョウ 0
夏鳥	オオルリ 1	チゴモズ 0
旅鳥	アマツバメ 1	ヒバリ 0
旅鳥	キアシシギ 1	コシアカツバメ 0
旅鳥	ハチクマ 1	エゾムシクイ 0
旅鳥	サシバ 1	セッカ 0
旅鳥	エゾムシクイ 1	コムクドリ 0
旅鳥	コムクドリ 1	トラツグミ 0
旅鳥	ノビタキ 1	クロツグミ 0
旅鳥	エゾビタキ 1	カヤクグリ 0

出現羽数は年最大値の年平均、0は1羽未満

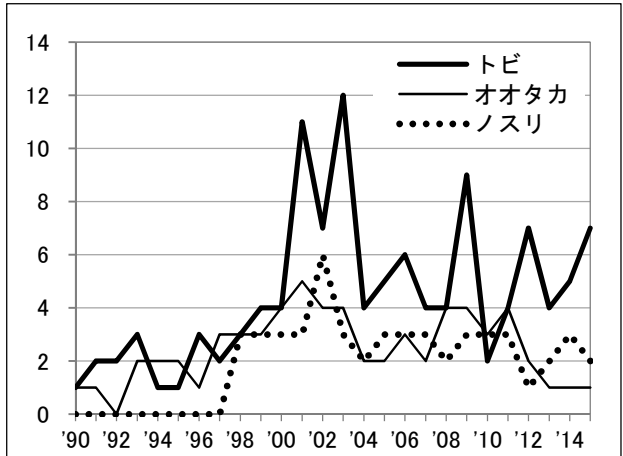
(5) 主な野鳥の動向、特徴等

羽数の多いベスト3の経年変化は次グラフのとおりで、いずれも年変動が大きい。



このコースでは猛禽類が記録されることが多い。特に松竹公園周辺で出現することが多く、26年間で以下の11種が記録された。ミサゴ、ハチクマ、トビ、ツミ、ハイタカ、オオタカ、サシバ、ノスリ、クマタカ、チョウゲンボウ、ハヤブサ。

ノスリは1999年以降は毎年記録されている。クマタカは1回だけの記録であるが、2007年3月3日に恩方小学校の西側から頭上近くまで来た2羽を確認したものである。サシバは秋の渡りの時期にこのコースを横切って通過するもので、1998年10月3日にはカウント中に出会い、465羽がカウントされた。11種のうち、上位3種の経年変化は以下のとおりであり、トビが最も多い。



(6) 特記事項

ヤマセミは2000年まで5回記録されたが、2001年以降記録が途絶えている。また、カワガラスも1995年まで3回記録されたが以降記録がない。

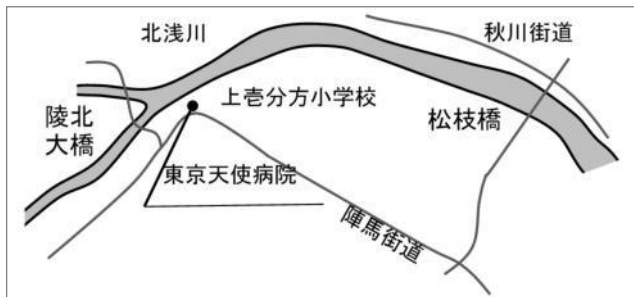
イソヒヨドリが2014年10月4日に恩方小学校付近の電柱に止まり、その後学校の屋上に移るのが観察された。なお、定期カウントの時以外ではアオバト、アオバズク、フクロウなどが鳥信に記録されている(カウントコースの範囲内)。

2. 北浅川（陵北大橋～松枝橋）

(1) コースの概要

このコースは北浅川の下流域にある。距離は約2.7kmあり右岸には公園やグラウンド、土手沿いには松枝住宅、上壱分方小学校、東京天使病院などがある。よく整備された堤防上はウォーキング、サイクリングを楽しむ市民の姿が見られる。

調査コースは土手からは離れ、主に河川敷の灌木内を歩く。行政指導の対象ではあるが住民の憩いの場ともなっている河川敷の畑、ニセアカシヤの林、雑木林、竹林、草地などが点在している。川相は石礫のある中洲、ヨシ原、堰、浅瀬、ワンド、溪谷の様相を呈する急流など変化に富んでいる。



コース概念図



松枝橋から上流を望む 2015. 4. 3



浅川溪谷の流れ 2015. 4. 3

(2) 調査期間及び担当者

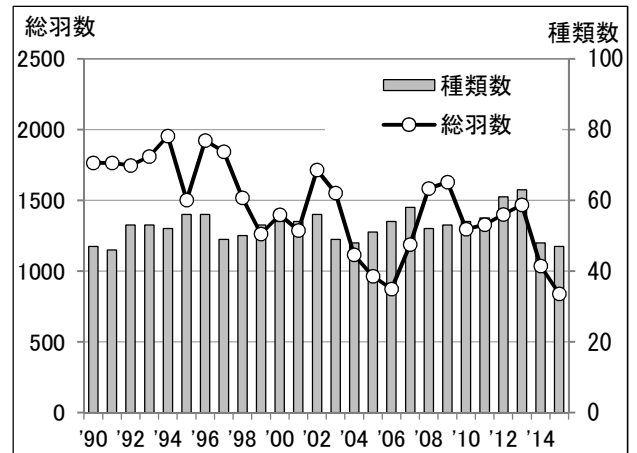
1990年1月から調査を開始し、2015年12月まで26年経過している。

調査担当者の推移は以下の通りである。

1990年 粕谷和夫
 1991年～2007年 河村洋子
 2008年～2013年 清水盛通
 2014年から現在まで 中村后子

(3) 確認された全野鳥の経年変化

総羽数の経年変化は1994年をピークに漸減傾向にあるが、種類数は増えたり減ったりを繰り返している。



(4) 確認された野鳥の概要

確認された野鳥は100種で（以下の表）、八王子、日野市全体で確認された野鳥のほぼ4割となっている（外来種を除く）。季節区分としては留鳥が43種（43%）で約半数近くを占め、冬鳥が37種（37%）、夏鳥が13種（13%）、旅鳥が6種（6%）、迷鳥1種（1%）である。

前項で種数に減少傾向は認められないとしたが水辺に暮らす鳥の種類が少なくなっているのは否めない。

確認された野鳥の種類：100種（1/2）

季節区分別	出現頻度別(年)	出現羽数別(羽)
留鳥	キジ	26
留鳥	カルガモ	26
留鳥	カイツブリ	26
留鳥	キジバト	26
留鳥	カワウ	26
留鳥	ゴイサギ	26
留鳥	アオサギ	26
留鳥	ダイサギ	26
留鳥	コサギ	26
留鳥	バン	26
留鳥	ヒメアマツバメ	26
留鳥	イカルチドリ	26
留鳥	イソシギ	26
留鳥	トビ	26
留鳥	オオタカ	26
留鳥	ノスリ	26
留鳥	カワセミ	26
留鳥	コゲラ	26
留鳥	アカゲラ	26
留鳥	アオゲラ	26
275	キジ	275
205	カルガモ	205
119	キジバト	119
108	ダイサギ	108
72	イカルチドリ	72
59	トビ	59
52	カワセミ	52
46	コゲラ	46
45	モズ	45
39	オナガ	39
35	ハシボソガラス	35
32	シジュウカラ	32
31	ツバメ	31
31	ヒヨドリ	31
28	ウグイス	28
24	ムクドリ	24
20	ツグミ	20
16	ジョウビタキ	16
14	スズメ	14
14	キセキレイ	14
205	スズメ	205
119	カワラヒワ	119
108	ヒヨドリ	108
72	ホオジロ	72
59	ツバメ	59
52	カルガモ	52
46	カシラダカ	46
45	シジュウカラ	45
39	コガモ	39
35	アオジ	35
32	キジバト	32
31	ハシボソガラス	31
31	ツグミ	31
28	セグロセキレイ	28
24	オナガ	24
20	シメ	20
16	ハシブトガラス	16
14	カワウ	14
14	モズ	14

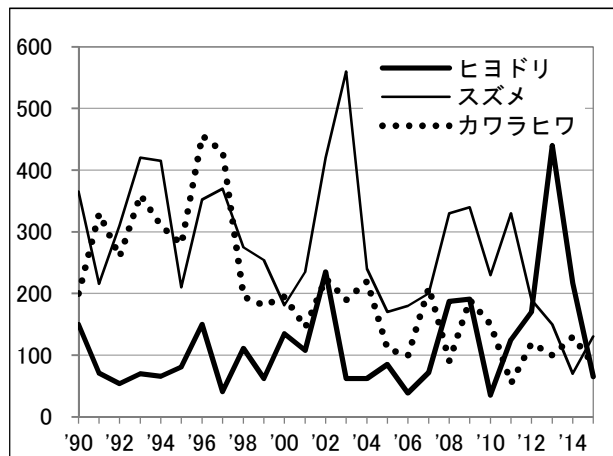
確認された野鳥の種類：100種 (2/2)

季節区分別	出現頻度別(年)	出現羽数別(羽)
留鳥	チョウゲンボウ 26	ハクセキレイ 14
留鳥	モズ 26	セグロセキレイ 13
留鳥	カケス 26	カワラヒワ 11
留鳥	オナガ 26	シメ 10
留鳥	ハシボソガラス 26	ホオジロ 10
留鳥	ハシブトガラス 26	カシラダカ 9
留鳥	ヤマガラ 26	アオジ 9
留鳥	シジュウカラ 25	ハシブトガラス 8
留鳥	ヒバリ 24	コガモ 8
留鳥	ヒヨドリ 24	コサギ 8
留鳥	ウグイス 23	マガモ 8
留鳥	エナガ 23	カワウ 6
留鳥	メジロ 23	メジロ 6
留鳥	セッカ 23	タヒバリ 5
留鳥	ムクドリ 22	クサシギ 5
留鳥	インビヨドリ 22	チョウゲンボウ 5
留鳥	スズメ 21	アオサギ 5
留鳥	キセキレイ 21	オオタカ 4
留鳥	ハクセキレイ 19	イワツバメ 4
留鳥	セグロセキレイ 19	オオヨシキリ 3
留鳥	カワラヒワ 18	カイツブリ 3
留鳥	イカル 18	タシギ 3
留鳥	ホオジロ 18	イソシギ 2
冬鳥	オカヨシガモ 17	キアシシギ 2
冬鳥	ヒドリガモ 17	エナガ 2
冬鳥	マガモ 17	イカル 2
冬鳥	ハシビロガモ 16	ホトギス 2
冬鳥	オナガガモ 16	ノスリ 1
冬鳥	コガモ 15	ゴイサギ 1
冬鳥	クイナ 15	アオゲラ 1
冬鳥	オオバン 14	コチドリ 1
冬鳥	タゲリ 14	アカゲラ 1
冬鳥	タシギ 11	ユリカモメ 1
冬鳥	クサシギ 11	ハイタカ 1
冬鳥	ユリカモメ 10	ヒメアマツバメ 1
冬鳥	セグロカモメ 10	カケス 1
冬鳥	ミサゴ 10	アカハラ 1
冬鳥	ハイロチュウヒ 9	シロハラ 1
冬鳥	ハイタカ 9	ベニマシコ 1
冬鳥	アリスイ 8	ササゴイ 1
冬鳥	ハヤブサ 8	バン 1
冬鳥	キレンジャク 8	アマツバメ 1
冬鳥	ヒレンジャク 8	ツミ 1
冬鳥	トラツグミ 6	オナガガモ 1
冬鳥	シロハラ 5	クイナ 1
冬鳥	アカハラ 5	ハヤブサ 1
冬鳥	ツグミ 5	ノビタキ 1
冬鳥	ジョウビタキ 5	キビタキ 0
冬鳥	カヤクグリ 4	セグロカモメ 0
冬鳥	ピンズイ 4	アリスイ 0
冬鳥	タヒバリ 4	ヒバリ 0
冬鳥	マヒワ 4	セッカ 0
冬鳥	ベニマシコ 4	ウソ 0
冬鳥	ウソ 3	オカヨシガモ 0
冬鳥	シメ 3	ヒドリガモ 0
冬鳥	カシラダカ 3	クロジ 0
冬鳥	ミヤマホオジロ 2	カッコウ 0
冬鳥	アオジ 2	ヤマガラ 0
冬鳥	クロジ 2	トラツグミ 0
冬鳥	オオジュリン 2	コサメビタキ 0
夏鳥	ササゴイ 2	ピンズイ 0
夏鳥	ホトギス 1	ハシビロガモ 0
夏鳥	カッコウ 1	アカガシラサギ 0
夏鳥	コチドリ 1	オオバン 0
夏鳥	ツミ 1	タゲリ 0
夏鳥	ツバメ 1	コサメビタキ 0
夏鳥	コシアカツバメ 1	ケリ 0
夏鳥	イワツバメ 1	ハイロチュウヒ 0
夏鳥	ヤブサメ 1	コシアカツバメ 0
夏鳥	センダイムシクイ 1	ヤブサメ 0
夏鳥	オオヨシキリ 1	メボソムシクイ 0
夏鳥	コサメビタキ 1	センダイムシクイ 0
夏鳥	キビタキ 1	キレンジャク 0
旅鳥	アマツバメ 1	ヒレンジャク 0
旅鳥	ケリ 1	インビヨドリ 0
旅鳥	キアシシギ 1	エソビタキ 0
旅鳥	メボソムシクイ 1	カヤクグリ 0
旅鳥	ノビタキ 1	マヒワ 0
旅鳥	エソビタキ 1	ミヤマホオジロ 0
迷鳥	アカガシラサギ 1	オオジュリン 0

出現羽数は年最大値の年平均、0は1羽未満

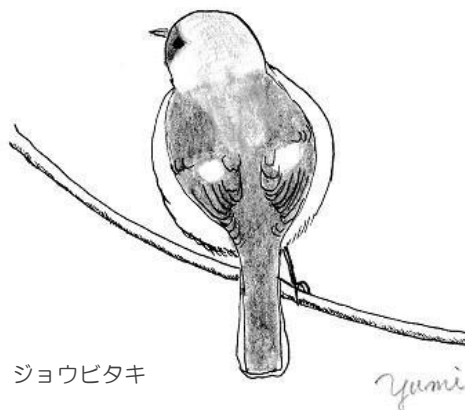
(5) 主な野鳥の動向、特徴等

羽数の多い上位3種(スズメ、カワラヒワ、ヒヨドリ)の経年変化は次グラフのとおりで、いずれも年変動が大きい。スズメ、カワラヒワは減少傾向にある。



(6) 特記事項

- ① 飛来数は年ごとでバラつきはあるがコース内にあるヤブランには毎年ヒレンジャク、キレンジャクが訪れる。
- ② 特異的ではあるが2012年初冬にはマヒワの100羽を超える集団が現れた。
- ③ 会員からの「鳥信」報告では当該コースでの定期カウントで確認された100種の他に11種が加わる(キンクロハジロ、ヤマシギ、フクロウ、コムクドリなど)。



ジョウビタキ

II. 浅川中流部（松枝橋～長沼橋）

<調査地区の概要>

本調査地区は、八王子市の中央部を貫流する浅川の中流部にあたり、北浅川の松枝橋から南浅川合流近くにある鶴巻橋まで(2.1km)、鶴巻橋から甲州街道が浅川を跨ぐ大和田橋まで(3.2km)、大和田橋から湯殿川合流近くの長沼橋まで(2.5km)の3コースから成っている。これら3コースの定期カウントデータがそろったのは1986年以降のことであり、本稿のデータもそれに依っている。

コースの総延長は8km弱で、行政区域としては、ほとんど八王子市に属している。松枝橋付近はまだ上流部の面影を残すが、鶴巻橋以西は中流らしく川幅も広がり、多摩地区最大の都市八王子の代表的な景観を形作っている。環境的にも中洲や河畔林、ワンド、湿地、人工構築物など多様であり、そこに生息する野鳥もまた多様である。

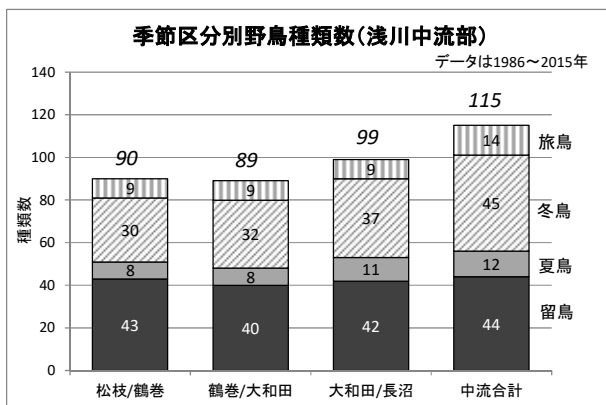


コース概念図

<確認された野鳥の種類>

(1) 野鳥の種類数

浅川中流域全体として、1986年～2015年までの定期カウントで観察された野鳥（外来種除く）の種類数は115種であった。これは、八王子市・日野市でこれまでに記録されたことのある野鳥244種の47.1%にあたる。



季節区分では留鳥44種、夏鳥12種、冬鳥45種、旅鳥14種で、留鳥と冬鳥の2区分だけで全体の77%を占める。コース別種類数では最下流の大和田橋～長沼橋間の99種が最大であった。

浅川中流において、定期カウントで観察された季節区分別の全鳥種(115種)を下表に示す。

	種名
留鳥	キジ、カルガモ、カイツブリ、キジバト、カワウ、ゴイサギ、アオサギ、ダイサギ、コサギ、バン、ヒメアマツバメ、イカルチドリ、イソシギ、トビ、オオタカ、ノスリ、カワセミ、コゲラ、アカゲラ、アオゲラ、チョウゲンボウ、モズ、カケス、オナガ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ヤマガラ、シジュウカラ、ヒバリ、ヒヨドリ、ウグイス、エナガ、メジロ、セッカ、ムクドリ、カワガラス、イソヒヨドリ、スズメ、キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、カワラヒワ、イカル、ホオジロ (44種)
夏鳥	ササゴイ、ホトトギス、カッコウ、コチドリ、ツミ、ツバメ、コシアカツバメ、イワツバメ、センダイムシクイ、オオヨシキリ、コサメビタキ、キビタキ (12種)
冬鳥	マガン、オシドリ、オカヨシガモ、ヨシガモ、ヒドリガモ、マガモ、ハシビロガモ、オナガガモ、コガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、ミコアイサ、カワアイサ、カンムリカイツブリ、クイナ、オオバン、タゲリ、シロチドリ、タシギ、クサシギ、ハマシギ、ユリカモメ、セグロカモメ、ミサゴ、ハイタカ、トラフズク、アリスイ、ハヤブサ、キレンジャク、ヒレンジャク、シロハラ、アカハラ、ツグミ、ジョウビタキ、ピンズイ、タヒバリ、アトリ、マヒワ、ベニマシコ、シメ、ホオアカ、カシラダカ、ミヤマホオジロ、アオジ、オオジュリン (45種)
旅鳥	アマサギ、チュウサギ、アマツバメ、ムナグロ、オオジシギ、キアシシギ、アカエリヒレアシシギ、サシバ、ショウドウツバメ、コヨシキリ、コムクドリ、ノゴマ、ノビタキ、コジュリン (14種)

(2) 出現頻度が高い野鳥

浅川中流3コースの定期カウントデータが存在する1986年～2015年まで30年間に、浅川中流において毎年観察された野鳥は次頁表の38種であった。

季節区別では留鳥が 26 種と断然多く、これらは 1 年を通して見られるため、一般市民にとっても親しみやすい鳥たちである。その他は夏鳥 4 種、冬鳥 7 種である。

注目されるのは、旅鳥で 1 種だけリストアップされたキアシシギで、過去 30 年にわたって一度も途切れることなく、長い渡りの途中で当地を訪れているのは驚くべきことである。

種 名	
留鳥	キジ、カルガモ、キジバト、ダイサギ、コサギ、イカルチドリ、イソシギ、トビ、カワセミ、コゲラ、モズ、オナガ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、シジュウカラ、ヒバリ、ヒヨドリ、ウグイス、セッカ、ムクドリ、スズメ、キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、カワラヒワ、ホオジロ (26 種)
夏鳥	コチドリ、ツバメ、イワツバメ、オオヨシキリ (4 種)
冬鳥	コガモ、ツグミ、ジョウビタキ、タヒバリ、シメ、カシラダカ、アオジ (7 種)
旅鳥	キアシシギ (1 種)

(3) 出現羽数が多い野鳥

浅川中流で出現羽数（年最大羽数の 1986 年～2015 年累計数）が多い野鳥のトップ 10 は下表のとおりである。

順位	種 名	年最大羽数 (累計)	年最大羽数 (年平均)
1	スズメ	12,450	415
2	カワラヒワ	5,957	199
3	コガモ	5,820	194
4	ムクドリ	4,370	146
5	カルガモ	3,139	105
6	ユリカモメ	3,129	104
7	ヒヨドリ	2,944	98
8	カワウ	2,694	90
9	オナガガモ	2,545	85
10	イワツバメ	1,883	63

後述するが、スズメやカモ類などは近年その数を大きく減らしており、30 年ほどの間にも野鳥の生息状況が大きく変化していることを示している。

したがって、定期カウント期間を細分した場合には、それぞれの期間ごとの出現羽数順位はやや異なってくる。

(4) 数が少ない野鳥

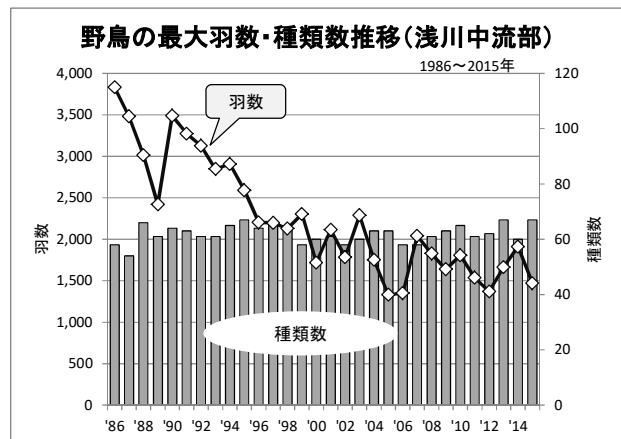
下表の野鳥 16 種は、浅川中流域では過去 1 回（1 羽）しか観察されていない。留鳥が少なく、冬鳥と旅鳥が多いことがわかる。

種 名	
留鳥	カワガラス (1 種)
夏鳥	センダイムシクイ、コサメビタキ (2 種)
冬鳥	マガン、ヨシガモ、ホシハジロ、カワアイサ、カンムリカイツブリ、トラフズク、キレンジャク、アトリ (8 種)
旅鳥	オオジシギ、アカエリヒレアシシギ、サシバ、ノゴマ、コジュリン (5 種)

<確認された野鳥の年次変動>

(1) 野鳥全体の年次変動（最大羽数、種類数）

浅川中流での 30 年間の野鳥の最大羽数と種類数の推移を下図に示す。



一見して、羽数の減少が目につく。これは、主にスズメやカモ類など個体数の多い野鳥の数が減っていることによる。

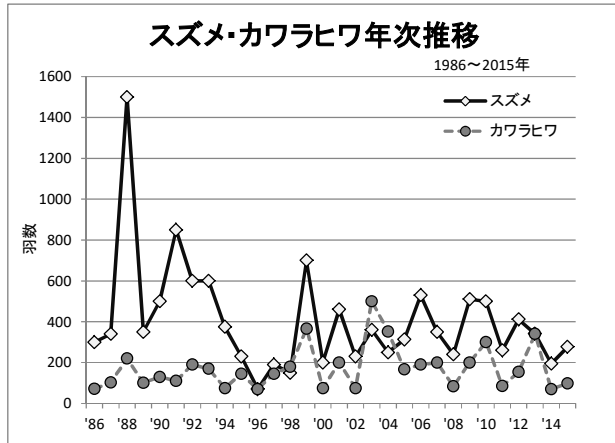
一方で、種類数は年間 60 種前後と大きな変動は見られないが、鳥種によっては以前見られたものが見られなくなったり、逆に以前は見られなかったものが、見られるようになったものもある。前者はハマシギ、後者はオオバン、ベニマシコなどがあげられる。野鳥ではないが、今は普通に観察されるガビチョウも、2000 年になって初めて浅川中流の定期カウントで観察された。

(2) 代表的な野鳥の年次変動

① スズメ、カワラヒワ

数の多い野鳥の上位2種であるスズメ、カワラヒワの年次推移である。特にスズメの羽数減少が目立つ。

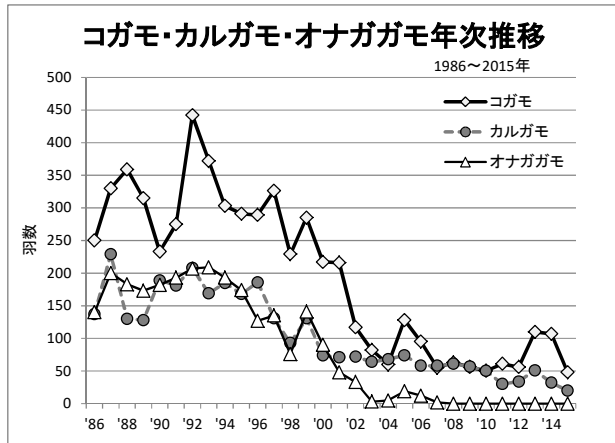
全国的にもスズメの減少が伝えられているが、当地においてもそれはデータから明らかであり、また定期カウントをしていても、実感するところである。



② カモ類（コガモ、カルガモ、オナガガモ）

カモ類はいずれも減少が顕著である。特にオナガガモは、かつては数多く見られたが、1990年代後半から数を減らし、2008年からはとうとう1羽も見られなくなってしまった。

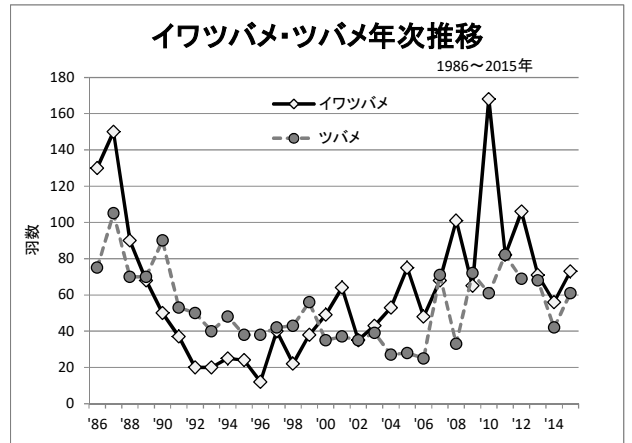
オナガガモほどではないが、カルガモ、コガモも同様に減少傾向を示している。



③ イワツバメ、ツバメ

イワツバメ、ツバメとも浅川中流では代表的な夏鳥である。

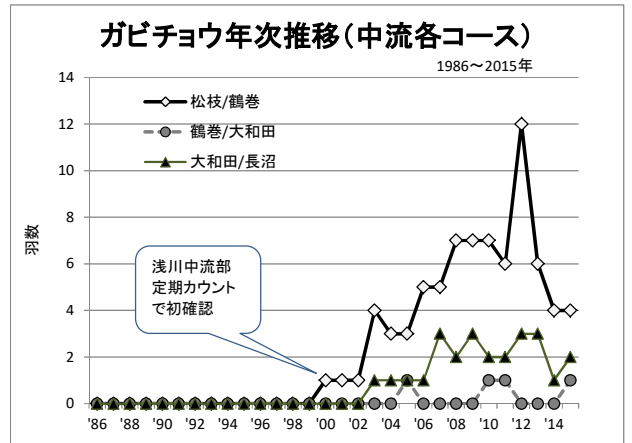
大きく見ると、いずれも減少から増加に転じているように感じられるが、イワツバメのほうがより変化の度合いが大きい。これは、浅川大橋や大和田橋にあるような、大規模営巣地の消長が大きく影響しているものと考えられる。



< その他（外来種等） >

浅川中流域で過去に観察された外来種は、コジユケイ、カワラバト（ドバト）、ウスユキバト、セキセイインコ、ガビチョウ、ソウシチョウ、ベニスズメ、キンバラ、ブンチョウである。その他アヒル、ガチョウなどの家禽及び雑種ガモが観察されている。

前述したとおり、ガビチョウは浅川中流域の定期カウントでは、2000年に初めて観察（松枝橋～鶴巻橋間）された。浅川中流域の3コースを比較すると、最上流部の松枝橋～鶴巻橋間が最も多く、下流側2コースは比較的少ない結果となっている。

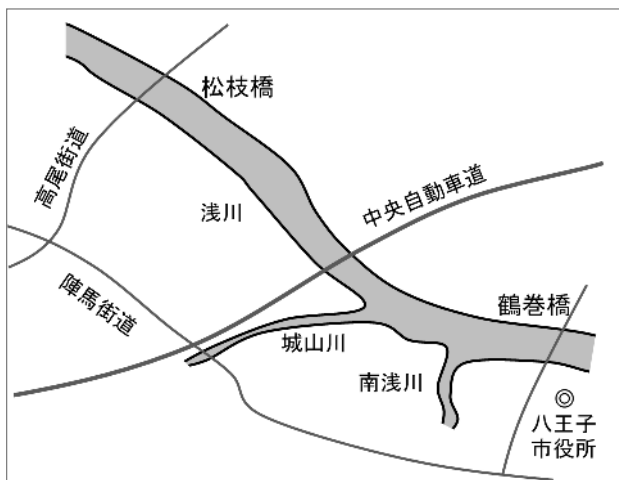


3. 北浅川（松枝橋～鶴巻橋）

(1) コースの概要

松枝橋から八王子市役所脇の鶴巻橋まで、およそ2kmが調査エリアで、左岸を3～4時間位で歩いている。浅川本流にある鶴巻橋のすぐ上流で南浅川が合流しており、さらにもう少し上流で城山川とも合流している。コースの中ほどには中央高速道の高架橋がある。

繰り返される河川改修工事に加え、2010年頃より松枝橋の架け替え工事が始まっている。近年では遊歩道も整備され、従来ルートが藪になったため、コースを変更している部分もある。



コース概念図



松枝橋の架け替え工事で皆伐された河川敷 2015. 5. 17

(2) 調査期間及び担当者

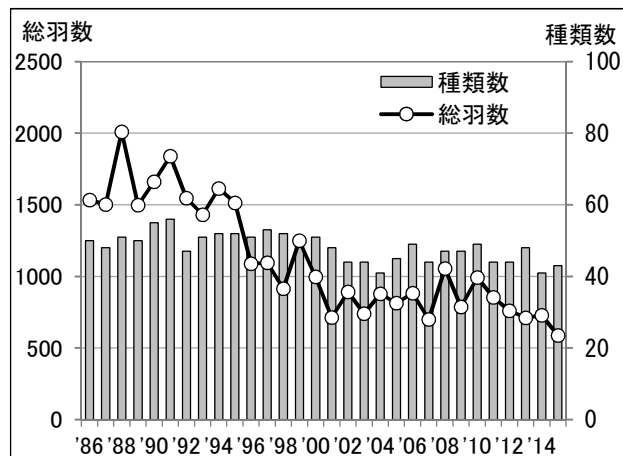
1986年 粕谷和夫
 1987年～1990年 三好恒雄
 1991年 清水茂
 1992年～1993年 三好恒雄
 1994年 清水茂
 1995年 福島弥四郎
 1996年～1998年 清水茂
 1999年 福島弥四郎
 2000年 福井司郎
 2001年～現在 山浦秀雄

(3) 確認された全野鳥の経年変化

羽数と種数について、1986年から2015年までの30年間の推移を下図に示す。全体的に羽数は大きく減少していることがわかる。

最大は1988年の2010羽、最小は2015年の587羽であった。出現種数についても、凸凹はあるが漸減傾向にある。

出現総種類数は90種で、最大は1991年の56種、最小は2004年と2014年の41種であった。



(4) 確認された野鳥の概要

総観察種数は90種で、季節区分は、留鳥43種、冬鳥30種、夏鳥8種、旅鳥9種である。

出現頻度は、毎年出現(30)が、28種31%、数年の欠落はあるもののほぼ毎年出現(29～23)が、11種12%、時折見るもの(20～14)、10種11%、稀にしか見ないもの(13～2)、24種27%、1回のみが、17種19%などとなっている。

出現羽数では、スズメが最多で、年平均225羽、カラヒワ156羽、ムクドリ99羽と続く。出現羽数の上位25種で、出現総羽数の90%以上を占めている。

確認された野鳥の種類数 : 90 種

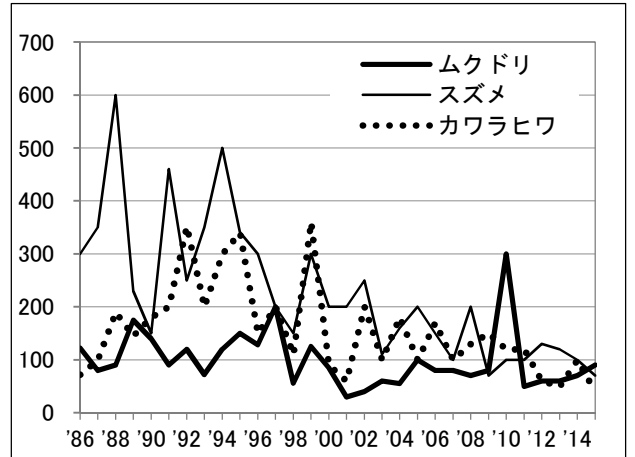
季節区別	出現頻度別(年)	出現羽数別(羽)
留鳥	キジ	30
留鳥	カルガモ	30
留鳥	カイツブリ	30
留鳥	キジバト	30
留鳥	カワウ	30
留鳥	ゴイサギ	30
留鳥	アオサギ	30
留鳥	ダイサギ	30
留鳥	コサギ	30
留鳥	バン	30
留鳥	ヒメアマツバメ	30
留鳥	イカルチドリ	30
留鳥	イソシギ	30
留鳥	トビ	30
留鳥	オオタカ	30
留鳥	ノスリ	30
留鳥	カワセミ	30
留鳥	コゲラ	30
留鳥	アカゲラ	30
留鳥	アオゲラ	30
留鳥	チョウゲンボウ	30
留鳥	モズ	30
留鳥	カケス	30
留鳥	オナガ	30
留鳥	ハシボソガラス	30
留鳥	ハシブトガラス	30
留鳥	ヤマガラ	30
留鳥	シジュウカラ	30
留鳥	ヒバリ	29
留鳥	ヒヨドリ	29
留鳥	ウグイス	28
留鳥	エナガ	26
留鳥	メジロ	26
留鳥	セッカ	26
留鳥	ムクドリ	24
留鳥	カワガラス	24
留鳥	スズメ	23
留鳥	キセキレイ	23
留鳥	ハクセキレイ	23
留鳥	セグロセキレイ	20
留鳥	カワラヒワ	20
留鳥	イカル	19
留鳥	ホオジロ	19
冬鳥	マガン	18
冬鳥	オシドリ	18
冬鳥	オカヨシガモ	16
冬鳥	ヒドリガモ	16
冬鳥	マガモ	16
冬鳥	オナガガモ	14
冬鳥	コガモ	12
冬鳥	オオバン	11
冬鳥	タゲリ	11
冬鳥	タシギ	11
冬鳥	クサシギ	11
冬鳥	ユリカモメ	11
冬鳥	セグロカモメ	9
冬鳥	ハイタカ	7
冬鳥	アリスイ	6
冬鳥	ハヤブサ	5
冬鳥	キレンジャク	5
冬鳥	ヒレンジャク	4
冬鳥	シロハラ	4
冬鳥	アカハラ	4
冬鳥	ツグミ	3
冬鳥	ジョウビタキ	2
冬鳥	ビンズイ	2
冬鳥	タヒバリ	2
冬鳥	マヒワ	2
冬鳥	ベニマシコ	2
冬鳥	シメ	2
冬鳥	カシラダカ	2
冬鳥	アオジ	2
冬鳥	オオジュリン	2
夏鳥	ササゴイ	1
夏鳥	ホトギス	1
夏鳥	カッコウ	1
夏鳥	コチドリ	1
夏鳥	ツバメ	1
夏鳥	イワツバメ	1
夏鳥	オオヨシキリ	1
夏鳥	キビタキ	1
旅鳥	アマサギ	1
旅鳥	チュウサギ	1
旅鳥	アマツバメ	1
旅鳥	オオジシギ	1
旅鳥	キアシシギ	1
旅鳥	サシバ	1
旅鳥	ヨシキリ	1
旅鳥	ノビタキ	1
旅鳥	コジュリン	1

出現羽数は年最大値の年平均、0は1羽未満

(5) 主な野鳥の動向、特徴等

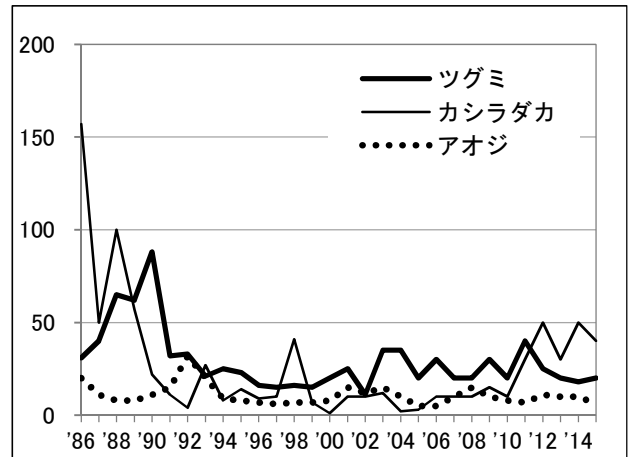
スズメ、カワラヒワ、ムクドリの経年変化を示す。スズメとカワラヒワは大きな変動を繰り返しながら減少傾向を示している。ムクドリは概ね横ばいで大きな変化は見られない。

出現羽数の多い野鳥3種の推移



コースを代表する野鳥として、カシラダカ、ツグミ、アオジの冬鳥の経年変化を下図に示す。カシラダカは、カウント初期の数年間を除くと、しばらく横ばいの後、最近では増加傾向にあることがわかる。ツグミ、アオジは大体横ばいである。

代表的な冬鳥3種の推移



(6) 特記事項

①コース状況

鶴巻橋側の下流域は比較的開けており、イソシギ、セキレイ類、モズなどが、松枝橋側の上流域では藪や灌木が多くなり、ホオジロやカシラダカなどが多く見られていたが、河川改修工事等による環境変化により変わってきている。

②外来種

主な外来種は、ガビチョウ、コジュケイ、カワラバト(ドバト)の3種で、カワラバト(ドバト)は鶴巻橋から清川運動公園付近までの下流域に集中し、ガビチョウは全域に広がっている。コジュケイは稀に上流域側で声を聞く程度である。

③調査・研究

カルガモ繁殖調査及びイワツバメ営巣調査の2種の調査があるが、カルガモは中央高速道付近の(株)むつみの付近とその他数ヶ所、イワツバメも中央高速道の高架橋下で観察を行っている。最近ではイワツバメの巣をヒメアマツバメが利用しているところがある。

④鳥信情報

月1回の定期カウントには出てこないが、このコース及びその周辺の鳥信で報告されているものとして下記がある。

アトリ、クイナ、ケリ、コシアカツバメ、コムクドリ、ショウドウツバメ、タマシギ、チュウサギ、バン、ムナグロ、アオバズク。

繁殖が報告されたのは、ササゴイ、キジ、キジバト、カワセミ、ヒバリ、ツバメ、キセキレイ、モズ、シジュウカラ、カワラヒワ、ハシブトガラスの11種である。

⑤その他

北浅川は多量の土砂採取などにより、河床低下が著しく、柔らかい砂質泥岩(170万年前のもの)が露出している。中央高速道下流側では、メタセコイアの化石林があり、古代象のキバや歯の化石も発見されている。



ハシボソガラスのクルミ割り

ハシボソガラスがオニグルミの実を拾い、礫河原や道路に落とすという行動は全国的に観察されている。この行動は実をくわえて飛び上がっては落とすということを何度も繰り返すというものである。何度も落とすうちにクルミは割れ、中身を嘴でほじくって食べるためと言われている。2000年以降になるとクルミを走っている車のタイヤに轆かせて割るハシボソガラスが仙台で発見され、当時のマスコミの話題になった。実を空中から落としたり、車に轆かせたりするのは、ハシブトガラスでなく、ハシボソガラスである。

このようなハシボソガラスの賢い行動は八王子・日野でも観察されている。カワセミ会の鳥信には2015年までに浅川・多摩川の河原でクルミ落としの行動が10件、国道20号の高尾駅付近から南浅川の両界橋付近で車に轆かせる行動が2件記録されている。

4. 浅川（鶴巻橋～大和田橋）

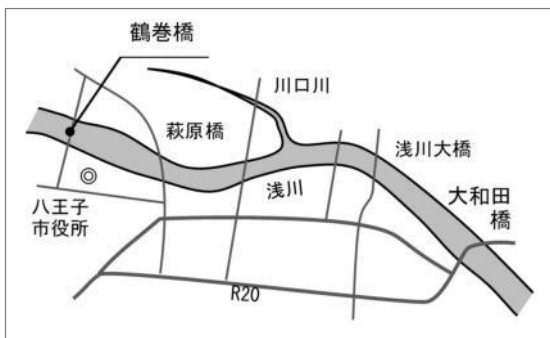
（1）コースの概要

このコースの位置は、八王子市役所に近接する鶴巻橋から大和田橋（国道20号）までに至る3.1 kmで、この間に上流から萩原橋（秋川街道）、浅川橋（国道16号）、暁橋、浅川大橋、暁水管橋がある。

萩原橋上流から下流にかけての右岸にワンドがあり、浅川橋下流には堰があり、堰の下流左岸に川口川が合流している。川口川との合流地点に最近復元された小さなワンドがある。

右岸暁水管橋の上下流にワンドがあり、多数の野鳥が生息していたが、河川改修で完全に消滅してしまっ

た。市街地に接し、浅川河川敷に市民向けに開発した施設が多い。右岸側に3面のグラウンドとサイクリングロード（2004年～）、左岸側に遊歩道（2013年～）などがある。



コース概念図



鶴巻橋から下流側を望む 2013. 11. 21

（2）調査期間及び担当者

調査開始年：1985年

調査担当者：

1985～1986年 粕谷和夫

1987年 粕谷和夫、榛沢努、藤江豊

1988年 藤江豊、榛沢努

1989年 野田洋次

1990～1993年 榛沢務

1994年 田中英吉、榛沢務

1995～1997年 榛沢務

1998年 榛沢務、倉本修

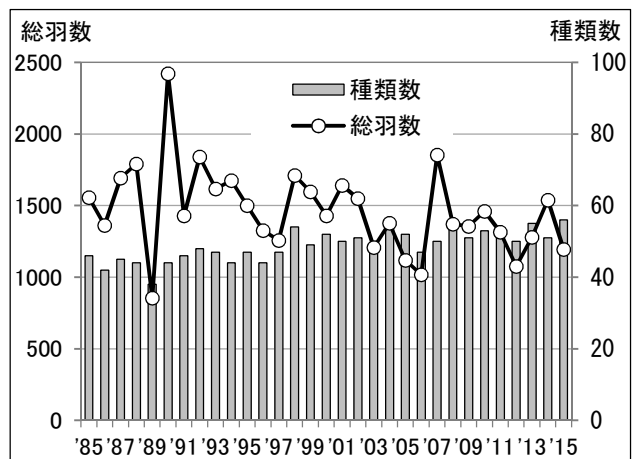
1999～2007年 倉本修

2008年～現在 若狭誠

（3）確認された全野鳥の経年変化

本コースで確認した野鳥の経年変化は下図の通りである（外来種等を除く）。確認された種類数の平均は49種であるが、2001年からは50種台が多くなり、やや増加している。

一方、羽数は大幅に減少、ピーク年の1990年に比べ半減している。カモ類やカワラヒワの減少などが原因である。



（4）確認された野鳥の概要

次ページ表は、本コースで確認した野鳥90種の季節区分別、出現頻度別、出現羽数別である。季節区分の内訳は留鳥40種、冬鳥32種、夏鳥9種、旅鳥9種である。出現頻度と出現羽数は多い順である。

野鳥90種のうち、2000年以前のものに確認した野鳥は、ハシビロガモ、ミコアイサ、カンムリカイツブリ、カッコウ、トラフズクなどである。

2001年以降に確認した野鳥は、オオバン、ツミ、ハイタカ、アリスイ、イソヒヨドリ、マヒワ、ベニマシコなどである。

野鳥90種以外で、本コースの鳥信で記録した野鳥は、トモエガモ、カワアイサ、ヒクイナ、タゲリ、ケリ、ムナグロ、セイタカシギ、アオアシシギ、アジサシ、サシバ、アオバズク、エゾムシクイ、キレンジャク、コルリ、コサメビタキ、ウソ、ホオアカなど24種ある。

上記のほか、コジュケイ、カワラバト（ドバト）、ガビチョウなどの外来種等は10種である。

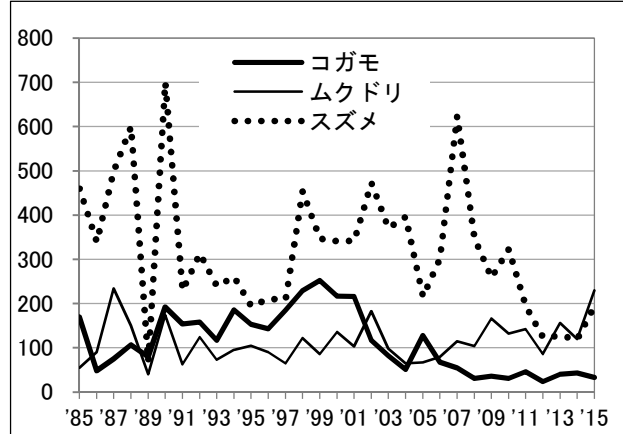
確認された野鳥の種類数：90種

季節区分別	出現頻度別(年)	出現羽数別(羽)
留鳥	キジ	31 カルガモ 319
留鳥	カルガモ	31 コガモ 114
留鳥	カイツブリ	31 キジバト 112
留鳥	キジバト	31 コサギ 104
留鳥	カワウ	31 イカルチドリ 93
留鳥	ゴイサギ	31 トビ 92
留鳥	アオサギ	31 カワセミ 67
留鳥	ダイサギ	31 モズ 60
留鳥	コサギ	31 オナガ 51
留鳥	バン	31 ハシボソガラス 42
留鳥	ヒメアマツバメ	31 ハシブトガラス 37
留鳥	イカルチドリ	31 シジュウカラ 29
留鳥	イソシギ	31 ツバメ 27
留鳥	トビ	31 イワツバメ 26
留鳥	オオタカ	31 ヒヨドリ 26
留鳥	ノスリ	31 ムクドリ 25
留鳥	カワセミ	31 ツグミ 20
留鳥	コゲラ	31 スズメ 20
留鳥	チョウゲンボウ	31 キセキレイ 18
留鳥	モズ	31 ハクセキレイ 16
留鳥	オナガ	31 セグロセキレイ 12
留鳥	ハシボソガラス	31 タヒバリ 11
留鳥	ハシブトガラス	31 カワラヒワ 11
留鳥	ヤマガラ	31 ホオジロ 10
留鳥	シジュウカラ	31 アオジ 10
留鳥	ヒバリ	30 キジ 9
留鳥	ヒヨドリ	30 ダイサギ 9
留鳥	ウグイス	30 イソシギ 8
留鳥	エナガ	30 ジョウビタキ 8
留鳥	メジロ	29 オオヨシキリ 6
留鳥	セッカ	29 カシラダカ 6
留鳥	ムクドリ	28 セッカ 5
留鳥	イソヒヨドリ	26 カワウ 5
留鳥	スズメ	26 コチドリ 5
留鳥	キセキレイ	26 ウグイス 5
留鳥	ハクセキレイ	25 ユリカモメ 4
留鳥	セグロセキレイ	25 メジロ 4
留鳥	カワラヒワ	24 ヒドリガモ 4
留鳥	イカル	24 アオサギ 3
留鳥	ホオジロ	24 キアシシギ 3
冬鳥	ヒドリガモ	23 オナガガモ 3
冬鳥	マガモ	23 ヒメアマツバメ 3
冬鳥	ハンビロガモ	23 セグロカモメ 3
冬鳥	オナガガモ	22 マガモ 2
冬鳥	コガモ	22 コゲラ 2
冬鳥	ミコアイサ	21 ゴイサギ 2
冬鳥	カワアイサ	20 チョウゲンボウ 2
冬鳥	カンムリカイツブリ	18 ヒバリ 2
冬鳥	クイナ	17 ササゴイ 2
冬鳥	オオバン	15 シメ 1
冬鳥	タシギ	12 オオタカ 1
冬鳥	クサシギ	10 オオジュリン 1
冬鳥	ユリカモメ	9 カイツブリ 1
冬鳥	セグロカモメ	7 クイナ 0
冬鳥	ミサゴ	7 タシギ 1
冬鳥	ハイタカ	7 ノビタキ 0
冬鳥	トラフズク	7 ビンズイ 0
冬鳥	アリスイ	6 ベニマシコ 0
冬鳥	ヒレンジャク	5 ハイタカ 0
冬鳥	アカハラ	5 イカル 0
冬鳥	ツグミ	4 ツミ 0
冬鳥	ジョウビタキ	4 ノスリ 0
冬鳥	ピンズイ	3 ハシビロガモ 0
冬鳥	タヒバリ	3 バン 0
冬鳥	アトリ	3 アマツバメ 0
冬鳥	マヒワ	3 エナガ 0
冬鳥	ベニマシコ	3 コムクドリ 0
冬鳥	シメ	3 イソヒヨドリ 0
冬鳥	カシラダカ	2 ミコアイサ 0
冬鳥	ミヤマホオジロ	2 アマサギ 0
冬鳥	アオジ	2 クサシギ 0
冬鳥	オオジュリン	2 コシアカツバメ 0
夏鳥	ササゴイ	2 コヨシキリ 0
夏鳥	ホトギス	2 マヒワ 0
夏鳥	カッコウ	1 カワアイサ 0
夏鳥	コチドリ	1 カンムリカイツブリ 0
夏鳥	ツミ	1 オオバン 0
夏鳥	ツバメ	1 ホトギス 0
夏鳥	コシアカツバメ	1 カッコウ 0
夏鳥	イワツバメ	1 アカエリヒレアシシギ 0
夏鳥	オオヨシキリ	1 ミサゴ 0
旅鳥	アマサギ	1 トラフズク 0
旅鳥	アマツバメ	1 アリスイ 0
旅鳥	キアシシギ	1 ヤマガラ 0
旅鳥	アカエリヒレアシシギ	1 ショウドウツバメ 0
旅鳥	ショウドウツバメ	1 ヒレンジャク 0
旅鳥	コヨシキリ	1 アカハラ 0
旅鳥	コムクドリ	1 ノゴマ 0
旅鳥	ノゴマ	1 アトリ 0
旅鳥	ノビタキ	1 ミヤマホオジロ 0

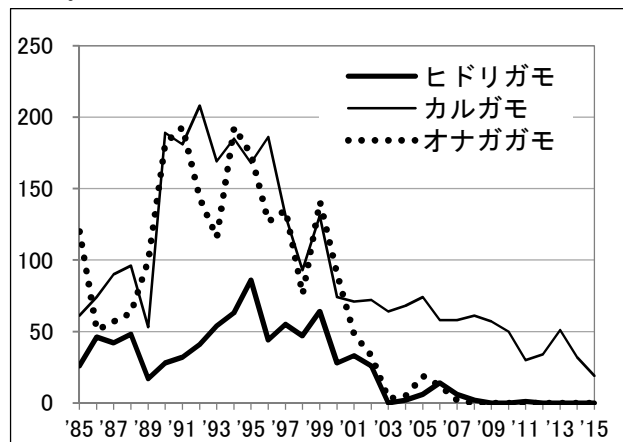
出現羽数は年最大値の年平均、0は1羽未満

(5) 主な野鳥の動向、特徴等

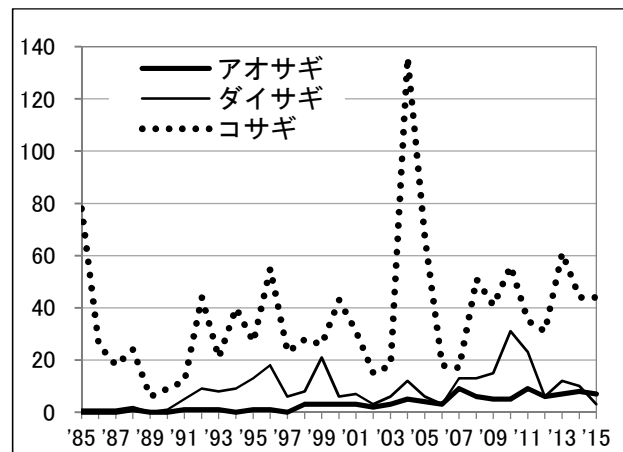
数の多い野鳥3種（スズメ、ムクドリ、コガモ）の動向を下図に示す。スズメは年変動が大きいが、減少傾向である。コガモは大きく数を減らしている。



カモ類3種（カルガモ、オナガガモ、ヒドリガモ）の動向を下図に示す。上記のコガモを含め、大きく数を減らしている。特に、オナガガモとヒドリガモは、2008年以降ほとんど見られなくなった。



サギ3種（コサギ、ダイサギ、アオサギ）の動向を下図に示す。コサギは年変動があるが本コースでは増加傾向である。定期カウント初期には少なかったアオサギが普通に見られるようになった。



（6）特記事項

① 野鳥の観察スポット

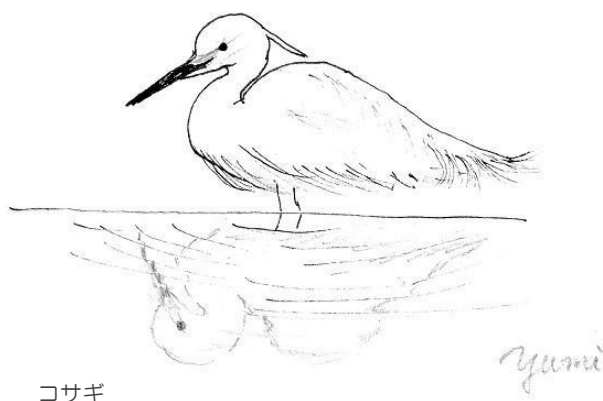
鶴巻橋下流の丸石河原ではイカルチドリが多く、大きな群れも観察されている。萩原橋付近の右岸はこのコースの貴重なワンドでクイナなどが観察される。浅川橋下流の堰と川口川合流点は水鳥が集まる。暁水管橋上では、過去に200羽のコサギ、150羽のユリカモメが並んだこともあり、猛禽が止っていることもある。浅川大橋の橋げたにイワツバメの大きなコロニーがある。

② コサギ、イカルチドリのねぐら

2013年10月元横山公園のヒマラヤスギにねぐら入りするコサギ43羽とダイサギ3羽が確認されたが、2014年7月にねぐらの木が強剪定され、ねぐらが消滅した。2010年9月萩原橋下流の中州でイカルチドリのねぐら入りと思われる行動が確認された。

③ 河川工事、河川敷開発工事

2007年ころから護岸工事が毎年秋から行われている。並行して樹木の伐採工事、浅川ゆったりロードの工事が行われている。川は直線化し砂礫地が多くなり、草原は狭まり木が少なくなった。浅川水管橋付近右岸のワンドがなくなった。



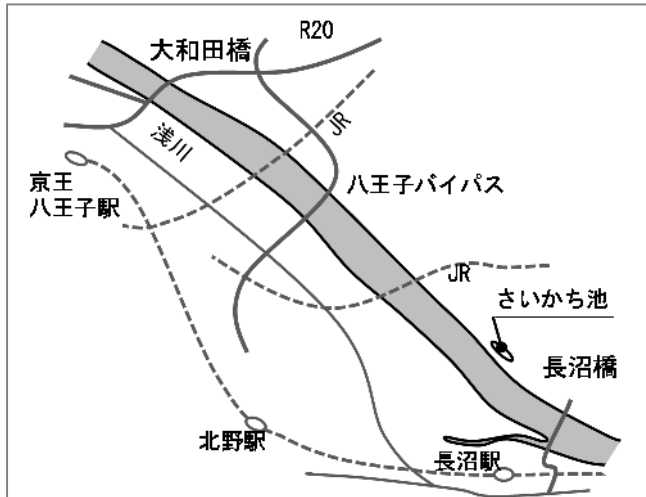
コサギ

5. 浅川（大和田橋～長沼橋）

(1) コースの概要

浅川の大和田橋から長沼橋の区間で、両橋間の直線距離は約 2.5km である。このコースは、浅川の中流域にあたり、河川敷が比較的広い。

この区間で浅川に流入する河川は、長沼橋のすぐ上流右岸で合流する湯殿川、コース中程の水管橋付近右岸で合流する山田川の二つである。



コース概念図

環境的には、砂礫の多い岸边・中州、ヨシ原、草地、河畔林、湿地、構築物など多様である。後述するが、長沼橋上流左岸に位置する通称「さいかち池」は、本コースにおけるハイライトであり、貴重な野鳥生息地である。



長沼橋から上流方向を望む 2014. 6. 14

(2) 調査期間及び担当者

①調査開始年 1986年

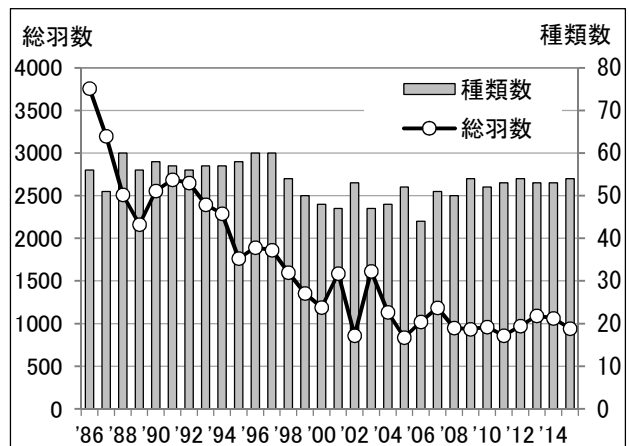
②担当者

1986 粕谷和夫
1987～1992 斎藤高昭

1993 小山万太郎
1994～1998 湯原直彦
1999～2001 新村哲也
2002～現在 佐藤哲郎

(3) 確認された全野鳥の経年変化

本コースの野鳥の経年変化は下図のとおりである。1990年代後半から2000年代前半はやや種類数が落ち込んだが、最近はやや50種台半ばを維持している。一方、最大羽数については、カウント開始以来大きく減少し回復していない。これは、かつて大きな群れが観察されたカモ類やスズメなどの数が大きく減少していることによる。



カウント開始以来、確認された野鳥は99種（外来種、雑種等含まず）にのぼり、多様な生息環境を裏付けている。これは、当会の活動エリアである八王子、日野の両市域で過去に観察された全種類の4割ほどにあたる。

(4) 確認された野鳥の概要

本コースで確認された99種の季節区分、出現年数、羽数は次表の通りである。季節区分の内訳は、留鳥42種、冬鳥37種、夏鳥11種、旅鳥9種、である。それ以外に外来種、雑種等が9種ある。

確認された野鳥の種類数：99種 (1/2)

季節区分別	出現頻度別(年)	出現羽数別(羽)
留鳥 キジ	30 カルガモ	310 スズメ
留鳥 カルガモ	30 コガモ	185 コガモ
留鳥 カイツブリ	30 キジバト	131 カワラヒワ
留鳥 キジバト	30 ダイサギ	106 ムクドリ
留鳥 カワウ	30 コサギ	73 カワウ
留鳥 ゴイサギ	30 イカルチドリ	69 ユリカモメ
留鳥 アオサギ	30 イソシギ	67 カルガモ
留鳥 ダイサギ	30 トビ	66 オナガガモ
留鳥 コサギ	30 モズ	52 ヒヨドリ
留鳥 バン	30 ハシボソガラス	49 ヒドリガモ
留鳥 ヒメアマツバメ	30 ハシブトガラス	42 イワツバメ
留鳥 イカルチドリ	30 シジュウカラ	40 コサギ
留鳥 イソシギ	30 ツバメ	39 ツバメ
留鳥 トビ	30 イワツバメ	37 ホオジロ
留鳥 オオタカ	30 ヒヨドリ	33 ツグミ
留鳥 ノスリ	30 ウグイス	32 ハシブトガラス

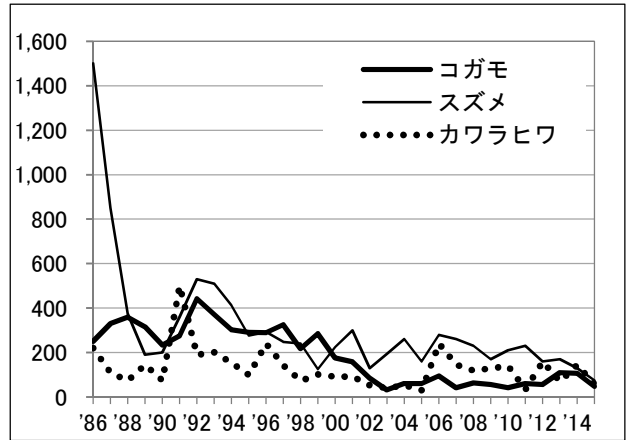
確認された野鳥の種類数：99種 (2/2)

季節区分別	出現頻度別(年)	出現羽数別(羽)	
留鳥	カワセミ	30 ムクドリ	31 キジバト
留鳥	コゲラ	30 ツグミ	27 カシラダカ
留鳥	アカゲラ	30 ジョウビタキ	23 ハシボソガラス
留鳥	アオゲラ	30 スズメ	22 ハクセキレイ
留鳥	チョウゲンボウ	30 キセキレイ	22 タヒバリ
留鳥	モズ	30 ハクセキレイ	18 セグロセキレイ
留鳥	カケス	30 セグロセキレイ	14 シジュウカラ
留鳥	オナガ	30 タヒバリ	13 アオジ
留鳥	ハシボソガラス	30 カワラヒワ	11 ゴイサギ
留鳥	ハシブトガラス	30 ホオジロ	11 ダイサギ
留鳥	シジュウカラ	30 アオジ	11 オナガ
留鳥	ヒバリ	29 カワセミ	11 ハシビロガモ
留鳥	ヒヨドリ	29 コゲラ	10 イカルチドリ
留鳥	ウグイス	29 オナガ	7 アオサギ
留鳥	エナガ	29 シメ	7 イソシギ
留鳥	メジロ	28 アオサギ	6 モズ
留鳥	セッカ	28 コチドリ	6 メジロ
留鳥	ムクドリ	27 チョウゲンボウ	6 ジョウビタキ
留鳥	イソヒヨドリ	27 メジロ	5 ヒバリ
留鳥	スズメ	27 セッカ	5 ヒメアマツバメ
留鳥	キセキレイ	26 カワウ	5 コチドリ
留鳥	ハクセキレイ	26 ヒバリ	5 キセキレイ
留鳥	セグロセキレイ	26 オオヨシキリ	5 キアシシギ
留鳥	カワラヒワ	26 カシラダカ	5 シメ
留鳥	イカル	25 キジ	4 セッカ
留鳥	ホオジロ	25 ゴイサギ	3 セグロカモメ
冬鳥	オンドリ	25 キアシシギ	3 カワセミ
冬鳥	オカヨシガモ	25 セグロカモメ	3 ウグイス
冬鳥	ヨシガモ	24 ヒドリガモ	3 キジ
冬鳥	ヒドリガモ	21 ユリカモメ	3 トビ
冬鳥	マガモ	21 オオタカ	2 コゲラ
冬鳥	ハシビロガモ	18 ハシビロガモ	2 オオヨシキリ
冬鳥	オナガガモ	17 オナガガモ	2 イカル
冬鳥	コガモ	17 タシギ	2 オオジュリン
冬鳥	ホシハジロ	16 ヒメアマツバメ	2 チョウゲンボウ
冬鳥	キンクロハジロ	15 バン	1 ハマシギ
冬鳥	ミコアイサ	13 カイツブリ	1 タシギ
冬鳥	クイナ	12 ノビタキ	1 オカヨシガモ
冬鳥	オオバン	11 マガモ	1 ミコアイサ
冬鳥	タゲリ	10 アカハラ	1 ササゴイ
冬鳥	シロチドリ	9 オカヨシガモ	1 バン
冬鳥	タシギ	8 ササゴイ	1 マガモ
冬鳥	クサシギ	8 ベニマシコ	1 カイツブリ
冬鳥	ハマシギ	8 イカル	1 ベニマシコ
冬鳥	ユリカモメ	8 オオジュリン	1 オオタカ
冬鳥	セグロカモメ	7 クイナ	1 エナガ
冬鳥	ミサゴ	7 クサシギ	1 オオバン
冬鳥	ハイタカ	6 ミコアイサ	1 コムクドリ
冬鳥	ハヤブサ	6 オオバン	1 ノビタキ
冬鳥	シロハラ	6 ハマシギ	0 アマツバメ
冬鳥	アカハラ	6 エナガ	0 クサシギ
冬鳥	ツグミ	5 イソヒヨドリ	0 アカハラ
冬鳥	ジョウビタキ	4 カッコウ	0 クイナ
冬鳥	ビンズイ	4 ハヤブサ	0 ショウドウツバメ
冬鳥	タヒバリ	3 キンクロハジロ	0 マヒワ
冬鳥	マヒワ	3 アマサギ	0 キンクロハジロ
冬鳥	ベニマシコ	3 ホトギス	0 イソヒヨドリ
冬鳥	シメ	3 アマツバメ	0 カッコウ
冬鳥	ホオアカ	3 ノスリ	0 ハヤブサ
冬鳥	カシラダカ	3 コムクドリ	0 シロハラ
冬鳥	ミヤマホオジロ	3 シロハラ	0 ホオアカ
冬鳥	アオジ	3 ホオアカ	0 アマサギ
冬鳥	オオジュリン	2 タゲリ	0 ホトギス
夏鳥	ササゴイ	2 ムナグロ	0 タゲリ
夏鳥	ホトギス	2 カケス	0 ムナグロ
夏鳥	カッコウ	2 マヒワ	0 ノスリ
夏鳥	コチドリ	1 オンドリ	0 シロチドリ
夏鳥	ツミ	1 ヨシガモ	0 カケス
夏鳥	ツバメ	1 ホシハジロ	0 キビタキ
夏鳥	イワツバメ	1 チュウサギ	0 オンドリ
夏鳥	センダイムシクイ	1 シロチドリ	0 ヨシガモ
夏鳥	オオヨシキリ	1 ミサゴ	0 ホシハジロ
夏鳥	コサメビタキ	1 ツミ	0 チュウサギ
夏鳥	キビタキ	1 ハイタカ	0 ミサゴ
旅鳥	アマサギ	1 アカゲラ	0 ツミ
旅鳥	チュウサギ	1 アオゲラ	0 ハイタカ
旅鳥	アマツバメ	1 ショウドウツバメ	0 アカゲラ
旅鳥	ムナグロ	1 センダイムシクイ	0 アオゲラ
旅鳥	キアシシギ	1 コヨシキリ	0 センダイムシクイ
旅鳥	ショウドウツバメ	1 コサメビタキ	0 コヨシキリ
旅鳥	コヨシキリ	1 キビタキ	0 コサメビタキ
旅鳥	コムクドリ	1 ビンズイ	0 ビンズイ
旅鳥	ノビタキ	1 ミヤマホオジロ	0 ミヤマホオジロ

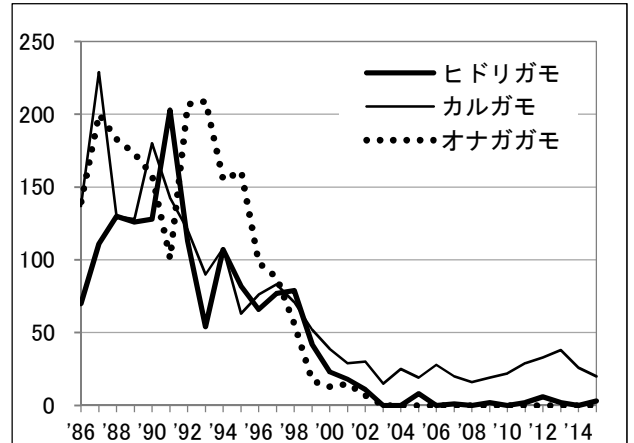
出現羽数は年最大値の年平均、0は1羽未満

(5) 主な野鳥の動向、特徴等

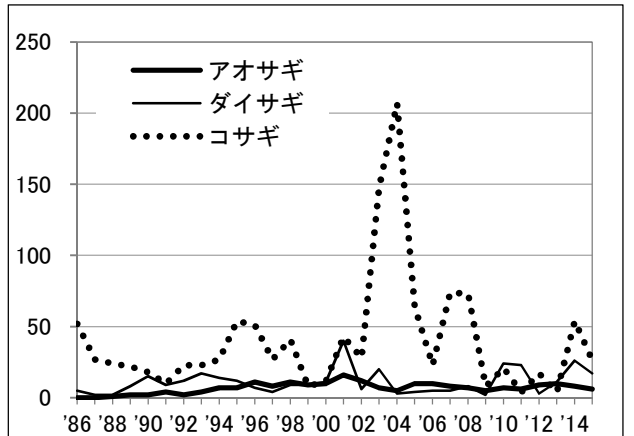
数の多い野鳥3種(スズメ、コガモ、カワラヒワ)の動向を下图に示す。特にスズメ、コガモは大きく数を減らしている。



カモ類3種(カルガモ、ヒドリガモ、オナガガモ)の動向である。ほぼ同様な傾向でいずれも大きく数を減らしている。特にオナガガモはほとんど見られなくなった。カルガモは減少しているものの一定の数を保っている。



サギ類3種(ダイサギ、コサギ、アオサギ)の動向である。コサギは時折大きな群れが観察されるため増減が大きい。2004年には1カ所で179羽の群れが観察された。アオサギはカウント初期には少なかったが、近年はごく普通に観察されるようになった。



(6) 特記事項

①本コースにおける特徴的な場所 ＜通称さいかち池＞

さいかち池は、当会における通称であり、正式名称ではない。浅川の長沼橋上流側左岸にあり、浅川とは土手をはさんで平行に位置する。池は長さ 190m、幅 40m ほどの細長い形状をしている。近くにサイカチの木があるため、当会では「さいかち池」と呼んでいる。

ここはコガモの越冬地となっており、2012～2013 シーズンから 2014～2015 シーズンまで 3 シーズン続けて 100 羽以上を記録した。バンやカイツブリの繁殖も確認されている。



さいかち池航空写真 ©google

池に隣接する林を含め、多様な野鳥が観察され、本コースにおける代表的なスポットである。また、カワセミ会の野鳥サンクチュアリにも指定されている。

池には、ブルーギル、アカミミガメ、ウシガエルなどの外来種も生息している。釣り人もみられ、池の中や周囲の枝には、ルアーや釣り糸などが絡まっており、野鳥への影響が懸念される。

＜大和田橋付近＞

大和田橋は、国道 20 号線（甲州街道）が浅川を渡る地点にあり、交通量も非常に多い。この近くにはワンドがあり、多様な野鳥が見られたが、河川改修等の工事により、現在は消滅している。

橋桁では毎年数十巢のイワツバメの集団営巣が確認され、多くの雛が巣立っている。また、近年市内で繁殖が確認されているイソヒヨドリが見られることもある。

②河川工事等

過去何度も大規模な河川改修が行われており、近年は 2003 年から 2008 年にかけて長沼橋～中央線鉄橋、新浅川橋～八高線鉄橋において度々河川工事が行われた。

北野総合卸売市場前の右岸河川敷は、年末の繁忙期には卸売市場の臨時駐車場となっていたが、河川敷の草地を更地化することによる、冬鳥越冬環境の悪化に懸念を示した当会の要請もあり、2013 年末からは駐車場化は見送られることとなった。

③コースで見られる野鳥の様子

定期カウントでは、概ね夏季に 20 種台後半～30 種前後、冬季に 40 種前後が確認されており、河川域としてはほぼ標準的なものと思われる。

カワセミは、他の河川カウントコース同様ほぼ毎回観察され、代表的な鳥である。また巣穴掘りのような行動も観察されたことがある。

春にはコチドリ、ツバメ、イワツバメなどの夏鳥が渡来し、また 5 月には旅鳥のキアシシギが短期間滞在する。キアシシギは 8 月には再び訪れあわただしく南方へと旅立っていく。旅鳥はほかにコムクドリ、ノビタキなどがあり、渡りの時期に見かけることがある。

繁殖期にはイワツバメ、カラスなどの営巣、子育てが見られ、子連れカルガモも姿を見せることがある。セッカが鳴きながら上空を飛ぶのもこの時期である。

秋には早くも冬鳥のコガモが渡来し、少し遅れてジョウビタキ、ツグミなども見られるようになる。近年はベニマシコもよく見られ、冬枯れの河原に彩りを添える。

猛禽類は多くないが、常に見られるのはトビで、時折チョウゲンボウ、オオタカが見られる。チョウゲンボウは、以前にはこのコース付近で繁殖が確認されたこともある。

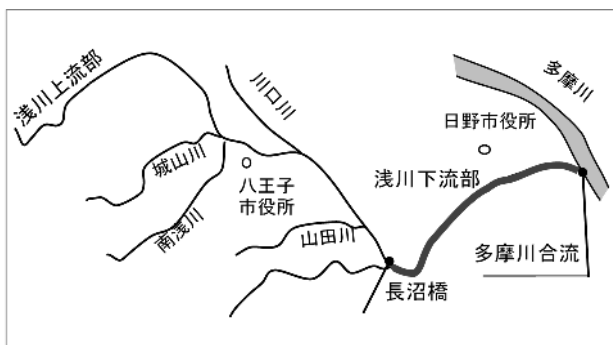
河原で目立つのはキジである。繁殖期には時折「ケーン」という声も聞かれる。1980 年代にはヒバリが多く見られたが、近年では大きく数を減らしている。

Ⅲ. 浅川下流部（長沼橋～多摩川合流）

<調査地区の概要>

浅川下流域は、八王子市と日野市の境界付近に架かる長沼橋から、浅川と多摩川の合流部までの約7kmの区域である。大部分が日野市内を流れる。右岸（南側）は起伏に富んだ多摩丘陵で大部分が住宅地であるが、丘陵地斜面には雑木林も残っている。左岸（北側）は日野台地で浅川との間は、かつては農耕地であったが、都市化が進み住宅地になってきた。この区間の浅川は平坦地を流れ川幅も広い。砂礫地やヨシ原等草地が随所に形成され、小規模だが河畔林もある。

この区間の野鳥の定期カウントは1990年から実施し、2015年までの26年間の記録である。調査区域は「長沼橋～一番橋」と「一番橋～多摩川合流」の2コースに分けて行い、担当者、実施日も異なる。

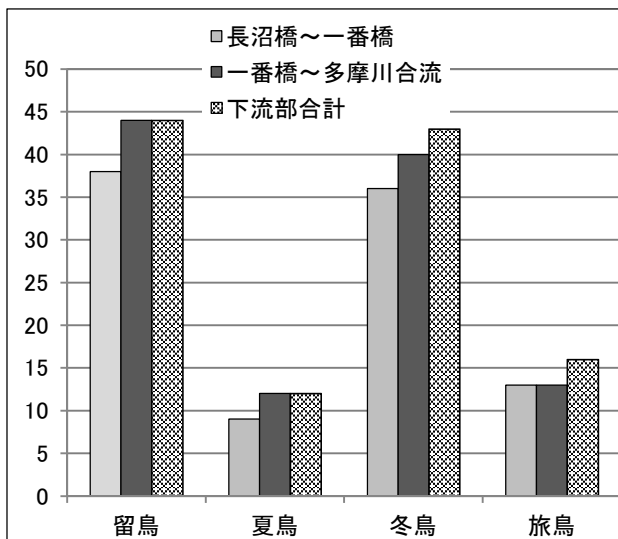


コース概念図

<確認された野鳥の種類>

(1) 野鳥の種類数

季節区分別カウントコース別比較表



浅川下流域で26年間に確認された野鳥（外来種を除く）の種類数は115種である。季節区分別では留鳥44種（39%）、夏鳥12種（10%）、冬鳥43種（38%）、旅鳥16種（14%）である。地区別では、一番橋～多摩川合流が、長沼橋～一番橋より留鳥、夏鳥とも数種多く確認されている。これは、一番橋～多摩川合流は川幅が広く、ヨシ原、河畔林などがあり里山の鳥や旅鳥が飛来するのに適した環境のためと思われる。

浅川下流域で、確認された野鳥の季節区分別の鳥種（115種）は下表の通りである。

	種名
留鳥	キジ、カルガモ、カイツブリ、キジバト、カワウ、ゴイサギ、アオサギ、ダイサギ、コサギ、バン、ヒメアマツバメ、イカルチドリ、イソシギ、トビ、オオタカ、ノスリ、カワセミ、ヤマセミ、コゲラ、アカゲラ、アオゲラ、チョウゲンボウ、モズ、カケス、オナガ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ヤマガラ、シジュウカラ、ヒバリ、ヒヨドリ、ウグイス、エナガ、メジロ、セッカ、ムクドリ、イソヒヨドリ、スズメ、キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、カワラヒワ、イカル、ホオジロ (44種)
夏鳥	ササゴイ、ホトトギス、ツツドリ、カッコウ、コチドリ、ツミ、アオバズク、ツバメ、コシアカツバメ、イワツバメ、オオヨシキリ、キビタキ (12種)
冬鳥	オシドリ、オカヨシガモ、ヨシガモ、ヒドリガモ、アメリカヒドリ、マガモ、ハシビロガモ、オナガガモ、コガモ、キンクロハジロ、ホシハジロ、ミコアイサ、カンムリカイツブリ、クイナ、オオバン、シロチドリ、タシギ、クサシギ、ハマシギ、ウミネコ、ユリカモメ、カモメ、セグロカモメ、オオセグロカモメ、ミサゴ、ハイタカ、アリスイ、ハヤブサ、ヒレンジャク、シロハラ、アカハラ、ツグミ、ジョウビタキ、ビンズイ、タヒバリ、アトリ、マヒワ、ベニマシコ、シメ、ホオアカ、カシラダカ、アオジ、オオジュリン (43種)
旅鳥	シマアジ、アマサギ、チュウサギ、アマツバメ、ムナグロ、セイタカシギ、タカブシギ、キアシシギ、トウネン、アカエリヒレアシシギ、ハチクマ、サシバ、ショウドウツバメ、コヨシキリ、コムクドリ、ノビタキ (16種)

(2) 出現頻度の高い野鳥

浅川下流域で 26 年間毎年確認された野鳥は次表の 36 種である。他に、留鳥のチョウゲンボウ、ヒバリ、エナガ、冬鳥ではヒドリガモが 25 年間観察されている。

	種名
留鳥	キジ、カルガモ、キジバト、カワウ、アオサギ、ダイサギ、コサギ、イカルチドリ、イツシギ、トビ、カワセミ、コゲラ、モズ、オナガ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、セッカ、ムクドリ、スズメ、キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、カワラヒワ、ホオジロ (27 種)
夏鳥	ツバメ、イワツバメ、オオヨシキリ (3 種)
冬鳥	コガモ、ツグミ、ジョウビタキ、タヒバリ、カシラダカ、アオジ (6 種)

(3) 出現羽数が多い野鳥

浅川下流部で出現羽数の多い野鳥は下表の通りである (2 つのコースの年最大羽数の累計値)。

羽数の多い野鳥は、留鳥と冬鳥で上位 10 種を占めている。留鳥では、スズメ、カワウ、カワラヒワが上位 3 種であるが、カワウは大きな群れで飛来した年がありそれが寄与している。冬鳥では、コガモ、ユリカモメ、ヒドリガモが上位 3 種である。これらの冬鳥は、近年浅川への飛来は激減している。このことは、次項で延べる。

	種名	季節区分	年最大羽数の累計	年平均羽数 (羽/26 回)
1	スズメ	留鳥	14,977	576
2	コガモ	冬鳥	9,470	364
3	カワウ	留鳥	6,680	257
4	カワラヒワ	留鳥	5,821	224
5	ムクドリ	留鳥	5,525	213
6	ユリカモメ	冬鳥	4,141	159
7	カルガモ	留鳥	4,093	157
8	ヒドリガモ	冬鳥	3,390	130
9	ヒヨドリ	留鳥	3,361	129
10	オナガガモ	冬鳥	2,946	114

(4) 出現回数が少ない野鳥

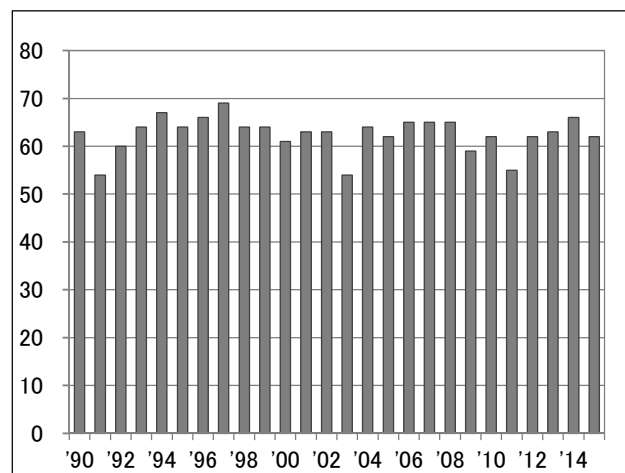
下表の野鳥 16 種は、浅川下流域で 26 年間に 1 回のみ確認した野鳥である。滞留期間の長短や羽数が 1~複数羽の群れもあった。冬鳥と旅鳥が大半で、他のカワセミ会カウントコースと行き来しカウントされている種もある。

	種名
留鳥	ヤマセミ (1 種)
夏鳥	ツツドリ (1 種)
冬鳥	ホシハジロ、カンムリカイツブリ、カモメ、オオセグロカモメ、ホシハジロ、オオバン、アリスイ、アトリ、ヒレンジャク (9 種)
旅鳥	シマアジ、トウネン、セイタカシギ、アカエリヒレアシシギ、ハチクマ (5 種)

<確認された野鳥の年次変動>

(1) 種類数の年次推移

浅川下流部の出現種類数は、下図の通り 60 種前後で大きな変動は見られないが、1991 年、2003 年、2011 年が出現数が例年より若干少ない。これは、河川の大規模改修工事によるものと思われる。2000 年以前は冬季に数多く見られたオナガガモ、ハシビロガモなどカモの仲間、ハマシギやユリカモメなどの飛来する年が少なくなった。一方、コシアカツバメ、ベニマシコ、外来種のカビチョウが毎年確認されるようになったことも特筆される。



種類数の年次変動

(2) 最大羽数の年次推移

下図の通りカウントした羽数は 1993 年をピークに半減した。これは、ピーク年の 1993 年に羽数の多い上位 4 種を、2015 年と比較するとコガモ 1,135 羽から 47 羽、スズメ 730 羽から 346 羽、オナガガモ 370 羽から 0 羽、ユリカモメ 303 羽から 1 羽と激減したことによる。この激減傾向も 2000 年代初めごろから緩和し、この 10 年間は安定している。

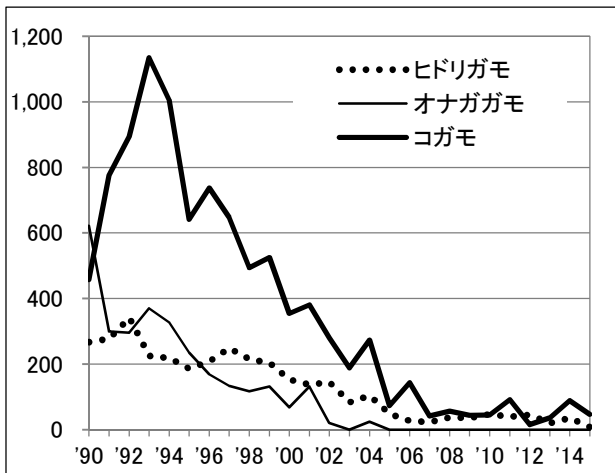


最大羽数の年次推移

(3) 代表的な野鳥の年次推移

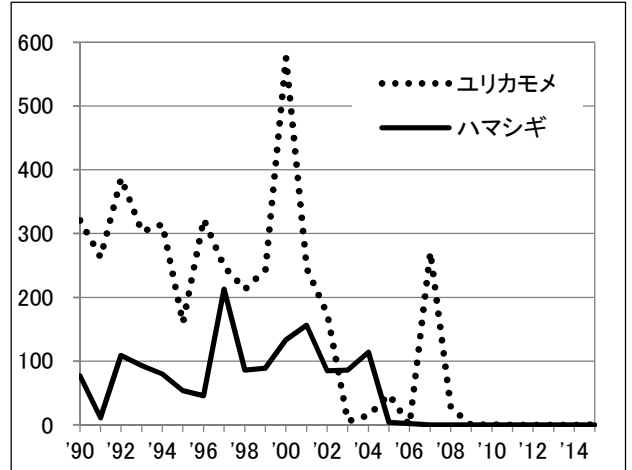
①カモ類（ヒドリガモ、オナガガモ、コガモ）の動向

かつての冬鳥の代表であったカモ類は、下図の通り激減している。オナガガモは、2001 年以降限りなくゼロに近づき、ヒドリガモは 2005 年以降 50 羽以下となり、コガモも 2007 年以降 100 羽以下が続いている。



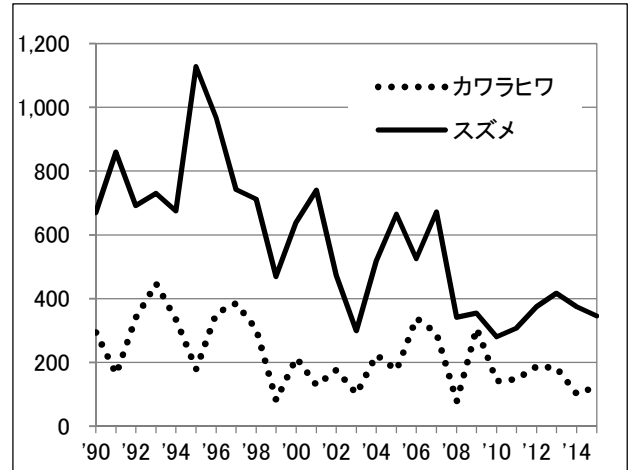
②ハマシギ、ユリカモメの動向

ハマシギは、2000 年始めごろまで 100 羽前後が飛来していたが、2005 年から激減し 2007 年以降は飛来が皆無となった。ユリカモメは、年により飛来数の増減幅が大きかったが、2009 年以降はゼロとなり、浅川では稀に見る鳥になった。



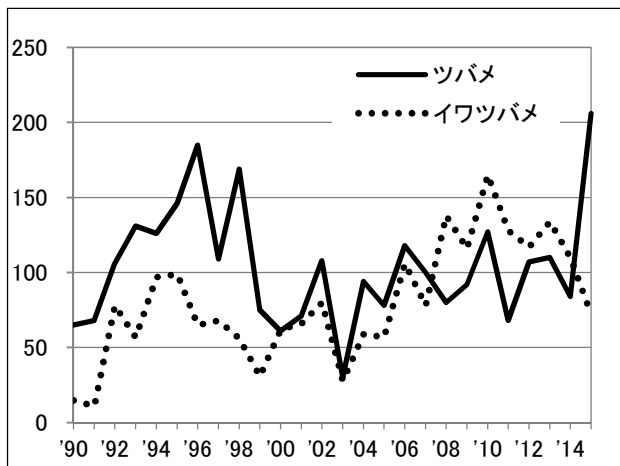
③スズメとカワラヒワの動向

カワラヒワは年により増減があり、データからは若干減少傾向に見える。スズメも年による増減幅が大きく、全体としては半減している。



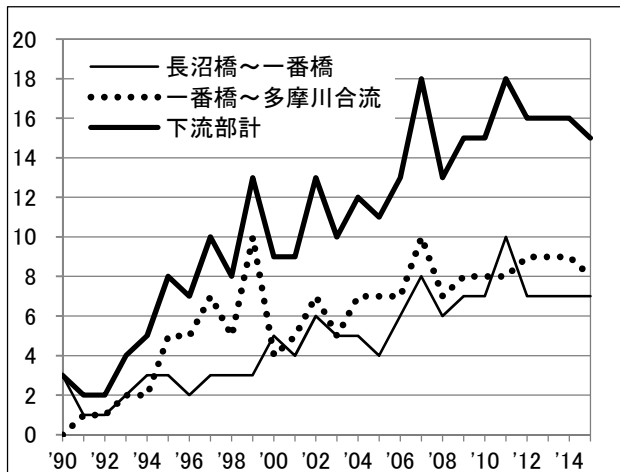
④ツバメとイワツバメ

イワツバメは、高幡橋と一番橋で集団営巣している。次ページのグラフの通り、イワツバメは、2009 年をピークに増加してきたが、その後減少している。巣の数も減少している。ツバメは、年により増減幅が大きい。

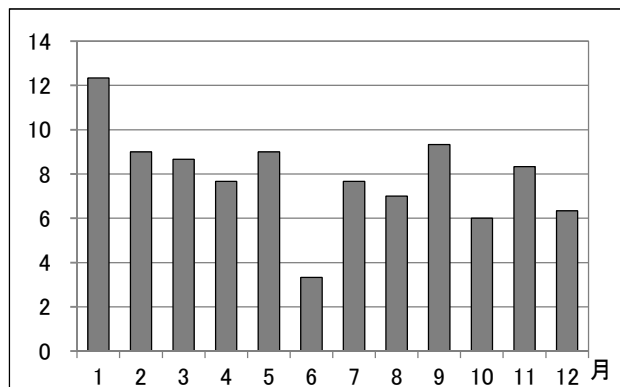


⑤カワセミの動向と季節変化

下図は「日野市の鳥」カワセミの年最大カウント羽数の年次推移である。1990年から増加し、近年下流域で最高16羽前後確認されている。



下の図は、カワセミの2010年から2012年の3年間の月別確認数の平均値である。1月が最高で6月がもっとも少ない。6月は繁殖期で川を離れることが多いため減少したと思われる。

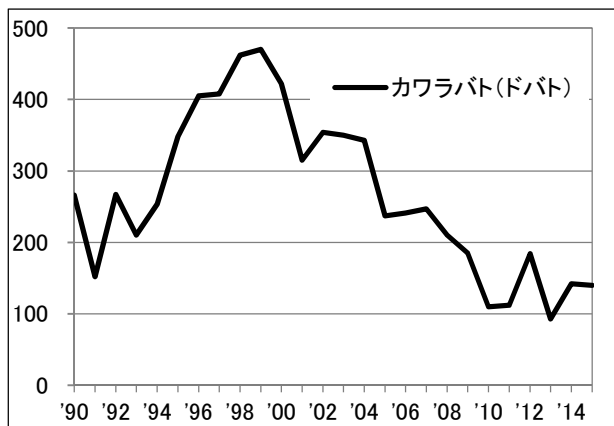


⑥外来種の動向

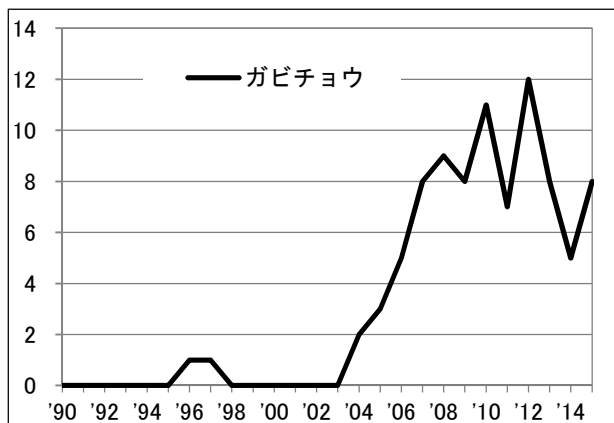
浅川下流部で確認された外来の野鳥は、下表の通り7種である。

種名	初確認	回数	羽数・備考
コジュケイ	1990	毎年	1～数羽
カワラバト (ドバト)	1990	毎月	下図グラフ
セキセイインコ	1991	6回	各回1羽
ガビチョウ	1996	2004～	下図グラフ
ハッカチョウ	1991、1992	2回	各回1羽
ウスユキバト	2010	1回	1羽
バリケン	1998、2000	2回	各回1羽

ウスユキバト、ハッカチョウ、バリケンともごく稀な飛来である。セキセイインコは6回と稀な鳥である。一方、移入後長い年月を経ているコジュケイは毎年1～数羽が確認されている。カワラバト(ドバト)は下図の通りである。特に、羽数の多かった1999年を中心とした10年はエサを与える人が見られたが、最近はいなくなったこととの関係で羽数が減少したと思われる。



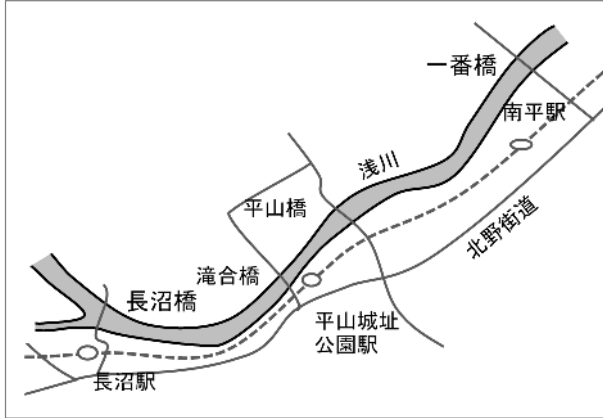
下図の通りガビチョウは、2003年から毎年確認され、増加傾向である。河川敷の笹藪、ヨシ原等に生息し、河川工事などで増減する。



6. 浅川（長沼橋～一番橋）

(1) コースの概要

浅川下流領域の出発地点である八王子市長沼橋から日野市一番橋までの 3.5km が担当地域である。平山橋と一番橋の間で一番橋にごく近い右岸側の湧水は、その量が多いことで知られている。



コース概念図

長沼橋からの右岸は、通路が途中で行き止まりになるため、水門までの往復になるが、左岸のコースから見にくいので追加している。

長沼橋から左岸堤防を前進し、滝合橋を渡って、平山橋まで右岸側を進む。平山橋を渡り終える前に上流側の堰もチェックしている。

平山橋から一番橋までは左岸を進む。右岸側に左岸側からヨシ原等で見えない探鳥スポットがあるので、一番橋で折り返した後、川面のチェックにも気を付けている。



上流側から滝合橋を望む 2015.03.10

(2) 調査期間及び担当者

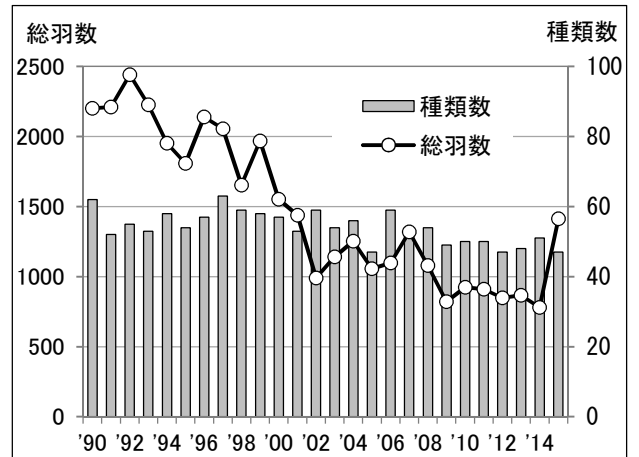
1990年1月から調査を開始し、現在まで26年が経過している。

1990年1月～1992年3月 門口一雄

1992年4月～現在 山崎悠一

(3) 確認された全野鳥の経年変化

単年度毎の種類数は60種前後で大きな増減はないが、総羽数は減少傾向にある。



(4) 確認された野鳥の概要

1990年から2015年までの調査では、96種の野鳥が確認された。

季節区分の内訳は、留鳥38種、冬鳥36種、夏鳥9種、旅鳥13種である。それ以外に、外来種、雑種等が7種観察されている。

確認された野鳥の種類数：96種(1/2)

季節区分別	出現頻度別(年)	出現羽数別(羽)	
留鳥	キジ	26 カルガモ	248 スズメ
留鳥	カルガモ	26 コガモ	160 コガモ
留鳥	カイツブリ	26 キジバト	105 カワウ
留鳥	キジバト	26 カワウ	100 ムクドリ
留鳥	カワウ	26 アオサギ	87 ユリカモメ
留鳥	ゴイサギ	26 ダイサギ	78 カワラヒワ
留鳥	アオサギ	26 コサギ	67 カルガモ
留鳥	ダイサギ	26 イカルチドリ	64 ヒドリガモ
留鳥	コサギ	26 イソシギ	52 コサギ
留鳥	バン	26 トビ	44 オナガガモ
留鳥	ヒメアマツバメ	26 カワセミ	43 ツバメ
留鳥	イカルチドリ	26 コゲラ	42 ヒヨドリ
留鳥	イソシギ	26 モズ	29 イワツバメ
留鳥	トビ	26 オナガ	25 ハマシギ
留鳥	オオタカ	26 ハシボソガラス	24 ハシボソガラス
留鳥	カワセミ	26 ハシブトガラス	20 ホオジロ
留鳥	コゲラ	26 シジュウカラ	19 ハクセキレイ
留鳥	チョウゲンボウ	26 ツバメ	19 ダイサギ
留鳥	モズ	26 イワツバメ	18 キジバト
留鳥	カケス	26 ヒヨドリ	17 セグロセキレイ

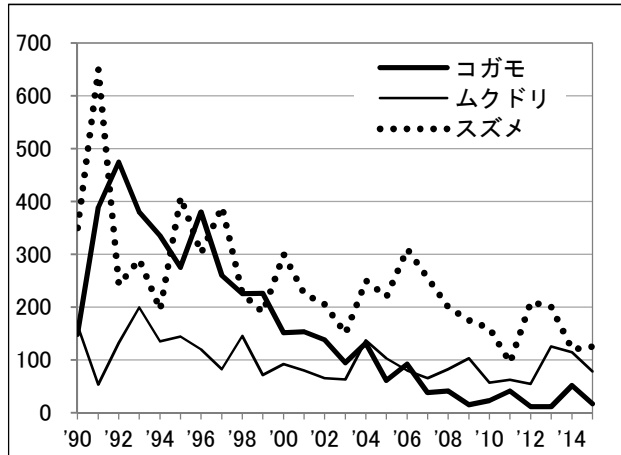
確認された野鳥の種類数：96種(2/2)

季節区分別	出現頻度別(年)	出現羽数別(羽)
留鳥	オナガ	26
留鳥	ハシボソガラス	26
留鳥	ハシブトガラス	26
留鳥	シジュウカラ	26
留鳥	ヒバリ	26
留鳥	ヒヨドリ	26
留鳥	ウグイス	26
留鳥	メジロ	26
留鳥	セッカ	26
留鳥	ムクドリ	26
留鳥	イソヒヨドリ	26
留鳥	スズメ	26
留鳥	キセキレイ	26
留鳥	ハクセキレイ	25
留鳥	セグロセキレイ	25
留鳥	カワラヒワ	25
留鳥	イカル	25
留鳥	ホオジロ	24
冬鳥	オシドリ	23
冬鳥	オカヨシガモ	23
冬鳥	ヨシガモ	23
冬鳥	ヒドリガモ	22
冬鳥	アメリカヒドリ	21
冬鳥	マガモ	21
冬鳥	ハシビロガモ	19
冬鳥	オナガガモ	18
冬鳥	コガモ	18
冬鳥	ホシハジロ	15
冬鳥	ミコアイサ	15
冬鳥	クイナ	15
冬鳥	オオバン	14
冬鳥	シロチドリ	14
冬鳥	タシギ	13
冬鳥	クサシギ	12
冬鳥	ハマシギ	12
冬鳥	ユリカモメ	12
冬鳥	ウミネコ	12
冬鳥	セグロカモメ	8
冬鳥	ミサゴ	8
冬鳥	ハイタカ	7
冬鳥	ハヤブサ	6
冬鳥	ヒレンジャク	6
冬鳥	シロハラ	5
冬鳥	ツグミ	4
冬鳥	ジョウビタキ	4
冬鳥	ビンズイ	4
冬鳥	タヒバリ	4
冬鳥	マヒワ	3
冬鳥	ベニマシコ	3
冬鳥	シメ	2
冬鳥	ホオアカ	2
冬鳥	カシラダカ	2
冬鳥	アオジ	2
冬鳥	オオジュリン	2
夏鳥	ササゴイ	2
夏鳥	ホトギス	2
夏鳥	カッコウ	2
夏鳥	コチドリ	2
夏鳥	ツミ	2
夏鳥	ツバメ	2
夏鳥	コシアカツバメ	2
夏鳥	イワツバメ	1
夏鳥	オオヨシキリ	1
旅鳥	コヨシキリ	1
旅鳥	シマアジ	1
旅鳥	アマツバメ	1
旅鳥	ムナグロ	1
旅鳥	セイタカシギ	1
旅鳥	セイタカシギ	1
旅鳥	タカブシギ	1
旅鳥	キアシシギ	1
旅鳥	トウネン	1
旅鳥	アカエリヒレアシシギ	1
旅鳥	サシバ	1
旅鳥	サシバ	1
旅鳥	シヨウドウツバメ	1
旅鳥	コムクドリ	1
旅鳥	ノビタキ	1
旅鳥	ウグイス	16
旅鳥	ツグミ	13
旅鳥	シジュウカラ	13
旅鳥	タヒバリ	13
旅鳥	ハシブトガラス	12
旅鳥	イカルチドリ	12
旅鳥	ハシビロガモ	10
旅鳥	オナガ	10
旅鳥	アオジ	9
旅鳥	イソシギ	8
旅鳥	カシラダカ	8
旅鳥	モズ	7
旅鳥	ヒメアマツバメ	6
旅鳥	キアシシギ	6
旅鳥	キセキレイ	6
旅鳥	ジョウビタキ	5
旅鳥	コチドリ	5
旅鳥	カワセミ	5
旅鳥	アオサギ	5
旅鳥	セッカ	4
旅鳥	ゴイサギ	4
旅鳥	セグロカモメ	4
旅鳥	メジロ	3
旅鳥	コケラ	3
旅鳥	ヒバリ	3
旅鳥	ミコアイサ	2
旅鳥	キジ	2
旅鳥	コシアカツバメ	2
旅鳥	オオヨシキリ	2
旅鳥	ウグイス	2
旅鳥	トビ	2
旅鳥	シメ	1
旅鳥	カイツブリ	1
旅鳥	マガモ	1
旅鳥	チョウゲンボウ	1
旅鳥	タシギ	1
旅鳥	ヒレンジャク	1
旅鳥	ムナグロ	1
旅鳥	オカヨシガモ	1
旅鳥	シロチドリ	1
旅鳥	ササゴイ	1
旅鳥	オオタカ	0
旅鳥	マヒワ	0
旅鳥	ウミネコ	0
旅鳥	カケス	0
旅鳥	イカル	0
旅鳥	クイナ	0
旅鳥	アマツバメ	0
旅鳥	シヨウドウツバメ	0
旅鳥	オオジュリン	0
旅鳥	クサシギ	0
旅鳥	バン	0
旅鳥	ベニマシコ	0
旅鳥	ヨシガモ	0
旅鳥	ミサゴ	0
旅鳥	ペンマシコ	0
旅鳥	ホオアカ	0
旅鳥	タカブシギ	0
旅鳥	ペンマシコ	0
旅鳥	ヨシガモ	0
旅鳥	ミサゴ	0
旅鳥	アメリカヒドリ	0
旅鳥	ペンマシコ	0
旅鳥	ホオアカ	0
旅鳥	カッコウ	0
旅鳥	タカブシギ	0
旅鳥	コムクドリ	0
旅鳥	ハヤブサ	0
旅鳥	ノビタキ	0
旅鳥	イソヒヨドリ	0
旅鳥	オシドリ	0
旅鳥	オオバン	0
旅鳥	セイタカシギ	0
旅鳥	トウネン	0
旅鳥	アカエリヒレアシシギ	0
旅鳥	ツミ	0
旅鳥	ハイタカ	0
旅鳥	サシバ	0
旅鳥	コヨシキリ	0
旅鳥	ヒレンジャク	0
旅鳥	シロハラ	0
旅鳥	コヨシキリ	0
旅鳥	シロハラ	0

出現羽数は年最大値の年平均、0は1羽未満

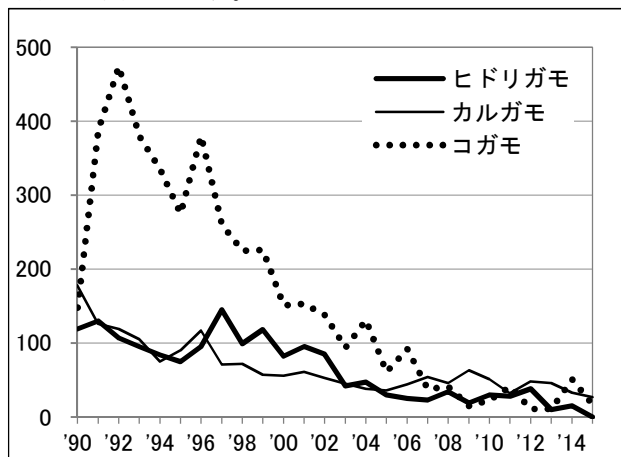
(5) 主な野鳥の動向、特徴等

代表的な野鳥3種のスズメ、コガモ、ムクドリの動向を下图に示す。



代表的な野鳥3種の推移

カモ類3種(コガモ、カルガモ、ヒドリガモ)の動向を下图に示す。



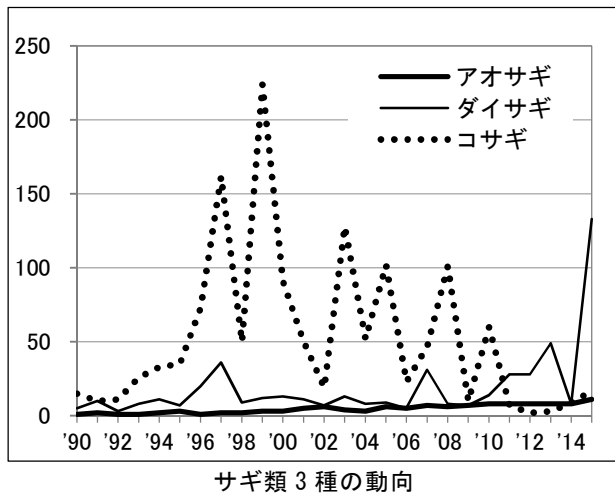
カモ類3種の推移

コガモとヒドリガモは、1990年以降毎年観察されている。

コガモは大きく数を減らしている。カルガモとヒドリガモも減少傾向にある。

1990年～1992年にアメリカコガモ(亜種)が観察されたが1993年以降観察されていない。2002年から2006年までヨシガモが観察されたがその後観察されなくなった。オナガガモとハシビロガモは10羽以上観察された年もあったが、2005年以降は観察されなくなった。ミコアイサは2000年以降、オカヨシガモは1999年以降観察されていない。

サギ類 3 種(ダイサギ、コサギ、アオサギ)の動向を下図に示す。



コサギは時おり大きな群れが観察されるため、増減が大きい。

ゴイサギは 1990 年～1998 年までは多い月には 10 羽以上も観察されたが、1999 年以降は稀にしか観察されていない。ササゴイは 2000 年までは年間に 1 羽程度の頻度で観察されたが、その後、確認されていない。

オオタカ、チョウゲンボウは 1 羽ずつ程度を年に数回の頻度で観察されている。

25 年間に、クイナは 7 回、バンは 5 回、ムナグロは 5～6 羽観察された年が 5 回ある。クサシギも 6 回観察されている。冬季に大きな集団で飛来していたハマシギは、1997 年以降は観察されていない。カワセミはほぼ毎月数羽ずつカウントされている。

外来種等では、セキセイインコやガビチョウ、アヒル、雑種のカモなどが観察されている。

(6) 特記事項

平成 14 年(2002 年)5 月から平成 15 年(2003 年)3 月に長沼橋下流側の堰を崩してブロックを並べるタイプに変更する河川工事が行われた。ほぼ同時期に平山橋下流側の堰のブロック積み直し工事、平成 15 年(2003 年)4 月～6 月に西平山河原の河川工事と集中した。これらの河川工事後、長沼橋と滝合橋の間、右岸側に一ヶ所と左岸側に二ヶ所あった湧水が消滅した。また河川の底に生えていた藻がはぎ取られ、冬季のカモ類飛来数は少なくなった。



浅川にチフチャフ飛来 2007 年

浅川の堤防をほぼ毎日のように散策しているカワセミ会会員の岡本昭子が、チフチャフを見つけた。よく似たウグイスとの違いを見破った観察力、観察眼が素晴らしい。時は 2007 年 1 月 28 日の午前 10 時頃、場所は浅川の一歩橋付近である。

その後、連日観察を続け、図鑑での確認と写真家の K 氏やその友人 O 氏に確認していただきチフチャフと同定した。2 月 2 日、3 日と見られたが、4 日から見られなくなった。その後毎日 9 時頃から 13 時頃まで観察を続けたが姿を現さないため 2 月末で観察を中止した。

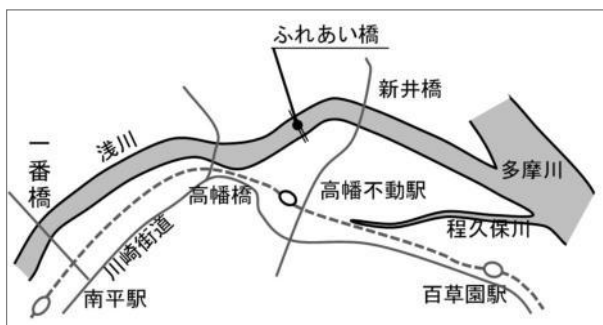
このことを聞いていた粕谷は 3 月 3 日に現場に行ってみると、そこにチフチャフがいたので直ちに岡本夫妻に連絡した。チフチャフはこの年、1 ヶ月半以上は浅川の河原に留まっていたものと思われる。(本件は会報かわせみ第 40 号・2008 年春号からの要約である)

7. 浅川（一番橋～多摩川合流）

（1）コースの概要

日野市東豊田の浅川に架かる一番橋から、主に右岸の堤防の上を進み、浅川が多摩川と合流する地点までの区間約3kmがカウントコースである。その間に高幡橋、ふれあい橋、新井橋の3つの橋がある。浅川の最下流域に位置し川幅は約150～200mと広く、両岸は堤防が完備している。河川改修工事が毎年のようにどこかで行われている。低水路と堤防本体の間に高水敷が造成され草地となっている。カウントコースには支流からの合流はないが、用水路からの合流が数か所ある。取水堰は向島用水の堰がふれあい橋の上流100m付近にある。

周辺の土地利用は、大半が住宅街で所々に神社、市民プール、小公園、学校や清掃工場があり樹木が点在する。堤防の上は遊歩道で散歩、ジョギング、自転車等の利用者が多い。2014年現在、多摩川との合流部付近に河畔林がある。



コース概念図



多摩川との合流付近の河畔林 2015.6

（2）調査期間及び担当者

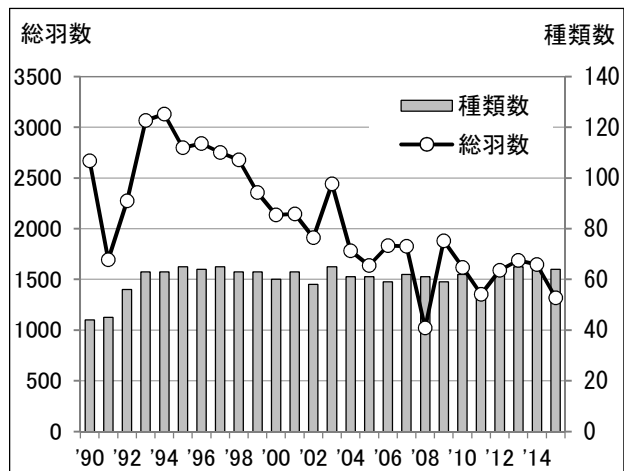
カウント開始は1990年1月で、2015年12月までの26年間実施している。これまで5人が担当している。各月のカウントは2009年からは数名で行われている。

1990～1992年 阿江範彦
 1993年 馬場裕
 1994～2000年 阿江範彦
 2001年～2008年 阿江範彦、門口一雄
 2009年～現在 門口一雄

注)1月は、冬鳥一斉調査の結果を準用する。

（3）確認された全野鳥の経年変化

下のグラフの通り、確認羽数は1994年をピークに半減している。特に1994年から1999年まで激減している。これは、スズメやカモの仲間が大幅に減少したことが影響している。種類数は1993年以降65種前後でほぼ一定している。



（4）確認された野鳥の概要

確認した野鳥の種類及び羽数、季節区分、出現頻度は次ページの表の通りである。1990年～2015年の26年間に109種確認した。

季節区分別では留鳥が44種(40%)、冬鳥が40種(37%)、夏鳥が12種(11%)、旅鳥が13種(12%)である。

出現頻度別に見ると、毎年確認される鳥は34種で、留鳥はキジ、カルガモ、キジバト、カワウ、アオサギ、ダイサギ等26種、冬鳥は、コガモ、ツグミ、ジョウビタキ、タヒバリ、カシラダカ、アオジの6種、夏鳥はツバメ、オオヨシキリの2種であったが、1991年からコシアカツバメ、1992年からイワツバメが毎年観察されている。

羽数の多い種は、スズメ、コガモ、カワウ、カワラヒワ、ムクドリ、カルガモ、ヒヨドリが上位7で、26年間平均羽数は80羽を超える。コガモ以外は留鳥である。夏鳥では、ツバメ、イワツバメがこのエリアでは多い。冬鳥は40種と種類数が多いが、近年カモの仲間が減少したこともあり、それぞれの羽数は少ない。旅鳥では、キアシシギとムナグロが毎夏渡来するが少ない。

確認された野鳥の種類数：109種（1/2）

季節区分別	出現頻度別(年)	出現羽数別(羽)
留鳥	キジ	26
留鳥	カルガモ	26
留鳥	カイツブリ	26
留鳥	キジバト	26
留鳥	カワウ	26
留鳥	ゴイサギ	26
留鳥	アオサギ	26
留鳥	ダイサギ	26
留鳥	コサギ	26
留鳥	イカルチドリ	26
留鳥	バン	26
留鳥	ヒメアマツバメ	26
留鳥	イカルチドリ	26
留鳥	イソシギ	26
留鳥	トビ	26
留鳥	オオタカ	26
留鳥	ノスリ	26
留鳥	カワセミ	26
留鳥	ヤマセミ	26
留鳥	コゲラ	26
留鳥	アカゲラ	26
留鳥	アオゲラ	26
留鳥	チョウゲンボウ	26
留鳥	モズ	26
留鳥	カケス	26
留鳥	オナガ	26
留鳥	ハシブトガラス	26
留鳥	ハシブトガラス	26
留鳥	ヤマガラ	26
留鳥	シジュウカラ	26
留鳥	ヒバリ	26
留鳥	ヒヨドリ	26
留鳥	ウグイス	26
留鳥	エナガ	26
留鳥	メジロ	26
留鳥	セッカ	25
留鳥	ムクドリ	25
留鳥	イソヒヨドリ	25
留鳥	スズメ	25
留鳥	キセキレイ	25
留鳥	ハクセキレイ	25
留鳥	セグロセキレイ	24
留鳥	カワラヒワ	24
留鳥	イカル	23
留鳥	ホオジロ	23
冬鳥	オシドリ	23
冬鳥	オカヨシガモ	21
冬鳥	ヨシガモ	20
冬鳥	ヒドリガモ	19
冬鳥	アメリカヒドリ	19
冬鳥	マガモ	18
冬鳥	ハシビロガモ	17
冬鳥	オナガガモ	17
冬鳥	コガモ	15
冬鳥	キンクロハジロ	15
冬鳥	ミコアイサ	15
冬鳥	カンムリカイツブリ	14
冬鳥	クイナ	14
冬鳥	オオバン	14
冬鳥	シロチドリ	12
冬鳥	タシギ	11
冬鳥	クサシギ	10
冬鳥	ハマシギ	10
冬鳥	ユリカモメ	9
冬鳥	カモメ	9
冬鳥	セグロカモメ	9
冬鳥	オオセグロカモメ	8
冬鳥	ミサゴ	6
冬鳥	ハイタカ	6
冬鳥	アリスイ	6
冬鳥	ハヤブサ	6
冬鳥	シロハラ	5
冬鳥	アカハラ	5
冬鳥	ツグミ	5
冬鳥	ジョウビタキ	5
冬鳥	ビンズイ	5
冬鳥	タヒバリ	5
冬鳥	アトリ	5
冬鳥	マヒワ	5
冬鳥	ベニマシコ	5
冬鳥	シメ	4
冬鳥	ホオアカ	4
冬鳥	カシラダカ	4
冬鳥	アオジ	4
冬鳥	オオジュリン	4
夏鳥	ササゴイ	3
夏鳥	スズメ	333
夏鳥	コガモ	205
夏鳥	カワウ	167
夏鳥	カワラヒワ	147
夏鳥	ムクドリ	116
夏鳥	カルガモ	91
夏鳥	ヒヨドリ	88
夏鳥	ユリカモメ	76
夏鳥	オナガガモ	71
夏鳥	ヒドリガモ	66
夏鳥	ツバメ	64
夏鳥	イワツバメ	57
夏鳥	コサギ	54
夏鳥	ホオジロ	46
夏鳥	キジバト	34
夏鳥	ハシブトガラス	33
夏鳥	ツグミ	33
夏鳥	ハマシギ	30
夏鳥	ハクセキレイ	28
夏鳥	シジュウカラ	22
夏鳥	セグロセキレイ	21
夏鳥	イカルチドリ	20
夏鳥	ダイサギ	17
夏鳥	タヒバリ	17
夏鳥	ハシブトガラス	16
夏鳥	アオジ	15
夏鳥	カシラダカ	13
夏鳥	オナガ	11
夏鳥	セッカ	11
夏鳥	イソシギ	11
夏鳥	ヒメアマツバメ	11
夏鳥	アオサギ	10
夏鳥	キアシシギ	10
夏鳥	モズ	10
夏鳥	メジロ	10
夏鳥	ヒバリ	8
夏鳥	ムナグロ	8
夏鳥	ジョウビタキ	7
夏鳥	コシアカツバメ	7
夏鳥	マガモ	7
夏鳥	カワセミ	6
夏鳥	ハシビロガモ	6
夏鳥	キセキレイ	6
夏鳥	キジ	5
夏鳥	ゴイサギ	5
夏鳥	ウグイス	4
夏鳥	コチドリ	4
夏鳥	トビ	4
夏鳥	エナガ	4
夏鳥	シメ	4
夏鳥	オオヨシキリ	3
夏鳥	オオジュリン	3
夏鳥	コゲラ	3
夏鳥	セグロカモメ	3
夏鳥	サシバ	2
夏鳥	チョウゲンボウ	2
夏鳥	タシギ	2
夏鳥	カイツブリ	2
夏鳥	ミコアイサ	2
夏鳥	クサシギ	1
夏鳥	ベニマシコ	1
夏鳥	マヒワ	1
夏鳥	ビンズイ	1
夏鳥	イカル	1
夏鳥	ノスリ	1
夏鳥	クサシギ	1
夏鳥	キンクロハジロ	1
夏鳥	オカヨシガモ	1
夏鳥	ササゴイ	1
夏鳥	クイナ	0
夏鳥	アマツバメ	0
夏鳥	ハヤブサ	0
夏鳥	ショウドウツバメ	0
夏鳥	ノビタキ	0
夏鳥	アオバズク	0
夏鳥	ツミ	0
夏鳥	バン	0
夏鳥	ツツドリ	0
夏鳥	カケス	0
夏鳥	ヤマガラ	0
夏鳥	シロハラ	0
夏鳥	アカハラ	0
夏鳥	アメリカヒドリ	0
夏鳥	チュウサギ	0

確認された野鳥の種類数：109種（2/2）

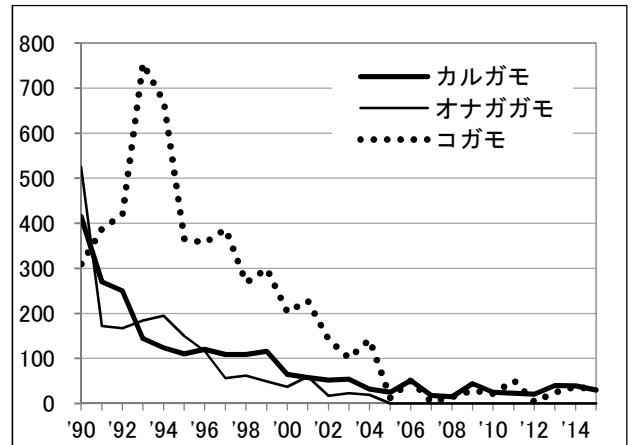
季節区分別	出現頻度別(年)	出現羽数別(羽)
夏鳥	ホトギス	3
夏鳥	ツツドリ	3
夏鳥	カッコウ	3
夏鳥	コチドリ	2
留鳥	ツミ	2
夏鳥	アオバズク	2
夏鳥	ツバメ	2
夏鳥	コシアカツバメ	2
夏鳥	イワツバメ	2
夏鳥	オオヨシキリ	2
夏鳥	キビタキ	2
旅鳥	アマサギ	2
旅鳥	チュウサギ	1
旅鳥	アマツバメ	1
旅鳥	ムナグロ	1
旅鳥	セイタカシギ	1
旅鳥	キアシシギ	1
旅鳥	トウネン	1
旅鳥	ハチクマ	1
旅鳥	サシバ	1
旅鳥	ショウドウツバメ	1
旅鳥	コヨシキリ	1
旅鳥	コムクドリ	1
旅鳥	ノビタキ	1
夏鳥	アオバズク	0
夏鳥	アオゲラ	0
夏鳥	ホオアカ	0
夏鳥	オシドリ	0
夏鳥	アメリカヒドリ	0
夏鳥	アマサギ	0
夏鳥	インヒヨドリ	0
夏鳥	カッコウ	0
夏鳥	アオゲラ	0
夏鳥	オシドリ	0
夏鳥	オオバン	0
夏鳥	オオセグロカモメ	0
夏鳥	アカゲラ	0
夏鳥	コヨシキリ	0
夏鳥	オオセグロカモメ	0
夏鳥	ヨシガモ	0
夏鳥	カンムリカイツブリ	0
夏鳥	シロチドリ	0
夏鳥	セイタカシギ	0
夏鳥	シロチドリ	0
夏鳥	セイタカシギ	0
夏鳥	トウネン	0
夏鳥	カモメ	0
夏鳥	オオセグロカモメ	0
夏鳥	カモメ	0
夏鳥	ハチクマ	0
夏鳥	ヤマセミ	0
夏鳥	アリスイ	0
夏鳥	アトリ	0

出現羽数は年最大値の年平均、0は1羽未満

(5) 主な野鳥の動向、特徴等

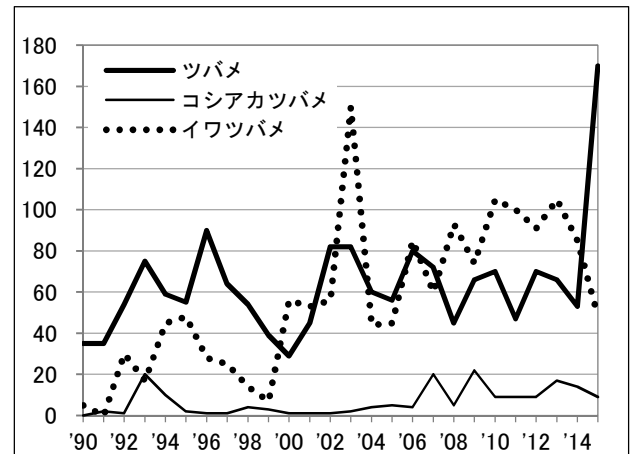
①カモの仲間の減少

かつては多かったコガモ、カルガモ、オナガガモが著しく減少した。



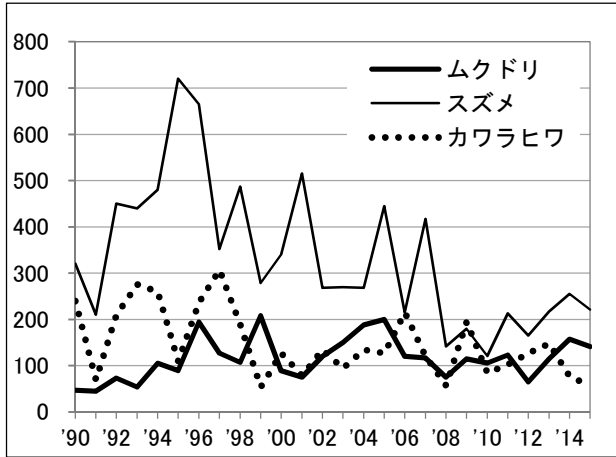
②ツバメの仲間の営巣

コシアカツバメが川の近くの団地の階段踊場、イワツバメが一番橋と高幡橋、ツバメは各所で営巣し、ツバメの仲間3種が繁殖している。



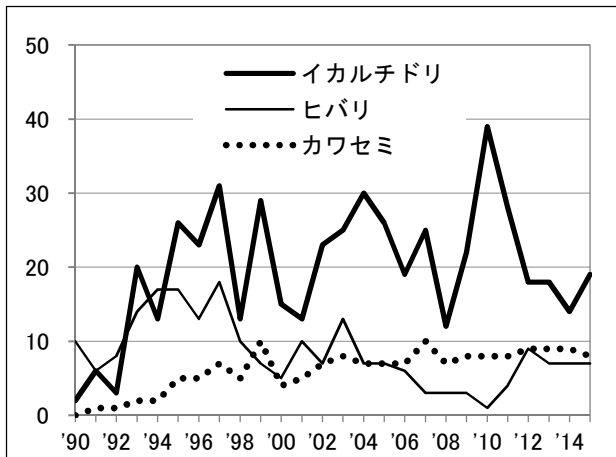
③出現率、羽数の多いスズメ、ムクドリ、カワラヒワの動向

スズメは半減しているが、ムクドリ、カワラヒワは増減が少ない。



④動向が気になるイカルチドリ、ヒバリ、カワセミ

イカルチドリは、工事や大雨による氾濫で丸石河原の消失、復元等により増減幅が大きい。ヒバリは、川の周りの農地や草地の減少により減少傾向である。カワセミは、20年前の5羽未満から近年は8~9羽と若干増えている。



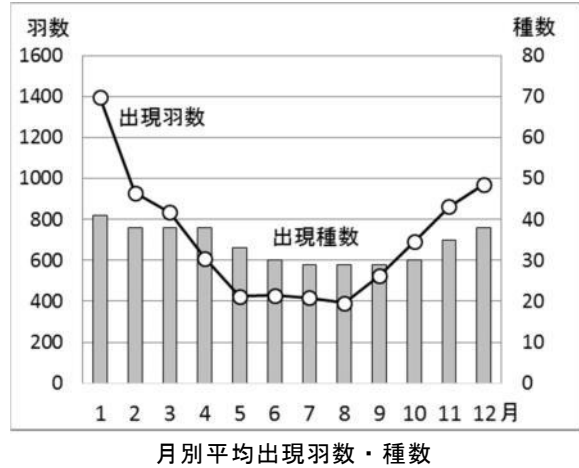
(6) 特記事項

①希少種・迷鳥

このコースは、希少種、迷鳥などの渡来は55頁の「確認された野鳥の種類数」の表「出現頻度1年」に掲載の鳥の他、鳥信の記録ではツバメチドリ(1989.7)、アカエリカイツブリ(1993.11)、ヤツガシラ(1994.4)、亜種ホオジロハクセキレイ(2005.10)、セグロアジサシ(2007.7)、コホオアカ(2010.1)、ケリ(2013.4)の記録がある。

②季節変化

羽数の確認数は11月から翌年3月が多く、5月から8月が少ない。種類数では11月から4月が35種を数え、7月から9月が30種未満と少ない。



③探鳥スポット

野鳥のよく集まる場所は、浅川と多摩川の合流付近、日野高校前付近、ふれあい橋上下流付近、日野市民プール前付近、一番橋下流付近などである。河川改修工事や大雨により草地、中州の消滅や新規形成によりスポットは移り変わる。

④人間との関係

1990年代には、ふれあい橋等でカワラバト(ドバト)、一番橋下流では冬季にオナガガモ、ヒドリガモ、コガモ、カルガモ等に給餌する人がいたが現在は見られなくなった。また、川の近くの団地最上階階段踊場に巣を作ったコシアカツバメは、フン害から再三巣を撤去されたり、進入を妨げるテープなどが張られている。

⑤外来種の動向

コジュケイは1、2か所の藪で鳴き声が聞かれ一定している。一方、ガビチョウは2004年から確認され、普通に見られるようになったが、羽数は少ない。カワラバト(ドバト)は給餌等で確認羽数は増減する。

⑥右岸一番橋下流のワンド

右岸の一番橋下流に大きなワンドがあり、多くの野鳥が飛来していたが、河川改修工事で消滅してしまった。

IV. 浅川支流（川口川、湯殿川）

8. 川口川（川口橋～明治橋）

（1）コースの概要

このコースは、川口川の中に位置した約3kmの区域で川口町から犬目町を流れている川口川に沿った所である。最近住宅化が進み竹林や雑木林が次々と姿を消し野鳥にとって住みにくい所となりつつある。

川口橋から駒形橋までは水は流れているが流れは細く、晴天が続くと干上がってしまう。

川幅は20m程で兩岸が歩け、適宜二手に分かれて情報を伝え合ってカウントを進めている。



コース概念図



川口川・宮田橋から上流を望む 2015.4.6

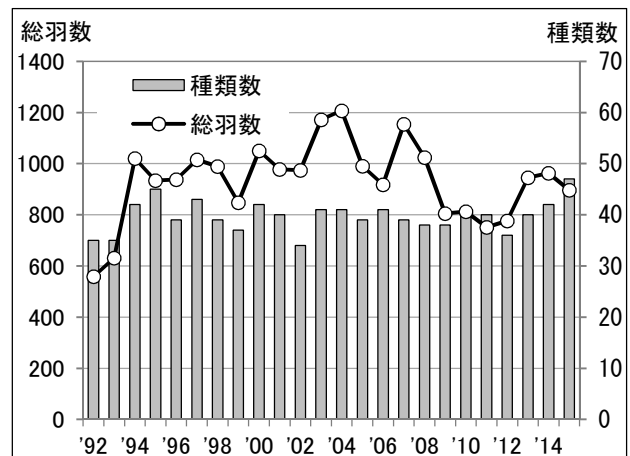
（2）調査期間及び担当者

1992年1月から調査を開始し、2015年12月まで24年経過している。

1992年～1993年 関根伸一
 1994年 大関豊
 1995年 粕谷和夫
 1996年～2002年 鈴木章七
 2003年～2008年 杉森ユリ
 2009年～現在 内藤公三

（3）確認された全野鳥の経年変化

各年の種類数は34種（2002年）から47種（2015年）までの間に変化しているが経年的には大きな増減は少なく推移している。一方、羽数は2004年の1,207羽をピークに減少傾向にあり、2015年は2004年の74%の水準に減少した。



（4）確認された野鳥の概要

確認された野鳥の種類数は74種、これにコジュケイ、カワラバト（ドバト）、ガビチョウの外来種3種を加えると77種である（次表）。このコースでは他に雑種ガモ、アヒル、ガチョウも記録された。

留鳥が最も多く40種（54%）、次いで冬鳥23種（31%）、夏鳥9種（12%）、旅鳥2種（3%）の順である。出現頻度では24年（毎年）観察された種が24種、1回しか観察されなかった種が7種であった。

羽数が多かった上位10種を多い順に並べるとスズメ、ムクドリ、ヒヨドリ、ツバメ、カルガモ、カワラヒワ、コガモ、キジバト、ハシボソガラス、オナガである。

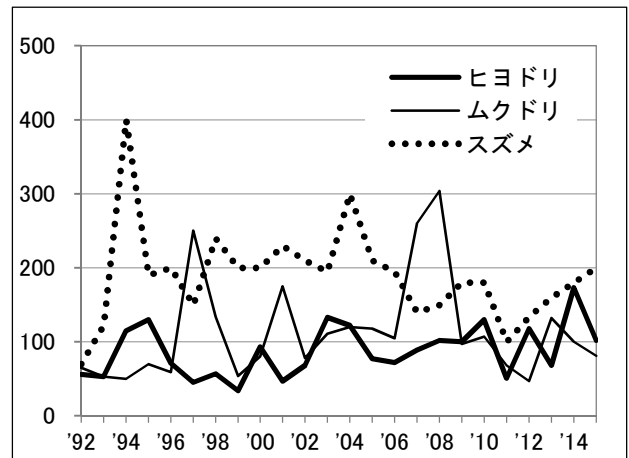
確認された野鳥の種類数：74種

季節区分別	出現頻度別(年)	出現羽数別(羽)
留鳥	キジ	24 カルガモ 189
留鳥	カルガモ	24 コガモ 113
留鳥	キジバト	24 キジバト 88
留鳥	カワウ	24 コサギ 73
留鳥	ゴイサギ	24 カワセミ 69
留鳥	アオサギ	24 コゲラ 56
留鳥	ダイサギ	24 モズ 51
留鳥	コサギ	24 オナガ 32
留鳥	バン	24 ハシボソガラス 30
留鳥	ヒメアマツバメ	24 ハシブトガラス 29
留鳥	イカルチドリ	24 シジュウカラ 20
留鳥	イソシギ	24 ツバメ 19
留鳥	トビ	24 ヒヨドリ 16
留鳥	オオタカ	24 ウグイス 13
留鳥	ノスリ	24 メジロ 12
留鳥	カワセミ	24 ムクドリ 11
留鳥	コゲラ	24 ツグミ 10
留鳥	アオゲラ	24 ジョウビタキ 9
留鳥	チョウゲンボウ	24 スズメ 8
留鳥	モズ	24 キセキレイ 8
留鳥	カケス	24 ハクセキレイ 7
留鳥	オナガ	24 セグロセキレイ 6
留鳥	ハシボソガラス	24 カワラヒワ 6
留鳥	ハシブトガラス	24 アオジ 6
留鳥	ヤマガラ	23 ダイサギ 5
留鳥	シジュウカラ	21 アオサギ 4
留鳥	ヒヨドリ	21 トビ 4
留鳥	ウグイス	21 ホオジロ 4
留鳥	エナガ	19 マガモ 3
留鳥	メジロ	19 カワウ 3
留鳥	ミソサザイ	19 シメ 3
留鳥	ムクドリ	17 ホトトギス 2
留鳥	カワガラス	17 エナガ 2
留鳥	スズメ	15 タヒバリ 2
留鳥	キセキレイ	15 カシラダカ 2
留鳥	ハクセキレイ	14 アオゲラ 2
留鳥	セグロセキレイ	13 キジ 1
留鳥	カワラヒワ	13 ゴイサギ 1
留鳥	イカル	11 オオタカ 1
留鳥	ホオジロ	10 ノスリ 1
冬鳥	ヨシガモ	9 カケス 1
冬鳥	ヒドリガモ	8 チョウゲンボウ 1
冬鳥	マガモ	8 イカル 1
冬鳥	オナガガモ	7 ツミ 1
冬鳥	コガモ	6 オナガガモ 1
冬鳥	クイナ	5 クイナ 1
冬鳥	クサシギ	5 シロハラ 1
冬鳥	ユリカモメ	4 イカルチドリ 0
冬鳥	ハイタカ	4 イワツバメ 0
冬鳥	アリスイ	4 ビンズイ 0
冬鳥	シロハラ	3 バン 0
冬鳥	アカハラ	3 ヒメアマツバメ 0
冬鳥	ツグミ	3 コチドリ 0
冬鳥	ルリビタキ	3 イソシギ 0
冬鳥	ジョウビタキ	3 ヤマガラ 0
冬鳥	ビンズイ	3 オオヨシキリ 0
冬鳥	タヒバリ	3 アカハラ 0
冬鳥	マヒワ	3 マヒワ 0
冬鳥	ウソ	2 ヨシガモ 0
冬鳥	シメ	2 ヒドリガモ 0
冬鳥	カシラダカ	2 ササゴイ 0
冬鳥	アオジ	2 カッコウ 0
冬鳥	クロジ	2 ユリカモメ 0
夏鳥	ササゴイ	2 ハイタカ 0
夏鳥	ホトトギス	2 サシバ 0
夏鳥	カッコウ	2 ミソサザイ 0
夏鳥	コチドリ	2 ウソ 0
夏鳥	ツミ	1 アマツバメ 0
夏鳥	ツバメ	1 クサシギ 0
夏鳥	イワツバメ	1 アリスイ 0
夏鳥	オオヨシキリ	1 カワガラス 0
夏鳥	キビタキ	1 ルリビタキ 0
旅鳥	アマツバメ	1 キビタキ 0
旅鳥	サシバ	1 クロジ 0

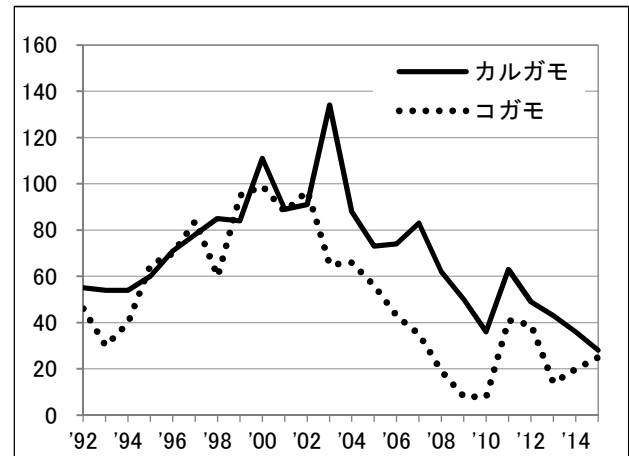
出現羽数は年最大値の年平均、0は1羽未満

(5) 主な野鳥の動向、特徴等

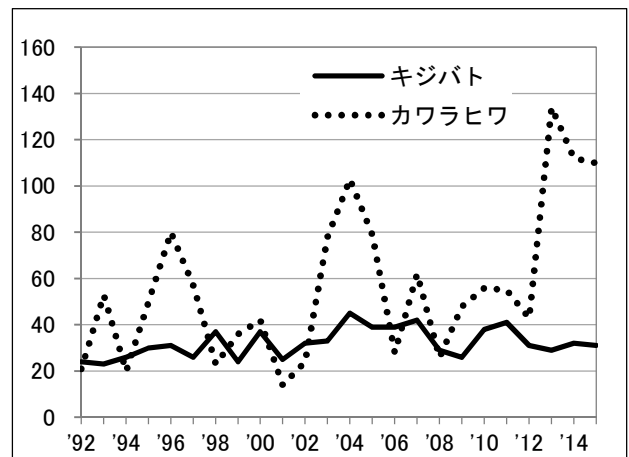
羽数の多い上位3種の経年変化は、下のグラフのとおりで、3種とも年次変動が大きく一定の傾向が読み取れない。



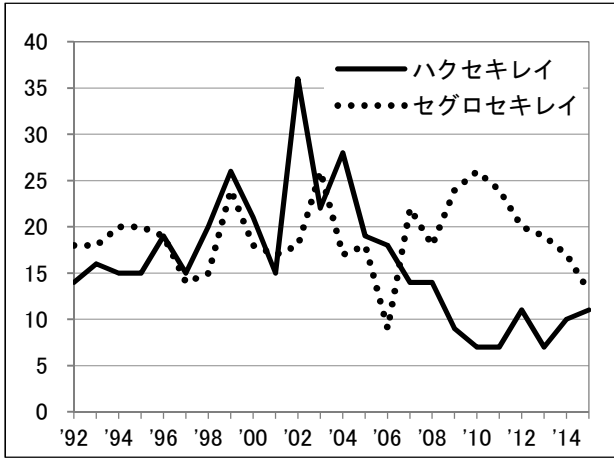
カルガモ、コガモのカモ2種の経年変化は、下のグラフのとおりで、2000年代初頭以降は減少傾向にある。



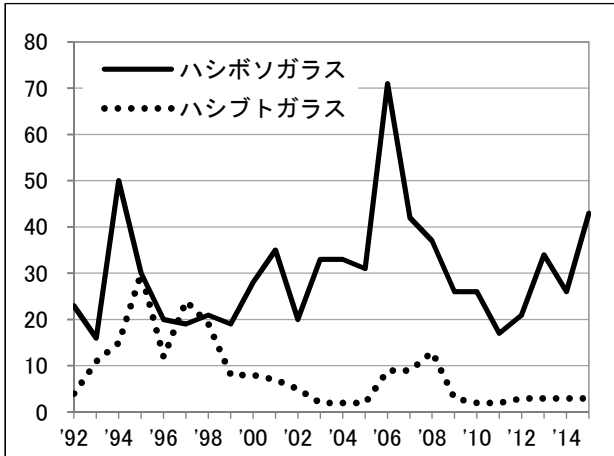
留鳥のカワラヒワ、キジバト2種の経年変化は、以下のグラフのとおりで、カワラヒワが増加傾向にある。



セキレイの仲間でハクセキレイ、セグロセキレイ 2種の経年変化は、下のグラフのとおり。2000年代初頭以降、ハクセキレイは減少傾向にある。



カラス 2種を比較すると、このコースではハシボソガラスが多数を占めている。



(6) 特記事項

このコースではスズメの羽数が最も多い。その理由は川中新橋付近は左岸に小規模ながら水田があり、稲の収穫期にスズメが集まってくることによるものである。

猛禽類は、トビ、ツミ、ハイタカ、オオタカ、サシバ、ノスリ、チョウゲンボウが定期カウント中に観察された。

1991、1992年と2年連続で山王橋付近の日枝神社境内でツミが営巣したが、その後は来なくなった。1998年10月3日のカウント中に14羽の渡り途中のサシバに出合った。

カウント中ではないが、明治橋上流の右岸つつじ児童公園南側住宅付近で夜、アオバズクの声の記録がある(2004/7/4)。

宮田橋下流側は野鳥が集うスポットになっていて、カルガモ、コガモ、コサギ、カワセミ、アヒルなどが集まっていることが多い。ただし、ここにはカルガモに餌をやる人がいて、野鳥が集まる理由は給餌のためかも知れない。

カウント区間の最上流の川口橋近くの片井戸橋付近には野生化したアヒルがいて、多い年は6羽いたこともあった。また、ガチョウがいた年もあった。



思いがけない出会い アオシギ

この鳥は冬鳥で、ほかのジシギ類とは異なり、山地の溪流を好むといわれる。もともと希少種なのでなかなか見る機会がなく、1999年11月にわざわざ日光戦場ヶ原まで出かけて初認した鳥である。その後、比較的近場である横浜の舞岡公園で、ヤマシギとともに2~3年継続して見られる時期があり、こちらへも足を運んで見たのが2010年2月で、その後この鳥に出会うことが無かったが、なんと、2014年1月に八王子市内で出会うことができビックリ。

長年続けている上川口小学校での野鳥観察支援でのことだった。学校から数百メートル東にある田守神社の入り口で、川口川の小さな橋の上だった。わずかな流れの中で、この鳥独特の腰を上げ下げして餌を探すアオシギだった。

ところが、翌年3月に発行された会報54号に八王子市東部地域での「アオシギ11年連続越冬記録」の記事が紹介され更にビックリ。

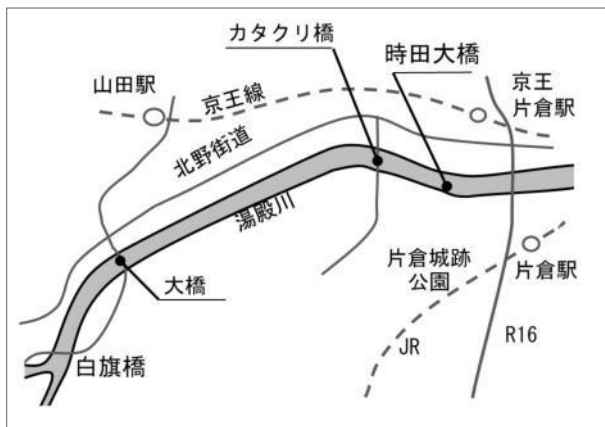
このような事例はほかの希少種でもまだあるはずで、「いつかどこかで思いがけない出会い」があることを期待して、これからも鳥見を続けたい。

9. 湯殿川(白旗橋～時田大橋)

(1) コースの概要

湯殿川は浅川の支流で、多摩丘陵の付け根に近い八王子市館町にある拓殖大学付近の山を源流としている。総延長は約 11km、北野街道に沿って流下し、京王線長沼駅の北で浅川に合流する。近年、河川改修によるコンクリート化と住宅開発が進められているが、小規模ながら水田、畑、雑木林、低灌木が茂るエリア等が散見され、まだ、のどかな田園地帯の面影が残されている。

定期カウントのコースは、湯殿川の中流域で、白旗橋から時田大橋までの約 2km である。この間に上流から大橋、釜土橋、殿田橋、稲荷橋、カタクリ橋がある。川幅はおよそ 20m で、流れも緩やかで、水深の浅い所が多く、湧水の流入も幾箇所か見られる。また、水辺や中州に植物が繁茂している所も少なからずあり、これらの特性と流域の自然環境とが一体となって鳥たちに貴重な生息場所を提供している。そして、川幅が狭いだけに水辺の鳥を近い距離で観察することができ、地域の人たちにとっても野鳥に親しむ格好の場となっている。



コース概念図



釜土橋から下流方向を望む 2015.5

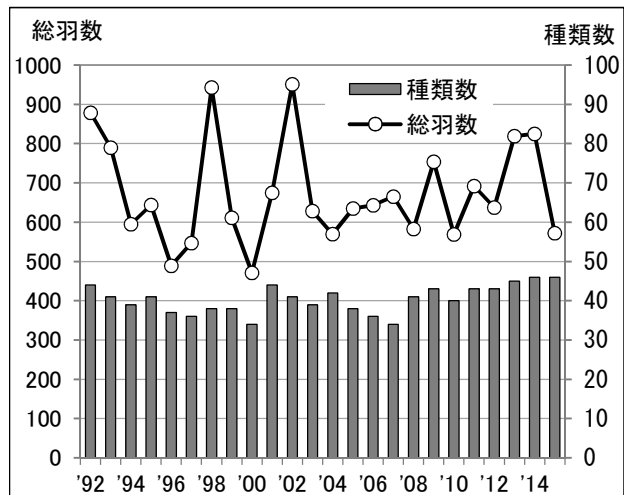
(2) 調査期間及び担当者

調査開始は、1992年1月。24年を経過して今日に至る。

1992～1997年	三富恒男
1998年	三富恒男、青木一男
1999年 1～8月	青木一男、
9～12月	三富恒男
2000年	三富恒男
2001年 1月	粕谷和夫
2月～12月	三富恒男
2002年 1月	粕谷和夫
2～12月	長谷川篤
2003年～現在	長谷川篤

(3) 確認された全野鳥の経年変化

次のグラフの通り、年間出現種類数は、40種前後で経過し、大きな増減は見られない。一方、年間出現総羽数は、多い年で1,000羽弱、少ない年で約500羽、その他の年は、約600～800羽で推移している。



(4) 確認された野鳥の概要

次ページ表の通り、調査期間 24 年間に確認した野鳥は、84 種である。この他に外来種のコジュケイ、カワラバト(ドバト)、ガビチョウと雑種ガモを加えると総計 88 種となる。野鳥の季節区分は、留鳥 43 種(51%、約半数)、冬鳥 28 種(33%)、夏鳥 8 種(10%)、旅鳥 5 種(6%) である。

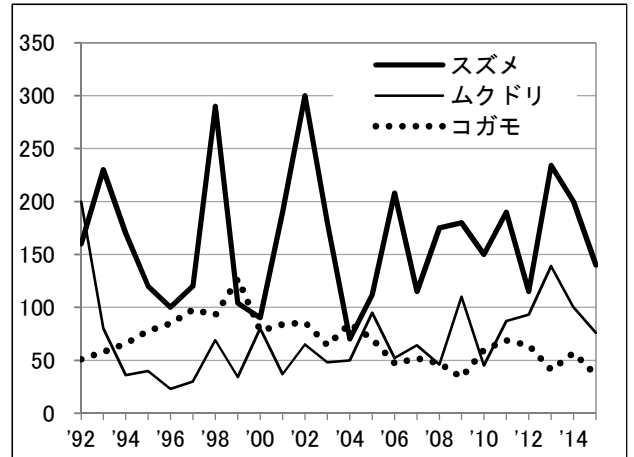
確認された野鳥の種類数：84種

季節区分別	出現頻度別(年)	出現羽数別(羽)
留鳥	キジ	24 カルガモ 164
留鳥	カルガモ	24 コガモ 71
留鳥	カイツブリ	24 キジバト 68
留鳥	キジバト	24 コサギ 50
留鳥	カワウ	24 モズ 41
留鳥	ゴイサギ	24 ハシボソガラス 40
留鳥	アオサギ	24 シジュウカラ 35
留鳥	ダイサギ	24 ツバメ 25
留鳥	コサギ	24 ヒヨドリ 18
留鳥	バン	24 ウグイス 18
留鳥	ヒメアマツバメ	24 ムクドリ 15
留鳥	イカルチドリ	24 ツグミ 11
留鳥	イソシギ	24 ジョウビタキ 11
留鳥	トビ	24 スズメ 9
留鳥	オオタカ	24 キセキレイ 9
留鳥	ノスリ	24 ハクセキレイ 8
留鳥	カワセミ	24 セグロセキレイ 7
留鳥	コゲラ	24 カワラヒワ 7
留鳥	アカゲラ	23 カワウ 7
留鳥	アオゲラ	23 カワセミ 6
留鳥	チョウゲンボウ	23 ハシブトガラス 5
留鳥	モズ	23 ホオジロ 5
留鳥	カケス	22 キジ 4
留鳥	オナガ	22 オナガガモ 4
留鳥	ハシボソガラス	22 オナガ 3
留鳥	ハシブトガラス	22 メジロ 3
留鳥	ヤマガラ	21 イソシギ 3
留鳥	シジュウカラ	21 アオジ 3
留鳥	ヒバリ	19 アオサギ 2
留鳥	ヒヨドリ	19 コゲラ 2
留鳥	ウグイス	19 イワツバメ 2
留鳥	エナガ	18 トビ 2
留鳥	メジロ	18 タヒバリ 2
留鳥	セッカ	17 コチドリ 2
留鳥	ムクドリ	17 シメ 1
留鳥	イソヒヨドリ	17 カシラダカ 1
留鳥	スズメ	13 ダイサギ 1
留鳥	キセキレイ	13 チョウゲンボウ 1
留鳥	ハクセキレイ	10 バン 1
留鳥	セグロセキレイ	9 オオタカ 1
留鳥	カワラヒワ	8 ゴイサギ 1
留鳥	イカル	8 アオゲラ 1
留鳥	ホオジロ	8 ヒバリ 1
冬鳥	オシドリ	7 マガモ 1
冬鳥	オカヨシガモ	7 カイツブリ 1
冬鳥	ヒドリガモ	7 ユリカモメ 1
冬鳥	マガモ	6 イカルチドリ 0
冬鳥	ハシビロガモ	5 クイナ 0
冬鳥	オナガガモ	5 ホトギス 0
冬鳥	トモエガモ	5 カッコウ 0
冬鳥	コガモ	5 オオヨシキリ 0
冬鳥	ホシハジロ	4 ヒメアマツバメ 0
冬鳥	クイナ	3 タシギ 0
冬鳥	オオバン	3 ハマシギ 0
冬鳥	タシギ	3 セグロカモメ 0
冬鳥	ハマシギ	3 ツミ 0
冬鳥	ユリカモメ	3 エナガ 0
冬鳥	セグロカモメ	3 オオジュリン 0
冬鳥	ハイタカ	2 ハシビロガモ 0
冬鳥	アリスイ	2 トモエガモ 0
冬鳥	シロハラ	2 アリスイ 0
冬鳥	アカハラ	2 ヤマガラ 0
冬鳥	ツグミ	2 ショウドウツバメ 0
冬鳥	ジョウビタキ	2 ビタキ 0
冬鳥	ピンズイ	2 ビンズイ 0
冬鳥	タヒバリ	1 オシドリ 0
冬鳥	ベニマシコ	1 オカヨシガモ 0
冬鳥	シメ	1 ヒドリガモ 0
冬鳥	カシラダカ	1 ホシハジロ 0
冬鳥	アオジ	1 ササゴイ 0
冬鳥	オオジュリン	1 チュウサギ 0
夏鳥	ササゴイ	1 オオバン 0
夏鳥	ホトギス	1 アマツバメ 0
夏鳥	カッコウ	1 ケリ 0
夏鳥	コチドリ	1 ハイタカ 0
夏鳥	ツミ	1 ノスリ 0
夏鳥	ツバメ	1 アカゲラ 0
夏鳥	イワツバメ	1 カケス 0
夏鳥	オオヨシキリ	1 セッカ 0
旅鳥	チュウサギ	1 シロハラ 0
旅鳥	アマツバメ	1 アカハラ 0
旅鳥	ケリ	1 イソヒヨドリ 0
旅鳥	ショウドウツバメ	1 ベニマシコ 0
旅鳥	ビタキ	1 イカル 0

出現羽数は年最大値の年平均、0は1羽未満

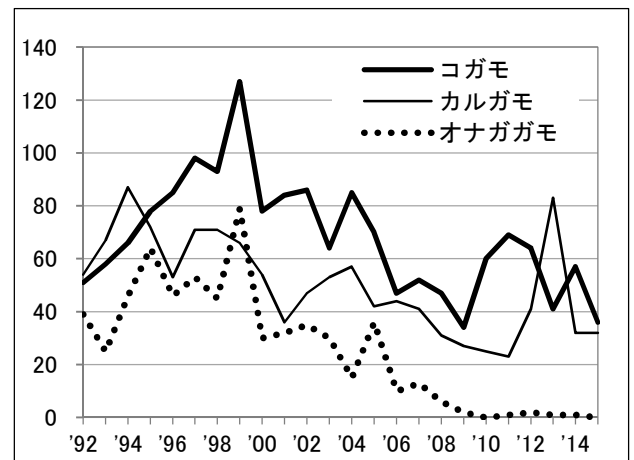
(5) 主な野鳥の動向、特徴等

次のグラフは、出現羽数の多い上位3種（スズメ、ムクドリ、コガモ）の経年変化を示す。



スズメとムクドリは、留鳥で一年を通して身近に見られる種である。スズメは、年により変動幅が大きい。また、ムクドリは、調査開始年をピークに、以後小変動を繰り返している。一方、コガモは、冬鳥でありながら出現羽数が第3位と多いことは、注目される。

次のグラフは、カモ3種（コガモ、カルガモ、オナガガモ）の経年変化を示す。



グラフから、カモ3種の減少傾向が見られる。

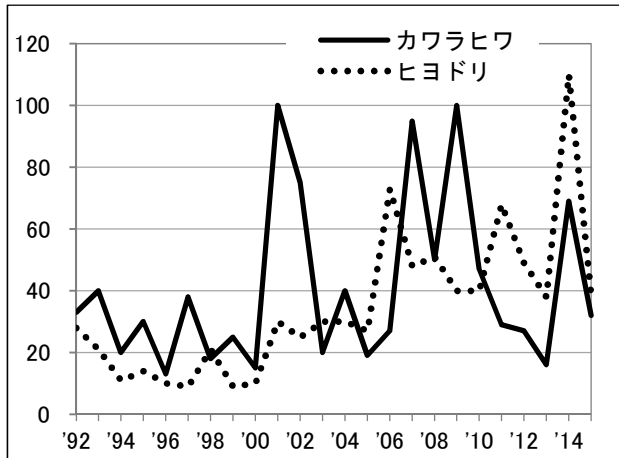
コガモは冬鳥で、時田大橋～カタクリ橋間の浅瀬で採食している姿がよく観察される。グラフに示されるように出現羽数が多く、当エリアがコガモにとって貴重な越冬場所となっていることが分かる。

カルガモは留鳥で、流れの中だけでなく、田植えの終わった田や畦道でも観察される。例年、当エリアで繁殖を確認している。2013年は83羽を記録したが、全体としては減少傾向にある。

オナガガモは冬鳥で、特に稲荷橋上流の堰付近でよく観察されたが、1999年をピークに極端に減少した。2010年には、1羽も確認できず、その後

は1~2羽を観察するのみとなった。

次のグラフはカワラヒワ、ヒヨドリの経年変化を示す。



両種とも農耕地や市街地・都市緑地にも生息する留鳥であり、出現頻度も高い。ヒヨドリは、増減を繰り返しながらやや増加傾向にある。カワラヒワは、大きな群れの出現の有無も要因となって変動幅が大きくなっている。

(6) 特記事項

①バン、クイナ

両種とも水辺や湿地を生息場所とし、バンは夏鳥、クイナは冬鳥として季節区分されている。バンは、2005年以降、稲荷橋とカタクリ橋付近でほぼ毎年1~2羽が観察されている。クイナは、稲荷橋付近で2008年1羽、2011年以降は毎年1~2羽出現し、近い距離で観察することが出来た。

②流域の変化

カタクリ橋の右岸側は、みなみ野に通じる道路の開通、宅地の造成、大型商業施設の進出(2010年12月)などにより、片倉城跡公園から東西に帯状に伸びていた雑木林の減少が進んでいる。

釜土橋の上流右岸に広がっている低灌木や雑草が生い茂る窪地は、鳥種が多いエリアであるが、近年、家庭菜園用地として整備が進められている。



1960年代は田んぼにヒクイナがいた

ヒクイナはムクドリと同じくらいの大きさで、顔から腹、足が赤っぽいクイナの仲間。カワセミ会の鳥信には6例しか観察報告が無い希少種である。しかし、以前は田んぼにもいたという畔上能力からの投稿が、会報かわせみ第60号(2013年春号)に記載されている。以下は抜粋引用である。

1969年7月4日、八王子市石川町の仲人さんの家にお中元のご挨拶に伺ったところ、主人は畑仕事に出ているとの事だった。そこはどの辺か訊ねたところ、第八小学校の付近の畑にいるとのことだった。そこなら帰り道沿いなので行ってみることにした。現在の東海大八王子病院、都営大谷石川団地のある辺りで、大谷川沿いである。その水田地帯の縁(ふち)で御主人を探しあぐね、しゃがみ込んで水草を観察していたら、目の前2mほど先の水田の稲の間を、赤茶色のような毛色の鳥が、無関心を装って抜き足差し足、まるで忍者のように音も立てずそっと細長い足を運んでいく。嘴は細く約6cm。こちらも息を殺して見ていたが、やがて稲穂の中に隠れてしまった。それから甲高い声がヒョッ、ヒョッ、……と響き渡った。しばらく茫然としていたが、やがて夢から覚めたように立ち上がり、嬉しさがこみ上げてくるのを抑えながら一気に自転車に飛び乗り我が家に向かった。図鑑で調べたところヒクイナ以外に該当する鳥が見つからなかった。初めて見た、初めて声を聞いたヒクイナに、その日の夜は興奮したせいか、いつまでも眠りにつけなかった。

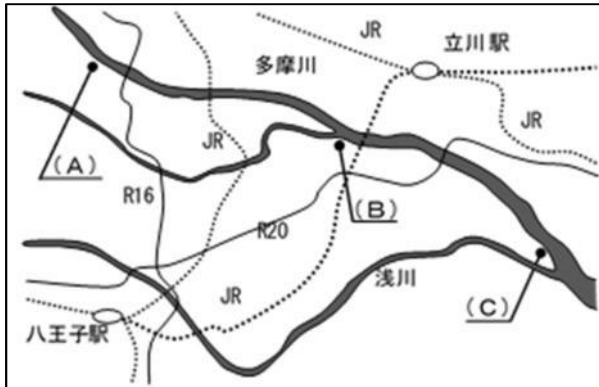


V. 多摩川（滝山城跡下、谷地川合流付近、多摩川合流付近）

<調査地区の概要>

多摩川は、山梨県・埼玉県境の笠取山を源流とし東京湾に注ぐ総延長 138km の一級河川である。

調査地区は、河口より 42km に位置する谷地川との合流部（B）を中心に上流の滝山城跡下（A）及び下流の浅川との合流地付近（C）の3箇所である。

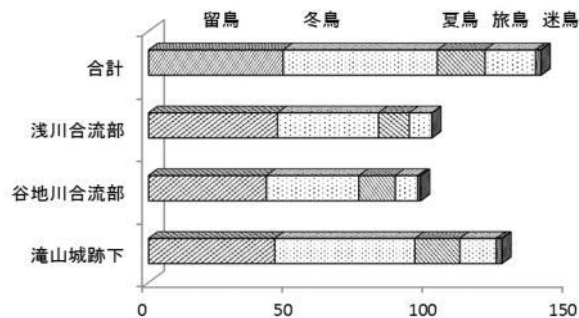


コース概念図

<確認された野鳥の概要>

(1) 野鳥の種類数

3カ所の調査区域で確認された野鳥の種類は 139 種。外来種を含めると 150 種の鳥が確認されている。季節区分では冬鳥が最も多く確認された。



季節区分	滝山城跡下	谷地川合流部	浅川合流部	3区域
留鳥	45	42	46	47
夏鳥	16	13	11	18
冬鳥	50	33	36	55
旅鳥	13	8	8	17
迷鳥	2	1	-	2
合計	126	98	101	139
外来種	9	8	3	11

(季節区分ごとの確認種その1)

調査区域毎では、滝山城跡下が全ての区域で最も多く確認されている。但し、調査期間が最も長いのも同区域である。

	種名
留鳥	アオゲラ、アオサギ、アカゲラ、イカル、イカルチドリ、イソシギ、イソヒヨドリ、ウグイス、エナガ、オオタカ、オナガ、カイツブリ、カケス、カルガモ、カワウ、カワセミ、カワヒワ、キジ、キジバト、キセキレイ、ゴイサギ、コガラ、コゲラ、コサギ、シジュウカラ、スズメ、セグロセキレイ、セッカ、ダイサギ、チョウゲンボウ、トビ、ノスリ、ハクセキレイ、ハシブトガラス、ハシボソガラス、バン、ヒガラ、ヒバリ、ヒメアマツバメ、ヒヨドリ、ホオジロ、ミソサザイ、ムクドリ、メジロ、モズ、ヤマガラ、ヤマセミ (47種)
夏鳥	イワツバメ、オオヨシキリ、カッコウ、キビタキ、コアジサシ、コシアカツバメ、コチドリ、ササゴイ、サンコウチョウ、センダイムシクイ、チゴモズ、ツツドリ、ツバメ、ヒクイナ、ホトトギス、ヤブサメ、ヨシゴイ、ツミ (18種)
冬鳥	アオジ、アカハラ、アトリ、アメリカヒドリ、アリスイ、ウソ、ウミネコ、オオジュリン、オオハクチョウ、オオバン、オカヨシガモ、オシドリ、オジロトウネン、オナガガモ、カシラダカ、カワアイサ、カンムリカイツブリ、キレンジャク、キンクロハジロ、クイナ、クサシギ、クロジ、コガモ、シメ、ジョウビタキ、シロチドリ、シロハラ、スズガモ、セグロカモメ、タゲリ、タシギ、タヒバリ、ツグミ、ハイタカ、ハシビロガモ、ハジロカイツブリ、ハマシギ、ハヤブサ、ヒドリガモ、ヒレンジャク、ビンズイ、ベニマシコ、ホオアカ、ホオジロガモ、ホシハジロ、マガモ、マガン、マヒワ、ミコアイサ、ミヤマホオジロ、ユリカモメ、ヨシガモ、ルリビタキ、カモメ、ミサゴ (55種)
旅鳥	アオアシシギ、アマサギ、アマツバメ、エゾビタキ、オオジシギ、キアシシギ、ケリ、コジュリン、コムクドリ、サシバ、ショウドウツバメ、タカブシギ、チュウサギ、チュウシャクシギ、トウネン、ノビタキ、ハチクマ (17種)
迷鳥	ウミアイサ、コホオアカ (2種)

(季節区分ごとの確認種その2)

(2) 出現頻度が高い野鳥と低い野鳥

139種の出現頻度は、滝山城跡下(29年間)、谷地川合流部(18年間)、浅川合流部(24年間)の合計71を最大とすると、最大71(毎年出現した:頻度1.0)の野鳥が24種(18%)。1回だけの出現(頻度0.01)の野鳥が15種(11%)であった。

毎年出現した野鳥
ムクドリ、カワラヒワ、スズメ、ヒヨドリ、ハシブトガラス、ダイサギ、カルガモ、ホオジロ、キジバト、ハシボソガラス、シジュウカラ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、アオサギ、カイツブリ、ウグイス、モズ、キジ、トビ、カワセミ、ツグミ、シメ、アオジ、ツバメ(24種)

(3) 出現羽数の少ない野鳥(全ての期間)

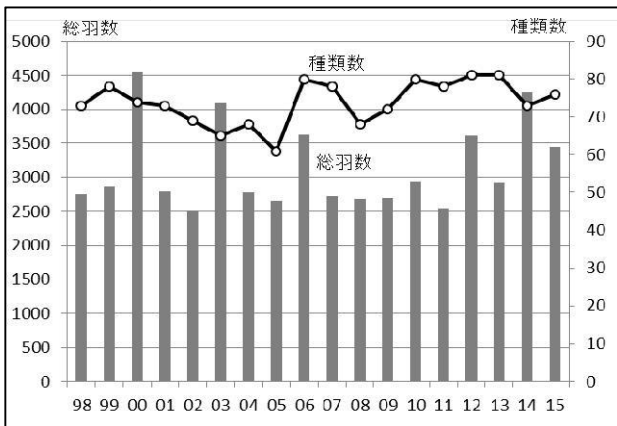
1羽で1回だけ確認された野鳥は15種。1羽で2回確認された野鳥は4種であった。

1羽、1回確認された野鳥
タカブシギ、チュウシャクシギ、ハチクマ、サンコウチョウ、ヒクイナ、ヤブサメ、カワアイサ、カンムリカイツブリ、スズガモ、ハジロカイツブリ、ヒガラ、ミソサザイ、オオジシギ、ケリ、オオハクチョウ(15種)
1羽、2回確認された野鳥
オシドリ、シロチドリ、ルリビタキ、マガン(4種)

<確認された野鳥の年次変動>

(1) 野鳥全体の年次変動

3カ所すべての調査時期がそろった1998年から2015年の18年間で種類数と総羽数(年最大の合計)は下図のとおり。種類数は最大81種、最少61種、平均74種で大きな変動は見られない。総数では、最大4,562羽(2000年)、最少2,502羽(2002年)、平均3,137羽であった。



(種類と総羽数の年次変動)

(2) 出現羽数の多い野鳥

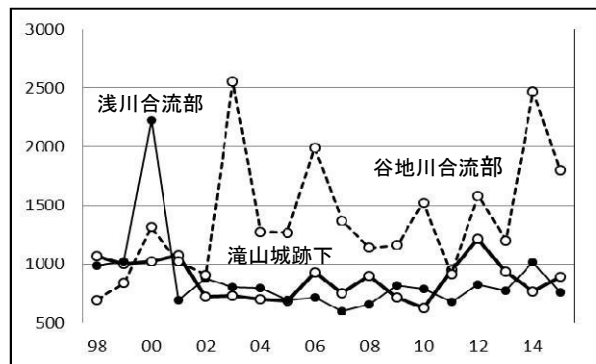
総羽数が多い上位10種は以下のとおりである。

種名	年最大羽数(累計羽数)	年平均羽数(羽/18)
カワラヒワ	1,287	72
ムクドリ	1,134	63
カワウ	808	45
ツグミ	720	40
ヒヨドリ	550	31
スズメ	539	30
ユリカモメ	491	27
コサギ	473	26
ツバメ	462	26
コガモ	243	14

(3) 区域別の年次変動

① 総羽数

谷地川合流部の変動が大きく、滝山城跡下及び浅川合流部では大きな変動はない。突出している年度で大きく影響している野鳥は次のとおりである。



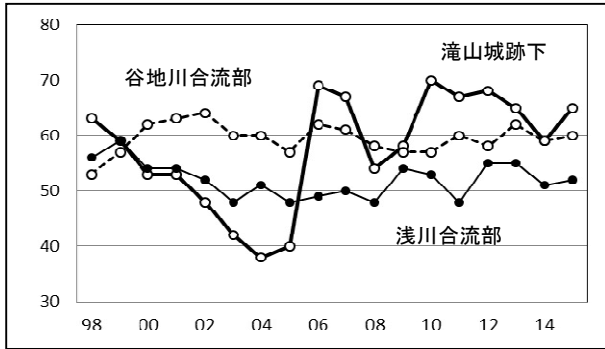
(カ所ごとの年次変動: 単位/羽)

区域	年次	種名	羽数
谷地川合流	2003	ムクドリ	1,000
		ツバメ	404
		スズメ	350
谷地川合流	2006	カワラヒワ	428
		ヒヨドリ	329
谷地川合流	2014	カワラヒワ	1,000
		ヒヨドリ	274
浅川合流	2000	カワウ	600
		ユリカモメ	450
		コサギ	400

(年次変動が大きな要因の内訳: 単位/羽)

②種類数

滝山城跡下が減少傾向であったが2006年大きく増えた。浅川合流部が最も種類数が少なく、種類数の多い滝山城跡下だけで確認されたのが26種。浅川合流部のみで確認されたのが4種、谷地川合流部だけの確認はなかった。



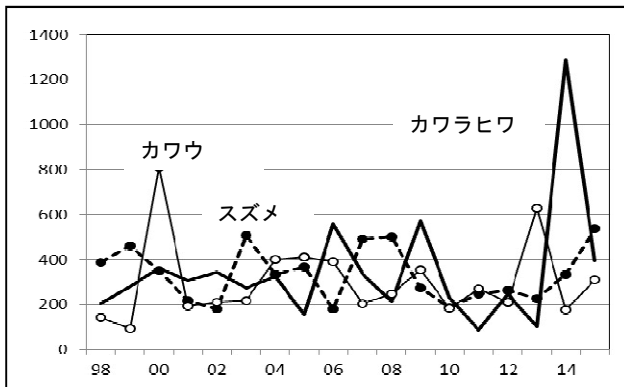
(区域別の種類数：単位/種)

滝山城跡下のみでの確認種 (26種)
コジュリン、ルリビタキ、ミソサザイ、ヒレンジャク、キレンジャク、ヤブサメ、ヒガラ、サンコウチョウ、サシバ、ハチクマ、ウミネコ、オジロトウネン、トウネン、タカブシギ、チュウシャクシギ、シロチドリ、タゲリ、ヒクイナ、ハジロカイツブリ、カンムリカイツブリ、ウミアイサ、カワアイサ、ホオジロガモ、スズガモ、アメリカヒドリ、オシドリ
浅川合流部のみでの確認種 (4種)
コガラ、アオアシシギ、オオハクチョウ、マガン

(4) 代表的野鳥の年次変動

①総羽数の多い上位3種 (年最大値の比較)

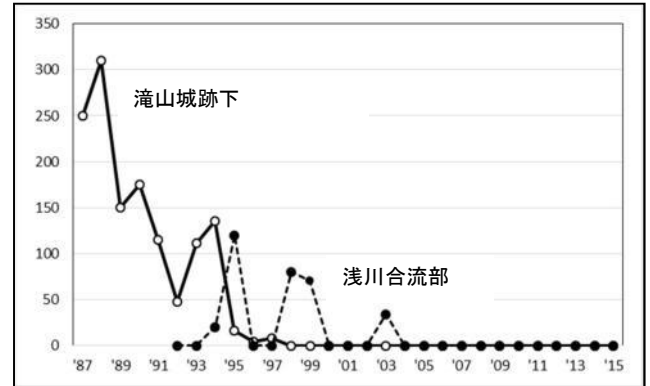
羽数の多い野鳥は以下の通り変動が大きく増減傾向は読みとれない。カワラヒワ 1287羽 (2014年) と 87羽 (2011年)。カワウ 808羽 (2000年) と 94羽 (1999年)。スズメ 539羽 (2015年) と 179羽 (2002年)。



(総羽数の多い3種：単位/羽)

②ハマシギ

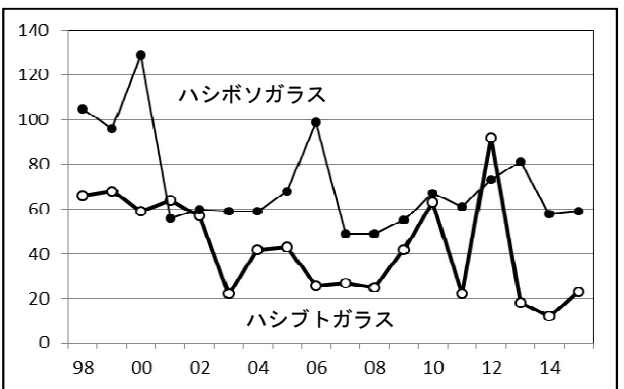
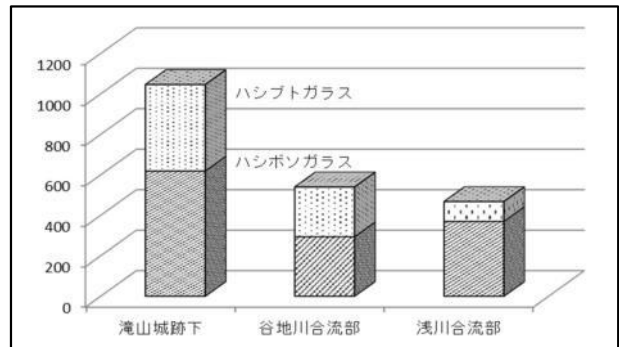
ハマシギは滝山城跡下と浅川合流部で観察された。1988年に310羽を最大に1999年頃まで集団で確認された。その後2004年以降観察されていない。



(ハマシギの年次変動：単位/羽)

③カラス2種

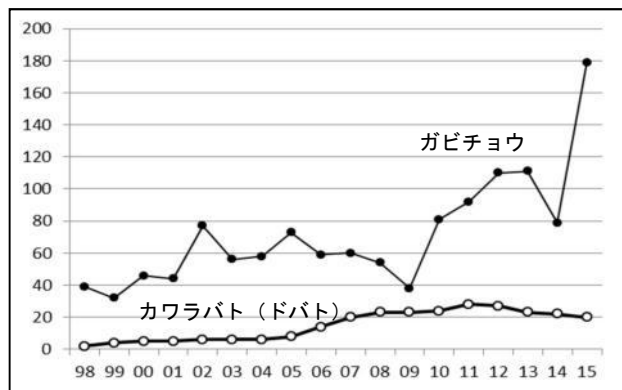
ハシブトガラスとハシボソガラス何れも滝山城跡下で多く観察されており、ハシブトガラスは上流側で多く観察された。年次変動は、ハシブトガラスに若干の減少傾向が窺える。



(カラスの年次変動：単位/羽)

<その他（外来種等）>

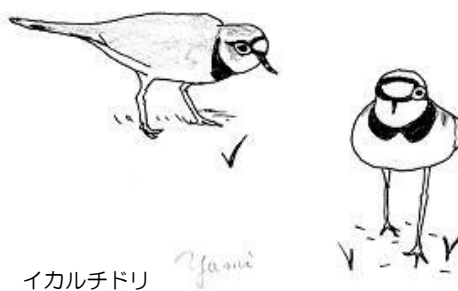
外来種等の鳥は11種。一番多く確認されたのが、カワラバト（ドバト）、次いでコジュケイ。ガビチョウは滝山城跡下では1995年から、谷地川合流部では2001年から、浅川合流部では2002年から姿を見せ始めている。



(ガビチョウとカワラバト(ドバト)の年次変動:単位:羽)

外来種等 (11種)
コブハクチョウ、コジュケイ、カワラバト（ドバト）、セキセイインコ、ワカケホンセイインコ、カオグロガビチョウ、ガビチョウ、ベニスズメ、アヒル、雑種ガモ、ガチョウ

(確認された外来種等)



イカルチドリ



子ども達はカラスが大好き？！

子ども達の自然を対象とした体験活動の充実を図ることを目的の一つとして、小学校教育課程に生活科や総合的な学習の時間が設置されて以降、これらの教科や時間に野鳥観察に取り組もうとする小学校からのカワセミ会への支援依頼が多くなってきています。

学校支援の際、子ども達をみていると、何と言っても一番大好きな生き物は大変身近なダンゴムシで、そして野鳥ではカラスが一番人気ようです。

ではなぜ、カラスは子ども達に一番人気の野鳥なのでしょう？

子ども達にとってカラスは、個体数が多く、毎日通学途上で必ず出会い、真っ黒なので不気味で気になる存在です。そして、カラスの鳴き声は単純で表現しやすく誰でも真似ることができるから、と考えられます。

ある教職経験者の話によると、「小学校1年生に私が教えたカラス2種の鳴き真似を、二十数年後、いまでも覚えていますと言われた」という。そういえば学校支援をすると「ハシボソ、ガアーガアー、ハシブト、カアーカアー」と真似をしながら走り回っている小学生がいます。

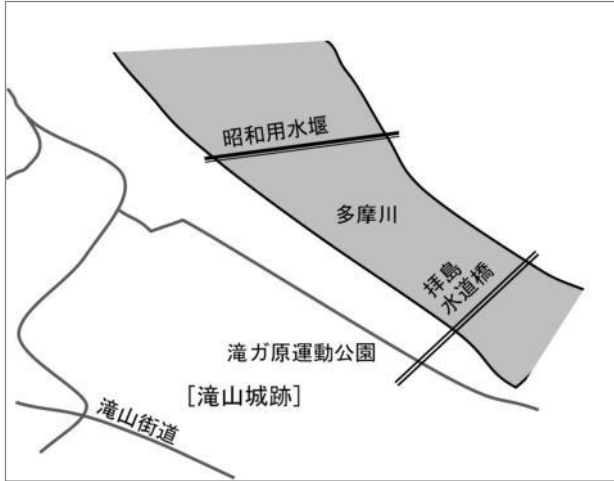
カラスは、自然体験活動へ子ども達を誘う案内役にぴったりです。

カワセミ会の学校支援活動は、ますます重要になると思われます。

10. 多摩川（滝山城跡下）

（1）コースの概要

多摩川本流のうち昭和用水堰から水管橋、拝島橋上流に至る流れに沿って約 1.5 km、その右岸と滝山城跡のある滝山丘陵との間に広がる平坦地で、八王子市と昭島市にまたがる。



コース概念図



右岸下流側から昭和堰を望む 2007.9

調査地の中心には八王子市の滝ガ原運動公園があり、その北西に高月浄水場につながる水田や畑が広がる。その西端、滝山丘陵の麓には農業用水路が流れ、乳牛の飼育や養蜂も行われているなど、都内では貴重な里山の風景を形作っている。昭和用水堰には魚道も設けられ季節には釣り人も多く、上部には広く水面が広がる。そうした地域と河川敷の緑地が地理的にも季節的にも、調査地を変化のあるものになっている。

（2）調査期間及び担当者

調査期間は 1987 年 1 月からの 29 年間で、この間の調査担当者は以下のとおりである。

1987 年～1988 年 粕谷和夫

1988 年～2001 年 三好恒雄

(1988 年 三好恒雄・斎藤高昭、2000 年～2002 年 三好恒雄・佐伯直寛)

2002 年～2006 年 佐伯直寛

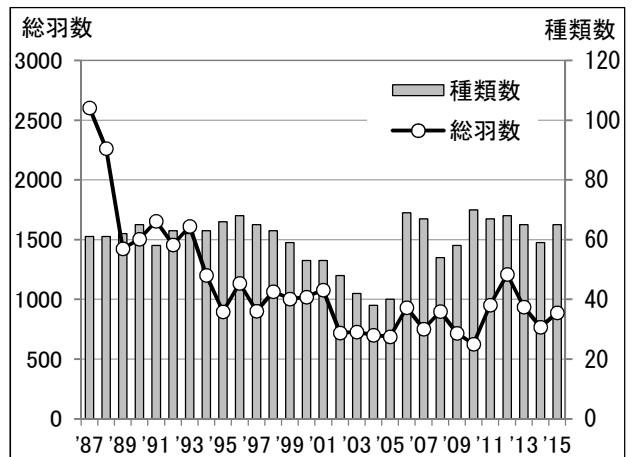
(2006 年 10 月～12 月 岡本昭男)

2006 年～2015 年 宮越俊一

(2014 年 7 月～現在 古山隆が代行)

（3）確認された全野鳥の経年変化

単年度毎の種類数は 40 種から 60 種前後で変動している。羽数は 1987 年の調査開始から約 5 年間のうちに大きく減少した。その後、羽数の減少は 2005 年頃まで続き、その後 1000 羽前後で安定している。



（4）確認された野鳥の概要

1987 年から 2015 年までの 29 年間で確認された野鳥は 126 種、これに外来種 9 種（カワラバト（ドバト）、コジュケイ、ガビチョウ、アヒル、ガチョウ、雑種ガモ、コブハクチョウ、セキセイインコ、カオグロガビチョウ）を加えると 135 種になる。野鳥の季節区分では冬鳥が 51 種（40%）、留鳥が 45 種（36%）、夏鳥 16 種（13%）、旅鳥 13 種（10%）、迷鳥 1 種（1%）である。

確認された野鳥の種類数：126種（1/2）

季節区分別	出現頻度別(年)	出現羽数別(羽)
留鳥	スズメ	29
留鳥	カワラヒワ	29
留鳥	ムクドリ	29
留鳥	カワウ	29
留鳥	ヒヨドリ	29
留鳥	ハシボソガラス	29
留鳥	ホオジロ	29
留鳥	ハシブトガラス	29
留鳥	カルガモ	29
留鳥	セグロセキレイ	29
留鳥	キジバト	29
留鳥	ハクセキレイ	29
留鳥	シジュウカラ	29
留鳥	コサギ	29
留鳥	カイツブリ	29
留鳥	ダイサギ	29
留鳥	アオサギ	29
留鳥	ウグイス	29
留鳥	モズ	29
留鳥	オナガ	29
留鳥	メジロ	29
留鳥	エナガ	29
留鳥	イカルチドリ	29
留鳥	ヒメアマツバメ	29
留鳥	キセキレイ	29
留鳥	トビ	29
留鳥	キジ	29
留鳥	イソシギ	28
留鳥	セッカ	28
留鳥	カケス	28
留鳥	ヒバリ	28
留鳥	カワセミ	28
留鳥	コゲラ	27
留鳥	イカル	27
留鳥	ノスリ	26
留鳥	ゴイサギ	26
留鳥	オオタカ	26
留鳥	バン	24
留鳥	アカゲラ	24
留鳥	チョウゲンボウ	24
留鳥	アオゲラ	23
留鳥	ヤマセミ	22
留鳥	ヤマガラ	20
留鳥	ヒガラ	19
留鳥	ミソサザイ	18
冬鳥	コガモ	18
冬鳥	ハマシギ	17
冬鳥	ツグミ	16
冬鳥	カシラダカ	16
冬鳥	ユリカモメ	16
冬鳥	オナガガモ	15
冬鳥	アオジ	15
冬鳥	ヒドリガモ	14
冬鳥	シメ	14
冬鳥	タヒバリ	13
冬鳥	オカヨシガモ	13
冬鳥	ハシブトガモ	12
冬鳥	ジョウビタキ	12
冬鳥	ミコアイサ	12
冬鳥	オオバン	12
冬鳥	マガモ	12
冬鳥	クサシギ	11
冬鳥	ベニマシコ	11
冬鳥	ヨシガモ	11
冬鳥	セグロカモメ	11
冬鳥	ヒレンジャク	11
冬鳥	オオジュリン	11
冬鳥	シロハラ	10
冬鳥	キンクロハジロ	10
冬鳥	マヒワ	8
冬鳥	ミサゴ	8
冬鳥	ハイタカ	8
冬鳥	キレンジャク	7
冬鳥	アトリ	7
冬鳥	ウソ	7
冬鳥	タシギ	7
冬鳥	クロジ	7
冬鳥	ホオジロガモ	7
冬鳥	ピンズイ	7
冬鳥	ホシハジロ	6
冬鳥	タゲリ	6
冬鳥	ハヤブサ	6
冬鳥	アカハラ	6
冬鳥	アカハラ	5
冬鳥	アメリカヒドリ	5
冬鳥	スズメ	127
冬鳥	カワラヒワ	83
冬鳥	ムクドリ	72
冬鳥	カワウ	70
冬鳥	ヒヨドリ	55
冬鳥	コガモ	53
冬鳥	ハマシギ	46
冬鳥	ツバメ	42
冬鳥	ハシボソガラス	38
冬鳥	ツグミ	34
冬鳥	カシラダカ	32
冬鳥	ホオジロ	30
冬鳥	ハシブトガラス	28
冬鳥	カルガモ	27
冬鳥	ユリカモメ	24
冬鳥	セグロセキレイ	22
冬鳥	オナガガモ	22
冬鳥	キジバト	19
冬鳥	アオサギ	17
冬鳥	ハクセキレイ	15
冬鳥	ヒドリガモ	14
冬鳥	シジュウカラ	13
冬鳥	シメ	13
冬鳥	タヒバリ	13
冬鳥	コサギ	11
冬鳥	カイツブリ	11
冬鳥	ダイサギ	11
冬鳥	アオサギ	10
冬鳥	ウグイス	9
冬鳥	イワツバメ	8
冬鳥	モズ	8
冬鳥	オナガ	7
冬鳥	オカヨシガモ	7
冬鳥	メジロ	7
冬鳥	コガモ	6
冬鳥	エナガ	6
冬鳥	オオヨシキリ	6
冬鳥	イカルチドリ	6
冬鳥	アマツバメ	5
冬鳥	ヒメアマツバメ	5
冬鳥	キセキレイ	5
冬鳥	キアシシギ	4
冬鳥	キジ	4
冬鳥	イソシギ	4
冬鳥	ハシブトガモ	4
冬鳥	セッカ	4
冬鳥	カケス	3
冬鳥	コチドリ	3
冬鳥	ヒバリ	3
冬鳥	カワセミ	3
冬鳥	ショウドウツバメ	3
冬鳥	コゲラ	3
冬鳥	ジョウビタキ	3
冬鳥	ミコアイサ	3
冬鳥	オオバン	3
冬鳥	ササゴイ	2
冬鳥	ノスリ	2
冬鳥	ベニマシコ	1
冬鳥	ゴイサギ	1
冬鳥	ヨシガモ	1
冬鳥	セグロカモメ	1
冬鳥	オオタカ	1
冬鳥	ヒレンジャク	1
冬鳥	オオジュリン	1
冬鳥	オカヨシガモ	1
冬鳥	オオジュリン	1
冬鳥	ホトトギス	1
冬鳥	バン	1
冬鳥	シロハラ	1
冬鳥	アオゲラ	1
冬鳥	チョウゲンボウ	1
冬鳥	アオゲラ	1
冬鳥	チュウサギ	1
冬鳥	アオゲラ	0
冬鳥	ノビタキ	0
冬鳥	キンクロハジロ	0
冬鳥	カッコウ	0
冬鳥	マヒワ	0
冬鳥	ハイタカ	0
冬鳥	キレンジャク	0
冬鳥	アトリ	0
冬鳥	ウソ	0
冬鳥	タシギ	0
冬鳥	ハヤブサ	0
冬鳥	アカハラ	0
冬鳥	アカハラ	0
冬鳥	アメリカヒドリ	0
冬鳥	タシギ	0

確認された野鳥の種類数：126種（2/2）

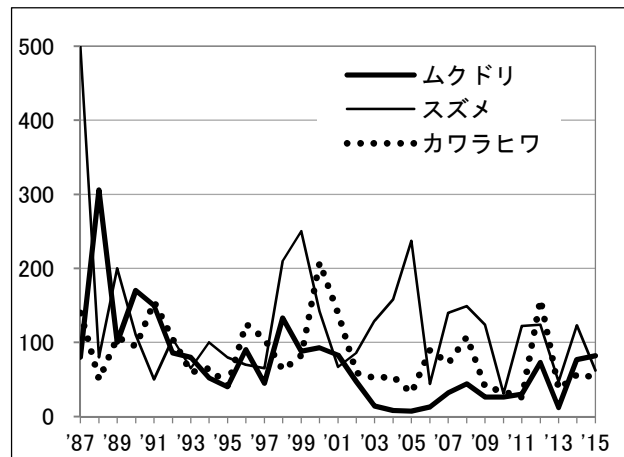
季節区分別	出現頻度別(年)	出現羽数別(羽)
冬鳥	オジロトウネン	5
冬鳥	ウミネコ	5
冬鳥	オシドリ	5
冬鳥	シロチドリ	4
冬鳥	アリスイ	4
冬鳥	ルリビタキ	4
冬鳥	ミヤマホオジロ	4
冬鳥	スズガモ	3
冬鳥	カワアイサ	3
冬鳥	カンムリカイツブリ	3
冬鳥	ハジロカイツブリ	3
冬鳥	クイナ	3
冬鳥	ツバメ	3
夏鳥	イワツバメ	2
夏鳥	オオヨシキリ	2
夏鳥	コチドリ	2
夏鳥	コシアカツバメ	2
夏鳥	ササゴイ	2
夏鳥	ホトトギス	2
夏鳥	カッコウ	2
夏鳥	センダイムシクイ	2
夏鳥	キビタキ	2
夏鳥	コアジサシ	2
夏鳥	ヒクイナ	2
夏鳥	ツツドリ	2
夏鳥	ツミ	1
夏鳥	サンコウチョウ	1
夏鳥	ヤブサメ	1
旅鳥	アマツバメ	1
旅鳥	キアシシギ	1
旅鳥	ショウドウツバメ	1
旅鳥	チュウサギ	1
旅鳥	ノビタキ	1
旅鳥	アマサギ	1
旅鳥	サシバ	1
旅鳥	トウネン	1
旅鳥	コムクドリ	1
旅鳥	コジュリン	1
旅鳥	チュウシャクシギ	1
旅鳥	タカブシギ	1
旅鳥	ハチクマ	1
旅鳥	ウソ	1
旅鳥	ツミ	1
旅鳥	サンコウチョウ	1
旅鳥	チュウシャクシギ	1
旅鳥	タカブシギ	1
旅鳥	ハチクマ	1
迷鳥	ウミアイサ	1
夏鳥	ミサゴ	0
夏鳥	ヤマセミ	0
夏鳥	センダイムシクイ	0
夏鳥	アメリカヒドリ	0
夏鳥	ホシハジロ	0
夏鳥	タゲリ	0
夏鳥	ヤマセミ	0
夏鳥	アマサギ	0
夏鳥	ミサゴ	0
夏鳥	オジロトウネン	0
夏鳥	アカハラ	0
夏鳥	センダイムシクイ	0
夏鳥	キビタキ	0
夏鳥	アメリカヒドリ	0
夏鳥	オジロトウネン	0
夏鳥	サシバ	0
夏鳥	ヤマガラ	0
夏鳥	ウミアイサ	0
夏鳥	トウネン	0
夏鳥	ウミネコ	0
夏鳥	コアジサシ	0
夏鳥	コムクドリ	0
夏鳥	コジュリン	0
夏鳥	オシドリ	0
夏鳥	シロチドリ	0
夏鳥	ウミアイサ	0
夏鳥	トウネン	0
夏鳥	ウミネコ	0
夏鳥	コアジサシ	0
夏鳥	コムクドリ	0
夏鳥	コジュリン	0
夏鳥	オシドリ	0
夏鳥	シロチドリ	0
夏鳥	アリスイ	0
夏鳥	ツツドリ	0
夏鳥	ウソ	0
夏鳥	スズガモ	0
夏鳥	カワアイサ	0
夏鳥	カンムリカイツブリ	0
夏鳥	ハジロカイツブリ	0
夏鳥	クイナ	0
夏鳥	ヒクイナ	0
夏鳥	ツツドリ	0
夏鳥	チュウシャクシギ	0
夏鳥	ヒクイナ	0
夏鳥	ツツドリ	0
夏鳥	チュウシャクシギ	0
夏鳥	タカブシギ	0
夏鳥	ハチクマ	0
夏鳥	ウソ	0
夏鳥	タカブシギ	0
夏鳥	ハチクマ	0
夏鳥	ツミ	0
夏鳥	サンコウチョウ	0
夏鳥	チュウシャクシギ	0
夏鳥	タカブシギ	0
夏鳥	ハチクマ	0
夏鳥	ヤブサメ	0
夏鳥	ミソサザイ	0
夏鳥	コジュリン	0
夏鳥	ミソサザイ	0

出現羽数は年最大値の年平均、0は1羽未満

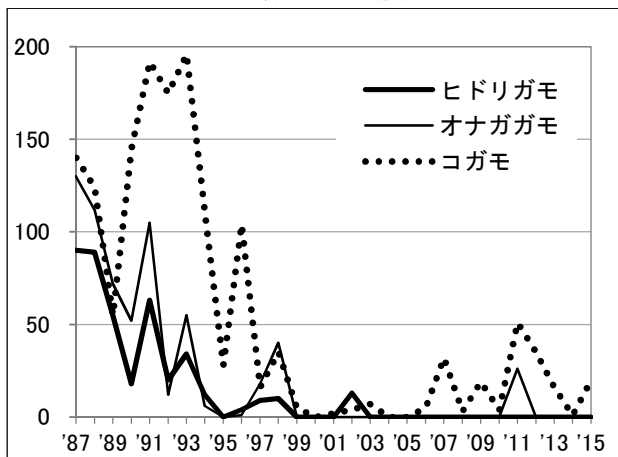
(5) 主な野鳥の動向、特徴等

29年間で出現羽数の多い3種の野鳥、スズメ、カワラヒワ、ムクドリの出現の推移、カモ類3種の出現の推移を次に示す。カルガモを除くカモ類は調査期間の初期5年ほどのあいだに激減し、オナガガモ、ヒドリガモ、オカヨシガモは1999年以降、観察されていない。

出現羽数の多い野鳥3種の推移

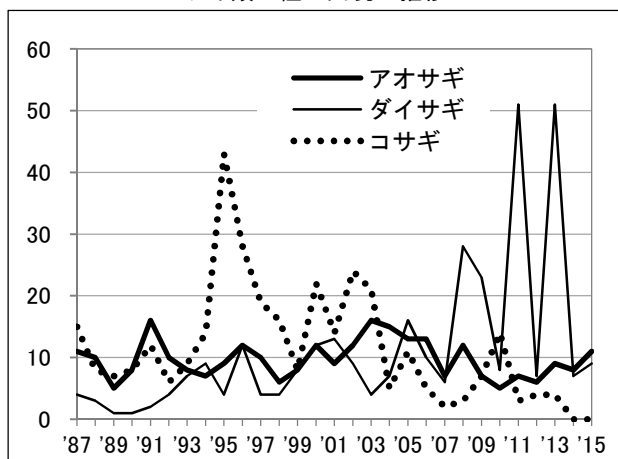


カモ類の出現の推移



サギ類3種の出現羽数を次の図に示す。コサギの減少とダイサギの増加傾向が見られる。ササゴイは昭和用水堰でしばしば見られていたが、2010年以降観察されなくなった。

サギ類3種の出現の推移



この他、年間の合計で300羽前後観察されていたハマシギは1997年を最後に観察されていない。滝山丘陵沿いで繁殖行動が確認されていたヤマセミも1997年を最後に姿を消した。カモメ類では、ユリカモメが比較的多く観察されていたが、2002年を最後にカウントされなくなり、まれにセグロカモメが見られる程度である。この調査域では多くのタカ類が見られることも特徴の一つであるが、出現頻度の高いトビ、オオタカ、ハイタカ、ノスリなどの動向に大きな変化はない。

多くの野鳥が減少する一方で、オオバンのように調査期間の後半2007年以降に観察されるようになった野鳥もある。また、渡りのシーズンには右岸の林を中心に多くの野鳥が見られるのも本コースの特徴で、ヒレンジャク、キビタキなども複数回観察されている。

(6) 特記事項

多摩川は夏の台風や大雨の度に増水し、大きく河道を変えたり、中州や河岸のヨシ原が消失するほどの影響を示すことがある。過去10年間では2011年8月の台風の影響が大きく、その後、大規模な河川改修が行われた。その結果、カワセミなどがしばしば見られた水路の一部は埋められて整地された。それらの影響については引き続き注意して観察する必要がある。これら河道の変化や夏の植物の繁茂状況によっては、踏破に困難や危険を伴うことがあるため、ルートの一部変更しながら調査を継続している。



カワウの集団採餌とそこに集まるサギ

浅川や多摩川で目立つ大きな野鳥はサギの仲間とカワウである。カワウはカラスのように羽根が黒いが、全身が黒いカラスに対して、嘴の付根が黄色であるのでカラスとの違いは明瞭である。1羽から数羽でいることもあるが、50羽、100羽、200羽と集団でいることも多い。集団で飛んでいる時はガン類に似た「棹になり、鉤になり」の飛行する姿が見られる。

魚を食性とするカワウはしばしば集団で採餌する。採餌場に集団で飛来し、水面に降り立つと潜ったり、羽ばたいたりの集団採餌が始まる。魚の群れを追って、頻りに場所を移動しながら採餌している所にダイサギ、コサギたちが集まって来る。

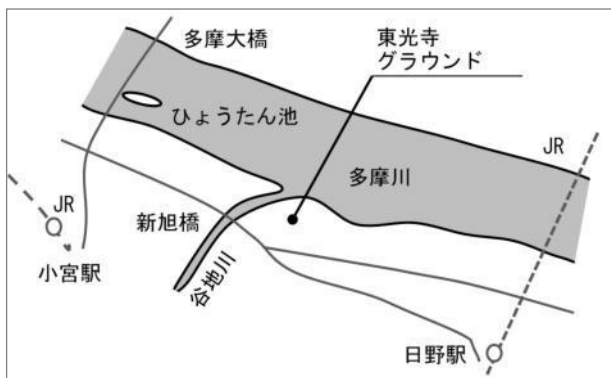
ダイサギ、コサギはカワウから逃れようと浅瀬に逃げ込む魚を狙って、かなり効率よく魚を捕まえる。サギはあまり深いところでは採食できないので、基本的には浅瀬に魚がいる状況がないと魚が捕れないが、カワウの集団採餌行動で、魚が浅瀬に逃げ込んで来るためサギの採食機会が生じるものと考えられている。

1.1. 多摩川（谷地川合流付近）

(1) コースの概要

多摩川の多摩大橋下流右岸の通称「ひょうたん池」から中央線鉄橋まで約 3km の右岸堤防を歩くコースである。途中で谷地川が合流する。河口から 42km 及び 43km を表示するポストがある。国土交通省（京浜河川事務所）が定める多摩川河川環境管理計画に位置付けられた多摩川の機能空間区分の「生態保持空間」が大部分を占めている。実際のカウントは下流から上流に向かって歩くので、ここでは下流からコースの概要を記述する。

中央線鉄橋を基点として、谷地川の流れを見ながら上流へ進むと、堤防は桜並木となり、この付近の河原はニセアカシアやヤナギなどの林になっている。さらに上流に進むと左手に広がるのが東光寺グラウンドで、土手の右側が谷地川の多摩川への流入部となる。一般道に一旦出てから新旭橋を渡り、谷地川の左岸を巻き、谷地川浄化施設の柵に沿って行くと、再び多摩川本流の土手に出る。この土手の手前の僅かな流れが、旧谷地川である。上流に向かうと左手は砂利採取業者の残土置き場がある。さらに進むと下水処理場からの水門があり、ここを降りて行くと通称「ひょうたん池」がある。この周りには元々天然の池がいくつもあったが、全て消え失せ、残ったのは一番大きかったこの池だけである。しかし、釣り人が増え、植物の侵食が進み、池の広さはかつての 1/3 程度になってしまっている。



(2) 調査期間及び担当者

カウント開始年は 1998 年 1 月で 2015 年までの 18 年間実施している。

1998 年～2015 年 8 月 神谷古牧
2015 年 9 月～現在 福本 健



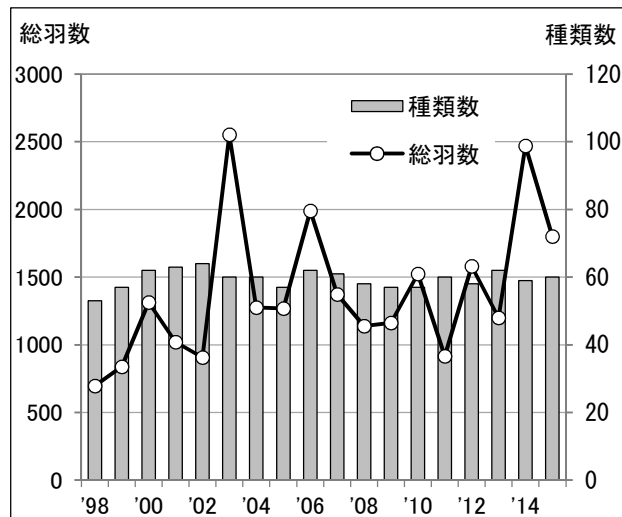
上流側から中央線鉄橋を望む 2014. 4. 9



遠く上流方向に多摩大橋を望む 2014. 4. 9

(3) 確認された全野鳥の経年変化

羽数は下図で見る通り 2003 年と 2014 年が突出しているが、それ以外の年では大きな経年変化は認められない。なお、2003 年はムクドリ 1 種で 1,000 羽、2014 年はカワラヒワ 1 種で 1,000 羽を記録している。種類数は毎年 60 種前後で大きな変動はなく推移している。



(4) 確認された野鳥の概要

18年間で確認された野鳥の種類数は次表の通り98種、これに外来種8種(カワラバト(ドバト)、ガビチョウ、コジュケイ、カオグロカビチョウ、ベニスズメ、ガチョウ、雑種ガモ、ワカケホンセイインコ)を加えると106種になる。留鳥が最も多く42種(43%)、次いで冬鳥35種(36%)、夏鳥13種(13%)、旅鳥8種(8%)の順である。

出現頻度では18年間(毎年)観察された種が39種、1年しか観察されなかった種が12種であった。羽数の上位10種は、多い順から並べるとカワラヒワ、スズメ、ムクドリ、ヒヨドリ、カワウ、ツバメ、ツグミ、コガモ、ダイサギ、ホオジロである。

確認された野鳥の種類数 98種 (1/2)

季節区分別	出現頻度別(年)	出現羽数別(羽)
留鳥	キジ	188 カワラヒワ
留鳥	カルガモ	161 スズメ
留鳥	カイツブリ	146 ムクドリ
留鳥	キジバト	124 ヒヨドリ
留鳥	カワウ	99 カワウ
留鳥	ゴイサギ	84 ツバメ
留鳥	アオサギ	77 ツグミ
留鳥	ダイサギ	41 コガモ
留鳥	コサギ	34 ダイサギ
留鳥	バン	29 ホオジロ
留鳥	ヒメアマツバメ	18 イソシギ
留鳥	イカルチドリ	28 カシラダカ
留鳥	イソシギ	27 シジュウカラ
留鳥	トビ	25 オナガ
留鳥	オオタカ	24 キジバト
留鳥	ノスリ	22 カルガモ
留鳥	カワセミ	16 ハシボソガラス
留鳥	コゲラ	16 コサギ
留鳥	オナガ	15 ハクセキレイ
留鳥	アカゲラ	14 ハシボソガラス
留鳥	アオゲラ	11 セグロセキレイ
留鳥	チョウゲンボウ	11 オオヨシキリ
留鳥	モズ	11 オナガガモ
留鳥	カケス	11 シメ
留鳥	オナガ	10 アオサギ
留鳥	ハシボソガラス	10 イワツバメ
留鳥	ハシボソガラス	10 エナガ
留鳥	シジュウカラ	10 ヒドリガモ
留鳥	ヒバリ	9 モズ
留鳥	ヒヨドリ	9 タヒバリ
留鳥	ウグイス	9 アオジ
留鳥	エナガ	9 ウグイス
留鳥	メジロ	8 キジ
留鳥	セッカ	6 コシアカツバメ
留鳥	ムクドリ	6 メジロ
留鳥	イソヒヨドリ	6 ジョウビタキ
留鳥	スズメ	5 カイツブリ
留鳥	キセキレイ	4 セッカ
留鳥	ハクセキレイ	4 カシラダカ
留鳥	セグロセキレイ	4 ペニマシコ
留鳥	カワラヒワ	4 カワセミ
留鳥	イカル	4 イカルチドリ
留鳥	ホオジロ	4 ヒメアマツバメ
留鳥	オカヨシガモ	3 トビ
冬鳥	ヨシガモ	3 アトリ
冬鳥	ヒドリガモ	3 ペニマシコ
冬鳥	マガモ	3 バン
冬鳥	ハシビロガモ	3 キセキレイ
冬鳥	オナガガモ	3 コゲラ
冬鳥	コガモ	3 マガモ
冬鳥	キンクロハジロ	3 イソシギ
冬鳥	クイナ	3 ユリカモメ
冬鳥	オオバン	2 マヒワ
冬鳥	オオバン	2 ノスリ
冬鳥	タシギ	2 コチドリ
冬鳥	クサシギ	2 オオタカ
冬鳥	ユリカモメ	2 カケス
冬鳥	カモメ	1 チョウゲンボウ
冬鳥	セグロカモメ	1 カモメ

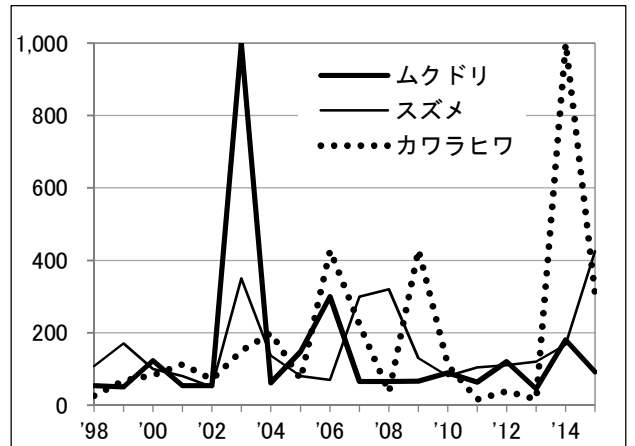
確認された野鳥の種類数 98種 (2/2)

季節区分別	出現頻度別(年)	出現羽数別(羽)
冬鳥	ミサゴ	8 ゴイサギ
冬鳥	ハイタカ	8 ササゴイ
冬鳥	アリスイ	8 カッコウ
冬鳥	ハヤブサ	8 カケス
冬鳥	シロハラ	6 チュウサギ
冬鳥	アカハラ	6 ハイタカ
冬鳥	ツグミ	5 ホトギス
冬鳥	ジョウビタキ	5 コチドリ
冬鳥	タヒバリ	5 ミサゴ
冬鳥	アトリ	5 ツミ
冬鳥	マヒワ	5 アカゲラ
冬鳥	ペニマシコ	5 アオゲラ
冬鳥	シメ	5 ノビタキ
冬鳥	ホオアカ	4 クイナ
冬鳥	コホオアカ	4 ツツドリ
冬鳥	カシラダカ	4 イソヒヨドリ
冬鳥	ミヤマホオジロ	4 マヒワ
冬鳥	アオジ	3 オカヨシガモ
冬鳥	クロジ	3 ヨシゴイ
冬鳥	オオジュリン	3 カモメ
夏鳥	ヨシゴイ	3 アリスイ
夏鳥	ササゴイ	3 チコモズ
夏鳥	ホトギス	3 アトリ
夏鳥	ツツドリ	2 キンクロハジロ
夏鳥	カッコウ	2 アマツバメ
夏鳥	コチドリ	2 タシギ
夏鳥	ツミ	2 センダイムシクイ
夏鳥	チコモズ	2 シロハラ
夏鳥	ツバメ	2 ホオアカ
夏鳥	コシアカツバメ	1 ヨシガモ
夏鳥	イワツバメ	1 ハシビロガモ
夏鳥	センダイムシクイ	1 アマサギ
夏鳥	オオヨシキリ	1 ケリ
旅鳥	アマサギ	1 オオジシギ
旅鳥	チュウサギ	1 クサシギ
旅鳥	アマツバメ	1 コムクドリ
旅鳥	ケリ	1 エゾビタキ
旅鳥	オオジシギ	1 イカル
旅鳥	コムクドリ	1 コホオアカ
旅鳥	ノビタキ	1 ミヤマホオジロ
旅鳥	エゾビタキ	1 クロジ

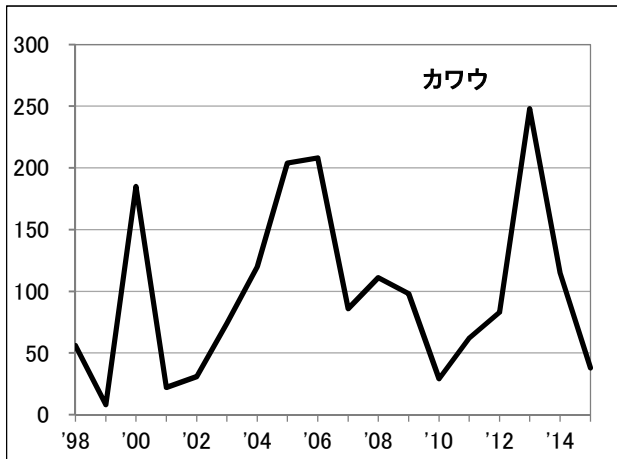
出現羽数は年最大値の年平均、0は1羽未満

(5) 主な野鳥の動向、特徴等

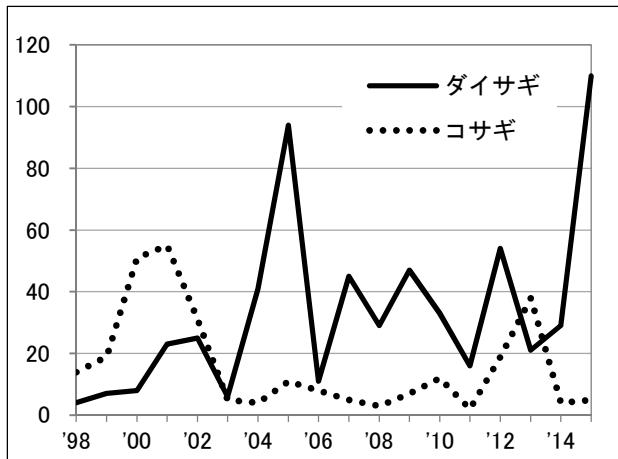
出現した羽数で最も多かった3種の経年変化は下図のとおりで、突出した2003年のムクドリ、2014年のカワラヒワを除けば大きな変動は認められない。



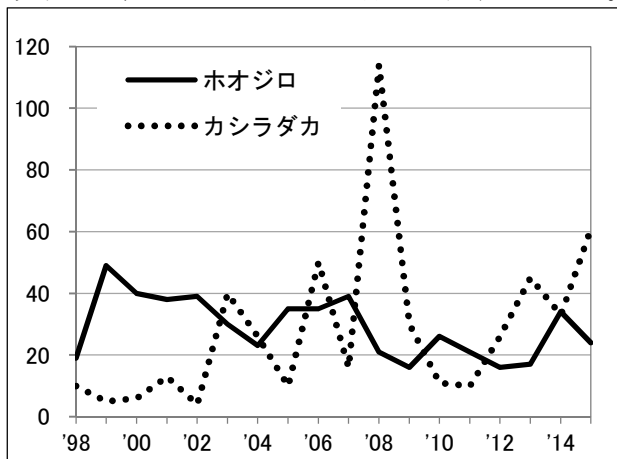
5番目に多いカワウの動向は次図の通りで、年次別変動が大きく、200羽以上が記録された年と50羽以下の年がある。ただし、カワウは日により広範囲に移動するので、50羽以下の年はたまたまカウントの日時にカウントコースに飛来していなかった可能性がある。



サギの仲間はダイサギとコサギが毎年観測され、このコースではダイサギの方が多い傾向にある。両種とも年次変化が大きく、増減傾向は読み取れない。



ホオジロの仲間はホオジロとカシラダカが毎年観測され、カシラダカは100羽を超える年もあった。



(6) 特記事項

①コースの様子

カウント時は砂利又はアスファルト舗装で整備された土手を歩くので、比較的安全であるが、ウォーキング、ジョギングなどの人も多く、迷惑を掛けないようにしてはならない。

②大規模河川改修

このコースでは、近年大規模な河川改修工事が行われ、河川敷林が失われた後、ノスリなどの木に留まって獲物探しをする鳥やアカゲラなどは見られなくなった。このような影響が、どのような形で今後現れるのか、今後の観察を待ちたい。なお、多摩川本流と右岸土手の間に仮設の水路がつけられた。

③姿を消した野鳥

ササゴイ、ユリカモメなどは近年は見られなくなり、カッコウも何年も確認出来ていない。

④カワセミ

カワセミは毎回2羽～8羽の範囲でカウントされる。最も多かった8羽は2010年3月29日のカウント時のものである。

⑤オオジシギ

2002年4月7日のカウントでオオジシギ1羽が観察された。観察された場所は谷地川・浄化施設、東光寺グラウンド下流側から桜並木にかけてのヨシ原で、9時30分、ヨシ原の上を、ものすごいスピードで鳴きながら飛び回り、時々急降下したり、一旦舞い降りた後再び飛び上がったりを繰り返した。

⑥ハイイロチョウヒ

谷地川河口付近で1997年1月～2月にハイイロチョウヒのメス型1羽が確認された。これは鳥信の記録で、「若鳥かメス成鳥かは確認できず、谷地川左岸のヨシ原の上をゆっくり旋回しては、時々、急降下を繰り返し餌を探しているようでした。夕暮れでも腰（上尾筒）羽がくつきり白く、風切下面の縞模様も見えました。17時過ぎ、アシ原に降りた後、再び飛び上がる。」と記載されている。

⑦ベニスズメ、ワカケホンセイインコ

外来種のベニスズメは1999年、ワカケホンセイインコが2003年に記録されたが、一時的なものであった。

⑧カオグロガビチョウ

このコースでは外来鳥のカオグロガビチョウの数羽程度の小集団が2006年以降、度々観察されている。

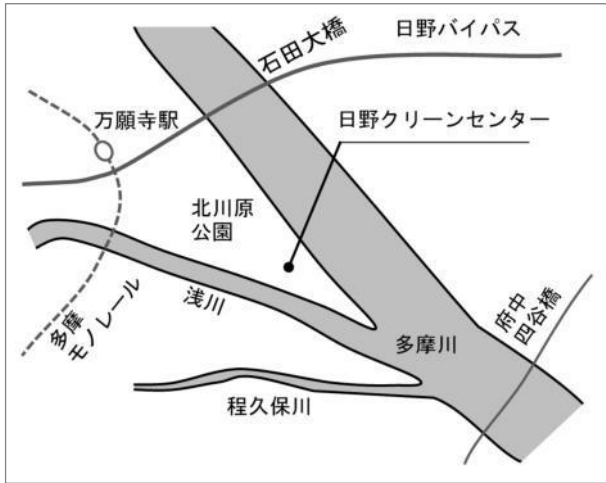
⑨ツバメ

2015年に通称ひょうたん池から約700m下流に復活したヨシ原にツバメの集団ねぐらが形成された。このねぐらは2016年には通称ひょうたん池縁のヨシ原に移動した。

12. 多摩川（浅川合流付近）

(1) コースの概要

多摩川が浅川と合流する地点から多摩川の上流右岸、石田大橋までの区間、延長 1,400m、幅員 250m、面積 350,000 m²の河川敷である。多摩川と浅川の間には三面張りの根川が流れ、クリーンセンターまでは道路が整備され、道路と並行して歩行者とサイクリング用の通路が整備されている。多摩川の流れは遠く、通路からは見ることはできない。コースの中程に多摩川河口から 38km を示す標柱がある。2013 年から随時区域を限定し、ハリエンジュなどの外来植物を駆除し河原の再生工事が行われている。日野クリーンセンター付近の河原にワンドが形成されている。



コース概念図



下流より上流を望む、左側が多摩川 2015. 8. 9

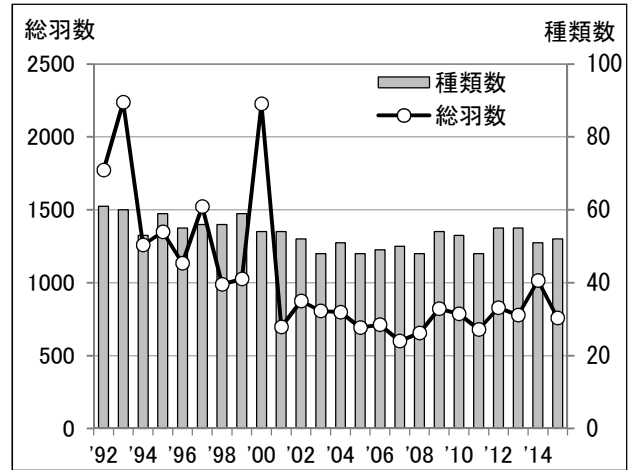
(2) 調査期間及び担当者

カウント開始年は 1992 年 1 月で現在まで 24 年間継続中である。

- 1992 年～1994 年 阿江範彦
- 1995 年～2012 年 柚木育子、柚木鎮夫、阿江範彦
- 2013 年～現在 阿江範彦

(3) 確認された全野鳥の経年変化

1992 年、2000 年と羽数が突出しているのは、カワウの大群が大きく影響している。羽数及び種類数共減少傾向にある。



(4) 確認された野鳥の概要

確認された野鳥は 101 種（外来種を含めると 109 種）である。内訳は留鳥が 45 種（45%）、冬鳥が 37 種（37%）、夏鳥が 11 種（11%）、旅鳥が 8 種（8%）である。

確認された野鳥の種類数：101 種（1/2）

季節区分別	出現頻度別(年)	出現羽数別(羽)
留鳥	キジ	24
留鳥	カルガモ	24
留鳥	カイツブリ	24
留鳥	キジバト	24
留鳥	カワウ	24
留鳥	ゴイサギ	24
留鳥	アオサギ	24
留鳥	ダイサギ	24
留鳥	コサギ	24
留鳥	バン	24
留鳥	ヒメアマツバメ	24
留鳥	イカルチドリ	24
留鳥	イソシギ	24
留鳥	トビ	24
留鳥	オオタカ	24
留鳥	ノスリ	24
留鳥	カワセミ	24
留鳥	ヤマセミ	24
留鳥	コゲラ	24
留鳥	アカゲラ	24
留鳥	アオゲラ	24
留鳥	チョウゲンボウ	24
留鳥	モズ	24
留鳥	カケス	24
留鳥	オナガ	24
留鳥	ハシボソガラス	24
留鳥	ハシブトガラス	24
留鳥	コガラ	24
留鳥	ヤマガラ	24
留鳥	シジュウカラ	24
留鳥	ヒバリ	24
留鳥	ヒヨドリ	24
留鳥	ウグイス	24
留鳥	エナガ	23
留鳥	メジロ	23
留鳥	セッカ	21
留鳥	ムクドリ	21
留鳥	イソヒヨドリ	21
留鳥	スズメ	20
留鳥	キセキレイ	19
留鳥	ハクセキレイ	19
留鳥	セグロセキレイ	19
留鳥	カワラヒワ	19
留鳥	イカル	18
留鳥	ホオジロ	17
冬鳥	マガン	17
冬鳥	オオハクチョウ	15
冬鳥	オカヨシガモ	15
冬鳥	ヒドリガモ	14
留鳥	キジ	166
留鳥	カワウ	99
留鳥	スズメ	72
留鳥	ヒヨドリ	70
留鳥	ムクドリ	54
留鳥	コガモ	47
留鳥	コサギ	36
留鳥	ユリカモメ	35
留鳥	カルガモ	34
留鳥	ツグミ	31
留鳥	ホオジロ	29
留鳥	ハシボソガラス	25
留鳥	シジュウカラ	25
留鳥	ツバメ	24
留鳥	キジバト	22
留鳥	ヒドリガモ	19
留鳥	ハクセキレイ	17
留鳥	ダイサギ	15
留鳥	ハマシギ	14
留鳥	タヒバリ	13
留鳥	アオジ	11
留鳥	オナガ	10
留鳥	イワツバメ	10
留鳥	セグロセキレイ	8
留鳥	シメ	8
留鳥	イカルチドリ	8
留鳥	アオサギ	8
留鳥	カシラダカ	8
留鳥	オカヨシガモ	7
留鳥	セッカ	7
留鳥	ヒバリ	7
留鳥	オナガガモ	7
留鳥	マガモ	6
留鳥	エナガ	6
留鳥	カイツブリ	6
留鳥	ショウドウツバメ	6
留鳥	ハシブトガラス	6
留鳥	メジロ	5
留鳥	オオヨシキリ	5
留鳥	コシアカツバメ	5
留鳥	モズ	5
留鳥	ウグイス	4
留鳥	イソシギ	4
留鳥	キセキレイ	4
留鳥	キジ	3
留鳥	ジョウビタキ	3
留鳥	カワセミ	3
留鳥	トビ	3
留鳥	コゲラ	2

確認された野鳥の種類数：101種 (2/2)

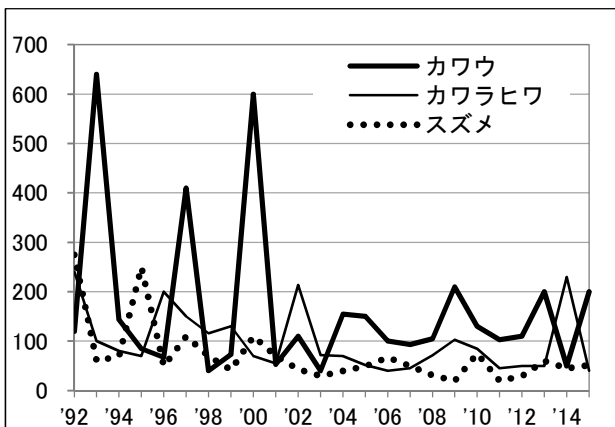
季節区分別	出現頻度別(年)	出現羽数別(羽)
冬鳥	マガモ	13 オカヨシガモ
冬鳥	ハンビロガモ	12 オナガガモ
冬鳥	オナガガモ	12 ゴイサギ
冬鳥	コガモ	12 ササゴイ
冬鳥	ホシハジロ	10 ベニマシコ
冬鳥	キンクロハジロ	9 ハシビロガモ
冬鳥	ミコアイサ	8 コシアカツバメ
冬鳥	クイナ	7 コチドリ
冬鳥	オオバン	6 ミコアイサ
冬鳥	タシギ	6 カッコウ
冬鳥	ハマシギ	6 ハヤブサ
冬鳥	ユリカモメ	5 タシギ
冬鳥	カモメ	5 キアシシギ
冬鳥	セグロカモメ	5 ハマシギ
冬鳥	ミサゴ	5 イカル
冬鳥	ハイタカ	4 ヒメアマツバメ
冬鳥	アリスイ	4 コムクドリ
冬鳥	ハヤブサ	3 オオバン
冬鳥	シロハラ	3 ハイタカ
冬鳥	アカハラ	3 ヤマセミ
冬鳥	ツグミ	3 アカゲラ
冬鳥	ジョウビタキ	3 シロハラ
冬鳥	ピンズイ	3 ウソ
冬鳥	タヒバリ	2 マガン
冬鳥	アトリ	2 アマサギ
冬鳥	マヒワ	2 クイナ
冬鳥	ベニマシコ	2 ツツドリ
冬鳥	ウソ	2 アカゲラ
冬鳥	シメ	2 カケス
冬鳥	カシラダカ	2 コガラ
冬鳥	ミヤマホオジロ	2 ヤマガラ
冬鳥	アオジ	2 アカハラ
冬鳥	オオジュリン	2 ノビタキ
夏鳥	ササゴイ	2 エゾビタキ
夏鳥	ツツドリ	2 オオジュリン
夏鳥	カッコウ	1 オオハクチョウ
夏鳥	コチドリ	1 ホシハジロ
夏鳥	コアジサシ	1 キンクロハジロ
夏鳥	ツバメ	1 アマツバメ
夏鳥	コシアカツバメ	1 アオアシシギ
夏鳥	イワツバメ	1 カモメ
夏鳥	センダイムシクイ	1 コアジサシ
夏鳥	オオヨシキリ	1 ミサゴ
夏鳥	キビタキ	1 アリスイ
旅鳥	アマサギ	1 ショウドウトツバメ
旅鳥	アマツバメ	1 センダイムシクイ
旅鳥	アオアシシギ	1 イソヒヨドリ
旅鳥	キアシシギ	1 キビタキ
旅鳥	ショウドウトツバメ	1 ピンズイ
旅鳥	コムクドリ	1 アトリ
旅鳥	ノビタキ	1 マヒワ
旅鳥	エゾビタキ	1 ミヤマホオジロ

出現羽数は年最大値の年平均、0は1羽未満

(5) 主な野鳥の動向、特徴等

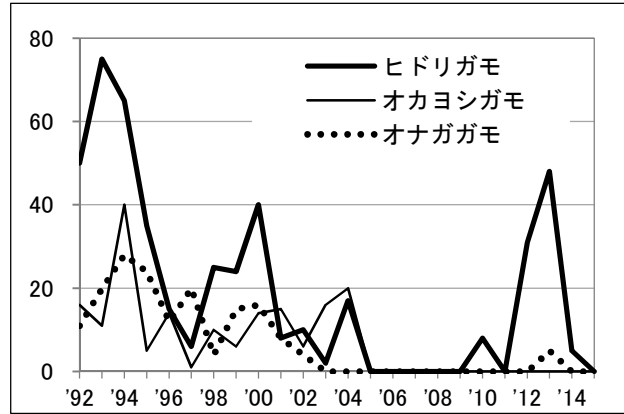
①羽数の多いベスト3種

カワウが1993年640羽、1997年410羽、2000年600羽と突出しているがスズメ、カワラヒワに大きな変化はない。



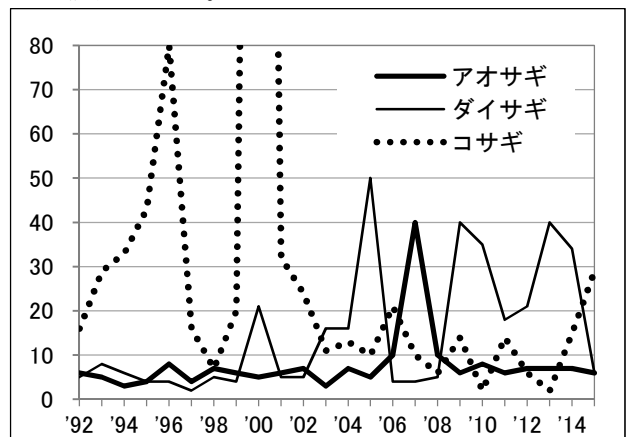
②減少したカモ3種

ヒドリガモ、オナガガモ、オカヨシガモの減少が顕著である。グラフにはないが、コガモは1992年の150羽を最大に2013年、15羽。2010年の6羽が最低、2014年は111羽となっている。ミコアイサは2001年以降は確認されていない。



③サギ3種

コサギが2000年に400羽、1995年に80羽記録されている。コサギは減少、ダイサギは増加傾向にある。



(6) 特記事項

①外来種

コジュケイ、カワラバト(ドバト)、ウスユキバト、ガビチョウ、ソウシチョウ、ベニスズメ、アヒル、バリケン等の8種。ガビチョウは2002年から出現し増加傾向にある。

②希少種ほか

2008年4月にヤツガシラ、2010年10月に白いチョウゲンボウが確認されている。

③繁殖

クリーンセンター前のワンドでは、バンとカイツブリの繁殖が確認されている。

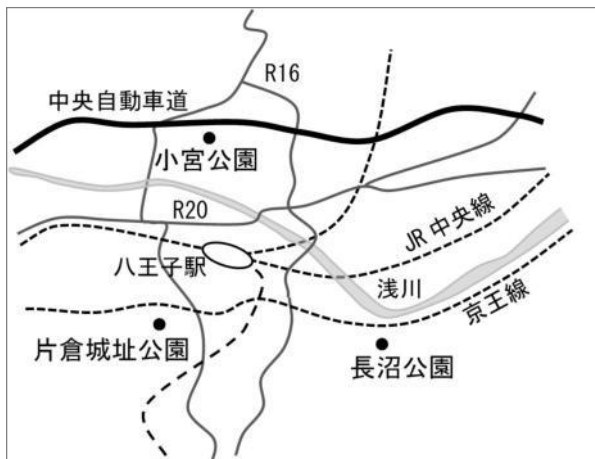
④その他

中央部の草地と隣接する北川原公園ではヒバリがよく観察される。

VI. 都市公園（小宮公園、片倉城跡公園、長沼公園）

<調査地区の概要>

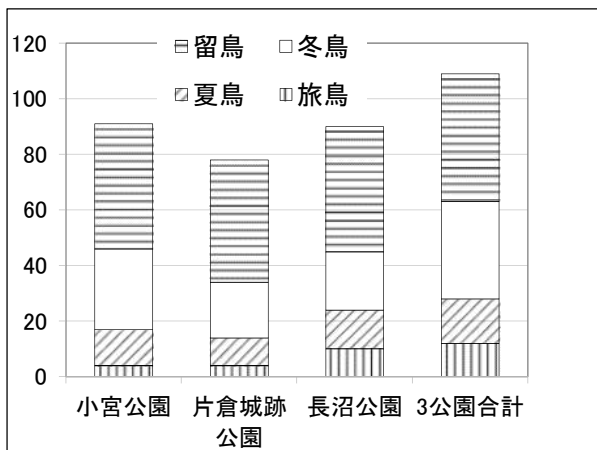
本調査地区は、八王子市内にある都市公園3地区で、所在地は下の地図のとおりである。特徴としては公園として整備され、雑木林、池、湧水、湿地、遊歩道、広場など、市民の憩いの場となっている。調査場所としては公園内だけでなく隣接する河川も含んでいる。調査開始は小宮公園が1987年と最も早く、片倉城跡公園が1989年、長沼公園が1992年となっている。



<確認された野鳥の種類>

(1) 野鳥の種類数

都市公園3地区で1987年～2015年までの定期カウントで観察された野鳥（外来種等除く）の種類数は109種類であった。これは、八王子・日野で過去に記録されたことのある野鳥244種の44%にあたる。季節区分では留鳥46種、冬鳥35種、夏鳥16種、旅鳥12種で留鳥と冬鳥の2区分だけで全体の74%を占める。小宮公園91種、長沼公園90種と比較し、片倉城跡公園は78種と少ない。



定期カウントで観察された全野鳥 (109種)

	種名
留鳥	スズメ、ヒヨドリ、ムクドリ、シジュウカラ、カワラヒワ、メジロ、エナガ、ハシブトガラス、ハシボソガラス、キジバト、カルガモ、ヤマガラ、コゲラ、オナガ、ウグイス、イカル、ホオジロ、モズ、ハクセキレイ、カケス、ヒメアマツバメ、アオゲラ、キジ、ヒガラ、セグロセキレイ、キセキレイ、トビ、カワウ、カワセミ、キクイタダキ、コサギ、アオサギ、ヒバリ、アカゲラ、オオタカ、チョウゲンボウ、ノスリ、イソシギ、コガラ、ミソサザイ、ダイサギ、アオバト、セッカ、ゴイサギ、バン、カイツブリ (46種)
夏鳥	ツバメ、イワツバメ、キビタキ、ヤブサメ、ホトトギス、コサメビタキ、センダイムシクイ、オオルリ、ツツドリ、サンショウクイ、クロツグミ、サンコウチョウ、カッコウ、オオヨシキリ、ヒクイナ、ツミ (16種)
冬鳥	カシラダカ、ツグミ、アオジ、シメ、マヒワ、ジョウビタキ、コガモ、ルリビタキ、シロハラ、ビンズイ、ウソ、ユリカモメ、アカハラ、マガモ、タヒバリ、オナガガモ、クロジ、ヒレンジャク、ミヤマホオジロ、ハイタカ、ゴジュウカラ、カヤクグリ、ヒドリガモ、ハヤブサ、キレンジャク、ハシビロガモ、アトリ、セグロカモメ、クイナ、キンクロハジロ、ヤマシギ、タシギ、ホオアカ、オオジュリン、トラツグミ (35種)
旅鳥	アマツバメ、エゾビタキ、サンバ、コムクドリ、マミチャジナイ、ノビタキ、コマドリ、メボソムシクイ、エゾムシクイ、コルリ、サメビタキ、マミジロ (12種)

(2) 出現頻度が高い野鳥

都市公園3地区の定期カウントデータが存在する1992年～2015年まで24年間に、毎年観察された野鳥は下表の15種であった。ツバメ、ツグミは渡ってくる季節にしか見られないが、個体数が多いため、毎年確認されていると思われる。

種名	季節区分
キジバト	留鳥
コゲラ	留鳥
モズ	留鳥
ハシボソガラス	留鳥
ハシブトガラス	留鳥
シジュウカラ	留鳥
ヒヨドリ	留鳥
メジロ	留鳥
ムクドリ	留鳥
スズメ	留鳥
カワラヒワ	留鳥
エナガ	留鳥
ヤマガラ	留鳥
ツバメ	夏鳥
ツグミ	冬鳥

(3) 出現羽数が多い野鳥

3 公園で出現羽数（年最大羽数の 1992 年～2015 年累計数）が多い野鳥のトップ 10 は下表のとおりである。この中でカシラダカ、ツバメ以外は一年中見られる留鳥である。冬鳥のカシラダカは多数の群れで渡来する、夏鳥のツバメは公園に隣接する住宅地に多く渡来するため、累計数が大きくなっていると思われる。

種名	年最大羽数 (累計)	年平均羽数
スズメ	4,958	207
ヒヨドリ	4,124	172
ムクドリ	2,965	124
シジュウカラ	2,606	109
メジロ	1,991	83
カワラヒワ	1,798	75
カシラダカ	1,658	69
エナガ	1,425	59
ハシブトガラス	1,291	54
ツバメ	1,104	46

(注：年平均羽数は四捨五入)

(4) 数が少ない野鳥

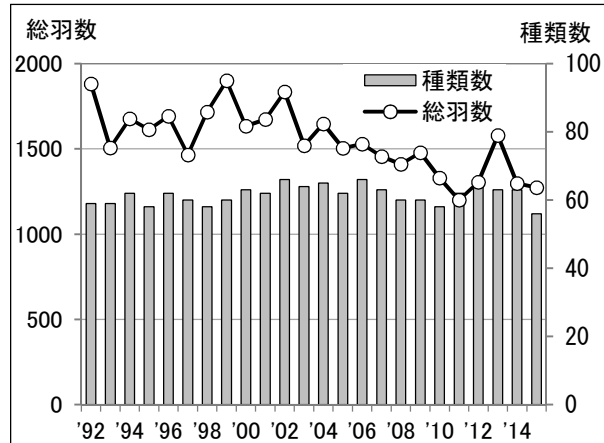
下表の野鳥 12 種は、3 公園では過去 1 回（1 羽）しか観察されていない。冬鳥や旅鳥が多いことがわかる。この中で留鳥のカイツブリは他の地域では比較的良好に見られるが、都市公園 3 地区には生息できる環境がほとんどないため数が少ないと思われる。

種名	季節区分
カイツブリ	留鳥
ヒクイナ	夏鳥
キンクロハジロ	冬鳥
ヤマシギ	冬鳥
ホオアカ	冬鳥
オオジュリン	冬鳥
タシギ	冬鳥
メボソムシクイ	旅鳥
エゾムシクイ	旅鳥
マミジロ	旅鳥
コルリ	旅鳥
サメビタキ	旅鳥

<確認された野鳥の年次変動>

(1) 野鳥全体の年次変動（最大羽数、種類数）

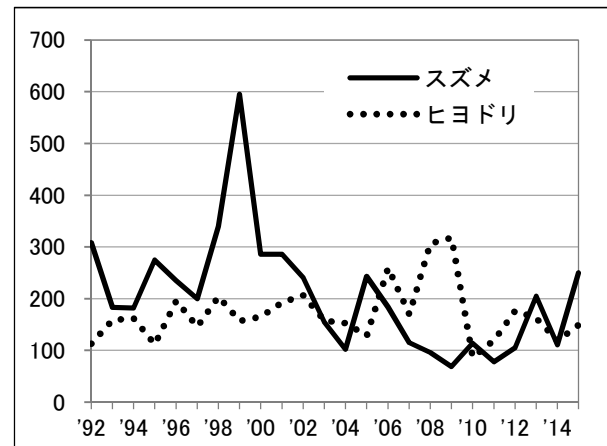
3 公園での 24 年間の野鳥の最大羽数と種類数の推移を下表に示す。羽数については減少傾向にあるのがわかる。種類数については年間 60 種前後と大きな変化は見られない。



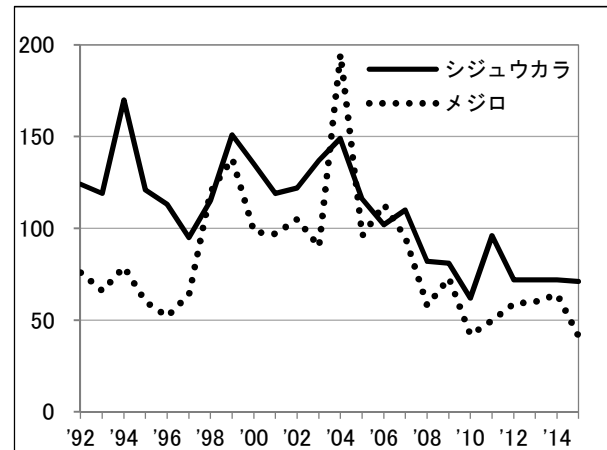
(2) 代表的な野鳥の年次変動

①スズメ、ヒヨドリ

スズメは 2000 年代に入ってから減少していると思われる。



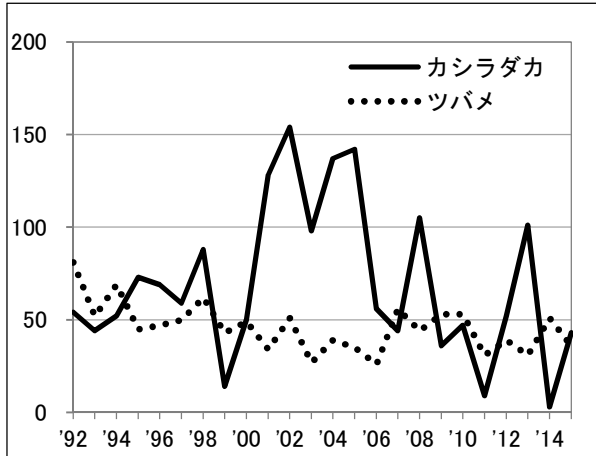
②シジュウカラ、メジロ



カラ類のシジュウカラ、メジロは公園の雑木林などに多い野鳥であるが、2005年以降は減少傾向にある。

③カシラダカ、ツバメ

夏鳥のツバメは大きな変動はない。冬鳥のカシラダカは多数の群れで渡来する場合があります、年次変動が大きくなっている。



(3) 外来鳥等について

これまでの数値には含めていないが、外来鳥等で都市公園3地区で確認されている野鳥は以下のとおりである。

コジュケイ、カワラバト（ドバト）、ガビチョウ、ソウシチョウ、ベニスズメ、アヒル、雑種ガモ、ガチョウ

この中でガビチョウは以下のグラフのとおり、2000年直前から野生化して急激に個体数を増やしていることがわかる。



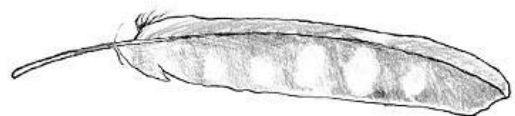
若山牧水が日野市のウズラを詠む

大酒のみの歌人として知られる若山牧水は、43歳の若さで亡くなるまで全国各地を自らの足で歩き自然を愛し、朗詠し、歌を作っていた。牧水の年譜を見ると大正八年に日野市や高尾山を訪れ次のような歌を作っている。

家につづく有明白き萱原に露さはなれや鶉しば啼く（日野にて）「海の声」

春の夜の匂へる闇のおちちちによこたはるなり木の目ふく山（高尾山にて）「海の声」

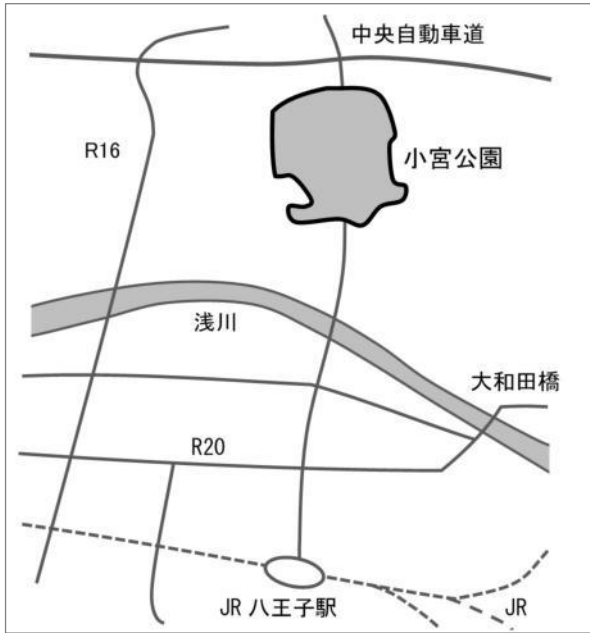
日野で詠んだ「鶉しば啼く」のウズラは現在では野生のものはこの地では絶滅したとされているが、この時代には生息していたことが推測される。



13. 小宮公園

(1) コースの概要

小宮公園は、JR 八王子駅の北方 1.8km にあり、浅川北岸の加住丘陵に造られた都立公園で、広さ約 25 万 m² である。公園内はコナラ、クヌギなどで雑木林を形成し、小さな流れに沿って散策の木道が延びている。下流には小さな池、弁天池があり、弁天様が祭られている。公園の大部分はなだらかな傾斜の雑木林だが、西側にはお花畑が作られて開け、また標高 160m の頂上部は広々とした芝地になっている。この雑木林は薪炭や落ち葉集めなどのため、長年にわたり手入れされてきた二次林であり、大木は見当たらない。今でも更新地が部分的に作られている。都立の公園として散策の道は良く整備され、林内も一部を残して下草が刈られ見通しがよくなっている。公園の西および南側は住宅地に接しており、東および北側は畑で開けている。



コース概念図



小宮公園の木道 2015. 6. 6

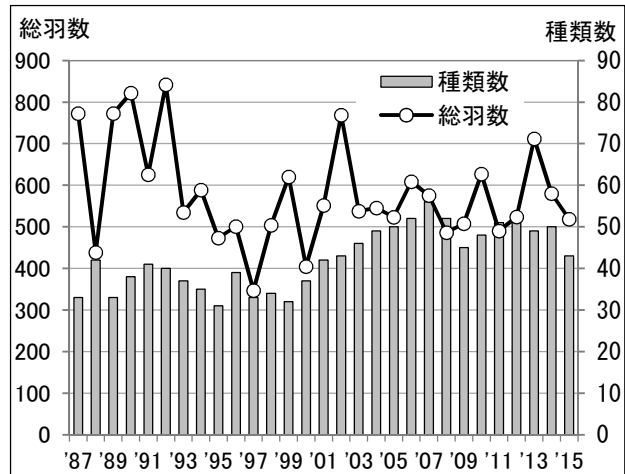
(2) 調査期間及び担当者

カウントは 1987 年 1 月から開始し、現在まで 29 年間継続して実施している。

1987 年	粕谷和夫
1988 年	榛沢努
1989 年～2001 年	田中英吉
2002 年～2012 年	大川征治
2013 年～ 現在	久保山嘉男

(3) 確認された全野鳥の経年変化

羽数は 1992 年をピークに減っていたが、2002 年頃から 600 羽前後で横ばい状態である。種数については、多少バラツキはあるが、40～50 種程度で推移している。



(4) 確認された野鳥の種類数

1987 年から 2015 年までの 29 年間の定期カウントで記録した野鳥の種類は 91 種、その中で 29 年間毎年確認（出現）している野鳥は 19 種、また 28 年間で 1 羽しか確認しなかった野鳥は 15 種であった。季節区別では、留鳥が 43 種、冬鳥が 30 種、夏鳥が 14 種、旅鳥が 4 種であった。出現羽数は、種毎に各年の最大確認羽数を 29 年で除した年平均の羽数である。スズメが 93 羽と最も多く、次にムクドリ、カシラダカ、ヒヨドリは 50 羽以上となっている。

観測された野鳥の種類数：91 種 (1/2)

季節区別	出現頻度別(年)	出現羽数別(羽)
留鳥	29 キジ	93 スズメ
留鳥	29 カルガモ	69 ムクドリ
留鳥	29 キジバト	55 カシラダカ
留鳥	29 アオバト	50 ヒヨドリ
留鳥	29 カワウ	29 シジュウカラ
留鳥	29 ゴイサギ	32 カワラヒワ
留鳥	29 アオサギ	19 ハシボソガラス
留鳥	29 ダイサギ	18 ツグミ

観測された野鳥の種類数：91種 (2/2)

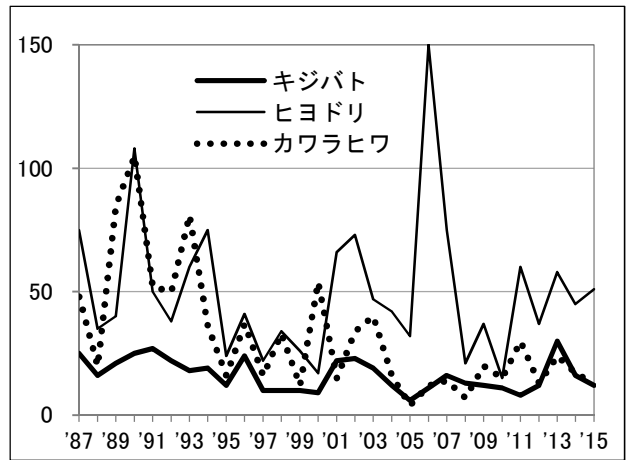
季節区分別	出現頻度別(年)	出現羽数別(羽)
留鳥	コサギ	29 シジュウカラ
留鳥	ヒメアマツバメ	29 ツバメ
留鳥	トビ	29 ヒヨドリ
留鳥	オオタカ	29 メジロ
留鳥	ノスリ	29 ムクドリ
留鳥	カワセミ	29 ツグミ
留鳥	コゲラ	29 スズメ
留鳥	アカゲラ	29 ハクセキレイ
留鳥	アオゲラ	29 カワラヒワ
留鳥	チョウゲンボウ	29 シメ
留鳥	モズ	29 ホオジロ
留鳥	カケス	28 エナガ
留鳥	オナガ	28 ジョウビタキ
留鳥	ハシボソガラス	28 アオジ
留鳥	ハシブトガラス	27 ヤマガラ
留鳥	キクイタダキ	27 ウグイス
留鳥	コガラ	27 カシラダカ
留鳥	ヤマガラ	25 シロハラ
留鳥	ヒガラ	25 ルリビタキ
留鳥	シジュウカラ	24 カケス
留鳥	ヒバリ	23 オナガ
留鳥	ヒヨドリ	22 トビ
留鳥	ウグイス	22 イカル
留鳥	エナガ	21 ヒバリ
留鳥	メジロ	21 イワツバメ
留鳥	セッカ	21 キセキレイ
留鳥	ミソサザイ	19 キビタキ
留鳥	ムクドリ	15 アカゲラ
留鳥	スズメ	14 カワセミ
留鳥	キセキレイ	13 マガモ
留鳥	ハクセキレイ	13 チョウゲンボウ
留鳥	セグロセキレイ	13 セグロセキレイ
留鳥	カワラヒワ	12 ノスリ
留鳥	イカル	12 アカハラ
留鳥	ホオジロ	10 アオサギ
冬鳥	マガモ	10 オオタカ
冬鳥	オナガガモ	10 トラツグミ
冬鳥	コガモ	10 ビンズイ
冬鳥	キンクロハジロ	9 コサギ
冬鳥	ヤマシギ	9 ヒメアマツバメ
冬鳥	タシギ	9 ツミ
冬鳥	ユリカモメ	9 コサメビタキ
冬鳥	セグロカモメ	8 アオバト
冬鳥	ハイタカ	7 ホトギス
冬鳥	ハヤブサ	7 ヒガラ
冬鳥	キレンジャク	7 セッカ
冬鳥	ヒレンジャク	6 カワウ
冬鳥	ゴジュウカラ	6 ダイサギ
冬鳥	トラツグミ	6 ヤブサメ
冬鳥	シロハラ	6 ミソサザイ
冬鳥	アカハラ	5 アオバト
冬鳥	ツグミ	5 ハイタカ
冬鳥	ルリビタキ	5 エゾビタキ
冬鳥	ジョウビタキ	5 マヒワ
冬鳥	カヤクグリ	4 ツツドリ
冬鳥	ビンズイ	4 アマツバメ
冬鳥	タヒバリ	4 キクイタダキ
冬鳥	マヒワ	4 ミヤマホオジロ
冬鳥	ウソ	3 ユリカモメ
冬鳥	シメ	3 センダイムシクイ
冬鳥	ホオアカ	3 ヒレンジャク
冬鳥	カシラダカ	3 タヒバリ
冬鳥	ミヤマホオジロ	2 サンショウクイ
冬鳥	アオジ	2 キレンジャク
冬鳥	クロジ	2 ゴジュウカラ
夏鳥	ホトギス	2 コムクドリ
夏鳥	ツツドリ	2 オオルリ
夏鳥	カッコウ	2 ウソ
夏鳥	ツミ	1 オナガガモ
夏鳥	サンショウクイ	1 キンクロハジロ
夏鳥	サンコウチョウ	1 ゴイサギ
夏鳥	ツバメ	1 カッコウ
夏鳥	イワツバメ	1 ヤマシギ
夏鳥	ヤブサメ	1 タシギ
夏鳥	センダイムシクイ	1 セグロカモメ
夏鳥	クロツグミ	1 ハヤブサ
夏鳥	コサメビタキ	1 サンコウチョウ
夏鳥	キビタキ	1 コガラ
夏鳥	オオルリ	1 クロツグミ
旅鳥	アマツバメ	1 ノビタキ
旅鳥	コムクドリ	1 カヤクグリ
旅鳥	ノビタキ	1 ホオアカ
旅鳥	エゾビタキ	1 クロジ

出現羽数は年最大値の年平均、0は1羽未満

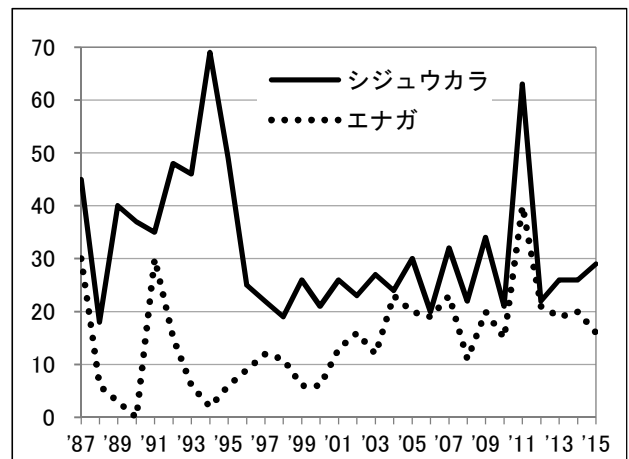
(5) 主な野鳥の動向、特徴等

出現数の多いスズメ、ムクドリ、カシラダカは、いずれも年によって大きく変動がある。最も出現羽数の多いスズメは、1999年に380羽と突出して多く、次に1988年の230羽、100羽以上だった年は11年である。次に多いムクドリは、1992年に220羽、次に2010年に160羽であった。3番目に多いカシラダカは、1989年に300羽、次の年の1990年に270羽を記録している。

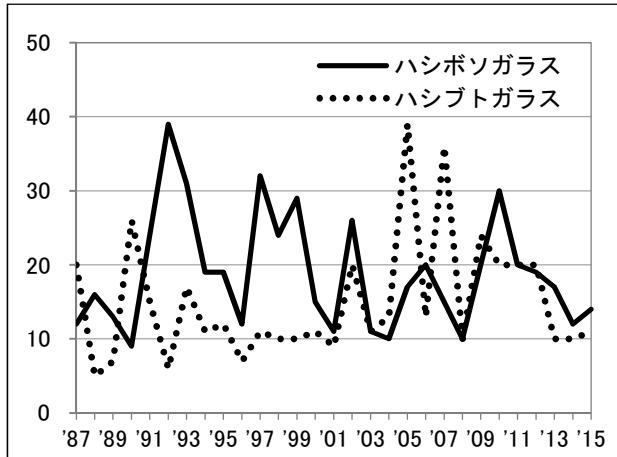
一年を通して見られる留鳥の代表的な3種の動向を見ると、ヒヨドリは、年によって変化が大きく、カワラヒワは減少傾向にあり、キジバトは変化が小さい。



また代表的な野鳥2種では、シジュウカラは1995年以前は約40羽、それ以降は20羽~30羽とやや減少傾向にある。



カラス2種の動向を次ページグラフに示す。年によって変動が大きい、全体としてはほぼ横ばいと言える。



他には、ヒレンジャク、キレンジャク数羽～十数羽が、ほぼ例年3月頃にヤブランの実を食べに寄るが、滞在が数日間のため、月1回の定期カウント日と重なることが少なく、カウントの記録が少ない。

キビタキは1994年から1羽、2004年には2羽、2014年には5羽がカウントされており、増加傾向にある。ガビチョウは、2001年に初めてカウントされ、その後増加し続け、2014年には19羽がカウントされている。

(6) 特記事項 (営巣)

公園内は林や竹藪が多く、野鳥が営巣する環境が整っているため、毎年、多くの野鳥が営巣、子育てしている。コゲラやアオゲラがコナラやクヌギなどの木に穴を開けて営巣、シジュウカラなどがその古い穴を利用して営巣、キジ、コジュケイが藪の中で営巣、子連れで歩く姿を見ることがある。高い木ではカラスの巣があちこちに見られ、カワセミが池の縁で営巣したこともある。周囲の森ではここ数年連続してオオタカの営巣が見られる。2015年にはキビタキの親2羽と子3羽の親子連れが観察された。



キジバトのマチバト化

よく見かける「ハト」には2種類ある。鳴き声が「デデッポッポー」と聞えるキジバトと「クルックー」のドバト。キジバトはウロコ模様の背中、首に青白黒のシンボルマークがある。

キジバトは、昔「やまばと(山鳩)」と言われた。都会よりも田舎に住んでいるのがキジバトとも言われた。川内博著「大都会を生きる野鳥たち(1997 地人書館)」に以前のキジバトの行動が以下のように紹介されている。

「1950年代までは東京都心部ではごく稀に見かける冬鳥で、郊外でも数が少なく、かつ警戒心の非常に強い鳥である。」

今では、キジバトはごく普通に見られる野鳥である。繁殖もしている。カワセミ会の鳥信には、繁殖場所が、甲州街道アーケード・ビジネスホテルの玄関・街路樹・民家の庭木・民家の戸袋・デパートの納品所軒下・カラスの古巣・校庭の木など人の活動域で営巣している事例が多数報告されている。正にキジバトのマチバト化ではなかろうか。

最近では高尾山などで弁当を食べる人の足元に寄って来て餌をねだるキジバトがいる。キジバトのマチバト化を越えたカワラバト(ドバト)化現象ともいえるようになってきた。

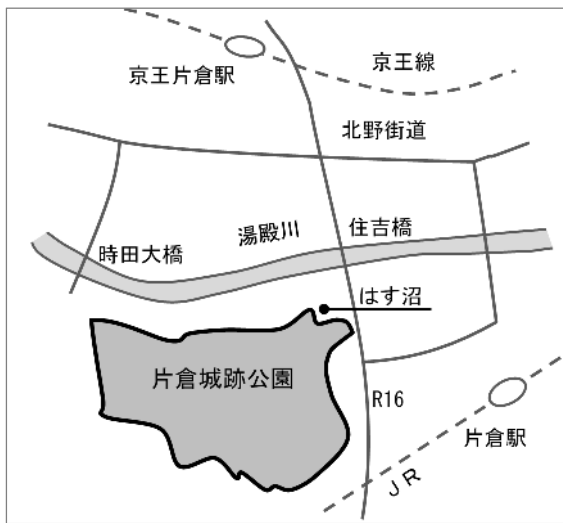
1 4 . 片倉城跡公園

(1) コースの概要

片倉城跡公園は室町時代に築城された片倉城の跡である。周辺の丘陵は開発によって、その原風景の多くを失ってしまったが、ここは、まだその面影を残している。入口付近には「はす沼」があり、ここからまっすぐに進んで急な階段を上ると住吉神社、さらにその上には本丸跡と二の丸跡を利用した芝生の広場がある。広場の西側は畑、北側の斜面は雑木林となっている。「はす沼」の西側の林の中には湧水があり、「片倉沢」や「奥の沢」と呼ばれる小さな流れを作っていて、それを受けける形で湿地や池があり、小規模ながらホタルが生息している。春先にはカタクリ、ニリンソウが咲き、付近一帯の雑木林は野鳥、昆虫、花木の生息地となっている。

この公園でカワセミ会が 1989 年に巣箱を架け、以後毎年 12 月に利用状況の調査と清掃を行っている。(詳細は別掲)

公園の広さは約 69,700 m²、定期カウント地はこの公園内と北側に隣接する湯殿川約 300m を含めた地域である。



コース概念図



雑木林の遊歩道 片倉城跡公園 2015. 3. 13

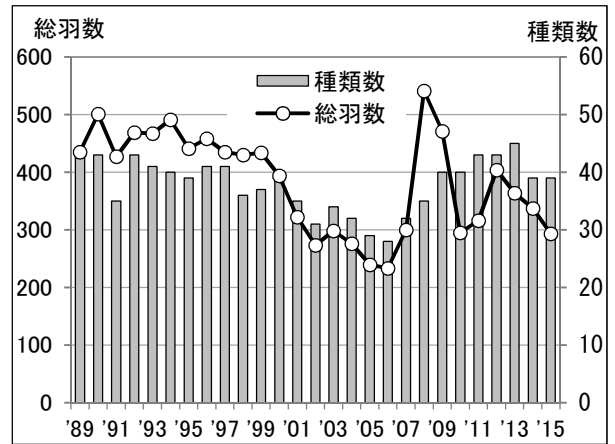
(2) 調査期間及び担当者

カウント開始は 1987 年で 29 年間実施している。

1987 年～1988 年	粕谷和夫、門口一雄
1989 年～1991 年	平沢辰夫、三富恒男
1992 年	門口一雄
1993 年	大関豊
1993 年～2007 年	小池一男
2007 年～2008 年	関三喜雄
2008 年～ 現在	浜野建男

(3) 確認された全野鳥の経年変化

毎年確認された野鳥の羽数の合計の経年変化を見ると、2008 年と 2009 年を除くと漸減傾向にある。種類数は 2005 年、2006 年に若干少ないが、それを除けば 34 種以上 40 種台の記録が継続し大きな変化は見られない。



(4) 確認された野鳥の概要

公園に隣接する湯殿川では、カルガモ、バン、イソシギ、セキレイ類、カワセミ、サギ類などが見られる。公園の雑木林ではカラ類、キツツキ類、キジバト、カラス類がよく確認される。本丸広場と畑に隣接する二の丸広場では、コジュケイ、ツグミ、飛翔する猛禽類、ハクセキレイなどが見られる。はす沼ではカワセミ、サギ類、カルガモなどが見られる。

1989 年～2015 年の定期カウントで記録された野鳥の種類は 78 種、その中で 27 年間毎年確認されている野鳥が 22 種ある。また 27 年間で 1 回しか記録されていない鳥が 14 種ある。

季節区別では、留鳥が 42 種、冬鳥が 21 種、夏鳥が 11 種、旅鳥が 4 種であった。

猛禽と夏鳥が少ないが、猛禽は飛翔しているのを確認できる空が開けた場所が少ないため、また夏鳥などは渡りの途中で一時的に公園内に留まるときにしか確認できないためと思われる。

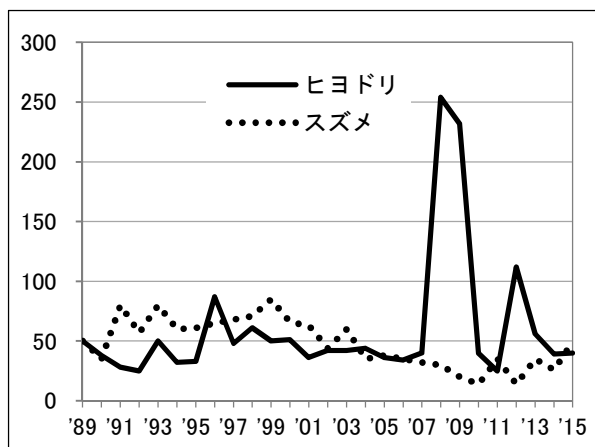
確認された野鳥の種類数：78種

季節区分別	出現頻度別(年)	出現羽数別(羽)	
留鳥	キジ	27 カルガモ	60 ヒヨドリ
留鳥	カルガモ	27 キジバト	48 スズメ
留鳥	カイツブリ	27 カワセミ	29 カワラヒワ
留鳥	キジバト	27 コゲラ	27 シジュウカラ
留鳥	カウウ	27 モズ	25 ムクドリ
留鳥	ゴイサギ	27 ハシボソガラス	20 メジロ
留鳥	アオサギ	27 ハシブトガラス	19 カルガモ
留鳥	ダイサギ	27 ヤマガラ	16 ツバメ
留鳥	コサギ	27 シジュウカラ	11 ハシボソガラス
留鳥	バン	27 ツバメ	11 エナガ
留鳥	ヒメアマツバメ	27 ヒヨドリ	10 オナガ
留鳥	イソシギ	27 ウグイス	9 キジバト
留鳥	トビ	27 エナガ	8 カシラダカ
留鳥	オオタカ	27 メジロ	7 ハシブトガラス
留鳥	ノスリ	27 ムクドリ	7 ツグミ
留鳥	カワセミ	27 ツグミ	7 ヤマガラ
留鳥	コゲラ	27 スズメ	6 コガモ
留鳥	アカゲラ	27 キセキレイ	6 コゲラ
留鳥	アオゲラ	27 ハクセキレイ	5 アオジ
留鳥	チョウゲンボウ	27 セグロセキレイ	4 ウグイス
留鳥	モズ	27 カワラヒワ	4 ハクセキレイ
留鳥	カケス	27 アオジ	4 イワツバメ
留鳥	オナガ	26 コサギ	4 セグロセキレイ
留鳥	ハシボソガラス	26 オナガ	4 ホオジロ
留鳥	ハシブトガラス	26 ジョウビタキ	3 イカル
留鳥	ヤマガラ	24 コガモ	3 モズ
留鳥	ヒガラ	22 アオゲラ	3 ジョウビタキ
留鳥	シジュウカラ	22 ホオジロ	2 シメ
留鳥	ヒバリ	20 シメ	2 キセキレイ
留鳥	ヒヨドリ	19 カシラダカ	2 コサギ
留鳥	ウグイス	18 アオサギ	2 カワセミ
留鳥	エナガ	18 イワツバメ	1 カウウ
留鳥	メジロ	17 カウウ	1 ユリカモメ
留鳥	ミソサザイ	16 イソシギ	1 アオサギ
留鳥	ムクドリ	14 シロハラ	1 アオゲラ
留鳥	スズメ	11 ホトギス	1 オナガガモ
留鳥	キセキレイ	11 トビ	1 イソシギ
留鳥	ハクセキレイ	11 イカル	1 マヒワ
留鳥	セグロセキレイ	9 ルリビタキ	1 シロハラ
留鳥	カワラヒワ	9 タヒバリ	0 ホトギス
留鳥	イカル	8 キジ	0 タヒバリ
留鳥	ホオジロ	8 アカハラ	0 キジ
冬鳥	ヒドリガモ	7 チョウゲンボウ	0 トビ
冬鳥	マガモ	6 キビタキ	0 カケス
冬鳥	ハシビロガモ	5 オナガガモ	0 ルリビタキ
冬鳥	オナガガモ	5 ダイサギ	0 ヒバリ
冬鳥	コガモ	5 ユリカモメ	0 アカハラ
冬鳥	クイナ	5 アカゲラ	0 マガモ
冬鳥	ユリカモメ	5 カケス	0 ダイサギ
冬鳥	セグロカモメ	4 ゴイサギ	0 ヒメアマツバメ
冬鳥	ハヤブサ	4 ヒメアマツバメ	0 チョウゲンボウ
冬鳥	トラツグミ	4 ヒバリ	0 キビタキ
冬鳥	シロハラ	4 コサメビタキ	0 アマツバメ
冬鳥	アカハラ	3 バン	0 アカゲラ
冬鳥	ツグミ	3 ツミ	0 コサメビタキ
冬鳥	ルリビタキ	3 オオタカ	0 ヒドリガモ
冬鳥	ジョウビタキ	3 オオヨシキリ	0 ゴイサギ
冬鳥	ピンズイ	2 クイナ	0 ツミ
冬鳥	タヒバリ	2 サシバ	0 ハシビロガモ
冬鳥	マヒワ	2 ヒガラ	0 バン
冬鳥	シメ	2 センダイムシクイ	0 オオタカ
冬鳥	カシラダカ	2 トラツグミ	0 オオヨシキリ
冬鳥	アオジ	2 エゾビタキ	0 エゾビタキ
夏鳥	ホトギス	2 マヒワ	0 ピンズイ
夏鳥	カッコウ	1 ヒドリガモ	0 クイナ
夏鳥	ツミ	1 マガモ	0 サシバ
夏鳥	ツバメ	1 ハシビロガモ	0 ヒガラ
夏鳥	イワツバメ	1 カイツブリ	0 センダイムシクイ
夏鳥	センダイムシクイ	1 カッコウ	0 トラツグミ
夏鳥	オオヨシキリ	1 アマツバメ	0 カイツブリ
夏鳥	クロツグミ	1 セグロカモメ	0 カッコウ
夏鳥	コサメビタキ	1 ノスリ	0 セグロカモメ
夏鳥	キビタキ	1 ハヤブサ	0 ノスリ
夏鳥	オオルリ	1 ミソサザイ	0 ハヤブサ
旅鳥	アマツバメ	1 クロツグミ	0 ミソサザイ
旅鳥	サシバ	1 ノビタキ	0 クロツグミ
旅鳥	ノビタキ	1 オオルリ	0 ノビタキ
旅鳥	エゾビタキ	1 ピンズイ	0 オオルリ

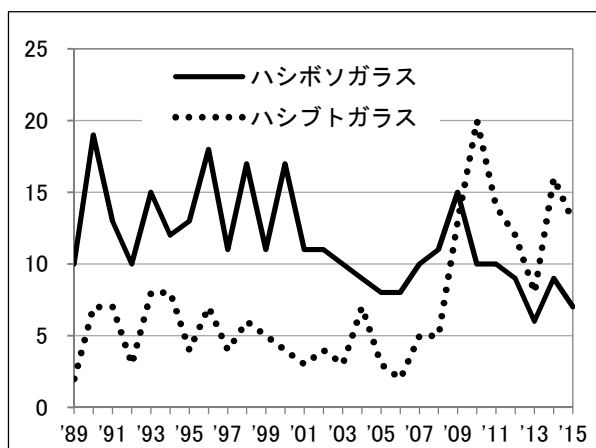
出現羽数は年最大値の年平均、0は1羽未満

(5) 主な野鳥の動向、特徴等

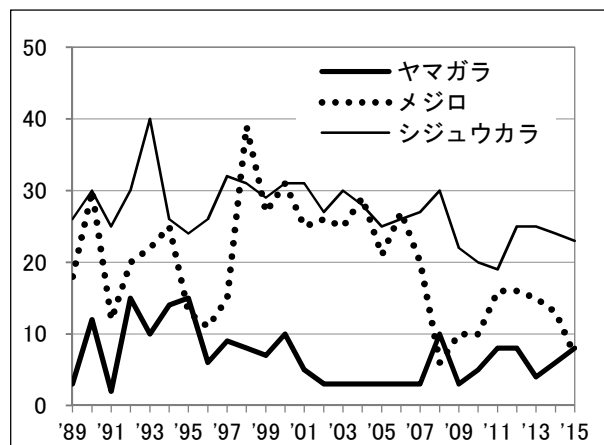
種類毎の出現総羽数を比較してみると、1、2位はスズメとヒヨドリであり、スズメは漸減傾向、ヒヨドリは年次変動が激しい。



またハシボソガラスとハシブトガラスを比較してみると、多かったハシボソガラスが減少し、2009年以降は、ハシブトガラスの方が多くなった。



混群を形成する3種を見ると、メジロは2007年ごろから大幅に減少しているが、ヤマガラはあまり変化がない。



(6) 特記事項

定期カウントの地域の外であるが、2010年4月、片倉城跡公園に隣接する畑の西側に、つどいの森公園が開設された。調整池もあり、八王子市として初めてカワウの営巣が確認された。

2013年から2014年に隣接していた田んぼがなくなって、大規模な公園整備が行われた。駐車場が拡張され、北側の雑木林内にも遊歩道が作られ、空き地には人工湿地が作られた。また見通しをよくするため樹木が複数伐採され、野鳥が隠れる場所が減少した。公園は住民の憩いの場所としての役割も重要であるが、一方で自然環境の保全ということも大切である。野鳥などの動植物が減らないような整備が行われていくことを願うものである。



メジロ



奥多摩のハイタカが八王子城主 北条氏照に献上された

2016年3月に発行された八王子市史の通史編2 中世の第5章第3節「三田氏の滅亡と三田谷の編入」で、北条氏照が奥多摩町日原にいた原島氏にハイタカの雛の巢下ろしを命じた文書（資料編2 中世編年史料 511）について触れている。以下は、市史編さん室の担当学芸員から送って頂いた解説である。

「奥多摩や青梅の地域における山林資源の利用や支配に関する事柄の叙述箇所になります。タカは戦国大名みずからがおこなう鷹狩りのために飼育したり、大名間の贈答品として珍重されていたので、ハイタカも幼鳥から飼育して鷹狩りに使用していたのではないかとみています。青梅を中心に勢力を張った三田氏の滅亡（永禄4年・1561）後に奥多摩の土豪原島氏に出された文書であることから、北条氏の勢力範囲が西多摩にも及ぶようになった頃のことです。八王子と直接の関係はありませんが、八王子周辺を拠点にしていた北条氏照が命令していること、また奥多摩の山林資源の利用の一端が垣間見れることから、興味深い事例としてとりあげています。」

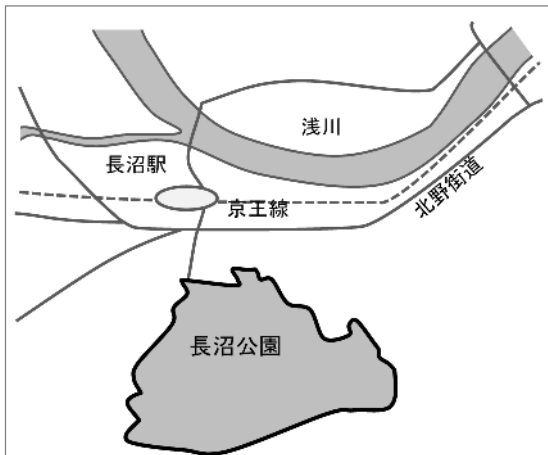
15. 長沼公園

(1) コースの概要

長沼公園は、八王子市長沼町の京王線長沼駅の南側に位置し、浅川を見下ろす多摩丘陵の一角にある。面積約 313,000 m² の都立公園である。

カウントコースは、①長沼駅ガード下とその周辺（イワツバメ等の巣とその周辺の野鳥が中心となる）②駅から公園までの平場約 200m（農耕地と住宅が混在する地域で、スズメ、ムクドリの群れやカルガモがいることがある）③カウントの中心である公園内、の 3 つのエリアに分けられる。

公園内のコースは、沢筋を上る石畳の霧降の道から未舗装の野猿の尾根道に出る。東方向に進み、隣地との境で南側の視界が広がる広場、東屋のある展望台を通り公園東端の掘割で引き返す。霧降の道まで戻り、西側に進み、トイレのある広場、鎌田鳥山の前を通り住宅地との境の殿ヶ谷の道へ向かう。この間高木の雑木林の中で上空は見えない。殿ヶ谷の道は北斜面で、草原やサクラの並木の下を通り長い下り坂を進む。涸れ沢の橋を渡り再び沢沿いの雑木林、民地の杉林を通り、長沼口の神社六社宮前で終わる。



コース概念図



長沼口付近 2015.4.11

(2) 調査期間及び担当者

カウント開始は 1992 年 1 月で 2015 年 12 月まで 24 年間実施している。これまで 4 人の会員が担当している。各月のカウントは 1~10 数名で実施している。

1992~1994 年 馬場裕

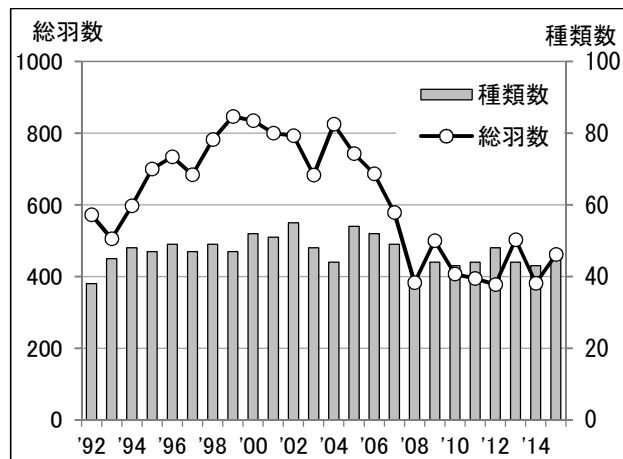
1995~2007 年 馬場裕、馬場百合亜

2008 年 馬場裕、阿江範彦、門口一雄

2009 年~現在 門口一雄

(3) 確認された全野鳥の経年変化

確認された野鳥の種類数は 90 種で、年平均 47 種である。2002 年の 55 種をピークに減少傾向で近年は 45 種前後である。羽数は 1999 年をピークに減少している。



(4) 確認された野鳥の概要

確認された野鳥の種類数は 90 種。季節区分は留鳥 43 種 (48%)、冬鳥 22 種 (24%)、夏鳥 15 種 (17%)、旅鳥 10 種 (11%) である。

出現頻度は、24 年間毎年観察された鳥は 22 種、80%以上 (19 年以上) 観察された鳥は 35 種である。

24 年間で 1 回のみ観察された鳥は 19 種、2 回のみは 5 種である。大半は、渡りや移動の途中にこの公園を中継地として利用したものと思われる。また、浅川に近いのでコサギ、セキレイの仲間、カワセミ、ヒクイナやユリカモメも確認されている。

羽数の多い鳥上位 4 (年平均最大羽数 50 羽以上) は、スズメ、ヒヨドリ、シジュウカラ、メジロである。

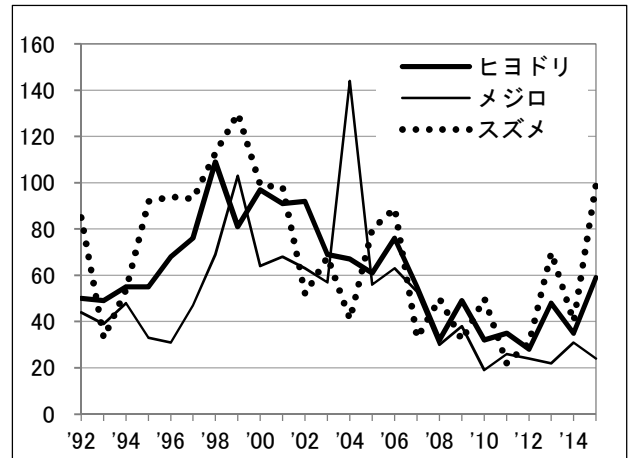
確認した野鳥の種類数：90種

季節区分別	出現頻度別(年)	出現羽数別(羽)
留鳥	キジ	24
留鳥	カルガモ	24
留鳥	キジバト	24
留鳥	アオバト	24
留鳥	カワウ	24
留鳥	ゴイスギ	24
留鳥	アオサギ	24
留鳥	ダイサギ	24
留鳥	コサギ	24
留鳥	ヒメアマツバメ	24
留鳥	トビ	24
留鳥	オオタカ	24
留鳥	ノスリ	24
留鳥	カワセミ	24
留鳥	コゲラ	24
留鳥	アカゲラ	24
留鳥	アオゲラ	24
留鳥	チョウゲンボウ	24
留鳥	モズ	24
留鳥	カケス	24
留鳥	オナガ	24
留鳥	ハシボソガラス	24
留鳥	ハシブトガラス	23
留鳥	キクイタダキ	23
留鳥	コガラ	23
留鳥	ヤマガラ	23
留鳥	ヒガラ	22
留鳥	シジュウカラ	22
留鳥	ヒバリ	21
留鳥	ヒヨドリ	21
留鳥	ウグイス	21
留鳥	エナガ	20
留鳥	メジロ	19
留鳥	セッカ	19
留鳥	ミンサザイ	19
留鳥	ムクドリ	18
留鳥	スズメ	17
留鳥	キセキレイ	17
留鳥	ハクセキレイ	16
留鳥	セグロセキレイ	16
留鳥	カワラヒワ	15
留鳥	イカル	14
留鳥	ホオジロ	14
冬鳥	ユリカモメ	13
冬鳥	ハイタカ	13
冬鳥	ハヤブサ	12
冬鳥	ゴジュウカラ	12
冬鳥	トラツグミ	11
冬鳥	シロハラ	11
冬鳥	アカハラ	11
冬鳥	ツグミ	9
冬鳥	ルリビタキ	8
冬鳥	ジョウビタキ	7
冬鳥	カヤクグリ	7
冬鳥	ビンズイ	6
冬鳥	タヒバリ	6
冬鳥	アトリ	6
冬鳥	マヒワ	5
冬鳥	ウソ	5
冬鳥	シメ	5
冬鳥	カシラダカ	3
冬鳥	ミヤマホオジロ	3
冬鳥	アオジ	3
冬鳥	クロジ	3
冬鳥	オオジュリン	3
冬鳥	ヒクイナ	3
夏鳥	ホトトギス	2
夏鳥	ツツドリ	2
夏鳥	カッコウ	2
夏鳥	ツミ	2
夏鳥	サンショウクイ	2
夏鳥	サンコウチョウ	1
夏鳥	ツバメ	1
夏鳥	イワツバメ	1
夏鳥	ヤブサメ	1
夏鳥	センダイムシクイ	1
夏鳥	クロツグミ	1
夏鳥	コサメビタキ	1
夏鳥	キビタキ	1
夏鳥	オオルリ	1
旅鳥	アマツバメ	1
旅鳥	サシバ	1
旅鳥	メボソムシクイ	1
旅鳥	エゾムシクイ	1
旅鳥	マミジロ	1
旅鳥	マミチャジナイ	1
旅鳥	コマドリ	1
旅鳥	コルリ	1
旅鳥	エゾビタキ	1
旅鳥	サメビタキ	1
旅鳥	オオジュリン	1

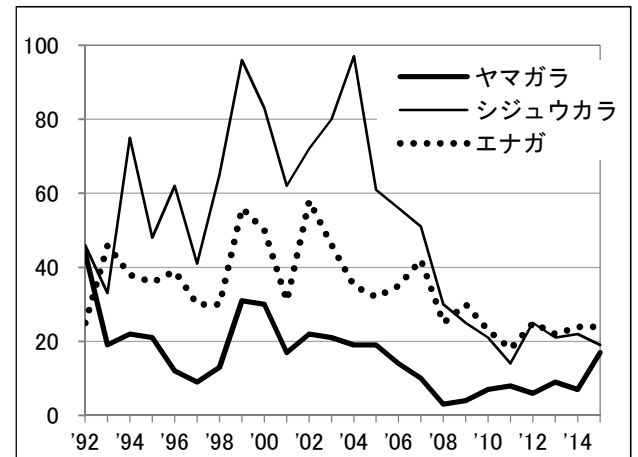
出現羽数は年最大値の年平均、0は1羽未満

(5) 主な野鳥の動向、特徴等

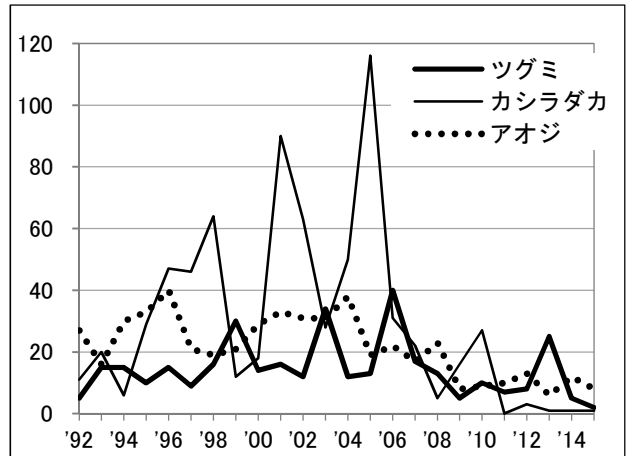
当コースで出現率、羽数とも多い代表的な鳥、スズメ、ヒヨドリ、メジロの動向を見ると、年により増減幅は大きい近年減少傾向である。



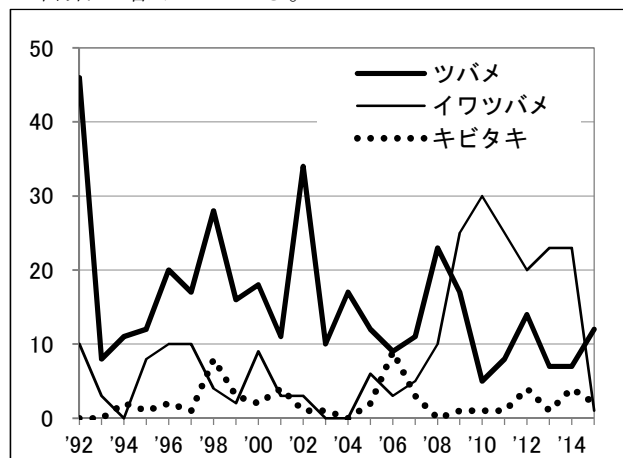
当コースで見られるカラ類で出現率 100%かつ出現羽数が多いシジュウカラ、エナガ、ヤマガラの動向をみると、シジュウカラ、エナガは増減幅が大きい。3種全て減少傾向である。



冬鳥は、22種確認されている。出現率概ね100%のツグミ、カシラダカとアオジの動向は以下のグラフの通りである。カシラダカは年により飛来数の増減幅が大きい。



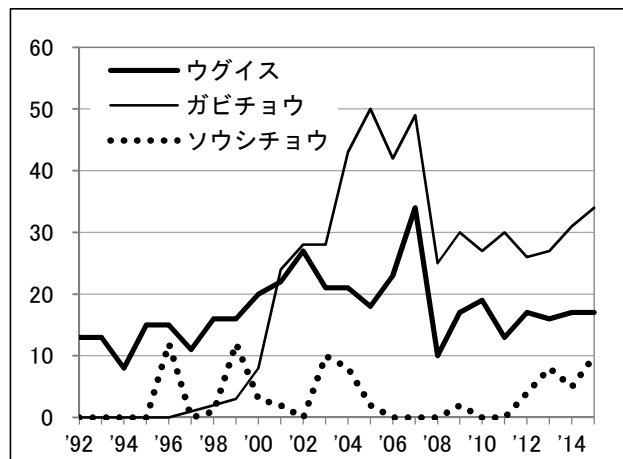
夏鳥は、15種確認されている。出現率上位3種のツバメ、イワツバメ、キビタキの動向は以下のグラフの通りである。ツバメ、キビタキは渡来数の増減が大きい。イワツバメは、近年エリア内で営巣し増加している。



(6) 特記事項

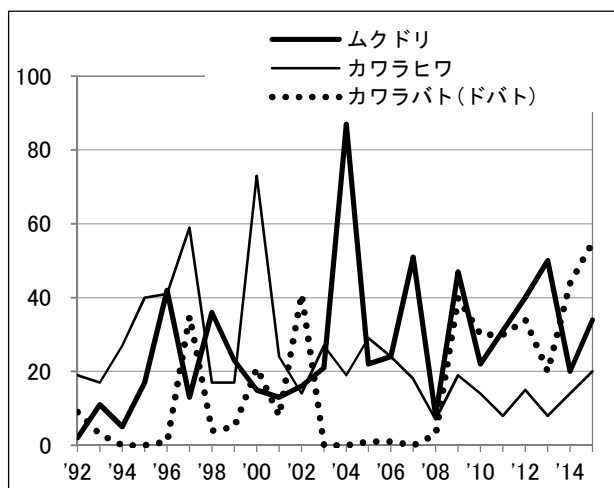
① 外来種とウグイスの動向

当コースで一番目立つガビチョウは、1998年5月に確認されてから増え続け、2002年以降は毎月確認されている。最大羽数は2005年6月の50羽である。ソウシチョウは1996年10月に初確認後秋から冬季に時々確認される。一方、同じ環境に生息するウグイスは概ね一定している。



② 公園の周りの鳥たち

出現率100%、出現羽数の多いムクドリ、カワラヒワ、カワラバト(ドバト)は、スズメ(前掲)と同じように、駅から公園までの農耕地に集団でいることが多く、耕作状況により羽数の増減幅が大きい。



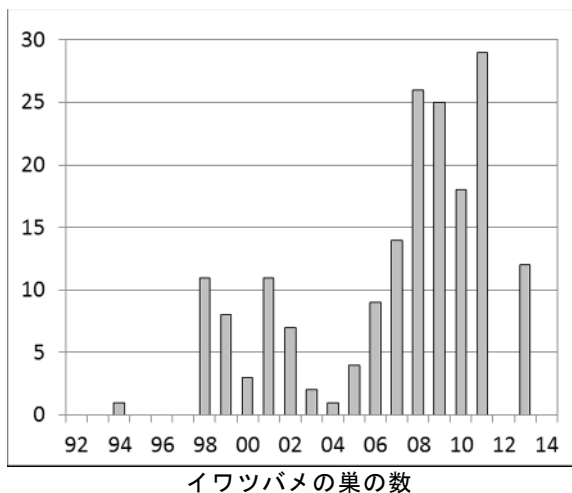
③ カラス

公園が森の様相が濃いためか、ハシブトガラスが多い。最大出現羽数の年平均はハシブトガラス32羽、ハシボソガラス13羽と2倍以上である。

④ 京王線長沼駅ガード下でイワツバメ、ヒメアマツバメ、ツバメが営巣

イワツバメが1998年にガード下で営巣したのを確認。その後2003、2004年には消滅しかけたが、2005年以降増加し2011年には29巣と最大となった。しかし、この巣に2009年からヒメアマツバメが侵入したためイワツバメの営巣数は減少し2013年12巣となった。その間にガード下に自転車置き場が造られ、さらに、資材置き場も設置されたこともありイワツバメのコロニーは2014年に消滅した。(2012年は未調査)

なお、ヒメアマツバメはイワツバメの古巣をねぐらと営巣に利用している。ツバメも改札口近くで営巣している。ここのコロニーでは、巣から落下する糞の対策として、駅員が毎日通路を清掃している。また、駅利用者に糞の落下に注意を促す標識を置いている。しかし、2015年9月に巣を囲むネットが張られ、ねぐら利用は激減した。



VII. 高尾山（小仏川、蛇滝コース、琵琶滝コース、大垂水コース、日影沢コース）

<調査地区の概要>

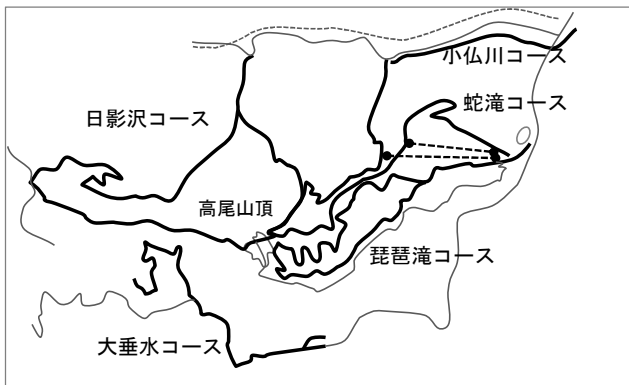
主峰・高尾山（標高 599m）を中心とする調査地区は、高尾・陣場主脈の小仏城山や国道 20 号線上柵田橋からの小仏川までを含む広大な地域である。高尾山薬王院有喜寺を中心に古くから山岳信仰の対象とされ、周辺の樹林は寺社・御料林として保護されてきたため、今尚天然林の美しさをとどめている。

1950 年に都立高尾陣場自然公園に、1967 年には明治の森高尾国定公園に指定された。高尾山は暖温林と冷温林と中間温帯林の境界に位置するため、北側斜面にはイヌブナ等の落葉広葉樹、南側斜面にはカシ類等の常緑広葉樹が見られる。動植物も多く、植物は約 1,300 種、昆虫は約 5,000 種といわれている。

高尾山は都心から 1 時間程で、交通網や登山コースも整備されていたり、2007 年にミシュランガイドで 3 つ星観光地に選出されたりしたこともあって、今では、年間約 350 万人が訪れていると言う。山頂や登山コースからは、富士山や丹沢、奥多摩の山々、更には都心のビル群やスカイツリーも展望できる。

一方、2012 年の首都圏中央連絡自動車道の開通や登山者の激増に伴うオーバーユースによる自然への影響が懸念されている。

定期カウントコースは、⑩小仏川（上柵田橋⇒蛇滝橋）⑪蛇滝コース（蛇滝橋⇒山頂⇒1 号路登山口）⑫琵琶滝コース（清滝駅⇒琵琶滝⇒山頂⇒清滝駅）⑬大垂水コース（大平林道往復）⑭日影沢コース（日影⇒小仏城山⇒高尾山山頂⇒日影）の 5 コースで実施している。



コース概念図

<確認された野鳥の種類>

(1) 確認された野鳥の種類数

高尾山 5 コースで確認された野鳥の種類数は 94 種で、外来種等 10 種を含めると 104 種になる。

コース別では、琵琶滝コースの 79 種が最大で、大垂水コースの 71 種が最小である。

季節区分別では、5 コースとも留鳥が多く、冬鳥、夏鳥、旅鳥の順である。

季節区分別各コース野鳥別野鳥種類数

季節区分	小仏川	蛇滝	琵琶滝	大垂水	日影沢	種類数
留鳥	42	37	42	40	35	46
夏鳥	10	13	13	12	13	14
冬鳥	17	17	20	17	21	24
旅鳥	3	7	4	2	7	10
合計	72	74	79	71	76	94
外来種	5	5	6	7	4	10

(2) 確認された全種類の季節区分別一覧

(注 出現羽数の多い順)

	種名
留鳥	ヒヨドリ エナガ メジロ シジュウカラ ヤマガラ ハシブトガラス ウグイス スズメ イカル ヒガラ コゲラ カワラヒワ ホオジロ カケス キジバト ハシボソガラス キセキレイ ムクドリ コガラ ミソサザイ アオゲラ カルガモ トビ オナガ ヒメアマツバメ セグロセキレイ モズ キクイタダキ ハクセキレイ アオゲラ アオバト ノスリ カワセミ アオサギ カワガラス オオタカ ヤマドリ コサギ カワウ ゴイサギ ダイサギ キバシリ キジ チョウゲンボウ クマタカ ヤマセミ (46 種)
夏鳥	イワツバメ ツバメ キビタキ ヤブサメ オオルリ クロツグミ センダイムシクイ ホトギス ツツドリ サンコウチョウ コサメビタキ ツミ アカシヨウビン サンシヨウクイ (14 種)
冬鳥	アトリ マヒワ ルリビタキ ツグミ カシラダカ ウソ ジョウビタキ シロハラ クロジ シメ ゴジュウカラ カヤクグリ アカハラ ビンズイ ミヤマホオジロ ヒレンジャク ハイタカ マガモ オオアカゲラ ベニマシコ ハヤブサ タヒバリ トラツグミ ミサゴ (24 種)

旅鳥	サシバ アマツバメ ハリオアマツバメ コルリ エゾビタキ コムクドリ サメビタキ ハチクマ コマドリ マミチャジナイ (10種)
外来種	ガビチョウ ドバト ソウシチョウ コジュケイ ガチョウ アヒル ウスユキバト 雑種ガモ カオグロガビチョウ カナリヤ (10種)

(3) 出現頻度の高い野鳥

出現頻度 100%、つまり高尾山 5 コース共に毎年確認された野鳥は 7 種であった。高尾山 5 コースで観察された野鳥 94 種の約 7%になる。

出現率の上位 10 種は次のとおりである。留鳥が上位 9 種を占めている。

種名	季節区分	出現率
キジバト	留鳥	100%
コゲラ	留鳥	100%
シジュウカラ	留鳥	100%
ヒヨドリ	留鳥	100%
ウグイス	留鳥	100%
キセキレイ	留鳥	100%
ハシブトガラス	留鳥	100%
ヤマガラ	留鳥	99%
メジロ	留鳥	98%
アオジ	冬鳥	94%

(4) 出現羽数が多い野鳥

出現羽数の多い野鳥種上位 3 種は、アトリ、ヒヨドリ、エナガである。アトリは 14,478 羽と圧倒的な羽数だが、2001 年琵琶湖コースの大量飛来によるものである。この不定期なアトリの飛来を除くと、第 3 位はメジロである。

季節別では留鳥 8 種、冬鳥 2 種である。

種名	年最大羽数 (累計)	年平均羽数
アトリ	14,478 羽	742 羽
ヒヨドリ	4,121 羽	242 羽
エナガ	3,193 羽	188 羽
メジロ	2,657 羽	156 羽
シジュウカラ	2,205 羽	130 羽
マヒワ	1,903 羽	112 羽
ヤマガラ	1,488 羽	88 羽
ハシブトガラス	1,249 羽	73 羽
ウグイス	1,212 羽	71 羽
スズメ	1,103 羽	65 羽

(注：年平均羽数は四捨五入)

(5) 数が少ない野鳥

出現回数の少ない野鳥は次の通りである。1 回のみの出現は、サンショウクイ、ヤマセミ、クマタカ、ミサゴの 4 種。2 回のみの出現は 4 種、3 回のみの出現は 2 種である。

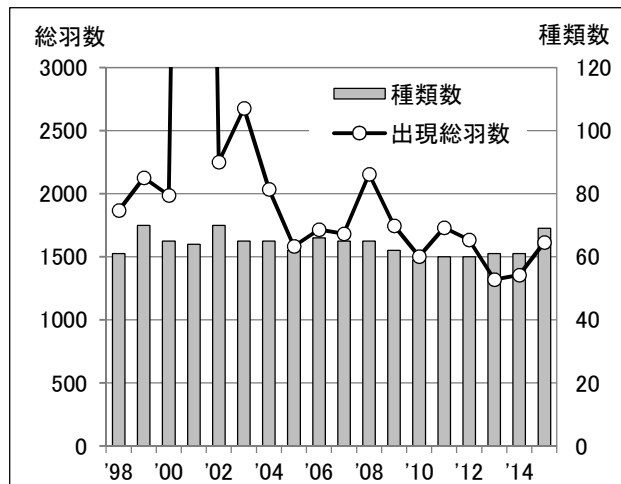
種名	出現年	回数
サンショウクイ	2000 年	1
ヤマセミ	1999 年	1
クマタカ	2014 年	1
ミサゴ	2008 年	1
タヒバリ	2007 年	2
マミチャジナイ	2015 年	2
チョウゲンボウ	2008, 2014 年	2
キジ	2005, 2008 年	2
コマドリ	2002, 2008, 2014 年	3
キバシリ	2015 年	3

<確認された野鳥の年次変化>

(1) 確認された野鳥合計羽数の年次変化

2001 年のアトリ大量飛来を除くと、最大羽数は 2003 年の 2,678 羽で、最小羽数は 2013 年の 1,320 羽である。年間確認羽数が 2,000 羽を超えたのは 2008 年が最後で、その後は減少傾向が顕著である。

確認種類数は、毎年 60 種前後で、大きな変化はない。



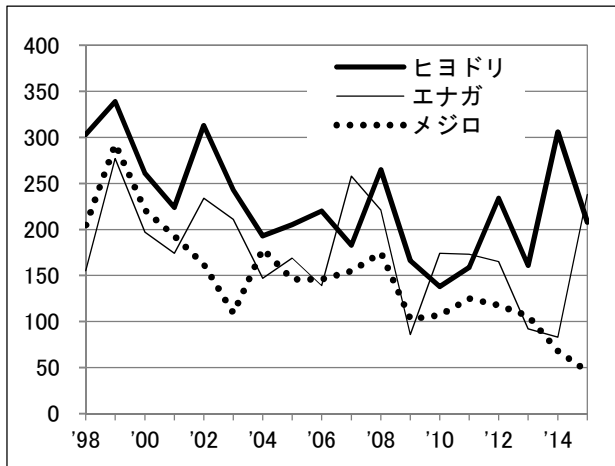
合計羽数と種類数の年次変化のグラフ

(注：2001 年の総羽数はアトリの大量飛来により 14,478 羽となっている)

(2) 代表的な野鳥の年次変動

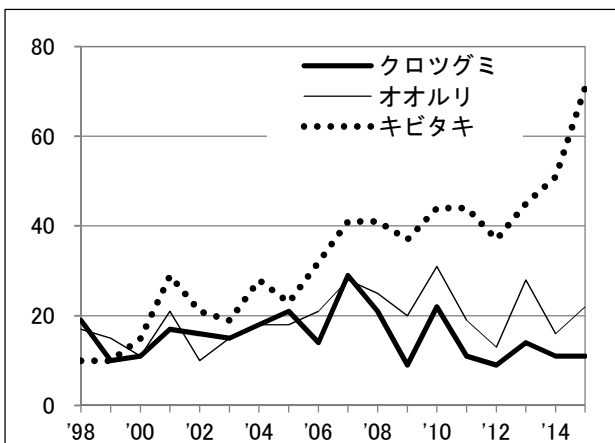
① 出現羽数の上位 3 種の年次変動

アトリを除く、上位 3 種の第 1 位ヒヨドリは、年次変化は大きいですが、回復年もあり、減少傾向とは言いがたい。第 3 位のメジロは減少傾向にある。



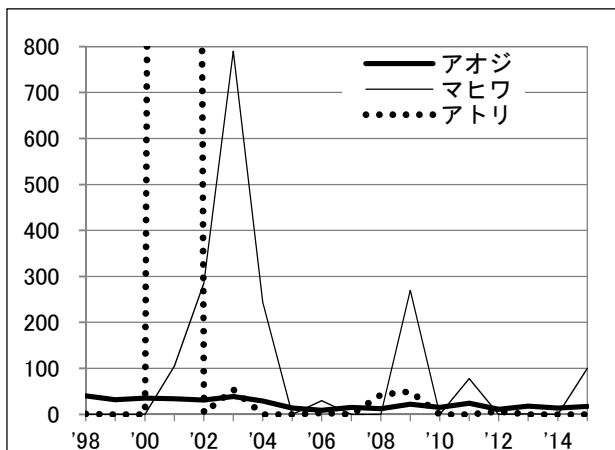
②代表的な夏鳥の年次変動

高尾山 5 コースの合計出現羽数第 16 位のキビタキは、2015 年の 71 羽を最大に、増加傾向が顕著である。第 26 位のオオルリは、20 羽前後で推移し、変化は少ない。第 29 位のクロツグミは減少傾向にあると言える。



③代表的な冬鳥の年次変動

第 1 位のアトリの出現年数は 8 年で 44%、第 2 位のマヒワの出現年数は 9 年で 50% である。第 3 位のアオジはコンスタントに出現し、変化は少ない。



(注：2001 年のアトリ羽数は大量飛来により 14,478 羽となっている)

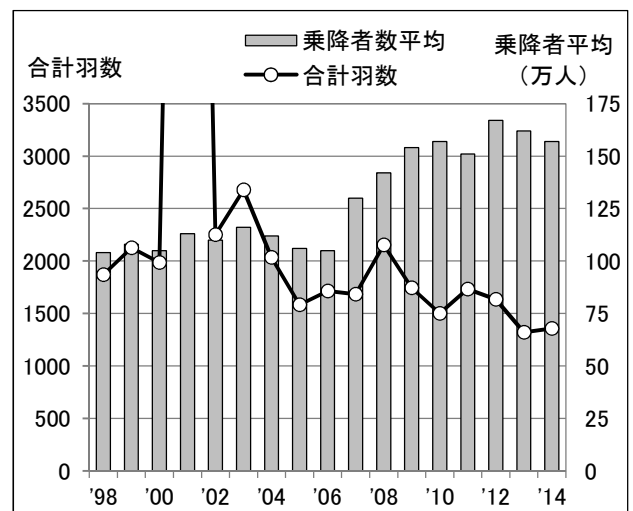
<登山者(入山者)の増加に伴う影響>

2007 年 3 月に出版されたミシュランの日本ガイドブックに高尾山が 3 つ星観光地として取り上げられ、新聞、雑誌、TV などのマスコミで報道され話題となった。高尾山への入山者数の指標として、玄関口である京王線高尾山口駅の乗降客数の推移を追ってみると、2006 年までは横ばいであったのが、2007 年には約 20% の増加となり、ピークの 2012 年には 2006 年に比べ約 60% もの増加となっている。

2012 年には圏央道・高尾山 IC～八王子 JCT が開通するとともに、山頂下のトイレも改修され、高尾山は一般登山者だけでなく、ファミリーや山ガール、外国人観光客にとっても益々魅力ある観光地となりつつあるようだ。

乗降客数と高尾山地域の定期カウント 5 コース全体の観察合計羽数の推移を対照させてみると、2009 年を境にして漸減傾向が明らかとなっている。今後も入山者数と観察合計羽数との関連を注視する必要がある。

高尾山口駅の乗降客数と高尾山地域のカウント合計羽数



(注) 高尾山口駅の乗降客数は、定期券を除く乗車数と降車数の平均を示した(数値は「東京都統計年鑑」による)。

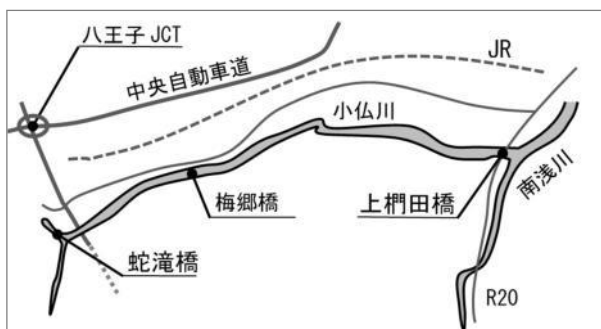
16. 高尾山（小仏川）

（1）コースの概要

小仏川は南浅川の支流で、標高 727m の景信山を源流とし、日影で日影沢と小下沢を、蛇滝橋で行の沢を合わせ、高尾山北側の山麓を流れて国道 20 号上栲田橋付近で案内川と合流して南浅川となる。

定期カウントコースは小仏川蛇滝橋から上栲田橋までの約 1.5km で、この間に橋が 5 つあるが、名前のついている橋はほぼ中間地点にある梅郷橋だけである。溪流的な要素が多いが、ほとんどの部分では護岸がされていて、ところどころ自然溪流の面影を残す場所がある。

高尾梅郷の起点とも言える上栲田橋の袂から川沿いに数ヶ所の梅林があり、左岸蛇滝下流側の梅林は首都圏中央連絡道路（略して圏央道）反対の立ち木トラストになっていた。しかし、2007 年にこの梅林の上を通過して圏央道高尾山トンネルの工事が始まり 2012 年 3 月に完成したため、景観が一変してしまった。



コース概念図



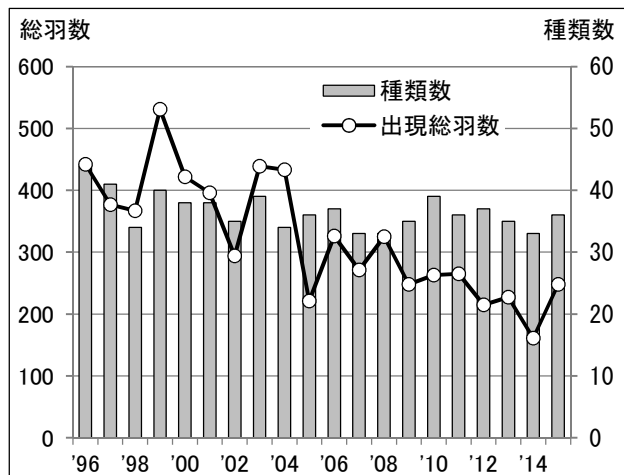
小仏川コースのスタート付近 2016. 7. 6

（2）調査期間及び担当者

カウント開始年は 1996 年 1 月で 2015 年 12 月までの 20 年間実施している。粕谷和夫が開始年から継続して担当している。

（3）確認された全野鳥の経年変化

羽数、種類数ともに減少傾向にある。羽数は 1999 年がピークで 2015 年にはピーク時の半分以下まで減少した。2005 年以降の減少が著しい。種類数は 1996 年の 44 種がピークで 2015 年には 36 種（82%）までに減少した。



（4）確認された野鳥の概要

確認された野鳥の種類数は 72 種で、これにコジュケイ等の外来種 5 種を加えると 77 種である（次ページ表）。留鳥が最も多く 42 種（58%）、次いで冬鳥 17 種（24%）、夏鳥 10 種（14%）、旅鳥 3 種（4%）の順である。出現頻度では 20 年（毎年）観察された種が 15 種、1 回しか観察されなかった種が 13 種であった。羽数の多い順ベスト 10 は多かった順から並べるとヒヨドリ、スズメ、シジュウカラ、エナガ、メジロ、ムクドリ、イカル、ツバメ、ハシブトガラス、ヤマガラである。

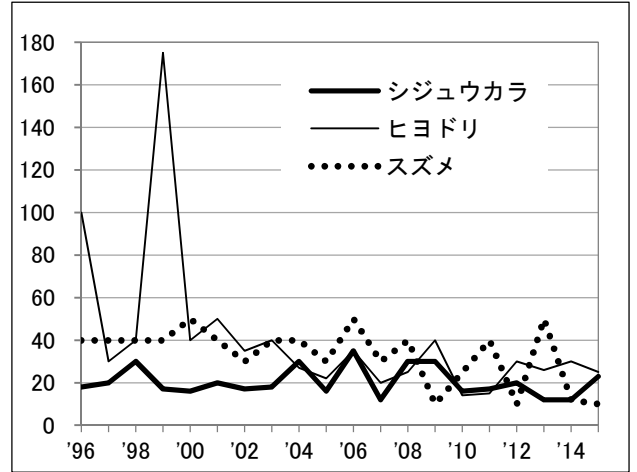
確認された野鳥の種類数：72種

季節区分別	出現頻度別(年)	出現羽数別(羽)
留鳥	カルガモ	20
留鳥	キジバト	20
留鳥	アオバト	20
留鳥	カワウ	20
留鳥	ゴイサギ	20
留鳥	アオサギ	20
留鳥	ダイサギ	20
留鳥	コサギ	20
留鳥	ヒメアマツバメ	20
留鳥	トビ	20
留鳥	オオタカ	20
留鳥	ノスリ	20
留鳥	クマタカ	20
留鳥	カワセミ	20
留鳥	ヤマセミ	20
留鳥	コゲラ	19
留鳥	アカゲラ	19
留鳥	アオゲラ	19
留鳥	モズ	19
留鳥	カケス	19
留鳥	オナガ	19
留鳥	ハシボソガラス	19
留鳥	ハシブトガラス	19
留鳥	コガラ	18
留鳥	ヤマガラ	16
留鳥	ヒガラ	16
留鳥	シジュウカラ	15
留鳥	ヒヨドリ	15
留鳥	ウグイス	14
留鳥	エナガ	13
留鳥	メジロ	12
留鳥	キバシリ	12
留鳥	ミソサザイ	12
留鳥	ムクドリ	10
留鳥	カワガラス	9
留鳥	スズメ	9
留鳥	キセキレイ	9
留鳥	ハクセキレイ	8
留鳥	セグロセキレイ	8
留鳥	カワラヒワ	7
留鳥	イカル	7
留鳥	ホオジロ	5
冬鳥	マガモ	5
冬鳥	コガモ	5
冬鳥	ハイタカ	4
冬鳥	シロハラ	4
冬鳥	ツグミ	4
冬鳥	ルリビタキ	3
冬鳥	ジョウビタキ	3
冬鳥	カヤクグリ	3
冬鳥	ビンズイ	3
冬鳥	アトリ	3
冬鳥	マヒワ	3
冬鳥	ウソ	3
冬鳥	シメ	2
冬鳥	カシラダカ	2
冬鳥	ミヤマホオジロ	2
冬鳥	アオジ	2
冬鳥	クロジ	2
夏鳥	ホトギス	1
夏鳥	ツミ	1
夏鳥	サンコウチョウ	1
夏鳥	ツバメ	1
夏鳥	イワツバメ	1
夏鳥	ヤブサメ	1
夏鳥	センダイムシクイ	1
夏鳥	コサメビタキ	1
夏鳥	キビタキ	1
夏鳥	オオルリ	1
旅鳥	サシバ	1
旅鳥	コムクドリ	1
旅鳥	コルリ	1
留鳥	カルガモ	41
留鳥	キジバト	33
留鳥	コゲラ	20
留鳥	ハシボソガラス	20
留鳥	ハシブトガラス	18
留鳥	シジュウカラ	16
留鳥	ツバメ	14
留鳥	ヒヨドリ	12
留鳥	ウグイス	12
留鳥	ジョウビタキ	10
留鳥	スズメ	9
留鳥	キセキレイ	9
留鳥	ハクセキレイ	9
留鳥	セグロセキレイ	8
留鳥	アオジ	8
留鳥	カワセミ	7
留鳥	モズ	7
留鳥	ヤマガラ	7
留鳥	エナガ	6
留鳥	メジロ	6
留鳥	ムクドリ	5
留鳥	カワラヒワ	5
留鳥	ホオジロ	4
留鳥	イカル	4
留鳥	アオゲラ	3
留鳥	ルリビタキ	3
留鳥	イワツバメ	2
留鳥	ミソサザイ	2
留鳥	カワガラス	2
留鳥	ツグミ	2
留鳥	ハクセキレイ	2
留鳥	ヒガラ	2
留鳥	オナガ	1
留鳥	カシラダカ	1
留鳥	トビ	1
留鳥	アオゲラ	1
留鳥	カワセミ	1
留鳥	スズメ	1
留鳥	キビタキ	1
留鳥	シメ	1
留鳥	アオサギ	1
留鳥	ホトギス	1
留鳥	カワガラス	1
留鳥	キビタキ	1
留鳥	イカル	1
留鳥	ヒメアマツバメ	1
留鳥	カワウ	1
留鳥	ヤブサメ	1
留鳥	センダイムシクイ	1
留鳥	ウソ	1
留鳥	アオサギ	0
留鳥	ゴイサギ	0
留鳥	ホトギス	0
留鳥	オオルリ	0
留鳥	クロジ	0
留鳥	ノスリ	0
留鳥	マガモ	0
留鳥	シロハラ	0
留鳥	アオサギ	0
留鳥	ゴイサギ	0
留鳥	ホトギス	0
留鳥	オオルリ	0
留鳥	クロジ	0
留鳥	アオサギ	0
留鳥	カシラダカ	0
留鳥	カヤクグリ	0
留鳥	オオタカ	0
留鳥	ビンズイ	0
留鳥	ダイサギ	0
留鳥	アカゲラ	0
留鳥	コガモ	0
留鳥	ツミ	0
留鳥	アオバト	0
留鳥	ハイタカ	0
留鳥	クマタカ	0
留鳥	ヤマセミ	0
留鳥	サンコウチョウ	0
留鳥	コサメビタキ	0
留鳥	キバシリ	0
留鳥	コルリ	0
留鳥	コサメビタキ	0
留鳥	アトリ	0
留鳥	ミヤマホオジロ	0

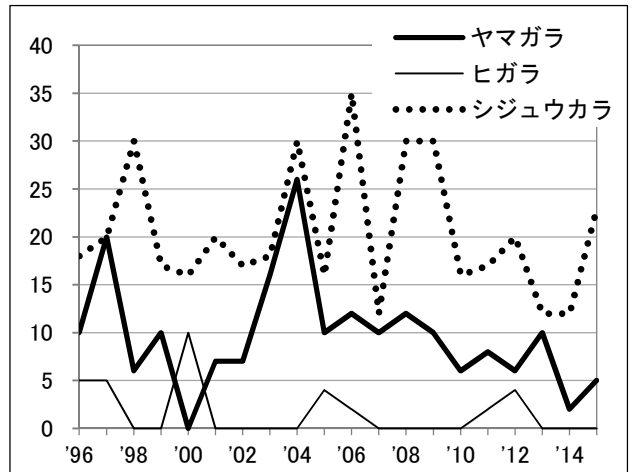
出現羽数は年最大値の年平均、0は1羽未満

(5) 主な野鳥の動向、特徴等

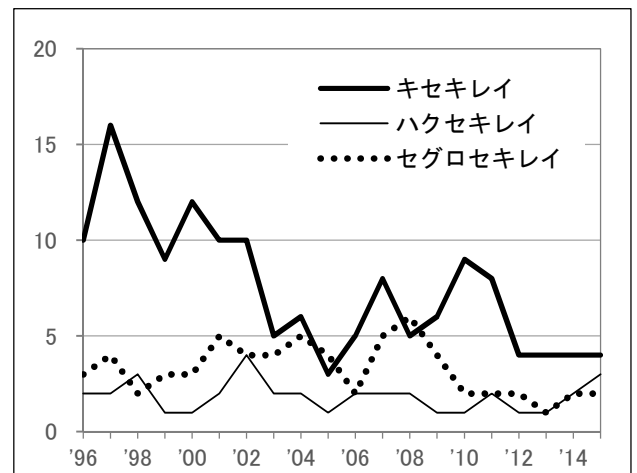
羽数の多い上位3種の経年変化は次グラフのとおりで、ヒヨドリの2000年以前を除けば、ほぼ横ばい。ヒヨドリは秋の渡りの群れにカウント中に出会うか否かで変動する。



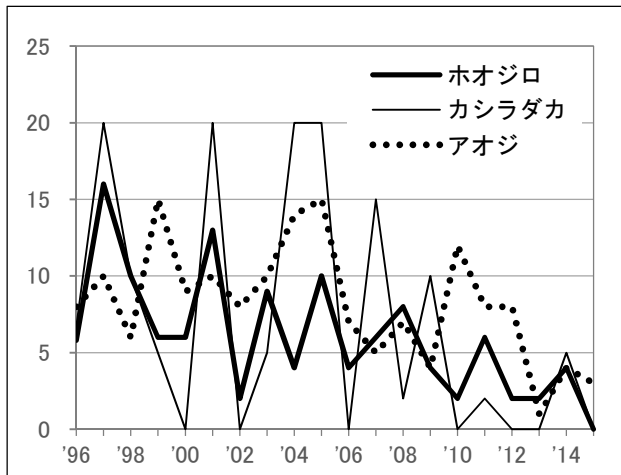
当コースを代表するカラ類のシジュウカラ、ヤマガラ、ヒガラの経年変化は次グラフのとおりで、年変動が大きく、増減傾向は読み取れない。



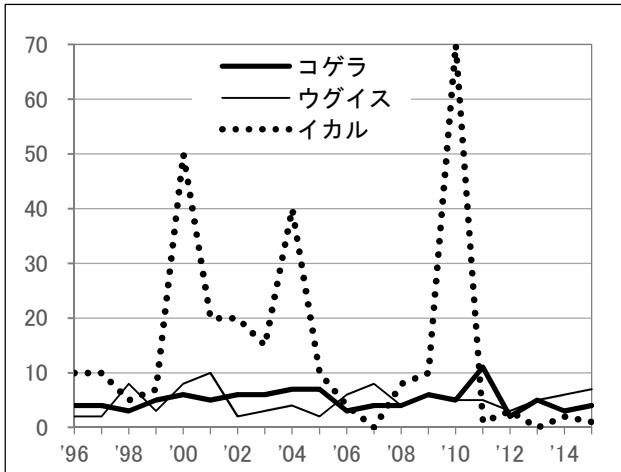
川の鳥の代表であるセキレイの仲間3種の動向は以下のとおりである。



ホオジロの仲間 3 種の動向は以下のとおりであり、年変動が大きい。



当コースでよく観察されるコゲラ、ウグイス、イカルの動向は以下のとおりで、集団で移動するイカルの変動が大きい。



(6) 特記事項

スタート付近(上栲田橋上流)ではカルガモ他、マガモが渡来していることがある。水面をかすめて飛ぶキセキレイ、カワセミの姿を観察することがよくある。カワガラスも時々観察される。

5月から6月にはカジカガエルの声が至る所で聞こえ、ゲンジボタルもわずかながら生息している他、カワトンボ、ミヤマカワトンボがよく観察される。駒木野公園を過ぎた所が川の屈曲点になっていて、通称「どんどん」といわれている付近は、春と秋に多種類の野草の花が楽しめる所である。

イカルの1回の最大羽数は70羽で、2010年2月5日の定期カウントで、この日は2か所で集団に出合った。駒木野公園付近で約40羽の規模、地上に降りて採餌していた。木の実を食べていたが、何の木の実かはわからなかった。もう一つの集団は圏央道トンネル工事個所の手前で、約30羽の群れがケヤキに止まっていた。

定期カウント中にサシバ73羽の集団に出合った。時は1999年10月で、駒木野公園を過ぎた所で前方に現れたサシバの集団が小仏峠方向に飛翔して行ったものである。幸運にも秋のサシバの渡り途中の出会いである。

2003年2月5日の定期カウントでマヒワ100羽の集団に出合った。場所は梅郷橋付近の杉林で、数本の杉の木のテッペンを移動したものである。

カヤクグリは2013年3月11日の定期カウントで終点の蛇滝橋付近の枯れた草地で2羽が採餌していたものである。

カワガラスはほぼ毎年観察されるが1~2羽で、定期カウントコースの中では営巣は確認されていない。



野猿峠と鳥屋場

カスミ網の使用は現在禁止されているが、昔の山野にはあちこちにカスミ網を使った猟場があった。こうした場所を鳥屋場(とやば)と呼んでいる。「カスミ網」は俳句の題材にもなっており、秋の季語だそうである。秋に渡ってくる冬鳥を、その通り道にカスミ網を張って捕えるからであろう。

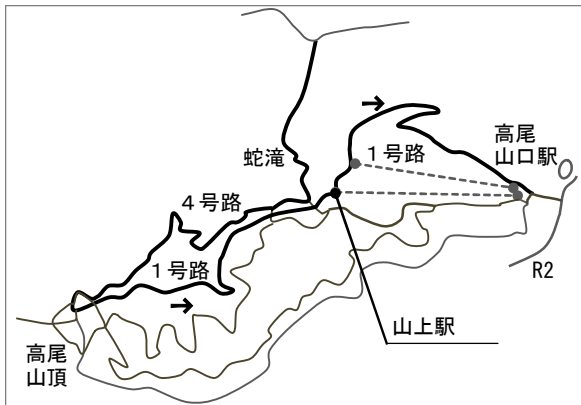
「かすみ網 今年猿子鳥(ましこどり)おそしといふ 高濱年尾」

カワセミ会のフィールドにもそうした場所がある。野猿峠もその一つで、鳥類目録作成のために古い文献調査をしていると、「昭和9年秋冬の猟期に猿丸峠で霞網猟師小島某がツグミを捕えた」などの記述が見つかる。猿丸峠は今の野猿峠のことで、かつてはそう呼ばれていた。その前は猿山峠、その前は申山峠、その前は甲山峠で、ここまできると16世紀の滝山城主大石定久の物語まで遡るそう。長沼公園の鎌田鳥山で鳥料理に舌鼓をうちながら、戦国時代に想いを馳せるのも良いかもしれない。

17. 高尾山（蛇滝コース）

(1) コースの概要

定期カウントのコースは小仏川の蛇滝橋から行の沢の林道を蛇滝まで進み、蛇滝から細い登山道をケーブルカー山上駅の西側まで登り 2 号路に入る。2 号路は距離が短く、4 号路に入ると途中吊り橋（みやま橋）があり、いろはの道と交差する。4 号路をさらに進み、頂上手前のトイレから 5 号路に入る。江川杉の林から高尾ビジターセンターの裏側に出て高尾山山頂にたどり着く。下りは富士道を通り薬王院から 1 号路に入って、ケーブル山上駅、金毘羅台、布流の滝を経て登山口に下る。登り下り合わせて約 7km コースである。



コース概念図



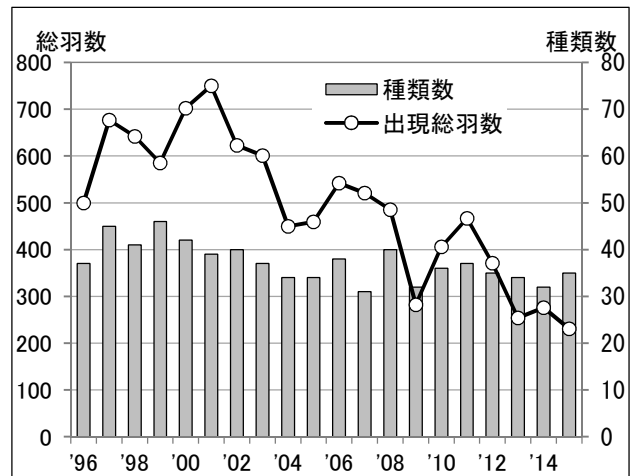
ケーブルカー山上駅 2013. 4. 11

(2) 調査期間及び担当者

カウント開始年は 1996 年 1 月で 2015 年 12 月までの 20 年間実施している。粕谷和夫が開始年から継続して担当している。

(3) 確認された全野鳥の経年変化

羽数、種類数ともに減少傾向にある。羽数は 2001 年がピークで 2015 年にはピーク時の 3 分の 1 レベルまで減少した。2009 年以降の減少が著しい。種類数は 1999 年の 46 種がピークで 2015 年には 4 分の 3 まで減少した。



(4) 確認された野鳥の概要

確認された野鳥の種類数は 74 種、これにコジュケイ等の外来種 5 種を加えると 79 種である（次ページ表）。留鳥が最も多く 37 種（50%）、次いで冬鳥 17 種（23%）、夏鳥 13 種（18%）、旅鳥 7 種（9%）の順である。出現頻度では 20 年（毎年）観察された種が 15 種、1 年しか観察されなかった種が 11 種であった。

羽数が多かった上位 10 種を多い順に並べるとヒヨドリ、エナガ、メジロ、シジュウカラ、ヤマガラ、ハシブトガラス、ヒガラ、イカル、ウグイス、コゲラである。



2012. 10. 15
高尾山でひさし
Yumi

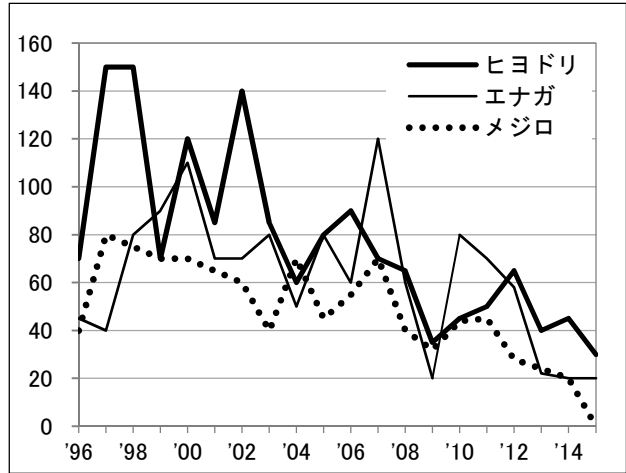
確認された野鳥の種類数：74種

季節区分別	出現頻度別(年)	出現羽数別(羽)	
留鳥	ヤマドリ	20 キジバト	77 ヒヨドリ
留鳥	カルガモ	20 コゲラ	62 エナガ
留鳥	キジバト	20 アオゲラ	49 メジロ
留鳥	アオバト	20 カケス	38 シジュウカラ
留鳥	アオサギ	20 ハシブトガラス	36 ヤマガラ
留鳥	ヒメアマツバメ	20 ヤマガラ	34 ハシブトガラス
留鳥	トビ	20 ヒガラ	22 ヒガラ
留鳥	オオタカ	20 シジュウカラ	21 イカル
留鳥	ノスリ	20 ヒヨドリ	15 ウグイス
留鳥	カワセミ	20 ウグイス	11 コゲラ
留鳥	コゲラ	20 ヤブサメ	10 キビタキ
留鳥	アカゲラ	20 エナガ	8 アトリ
留鳥	アオゲラ	20 キビタキ	8 ヤブサメ
留鳥	チョウゲンボウ	20 オオルリ	7 マヒワ
留鳥	モズ	20 キセキレイ	7 コガラ
留鳥	カケス	19 メジロ	6 キジバト
留鳥	ハシボソガラス	19 ミソサザイ	6 カケス
留鳥	ハシブトガラス	19 クロツグミ	5 ツグミ
留鳥	キクイタダキ	19 ルリビタキ	5 イワツバメ
留鳥	コガラ	19 イカル	5 アオジ
留鳥	ヤマガラ	18 ホトトギス	4 ルリビタキ
留鳥	ヒガラ	18 ツバメ	4 オオルリ
留鳥	シジュウカラ	18 アオジ	4 アオゲラ
留鳥	ヒヨドリ	17 トビ	4 ツバメ
留鳥	ウグイス	15 シロハラ	3 カワラヒワ
留鳥	エナガ	14 センダイムシクイ	3 ミソサザイ
留鳥	メジロ	14 ツグミ	3 クロツグミ
留鳥	キバシリ	13 コガラ	3 シロハラ
留鳥	ミソサザイ	13 カワラヒワ	3 キセキレイ
留鳥	ムクドリ	13 ホオジロ	3 ウソ
留鳥	カワガラス	11 ジョウビタキ	3 センダイムシクイ
留鳥	スズメ	11 クロジ	3 ホオジロ
留鳥	キセキレイ	10 アオバト	2 スズメ
留鳥	セグロセキレイ	10 アカゲラ	2 ゴジュウカラ
留鳥	カワラヒワ	10 キクイタダキ	2 ヒメアマツバメ
留鳥	イカル	10 イワツバメ	2 トビ
留鳥	ホオジロ	10 ゴジュウカラ	1 ホトトギス
冬鳥	オオアカゲラ	9 ツツドリ	1 キクイタダキ
冬鳥	ヒレンジャク	9 モズ	1 シメ
冬鳥	ゴジュウカラ	8 ハシボソガラス	1 アカゲラ
冬鳥	トラツグミ	8 ウソ	1 クロジ
冬鳥	シロハラ	7 スズメ	1 アオバト
冬鳥	アカハラ	6 アカハラ	1 ハシボソガラス
冬鳥	ツグミ	6 マヒワ	1 ジョウビタキ
冬鳥	ルリビタキ	5 ノスリ	1 モズ
冬鳥	ジョウビタキ	5 サンコウチョウ	1 カシラダカ
冬鳥	カヤクグリ	4 ヤマドリ	1 ツツドリ
冬鳥	アトリ	4 カルガモ	1 ヒレンジャク
冬鳥	マヒワ	4 ヒメアマツバメ	0 カルガモ
冬鳥	ウソ	4 オオアカゲラ	0 トラツグミ
冬鳥	シメ	4 トラツグミ	0 カヤクグリ
冬鳥	カシラダカ	4 カヤクグリ	0 サンコウチョウ
冬鳥	アオジ	4 アトリ	0 アカハラ
冬鳥	クロジ	3 ツミ	0 ノスリ
夏鳥	ホトトギス	3 オオタカ	0 コルリ
夏鳥	ツツドリ	3 シメ	0 コサメビタキ
夏鳥	ツミ	2 ハリオアマツバメ	0 ヤマドリ
夏鳥	アカショウビン	2 アマツバメ	0 ハリオアマツバメ
夏鳥	サンコウチョウ	2 カワガラス	0 アマツバメ
夏鳥	ツバメ	2 サメビタキ	0 オオアカゲラ
夏鳥	イワツバメ	2 コサメビタキ	0 サメビタキ
夏鳥	ヤブサメ	2 セグロセキレイ	0 ツミ
夏鳥	センダイムシクイ	2 カシラダカ	0 オオタカ
夏鳥	クロツグミ	1 アオサギ	0 アカショウビン
夏鳥	コサメビタキ	1 サシバ	0 キバシリ
夏鳥	キビタキ	1 アカショウビン	0 ムクドリ
夏鳥	オオルリ	1 カワセミ	0 カワガラス
旅鳥	ハリオアマツバメ	1 チョウゲンボウ	0 マミチャジナイ
旅鳥	アマツバメ	1 ヒレンジャク	0 セグロセキレイ
旅鳥	サシバ	1 キバシリ	0 アオサギ
旅鳥	マミジロ	1 ムクドリ	0 サシバ
旅鳥	マミチャジナイ	1 マミジロ	0 カワセミ
旅鳥	コルリ	1 マミチャジナイ	0 チョウゲンボウ
旅鳥	サメビタキ	1 コルリ	0 マミジロ

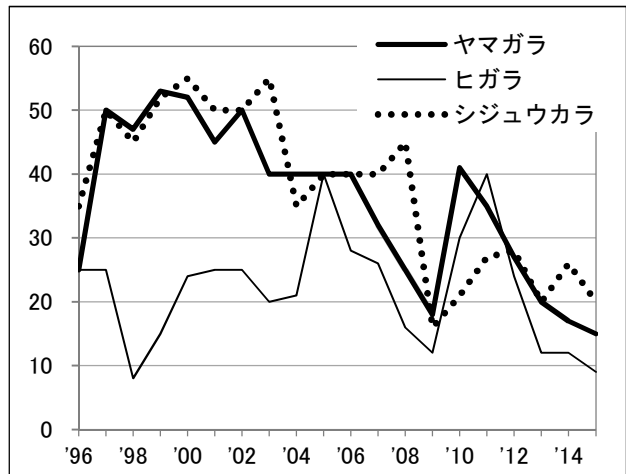
出現羽数は年最大値の年平均、0は1羽未満

(5) 主な野鳥の動向、特徴等

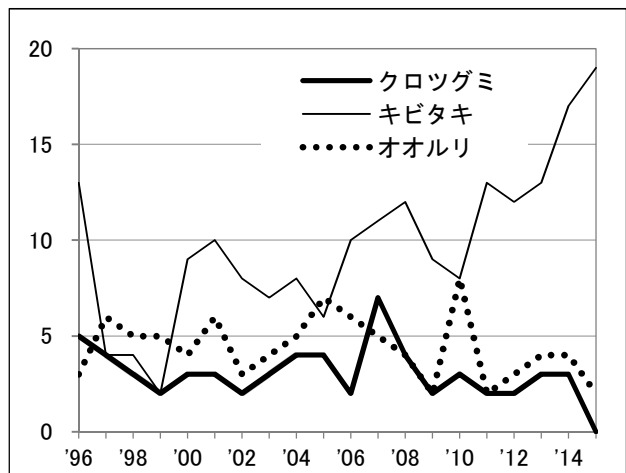
羽数の多い上位3種の経年変化は次グラフのとおりで、いずれも減少傾向にある。



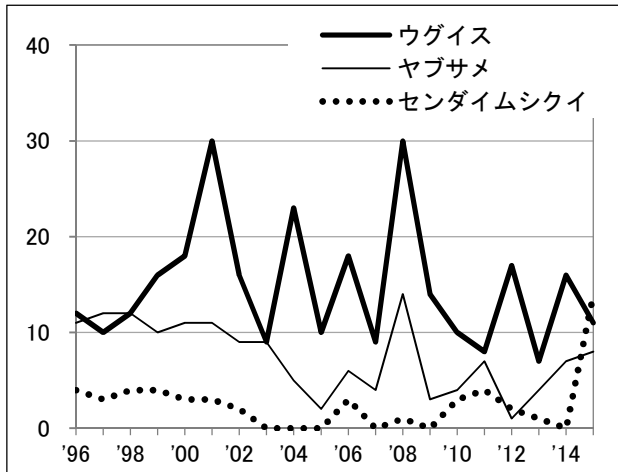
当コースを代表するカラ類のシジュウカラ、ヤマガラ、ヒガラの経年変化は次グラフのとおりで、前2種は減少傾向にある。



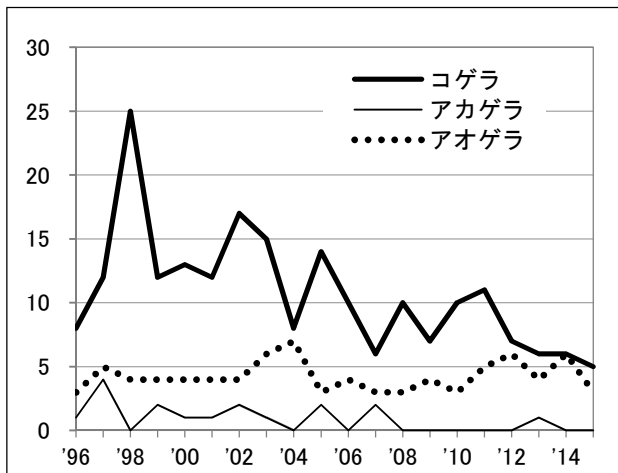
夏鳥3種の経年変化は次図のとおりで、キビタキが増加傾向にある。



ウグイスの仲間3種の経年変化は次図のとおりで、ウグイスとヤブサメは減少傾向にある。



キツキの仲間3種の経年変化は次図のとおりで、コゲラは減少傾向にある。



(6) 特記事項

コサメビタキの繁殖が2003年以降高尾山頂で記録されている。

人に1mの近さでも逃げないキジバト、昼飯を食べていると餌をねだりにやって来るキジバト、いわゆるドバト化したキジバトがこのコースでも2005年以降観察されるようになった。

夏鳥のツツドリが観察された年数は9年で出現率はほぼ50%である。サンコウチョウは4年(出現率約20%)と低く、出現してもカウント中に声を聞くだけである。

冬鳥のウソの出現率は40%、カヤクグリは20%であるが、クロジは55%と比較的高い。ウソは同時に15羽観察されることがあるが、クロジは1~2羽の少数である。

オオアカゲラはカウント中以外のものを含めこのコースでは、1997、1999、2000、2013年に観察されている。

ヒレンジャクは2013年5月8日、高尾山1号路ケーブル山上駅付近で8羽がモミにからまるキズタの実を食べに来ていたものである。

定期カウント中ではないが、1997年5月17日に、1号路から見た尾根の木の枝に止まるブッポウソウ1羽がカワセミ会の探鳥会で観察された。

外来種のガビチョウは毎年観察され、多い時は20羽を超える時もある。ソウシチョウは2000年から冬季に観察されるようになったが、1羽も観察されない年もある。



「鳥類目録」について

本書と並行して、「八王子市・日野市鳥類目録」の編集が行われている。鳥類目録は文字通り、過去、現在を通して八王子市、日野市にどんな鳥が確認されているか、を総ざらいしたもので、本書とは性格が異なる。

編集の過程ではカワセミ会の鳥信をはじめとした膨大なデータ、また外部文献の記録などを使用した。これらのデータは、まとめてしまえば「1件」にしかならないが、その中には観察者、記録者の多くの努力、熱意が込められている。

鳥類目録は、その性格上やや無機質な印象を受けるが、目を凝らしてみると、印刷された数字や言葉の中にそれらの息吹が垣間見えるようである。

本書とあわせてご覧いただくことで、八王子市、日野市の状況がより多面的に理解されることを期待したい。

18. 高尾山（琵琶滝コース）

(1) コースの概要

このコースは、京王線高尾山口駅前の案内川に架かる青葉橋上から始まる。商店街を経て高尾登山鉄道清滝駅横から前の沢沿いに車道を進むと、妙音橋がある。ここから高尾山自然散策路 6 号路に入る。修験道場の琵琶滝を右に見ながら沢筋に沿って進むと 6 号路は深い樹林帯になり、スギの大木も目立つようになる。粘板岩の露出した硯石を過ぎると大山橋。ここはいい休憩ポイントだ。登山道は左岸に移り、小さな沢を二つ過ぎると稲荷山コースとの分岐で、更に飛び石伝いに直進する。暫くすると急な階段が連続するが、上りきると 5 号路と交差し、更に進み、改装なったトイレ前を左折すると登山者で賑わう山頂だ。

山頂からは同じ道に戻り、5 号路を経て比較的静かな 3 号路に入る。高尾山の中腹の水平なトラバース道だ。浄心門分岐で 2 号路となり、11 丁目茶屋下の分岐からは急な琵琶滝道を下る。石仏広場で左に折れ、東京高尾病院脇を経て妙音橋、そして清滝駅前の広場に至る。

全行程約 8.5km の長いコースである。



コース概念図



6 号路入り口付近 2015.6.4

(2) 調査期間及び担当者

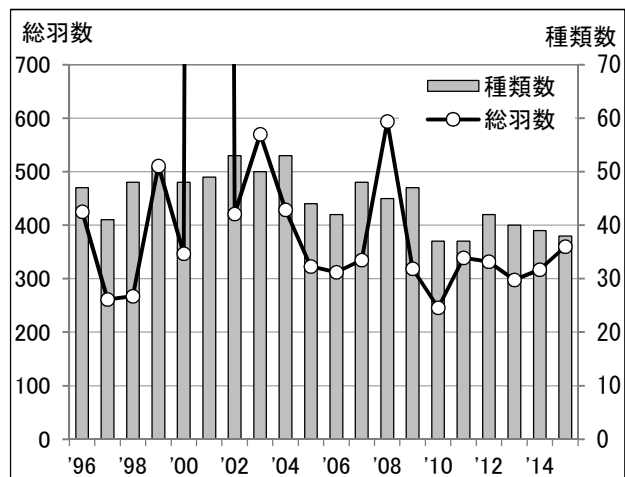
カウント開始は 1996 年 1 月で 2015 年 12 月までの 20 年間実施している。担当者と担当期間は次の通りである。

1996 年～2003 年	木村晴美
2004 年～2006 年	若狭 誠
2007 年～現在	千葉槇子

(3) 確認された全野鳥の経年変化

羽数、種類ともに傾向としては、減少の方向にある。羽数の減少がより顕著である。2001～2008 年の 3 回のピークは、それぞれアトリ（2001）、マヒワ（2003）、ツグミ（2008）の大群が飛来したためである。

上記 3 回のピークを除くと、羽数は、1999 年が最大で、2010 年が最小、種類数は、2002、2004 年の 53 種が最大で、2010、2011 年の 37 種が最小である。



(4) 確認された野鳥の概要

確認された野鳥の種類数は 79 種。これに外来種 6 種を加えると 85 種である（次ページ表を参照）。

留鳥が最も多く 42 種（53%）冬鳥 20 種（25%）夏鳥 13 種（17%）旅鳥 4 種（5%）の順である。

出現頻度では毎年観察された種が 22 種、1 年しか観察されなかった種が 8 種であった。

羽数の上位 10 種は、多い順にアトリ、エナガ、ヒヨドリ、メジロ、シジュウカラ、イワツバメ、マヒワ、ヤマガラ、ハシブトガラス、スズメである。

確認された野鳥の種類数：79種

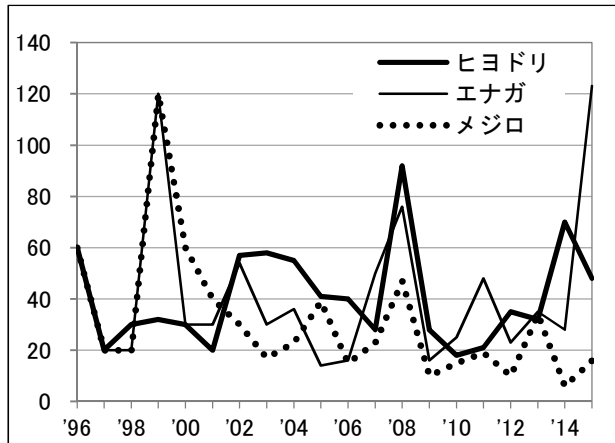
季節区分別	出現頻度別(年)	出現羽数別(羽)
留鳥	エナガ	20 キジバト 600 アトリ
留鳥	ヒヨドリ	20 コゲラ 43 エナガ
留鳥	メジロ	20 アオゲラ 41 ヒヨドリ
留鳥	シジュウカラ	20 カケス 31 メジロ
留鳥	ヤマガラ	20 ハシブトガラス 22 シジュウカラ
留鳥	ハシブトガラス	20 ヤマガラ 20 イワツバメ
留鳥	スズメ	20 ヒガラ 16 マヒワ
留鳥	ヒガラ	20 シジュウカラ 15 ヤマガラ
留鳥	コゲラ	20 イワツバメ 13 ハシブトガラス
留鳥	ウグイス	20 ヒヨドリ 12 スズメ
留鳥	カケス	20 ウグイス 9 ヒガラ
留鳥	キジバト	20 ヤブサメ 9 コゲラ
留鳥	イカル	20 エナガ 9 ツバメ
留鳥	キセキレイ	20 メジロ 8 ウグイス
留鳥	ミンサザイ	20 ミンサザイ 8 キビタキ
留鳥	アオゲラ	20 クロツグミ 7 カケス
留鳥	ハシボソガラス	20 ルリビタキ 6 ツグミ
留鳥	カルガモ	20 キビタキ 6 キジバト
留鳥	トビ	20 オオルリ 6 オオルリ
留鳥	ハクセキレイ	20 スズメ 6 イカル
留鳥	セグロセキレイ	20 キセキレイ 5 カワラヒワ
留鳥	ノスリ	20 イカル 5 キセキレイ
留鳥	コガラ	19 カルガモ 5 ヤブサメ
留鳥	カワラヒワ	19 ハシボソガラス 5 ルリビタキ
留鳥	アカゲラ	18 トビ 4 クロツグミ
留鳥	ホオジロ	18 ジョウビタキ 4 ハシボソガラス
留鳥	キクイタダキ	18 ハクセキレイ 4 ミンサザイ
留鳥	ヒメアマツバメ	18 アオジ 3 カルガモ
留鳥	アオバト	17 ノスリ 3 ウソ
留鳥	カワセミ	17 セグロセキレイ 3 アオゲラ
留鳥	モズ	16 ホトギス 3 アオジ
留鳥	オオタカ	16 ツバメ 2 コガラ
留鳥	コサギ	16 シロハラ 2 クロジ
留鳥	ムクドリ	15 ウソ 2 シロハラ
留鳥	ヤマドリ	14 コガラ 2 トビ
留鳥	アオサギ	13 アカゲラ 2 ホオジロ
留鳥	カワガラス	13 センダイムシクイ 2 キクイタダキ
留鳥	カワウ	13 カワラヒワ 2 セグロセキレイ
留鳥	ゴイサギ	12 サンコウチョウ 2 ゴジュウカラ
留鳥	キジ	12 キクイタダキ 2 ヒメアマツバメ
留鳥	ダイサギ	12 ホオジロ 1 ホトギス
留鳥	キバシリ	12 クロジ 1 ノスリ
冬鳥	ルリビタキ	10 ヒメアマツバメ 1 ジョウビタキ
冬鳥	アオジ	10 ゴジュウカラ 1 センダイムシクイ
冬鳥	ジョウビタキ	9 アオバト 1 ハクセキレイ
冬鳥	トラツグミ	8 カワセミ 1 サシバ
冬鳥	シロハラ	8 シメ 1 カヤクグリ
冬鳥	ウソ	7 ツツドリ 1 アカゲラ
冬鳥	クロジ	7 オオタカ 1 サンコウチョウ
冬鳥	ゴジュウカラ	7 モズ 1 シメ
冬鳥	シメ	7 ツグミ 1 コサメビタキ
冬鳥	ツグミ	7 カヤクグリ 1 アマツバメ
冬鳥	カヤクグリ	6 コサギ 1 ムクドリ
冬鳥	マヒワ	6 マヒワ 1 ヤマドリ
冬鳥	アトリ	5 ヤマドリ 0 アオバト
冬鳥	カシラダカ	5 アオサギ 0 モズ
冬鳥	ハイタカ	5 ムクドリ 0 ツツドリ
冬鳥	オオアカゲラ	4 ツミ 0 オオタカ
冬鳥	アカハラ	4 サシバ 0 カワセミ
冬鳥	ミヤマホオジロ	4 コサメビタキ 0 コサギ
冬鳥	マガモ	3 カワガラス 0 アオサギ
冬鳥	ハヤブサ	3 アトリ 0 ツミ
夏鳥	イワツバメ	2 カワウ 0 ハリオアマツバメ
夏鳥	キビタキ	2 ゴイサギ 0 カワガラス
夏鳥	オオルリ	2 アマツバメ 0 トラツグミ
夏鳥	ヤブサメ	2 ハイタカ 0 カシラダカ
夏鳥	クロツグミ	2 オオアカゲラ 0 カワウ
夏鳥	ツバメ	2 トラツグミ 0 ゴイサギ
夏鳥	ホトギス	2 アカハラ 0 ハイタカ
夏鳥	センダイムシクイ	2 エゾビタキ 0 オオアカゲラ
夏鳥	サンコウチョウ	2 カシラダカ 0 アカハラ
夏鳥	ツツドリ	1 キジ 0 エゾビタキ
夏鳥	コサメビタキ	1 マガモ 0 ミヤマホオジロ
夏鳥	ツミ	1 ダイサギ 0 キジ
夏鳥	サンショウクイ	1 ハリオアマツバメ 0 マガモ
旅鳥	サシバ	1 ハヤブサ 0 ダイサギ
旅鳥	アマツバメ	1 サンショウクイ 0 ハヤブサ
旅鳥	エゾビタキ	1 キバシリ 0 サンショウクイ
旅鳥	ハリオアマツバメ	1 ミヤマホオジロ 0 キバシリ

出現羽数は年最大値の年平均、0は1羽未満

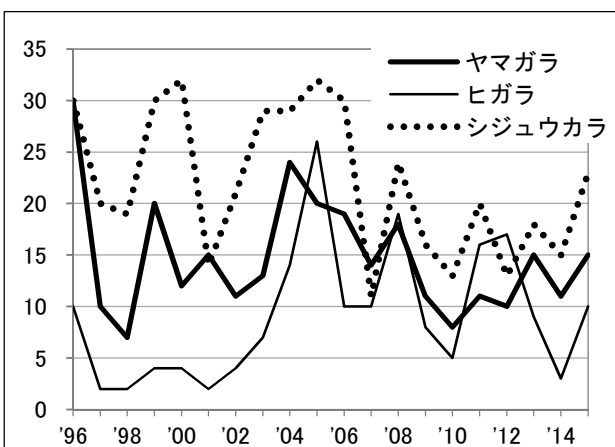
(5) 主な野鳥の動向、特徴等

アトリを除き、羽数の多いメジロ、ヒヨドリ、エナガの経年変化は、次のグラフのとおりである。

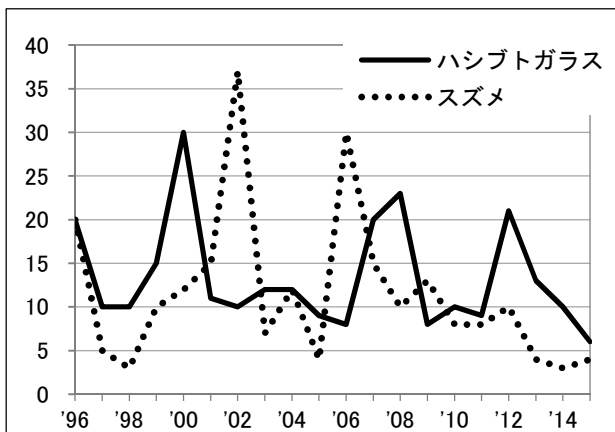
ヒヨドリとエナガは年変化の振幅は大きいが減少傾向とまでは言えない。メジロは徐々に減少していく傾向にある。



当コースを代表するカラ類のシジュウカラ、ヤマガラ、ヒガラの経年変化は次のグラフのとおりである。特に2007年以降の減少が顕著である。



スズメとハシブトガラスの経年変化は次のグラフのとおりである。スズメは2006年までは激しい年変化だったが、それ以降は極端な減少を続けている。ハシブトガラスは、3回のピークを見ても羽数は減少しており、全体的にも減少傾向である。



(6) 特記事項

①特筆すべき鳥情報

2001年の1万羽を大きく超えるアトリの大群は、ガン類の飛翔が流れて行く様であったという。2008年のツグミは、カラスザンショウ、ツルウメモドキを求めて次々と飛来し飛去していった。ヤマドリは、2004年以来観察されていない。

外来種では、清滝駅前にいたカワラバト（ドバト）は、駆除はしていないのに2013年以降観察されていない。ガビチョウは毎年観察されている。ソウシチョウは観察されない年もあるが、フォト鳥信によると2014年には巣立ちヒナが観察されている。

高尾山口駅の前ヒメアマツバメとイワツバメの巣は、駅付近の改修工事に伴いすべて撤去された。ヒメアマツバメは2010年以降観察されていない。

②当コースの状況

様々な理由で通行止めになることが多い。
ここ数年だけでも次のような通行止めがあった。

土砂崩れで、2008年3月、8月が3号路。ゲリラ豪雨で、9月、10月が6号路。スズメバチの営巣で11月3号路、6号路。2010年3月カエデの大木の崩壊で6号路。2011年9月21日台風15号の被害で3号路と6号路が大崩壊。2012年1月～3月が大雪で3号路。また、5月の連休と11月の紅葉時には、6号路等が一方通行になることもある。

③自然研究路6号路の魅力

高尾山自然研究路の6号路は、高尾登山鉄道清滝駅先の妙音橋から高尾山頂手前の5号路との合流までの3.3kmで、高尾山の数多くの登山コースの中でも独特な雰囲気を持つ魅力的なコースである。

林立するスギと種々の雑木の大きな樹林帯の中を、V字谷の底を流れ水量のある前の沢沿いに標高450m付近まで登る。

川のせせらぎの中を、四季折々の草花や木々の葉の変化を楽しみながら登ると、溪谷を好む野鳥達のさえずりが聞こえる。オオルリ、キビタキ、サンコウチョウ、ミソサザイ・・・勿論ウグイスも。



共存したムササビとブッポウソウ

以下は高尾山報 1977年7月1日第163号（薬王院刊）の抜粋引用である。

高尾山にある高尾自然動物センターの杉の大木にムササビ向けの巣箱が取り付けられたのは4年前。周囲にホウのある大木が少なくなり、事務所の屋根裏にまで家なしムササビがすみつくようになったためだ。センターの入り口近くにある三本の杉の木の一つずつ少し大きめの巣箱を取り付けてやった。思惑あたって、その一つに直ぐ一匹のムササビが住みついた。幹にびっしりツメ跡をつけて、「自宅」を宣言した。ところが、次の年の春、一つがいのブッポウソウが同センターのあたりに姿を見せたと思うと、いつの間にかムササビの巣を占領してしまい、追い出されたムササビは隣の巣箱に移動していた。

取り合いになった巣箱は地上10mほどあって、三つのうち一番高くて見晴らしがよく、しかも出入りが南向き。初秋になってブッポウソウが南へ帰るとムササビはまた元の巣へ。そして昨年春、ブッポウソウ夫婦はまた同じ巣へ帰ってきて、ムササビを追い出してヒナを2、3羽孵し、秋には一家で飛び立って行った。さらに今年は先月6日に1羽がまっすぐその巣箱に帰ってきたのをトップにブッポウソウ一家は4羽が里帰り。ムササビの方は習慣になったのか、春の声とともに隣の巣に移って一家の到着前に城を明け渡していた。ところが今年は直ぐ北の斜面でカラス夫婦が杉の木の枝に巣をつくり、ブッポウソウの巣に目をつけたため、ブッポウソウは営巣をあきらめてしまった。

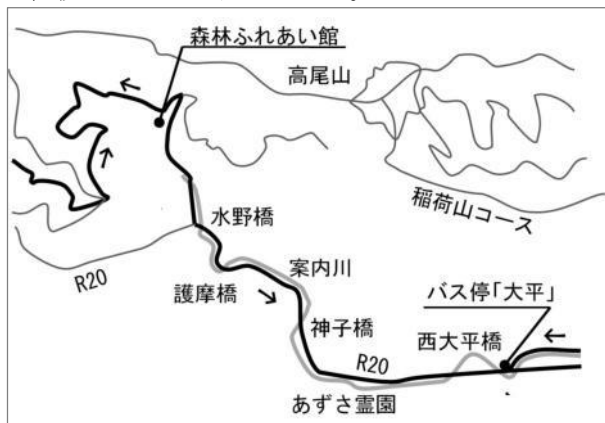
19. 高尾山(大垂水コース)

(1) コースの概要

このコースは、南浅川の支流である案内川上流、国道20号線大平バス停からあずさ霊園を経て、大垂水峠手前で大平林道に入り、一丁平・大垂水峠との分岐先約600mまでの高尾山西南地域を往復する。往復約6kmである。大半は国有林で、現在も植栽や伐採等の営林作業が行われている。登山コースでもある為、ハイカーも多くはないが年間を通して見られる。

2002年6月に大平林道の途中に木造平屋建ての「森林ふれあい館」が完成し林業体験の拠点になっている。

また、あずさ霊園や大平バス停付近は大平林道と異なり比較的開けた地形で、上空も含め見通しがきく。案内川に沿って僅かではあるが畑があり、飲食店・宿泊施設・病院・民家もある。路線バスも一日3往復だけが運行している。



コース概念図(高尾山 大垂水コース)



大平林道・一丁平分岐付近 2015.3.2

(2) 調査期間及び担当者

このコースの定期カウント開始年は1996年で、2015年まで20年間実施している。

1996年1月～2007年12月 川上 恵

2008年1月～2011年3月 福本順吉

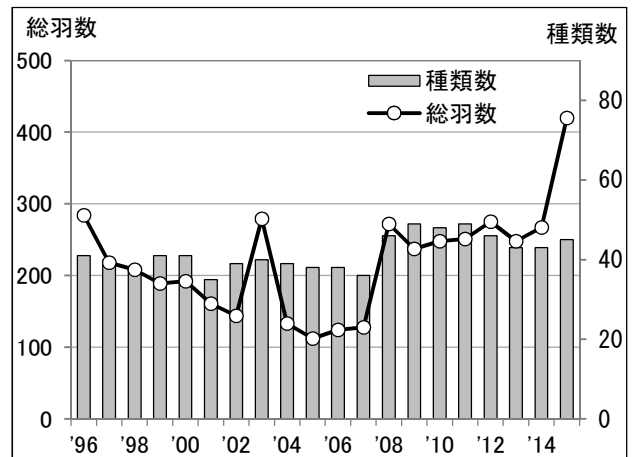
2011年4月～現在 加藤岸男

(3) 確認された全野鳥の経年変化

確認された野鳥の種類数は71種。2009年の49種が最大で、2001年の35種が最少である。年平均種数は、約42種。2007年と2008年を境に、それまでの12年間とそれ以降の8年間との平均種数には約9種の差がある。尚、外来種は7種であった。

確認された野鳥の総羽数(最大値計)は、4,390羽である。年平均羽数は約220羽である。年間最大羽数は、2015年の420羽、年間最少羽数は2005年の112羽である。

2004年から2007年までの4年間の落ち込みの主な種類はスズメである。2003年までは、20～50羽で推移していたスズメの羽数が、2003年は20羽、そして2004年には10羽、2007年には1羽まで激減した。それ以降も2013年の8羽までしか回復していない。



(4) 確認された野鳥の概要

観察種類数は、第1期(1996～2004)は62種、第2期(2005～2015)は67種である。第1期、第2期合わせた20年間の総観察種数は71種。カヤクグリ、コサメビタキ、カワガラス、シメ、キジ、ツミ、ハイタカ、コマドリ の8種類が新たに加わった。

季節区分では、留鳥40種(56%)、冬鳥17種(24%)、夏鳥12種(17%)、旅鳥2種(3%)で、20年間の区分比率に大きな変化はない。

出現頻度別では、約28%に当たる20種類が毎年(100%)出現し、約58%の種類が50%以上の出現率である。約10%に当たる7種が1回のみ出現である。

出現羽数別では、ヒヨドリ、スズメ、マヒワ、メジロの順である。留鳥の20年間の月別出現率は、ヒヨドリが99%で一番高く、シジュウカラ(96%)、ホオジロ(86%)、メジロ(84%)、キジバト(82%)の順になっている。カケスは53%の月別出現率で、出現する月にばらつきがあり、夏季にも観察されるし、冬季に観察されない年もある。

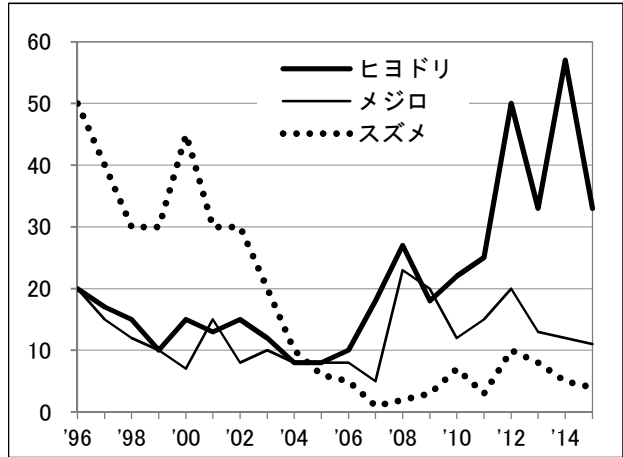
確認された野鳥の種類数：71種

季節区分別	出現頻度別(年)	出現羽数別(羽)
留鳥	ヒヨドリ	20
留鳥	スズメ	20
留鳥	メジロ	20
留鳥	シジュウカラ	20
留鳥	エナガ	20
留鳥	ウグイス	20
留鳥	ホオジロ	20
留鳥	ヤマガラ	20
留鳥	カケス	20
留鳥	キジバト	20
留鳥	ハシボソガラス	20
留鳥	キセキレイ	20
留鳥	ハシブトガラス	20
留鳥	コゲラ	20
留鳥	イカル	20
留鳥	トビ	20
留鳥	カワラヒワ	20
留鳥	アオゲラ	20
留鳥	ヒガラ	20
留鳥	ミソサザイ	20
留鳥	モズ	19
留鳥	アカゲラ	18
留鳥	アオバト	18
留鳥	カルガモ	18
留鳥	アオサギ	17
留鳥	ノスリ	17
留鳥	コガラ	17
留鳥	オオタカ	16
留鳥	カワセミ	16
留鳥	ハクセキレイ	15
留鳥	ヤマドリ	15
留鳥	カワガラス	14
留鳥	クイタダキ	14
留鳥	セグロセキレイ	14
留鳥	オナガ	13
留鳥	チョウゲンボウ	13
留鳥	ヒメアマツバメ	13
留鳥	ムクドリ	13
留鳥	キジ	12
留鳥	コサギ	12
冬鳥	ジョウビタキ	10
冬鳥	アオジ	9
冬鳥	ルリビタキ	9
冬鳥	ウソ	9
冬鳥	ツグミ	9
冬鳥	カシラダカ	8
冬鳥	トラツグミ	7
冬鳥	シロハラ	7
冬鳥	クロジ	6
冬鳥	カヤクグリ	6
冬鳥	アカハラ	5
冬鳥	ベニマシコ	5
冬鳥	マヒワ	4
冬鳥	ミヤマホオジロ	3
冬鳥	シメ	3
冬鳥	アトリ	3
冬鳥	ハイタカ	3
夏鳥	オオルリ	3
夏鳥	ホトギス	3
夏鳥	クロツグミ	3
夏鳥	センダイムシクイ	2
夏鳥	キビタキ	2
夏鳥	ツツドリ	2
夏鳥	ツバメ	2
夏鳥	ヤブサメ	1
夏鳥	イワツバメ	1
夏鳥	コサギ	1
夏鳥	コサメビタキ	1
夏鳥	ツミ	1
夏鳥	サンコウチョウ	1
旅鳥	アマツバメ	1
旅鳥	コマドリ	1
留鳥	キジバト	21
留鳥	ホトギス	17
留鳥	トビ	13
留鳥	コゲラ	13
留鳥	カケス	12
留鳥	ハシボソガラス	11
留鳥	ハシブトガラス	9
留鳥	ヤマガラ	9
留鳥	シジュウカラ	7
留鳥	ヒヨドリ	6
留鳥	ウグイス	6
留鳥	エナガ	6
留鳥	メジロ	6
留鳥	クロツグミ	6
留鳥	ジョウビタキ	5
留鳥	オオルリ	5
留鳥	スズメ	4
留鳥	キセキレイ	4
留鳥	ハシブトガラス	4
留鳥	アオジ	4
留鳥	ジョウビタキ	4
留鳥	ウソ	4
留鳥	コゲラ	4
留鳥	オオルリ	3
留鳥	イカル	3
留鳥	キビタキ	3
留鳥	ルリビタキ	3
留鳥	ヤブサメ	3
留鳥	トビ	2
留鳥	ホトギス	2
留鳥	クロツグミ	2
留鳥	センダイムシクイ	2
留鳥	アオゲラ	2
留鳥	イワツバメ	1
留鳥	カルガモ	1
留鳥	ツグミ	1
留鳥	モズ	1
留鳥	コガラ	1
留鳥	ミソサザイ	1
留鳥	アオバト	1
留鳥	アカゲラ	1
留鳥	カヤクグリ	1
留鳥	ノスリ	1
留鳥	クイタダキ	1
留鳥	シロハラ	1
留鳥	カヤクグリ	1
留鳥	ツツドリ	1
留鳥	キクイタダキ	0
留鳥	アカハラ	0
留鳥	オオタカ	0
留鳥	カワセミ	0
留鳥	シロハラ	0
留鳥	ヒメアマツバメ	0
留鳥	クロジ	0
留鳥	アオサギ	0
留鳥	ベニマシコ	0
留鳥	アマツバメ	0
留鳥	ノスリ	0
留鳥	ハクセキレイ	0
留鳥	ヤマドリ	0
留鳥	オオタカ	0
留鳥	カワセミ	0
留鳥	コサメビタキ	0
留鳥	コサメビタキ	0
留鳥	トラツグミ	0
留鳥	アカハラ	0
留鳥	ミヤマホオジロ	0
留鳥	カワガラス	0
留鳥	セグロセキレイ	0
留鳥	オナガ	0
留鳥	シメ	0
留鳥	アトリ	0
留鳥	サンコウチョウ	0
留鳥	ムクドリ	0
留鳥	チョウゲンボウ	0
留鳥	キジ	0
留鳥	コサギ	0
留鳥	ツミ	0
留鳥	ハイタカ	0
留鳥	ハイタカ	0
留鳥	ハイタカ	0
留鳥	コマドリ	0

出現羽数は年最大値の年平均、0は1羽未満

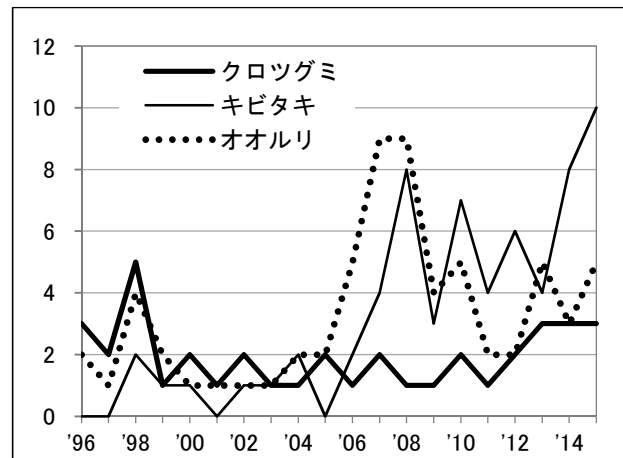
(5) 主な野鳥の動向、特徴等

出現羽数の多いヒヨドリ、メジロ、スズメ、の経年変化は次のグラフのとおりである。ヒヨドリは増加傾向にあり、メジロは大きな変化はない。スズメは極端に減少した後やや回復傾向にある。



当コースを代表する夏鳥である、オオルリ、キビタキ、クロツグミの経年変化は次のグラフのとおりである。

オオルリ、キビタキは2006年以降大幅に増加しているが、クロツグミの変化は小さい。



繁殖が確認されていて特記すべき種類は、クロツグミとコサメビタキである。クロツグミはここ数年連続して、雛もしくは幼鳥が確認されている。コサメビタキの繁殖事例は多くない。

ヤマドリは鳥信42件の内7件(約17%)がこのコースである。

(6) 特記事項

①外来種の動向

外来種は7種で、ガビチョウ、コジュケイ、ソウシチョウ、カワラバト(ドバト)、アヒル、ガチョウ、カオグロガビチョウである。ガビチョウは近年毎年8~11ヶ月確認され、羽数も増える傾向にある。ソウシチョウが観察される機会はそう多くない。

②野鳥が集まるスポットと季節変化

野鳥が集まる確実なスポットはないが、大平林道では旧作業小屋・一丁平分岐付近、大平バス停付近ではごん助裏の畑で、ホオジロ類を中心に数種類見られることが多い。当コースの標高は200~500mであるが、やはり夏季期間は種類数・羽数共に減少する。

③コースの状況

大雨等による数カ所の倒木跡地は直ぐに草地となり、餌場として鳥達が集まるポイントになっていたが、徐々に灌木が茂り成長したため、鳥影が減少している。このコースにも、ハイカー(登山者)や営林作業員が見られるが、多くはない。そのため、伐採作業時の大きな音以外は、生息環境への影響は少ないと思われる。あずさ霊園付近は、当コースでは希少なノスリ等のワシタカ類が比較的出現する所だが、供物の管理が徹底していることもあって鳥影は少ない。

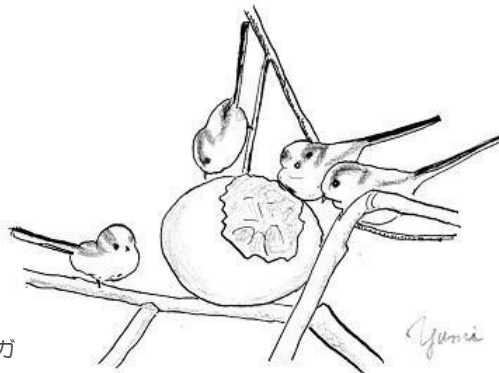


コサメビタキの繁殖

コサメビタキはスズメよりも小さく、頭から尾までの体の上面は灰褐色、胸・腹は白色である。体の大きさの割に目が大きめで、可愛らしい顔に見える。日本では夏鳥として北海道から九州の平地から山地の、広葉樹や針広混交林で営巣する。

清水徹男著『高尾山野鳥観察史』によれば、「東京近郊ではかつて身近な夏鳥として親しまれ、高尾山でもかなり普通に観察されたが、今世紀に入る頃から4、5月の記録も散発的になり、その後の繁殖期の記録が途絶えた」とある。

カワセミ会の鳥信には2010年までに6件の繁殖情報が寄せられている。2011年、2012年には高尾山頂と八王子城跡の2ヶ所で繁殖を確認した。このように最近になってコサメビタキの八王子での繁殖の定着が窺える兆しが出てきた。一方でカメラマンの集中による繁殖の放棄が懸念されている。



エナガ

20. 高尾山（日影沢コース）

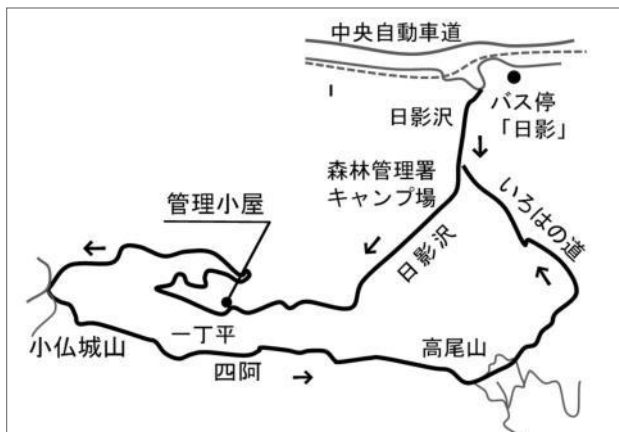
（1）コースの概要

全行程 7.5km で、調査の所要時間は 6 時間から 7 時間である。高低差が約 370m で、途中アップダウンのきついところもあるが、平均的には、なだらかである。明治の森高尾国定公園指定地域なので、登山道はよく整備され、登山道脇の下草刈りも実施されている。森林の伐採が進み全般的に視界は開けてきた。

日影沢入口から小仏川を渡って日影沢林道に入り、キャンプ場を経て車止め柵まで沢伝いに 2.2km 登る。正に“日影”コース。

日影沢を離れ更に林道を登り、小仏城山に至る 1.4km は静寂の中を歩く。小仏城山から一丁平を経ているのは森までの 2.5km は、比較的平坦ではあるが登山者が圧倒的に多い。

いろはの森のやや急斜面の登山道を下り、キャンプ場を経て出発点の日影沢に戻る 1.4km は、登山者も少なく、ヒノキ・ミズキ・コナラ等の深い森の中である。



コース概念図



小仏城山山頂付近 2015. 3. 2

（2）調査期間及び担当者

1998 年 1 月から調査を開始し、2015 年 12 月まで 18 年が経過している。

1998 年～2000 年 小池一男

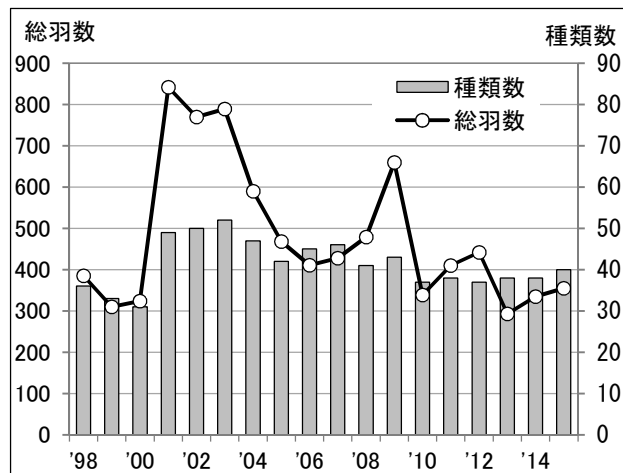
2001 年～2012 年 白川司・史子

2013 年～現在 柚木鎮夫・育子

（3）確認された全野鳥の経年変化

確認された野鳥の総羽数（最大値計）は、8,630 羽で、2001 年の 842 羽を最大に、若干の増減はあるが、減少する傾向にある。最少は 2013 年の 293 羽で、2001 年の最大羽数と比べ、35%となっている。年平均出現羽数は、約 479 羽である。

確認された総種類数は、76 種である。年平均出現種類数は 41 種である。2003 年の 52 種を最大に減少傾向にある。最少は 2000 年の 31 種である。2010 年以降は、40 種前後で推移し、下げ止まっている。これは、高尾山の他の定期カウントコースの経年変化とほぼ同様である。



（4）確認された野鳥の概要

18 年間に確認された野鳥の種類数は、76 種である。季節区分では、留鳥 35 種(46%)、冬鳥 21 種(28%)、夏鳥 13 種(17%)、旅鳥等 7 種(9%)である。外来種は 4 種。

出現頻度では、毎年出現する種類は 20 種(26%)である。また、過去に 1 回のみ出現した種類は 8 種(11%)である。

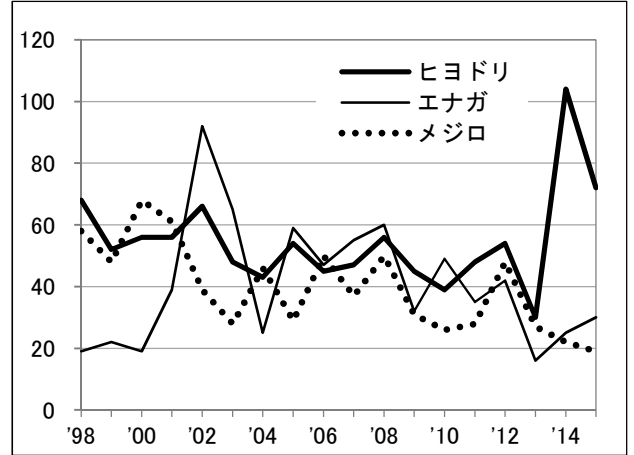
確認された野鳥の種類数：76種

季節区分別	出現頻度別(年)	出現羽数別(羽)	出現羽数別(羽)
留鳥	ヒヨドリ	18 キジバト	57 マヒワ
留鳥	エナガ	18 ホトギス	55 ヒヨドリ
留鳥	メジロ	18 コゲラ	41 エナガ
留鳥	シジュウカラ	18 アオゲラ	40 メジロ
留鳥	ウグイス	18 カケス	32 シジュウカラ
留鳥	ヤマガラ	18 ハシボソガラス	29 ウグイス
留鳥	ホオジロ	18 ハシブトガラス	24 アトリ
留鳥	コゲラ	18 ヤマガラ	17 ヤマガラ
留鳥	ヒガラ	18 ヒガラ	14 ホオジロ
留鳥	カケス	18 シジュウカラ	12 コゲラ
留鳥	ハシボソガラス	18 ヒヨドリ	11 ヒガラ
留鳥	ハシブトガラス	18 ウグイス	11 カケス
留鳥	カワラヒワ	18 ヤブサメ	10 キビタキ
留鳥	イカル	18 エナガ	10 ハシボソガラス
留鳥	コガラ	18 メジロ	8 ハシブトガラス
留鳥	キジバト	18 クロツグミ	8 カワラヒワ
留鳥	ムクドリ	18 ルリビタキ	8 イカル
留鳥	ミソサザイ	18 オオルリ	8 ヤブサメ
留鳥	キセキレイ	18 キセキレイ	7 クロツグミ
留鳥	アオゲラ	18 ホオジロ	6 ルリビタキ
留鳥	トビ	17 キビタキ	6 コガラ
留鳥	スズメ	16 トビ	5 オオルリ
留鳥	アオバト	16 アカゲラ	5 キジバト
留鳥	ヒメアマツバメ	16 ミソサザイ	5 イワツバメ
留鳥	アカゲラ	16 ジョウビタキ	4 ムクドリ
留鳥	キクイタダキ	16 イカル	4 アオジ
留鳥	ノスリ	16 アオジ	3 センダイムシクイ
留鳥	モズ	15 コガラ	3 ウソ
留鳥	オオタカ	15 センダイムシクイ	3 ミソサザイ
留鳥	カルガモ	15 クロジ	3 キセキレイ
留鳥	カワウ	14 ツツドリ	3 クロジ
留鳥	アオサギ	14 カワラヒワ	3 アオゲラ
留鳥	オナガ	12 アオバト	2 ジョウビタキ
留鳥	ハクセキレイ	12 ツバメ	2 トビ
留鳥	セグロセキレイ	11 シロハラ	2 スズメ
冬鳥	マヒワ	11 ウソ	2 ホトギス
冬鳥	アトリ	10 ノスリ	2 ツバメ
冬鳥	ルリビタキ	9 モズ	2 アオバト
冬鳥	アオジ	9 キクイタダキ	1 ツツドリ
冬鳥	ウソ	9 イワツバメ	1 ヒメアマツバメ
冬鳥	クロジ	8 マヒワ	1 アマツバメ
冬鳥	ジョウビタキ	7 ツグミ	1 アカゲラ
冬鳥	カシラダカ	6 アマツバメ	1 キクイタダキ
冬鳥	トラツグミ	6 アトリ	1 カシラダカ
冬鳥	シロハラ	6 カシラダカ	1 シロハラ
冬鳥	ツグミ	5 ヒメアマツバメ	1 ノスリ
冬鳥	ビンズイ	5 ハイタカ	1 ツグミ
冬鳥	シメ	5 オオタカ	1 シメ
冬鳥	ミサゴ	5 サンコウチョウ	1 ビンズイ
冬鳥	ハイタカ	5 トラツグミ	1 モズ
冬鳥	カヤクグリ	5 シメ	0 サンコウチョウ
冬鳥	アカハラ	4 エゾビタキ	0 ハイタカ
冬鳥	ハヤブサ	4 スズメ	0 オオタカ
冬鳥	ゴジュウカラ	3 ハチクマ	0 トラツグミ
冬鳥	タヒバリ	3 サシバ	0 エゾビタキ
冬鳥	ミヤマホオジロ	3 アカハラ	0 カヤクグリ
夏鳥	キビタキ	3 コルリ	0 サシバ
夏鳥	ヤブサメ	3 ビンズイ	0 ハチクマ
夏鳥	クロツグミ	2 カルガモ	0 アカハラ
夏鳥	オオルリ	2 ハリオアマツバメ	0 コルリ
夏鳥	イワツバメ	2 ツミ	0 カルガモ
夏鳥	センダイムシクイ	2 ハヤブサ	0 ハリオアマツバメ
夏鳥	ホトギス	2 ゴジュウカラ	0 ツミ
夏鳥	ツバメ	2 ムクドリ	0 ハヤブサ
夏鳥	ツツドリ	2 コマドリ	0 ゴジュウカラ
夏鳥	サンコウチョウ	2 コサメビタキ	0 コマドリ
夏鳥	コサメビタキ	2 カヤクグリ	0 コサメビタキ
夏鳥	ツミ	2 ミヤマホオジロ	0 ミヤマホオジロ
夏鳥	アカショウビン	1 カワウ	0 タヒバリ
旅鳥	アマツバメ	1 アオサギ	0 カワウ
旅鳥	エゾビタキ	1 ミサゴ	0 アオサギ
旅鳥	サシバ	1 アカショウビン	0 ミサゴ
旅鳥	ハリオアマツバメ	1 オナガ	0 アカショウビン
旅鳥	ハチクマ	1 ハクセキレイ	0 オナガ
旅鳥	コルリ	1 セグロセキレイ	0 ハクセキレイ
旅鳥	コマドリ	1 タヒバリ	0 セグロセキレイ

出現羽数は年最大値の年平均、0は1羽未満

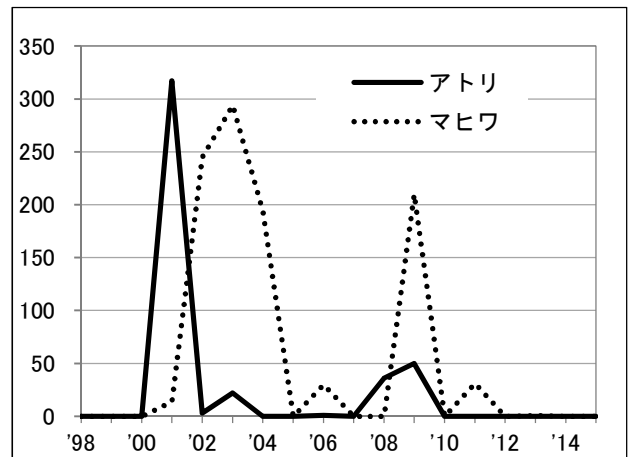
(5) 主な野鳥の動向、特徴等

留鳥の出現羽数が多い順は、①ヒヨドリ ②エナガ ③メジロである。この順は、「数えあげた浅川の野鳥2」の順(①ヒヨドリ ②メジロ ③シジュウカラ)と変化しているが、羽数でみると大きな変化はない。



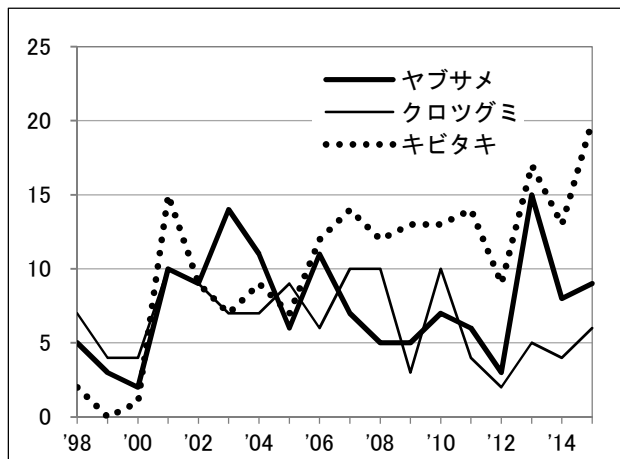
留鳥の出現羽数の上位3種

冬鳥の出現羽数の多い順は、①マヒワ ②アトリ ③ルリビタキである。マヒワとアトリの出現年数は18年間で、7回と6回。出現率は40%と少ないが、大群で飛来するため上位になっている。



冬鳥の出現羽数の上位2種

夏鳥の出現羽数は、①キビタキ ②ヤブサメ ③クロツグミの順である。3種類共に経年変化は比較的大きい。特にヤブサメは年変化が大きい。キビタキはやや緩やかな増加傾向にあり、クロツグミはやや減少傾向である。

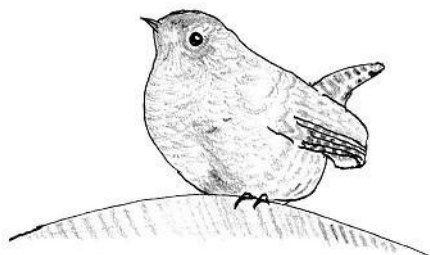


夏鳥の出現羽数の上位3種

八王子市の「市の鳥」オオルリは、夏鳥の出現羽数では第4位に位置している。出現率は100%、年平均約5羽である。



八王子市の「市の鳥」オオルリの動向



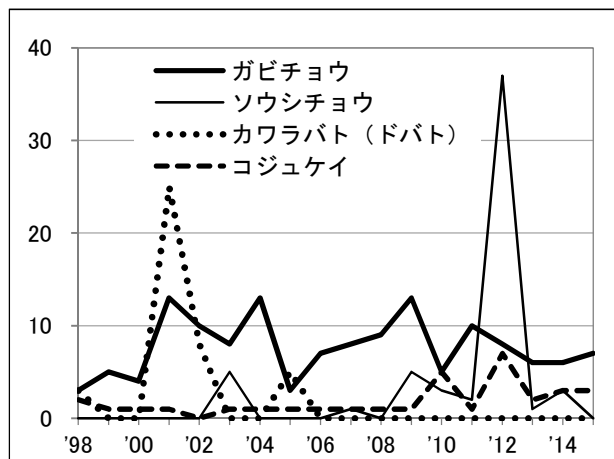
ミソサザイ

Yami

(6) 特記事項

① 外来種の状況

このコースで確認されている外来種は、4種。ガビチョウ、ソウシチョウ、カワラバト(ドバト)、コジュケイである。ガビチョウは18年間、毎年3~13羽確認されている。他の3種は確認されない年もあり、経年変化が大きい。



② 当コースの状況

高尾山及び周辺の自然を含めた環境変化の大きさと早さは著しいものがある。当コースも例外ではない。登山者・観光客の増加、それに伴う登山道の整備、花粉症対策や視界確保のためと思われる森林伐採等々、環境変化の理由は様々であるが、野鳥にとっては好ましい変化ばかりではないことも事実である。出現総羽数や出現種類数の減少傾向との関連も注視する必要がある、当コースでは特にあると思われる。

③ 野鳥が集まるスポット

野鳥が集まるスポットは、先ず日影バス停から入ってすぐの駐車スペース付近と車止め手前の二つの小屋付近、更に進んで、小仏城山の頂上が見え、相模湾までが展望できる地点付近である。小仏城山の山頂も展望が開け、サシバ等の渡りの観察には適している。また、いろはの道では野鳥の声を堪能できる。

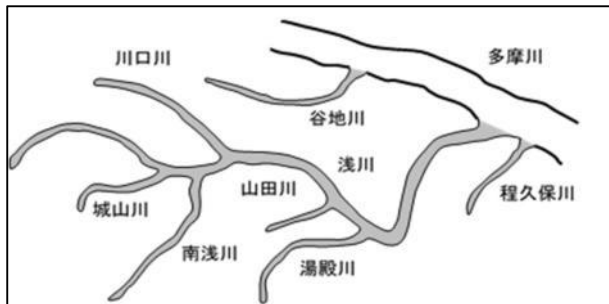
④ 希少種との出会い

春にはコルリやコマドリの通過、夏にはツツドリとの遭遇、ヤブサメの交尾、秋にはサシバ・アマツバメ・ツバメの通過、冬には混群の中のクロジ等々に出会うことができる。

第4章 冬鳥一斉カウント

1. 調査地域の概要

本調査区域は、北浅川の松竹公園西から下流、浅川を経て多摩川と合流するまでのコース、浅川に合流する川口川、南浅川、城山川、山田川、湯殿川の5支流及び多摩川に合流する程久保川、谷地川の9河川で総延長約60kmに及ぶ。調査コースの内、北浅川、浅川、川口川の一部、湯殿川の一部は定期カウントのコースと重なる。



(調査区域)

2. 調査期間及び実施日

1991年、浅川及び6つの支流を16に分割し調査を開始、1997年に程久保川、谷地川(2区域)の3区域が加わり19の区域で現在も継続調査中である(大沢橋は1991年から松竹公園西に変更された)。

調査は毎年1回、1月第2日曜日の午前中に一斉に実施、カウント範囲は川の部分と堤防から両サイド200m程度の範囲とした。延べ参加人数は1,796人、1回当たり平均参加者は69人になる。

河川	調査区域	調査延長
浅川上流	松竹公園西～陵北大橋	3.0
	陵北大橋～松枝橋	2.7
浅川中流	松枝橋～鶴巻橋	2.1
	鶴巻橋～大和田橋	3.1
	大和田橋～長沼橋	2.7
浅川下流	長沼橋～一番橋	3.5
	一番橋～ふれあい橋	2.1
	ふれあい橋～多摩川合流部	2.3
川口川	川口橋～明治橋	3.1
	明治橋～浅川合流部	3.8
南浅川	案内橋～敷島橋	3.3
	敷島橋～浅川合流部	4.2
城山川	月夜峰新橋～浅川合流部	2.7
山田川	山田橋～浅川合流部	4.5
湯殿川	白旗橋～時田橋	2.3
	時田橋～浅川合流部	3.8
程久保川	小宮橋～多摩川合流部	2.9
谷地川	月見橋～左入橋	3.2
	左入橋～多摩川合流部	4.1
合計		59.2km

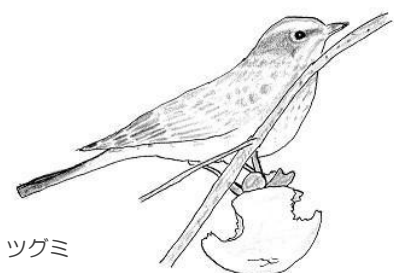
(調査区域と延長)

3. 確認された野鳥

26年間(1991～2016年)で確認された野鳥の種類は102種、外来種が11種。野鳥の季節区分では、冬鳥が45種(44%)、留鳥が53種(52%)、旅鳥が4種(4%)の野鳥が確認された。

(1) 確認された野鳥一覧

	種名
冬鳥	オシドリ、オカヨシガモ、ヨシガモ、ヒドリガモ、アメリカヒドリ、マガモ、ハシヒロガモ、オナガガモ、トモエガモ、コガモ、キンクロハジロ、ミコアイサ、カワアイサ、クイナ、オオバン、タゲリ、シロチドリ、タシギ、クサシギ、ハマシギ、ユリカモメ、カモメ、セグロカモメ、ミサゴ、トラフズク、アリスイ、ヒレンジャク、ゴジュウカラ、シロハラ、アカハラ、ツグミ、ルリビタキ、ジョウビタキ、カヤクグリ、ビンズイ、タヒバリ、マヒワ、ベニマシコ、ウソ、シメ、ホオアカ、カシラダカ、アオジ、クロジ、オオジュリン (45種)
留鳥	キジ、カルガモ、カイツブリ、キジバト、アオバト、カワウ、ゴイサギ、アオサギ、ダイサギ、コサギ、バン、ヒメアマツバメ、イカルチドリ、ヤマシギ、イソシギ、トビ、ツミ、ハイタカ、オオタカ、ノスリ、カワセミ、ヤマセミ、コゲラ、アカゲラ、アオゲラ、チョウゲンボウ、ハヤブサ、モズ、カケス、オナガ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、コガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒバリ、ヒヨドリ、ウグイス、エナガ、メジロ、セッカ、ミソサザイ、ムクドリ、カワガラス、イソヒヨドリ、スズメ、キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、カワラヒワ、イカル、ホオジロ (53種)
旅鳥	チュウサギ、チュウヒ、ノビタキ、コジュリン (4種)
外来種	クロトキ、バリケン、コジュケイ、カワラバト(ドバト)、セキセイインコ、ガビチョウ、アヒル、雑種ガモ、ガチョウ、ハッカチョウ、キンランチョウ (11種)



ツグミ

(2) 確認数の多い野鳥 (26年すべてで確認)

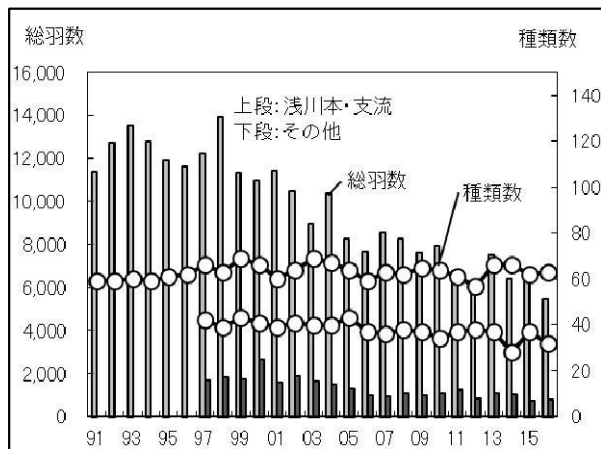
種名	
冬鳥	マガモ、オナガガモ、コガモ、ツグミ、ジョウビタキ、タヒバリ、シメ、カシラダカ、アオジ (9種)
留鳥	カルガモ、キジバト、カワウ、アオサギ、ダイサギ、イカルチドリ、イソシギ、トビ、カワセミ、コゲラ、モズ、オナガ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、メジロ、ムクドリ、スズメ、キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、カワラヒワ、ホオジロ (25種)
外来種	カワラバト (ドバト) (1種)

(3) 確認数の少ない野鳥 (外来種含む)

26年間で1回1羽のみ確認された野鳥
ミサゴ、チュウヒ、アリスイ、カワイイサ、トラフズク、カヤクグリ、クロジ、ヤマシギ、ヤマセミ、ノビタキ、ハッカチョウ

4. 全野鳥の経年変化

浅川及びその支流では57種から69種(外来種含む)の野鳥が確認された。年ごとに種類は異なるが大きな変化は見られない。一方、総羽数は減少傾向である。最大羽数を記録した1998年(13,936羽)に比べ2016年(5,459羽)は1/3程度の記録となった。また、程久保川、谷地川の総羽数でも若干の減少傾向が見られる。



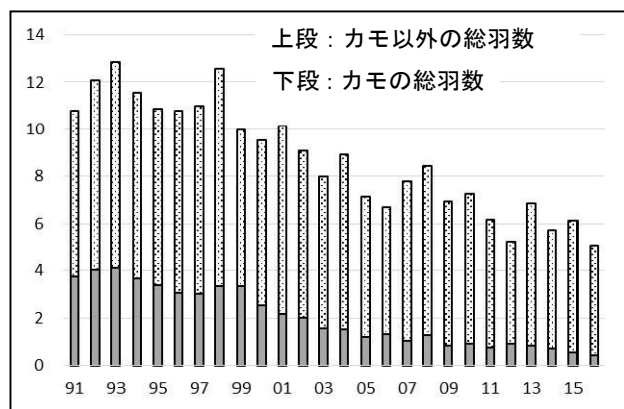
(総羽数と種類数)

年次	浅川本・支流		程久保・谷地川	
	総数(羽)	種	総数(羽)	種
1991	11,356	59	未調査	-
1992	12,726	59	未調査	-
1993	13,557	60	未調査	-
1994	12,786	59	未調査	-
1995	11,917	61	未調査	-
1996	11,615	62	未調査	-
1997	12,226	66	1,682	42
1998	13,936	63	1,817	39
1999	11,345	69	1,739	43
2000	10,988	66	2,667	41
2001	11,438	60	1,608	39
2002	10,492	64	1,883	41
2003	8,950	69	1,653	40
2004	10,384	67	1,470	40
2005	8,268	64	1,265	43
2006	7,645	59	969	37
2007	8,586	63	945	36
2008	8,285	62	1,080	38
2009	7,592	65	965	37
2010	7,921	64	1,090	34
2011	6,764	61	1,230	37
2012	5,953	57	853	38
2013	7,510	66	1,109	37
2014	6,424	66	1,019	28
2015	6,494	62	717	37
2016	5,459	63	810	32

(総羽数と種類数)

5. 冬鳥の経年変化

浅川流域における、総羽数の減少には、カモの仲間の減少が大きく影響している(外来種除く)。



(カモの仲間とカモ以外の総羽数の経年変化(単位/千羽))

(1) カモ類の動向(全区間)

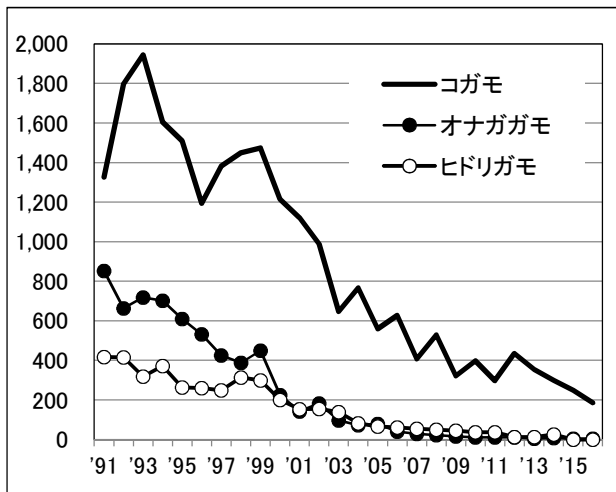
留鳥のカルガモを除いた冬鳥のカモの仲間は、オシドリ、オカヨシガモ、ヨシガモ、ヒドリガモ、アメリカヒドリ、マガモ、ハシビロガモ、オナガガモ、トモエガモ、コガモ、キンクロハジロ、ミコアイサ、カワアイサの13種のカモと亜種のアメリカコガモが確認されている。総数ではコガモが最も多く、26年間の合計羽数は24,970羽、比率ではコガモが68.2%、次いでオナガガモが17.4%、ヒドリガモが11.0%であり、この3種で全体の96%を占める。

種名	合計羽数	合計/26	比率
コガモ	24,970	960	68.2%
オナガガモ	6,362	245	17.4%
ヒドリガモ	4,033	155	11.0%
マガモ	745	29	2.0%
ハシビロガモ	404	16	1.1%
ミコアイサ	70	3	0.3%
オカヨシガモ	26	4	
キンクロハジロ	9	-	
アメリカヒドリ	5	-	
ヨシガモ	5	-	
トモエガモ	2	-	
オシドリ	2	-	
カワアイサ	1	-	

(カモの種類ごとの割合)

①コガモ・オナガガモ・ヒドリガモ(浅川流域)

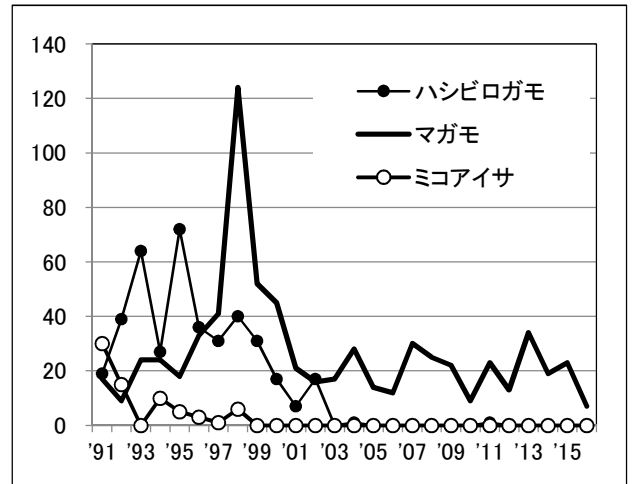
カモの仲間の減少には、羽数の多いコガモの減少が大きく影響している。コガモは、最大羽数1,944羽を確認した1993年に比べ2016年は1割以下の186羽であった。また、オナガガモは856羽を記録した1991年に比べ1割以下の5羽であった。ヒドリガモは2015年2016年と確認されなかった。



(コガモ、オナガガモ、ヒドリガモの経年変化)

②マガモ・ハシビロガモ・ミコアイサ(浅川流域)

ハシビロガモは2003年以降殆ど確認されていない。ミコアイサは1999年から確認されず、マガモは最大124羽(1998年)を記録したが10羽20羽の単位で変動しており毎年確認されている。



(マガモ、ハシビロガモ、ミコアイサの経年変化)

③その他のカモ7種(浅川流域)

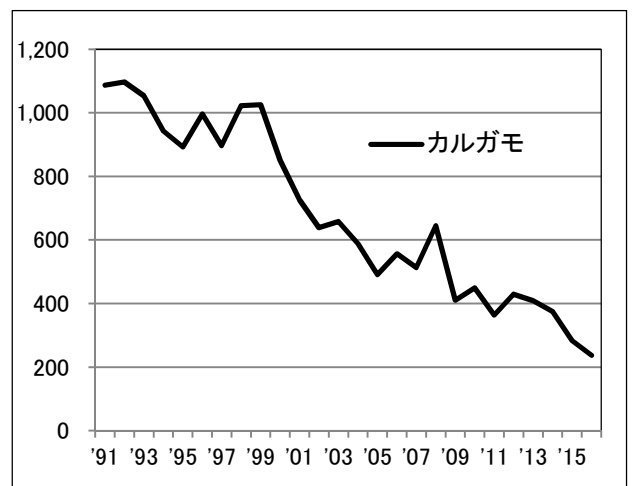
オカヨシガモは1991年から1996年まで継続して確認され年最大羽数は12羽。その後1998年に1羽確認された後確認されていない。キンクロハジロは4回確認され年最大羽数は5羽。

ヨシガモは1991年、1996年、2004年、2006年、2010年にそれぞれ1羽、トモエガモは2002年、2003年にそれぞれ1羽確認された。

アメリカヒドリは1995年に1羽、2003年には3羽、2014年に1羽が確認された。オシドリは2002年、カワアイサは2015年にそれぞれ1羽確認された。

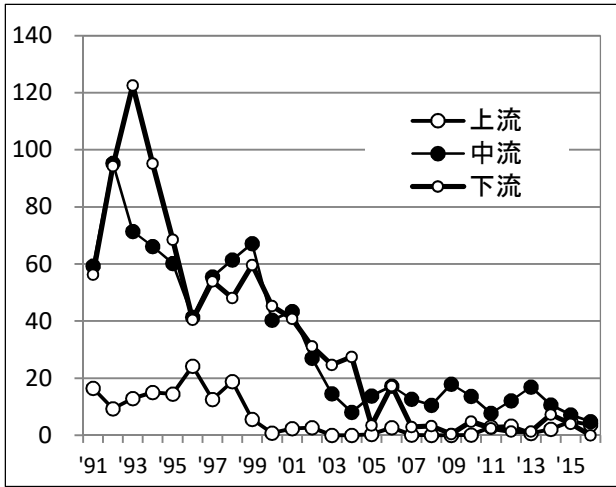
④カルガモ(浅川流域)

留鳥であるカルガモも減少傾向にある。



(2) 区域ごとの経年変化(コガモ)

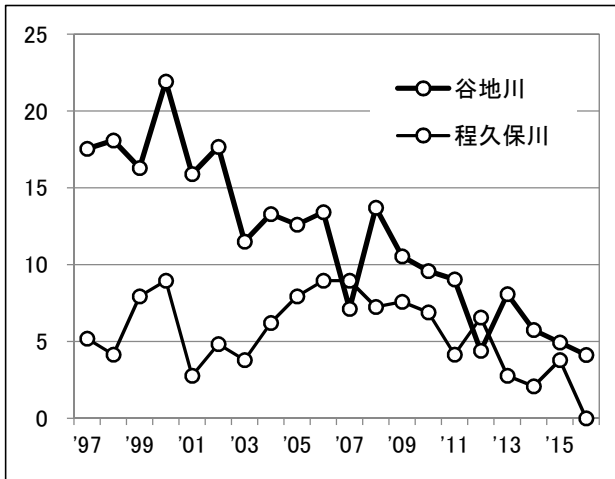
浅川では下流域での減少が著しい。谷地川でも減少傾向にある。



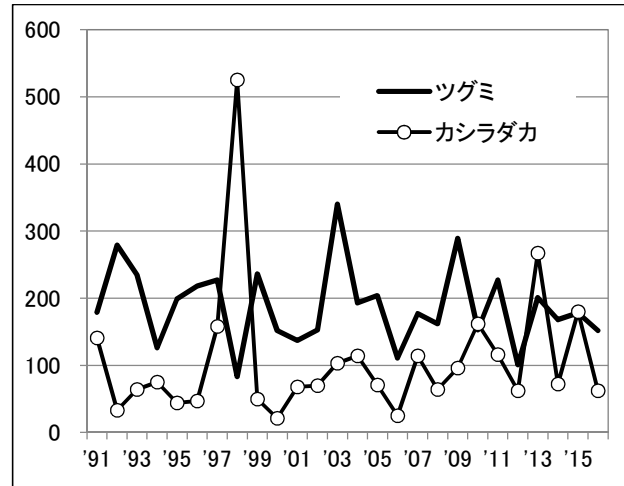
(浅川流域 1km ごとのコガモ羽数)



(ユリカモメ・セグロカモメの経年変化)



(谷地川と程久保川 1km ごとのコガモ羽数)



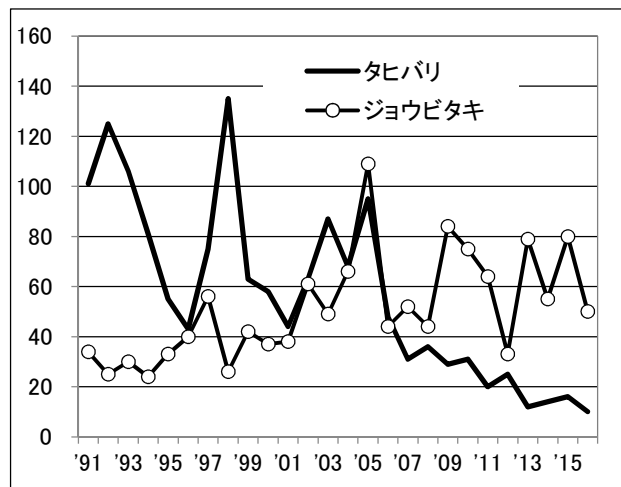
(ツグミ・カシラダカの経年変化)

(3) カモ以外の冬鳥

カモの仲間以外の冬鳥の羽数を年次別に見ると、ユリカモメが減少している。ユリカモメは 1991 年に最大 881 羽を記録し 2001 年まで平均 500 羽が観察されたが、近年見られる機会は少なくなった。

カシラダカは 1998 年に観察された 525 羽、ツグミは 2003 年に観察された 340 羽が最大となった。いずれも変動は大きいものの増減傾向は見られない。

ジョウビタキに漸増傾向が見られるがタヒバリは減少している。



(タヒバリ・ジョウビタキの経年変化)

6. 河川と冬鳥

浅川を中心とする河川は、水鳥を中心に多くの野鳥たちの生息環境となっている。

一方、河川に隣接する農地や緑地は市街化の影響を受けた。新井橋右岸のコサギがねぐらとしていた竹林は住宅に、ふれあい橋右岸の緑地は規模が半減し住宅地と変わった。

浅川は改修工事がたびたび行われた。改修工事は水量の少ない冬季に行われることが多く、冬鳥の渡来時期と重なる。改修された河川は、単一の断面構造となり水深が浅く危険な個所が少なくなった。一方で水際まで人や犬などが進入できる構造となった。

水面を主な生息環境とするカモ類は、水面の環境変化が大きく影響する。潜水型のカモが潜れる水深や餌があること、人や犬などから身を守れる安全な場所があることなど多様な環境が必要である。



(新井橋より上流を望む 2010年1月)



(新井橋より下流を望む 2010年1月)



野鳥のさえずりを聞きなしで覚える

野鳥のさえずりは大変美しい。昔の人は野鳥のさえずりを「聞きなし」してきた。「聞き做し(ききなし)」とは、鳥のさえずりを人間の言葉に、時には意味のある言葉やフレーズに当てはめて覚えやすくしたものだ。

ウグイスの「ホー・ホケキョ」、コノハズクの「ブッポウソウ」は典型的な聞きなしである。聞きなしを覚えておくと、さえずりを聞いただけで野鳥の種類が直ぐ識別できるようになる。しかし、聞きなしに頼り過ぎると折角の美しいさえずりが台無しになってしまうので、さえずりを鑑賞したい時は聞きなしを忘れることも大切である。

以下に八王子・日野地域でさえずる野鳥の代表的な聞きなしを列記する。

キジバト デデッ・ポー・ポー デデッ・ポー・ポー
 サンコウチョウ 月日星ホイ・ホイ・ホイ (ツキ・ヒ・ホシ・ホイ・ホイ・ホイ)
 ホトトギス 特許許可局 (トッキョ・キョカキョク)、テッペン・カケタカ
 メジロ 長兵衛、忠兵衛、長忠兵衛 (チョウバー・チュウバー・チョウチュウバー)
 イカル お菊・二十四 (オキク・ニジュウシ) ミノカサ・ホシイ
 トビ ピー・ヒョロロ
 カワラヒワ キリキリ・コロコロ
 モズ キー・キチキチキチ
 センダイムシクイ 焼酎一杯ぐい～
 ツバメ 土食って虫食って渋い
 ホオジロ 一筆啓上仕り候 源平つつじ、白つつじ
 ヒバリ 日一分、日一分、利取る、利取る、月二朱、月二朱

第5章 緑地保全地域の野鳥調査

1. 緑地保全地域

「東京における自然の保護と回復に関する条例」により、平成28年(2016)時点で50地域が「保全地域」として指定され、うち緑地保全地域は下表のとおり38地域が指定されている。地域名の前の番号は指定された年代順を表し、最も早い指定の七国山は昭和50年(1975)、最も遅いのが48八王子暁町となっている。欠番があるのは自然環境保全地域、森林環境保全地域、里山保全地域、歴史環境保全地域の指定地で、ここでは掲載を省略している。

緑地保全地域は、樹林地、水辺地等が単独で、又は一体となって自然を形成している市街地近郊の地域で、その良好な自然を保護することが必要な土地の区域と定義されている。人の立入りを前提とした公園等と違い、自然の保護及び保全を目的として指定されている。良好な自然の生態系を保護するため、また現在残されている良好な自然を保ち、次代へと引き継いでいくための制度なので指定された土地はその利用に厳しい制限が設けられている。

東京都緑地保全地域一覧（指定順）

資料：東京都ホームページ

	地域名	所在地	指定年月日(変更年月日)
2	七国山(緑)	町田市	1975/12/26
3	海道(緑)	武蔵村山市	1975/12/26(1992.03.24)
4	東豊田(緑)	日野市	1975/12/26
7	矢川(緑)	立川市	1977/3/31(1985.05.31)
10	南沢(緑)	東久留米市	1985/5/31(1992.02.12)
11	清瀬松山(緑)	清瀬市	1986/3/31
12	南町(緑)	東久留米市	1987/8/10
13	八王子東中野(緑)	八王子市	1987/8/10
15	清瀬中里(緑)	清瀬市	1989/3/30(1999.03.04)
16	小山(緑)	東久留米市	1989/3/30(1999.02.12)
17	氷川台(緑)	東久留米市	1989.12.15
18	宇津木(緑)	八王子市	1992/2/12(1997.03.18)
19	清瀬御殿山(緑)	清瀬市	1992/3/24
20	宝生寺(緑)	八王子市	1993/3/5(1995.03.09)
21	八王子大谷(緑)	八王子市	1993/3/5(2010.03.23)
22	碧山森(緑)	西東京(旧保谷)市	1993/3/5
23	国分寺姿見の池(緑)	国分寺市	1993/11/12
24	小比企(緑)	八王子市	1994/3/29
25	保谷北町(緑)	西東京(旧保谷)市	1994/3/29
26	前沢(緑)	東久留米市	1994/3/29
27	東久留米金山(緑)	東久留米市	1994/3/29(1997.03.18)
28	立川崖線(緑)	立川、昭島、福生、羽村、青梅の各市	1994/11/15(2006.10.26)
29	国分寺崖線(緑)	調布、三鷹、小金井、国分寺の各市	1994/11/15(2001.02.16)
30	八王子石川町(緑)	八王子市	1995/3/9
31	戸吹(緑)	八王子市	1995/3/9(1996.10.18)
32	町田代官屋敷(緑)	町田市	1995/3/9
33	柳窪(緑)	東久留米市	1995/3/9(1997.03.18)
34	八王子館町(緑)	八王子市	1996/2/29
35	八王子長房(緑)	八王子市	1996/2/29(1999.03.04)
36	町田関ノ上(緑)	町田市	1996/2/29
37	八王子川口(緑)	八王子市	1996/10/17
38	東村山大沼田(緑)	東村山市	1997/3/18
39	東村山下堀(緑)	東村山市	1997/7/10
40	八王子戸吹北(緑)	八王子市	1997/12/16(2001.02.16)
41	日野東光寺(緑)	日野市	1997/12/16
42	町田民権の森(緑)	町田市	1998/10/27
46	多摩東寺方(緑)	多摩市	2007/12/12
48	八王子暁町(緑)	八王子市	2011/3/23
計	38地域		

2. 調査した地域、方法、内容（調査のポイント含む）

（1）趣旨

八王子市、日野市内で指定されている緑地保全地域は雑木林を主体とした里山地域である。この地域の野鳥調査を行い、越冬期の野鳥の生息状況、繁殖期の夏鳥や留鳥の繁殖状況などを調査して、保全緑地が野鳥の生息にとって重要な役割を果たしていることを明らかにする。

（2）調査年次

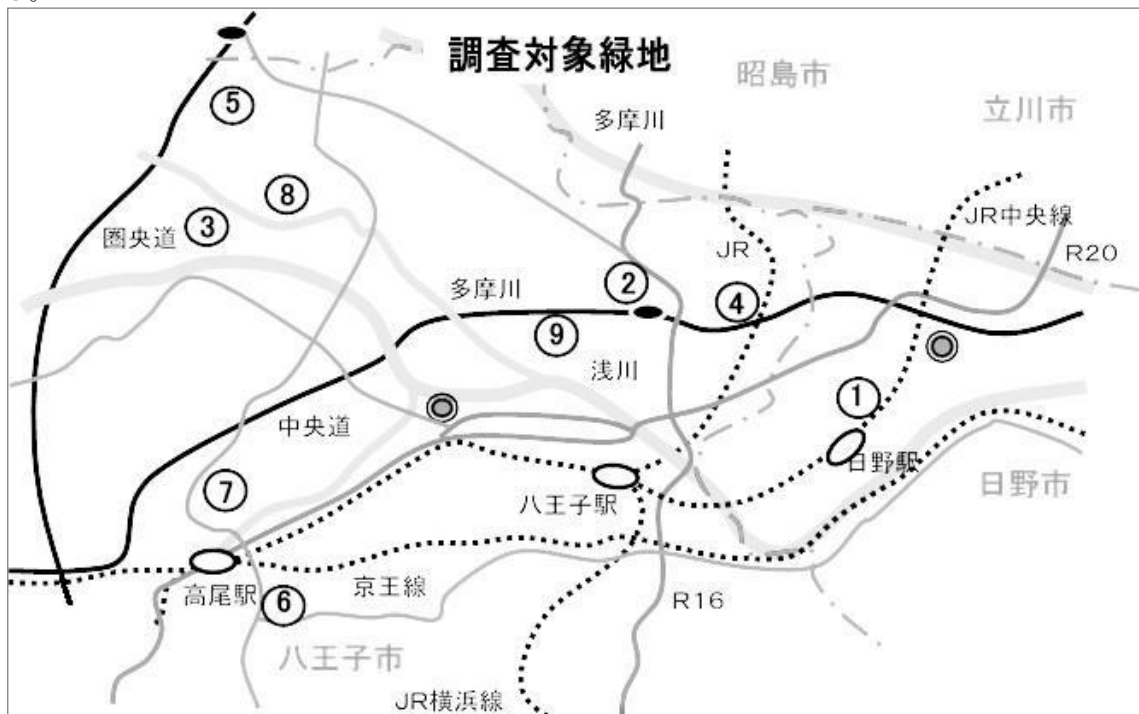
この調査は 2009 年から行っている。2009-2011 年の調査結果は 2012 年 1 月に「八王子市、日野市の緑地保全地域 野鳥の生息調査結果報告」として八王子・日野カワセミ会から刊行されている（平成 23 年度八王子市市民企画事業補助交付事業）。本報告は主として 2012 年から 2016 年の繁殖期までの調査結果が取りまとめられている。

（3）調査対象地域

八王子市、日野市内で指定されている 14 の緑地保全地域のうち、指定地の配置状況、指定地内への進入路の有無等を総合的に判断して、次の 9 地域を調査対象とした。ただし暁町は 2014 年からの調査である。

- ①東豊田（日野市）
S50.12.26 指定、面積 60,079 m²
- ②宇津木（八王子市宇津木町）
H4.02.12 指定（H9.03.18 変更）、52,403 m²
- ③宝生寺（八王子市西寺方町）
H5.03.05 指定（H7.03.09 変更）、142,777 m²
- ④八王子石川町（八王子市石川町）
H7.03.09 指定、面積 30,616 m²
- ⑤戸吹（八王子市戸吹町）
H7.03.09 指定（H8.10.18 変更）、106,795 m²
- ⑥八王子館町（八王子市館町）
H8.02.29 指定、面積 24,392 m²
- ⑦八王子長房（八王子市城山手）
H8.02.29 指定（H11.03.04 変更）、73,919 m²
- ⑧八王子川口（八王子市川口町）
H8.10.17 指定、面積 20,292 m²
- ⑨八王子暁町（八王子市暁町）
H23.3.23 指定、面積 23,838 m²

なお、②宇津木地域には都指定の緑地保全地域の他に八王子市指定の「宇津木台緑地」も含まれている。



（4）調査体制

調査は全て八王子・日野カワセミ会の会員が行った。調査地域毎に 1 名の調査担当者をおき、当該担当者を中心に会員に参加を呼び掛け、各地域とも 2 名から数名のチームを編成した。

（5）調査方法と内容

調査地内に予め観察ルートを設定して、当該ルートを踏査した。ルートの中に主要ポイント（定点）を決めて、定点ではおおむね 30 分程度留まって定点調査を併用した。定点は見晴らしの利く場所、分れ道（分岐点）、池のほとり、野鳥の餌場、野鳥の営

巣地が見通せる場所、野鳥のねぐら地などに設定した。

調査は踏査して出現する野鳥の種類と羽数を記録した。あわせて野鳥の採餌・ねぐら入り等の行動や繁殖（求愛・巣作り・餌運び・親子連れ等）の行動を記録した。野鳥やその環境の写真撮影を出来る限り行った。

調査対象地は（3）に掲げた地域であるが、隣接する地域に同じような環境がある場合は、一部隣接する地域も調査対象に含めた。

なお、調査に当っては以下の「緑地保全地区の調査のポイント」を作成して万全を期した。

緑地保全地域の調査のポイント

この調査ではできるだけ多くの会員ができるだけ多く回数を重ねることが、調査精度を上げる基本となります。従いまして、担当者以外の方も可能な限り緑地保全地域に足を運んで野鳥を観察して下さい。その結果はそれぞれの地区の担当者にご報告をお願いします。その報告は、例えば「X月Y日、〇〇地区のAA付近でキビタキの声を聞いた」という程度の断片情報で差支えありません。

調査（観察）のポイントを以下に記しますので、参考にして下さい。なお、繁殖期は早朝4時を過ぎると明るくなりますので、早朝観察もお勧めです。また、夜間にはミゾゴイ等の声が聞こえるかも知れませんので、可能であれば夜の観察も行って下さい。ただし、安全にはくれぐれも注意して、無理をしないようお願いいたします。緑地保全地域は人通りが少ないので、女性の一人での行動は禁止です。

1. 野鳥の繁殖行動

野鳥が緑地保全地域で繁殖しているかどうかは、この調査の重要なポイントです。次のような繁殖行動に着目して観察し、記録して下さい。

巣材運び、求愛行動（求愛ディスプレイ）、さえずり、造巣行動、抱卵、雛のいる巣、餌運び、偽傷行動、交尾行動、威嚇行動、警戒音、成鳥が使用している巣のあるらしい所へ出入り、成鳥の糞運び、巣立ち直後の雛又は巣立ち雛の親子連れ、その他。

2. 注目種

特に以下のような鳥がいるかどうかを注目して下さい。

キビタキ、アオバト、ホトトギス、サンコウチョウ、ヤブサメ、キジ、トラツグミ、カヤクグリ、ベニマシコ、マヒワ、ウソ、クロジ、オオタカ、ハイタカ、ノスリ、チョウゲンボウ等の猛禽類、ガビチョウ。

3. 植物

次のような花の咲いている樹木（オトコヨウゾメ、ガマズミ、クマノミズキ、ハウノキ、ミズキ、ヤマボウシ、その他諸々）、咲いている野草（キンラン、ギンラン、ササバギンラン、ジュウニヒトエ、その他諸々）にも着目して下さい。

4. 雑木林の状態

雑木林が放任状態になっているか、手入れ（管理）されているか、手入れ（管理）されている場合はその主体が農家なのか、自然保護団体などなのか等に着目して下さい。また、一般市民が散策などにどのくらい利用しているかも着目して下さい。

5. ガビチョウ

外来種のガビチョウがどのくらいいて、どのような行動をとっているかを観察して記録して下さい。カオグログビチョウ、ソウシチョウ、コジュケイなど他の外来種も着目して下さい。

6. 写真撮影

可能な範囲で写真による記録をお願いします。特に環境の写真が大切です。鳥の写真は証拠写真という位置づけで野鳥の生息や繁殖に大きな影響を与える撮影は禁止です。

7. 緑地保全地域の周辺の状況

緑地保全地域の周辺（隣接地）がどのようになっているかも着目して下さい。

8. 今後の保全に対する提言など

今後の緑地の保全などについての提言、気がついたことなどをメモしておいて下さい。

9. その他

上記以外で気がついたことは何でも記録しておいて下さい。とにかく足を運ぶ回数が基本になります。

(6) 調査した季節と期間

調査は越冬期(12月~1月)と繁殖期(5月~7月)に行った。地域毎の都合で調査年次は以下のように少し異なる。

- ①東豊田 2014年の越冬期から2016年の繁殖期まで約3年間
- ②宇津木 2012年の繁殖期から2016年の繁殖期まで約5年間
- ③宝生寺 2012年の越冬期から2016年の繁殖期まで約5年間
- ④八王子石川町 2013年の繁殖期から2016年の繁殖期まで約4年間
- ⑤戸吹 2013年の繁殖期から2016年の繁殖期まで約4年間
- ⑥八王子館町 2014年の越冬期から2016年の繁殖期まで約3年間
- ⑦八王子長房 2013年の越冬期から2016年の繁殖期まで約4年間
- ⑧八王子川口 2012年の繁殖期から2016年の繁殖期まで約5年間
- ⑨八王子暁町 2013年の越冬期から2016年の繁殖期まで約4年間

3. 全体の調査結果

(1) 確認された野鳥

2012年4月から2016年の繁殖期までの調査期間に確認された野鳥(外来種含む)は右の表の通り70種であった。これは、2009-2011年の74種と比べ4種少なかった。2009-2011年の74種と比べミソサザイ、ハヤブサ、キレンジャク、ヒレンジャク、カヤクグリ、ベニマシコ、ツツドリ、カッコウ、センダイムシクイ、アマツバメ、エゾビタキの11種が記録されず、逆にダイサギ、ヤマシギ、フクロウ、チョウゲンボウ、ヒバリ、ビンズイ、ソウシチョウの7種が新たに記録されたため、差引4種の減となった。

70種の季節区分をみると、留鳥(40種、57%)、冬鳥(17種、24%)、夏鳥(9種、13%)、外来種(4種、6%)で、旅鳥のアマツバメとエゾビタキの種は確認されなかった。

9 地域の緑地保全地域で確認された種

第7版	確認種	季節区分	2012-2016	2009-2011
5	キジ	留鳥	○	○
30	マガモ	冬鳥	○	○
32	カルガモ	留鳥	○	○
38	コガモ	冬鳥	○	○
74	キジバト	留鳥	○	○
78	アオバト	留鳥	○	○
127	カワウ	留鳥	○	○
144	アオサギ	留鳥	○	○
146	ダイサギ	留鳥	○	○
185	ホトギス	夏鳥	○	○
187	ツツドリ	夏鳥		○
188	カッコウ	夏鳥		○
192	アマツバメ	旅鳥		○
193	ヒメアマツバメ	留鳥	○	○
212	ヤマシギ	冬鳥	○	○
342	トビ	留鳥	○	○
354	ツミ	夏鳥	○	○
355	ハイタカ	冬鳥	○	○
356	オオタカ	留鳥	○	○
358	ノスリ	留鳥	○	○
372	フクロウ	留鳥	○	○
383	カワセミ	留鳥	○	○
390	コゲラ	留鳥	○	○
393	アカゲラ	留鳥	○	○
397	アオゲラ	留鳥	○	○
401	チョウゲンボウ	留鳥	○	○
407	ハヤブサ	冬鳥		○
418	サンコウチョウ	夏鳥	○	○
420	モズ	留鳥	○	○
427	カケス	留鳥	○	○
429	オナガ	留鳥	○	○
435	ハシボソガラス	留鳥	○	○
436	ハシブトガラス	留鳥	○	○
438	キクイタダキ	留鳥	○	○
441	コガラ	留鳥	○	○
442	ヤマガラ	留鳥	○	○
443	ヒガラ	留鳥	○	○
445	シジュウカラ	留鳥	○	○
452	ヒバリ	留鳥	○	○
457	ツバメ	夏鳥	○	○
461	イワツバメ	夏鳥	○	○
463	ヒヨドリ	留鳥	○	○
464	ウグイス	留鳥	○	○
465	ヤブサメ	夏鳥	○	○
466	エナガ	留鳥	○	○
480	センダイムシクイ	夏鳥		○
485	メジロ	留鳥	○	○
500	キレンジャク	冬鳥		○
501	ヒレンジャク	冬鳥		○
504	ミソサザイ	留鳥		○
506	ムクドリ	留鳥	○	○
514	トラツグミ	冬鳥	○	○
518	クロツグミ	夏鳥	○	○
521	シロハラ	冬鳥	○	○
522	アカハラ	冬鳥	○	○
525	ツグミ	冬鳥	○	○
536	ルリビタキ	冬鳥	○	○
540	ジョウビタキ	冬鳥	○	○
552	エゾビタキ	旅鳥		○
558	キビタキ	夏鳥	○	○
561	オオルリ	夏鳥	○	○
566	カヤクグリ	冬鳥		○
569	スズメ	留鳥	○	○
573	キセキレイ	留鳥	○	○
574	ハクセキレイ	留鳥	○	○
575	セグロセキレイ	留鳥	○	○
580	ビンズイ	冬鳥	○	○
587	カワラヒワ	留鳥	○	○
588	マヒワ	冬鳥	○	○
592	ベニマシコ	冬鳥		○
599	ウソ	冬鳥	○	○
600	シメ	冬鳥	○	○
602	イカル	留鳥	○	○
610	ホオジロ	留鳥	○	○
617	カシラダカ	冬鳥	○	○
624	アオジ	冬鳥	○	○
625	クロジ	冬鳥	○	○
901	コジュケイ	外来種	○	○
903	カワラバト(ドバト)	外来種	○	○
909	ガビチョウ	外来種	○	○
910	ソウシチョウ	外来種	○	○
	種類数計		70	74

(2) 時期別の出現地域数 (2012-2016 年)

右表は時期別の出現地域数 (2012-2016 年) である。コゲラ、ハシブトガラス、ウグイス、エナガ、メジロ、ガビチョウの 6 種は 9 地域全てで、かつ越冬期、繁殖期の全てで出現した。冬鳥ではツグミとアオジは 9 地域全てで、夏鳥ではツバメとキビタキは 9 地域全てで出現した。なお、冬鳥のアカハラが繁殖期に 1 地域で出現しているが、これは 5 月 3 日の調査時にカウントされたもので、アカハラは 5 月上旬までは平地に留まっていることのためである。

以下は注目種の動向である。キビタキは最近繁殖地が拡大傾向にあり、この調査でも全ての地域で出現していることが注目される。アオバトは越冬期に 1 地域、繁殖期には 4 地域で出現した。サンコウチョウとトラツグミは 1 地域だけ、ホトトギスは 5 地域、ヤブサメは 4 地域で出現した。冬鳥のマヒワは 2 地域、ウソは 3 地域で、猛禽類ではトビ、オオタカ、ノスリ、フクロウ、ハイタカ、ツミの 6 種が出現した。外来種のガビチョウは全ての地域、時期に出現していて、全ての地域に定着していることが裏付けられた。

4. 地域別の調査結果

(1) 東豊田地域

日野市のほぼ中心部、日野台地の東南端にある段丘崖の樹林地である。ほぼ全域がコナラ、クヌギの雑木林に覆われ、一部にニセアカシアが繁茂している。崖の下部には湧水があり、オランダガラシなど水生の植物も生育している。(東京都 HP:保全地域の指定状況から引用)

本地域は崖の下部にある湧水とその湧水を水源とする小川が特徴的である。雑木林の部分はボランティアにより適切な管理が行われている。

次ページ表の通り、越冬期 30 種、繁殖期 24 種、全体で 36 種が記録された。マガモ、カルガモ、カワウ、アオサギ、ダイサギ、カワセミが記録されているのは湧水を水源とする小川があるためである。トビ、ツミ、オオタカ、ハヤブサなどの猛禽類 4 種は注目に値する。地域内のケヤキにヤドリギの大きな株が寄生しているため、キレンジャク、ヒレンジャクが 2009-2011 年では記録されている。この 2 種は 2012-2016 年は記録されなかったが、調査日以外の日には観察記録がある。

2012-2016 年は 36 種、2009-2011 年は 39 種で合わせると 45 種である。

時期別の出現地域数 (2012-2016)

第7版 番号	種名	季節 区分	越冬期	繁殖期
			地域数	地域数
5	キジ	留鳥	2	2
32	カルガモ	留鳥	3	2
74	キジバト	留鳥	9	8
78	アオバト	留鳥	1	4
127	カワウ	留鳥	1	1
144	アオサギ	留鳥	0	1
146	ダイサギ	留鳥	0	1
193	ヒメアマツバメ	留鳥	0	1
342	トビ	留鳥	7	4
356	オオタカ	留鳥	5	3
358	ノスリ	留鳥	4	0
372	フクロウ	留鳥	0	2
383	カワセミ	留鳥	1	2
390	コゲラ	留鳥	9	9
393	アカゲラ	留鳥	5	0
397	アオゲラ	留鳥	9	8
401	チョウゲンボウ	留鳥	1	0
420	モズ	留鳥	9	2
427	カケス	留鳥	6	1
429	オナガ	留鳥	3	3
435	ハシボソガラス	留鳥	9	8
436	ハシブトガラス	留鳥	9	9
438	キウイタダキ	留鳥	4	0
441	コガラ	留鳥	1	0
442	ヤマガラ	留鳥	8	9
443	ヒガラ	留鳥	2	2
445	シジュウカラ	留鳥	9	9
452	ヒバリ	留鳥	0	1
463	ヒヨドリ	留鳥	9	9
464	ウグイス	留鳥	9	9
466	エナガ	留鳥	9	9
485	メジロ	留鳥	9	9
506	ムクドリ	留鳥	7	8
569	スズメ	留鳥	8	8
573	キセキレイ	留鳥	5	3
574	ハクセキレイ	留鳥	5	4
575	セグロセキレイ	留鳥	1	0
587	カワラヒワ	留鳥	5	3
602	イカル	留鳥	4	5
610	ホオジロ	留鳥	6	6
30	マガモ	冬鳥	1	0
38	コガモ	冬鳥	3	0
212	ヤマシギ	冬鳥	1	0
355	ハイタカ	冬鳥	0	1
514	トラツグミ	冬鳥	1	0
521	シロハラ	冬鳥	8	0
522	アカハラ	冬鳥	2	1
525	ツグミ	冬鳥	9	0
536	ルリビタキ	冬鳥	5	0
540	ジョウビタキ	冬鳥	8	0
580	ビンズイ	冬鳥	1	0
588	マヒワ	冬鳥	2	0
599	ウソ	冬鳥	3	0
600	シメ	冬鳥	5	0
617	カシラダカ	冬鳥	6	0
624	アオジ	冬鳥	9	0
625	クロジ	冬鳥	1	0
185	ホトトギス	夏鳥	0	5
354	ツミ	夏鳥	1	0
418	サンコウチョウ	夏鳥	0	1
457	ツバメ	夏鳥	0	9
461	イワツバメ	夏鳥	0	1
465	ヤブサメ	夏鳥	0	4
518	クロツグミ	夏鳥	0	2
558	キビタキ	夏鳥	0	9
561	オオルリ	夏鳥	0	1
901	コジュケイ	外来種	2	6
903	カワラバト(ドバト)	外来種	2	1
909	ガビチョウ	外来種	9	9
910	ソウシチョウ	外来種	4	1

東豊田地域で記録された種

(数字は 2012-2016 年のうちの最大時の羽数)

第7版 番号	種名	2012-2016	2012-2016	2009-2011
		越冬期	繁殖期	
		最大値(羽)	最大値(羽)	出現種
30	マガモ	4	0	●
32	カルガモ	15	4	●
74	キジバト	9	5	●
127	カワウ	0	2	
144	アオサギ	0	0	●
146	ダイサギ	0	1	
342	トビ	1	0	●
354	ツミ	1	0	●
356	オオタカ	0	1	
383	カワセミ	1	1	●
390	コゲラ	4	14	●
393	アカゲラ	1	0	
397	アオゲラ	1	2	●
407	ハヤブサ	0	0	●
420	モズ	2	0	●
429	オナガ	2	3	●
435	ハシボソガラス	9	4	●
436	ハシブトガラス	6	6	●
442	ヤマガラ	11	5	●
443	ヒガラ	0	0	●
445	シジュウカラ	19	28	
457	ツバメ	0	2	●
463	ヒヨドリ	13	11	●
464	ウグイス	4	6	●
466	エナガ	12	1	●
485	メジロ	12	4	●
500	キレンジャク	0	0	●
501	ヒレンジャク	0	0	●
506	ムクドリ	4	11	●
521	シロハラ	2	0	●
525	ツグミ	5	0	●
536	ルリビタキ	0	0	●
540	ジョウビタキ	2	0	●
558	キビタキ	0	1	
569	スズメ	15	3	●
573	キセキレイ	1	0	●
574	ハクセキレイ	0	1	●
587	カワラヒワ	0	0	●
588	マヒワ	0	0	●
600	シメ	2	0	●
617	カシラダカ	15	0	●
624	アオジ	2	0	●
901	コジュケイ	0	0	●
903	カワラバト(ドバト)	12	6	●
909	ガビチョウ	10	2	●
	種数計	30	24	39

(2) 宇津木地域

多摩川の右岸で加住丘陵の先端に位置し、多摩川鳥獣保護区域内にある。区域のほぼ半分はコナラ、クヌギの雑木林が分布し、そのほか、スギ、ヒノキの植林、モウソウチク林、アズマネザサやススキの草地、果樹園、畑などが散在する変化に富んだ植生である。(東京都 HP:保全地域の指定状況から引用)

調査対象地域は都指定の宇津木地域の他に八王子市指定の宇津木台地域を含んでいる。両地域は約500m離れ、それぞれ独立している。両地域ともボランティアにより適切な管理が行われている。

次ページ表の通り、越冬期 37 種、繁殖期 25 種、全体で 43 種が記録された。オオタカ、フクロウ、トラツグミなどの注目種が記録された。外来種のソウシチョウが越冬期に記録された。

2012-2016 年は 43 種、2009-2011 年は 29 種で合わせると 46 種である。

(3) 宝生寺地域

八王子市の北西部、浅川と川口川にはさまれた丘陵の先端部に位置し、八王子宝生寺団地に隣接する、やや急峻な谷を含む雑木林である。

区域のほぼ全域がコナラ、アカシデの優占する雑木林で、中央部の尾根の稜線付近にはモミの優占する自然植生に近い樹林が点在しているほか、各尾根の稜線付近にはアカマツの優占するアカマツ-ヤマツツジ群集が、区域内各所の谷底や尾根の北側斜面には大規模にスギ、ヒノキの植林地が見られる。(東京都 HP:保全地域の指定状況から引用)

ボランティアにより適切な管理が行われている。調査地域には東側に神社があり、そこに小さな池がある。

次ページ表の通り、越冬期 37 種、繁殖期 29 種、全体で 48 種が記録された。カルガモ、コガモが記録されたのは、神社に小さな池があるためである。トビ、ハイタカ、オオタカ、ノスリと猛禽類が 4 種記録された。アオバト、サンコウチョウ、ウソなどの注目種が記録された。外来種のソウシチョウが越冬期に記録された。

2012-2016 年は 48 種、2009-2011 年は 45 種で合わせると 53 種である。

宇津木地域で記録された種

(数字は 2012-2016 年のうちの最大時の羽数)

第7版 番号	種名	2012-2016	2012-2016	2009-2011
		越冬期 最大値(羽)	繁殖期 最大値(羽)	出現種
5	キジ	0	0	●
74	キジバト	15	7	●
185	ホトギス	0	1	
187	ツツドリ	0	0	●
342	トビ	1	1	
356	オオタカ	1	2	●
358	ノスリ	1	0	
372	フクロウ	0	1	
390	コゲラ	5	5	●
393	アカゲラ	1	0	●
397	アオゲラ	1	1	●
420	モズ	2	0	
427	カケス	2	0	
435	ハシボソガラス	2	3	●
436	ハシブトガラス	6	10	●
438	キクイタダキ	2	0	
442	ヤマガラ	16	5	●
445	シジュウカラ	25	25	●
457	ツバメ	0	6	●
461	イワツバメ	0	0	●
463	ヒヨドリ	26	25	●
464	ウグイス	4	5	●
466	エナガ	22	6	●
485	メジロ	16	15	●
506	ムクドリ	7	15	●
514	トラツグミ	1	0	
521	シロハラ	5	0	●
522	アカハラ	1	0	
525	ツグミ	5	0	●
536	ルリビタキ	2	0	●
540	ジョウビタキ	1	0	●
558	キビタキ	0	2	●
569	スズメ	10	20	●
573	キセキレイ	1	0	
574	ハクセキレイ	2	1	
575	セグロセキレイ	2	0	
580	ビンズイ	4	0	
587	カワラヒワ	10	2	●
599	ウソ	4	0	
602	イカル	0	2	
610	ホオジロ	2	1	●
617	カシラダカ	12	0	
624	アオジ	3	0	●
901	コジュケイ	0	2	●
909	ガビチョウ	6	8	●
910	ソウシチョウ	8	0	
	種数計	37	25	29

宝生寺地域で記録された種

(数字は 2012-2016 年のうちの最大時の羽数)

第7版 番号	種名	2012-2016	2012-2016	2009-2011
		越冬期 最大値(羽)	繁殖期 最大値(羽)	出現種
5	キジ	0	0	●
32	カルガモ	2	0	●
38	コガモ	11	0	
74	キジバト	4	2	●
78	アオバト	0	2	●
127	カワウ	1	0	
185	ホトギス	0	1	●
188	カッコウ	0	0	●
342	トビ	1	1	●
355	ハイタカ	0	1	
356	オオタカ	1	0	●
358	ノスリ	1	0	●
383	カワセミ	0	0	●
390	コゲラ	8	2	●
393	アカゲラ	0	0	●
397	アオゲラ	2	1	●
418	サンコウチョウ	0	2	●
420	モズ	1	0	●
427	カケス	11	0	●
429	オナガ	1	5	
435	ハシボソガラス	13	2	●
436	ハシブトガラス	6	7	●
438	キクイタダキ	5	0	
441	コガラ	2	0	●
442	ヤマガラ	12	5	●
443	ヒガラ	1	0	●
445	シジュウカラ	7	7	●
457	ツバメ	0	14	●
463	ヒヨドリ	9	14	●
464	ウグイス	5	8	●
465	ヤブサメ	0	2	
466	エナガ	21	10	●
480	センダイムシクイ	0	0	●
485	メジロ	8	7	●
506	ムクドリ	3	3	●
518	クロツグミ	0	2	
521	シロハラ	1	0	●
525	ツグミ	5	0	●
540	ジョウビタキ	2	0	●
558	キビタキ	0	7	●
561	オオルリ	0	1	●
569	スズメ	20	5	●
573	キセキレイ	0	1	●
587	カワラヒワ	10	0	●
599	ウソ	1	0	●
600	シメ	1	0	●
602	イカル	2	3	●
610	ホオジロ	3	2	●
617	カシラダカ	55	0	●
624	アオジ	2	0	●
901	コジュケイ	0	1	●
909	ガビチョウ	2	7	●
910	ソウシチョウ	7	0	
	種数計	37	29	45

(4) 八王子石川町地域

八王子市の北部、加住丘陵の東端に位置し、標高が110m～140m程度の緩く傾斜した樹林地である。区域の大部分をコナラやクヌギ、アカマツの樹林地が占め、そのほか、モウソウチク・マダケ林、落葉果樹園が分布する。区域によって林床管理の程度が異なるが、おおむね良好な樹林地といえる。(東京都HP:保全地域の指定状況から引用)

調査対象地域は中央に村社「御岳神社」があるため、西部分と東部分に分かれる形になっている。西部分はクマザサ、アズマネザサが一面に繁茂している状態であるが、東部分は下刈りされた場所もあり所有者による管理が行われている。

右表の通り、越冬期29種、繁殖期21種、全体で33種が記録された。トビ、ツミ、オオタカ、チョウゲンボウなどの猛禽類4種が記録された。キクイタダキ2羽は2013年2月9日の調査の時に記録されたものである。外来種のソウシチョウが越冬期に記録された。

2012-2016年33種、2009-2011年は32種で合わせると39種である。

(5) 戸吹地域

八王子市の北東部、加住丘陵の中央に位置し、明大中野八王子中学、高校の東に広がる丘陵地の樹林地である。一部小規模ながら沢があり、田畑の灌漑に利用されている。南側にはゴルフ場がある。おおむねコナラ、クヌギを主体とした樹林となっているが、ほかにスギ、ヒノキの植栽林、モウソウチク林、林を伐採した跡地などがある。近年管理があまり行われておらず、低木層、草本層が密度を増しているほか、高木層が茂りすぎて林内が暗くなっている。区域南西部は樹林と谷戸の湿地であり、谷戸の水路では両生類の産卵が確認されており、貴重な自然であることをうかがわせる。(東京都HP:保全地域の指定状況から引用)

調査対象地域は都指定の戸吹緑地の他に民有地のスギの造林地、雑木林、竹林を含んでいる。両地域の境界は作業道により明らかなどころもあるが、外部からは境界が分からないところもある。当地域では、調査期間中に管理者やボランティア等による保全管理は行われていない。調査地域の東側斜面に神社があり、カシの老木やスギ・ヒノキの造林地に囲まれている。氏子により下草や灌木を刈り払う管理が行われている。また、調査地の尾根を挟んだ北西側斜面は明治大学中野八王子中学・高校の学校林で、よく管理された雑木林である。調査は、作業道や獣道を利用して行っている。

次ページの表の通り、越冬期37種、繁殖期29

石川町地域で記録された種

(数字は2012-2016年のうちの最大時の羽数)

第7版 番号	種名	2012-2016	2012-2016	2009-2011
		越冬期 最大値(羽)	繁殖期 最大値(羽)	出現種
32	カルガモ	0	0	●
74	キジバト	2	7	●
144	アオサギ	0	2	
193	ヒメアマツバメ	0	1	
342	トビ	2	2	●
354	ツミ	0	0	●
356	オオタカ	1	1	●
390	コゲラ	3	5	●
393	アカゲラ	0	0	●
397	アオゲラ	1	0	●
401	チョウゲンボウ	1	0	
420	モズ	1	0	●
429	オナガ	8	2	●
435	ハシボソガラス	7	1	●
436	ハシブトガラス	4	18	●
438	キクイタダキ	2	0	
442	ヤマガラ	3	1	●
445	シジュウカラ	7	11	●
457	ツバメ	0	3	●
461	イワツバメ	0	0	●
463	ヒヨドリ	13	11	●
464	ウグイス	3	5	●
466	エナガ	9	14	●
485	メジロ	6	2	●
506	ムクドリ	2	4	●
521	シロハラ	3	0	●
525	ツグミ	2	0	●
536	ルリビタキ	2	0	●
540	ジョウビタキ	1	0	●
558	キビタキ	0	2	●
569	スズメ	10	4	●
573	キセキレイ	1	0	●
574	ハクセキレイ	2	2	
587	カワラヒワ	0	0	●
617	カシラダカ	0	0	●
624	アオジ	1	0	●
901	コジュケイ	1	0	
909	ガビチョウ	4	4	●
910	ソウシチョウ	6	0	
	種数計	29	21	32

種、全体で45種が記録された。外来種のソウシチョウが繁殖期にも記録されている。なお、ヒガラ2羽、アカハラ3羽は5月上・中旬に確認したもので移動中のものと思われる。

2012-2016年は45種、2009-2011年は42種で合わせると51種である。

戸吹地域で記録された種
(数字は 2012-2016 年のうちの最大時の羽数)

第7版 番号	種名	2012-2016	2012-2016	2009-2011
		越冬期 最大値(羽)	繁殖期 最大値(羽)	出現種
5	キジ	0	2	●
32	カルガモ	0	0	●
38	コガモ	1	0	
74	キジバト	2	2	●
78	アオバト	1	2	●
185	ホトギス	0	1	●
342	トビ	1	1	●
355	ハイタカ	0	0	●
356	オオタカ	1	0	●
358	ノスリ	1	0	
390	コゲラ	9	6	●
393	アカゲラ	1	0	
397	アオゲラ	2	3	●
420	モズ	1	1	●
427	カケス	6	0	●
435	ハシボソガラス	2	1	●
436	ハシブトガラス	6	6	●
438	キクイタダキ	1	0	
442	ヤマガラ	10	5	●
443	ヒガラ	1	2	●
445	シジュウカラ	12	17	●
457	ツバメ	0	7	●
463	ヒヨドリ	16	26	●
464	ウグイス	2	8	●
465	ヤブサメ	0	2	
466	エナガ	25	12	●
480	センダイムシクイ	0	0	●
485	メジロ	15	21	●
504	ミソサザイ	0	0	●
506	ムクドリ	0	0	●
514	トラツグミ	0	0	●
518	クロツグミ	0	2	●
521	シロハラ	5	0	●
522	アカハラ	0	3	
525	ツグミ	4	0	●
536	ルリビタキ	2	0	●
540	ジョウビタキ	4	0	●
558	キビタキ	0	14	●
569	スズメ	20	5	●
573	キセキレイ	1	0	●
574	ハクセキレイ	1	0	●
587	カワラヒワ	5	2	●
588	マヒワ	8	0	
599	ウソ	3	0	
602	イカル	20	5	●
610	ホオジロ	5	5	●
617	カンラダカ	6	0	●
624	アオジ	4	0	●
901	コジュケイ	0	2	●
909	ガビチョウ	7	6	●
910	ソウシチョウ	5	1	
	種数計	37	29	42

(6) 八王子館町地域

八王子市の南部、多摩丘陵の西部に位置し、館町団地の西側に隣接する標高約 165~200m の丘陵の樹林地である。区域の半分以上をコナラ・クヌギの樹林が占め、次いでニセアカシア・ケヤキ林が区域中央部に比較的大きく分布する。

中央の谷戸の源頭部は水田が放棄された跡であり、現在はヨシやスゲ等の群落となっている。また、谷戸沿いにスギ・ヒノキ植林が一部見られるほか、ススキ、クズなど草本層のみの群落がわずかに見られる。(東京都 HP:保全地域の指定状況から引用)

調査対象地域は都指定の館町地域の他に殿入中央公園及び周辺の田畑を一部含んでいる。都指定の緑地では、市民団体「池の沢に螢を増やす会」が、「生物の多様性に富んだ豊かな里山づくり」を目的に年間を通して下草刈り、植林、散策路整備、観察会等の活動を行っている。周辺には、樹林、竹林、畑、田、草地、公園などが点在し、これらが当緑地と一体となって、野鳥たちの生息の場を提供している。また、地域の人々にとっても、身近に自然に触れることができる貴重な場となっている。

次ページ表の通り、越冬期 29 種、繁殖期 24 種、全体で 36 種が記録された。カルガモ、コガモ、カワウ、アオサギ、カワセミなどの水辺の鳥が記録されているのは本地域の北側に湯殿川支流の小川があるためである。トビ、ツミ、オオタカ、ノスリなど猛禽類 4 種が記録された。注目種のベニマシコも記録された。アマツバメ、エゾビタキは渡り途中の通過のものと思われる。

2012-2016 年は 36 種、2009-2011 年は 47 種で合わせると 50 種である。

(7) 八王子長房地域

八王子市の中央部、八王子丘陵の南東部に位置し、武蔵陵墓地の北側に広がる、丘陵の植林地である。主にコナラを主体とする樹林地が占めており、一部にアカマツが混生する地域を含む。その他、モウソウチク林、スギ・ヒノキ植林がわずかに見られる。区域によって林床管理の程度が異なるものの、全体的に良好な樹林地である。(東京都 HP:保全地域の指定状況から引用)

東側は、城山手 2 丁目の住宅街(約 20 年になる開発分譲地)、西側は武蔵陵、南側は小高く、中郷地区の斜面の畑に接し、北側は、公道がある。武蔵陵内を水源とする小川が流れ込む浅い人工池(以前は、ホタルの飛ぶ湿地)があり、下流は、暗渠になる。

林縁には、人工的な植栽があるが、植相は豊かで、草は、希少種もあり、アワブキ、ツクバネウツギ、ネジキ、ナツハゼ、スノキ、カクレミノ等が生えて

八王子館町地域で記録された種
(数字は2012-2016年のうちの最大時の羽数)

第7版 番号	種名	2012-2016		2009-2011
		越冬期	繁殖期	出現種
		最大値(羽)	最大値(羽)	
32	カルガモ	2	0	●
38	コガモ	0	0	●
74	キジバト	7	2	●
78	アオバト	0	1	●
127	カワウ	0	0	●
144	アオサギ	0	0	●
185	ホトギス	0	1	●
192	アマツバメ	0	0	●
193	ヒメアマツバメ	0	0	●
342	トビ	1	0	●
354	ツミ	0	0	●
356	オオタカ	0	0	●
358	ノスリ	0	0	●
383	カワセミ	0	1	●
390	コゲラ	1	1	●
397	アオゲラ	1	1	●
420	モズ	2	0	●
427	カケス	1	0	●
435	ハシボソガラス	5	1	●
436	ハシブトガラス	3	3	●
442	ヤマガラ	0	1	●
445	シジュウカラ	7	9	●
452	ヒバリ	0	1	●
457	ツバメ	0	3	●
463	ヒヨドリ	15	30	●
464	ウグイス	1	5	●
466	エナガ	1	2	●
485	メジロ	2	3	●
506	ムクドリ	10	10	●
521	シロハラ	0	0	●
522	アカハラ	1	0	●
525	ツグミ	1	0	●
536	ルリビタキ	0	0	●
540	ジョウビタキ	2	0	●
552	エゾビタキ	0	0	●
558	キビタキ	0	5	●
569	スズメ	13	1	●
573	キセキレイ	1	1	●
574	ハクセキレイ	3	0	●
575	セグロセキレイ	0	0	●
587	カワラヒワ	5	0	●
592	ベニマシコ	0	0	●
600	シメ	1	0	●
602	イカル	3	1	●
610	ホオジロ	2	1	●
617	カシラダカ	4	0	●
624	アオジ	13	0	●
901	コジュケイ	1	2	●
903	カワラバト(ドバト)	0	0	●
909	ガビチョウ	4	13	●
	種数計	29	24	47

いる。嘉永6年の馬頭観音がある。

ボランティアによる草刈りがされているが、当初より様変わりし、フジの大木、キンラン、シュンラン、ヤマユリが激減した。

下表の通り、越冬期26種、繁殖期18種、全体で30種が記録された。アオバト、ホトギス、キビタキ、マヒワ、クロジと注目種5種が記録された。2012-2016年は30種、2009-2011年は37種で合わせると42種である。

八王子長房地域で記録された種
(数字は2012-2016年のうちの最大時の羽数)

第7版 番号	種名	2012-2016		2009-2011
		越冬期	繁殖期	出現種
		最大値(羽)	最大値(羽)	
32	カルガモ	0	0	●
38	コガモ	1	0	●
74	キジバト	3	0	●
78	アオバト	0	1	●
185	ホトギス	0	0	●
355	ハイタカ	0	0	●
383	カワセミ	0	0	●
390	コゲラ	6	2	●
393	アカゲラ	1	0	●
397	アオゲラ	1	2	●
420	モズ	1	1	●
427	カケス	3	0	●
435	ハシボソガラス	3	2	●
436	ハシブトガラス	6	3	●
438	キクイタダキ	0	0	●
442	ヤマガラ	5	5	●
443	ヒガラ	0	0	●
445	シジュウカラ	11	13	●
457	ツバメ	0	2	●
463	ヒヨドリ	17	20	●
464	ウグイス	1	3	●
465	ヤブサメ	0	10	●
466	エナガ	8	2	●
485	メジロ	6	3	●
504	ミソサザイ	0	0	●
506	ムクドリ	27	8	●
521	シロハラ	1	0	●
525	ツグミ	15	0	●
536	ルリビタキ	2	0	●
540	ジョウビタキ	0	0	●
558	キビタキ	0	6	●
569	スズメ	2	6	●
573	キセキレイ	0	0	●
587	カワラヒワ	0	0	●
588	マヒワ	4	0	●
600	シメ	0	0	●
602	イカル	1	0	●
610	ホオジロ	1	0	●
624	アオジ	2	0	●
625	クロジ	4	0	●
901	コジュケイ	0	0	●
909	ガビチョウ	9	2	●
	種数計	26	18	37

(8) 八王子川口地域

八王子市の北部、加住丘陵の中央に位置する南向き斜面の樹林地である。区域の南側には秋川街道に沿うように川口川が東西へ流れ、また北東側には尾根をはさんで戸吹緑地保全地域がある。区域の大部分はコナラを主体とする樹林が占め、一部にアカマツ群落、スギ・ヒノキ植林などが分布する。

里山の風景を色濃く残す丘陵の雑木林であり、全体的に良好な樹林地である。(東京都 HP:保全地域の指定状況から引用)

調査対象地域は都指定の川口地域のみである。緑地南端に神社がありその周辺はボランティアにより適切な管理が行われている。調査地域は雑木林であり早朝散歩をする人たちも見かけるが、緑地の奥に行くと倒木や低木層の繁茂がある。最近では倒木の処理なども一部に見られるようになった。

右表の通り、越冬期 25 種、繁殖期 27 種、全体で 35 種が記録された。アオバト、ホトトギス、サンコウチョウ、キビタキ、カヤクグリと注目種が 5 種記録された。猛禽類ではトビ、オオタカ、フクロウの 3 種が記録された。

2012-2016 年は 35 種、2009-2011 年は 35 種で合わせると 44 種である。

(9) 八王子暁町地域

区域は、ススキ群落、チガヤ群落、シバ群落などさまざまなタイプの二次草地と、これらを取りまくコナラを主体とする雑木林からなる。草地には、ノハラアザミ、ナンバンギセル、ワレモコウなどの植物が見られ、バッタ類などの昆虫も多く見られる。

また、保護上重要な動植物として草地性のチダケサシ、雑木林内のササバギンランなどが生息・生育している。(東京都 HP:保全地域の指定状況から引用)

本地域は北に中央高速道、西に国道 16 号が隣接する狭い地域である。中央部分に二次草地が広がっているという大きな特徴がある。ボランティアにより適切な管理が行われていて、草地は毎年冬に刈取られている。

次ページの表の通り、越冬期 26 種、繁殖期 18 種、全体で 32 種が記録された。キジは草地が広がっているために記録されたものである。ヤマシギも草地と雑木林の境の所で観察されたものである。キビタキは繁殖している可能性がある。

八王子川口地域で記録された種
(数字は 2012-2016 年の中の最大時の羽数)

第7版 番号	種名	2012-2016	2012-2016	2009-2011
		越冬期	繁殖期	
		最大値(羽)	最大値(羽)	出現種
5	キジ	1	2	●
32	カルガモ	0	1	
74	キジバト	3	5	●
78	アオバト	0	0	●
144	アオサギ	0	0	●
185	ホトトギス	0	2	●
342	トビ	1	0	
356	オオタカ	0	0	●
372	フクロウ	0	1	
390	コゲラ	6	4	●
397	アオゲラ	3	3	●
418	サンコウチョウ	0	0	●
420	モズ	1	0	
427	カケス	8	2	●
435	ハシボソガラス	3	2	●
436	ハシブトガラス	3	4	●
442	ヤマガラ	8	5	●
443	ヒガラ	0	1	
445	シジュウカラ	11	9	●
457	ツバメ	0	2	●
463	ヒヨドリ	5	9	●
464	ウグイス	1	8	●
465	ヤブサメ	0	1	●
466	エナガ	6	6	●
485	メジロ	6	12	●
506	ムクドリ	5	5	●
514	トラツグミ	0	0	●
521	シロハラ	2	0	●
525	ツグミ	3	0	
536	ルリビタキ	0	0	●
540	ジョウビタキ	2	0	
558	キビタキ	0	5	●
566	カヤクグリ	0	0	●
569	スズメ	0	0	●
573	キセキレイ	0	2	●
575	セグロセキレイ	0	0	●
587	カワラヒワ	3	3	●
600	シメ	1	0	
602	イカル	0	2	●
610	ホオジロ	4	2	●
617	カシラダカ	8	0	
624	アオジ	3	0	●
901	コジュケイ	0	2	●
909	ガビチョウ	3	11	●
	種数計	25	27	35

八王子川畔町地域で記録された種
(数字は2012-2016年のうちの最大時の羽数)

第7版 番号	種名	2012-2016	2012-2016
		越冬期	繁殖期
		最大値(羽)	最大値(羽)
5	キジ	2	0
74	キジバト	5	1
212	ヤマシギ	1	0
356	オオタカ	1	0
358	ノスリ	1	0
390	コゲラ	3	1
393	アカゲラ	1	0
397	アオゲラ	1	1
420	モズ	1	0
435	ハシボソガラス	2	0
436	ハシブトガラス	4	5
442	ヤマガラ	4	2
445	シジュウカラ	8	4
457	ツバメ	0	4
461	イワツバメ	0	2
463	ヒヨドリ	10	10
464	ウグイス	3	2
466	エナガ	10	30
485	メジロ	6	12
506	ムクドリ	0	4
521	シロハラ	1	0
525	ツグミ	4	0
536	ルリビタキ	1	0
540	ジョウビタキ	1	0
558	キビタキ	0	1
569	スズメ	10	10
574	ハクセキレイ	2	0
610	ホオジロ	0	1
624	アオジ	1	0
901	コジュケイ	0	2
903	カワラバト(ドバト)	20	0
909	ガビチョウ	10	4
	種類計	26	18

5. 八王子市指定の緑地

八王子市では、市の財産である貴重なみどりを守るため、平成17年7月1日に施行された「市街地内丘陵地のみどりの保全に関する条例」に基づき、良好な自然環境が形成されている丘陵地のみどりを斜面緑地保全区域として指定している。平成27年(2015)時点で44地域指定されている。

これとは別に「八王子市都市公園条例」に基づいて設置されている都市緑地が180ヶ所ある。このうちの一つとして平成21年(2009)3月に宇津貫地域に宇津貫緑地(面積163,854㎡)が設けられた。

宇津貫緑地は、JR横浜線の八王子みなみ野駅から南に約2kmの位置にある。八王子ニュータウン造成の残存緑地として位置付けられた場所で、総面積は160,000㎡、南西端の丘陵の下には横浜線のトンネルが通っている。公開されている部分と非公開部分に分かれている。公開部分の中央にはログハウス、南側には調整池があり、人工的な公園風に整備されている。非公開部分には雑木林と小さな田んぼがあり、希少な植物等を守るために非公開となっている。雑木林は尾根部分が主体であるが、谷の部分もある。二つのボランティア団体が管理をしていて里山的な景観が保たれている。

この宇津貫緑地で平成22(2010)年から宇津貫みどりの会と八王子・日野カワセミ会の会員有志で野鳥の定期カウントを行っている。参加者数は毎回5名程度である。この定期カウントは7月と8月を除き毎月1回ロードセンサス方式で行っている。

以下は定期カウントの結果である。次ページの表は毎年10回行った調査のうちの各年の最大羽数を整理したものである。単年では40種前後の記録であり、2010-2015年全体では60種である。60種のうち6年間毎年観察されている種が36種と全体の半分以上を占めている。これに6年のうち5年間観察されている4種を加えると40種となり、これほど多くの種が定着しているということで、本地域が野鳥の生息環境として優れていることが裏付けられる。

オシドリ、カルガモ、コガモ、カイツブリ、カワウ、アオサギ、バン、カワセミは調整池に飛来したものである。オシドリは2013年1月に5羽(オス2、メス3)、2月にも2羽が観察された。ミヤマホオジロは2014年11月アオジに混じって観察されたものである。キビタキは毎年繁殖期に1ヶ月以上観察されるので、繁殖しているものと思われる。

宇津貫緑地の野鳥カウント結果
(2010-2015、確認の最大羽数)

第7版	種名	2010	2011	2012	2013	2014	2015	年数
		最大値	最大値	最大値	最大値	最大値	最大値	
5	キジ	2	0	2	2	3	3	5
24	オシドリ	0	0	0	5	0	0	1
32	カルガモ	2	1	2	2	0	2	5
38	コガモ	1	2	0	0	1	2	4
62	カイツブリ	1	1	2	0	2	0	4
74	キジバト	2	4	5	2	5	9	6
127	カワウ	1	2	1	2	1	1	6
144	アオサギ	1	3	1	1	1	0	5
174	バン	1	1	0	0	0	0	2
185	ホトギス	1	1	1	1	1	1	6
193	ヒメアマツバメ	2	0	0	0	0	0	1
342	トビ	0	2	0	1	0	0	2
356	オオタカ	1	1	0	2	0	1	4
358	ノスリ	1	1	0	0	1	1	4
383	カワセミ	1	1	0	0	1	1	4
390	コゲラ	2	3	4	3	4	5	6
393	アカゲラ	0	0	1	1	0	1	3
397	アオゲラ	1	1	1	2	1	1	6
401	チョウゲンボウ	0	0	0	1	0	0	1
407	ハヤブサ	0	0	1	0	0	0	1
420	モズ	2	1	2	2	3	2	6
427	カケス	0	0	1	0	2	4	3
435	ハシボソガラス	10	4	14	13	10	1	6
436	ハシブトガラス	13	13	6	8	4	5	6
442	ヤマガラ	7	6	4	4	2	6	6
443	ヒガラ	0	0	0	1	0	0	1
445	シジュウカラ	12	10	22	7	6	7	6
452	ヒバリ	1	1	0	0	0	1	3
457	ツバメ	3	4	2	8	7	8	6
461	イワツバメ	0	0	6	0	0	0	1
463	ヒヨドリ	7	30	50	11	8	9	6
464	ウグイス	4	6	4	7	2	4	6
466	エナガ	20	7	10	13	20	10	6
485	メジロ	8	8	4	4	9	4	4
492	オオヨシキリ	0	0	0	0	1	0	1
506	ムクドリ	10	10	3	10	12	4	6
514	トラツグミ	1	0	0	0	0	0	1
521	シロハラ	0	2	1	1	0	2	4
525	ツグミ	6	10	15	5	5	5	6
536	ルリビタキ	1	1	1	2	1	1	6
540	ジョウビタキ	1	1	1	3	3	3	6
558	キビタキ	1	1	2	4	2	2	6
569	スズメ	2	6	5	22	22	33	6
573	キセキレイ	0	1	0	0	1	3	3
574	ハクセキレイ	1	4	3	5	2	1	6
575	セグロセキレイ	1	0	0	0	0	0	1
580	ビンズイ	5	2	0	0	0	0	2
587	カワラヒワ	7	4	7	6	1	2	6
588	マヒワ	0	6	0	0	0	0	1
599	ウソ	0	0	2	0	0	0	1
600	シメ	0	4	6	2	0	1	4
602	イカル	0	0	0	4	0	0	1
610	ホオジロ	3	4	4	6	5	3	6
617	カシラダカ	30	10	10	30	20	0	5
618	ミヤマホオジロ	0	0	0	0	1	0	1
624	アオジ	5	5	6	4	5	5	6
901	コジュケイ	2	3	2	2	3	4	6
903	カワラバト(ドバト)	2	0	0	0	0	0	1
909	ガビチョウ	8	7	15	8	12	12	6
910	ソウシチョウ	0	10	0	0	0	0	1
	種類数	43	44	39	40	38	39	60



石橋入緑地の野鳥達

八王子市打越町に石橋入緑地という公園がある。片倉城跡公園の半分ぐらいの広さであるが、隣接する私有地の雑木林や畑に囲まれており、野鳥をたくさん観察できる。近くに住んでいて最寄駅の京王線北野駅に出るときにこの公園の中を歩いて行き、日頃から短時間の探鳥を楽しんでいる人もいる。公園の真ん中に湧水による池があり、鉄分が多く見た目はあまりきれいに見えないが、かつてカワセミが営巣して雛の姿を見たことがあった。

また、ダイサギやアオサギが羽を休めていることもある。よく目にするのはコジュケイ、ガビチョウ、シジュウカラなどである。アオゲラも声や姿をととき確認する。また毎年キビタキがやってきて5月ごろから何度か声を聞くことができる。冬にはトラツグミ、マヒワの群れや、ルリビタキが歩道の道案内をしてくれたこともある。運が良ければ、渡り途中のコマドリやサンコウチョウの声を聞けることもある。西側は16号バイパスに隣接しており、南側にはコープ、マツモトキヨシといった商業施設もあり住宅街も傍らまで迫っているが、このような貴重な自然環境がずっと保全されることを願う毎日である。



ジョウビタキ

Quoni

第6章 野鳥の種類別調査

I. オオルリ他夏鳥調査

1991年、八王子市の鳥としてオオルリが制定された。カワセミ会では市の鳥オオルリの生息地である丘陵地や山間部の自然環境の動向を見守るため、1992年から生息数調査を毎年行っている。また、オオルリの他にツツドリ、ホトトギス、クロツグミ、キビタキ、センダイムシクイ等の夏鳥の生息数調査を同時に行っている。

1. 調査場所、内容、方法

オオルリが生息している可能性が高いと思われる八王子市内の沢筋、谷筋 19 区域を調査場所として設定している。19区域の総延長は111kmである。

各区域に調査担当者を決めて、調査担当者を中心に数名でチームを組む。そして調査区域内の沢筋、谷筋に出向き、双眼鏡やフィールドスコープを使い姿や声を確認してオオルリオスの数をカウントする。メスは確認が難しいことおよび繁殖への影響を懸念してカウント対象としない。調査時期は4月～6月で、19の区域毎に調査日は異なるが、同一区域について2回以上調査している。調査場所、調査担当者、延参加者数を下表及び次ページ図に示す。

オオルリはスズメより約一まわり大きく、ツバメのように春に南の国から渡って来て、夏に繁殖し、秋に帰っていく渡り鳥である。♂と♀では体の色がまったく異なり、♂は胸が黒く、背中が美しいルリ色をしているのに対し、♀は全体が褐色で下面が淡く地味である。八王子の丘陵地や山間部の溪流地、沢沿いの広葉樹林に渡来し、目立った高い木のこずえに止まり、ピーリーリー、ポイヒーピピ、ピールリピールリ、ジェツジェツなどよく通る美声でさえずる。エサの採り方は、谷沿いの木の枝に止まっていて、そこに飛んでくる昆虫を空中でつかまえて枝に戻るという行動の繰り返しが多い。

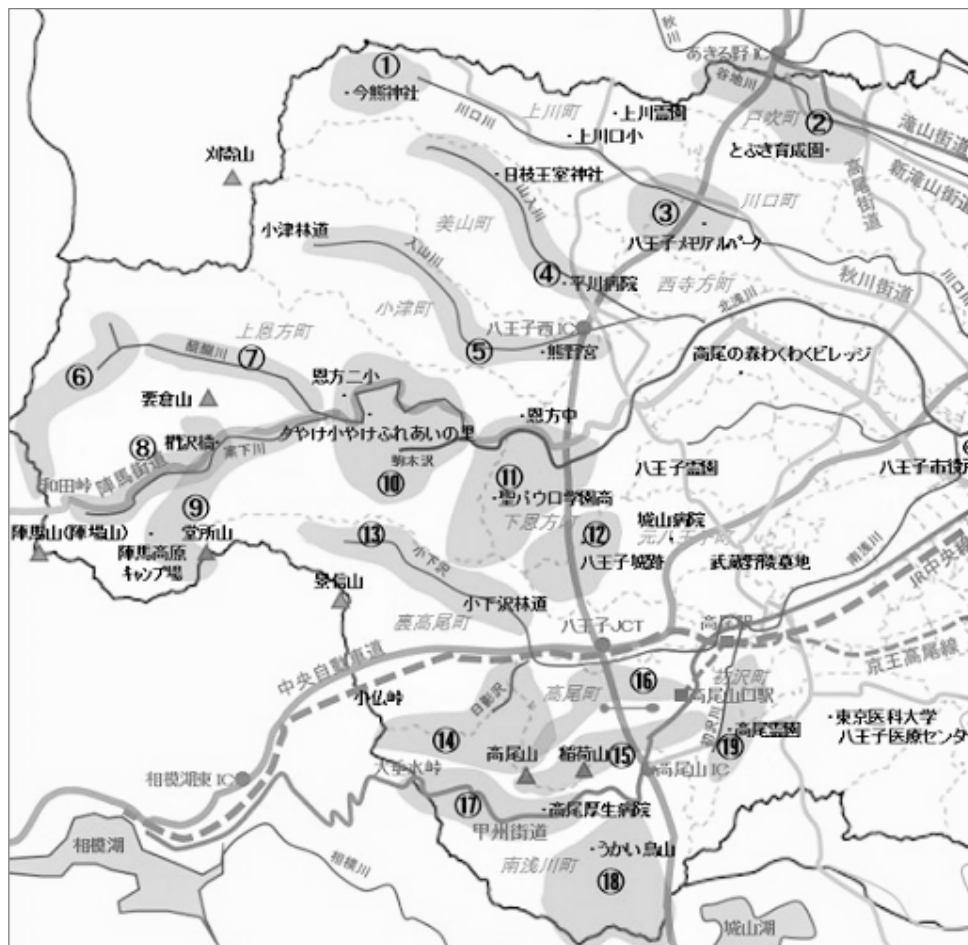
2. オオルリのオスの年次別羽数と動向

年次別動向は2008年までは増加傾向にあり、当該年は111羽であったが、2009年以降は減少傾向にある。区域別では、⑤小津、⑩力石周辺、⑪松竹周辺などが多い。

調査場所、調査担当者、延参加者数（調査年は抜粋である）

19区域の調査場所	調査延長	2015年の調査担当者	1996延参加数	2000延参加数	2005延参加数	2010延参加数	2015延参加数
①上川(今熊山北沢、同南沢、金剛の滝)	3	長谷川篤	2	2	2	3	1
②加住南丘陵(谷地川源流部)	6	中村啓二	4	4	2	4	4
③川口丘陵(天合峰、釜の沢、滝の沢)	6	川戸恵一	3	2	1	4	2
④美山(山入川奥、美山小学校奥、お屋敷川)	5	中村后子	1	1	2	4	7
⑤小津(下恩方辺名、小津川源流部奥)	7	清水盛通	1	3	1	3	10
⑥醍醐川上流(醍醐川上流部、ににく沢)	6	福本健	2	2	2	2	9
⑦醍醐川下流(醍醐川下流部、盆堀林道)	4	佐藤哲郎	2	1	1	6	2
⑧和田峠下(くぬぎ沢、和田峠谷)	3	古山隆	1	1	1	2	2
⑨明王峠下(明王溪谷、クラ骨沢、ピロウ沢)	8	門口一雄	2	2	2	8	4
⑩力石周辺(力石沢、南土代沢、駒木野沢他)	8.5	山崎悠一	2	2	2	4	6
⑪板当・滝沢林道	9	丸山二三夫	5	6	12	20	11
⑫元八王子(御主殿の滝奥、八王子城跡奥)	4	若狭誠	5	3	5	30	33
⑬裏高尾(小下沢林道関場峠迄)	5	阿江範彦	2	1	1	2	1
⑭小仏城山下(日影沢城山頂上迄、行の沢)	7.5	柚木鎮夫	2	1	2	8	2
⑮高尾山1(6号路、3号路、琵琶滝下山コース)	8	千葉慎子	10	10	8	13	12
⑯高尾山2(小仏川下流、蛇滝コース、4・5・1号路)	5	粕谷和夫	1	1	1	17	13
⑰大垂水峠下(案内川上流から一丁平方面)	3	加藤岸男	7	1	2	5	5
⑱表高尾(中沢川、入沢川、榎窪川)	10	角田幸男	2	2	2	4	2
⑲初沢川・東高尾尾根	3	浜野建男	3	2	1	4	2
計	111km		57名	47名	50名	143名	128名

夏鳥調査地域図



- ①上川
- ②加住南丘陵
- ③川口丘陵
- ④美山
- ⑤小津
- ⑥醍醐川上流
- ⑦醍醐川下流
- ⑧和田峠下
- ⑨明王峠下
- ⑩力石周辺
- ⑪板当・滝沢林道
- ⑫元八王子
- ⑬裏高尾
- ⑭小仏城山下
- ⑮高尾山1
- ⑯高尾山2
- ⑰大垂水峠下
- ⑱表高尾
- ⑲初沢川・東高尾尾根

オオルリのオスの年次別、区域別羽数

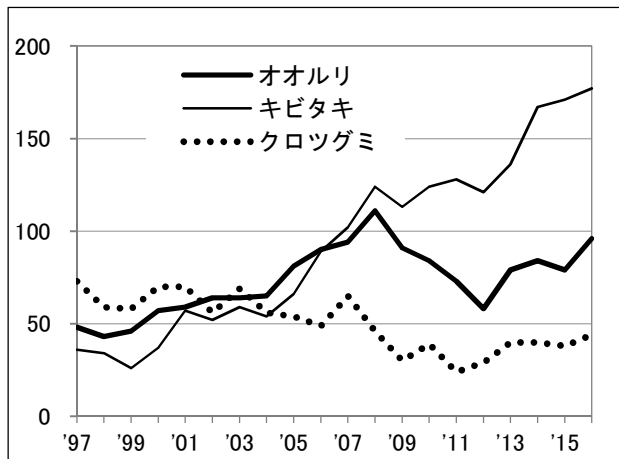
場所	'92	'93	'94	'95	'96	'97	'98	'99	'00	'01	'02	'03	'04	'05	'06	'07	'08	'09	'10	'11	'12	'13	'14	'15	'16
①上川	1	2	2	2	2	2	3	3	1	2	2	2	2	2	1	2	3	3	1	2	1	2	0	0	3
②加住南丘陵	未	未	未	未	0	2	2	1	3	1	0	0	1	1	1	2	2	2	1	0	0	0	0	0	1
③川口丘陵	未	未	未	未	1	3	0	0	0	0	1	0	2	0	1	0	1	0	0	2	0	0	0	0	2
④美山	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	2	1	1	2	1	1	1	1
⑤小津	3	2	2	3	3	2	3	3	4	13	11	8	5	8	11	12	11	6	9	8	9	8	13	12	17
⑥醍醐上流	{1}	{1}	{2}	{1}	3	3	2	2	2	2	4	3	4	3	3	4	4	5	3	3	4	4	3	4	2
⑦醍醐下流	{1}	{1}	{2}	{1}	3	3	2	2	2	2	2	2	3	4	4	4	5	2	3	1	1	1	3	4	3
⑧和田峠下	{4}	2	2	3	7	4	5	3	5	3	3	4	4	6	6	5	7	4	5	3	3	5	7	6	7
⑨明王峠下	{4}	2	2	3	7	4	5	3	5	3	3	4	4	6	6	5	7	4	5	3	3	5	7	6	7
⑩力石周辺	1	1	1	3	2	3	3	6	1	6	6	4	6	12	13	9	14	9	8	11	8	6	18	8	8
⑪松竹周辺	1	2	1	2	3	3	0	2	8	4	8	5	5	7	7	7	11	10	8	5	5	7	7	9	5
⑫元八王子	0	1	0	4	1	3	1	3	1	1	1	2	4	5	3	5	5	1	4	1	2	2	4	2	2
⑬裏高尾	3	3	3	2	4	3	4	3	6	2	2	6	3	4	4	3	4	4	3	5	4	4	2	4	5
⑭小仏城山	2	2	3	3	2	2	1	2	3	5	3	3	3	5	4	7	5	11	8	6	4	4	5	4	4
⑮高尾山1	6	1	4	2	4	3	4	6	3	3	3	7	7	4	6	7	6	9	8	9	2	9	4	4	9
⑯高尾山2	{6}	4	3	5	4	6	5	5	4	6	4	4	5	7	6	5	4	2	8	2	3	4	4	2	4
⑰大垂水峠下	2	4	1	2	2	2	1	1	2	2	1	1	2	2	5	6	16	8	5	2	2	5	3	5	4
⑱表高尾	1	3	2	4	2	1	2	3	3	2	4	5	4	6	7	9	5	5	4	5	3	11	5	3	8
⑲初沢川	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	1	0	1	0	3	2	2	2	1	0	3	3	6
計	25	30	28	38	45	48	43	46	57	59	64	64	65	81	90	94	111	91	84	73	58	79	84	79	96

注) { } 内はその上の欄に含まれる。 未: 未調査

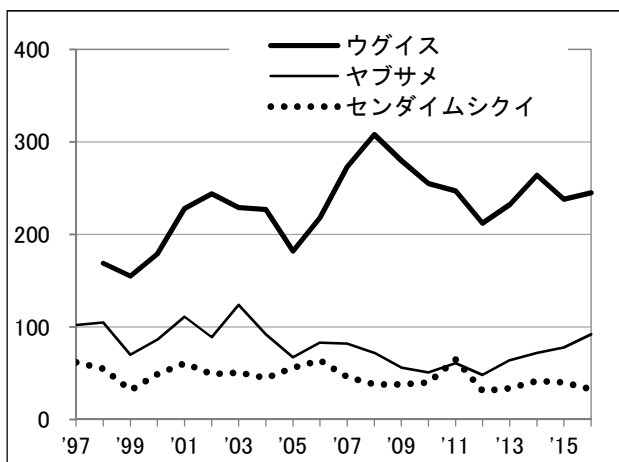
3. 主な夏鳥の年次別動向

キビタキ、クロツグミ、ホトトギス、ツツドリ、ウグイス、ヤブサメ、センダイムシクイなどはオオルリの調査地で同時に観察される。19区域の調査が揃った1997年以降の動向を以下にグラフで示す。

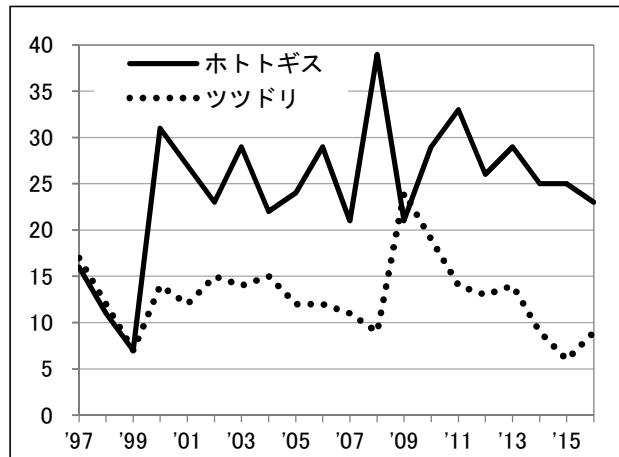
オオルリ、キビタキ、クロツグミ3種を比較すると、2009年以降、キビタキは増加傾向にある。クロツグミは前2種に比べて羽数は少なく、最近はやばい傾向にある。



ウグイスは夏鳥ではなく、留鳥であるが、同じ仲間のヤブサメ、センダイムシクイと比較するとヤブサメの3倍以上、センダイムシクイの6倍程度が観察される。

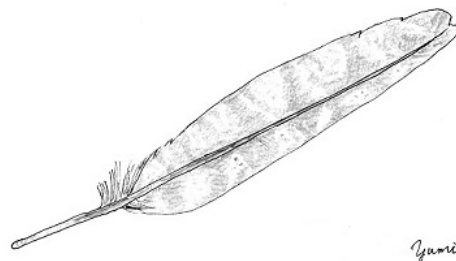


托卵鳥はホトトギスとツツドリが観察される。ホトトギスの方が多く、ツツドリの2倍以上である。ともに年次変動が大きく年次別の増減傾向は読み取れない。



4. オオルリの繁殖環境の保全

オオルリはスズメ、キジバト、ヒヨドリ等と違って、広葉樹で覆われた緑豊かな谷川や溪流のある自然環境が無ければ生育出来ない鳥である。しかし、現実には八王子市の丘陵地を始め、山間地さえ開発の名の下に緑が破壊されつつあり、その勢いは未だ止まっていない。一見緑が多いと思われる八王子市で、気がついてみたらオオルリが「幻の鳥」になっていたということが起こらないよう、「市の鳥オオルリ」制定の精神が忘れられないよう願望を込めて毎年継続的に行っている。オオルリの生息数調査は緑の監視（モニター）役として今後も重要であると思われる。



Ⅱ. サシバ等秋のワシタカ他の渡り調査

1. サシバはどこを通過するか（調査場所の選定）

八王子・日野カワセミ会が秋のサシバ等の渡り調査を組織的に始めたのは1993年で、2015年で23年目になった。最初の頃はサシバがどこを通過しているか、どこに行けば通過中のサシバを観察できるかの情報がなく、手探りの状態だった。したがって、いろいろな場所に出向いてサシバを観察した。出向いてサシバが現れるのを待つだけでなく、たまたまの外出先、野鳥定期カウント中や自宅からサシバの渡りを観察することもした。下表は、1998年から2015年までの観察場所の経過をまとめたもので、100羽以上が通過した年と場所は「囲み」になっている。2003年に中間まとめを行い、サシバが多く通過する場所が概ね判明したので、2004年には、遠矢堀公園

（八王子市下恩方町）、陣場山山頂（八王子市上恩方町、相模原市緑区）、高尾山霞台（八王子市高尾町）、城山湖ダムサイト（相模原市緑区）の4か所を重点観察地として絞り込んだ。

2007年からは高尾山霞台の調査担当者が手配できなくなったことと、高尾山霞台と城山湖ダムサイトは至近距離にあることにより、高尾山霞台を止めて遠矢堀公園、陣場山山頂、城山湖ダムサイトの3ヶ所に絞った。2010年からは遠矢堀公園が観察地の樹木の繁茂、周辺耕作者への迷惑などの理由で約600m東側の松竹公園西（八王子市下恩方町）に変更した（ただし、2013年は一時的に遠矢堀公園にもどした）。

100羽以上のサシバ渡りが観察された場所（太枠囲み）

	メッシュ	'98	'99	'00	'01	'02	'03	'04	'05	'06	'07	'08	'09	'10	'11	'12	'13	'14	'15
日野市谷地川の多摩川合流付近	立川0C										237								
浅川・都立日野高校付近(日野市)	武蔵府中4K												51						
入山峠付近	五日市6C			59							39						108		
夕焼け農園	五日市7A			42		0													
恩方マス釣り場	五日市8A			3	68														
小峰公園	五日市8F			47	95	98	9					1							
大博採石場最上部	五日市9A				654	365													
下恩方清水宅	拝島0A					33													
上川霊園	拝島0E						15												
上川町の帝京八王子高校	五日市9E										44	11							
北浅川・夕焼け橋付近	拝島1A			1															
陵北大橋	拝島1B			8					11										
GMG第2P	拝島1E			2		0													
川口川・観音橋付近	拝島2C			2															
川口川・片井戸橋付近	拝島2C	14																	
杏林大学	拝島4E	41	169																
高月給水所	拝島5E					14	0												
小宮公園	拝島7A						3												
八王子城跡	八王子0J										1								
八王子霊園	八王子1K															111			
小仏川駒木野公園	八王子1G										100								
高尾山霞台	八王子0F	30	110	205	118	13	89	45	116	14									
高尾山蛇滝入口付近	八王子0G		73																
高尾山山頂	与瀬9E								17						5				
恩方松竹公園付近	八王子0K	465	427	156	14								132	613	442	687		389	236
恩方心源院	八王子1K	1																	
城山湖	八王子2C	372	77	131	268	63	132	32	244	188	507	83	498	826	207	383	324	172	344
八王子総合福祉センター	八王子3H	2																	
八幡町織物会館	八王子6J		1																
北八公園	八王子8K		2																
陣場山山頂	与瀬3H		22	246	492	44	45	8	157	104	171	206	40	101	22	99	8	271	432
小仏城山山頂	与瀬7F	152	33		9														
景信山山頂	与瀬7H	184			2										33				
恩方駒木野	与瀬8K			28															
遠矢堀公園	与瀬9K			291	604	1033	350	1068	1012	651	717	271	440				416		
滝の沢林道	与瀬9K		23																
聖パウロ学園	与瀬9K	1																	
その他		30							2						12				
計		1,292	937	1,221	2,324	1,663	643	1,153	1,559	957	1,816	572	1,161	1,540	721	1,280	856	832	1012

サシバは、カラスとほぼ同じくらいの大きさで、タカの仲間としては中型で、オオタカより翼が細長い。夏鳥として渡来し、本州以南の低山地、平地の林と水田の入り混じった環境で繁殖し、秋には越冬地である沖縄や東南アジアに向かって渡って行く。里山に生息する様々な小動物を餌にしていることから、里山生態系の指標種と言われているが、近年里山の荒廃による生息地の消失が大きな問題となっている。

八王子、日野では春と秋に渡り途中のサシバが観察される。特に秋には100羽を超える大きな群れが観察されることが毎年数回ある。

カワセミ会では、観察地点の位置の客観的確認と位置相互の関係を把握する目的で国土地理院の2万5千分の1地形図の縦横を10等分して得られるメッシュを基本に使っている。

以下の図がそのメッシュで、具体的なメッシュ検索はカワセミ会ホームページの会員専用コーナーで探し出すことができる仕組みをとっている（サシバ観察地点のメッシュ、例えば城山湖は「八王子2C」である）

タカ等渡り 主な調査地の位置図 (1/25,000 地形図 10等分メッシュ図)

3F	4F	5F	6F	7F	8F	9F	0F	1F	2F	3F	4F	5F	6F	7F	8F	9F	0F	1F	2F	3F	
3E	五日市 (1/2.5万地形図)			7E	8E	9E	0E	1E	2E	3E	杏林大学	5E	6E	7E	8E	9E	0E	立川 (1/2.5万地形図)			
3D				7D	8D	9D	0D	1D	2D	3D	4D	5D	6D	7D	8D	9D	0D				
3C	4C	5C	6C	7C	8C	9C	0C	1C	2C	拝島 (1/2.5万地形図)			6C	7C	8C	9C	谷地川	1C	2C	3C	
3B	4B	5B	6B	7B	8B	9B	0B	1B	2B				6B	7B	8B	9B	0B	1B	2B	3B	
3A	4A	5A	6A	7A	8A	大博採石 遠矢公園	0A	1A	2A	3A	4A	5A	6A	7A	8A	9A	0A	1A	2A	3A	
3K	4K	5K	6K	7K	8K	松竹公園	0K	1K	2K	3K	4K	八王子市役所	6K	7K	8K	9K	0K	1K	2K	3K	
3J	4J	5J	6J	7J	8J	9J	0J	1J	2J	3J	4J	5J	6J	JR八王子駅	8J	9J	0J	1J	2J	3J	
陣場山	4H	5H	6H	景信山	8H	9H	0H	1H	2H	3H	4H	5H	6H	7H	8H	9H	0H	1H	2H	3H	
3G	与瀬 (1/2.5万地形図)			7G	8G	9G	0G	小仏川	JR高尾駅	3G	4G	5G	6G	7G	8G	9G	0G	1G	2G	3G	
3F				小仏城山	8F	9F	高尾霞台	1F	2F	八王子 (1/2.5万地形図)			6F	7F	8F	9F	0F	武蔵府中 (1/2.5万地形図)			
3E	4E	5E	6E	7E	8E	9E	0E	1E	2E				6E	7E	8E	9E	0E				
				8D	8D	0D	1D	2D	3D	4D	5D	6D	7D	8D	9D	0D	1D	2D	3D		
場所	:100羽以上の通過メッシュ			9C	0C	1C	城山湖	3C	4C	5C	6C	7C	8C	9C	0C	1C	2C	3C			
				0B	1B	2B	3B	4B	5B	6B	7B	8B	9B	0B	1B	2B	3B				

注)1メッシュは縦横とも約1km



2. 観察内容と方法

観察はカワセミ会の会員有志が行っている。毎年、観察が始まる1か月前に参加者を募集する。観察日に漏れが出ないように調整するため、事前登録の協力を依頼し、参加申し込みのあった会員には、後日参加者一覧表をつけた調査要領・観察結果報告様式を送付する。また、カワセミ会ホームページの会員専用ページにも参加者一覧表を掲載する。1993年～1995年の3年間は休日だけの実施だったが、1996年からは調査期間中、毎日の連続調査としている。ただし、雨天の日はサシバの渡りが認められないので中止する。実施期間は年により異なるが、概ね9月10日頃から10月15日頃までとしている。朝、8時から8時半頃までに調査地に向向き、13時から15時頃まで現場に留まり、双眼鏡やフィールドスコープで観察する。

サシバの典型的な渡りのルートは北東から北の上空に現れ、旋回しながら上昇した後、南西や南の方向に一直線に流れていく(下図①)。東側からやって来るものも少しある(下図②)。

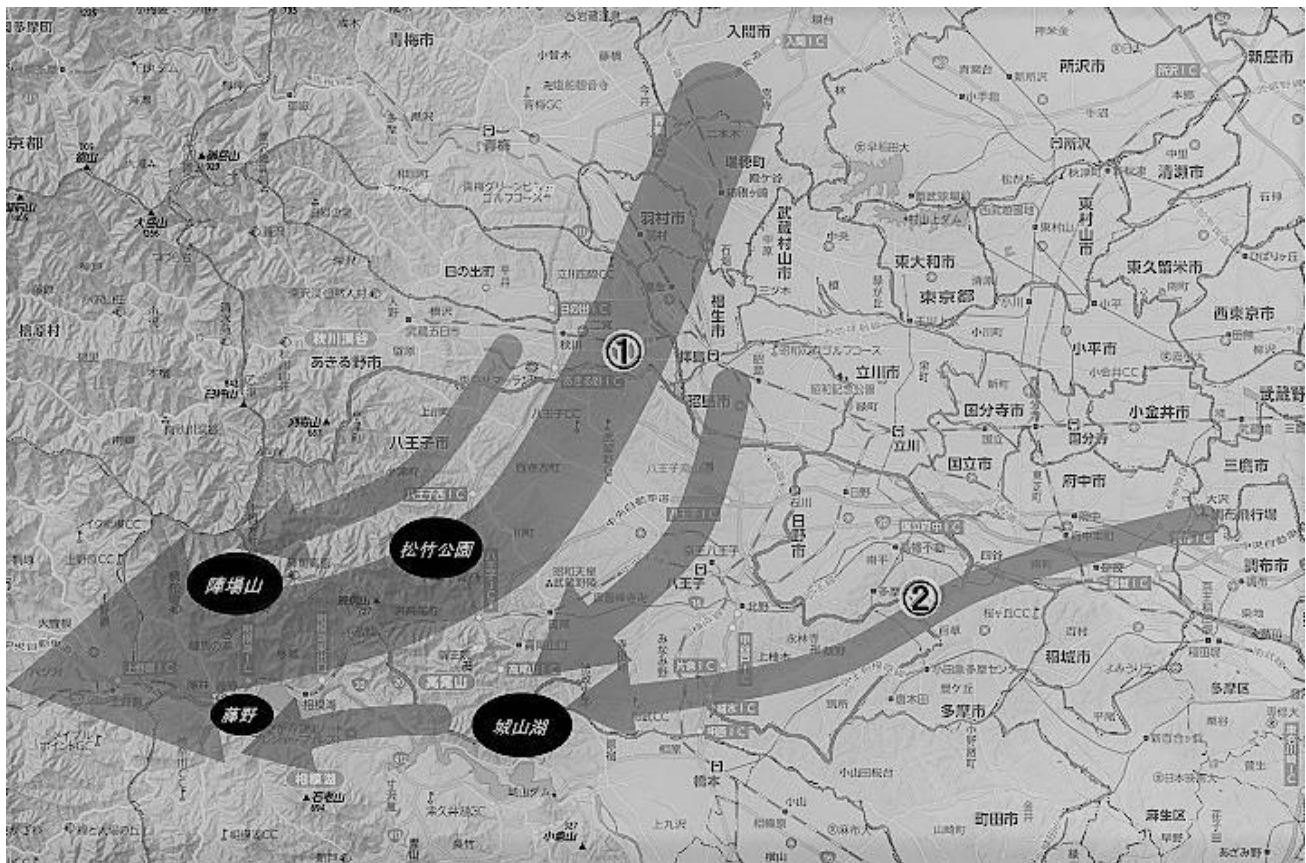
1羽だけのこともあれば数羽、数十羽が次々に現れ、鷹柱になることもある。真上に現れることもあ

れば、はるか遠くを通過して行くこともあり、このような場合は小さな鳥影しか捉えられない。

サシバと認めたら羽数とその時刻、飛んで行く方向、鷹柱の有無等を記録する。また、同時にハクマその他のワシタカ、ヒヨドリ、ツバメの仲間、アマツバメの仲間、ヒタキの仲間等が渡って行くので、これらの羽数もカウントする。さらに渡りをする蝶アサギマダラも通過して行くのが観察されるのでこれもカウント対象としている。3か所の観察地の一つである城山湖ダムサイトには地元(相模原市緑区等)の方々が終日訪れて来て熱心にタカを観察を行っている。カワセミ会ではこのような方々と協力し、また指導を受けながら観察をしている。他の2か所にも「日本野鳥の会東京」などの方が時々訪れて来るので、このような方々とも一緒に観察している。タカの渡り調査は観察する人数が多い程、タカの捕捉率が高まる。また、関東近辺の調査グループとも連絡しあって観察の精度の向上に努めている。

カウント結果はその日のうちにホームページ担当者へ送り、カワセミ会のホームページで即日に速報値を公表している。このページは「タカの渡り全国ネットワーク」にリンクされている。

サシバの典型的な渡りのルート図



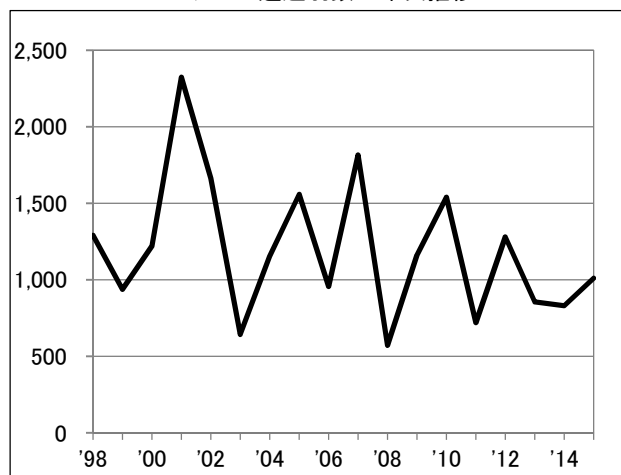
3. 通過羽数と経年変化

(1) サシバの通過羽数と経年変化

次図は調査体制が整った1998年から2015年の年次別のサシバ通過数である。毎年複数観察地の合計であるので、重複カウントもあり、実観察数はこれより少ないが、その割合は10%以下と推定している。それよりカウント漏れの方が多いのではないかと推定されるが、その割合は不明である。

最も多かった年は2001年の2,324羽で、2千羽を越えたのはこの年だけで、1千羽台を記録した年が9年、1千羽に満たない年が9年である。2000年以降で非常に少なかった2003年と2008年は関東以北の繁殖地が冷夏に見舞われた年と一致する。経年変化は年次別の差が大きいので、はっきりしないが、2001年以降は減少傾向にあることが窺える。

サシバ通過羽数の年次推移

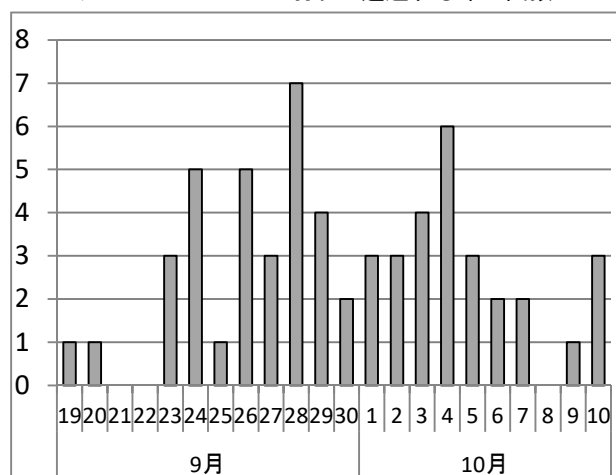


(2) サシバが多く通過する日

日別のサシバの通過羽数は平均的ではなく、多く通過する日と少ししか、または1羽も通過しない日がある。サシバが多く通過する日は、1年に2日から5日程度である。以下の表とグラフは1993年から2015年まで1日に100羽以上が観察された日数の一覧表である。

この表とグラフからもわかる通り、最も多く通過する日は9月28日と10月4日であった。グラフで見るとこの両日を中心に9月下旬と10月上旬の2回ピークがあることがわかる。この理由は何なのか。飛び出て来る地域のグループが異なるのか。若鳥と成鳥との違いか。天候の周期説で説明できるのか。疑問はつきない。なお、サシバが多く通過する日は、天気の良い日で、特に降雨のあった翌日や翌々日に多く渡るとい傾向がある。

サシバが1日で100羽以上通過する年の回数

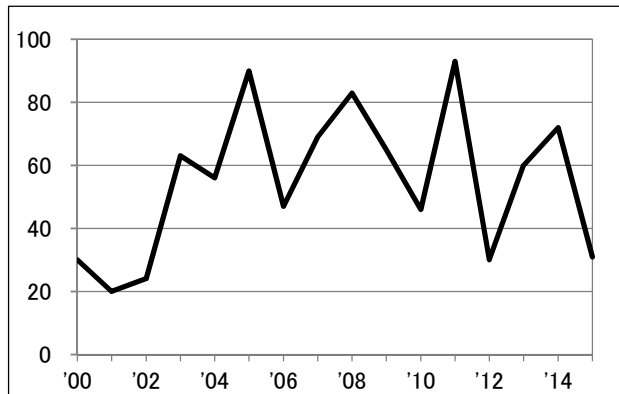


サシバが多く渡る日 (1日100羽以上が観察された日)

	9/19	9/20	9/21	9/22	9/23	9/24	9/25	9/26	9/27	9/28	9/29	9/30	10/1	10/2	10/3	10/4	10/5	10/6	10/7	10/8	10/9	10/10	
1993								●															
1994										●													
1995																							
1996																							●
1997		●						●															
1998										●						●							
1999																●						●	
2000												●					●	●					●
2001								●															
2002						●					●					●	●	●					
2003						●					●	●											
2004										●			●										
2005										●		●											
2006						●				●			●										
2007	●									●													
2008						●										●							
2009						●										●							
2010										●						●							
2011						●	●				●					●							
2012						●										●							
2013										●	●												●
2014										●	●									●			
2015										●		●	●										
年数計	1	1	0	0	3	5	1	5	3	7	4	2	3	3	4	6	3	2	2	0	1	3	

(3) ハチクマの通過羽数

ハチクマの通過数は下図の通りで、八王子ではサシバの10分の1以下の規模である。



(4) その他のタカや野鳥等の経年変化

サシバ、ハチクマ以外のタカや鳥蝶で観察された羽数の経年変化は下表のとおりである。この表にまとめた羽数は、渡り鳥として通過したものと、地付きの鳥が何回も登場するものの両方が含まれているので、「延べ数」としてまとめている。

ミサゴは僅かであるが通過しているものがあるが、城山湖ダムサイトには相模川に留鳥として棲息しているミサゴが採餌にやって来たものが含まれている。トビ、オオタカ、ツミ、ハイタカは殆どが留鳥であると思われる。ツミは他のタカが現れるとスクランブルをかけてくるので、その行動パターンと小型であるということで比較的簡単に識別できる。

ノスリは、サシバの通過と同じような飛翔が認められたものと、渡らずに留鳥であると思われるものの両方が含まれている。クマタカ、ハヤブサ、チョ

ウゲンボウは渡りのものか留鳥かの区分不明である。チゴハヤブサはごくわずかであるが、明らかに渡りの飛翔パターンで通過している。

ヒメアマツバメは留鳥のものと推定される。アマツバメ、ツバメ、イワツバメは頻繁に通過している。2006年にハリオアマツバメが263羽記録されたが、このうち215羽は10月8日に遠矢堀公園で観察されたもので、この日はハリオアマツバメの特異日となった。

ヒヨドリの渡りが観察されるのは9月末からで10羽、20羽、50羽という集団で通過していく。実際には調査終了の10月15日頃を過ぎても渡っているので、この数よりはるかに多い通過数と推定される。サメビタキ、エゾビタキ、コサメビタキ、ノビタキ、ツツドリ等は渡りの途中と思われるものが日中、羽を休めていたり、採餌していたりするものが観察されるが、数は少数である。

アサギマダラは、たまたま観察地の頭上近くで目についたものであり、実際にはもっと多くの個体が通過しているものと推察される。

この表には載っていないが、2007年9月24日は城山湖で8時40分、湖の真ん中に鳥の集団が丸く固まって浮いているのを見つけ、フィールドスコープで確認するとアカエリヒレアシシギの冬羽個体で、カウントすると約100羽であった。水面から飛び立つとハマシギの集団と同じようなパターンで、一つのかたまりで行動、集団全体が白くなったり、固まりの大きさが伸縮したりしていたが、その集団にハヤブサが狩りのために突っ込んだため、どこかに飛び去ってしまった。

その他のタカや野鳥等の経年変化

注) 単位は基本的には羽数であるが、地付きの野鳥については出現回数も含まれ、両者が混在している。		2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015
地付き又は通過のワシタカ	ミサゴ	3	1	4	4	9	9	21	8	3	17	16	28	25	30	30
	トビ	206	183	216	199	304	321	374	299	509	591	1012	986	846	881	861
	オオタカ	42	75	64	71	77	56	45	45	44	38	72	67	73	97	52
	ツミ	36	23	37	38	48	59	42	34	81	78	61	39	48	46	44
	ハイタカ	19	9	18	7	13	15	2	17	4	0	5	17	8	12	4
	ノスリ	86	70	105	91	95	166	143	132	100	139	106	211	231	167	147
	クマタカ	15	2	0	2	2	1	5	0	2	1	0	2	2	5	7
	ハヤブサ	11	15	13	4	15	14	15	11	12	8	20	7	21	30	17
	チゴハヤブサ	6	1	1	0	4	6	4	3	2	8	3	2	3	7	7
チョウゲンボウ	3	5	5	1	16	5	5	3	8	6	7	8	4	10	15	
通過のアマツバメ、ツバメ類(ヒメアマツバメは地付き含む)	ハリオアマツバメ	30	20	0	15	0	263	0	0	0	0	6	0	1	10	0
	ヒメアマツバメ	39	239	71	33	37	89	2	257	4	15	131	66	0	40	19
	アマツバメ	517	518	65	494	335	343	97	1,029	325	197	329	950	143	218	284
	ショウドウツバメ	17	5	0	0	2	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0
	ツバメ	204	343	32	99	30	259	44	145	74	164	57	73	160	115	73
コシアカツバメ	7	6	0	2	2	0	0	0	1	0	11	0	0	0	0	
イワツバメ	563	261	461	811	414	586	527	1,475	898	337	586	88	151	279	154	
通過のその他の野鳥、蝶	ヒヨドリ	3,452	2,994	3,277	2,604	777	4,004	1,195	3,120	3,307	2,182	1,383	4,978	1,076	4,799	1,836
	サメビタキ	1	3	0	0	0	1	2	0	0	0	0	0	2	2	3
	エゾビタキ	11	49	12	4	2	21	7	11	0	5	16	18	23	11	8
	コサメビタキ	0	1	4	1	2	7	2	5	0	2	2	1	7	0	1
	ノビタキ		6	1	0	5	1	3	4	0	2	1	1	3	1	22
	ツツドリ		3	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	2	0	1
	アサギマダラ	51	39	44	58	68	58	65	59	52	63	53	23	26	37	78

4. サシバの通る道

(1) サシバが通る道の事例

秋のサシバは八王子のどの辺りを通過しているか。18年間で100羽以上の通過が記録された所は、日野市谷地川の多摩川合流付近、大博採石場最上部、杏林大学、小仏川駒木野公園、高尾山霞台、恩方松竹公園、城山湖、陣場山山頂、小仏城山山頂、景信山山頂、遠矢堀公園の11ヶ所であった。これ等の地点は前記メッシュ図で二本線の四角で囲んだメッシュが該当する。サシバの多くはこのような地点を通過していることが判明した。

しかし、この地点を結ぶ決まったルートをサシバは通るというものではない。サシバは渡りの時は上昇気流を捉えて高度を稼ぐという飛翔パターンをとるが、上昇気流の発生は日により、時間帯により変化するので、サシバの通るルートも固定的に決まったものではなく、日々刻々に変化しているものと推察される。ただ、上昇気流の発生しやすい場所は地形的な要素が大いに作用するので、このような地点はサシバや他の渡り鳥の通り道になっていることは間違いない。

ここでは、実際にサシバの群れが通った軌跡の2事例を紹介する。

一つは2007年10月4日の観察、谷地川の多摩川合流付近(メッシュ立川0C)で10時20分~10時50分の間に200羽以上が南西に向かって飛翔したのが観察され、その南西方向に位置する城山湖ダムサイト(メッシュ八王子2C)で11時10分から11時20分の間に116羽のサシバを観察した。この日のこの群れは時間的、位置的關係から谷地川の多摩川合流付近から城山湖方面へ結ぶルートを通ったことは間違いない。

もう1事例は2009年10月4日の観察によって得られたルートである(次ページ図)。

この日は日本野鳥の会東京支部発行「ユリカモメ(2009年12月号)」に「都立神代植物公園で朝50羽ほどのサシバが渡っていった」という記載、文一総合出版発行「バーダー2009年12月号」に水谷高英氏が「多摩市で70羽のサシバを観察した」という記載、府中野鳥クラブ発行「やちょう(2009年11月号)」に「多磨霊園で35羽のサシバの鷹柱が観察された」という記載がある。

神代植物公園のものは野鳥の会東京支部でサシバの観察をしている吉邨隆資氏を通じてeメールで照会したところ、「バードハウス展の開場準備中でしたので9:00~9:30頃だったと思います。林をかすめて飛んでいったために群れ全体は確認できなかったが、恐らく50羽前後と思われます。方向は北東→南西または東北東→西南西、神代植物公園の北

西端をかすめるように飛んで行きました。西村、大塚、井守、川端、谷口、吉成他大勢で観察。」という回答を得た。

多磨霊園のものは、府中野鳥クラブ大室清会長にeメールで照会したところ「サシバが観察された時刻は11時頃と思われます。詳しい事がわかりませんが、周囲にいた2~3人の話です。例年①10~20羽が多磨霊園の上空で鷹柱を見せますが、今年はいままでになく35羽と多く観察されました。②観察される時間は殆んど午前中10時~11時頃です。日野高校→城山湖の通過時間「11時過ぎ」とも合致しているようです。③いままで多磨霊園でのルートは、北東から現れて鷹柱をつくり南西方向に向かうパターンが多く見られます。以上、参考になれば幸いです。」という回答を得た。

日野高校のものは、浅川の一番橋から多摩川合流区間のカワセミ会野鳥定期カウント中の観察で、担当の門口一雄会員から、「①11時05分頃 27羽、②11時07分頃 24羽、③11時11分頃 1羽、計52羽、①②とも日野高校対岸上流100m付近で、頭上に現れ鷹柱を作り上昇し、北東から西方面に飛び去る。③同上の場所で、南方向に飛び去る。」というコメントを得た。

これらの情報を総合すると、この日は神代植物公園⇒多磨霊園⇒多摩市⇒日野高校⇒城山湖を結ぶルートをサシバが飛行したものと推定される。

一方、カワセミ会会員で藤野野鳥の会の会員でもある門倉美登利から10月4日、藤野野鳥の会の観察会でもサシバを観察したという以下のメールが届いた。「10月4日は8時から10時25分まで藤野観察会がありました。観察会が終了し、城山湖のちょうど西側にある、相模原市緑区日連(ひづれ)の秋山川にかかっている秋川橋上空で、10時30分、サシバ15羽、ベテランの方の発見は、北北東⇒南南西へ飛去とのことでした。藤野では、今まであまり、渡りが見られなかったのですが、秋川橋上空で、タカ柱を作り、上昇し、南南西に飛び去る。藤野の観察会では、タカ柱を見たのは、初めての人が多かったので、皆で歓声をあげました」。藤野で観察されたサシバ15羽は10:10~10:19に北浅川圏央道で観察された38羽、遠矢堀公園で観察された30羽と位置関係、飛行方向、飛翔時間帯から大いに関係あるものと思われる。



(2) サシバのルートの探索

サシバの渡るルートはかなり解明されてきたが、まだまだ不明なところが沢山ある。天候というか気圧配置とどのような関係があり、それがサシバの渡るルートとどう結びつくかという視点からの検討が必要である。

カワセミ会は、1999年6月13日に関東地域のサシバ等のタカの渡りの調査に取り組んでいる団体・個人に呼び掛けて、八王子市北野市民センターで「鷹の渡りの謎を探る集い（サシバ調査グループ情報交換会）」を開催した。これを契機に「関東地域サシバ他鷹の渡り調査情報交換会」が立ち上がり、2007、2008年には東京大学農学部、2009年には立教大学で関東地域サシバ他鷹の渡り調査情報交換会を開催し、2010年に「第7回タカの渡り全国集会 in 関東」を立教大学で開催した。

関東地域では15以上の団体・個人が毎年サシバ等のタカの渡りの調査に取り組んでいる。調査により得られたデータはホームページで公開されているものもあるが、関東地域全体としてもまとめられたものは未だ存在していない。今後、関東地域サシバ他鷹の渡り調査情報交換会等を通じ相互の情報交換が加速することにより、渡りルートの解明に寄与することが期待される。

5. 今後の課題

(1) 観察体制の整備

継続は宝なりで、観察を今後も継続することが重要であるが、そのためには観察体制の整備が必要である。タカの渡りの観察は朝から午後までの長時間、精魂込めて空を見上げ、遠く、高く飛んでいる鳥を追跡してサシバあるいはハチクマかを見極める作業で、強靱な精神力と体力を必要とする。この観察に参加するカワセミ会会員は年々高齢化し、それを補うだけの若手の参加が追いついていない。今後はカワセミ会単独でなく、一緒にやっていただける方との合同観察や観察方法、結果等の情報の共有化を進める必要がある。前記のとおり、城山湖では地元（相模原市緑区等）の方々との観察で成果があがっている。今後は「日本野鳥の会東京」の会員などにも呼び掛けて観察体制と観察結果の共有化を検討する必要がある。

(2) サシバが繁殖する里山の復元

環境省レッドデータブックの見直し(2006年度)で、サシバは「絶滅危惧Ⅱ類」に位置づけられた。絶滅危惧Ⅱ類とは絶滅の危険が増大している種ということで、近年のサシバの減少傾向が危惧されているものと理解される。

サシバは田んぼと雑木林がセットになった里山と呼ばれる環境で営巣する。サシバが減少している最大の原因は、里山が開発の名のもとに工場団地、大学用地、住宅地、大規模墓地、産廃処分場等に転換されてしまったことによるが、里山として残った所でも里山環境である水田（谷戸田）が放棄され、谷

戸田の周りの雑木林に人の手が加わらなくなってしまったこともサシバ減少の原因の一つと指摘されている。

最近、放棄された谷戸田を復元する動きがみられるようになってきた。八王子でもいくつかの市民団体による取組みがある。カワセミ会の有志が中心になり一般市民にも呼びかけて 2010 年に八王子里山クラブを立ち上げ、小規模ながら谷戸の田んぼを復元して稲の不耕起栽培に取り組んでいる。小さな活動であるが、やがてサシバが繁殖できるような里山が各地に復元されることを願っている。

(3) 中継地の探索と春の渡り

渡り途中のねぐらや春の渡りについては殆ど知見がない。ねぐら地は渡り鳥の中継地である。渡り鳥の保護については繁殖地・越冬地だけでなく、途中に立ち寄る中継地を把握し中継地の保全にも目を向ける必要がある。八王子の丘陵や山間部がサシバの渡り時のねぐらになっているか、未だよくわかっていないので、この問題は今後の課題としたい。

また、春の渡りの観察については近年神奈川の観察グループが成果をあげているので、八王子でも調査をどのように進めるかの検討が必要である。

【 参考 】

第7回サシバ渡り全国集会の開催 2010年

渡り途中のサシバのカウントは全国で行われていて、お互いに情報交換が重要であることから、カワセミ会では「関東地域鷹の渡り情報交換会」の事務局を担当している。2010年には「タカの渡り全国ネットワーク」からの要請を受け、カワセミ会発足 25周年記念事業の一つとして「第7回サシバ渡り全国集会」を開催した。

この全国集会は、2010年12月4日に立教大学(東京池袋)で開催、全国から191名の仲間が参加、第1部の情報交流会のポスター出展は20団体であった。この全国集会の最大の成果は、主にサシバの渡りの観察に取り組んでいるグループ、主にサシバの営巣環境の保全に取り組んでグループが一堂に会し、同じ目線で相互交流ができたことと総括された。



城山湖のタカ仲間たち

毎年の秋のタカの渡りのシーズンとなると、この時期に決まって城山湖ダムサイトに集まって来る人々がいる。ここはサシバ等の渡り鳥の調査地として最適なスポットの一つであり、カワセミ会の会員、相模原市を中心とした地元の方々の集いの場となっている。カワセミ会のT氏が1997年9月にここを訪れた時に始まり、当初は休日のみでシーズン中10日程度の参加であったが、ここ6年、年金生活者となったこともあり、シーズン中ほぼ毎日のように出掛けるようになった。近年多い日には20名を超える観察者が訪れるがその内、長年にわたりこの時期に訪れる15名位の常連さんがいる。お互いに勝手に互いに城山湖の仲間と思っている。

この仲間が「タカ渡り調査」を協力しあってやっている。ベテランのNさん・Kさん・Nさん他、写真を撮り判定してくれるHさん・Tさん、遠い鳥を見つけてくれる特別目の良いKさん・Aさん、地域の自然や植物に詳しいKさん他、中には観光案内が得意なNさん、タカはそっちのけで一日中しゃべっている地元のGさん等々楽しい面々である。みんな実にいい人なのである。様々な情報交換の場所でもあり、城山湖の調査は誠に雰囲気がよく、この仲間と過ごすのが楽しく居心地が良いのだ。亡くなった人、病気で来られない人もいなくなったが、城山湖のタカ仲間たちは今後も元氣な楽しい仲間とお互いに会うことを楽しみにしている。

Ⅲ. カルガモ親子の調査

浅川の本支流、谷地川などではカルガモが繁殖している。巣は中州のような所の地上に作り、抱卵後孵化すると雛は直ちに巣から離れ親の後を追って歩いたり泳いだりして安全な場所へ移動して採餌する。早いものは5月上旬から、遅いものは7月下旬頃まで、河原や川の流れの中で数羽のヒナを連れた親子が観察される。

カワセミ会では、このカルガモの親子の数を1988年以降毎年カウントしている。

カワセミ会の浅川愛鳥カルタ
まんまるのヒナをたくさん引きつれて
子育て大変 カルガモかあさん

1. 調査場所、内容、方法

調査した区域と毎年の区域別調査担当者は下表の通りである。この表には各調査地区の担当者が記載されているが、この他にも多数の会員が調査に参加している。

カルガモは堤防から見えない所に営巣するが、孵化すると直後から雛を連れた親子連れが水面に現れるので、親子連れの組数と組毎の親と雛の羽数をカウントする。また、同じ時期に親子連れ以外の成鳥が観察されるので、これもカウント対象とする。調査場所（区域）と毎年の区域別調査担当者（抜粋）を下表に示す。

調査場所（区域）と毎年の区域別調査担当者（調査年は抜粋である）

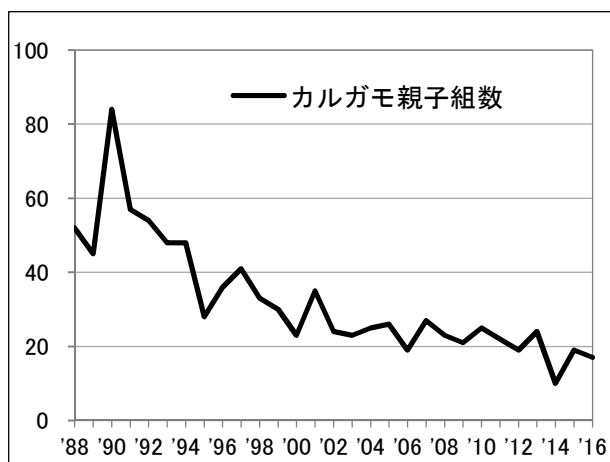
調査区域		開始年	2000年担当者	2005年担当者	2010年担当者	2015年担当者
北浅川	①松竹公園西～陵北大橋	1988	今井達郎	丸山二三夫	丸山二三夫	丸山二三夫
	②陵北大橋～松枝橋	1998	河村道寛	河村洋子	清水盛通	中村后子
浅川本流	③松枝橋～鶴巻橋	1998	福井司郎	山浦秀雄	山浦秀雄	山浦秀雄
	④鶴巻橋～大和田橋	1998	倉本修	倉本修	若狭誠	若狭誠
	⑤大和田橋～長沼橋	1998	新村哲也	佐藤哲郎	佐藤哲郎	佐藤哲郎
	⑥長沼橋～一番橋	1998	山崎悠一	山崎悠一	山崎悠一	山崎悠一
	⑦一番橋～多摩川合流	1998	門口一雄	門口一雄	門口一雄	門口一雄
川口川	⑧川口橋～明治橋	1998	鈴木章七	杉森ユリ	内藤公三	内藤公三
	⑨明治橋～浅川合流	1998	佐伯直寛	小澤礼子	小澤礼子	粕谷和夫
南浅川	⑩案内橋～敷島橋	1998	川上恚	川上恚	川上恚	川上恚
	⑪敷島橋～浅川合流	1998	小池一男	小池一男	小池一男	小池一男
⑫城山川(月夜峰新橋～浅川合流)		1998	木村晴美	木村晴美	木村晴美	木村晴美
⑬山田川(山田橋～浅川合流)		1998	平井国二	平井国二	浜野建男	浜野建男
湯殿川	⑭白旗橋～時田大橋	1998	三富恒雄	長谷川篤	長谷川篤	長谷川篤
	⑮時田大橋～浅川合流	1998	加藤岸男	加藤岸男	加藤岸男	門口一雄
⑯程久保川(小宮橋～浅川合流)		1995	青木繁昌	青木繁昌	佐藤サヨ子	佐藤サヨ子
⑰谷地川(月見橋～新左入橋)		1994	新田茂	井手龍世	浅野恵美子	浅野恵美子
⑱谷地川(新左入橋～田島橋)		1994	大川征治	大川征治	大川征治	福本健
⑲谷地川(田島橋～多摩川合流)		1994	木村信幸	傍島玲子	傍嶋玲子	傍嶋玲子
⑳大栗川(鎌水～大竹橋)		1994	—	木村信幸	—	工藤正子
㉑大栗川(大竹橋～横倉橋)		1994	—	木村信幸	廣川潔	廣川潔

2. 水系別のカルガモの親子連れ組数年次変化

次ページ表は親子の組数の年次変化である。浅川本流は1990年までは30組以上あったが、その後減少し、1999年以降は一桁になってしまった。

3. 浅川水系別のカルガモの親子連れ組数年次変化

浅川水系のカルガモ親子の組数の年次変化は以下のグラフの通りで、減少傾向が明瞭である。



水系別のカルガモ親子連れ組数の年次変化

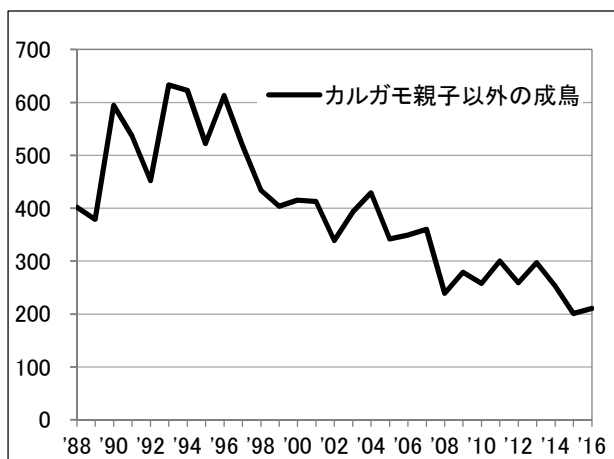
年次	北浅川	浅川本流	川口川	南浅川	城山川	山田川	湯殿川	浅川水系 合計	程久保川	谷地川	大栗川	合計
1988	2	30	13	2	0	1	4	52				
1989	0	18	7	6	9	1	4	45				
1990	2	36	15	11	9	1	10	84				
1991	2	22	10	5	5	1	12	57				
1992	3	24	5	4	6	1	11	54				
1993	4	19	5	5	7	1	7	48				
1994	5	18	9	6	4	1	5	48				
1995	4	10	1	4	3	0	6	28				
1996	5	9	5	8	3	0	6	36				
1997	2	13	3	6	10	0	7	41				
1998	0	14	2	3	8	1	5	33	7	6	5	51
1999	2	4	9	3	7	2	3	30	5	8	2	45
2000	2	9	4	3	4	1	0	23	4	3	3	33
2001	5	9	11	3	4	1	2	35	2	5	4	46
2002	4	3	3	4	4	0	6	24	1	3	6	34
2003	2	5	6	2	3	0	5	23	1	3	3	30
2004	2	6	5	2	2	4	4	25	2	6	2	35
2005	2	5	10	4	0	0	5	26	1	2	3	32
2006	1	5	5	2	1	0	5	19	0	1	1	21
2007	1	8	5	2	1	1	9	27	1	3	1	32
2008	0	7	8	2	0	1	5	23	5	3	2	33
2009	1	7	7	1	1	2	2	21	2	5	3	31
2010	3	9	6	2	1	1	3	25	0	3	3	31
2011	0	9	3	3	1	0	6	22	3	1	1	27
2012	1	5	4	1	2	3	3	19	1	2	2	24
2013	1	7	3	1	3	2	7	24	0	4	5	33
2014	1	4	0	1	1	1	2	10	0	1	2	13
2015	3	4	5	0	1	1	5	19	1	2	1	23
2016	2	5	3	2	0	1	4	17	3	3	6	29

4. 親と行動するヒナの数

カルガモは孵化直後のヒナの数も多く、カワセミ会の鳥信では16羽が最高の記録である。本調査の調査時点でのヒナの数は様々である。1988年から2016年までにカウントされたヒナの羽数の合計は5,012羽、親子連れの組数の合計は938組で平均するとヒナ数は5.3羽となる。

5. カルガモの親子以外の成鳥の数の年次変化

カルガモの親子を調査していると親子とは別に成鳥が観察される。これをカウントして年次別に整理したグラフが下図である。親子組数と同様に親子以外の成鳥も減少していることが明瞭である。



6. カルガモの繁殖環境の保全

カルガモが繁殖するためには、「①安全な営巣場所、②孵化したヒナの隠れ場所、③エサ場の確保」の全ての条件が満たされていることが必要である。そのような条件を満たす所として河川環境は最適であるが、川があればどこでも良いというわけではない。地上に営巣し、抱卵するため草に覆われた河原があること、孵化したヒナが天敵から身を守るための隠れ場所としての茂みのような所があること、草の実などのエサをとる場所があること等の条件をもった河川でなければならない。上表を見ると場所によって大きな差が認められるが、これは、上記のような環境の有る無しに度合いに連動していることと考えられる。浅川には幸いカルガモが繁殖できる環境が未だ残っているが、一方では画一的なコンクリート化ともいえる河川改修が年々進行している。山田川がその典型である。川口川、城山川、湯殿川などが第2の山田川にならないように切に望むところである。

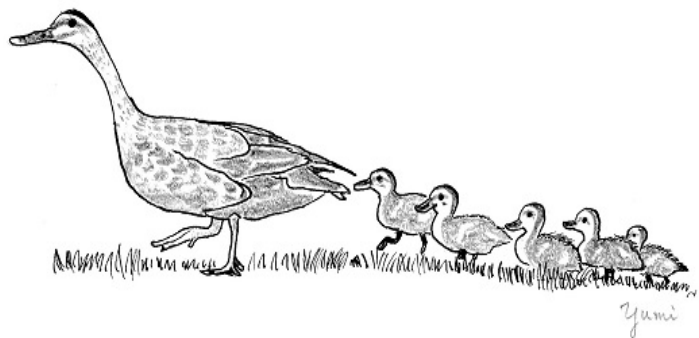
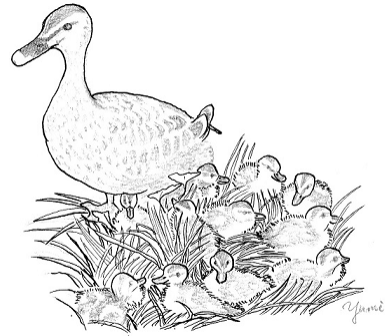
【参考】親カルガモが他の家族のヒナを殺した

親カルガモが他のカルガモの子を殺したケースが日野市内であった。以下は会員福本健からの報告である。

「2015年5月19日に日野駅前生協の前の日野用水にカルガモのヒナが18羽いると会員の浜田早苗からの連絡があり、その日のうちに見に行った。11羽を連れたカルガモ親子と7羽を連れた親子が狭い用水に少し離れていた。用水には陸地もなく、わずかに草が生えたところが一か所あるだけで、どこで寝たり休んだりするのか心配していた。7羽の方のヒナは5羽になり、3羽に減り、そのあとすぐにゼロになった。一方11羽のヒナは11羽のまま順調に成長したが、その後7羽にまで減った。大きくなって、寝るスペースもないのではないかと思っていたら、いつの間にか見かけなくなった。なぜ一方のヒナだけが減るのか不思議に思っていたが、その謎が解けた。ツバメの巣のある食堂で、店の鳥好きの奥さんと話していたら、奥さんのやはり鳥好きの友人が、11羽の方のカルガモの親が、もう一方の親がいないとき、ヒナを啜えて石にたたきつけているところを目撃したそうである。ヒナは水に浮き沈みしながら流れて行ったとのことであった。いやなものを見てしまったと悲しんでいたそうである」。

動物が「子殺し」をする例はいくつも知られている。サルやライオンは、新ボスが誕生すると旧ボスの子を殺し、メスに自分の子を産ませようとする。また、自分の子のエサを確保しようと競合相手の子を殺す例や、天敵襲撃に際して「他に食べられるよりは」と考えるのか、自分たちの子を食べてしまうミツバチの例などが報告されている。

ヒナ連れのカルガモが別の家族と思われるヒナを突いて殺した例は、都市鳥研究会の機関誌で報告された。2015年6月7日に宇都宮市の市街地にある公園の池で観察されたものである。高密度の池では親鳥のストレスが高まり他の雌のヒナを殺すことがあるとのことであった。



IV. ツバメの巣の調査

1. 八王子・日野市域のツバメの巣

カワセミ会は2001、2002年の2年間をかけて八王子市、日野市域の全域のツバメの巣調査を実施した。結果の概要は以下の通りであり、詳細は「数え上げた浅川流域の野鳥2」に掲載されている。

①幾つ巣があったか

八王子市で1,867巣、日野市で337巣、合計2,204巣を確認した。これは、調査年に利用された巣(抱卵、育雛、巣立ちが確認された巣)で、利用されなかった古巣は含まれていない。

②どこに巣があったか

丘陵地、山間地のように人が住んでない所を除けばほぼ全面、どこにも巣があることが認められた。しかし、その中でも巣の密度が高い所とそうでない所があることも認められ、川口川沿い及び北浅川沿いの所に特に多く、次いで南浅川、湯殿川、大栗川沿いのように川沿いの所が多かった。また、甲州街道沿いや滝山街道沿いのような街道沿いも多かった。川沿いや街道沿いでない所では、八王子市北野台の住宅団地に集中していたことが特異的であった。

③どのような建物に巣を作るか

店舗556、事務所160、車庫197、作業所90、住宅1,094、その他159で、住宅が最も多く全体の半数近くを占めていた。車庫197も殆どが住宅に併設されているもので、これも住宅に含めるとその割合はもっと高くなる。その他は学校、保育園、病院・診療所、ホール・会館、老人ホーム、消防署、警察署、公衆トイレ等で公共的な建物が多く、中でも学校や病院・診療所が多く利用されていた。

④巣は何階にあるか

建物の1階に巣を作るものが圧倒的に多く84%を占め、次いで2階が13%、6階以上は1巣だけ、地階が3巣あった。建物の中の巣の位置は記録しなかったが、最も多かった住宅の場合は殆どが玄関であった。

⑤一つの建物に巣は幾つあるか

一つの建物に巣1個が最も多く80%、次いで2巣が15%となった。一方で同一の建物に5巣以上というのも23件あった。

⑥巣立ち割合

抱卵が確認されても、それ以降ヒナが巣立つまでの間にカラス等に破壊されたり、他から破壊されなくても放棄してしまう巣がある。本調査では2,204巣のうち、1,659巣について抱卵以降の動向をつかむことができた。その結果1,267巣の巣立

ちを確認した。抱卵を確認した1,659巣のうちの巣立ちに成功した巣の割合は76%である。

⑦平均の巣立ち雛数

巣立ちが確認された1,267巣のうち、590巣について巣立ち雛の羽数を確認することができた。1巣当りの巣立ちヒナ数は4羽が最も多く、平均巣立ちヒナ数は4.1羽であった。1巣当りの巣立ちヒナの多いところは、8羽巣立ちが1巣、7羽巣立ちが2巣あった。

⑧巣立ちの時期

巣立ちが確認できた巣のうち、488巣について巣立った月日が記録された。最も早い巣立ちは5月上旬、最も遅い巣立ちは8月下旬で4ヶ月間が巣立ち期間であることが判明した。

2. 八王子駅周辺3km四方ツバメの巣調査

JR八王子駅を基点とし、ここから東西及び南北に1.5km(延長3km)の線を引き結ばれた3km四方(9km²)の正方形の区域を調査範囲としてツバメの巣の調査を行っている。この調査はツバメの巣の経年変化を調べることが目的で2001年に開始し、2006、2011年と5年おきに実施している。

(1) 調査の実施時期、調査方法、調査頻度、調査対象の巣の定義

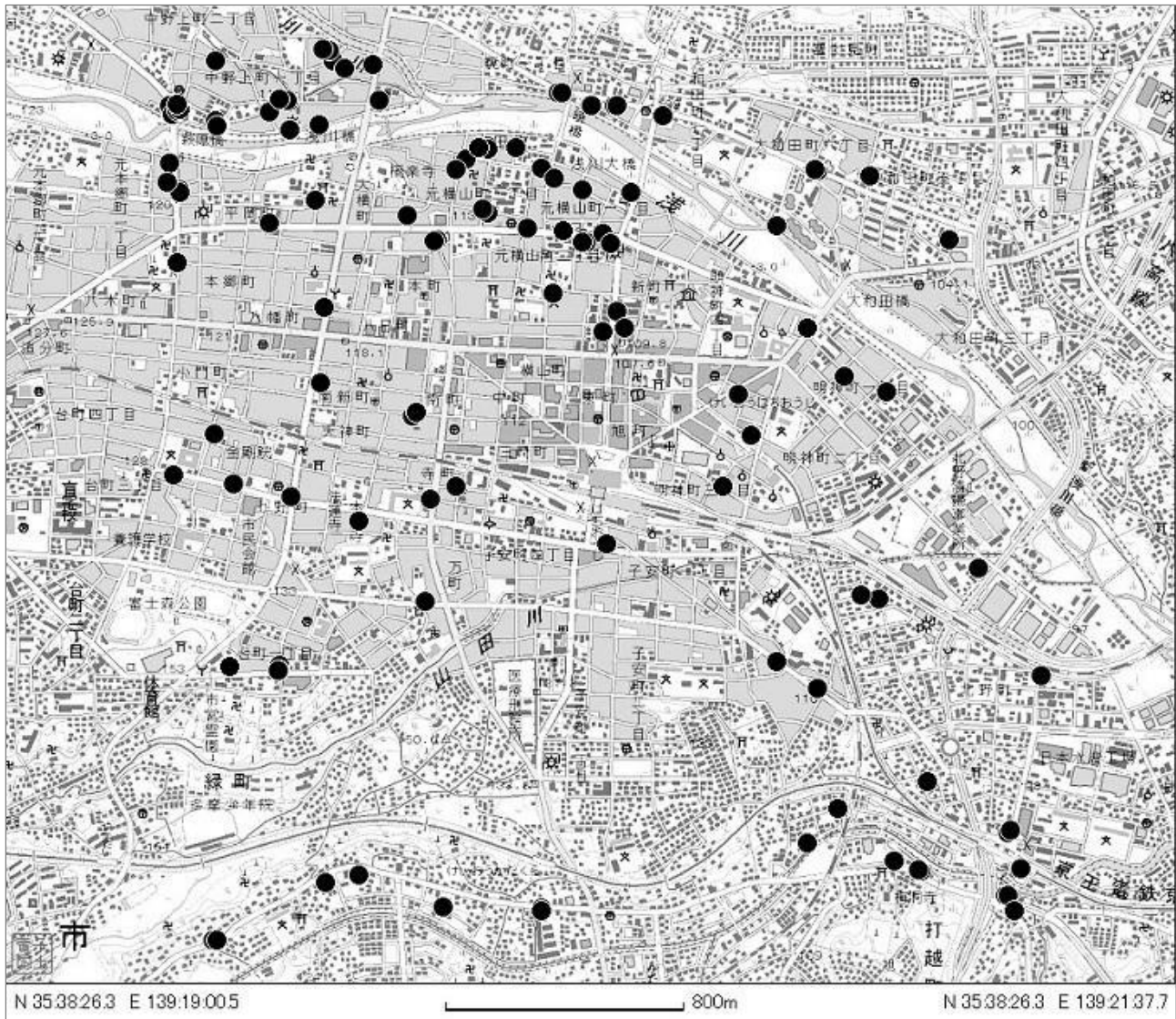
調査はカワセミ会の会員が巣を探し、見つけた巣の視認調査、大家さんからの聞き取り調査を行った。
【注:「大家さん」とは、巣が住宅にあった場合、その巣がある家に住まわれている住人をいう】ツバメの営巣行動は巣作り、巣の修復、巣への出入り、抱卵、給餌、巣立ち、途中放棄等刻々と変わるので、できる限り何回も踏査するようにつとめたが、調査頻度は調査する会員の事情により異なり一様ではない。

利用していない古巣や巣への親の出入りがあっても途中で放棄してしまうものがあるので、この調査では抱卵以降の行動が確認されたものを「本年利用した巣」として調査カウントの対象とした。したがって利用していない古巣や造巣を始めても抱卵に至るまでに破壊、又は放棄された巣は調査カウントの対象にしていない。

(2) 見つかった巣の数(2011年)

2011年にツバメが利用した巣の数は131であった。結果は次ページの通りである。この図でわかるとおり浅川、川口川、山田川、湯殿川など川の直ぐ近くに巣が多く分布していることが明瞭である。育雛のための餌場として川が重要な役割を果たしているものと推定される。

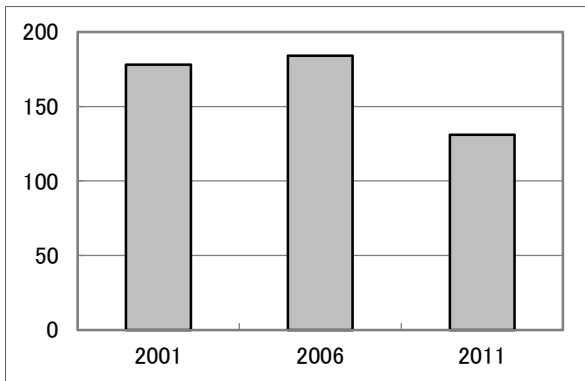
2011年に確認したツバメの巣の位置



(3) 巣の数の経年変化

2001年からの推移を見ると下図のとおりで、2011年は5年前と比べて約30%の減少であった。

ツバメ巣数の年次変化



3. 鉄道駅のツバメの巣調査

都市鳥研究会は2013年に関東一都六県内にある2,496ヶ所の鉄道駅を対象にツバメの巣の調査を行った。カワセミ会では、八王子市・日野市にある全ての鉄道駅と道の駅を対象にこの調査に参加した。

(1) 調査した駅と調査参加者、調査回数

調査した駅は鉄道駅35、道の駅1で、調査回数の合計は156回、1駅当りの平均は4.5回であった。最も回数が多かったのは志村進によるめじろ台駅の26回であった。1回だけの駅は6駅、2回は5駅であった。

2013年駅のツバメ巣調査の参加者

①八王子市 24駅

	駅名	調査参加者	調査回数
1	JR高尾駅	川上憲	1
2	京王高尾駅	角田幸男	4
3	JR八王子駅	浜野建男、粕谷和夫	5
4	北野駅	渡辺正樹	1
5	京王堀之内駅	登坂久雄、粕谷和夫	2
6	小宮駅	神谷古牧、傍島玲子	6
7	長沼駅	門口一雄、丸山二三夫	8
8	西八王子駅	浜野建男	2
9	八王子みなみ野駅	粕谷和夫、渡辺正樹	2
10	めじろ台駅	志村進	26
11	中央大学・明星大学駅	佐藤サヨ子	4
12	北八王子駅	門口一雄、関根伸一	5
13	高尾山口駅	粕谷和夫、福本順吉	8
14	松が谷駅	佐藤サヨ子	4
15	JR片倉駅	門口一雄	7
16	京王片倉駅	安室厚子、粕谷和夫	3
17	京王八王子駅	若狭誠	2
18	山田駅	安室厚子、粕谷和夫	3
19	大塚・帝京大学駅	下重喜代	4
20	狭間駅	横山由美子	3
21	南大沢駅	矢崎恵美子、粕谷和夫、倉本修	4
22	清滝駅	粕谷和夫、加藤岸男	8
23	ケーブル高尾山上駅	粕谷和夫、加藤岸男	5
24	リフト高尾山上駅	粕谷和夫、加藤岸男	3

②日野市 11駅

	駅名	調査参加者	調査回数
1	高幡不動駅	渡辺敬明	6
2	京王多摩動物公園駅	渡辺敬明	1
3	モノレール多摩動物公園駅	渡辺敬明	1
4	日野駅	福本健	2
5	豊田駅	福本健	2
6	南平駅	門口一雄、金子凱彦	6
7	百草園駅	渡辺敬明	1
8	程久保駅	渡辺敬明	1
9	万願寺駅	福本健	5
10	平山城址公園駅	武藤邦子、金子凱彦	7
11	甲州街道駅	福本健	2

③八王子市 道の駅 1駅

	駅名	調査参加者	調査回数
1	道の駅八王子滝山	若狭誠	2

(2) 調査した場所 (範囲)

調査した場所は駅舎で、改札口を含む連続的な建物を駅舎とみなし、明らかに駅の施設の一部と見なせる建造物は駅舎に含めた。たとえ駅前であっても、駅舎ではない建物のツバメの巣は含めず、駅舎と連続している高架下のツバメの巣は、駅に近い場合は含めた。

(3) 調査時期 (期間)

調査時期は 2013 年のツバメの繁殖シーズン盛期 (4月～8月)。調査方法はシーズンを通じた繁殖巣の有無を確認のため、繁殖前期 (4月～6月上旬) に最低 2 回、後期 (6月中旬～8月) に最低 2 回の調査を行うこととした。

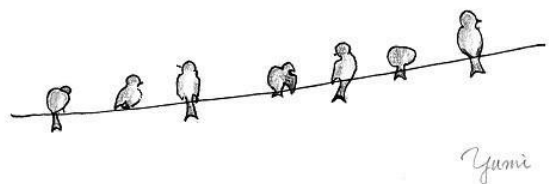
(4) 調査結果

ツバメ、イワツバメ、ヒメアマツバメの利用が確認された。その他、高尾山口駅ではイワツバメの古巣をスズメが営巣に利用した例もあった。

①ツバメの利用状況

2013年に利用した巣は 12 駅、巣有りだが古巣だけは 3 駅、巣無しは 21 駅で、36 駅全体に占める利用 12 駅は 33%であった。ツバメの巣は古巣を含め全体で 66 巣あり、うち 2013 年に利用された巣は 36 巣であった。巣が最も多かったのは高尾山ケーブルカー清滝駅 10 巣、次いで京王線高幡不動駅の 8 巣であった。清滝駅は古巣を含めた巣数は 26 巣、実際には 10 巣以上あったと思われるが観察回数が少ないため、刻々と変わる巣の利用状況の記録が困難で、少なくとも 10 巣は利用していたという意味である。巣の下はケーブルカーの乗降客で混雑していて、糞除けがあちこちに付けられていた。

(注：利用された巣とは抱卵の段階以上の経過が観察された巣をいう)



ツバメの巣の駅別調査結果

駅名	巣有り で利用	巣有り だが古 巣だけ	巣無し	古巣を 含め壊 れてい ない巣 の全数	今年利 用して いる(し てい た)巣 の数	今年利 用して いない(し なかつ た)古巣 の数
				A+B	A	B
JR高尾駅		●		2		2
京王高尾駅			●			
JR八王子駅			●			
北野駅	●			1	1	
京王堀之内駅			●			
八高線小宮駅			●			
長沼駅		●		1		1
西八王子駅			●			
八王子みなみ野駅	●			5	1	4
めじろ台駅	●			1	1	
中央大学・明星大学			●			
北八王子駅			●			
高尾山口駅	●			4	4	
松が谷駅			●			
JR片倉駅			●			
京王片倉駅			●			
京王八王子駅			●			
山田駅			●			
大塚・帝京大学駅			●			
狭間駅	●			1	1	
南大沢駅	●			1	1	
清滝駅	●			26	10	16
ケーブル高尾山上駅	●			3	1	2
リフト高尾山上駅			●			
高幡不動駅	●			10	8	2
京王多摩動物公園駅			●			
モノレール 多摩動物公園駅			●			
日野駅			●			
豊田駅			●			
南平駅	●			1	1	
百草園駅			●			
程久保駅			●			
万願寺駅		●		1		1
平山城址公園駅	●			6	4	2
甲州街道駅			●			
道の駅八王子滝山	●			3	3	
計 36駅	12	3	21	66	36	30

②イワツバメ、ヒメアマツバメの利用

イワツバメの巣があった駅は6駅で、うち5駅で2013年の営巣利用があった。

ヒメアマツバメの巣があった駅は4駅で、2013年の営巣利用は長沼駅以外は不明であるが、これは利用している巣の数のカウントが難しいため、実際は営巣利用していると推定される。

イワツバメの巣があった駅

駅名	古巣を含め壊 れていない巣 の全数	今年利用して いる(してい た)巣の数	今年利用して いない(しな かった)古巣 の数
	A+B	A	B
京王高尾駅	20	9	11
JR八王子駅	108	54	54
北野駅	35	無し	35
長沼駅	12	9	3
高尾山口駅	96	4	92
JR片倉駅	5	4	1

ヒメアマツバメの巣があった駅

駅名	古巣を含め壊 れていない巣 の全数	今年利用して いる(してい た)巣の数	今年利用して いない(しな かった)古巣 の数
	A+B	A	B
JR八王子駅	不明	不明	
京王堀之内駅	4	不明	
長沼駅	9	5	4
高尾山口駅	1	不明	

③ツバメが駅に営巣しない理由の推測

駅にツバメが巣を作らない理由について、調査担当者から以下のような推測が寄せられた。最も多かった理由は、「駅の壁がつるつるでツバメが巣を作る場所がない」であった。小宮駅＝(神谷古牧)「カワラバト(ドバト)が寄り付かないような対策が施されているので、居心地が悪いのではないか。また、そもそもこの周辺で見かけるツバメの数が少ない」。程久保駅、多摩動物園駅＝(渡辺敬明)「駅周辺はツバメが生息するような自然環境でない」「駅周辺にカラスが多い」。程久保駅＝(同)「駅に人の動きが少ない」。程久保、多摩動物園駅、百草園駅＝(同)「駅舎の壁がつるつるでツバメが巣を作る場所がない。日野駅＝(福本健)「駅にツバメが自由に入出入りする空間がない。駅舎の屋根自体が昔風の作りで他と比べても軒が低い。屋根の下に大きな配管等が張り巡らされており、巣をかけにくい。ツバメが入出入りするには人の頭をかすめるようで、出入りにくいのでは」。万願寺駅＝(同)「駅舎の壁がつるつるでツバメが巣を作る場所がない」。豊田駅＝(同)「駅にツバメが自由に入出入りする空間がない。ハト対策で、階段や天井にネットが張り巡らされており、また至る所に鳥よけ対策がされており、ツバメが入れない」。甲州街道駅＝(同)「駅舎の壁がつるつるでツバメが巣を作る場所がない」。大塚・帝京大学駅＝(下重喜代)「駅周辺はツバメが生息するような自然環境でない。駅に人の動きが少ない。駅は交通量が多い交差点にあり、その上、周囲より低地となっているので、空気が常によどんでいるので、ツバメにとって子育てできる環境ではない気がする」。京王八王子駅＝(若狭誠)「駅にツバメが自由に入出入りする空間がない。駅舎の壁がつるつるでツバメが巣を作る場所がない」。松が谷駅、中央大学・明星大学駅＝(佐藤サヨ子)「駅の壁がつるつるでツバメが巣を作る場所がない」。JR高尾駅＝(川上恚)「JR高尾駅北口は、乗降客が多く、糞落ちを嫌った駅側が、糞除けのため約30cm幅の板が随所にとりつけられ、これを嫌ったかツバメが営巣しなかった」。京王山田駅、京王片倉駅＝(粕谷和夫)「駅の壁がつるつるでツバメが巣を作る場所がない」。

④関東地域全体との関係

2013年に都市鳥研究会ではカワセミ会会員の渡辺仁が中心になって関東地域1,757駅（+地下鉄数駅）でツバメ他の営巣状況調査を行い、185名の参加者から2,375件の回答を得た（1,757駅の中には八王子日野の35駅が含まれる）。その結果、ツバメの営巣の報告があったのは274駅（15.6%）、営巣していないが古巣ありの報告は67駅（3.8%）だった。

ツバメの営巣率15.6%に対し八王子日野地域は33%と2倍の営巣率が記録された。関東全域の中では八王子日野地域の鉄道駅はツバメが営巣している駅の割合が高いことが証明された。

4. JR 中央線・京王線主要駅ツバメ等の巣の調査

日本野鳥の会東京が行う2014年中央線の駅とその周辺を対象としたツバメの巣の調査にカワセミ会は、八王子市・日野市にある中央線駅（日野、豊田、八王子、西八王子、高尾）で参加する他、高幡不動駅、百草園駅、高尾山口駅、清滝駅を含めてこの調査を行った。

（1）調査した場所（範囲）

調査した場所は駅舎とその周辺おおよそ300mの範囲とした。

（2）調査時期（期間）と調査回数

調査時期は、2014年のツバメの繁殖シーズン盛期（4月～8月）。シーズンを通じた繁殖巣の有無を確認のため、繁殖前期（4月～6月上旬）に最低2回・後期（7月～8月）に最低2回の調査を行った。可能な限り毎月2回以上の調査を行った。

（3）対象のツバメ類

ツバメ、イワツバメ、コシアカツバメ、ヒメアマツバメの4種とした。

（4）担当者（括弧内は協力者）

JR 日野駅：福本健（青木昭子、浜田早苗、細田富美代、金子凱彦）

JR 豊田駅：福本健（青木昭子、浜田早苗、細田富美代、金子凱彦）

JR 八王子駅：浜野建男（粕谷和夫、若狭誠）

JR 西八王子：浜野建男（粕谷和夫）

JR 京王高尾駅：川上恚（角田幸男、福本順吉）

京王高幡不動駅：渡辺敬明

京王百草園駅：門口一雄、渡辺敬明

京王高尾山口駅：粕谷和夫

清滝駅：粕谷和夫

（5）調査内容

①駅の基本調査

ホームの数、改札口の箇所数と名称（例示：南口）

②種別の巣（古巣、使用中の巣）の数

駅舎（改札を含む駅構内とその建物の外側）と駅外で300m範囲に分けて調査する。

「古巣」とは、前年まで使っていたが2014年は使用していない巣をいう。

「使用中の巣」とは、2014年に抱卵段階以上までが確認された巣をいう。造巣中の巣は含まない。

なお、ヒメアマツバメは「ねぐらとしての巣」と「子育てのための巣」の区別が困難であるので、「ねぐらとしての巣」をもって「巣数」とした。イワツバメの巣は古巣と使用中の巣の判別が難しいので、観察を基本とした概数とした。

③巣の位置のマッピング

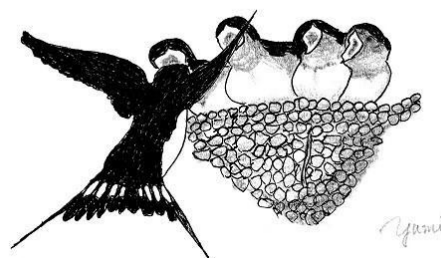
千分の1地図に巣の位置をマッピングした。

④観察事項のメモ

ヒナの数、巣立ち時期などの調査は必須としないが、ツバメの行動、天敵の行動、人の行動、その他の観察事項をその都度、特記事項としてメモする。聞き取りによる内容も特記した。

（6）調査結果

結果は次ページの表のとおりであった。



2014年 JR中央線・京王線主要駅ツバメ等の巣の調査結果

		古巣		使用中の巣		メモ
		駅舎	駅周辺	駅舎	駅周辺	
JR日野駅	ツバメ	0	2	0	23	5月7日、5月23日、6月14日、7月14日、8月8日、その他随時
	イワツバメ	0	0	0	0	
	コシアカツバメ	0	0	0	0	
	ヒメアマツバメ	0	0	0	0	
京王 百草園駅	ツバメ	0	6	0	14	4月28日、5月19日、6月4日、6月8日、7月3日、7月14日
	イワツバメ	0	0	0	0	
	コシアカツバメ	0	1	0	4	
	ヒメアマツバメ	0	0	0	0	
JR豊田駅	ツバメ	0	3	1	13	5月7日、6月2日、6月14日、7月29日、8月12日、その他数日
	イワツバメ	0	0	0	0	
	コシアカツバメ	0	0	0	0	
	ヒメアマツバメ	0	0	0	0	
京王 高幡不動駅	ツバメ	0	2	0	14	4月28日、5月19日、6月23日、7月14日、その他多数回
	イワツバメ	0	0	0	0	
	コシアカツバメ	0	0	0	0	
	ヒメアマツバメ	0	0	0	0	
JR八王子駅	ツバメ	0	0	0	0	5月24日、7月16日
	イワツバメ	86	0	30	0	
	コシアカツバメ	0	0	0	0	
	ヒメアマツバメ	13	0	?	?	
JR西八王子駅	ツバメ	0	1	0	2	5月24日、6月3日、7月16日、5月24日、6月3日、7月16日
	イワツバメ	0	15	0	0	
	コシアカツバメ	0	0	0	0	
	ヒメアマツバメ	0	0	0	0	
JR・京王 高尾駅	ツバメ	2	12	0	10	5月6日、5月22日、6月15日
	イワツバメ	0	0	10	20	
	コシアカツバメ	0	0	0	0	
	ヒメアマツバメ	1	0	0	0	
京王 高尾山口駅	ツバメ	4	0	1	1	5月7日、5月19日、5月26日、6月24日、7月22日
	イワツバメ	40	0	3	0	
	コシアカツバメ	0	0	0	0	
	ヒメアマツバメ	2	0	0	0	
高尾登山電鉄 清滝駅	ツバメ	25	0	9	0	5月7日、5月19日、5月26日、5月30日、6月24日、7月22日
	イワツバメ	0	0	0	0	
	コシアカツバメ	0	0	0	0	
	ヒメアマツバメ	0	0	0	0	
計	ツバメ	31	26	11	77	5月7日、5月19日、5月26日、5月30日、6月24日、7月22日
	イワツバメ	126	15	43	20	
	コシアカツバメ	0	1	0	4	
	ヒメアマツバメ	16	0	0	0	

ツバメの巣が駅舎にあったのは、豊田駅 1 巣と清滝駅 9 巣だけであり、清滝駅の多さが特筆される。ツバメの巣は駅周辺に 77 巣あった。日野駅 23 巣、百草園駅 14 巣、豊田駅 13 巣、高幡不動駅 14 巣と日野市内の駅周辺に特に多かった。

イワツバメは JR 八王子駅と JR・京王高尾駅の駅舎に多く、JR・京王高尾駅では周辺のマンションでの営巣も目立った。

コシアカツバメは百草園駅の周辺で 4 巣が確認された。ヒメアマツバメは JR 八王子駅、JR・京王高尾駅、高尾山口駅の駅舎で古巣が確認されたが、利用中の巣は JR 八王子駅だけであった。JR 八王子駅の巣数が?となっているのは、駅構内の立入禁止の区域のためカウントができないことによるものである。

5. 日野市の駅のツバメの巣調査

2014年に八王子市・日野市にある鉄道駅とその周辺を対象としたツバメの巣の調査を行い、2015年は日野市内の二つの駅で調査を行った。

(1) 調査した場所 (範囲)

調査した場所は日野駅と豊田駅の駅舎とその周辺おおよそ300mの範囲とした。実際には駅舎の営巣は豊田駅南口階段下の1巣だけで、他は全て駅の周辺であった。

(2) 調査時期 (期間) と調査回数

2015年5月上旬から6月下旬の間に各巣2~4回調査を行った。

(3) 対象種

ツバメ、イワツバメ、コシアカツバメ、ヒメアマツバメの4種としたが、実際に営巣が確認できたのはツバメだけであった。

(4) 担当者 (括弧内は協力者)

- JR 日野駅：福本健 (玉木雅治、浜田早苗、細田富美代)
- JR 豊田駅：玉木雅治 (福本健)

(5) 調査内容

①種別の巣 (古巣、使用中の巣) の数

「古巣」とは、前年まで使っていたが調査年は使用しなかった巣をいい、このような古巣をカウントした。

「使用した巣」とは、調査年に抱卵段階以降までの営巣活動が確認された巣をいい、このような巣をカウントした。したがって造巣中の巣でこの段階で放棄されて巣は含んでいない。

②巣の位置のマッピング

住宅地図 (千分の1) に巣の位置をマッピングした。

③観察事項のメモ

造巣、親の巣への出入り、抱卵の有無、巣中の雛への給餌、巣立ちの有無などのツバメの行動、天敵の行動、人の行動、その他の観察事項をその都度、わかる範囲で特記事項としてメモした。聞き取りによる内容も特記した。

(6) 調査結果

結果は次表のとおりであり2014年より2巣増加した。日野駅周辺26巣中、住宅は1巣、集合住宅は1巣で他の24巣は商店、医院、自動車整備場、

事務所等であった。豊田駅周辺15巣中、集合住宅は1巣で他の14巣は商店、医院等であった。豊田駅15巣中、6巣は外から見えない所に巣があった。天敵のカラス対策と思われる。日野駅周辺26巣中、1巣が抱卵後に人によって取り除かれた。

なお、日野駅周辺26巣中、同一建物に2巣あったものが3件、3巣あったものが1件あり、巣のあった建物数は21件であった。

日野駅、豊田駅周辺のツバメの巣

	2015		(参考)2014	
	古巣	使用した巣	古巣	使用した巣
日野駅舎	0	0	0	0
日野駅周辺	6	26	2	25
豊田駅舎	0	1	0	1
豊田駅周辺	4	14	3	13
計	10	41	5	39

6. 旧由井中学校区のツバメの巣調査

(1) 趣旨

金井郁夫氏が昭和28-29年(1953-1954)に由井中学の教諭時代に同校区でツバメの営巣調査を行い、貴重な記録を残しているの、62年後の2015年に同じ区域の調査を行って比較検討する。その際に2001-2002年にカワセミ会が行った調査結果も比較対象に加える。

なお、本調査はカワセミ会発足30年記念事業の一環として取組んだ。

(2) 調査範囲と担当者

調査範囲は旧由井地区とし、地区内の担当者は以下のとおりである(並べ順は昭和31年10月1日発行、八王子市広報の掲載順番を引用)。

- 旧小比企村 粕谷和夫
- 旧片倉村 門口一雄
- 旧宇津貫村 勝股朗郎
- 旧北野村 渡辺正樹
- 旧打越村 山崎悠一
- 旧長沼村 浜野建男



(3) 調査期間

調査期間は2015年4月～8月とした。実際の調査期間は4月20日～7月24日の間であった。

(4) 調査対象の巣

「2015年に利用したツバメの巣」を調査対象とした。したがって2014年までの古巣は調査対象としなかった。「2015年に利用したツバメの巣」とは、2015年に巣作り(古巣の補修を含む)が終わり、「抱卵」又は「巣内の雛への給餌」又は「巣立が確認された巣」とした。したがって、巣作りの途中で放棄した巣は含めないが、「抱卵」以降の段階で放棄したものは調査対象に含めた。(2014年までの巣で使われてなかった古巣は、参考として記録したが、集計からははずした)

(5) 調査項目

調査項目は以下とした。

- * 営巣地の町名、番地等
- * 巣のある建物の名称(巣の大家さんの名称)、種類、階数、1建物中の巣数、巣が外から見えるか否か
- * 状況(抱卵中、親が巣に出入り、雛有、空き巣等)
- * 巣立ち月日と巣立ち雛数(必須ではないが、大家さんからの聞き取り等で分る範囲で調査。)

(6) 調査方法、調査頻度

担当者が巣のある現場に出向き、視認調査、聞き取り調査を行った。調査頻度は特に決めないが、1週間に1回ぐらいをベストとし、現実には都合のつく範囲で行った。最も多かったのは19回で、1回だけでもあったが、3～5回が多かった。

5月下旬と6月下旬に一斉調査日を設け、カワセミ会会員に参加を呼びかけた。その結果、玉木雅治(片倉)、武藤邦子(宇津貫、長沼)、山崎久美子(打越)、浜野知恵子(長沼)、福本健(長沼)、工藤正子(長沼)の各会員が調査に参加した。

(7) 調査結果

① 2015年の巣の数

68巣が記録された。内訳は旧小比企村9、旧片倉村14、旧宇津貫村8、旧北野村7、旧打越村6、旧長沼村24で旧長沼村が最も多かった。

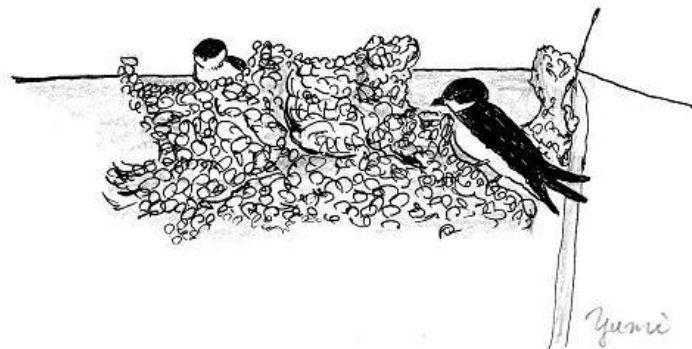
② 過去の記録との比較

過去の記録との比較は下表の通りで62年前と比べると減少の幅が少ないが、15年前と比べると、この15年間で旧長沼村以外は約3分の1に減少した。

旧由井中学校区のツバメの巣数経年変化

	2015	2001又は 2002	1953 (金井)	1954 (金井)
旧小比企村	9	64		
旧片倉村	14	54		
旧宇津貫村	7	16		
旧北野村	8	26		
旧打越村	6	20		
旧長沼村	24	23		
計	68	203	91	88

注：1) 巣の数は調査年に使われた巣数で古巣は含まない。
2) 同一巣で1番子、2番子がある場合は2巣として計上している。



V. イワツバメ営巣の調査

1. イワツバメはどこに営巣するか

イワツバメはもともと浅川流域にいたものではなく、昭和の初め頃、長野県から害虫駆除の目的で、人為的に多摩地方に移されたものの子孫が定着し、浅川流域に分布を広げてきたものといわれている。浅川流域では山間部に巣を作らず、すべて平野部で営巣する。

イワツバメは吹き抜け構造になっているコンクリート構造物を好んで営巣する。道路橋、高架道路、高架鉄道等がその典型例である。平野部にはこのような構造物が多く、橋の付け替えによるコンクリート橋化や増設、道路・鉄道の立体化が進み、イワツバメの営巣場所が広がっている。このような建築が続く限り今後もイワツバメの進出が続くともと思われる。

八王子、日野市内ではツバメ、イワツバメ、コシアカツバメの3種のツバメの仲間が営巣している。全てが夏鳥で、秋になると南の国へ帰り越冬し、春になると繁殖のために戻ってくる。

ツバメは人の生活している所を自由に飛び交い、人家の軒下などでヒナを育てるので、昔から日本人に親しまれてきた鳥である。これに対し、イワツバメは岩燕の名で分るように本来は山や海岸の断崖に数十個から数百個の巣を集団で作って子育てする鳥である。このような集団営巣地をコロニーという。ツバメと違ってノドは赤くなく、下面は全部白、尾羽も尖っていない。またツバメより少し小型で飛んでいる時、腰の部分が白く見える。

近年、このイワツバメが急速に都市に進出してきている。よく注意してみると、都市の中でツバメの営巣する場所、営巣の仕方とイワツバメの営巣する場所、仕方は微妙に違っている。ツバメは1~2階建の住宅や駅前の商店街などの1軒1軒の軒下に単独で巣を作るのに対し、イワツバメは橋、学校、マンション、駅、消防署、工場といった比較的大きな建造物に集団で営巣する。

コシアカツバメは、数が少なく営巣地も日野市内の数ヶ所に限定されている。

2. イワツバメの調査方法

近年、コンクリート構造物の増加に比例してイワツバメの都市への進出が増加しているといわれているので、カワセミ会では八王子、日野市内のイワツバメの営巣の動向を調べている。1987年から毎年営巣地と巣の数の調査を実施し、2015年で29年目となった。

調査は浅川本支流、谷地川、大栗川を幾つかの区域に分けて、区域毎に調査担当者を決め、5月から7月の間に2~3回の現地観察によって行うものである。調査の内容は調査年に利用している巣の数をカウントするものとし、前年までの古巣で使っていないものはカウント外、当年に利用しているものの厳密な判定が困難なところは、巣の利用状況を観察して古巣か利用中の巣かを推定する。あわせて営巣に利用している建物の種別を記録する。ツバメの巣調査のような抱卵状況、巣立ち状況の調査は、イワツバメの巣の中が観察できないので行っていない。

3. コロニー(集団営巣地)の場所と営巣数

イワツバメは集団で営巣する(ただし、集団とはいえない1巣、2巣のところも少数ながらある)。このような集団営巣地はコロニーと呼ばれる。コロニーが形成される場所と規模は年とともに変化することが2015年までの調査で明らかになった。数ヶ所のイワツバメの巣はヒメアマツバメがねぐら及び繁殖に利用していることも観察されている。

(1) 営巣する構造物

2015年までに確認された営巣箇所は下表のとおり105ヶ所である。殆どがコンクリート構造物であることが明瞭である。コンクリート道路橋下(B)とコンクリート鉄道高架下(C)は吹き抜け構造になっていて、両者を合わせると63%を占める。

巣のある場所の構造物別の割合

構造	コンクリート 建物(A)	コンクリート 道路橋下(B)	コンクリート 鉄道高架下(C)	その他 (D)	計
実数	41	50	11	2	105
割合	39%	48%	15%	2%	100%

(2) コロニーの規模と分布

100 巣以上の規模のものは浅川の浅川大橋、浅川
の一番橋、JR 八王子駅構内の 3 ヶ所だけである。
50 巣以上の中規模のものは浅川の大和田橋、京王高
尾山口駅の高架下の 2 ヶ所だけで、両者合わせて 5
ヶ所に過ぎない。

残りの 100 ヶ所は全て 50 巣未満である。八王子、
日野地域では規模の小さいコロニーが浅川本支流の
流域、谷地川流域、大栗川流域と広い範囲に分散し
ていることが明らかになった。

イワツバメ場所別営巣数（欠年次は省略） 単位：巣数(X：人による破壊、－：未調査)

浅川の流域(1/2)	建物 区分	メッシュNo	'87	'88	'89	'90	'00	'01	'02	'10	'11	'12	'13	'14	'15
北浅川(恩方第1小学校)	A	八王子0K	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	15	6
東京天使病院	A	拝島2B	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
繊維工業団地(下恩方)	A	拝島0A	-	-	-	-	-	-	-	8	0	0	3	4	0
松枝住宅	A	拝島3B	-	-	X	3	0	0	0	0	0	0	0	1	0
北浅川中央高速道橋	B	拝島4A	17	30	34	14	14	2	6	0	0	0	0	0	0
市立第2中学校	A	拝島5A	-	16	2	X	0	0	0	0	0	0	0	0	0
北浅川計			17	46	36	17	14	2	6	8	0	0	3	20	8
萩原橋	B	八王子6K	0	2	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
浅川浅川橋	B	八王子6K	0	-	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	2
浅川暁橋	B	八王子7K	0	14	42	35	0	0	0	0	0	0	1	3	11
浅川浅川大橋	B	八王子7K	0	0	0	6	0	0	12	102	116	111	115	116	101
浅川大和田橋	B	八王子8J	69	60	39	36	36	44	29	50	55	87	56	88	90
北野清掃工場	A	八王子8J	X	X	6	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-
ヤシマ生コン工場→西東京生コン	A	八王子8H	25	X	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-
浅川JR中央線鉄橋高架	C	八王子9H	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
浅川長沼橋	B	八王子9H	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
浅川滝合橋	B	武蔵府中0H	0	0	0	0	3	1	11	1	2	2	3	6	7
平山中学校	A	武蔵府中1H	-	3	6	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0
浅川一番橋	B	武蔵府中1J	1	0	0	0	4	0	16	62	61	115	108	66	41
浅川高幡橋	B	武蔵府中2K	1	0	0	5	20	33	42	30	22	29	31	24	8
浅川本流計			96	79	93	87	63	78	110	245	256	344	316	305	260
川口児童館	A	拝島2C	-	-	2	X	0	0	0	0	0	0	0	0	0
陶籾小学校	A	拝島4C	-	1	0	X	0	0	0	0	0	0	0	0	0
中央道中野山王町高架	B	拝島6A	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
清水小学校	A	拝島5A	4	4	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-
シンワ(株)	A	拝島5A	-	9	5	X	0	0	-	-	-	-	-	-	-
檜原中学校	A	拝島5B	-	X	5	X	0	0	-	0	0	0	0	0	0
川口川咳守橋	B	拝島6A	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
川口川流域計			4	14	12	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
京王高尾山口駅	C	八王子1F	6	7	6	10	40	35	45	65	55	45	4	0	0
案内川高尾橋詰橋本屋	A	八王子1F	-	-	-	-	-	1	4	0	0	0	0	0	0
京王高尾駅	C	八王子2G	10	5	5	20	30	5	10	4	5	4	4	10	15
高尾駅南口マンション、東電寮	A	八王子2G	0	0	0	0	40	40	30	20	15	20	30	20	40
東浅川小学校	A	八王子3G	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
京王線東浅川小学校前	B	八王子3G	20	5	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
私立八王子高校体育館	A	八王子5J	-	-	-	-	45	26	20	-	-	-	-	-	-
南浅川東横山橋	B	八王子4J	6	8	5	0	0	0	0	0	0	0	0	8	9
都立桑志高校(旧八王子工高)体育館	A	八王子4J	0	0	5	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0
八王子総合福祉センター	A	八王子3H	-	-	-	-	1	0	0	0	0	0	-	0	-
NTT八王子	A	八王子4H	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
南多摩病院	A	八王子5J	-	-	-	-	6	5	3	1	0	0	0	0	0
ライオンズマンション西八王子駅前	A	八王子5J	-	-	-	-	-	-	8	14	4	0	0	0	0
台町市民センター	A	八王子5J	0	0	0	0	3	1	1	0	0	-	-	-	-
都立第2商業高校	A	八王子5J	-	-	-	-	1	1	0	0	0	0	-	-	-
南浅川流域計			42	25	23	37	166	114	122	104	79	69	38	38	64

浅川の流域(2/2)	建物区分	メッシュNo	'87	'88	'89	'90	'00	'01	'02	'10	'11	'12	'13	'14	'15
城山川(月夜峯新橋～浅川合流)		八王子3K4K	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
JR八王子駅	D	八王子7J	50	92	45	51	118	135	127	94	70	68	54	30	35
八王子市民会館	A	八王子6J	-	-	-	-	0	0	0	0	-	-	-	-	-
山田川流域計			50	92	45	51	118	135	127	94	70	68	54	30	35
湯殿川新田中橋下	B	八王子5H	-	-	-	-	造業中	0	-	0	-	0	-	-	-
イトヨーカト八王子店駐車場ビル5階	A	八王子3H	-	-	-	-	11	2	26	3	-	2	-	-	-
はざま住宅	A	八王子3G	-	-	-	-	3	26	14	-	-	-	-	-	-
メジロ台ハイム	A	八王子3G	-	-	-	-	0	0	0	-	-	-	-	-	-
スリーボンド本社	A	八王子3G	-	-	-	-	6	6	0	-	-	-	-	-	-
大信プラスチック	A	八王子3G	-	-	-	-	9	5	4	-	-	-	-	-	-
富士重工第2スバル寮	A	八王子3G	-	-	-	-	0	0	0	-	-	-	-	-	-
湯殿川釜土橋	B	八王子6G	-	-	-	-	-	-	-	1	0	0	1	0	0
湯殿川殿田橋	B	八王子6G	-	-	-	-	-	-	-	3	4	2	1	1	1
JR片倉駅	C	八王子7G	0	0	0	0	12	5	-	0	0	10	5	4	5
片倉陸橋下(片倉高校北)	B	八王子7F	-	-	-	-	-	-	-	0	0	0	-	-	4
片倉台小学校	A	八王子7F	0	0	0	0	1	1	-	0	0	0	-	-	0
片倉サンライズ幼稚園	A	八王子7F	0	0	0	0	2	1	-	0	0	0	-	-	0
湯殿川東橋	B	八王子7G	-	0	1	0	2	0	4	3	0	4	6	2	2
兵衛川横浜線鉄橋	C	八王子7G	0	0	0	0	7	4	-	8	6	3	10	8	3
湯殿川横浜線鉄橋	C	八王子8H	-	-	-	-	-	1	1	18	14	9	0	4	0
湯殿川打越大橋	B	八王子8G	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
湯殿川時見橋	B	八王子8G	0	0	0	0	0	2	2	0	0	0	-	-	-
北野ハケシタビル	A	八王子8G	1	6	9	6	0	0	0	0	0	0	-	-	0
京王北野駅	C	八王子8G	0	0	0	0	25	35	39	2	0	8	0	0	10
京王北野駅～長沼駅	C	八王子9G	0	0	0	0	0	12	7	0	0	0	0	0	0
京王長沼駅	C	八王子9G	0	0	0	0	3	9	7	18	29	0	0	0	0
都立片倉高校	A	八王子7F	-	-	-	-	-	-	3	0	-	-	-	-	0
都立片倉高校北側の陸橋	B	八王子7F	-	-	-	-	-	-	22	0	-	-	-	-	4
梶田中学校	A	八王子4F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
花王八王子センター倉庫	A	八王子6F	-	-	-	-	-	-	-	0	-	-	-	-	6
湯殿川流域計			1	6	10	6	81	109	129	56	53	38	23	19	35
合計営巣数(I)浅川流域			210	262	219	198	442	438	494	507	458	519	434	412	402
営巣力所数(I)浅川流域			12	15	17	13	25	26	27	20	15	16	17	18	21

程久保川、谷地川、大栗川の流域(1/2)	建物区分	メッシュNo	'87	'88	'89	'90	'00	'01	'02	'10	'11	'12	'13	'14	'15
程久保川			-	-	-	-	0	0	0	0	0	0	0	0	0
谷地川城山下橋	B	拝島6D	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	15	20	7
谷地川黄金橋	B	拝島6C	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	3	0
中央高速下石川西児童公園	B	拝島9A	-	-	-	-	6	5	13	1	2	4	2	0	0
谷地川鶴巻橋	B	拝島9B	-	-	-	-	1	0	0	0	0	1	2	0	0
谷地川西野橋	B	拝島8A	-	-	-	-	0	0	1	1	0	0	0	-	0
谷地川八幡宿橋	B	拝島7C	-	-	-	-	3	0	0	-	0	0	4	0	-
カレッツァ駐車場	A	拝島7B	-	-	-	-	6	0	0	-	-	-	0	-	-
いちょう接骨院	A	拝島8B	-	-	-	-	2	0	0	0	0	0	0	0	0
谷地川青木橋	B	拝島8B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	0	0
谷地川八方地橋	B	拝島8B	-	-	-	-	3	6	8	5	4	5	0	0	0
谷地川万年橋	B	拝島9A	-	-	-	-	1	1	3	0	1	0	0	0	0
谷地川新日向橋	B	拝島9B	-	-	-	-	-	-	-	2	0	0	0	0	0
JR八高線小宮八石陸橋	B	拝島9C	-	-	-	-	-	-	-	0	0	0	0	0	0
谷地川新鶴見橋	B	立川0B	-	-	-	-	0	0	0	0	0	0	0	0	0
谷地川新漕水橋	B	拝島8B	-	-	-	-	1	0	?	0	2	1	0	0	1
谷地川新左入橋	B	拝島7B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	5
谷地川流域			-	-	-	-	23	12	25	9	9	11	23	26	13

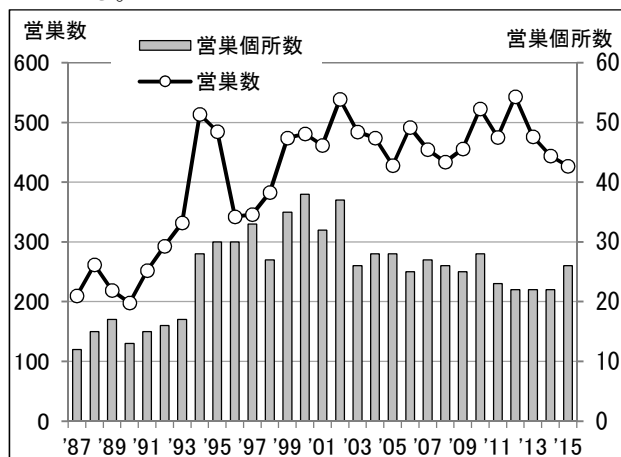
程久保川、谷地川、大栗川の流域(2/2)	建物区分	メッシュNo	'87	'88	'89	'90	'00	'01	'02	'10	'11	'12	'13	'14	'15
京王南大沢駅	C	武蔵府中0D	-	-	-	-	2	4	4	-	0	-	-	0	0
アメニティライアル多摩21	D	武蔵府中0D	-	-	-	-	-	-	-	-	0	-	-	-	-
南大沢舞の橋歩道橋	B	武蔵府中0D	-	-	-	-	0	0	0	-	0	-	-	0	0
南大沢駅ラフェット多摩歩道橋	B	武蔵府中0D	-	-	-	-	-	-	-	-	0	-	-	0	0
南大沢駅駐輪場歩道橋	B	武蔵府中0D	-	-	-	-	-	-	-	-	0	-	-	0	0
太田川おかんどう橋	B	武蔵府中1D	-	-	-	-	0	0	0	-	0	-	0	0	0
大田川峯が谷戸橋	B	武蔵府中1E	-	-	-	-	2	5	0	-	0	-	0	0	0
太田川板橋	B	武蔵府中1E	-	-	-	-	4	3	5	-	0	-	0	0	0
太田川川幡橋	B	武蔵府中1E	-	-	-	-	-	-	5	-	0	-	0	0	0
ハローマック多摩NT店	A	武蔵府中1E	-	-	-	-	0	0	0	-	0	-	0	-	-
京王堀之内駅	C	武蔵府中2E	-	-	-	-	0	0	3	2	0	-	0	-	-
堀之内駅150m多摩センター寄り高架下	C	武蔵府中2E	-	-	-	-	-	-	-	1	0	-	0	-	-
大栗川大片瀬橋	B	武蔵府中0E	-	-	-	-	0	0	0	-	0	-	0	0	0
大栗川富士見橋	B	武蔵府中0E	-	-	-	-	0	0	0	-	0	-	0	0	0
大栗川山下歩道橋	B	武蔵府中0E	-	-	-	-	-	-	2	-	2	-	-	0	0
大栗川新川橋	B	武蔵府中3F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	8	9	6	8
大栗川常盤橋	B	武蔵府中3F	-	-	-	-	3	0	0	2	2	5	4	0	4
大栗川宮田橋	B	武蔵府中3F	-	-	-	-	0	0	0	2	2	-	0	0	0
大栗川横倉橋	B	武蔵府中4G	-	-	-	-	5	0	1	0	2	-	0	0	0
南大沢駅前中郷公園トイレ	A	武蔵府中0D	-	-	-	-	-	-	-	0	0	-	-	0	0
大栗川流域			-	-	-	-	16	12	20	7	8	13	13	6	12
合計営巣数(Ⅱ)その他流域			-	-	-	-	39	24	45	16	17	24	42	32	25
営巣力所数(Ⅱ)その他流域			-	-	-	-	13	6	10	8	8	6	5	4	5

(3) ヒメアマツバメが侵入したコロニー

ヒメアマツバメがイワツバメの巣を横取りしたコロニーは、北浅川中央高速道橋、京王高尾山口駅、京王線東浅川小学校前、私立八王子高校体育館、JR八王子駅、京王長沼駅、京王南大沢駅である。ヒメアマツバメが侵入するとイワツバメは自らの巣を放棄してしまうものが多い。

4. 営巣数と営巣箇所数の経年変化

下図は1987年以降の営巣箇所数と巣数の変化である。1994年以降の営巣箇所数はおよそ25~40ヶ所の間、巣数はおよそ350~550個の間を推移している。



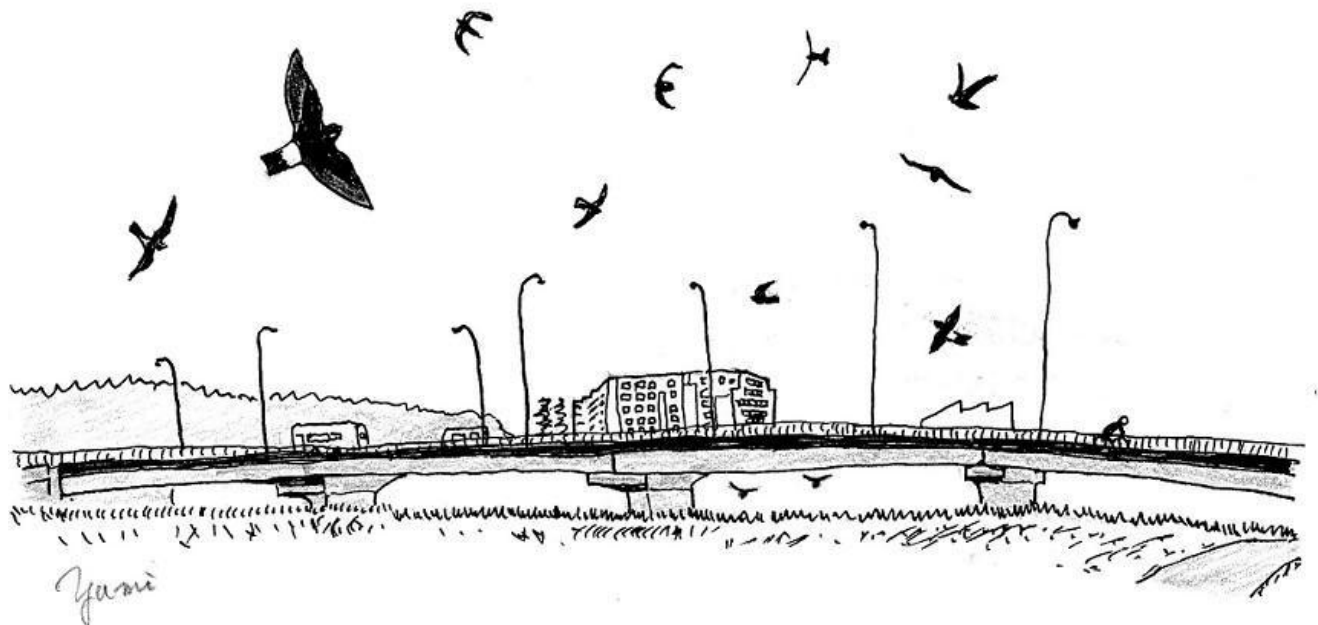
5. 大きく変動する同一営巣地の経年変化

個々の営巣地の巣数は年々変動する。下図は浅川・大和田橋の例である。1987年に69巣あったものが年々減少し、1993年には0になったものが、1996年から復活し、2006年には87巣となった。その後2008年には24巣まで減少したが、2014年には復活した。このような年変動は大和田橋だけでなく、他の営巣地も同様であるが、変動の原因は不明である。



6. 今後の課題

イワツバメの天敵は人間、カラス、スズメ、ヒメアマツバメ等である。カラスには雛を狙われる。スズメ、ヒメアマツバメには巣を乗っ取られる。イワツバメの雛は大量の糞を落とすので、下に駐車場や人間の活動の場がある場合は人に嫌われて徹底的に巣を破壊される。イワツバメから被害を受ける当事者にしてみれば止むを得ないのかもしれないが、人と鳥とのよりよい関係をどのように築いていくか、解決策としては何らかの検討が必要である。



VI. ヒメアマツバメの調査

1. ヒメアマツバメとは

①ツバメとは違う仲間の鳥

ツバメと形態が似ているが、アマツバメの仲間であり、ツバメとは別種として分類されている。ツバメよりもやや小さく、鎌形の羽根が特徴である。体は、全体的に黒色で、喉と腰が白く、腰が白いところはイワツバメに似ている。

②もともとは日本に分布していない種だった

1967年に静岡市ではじめて繁殖が確認され、その後、太平洋側を中心に分布地を増やしている。

③留鳥である

主な生息環境である市街地とその周辺に一年中生息している。

④自ら巣を作らない

イワツバメなどの巣を乗っ取り、ねぐらとして、また一部は営巣用の巣として利用している。ヒメアマツバメがイワツバメの巣を利用するようになると巣の出入り口に羽毛が付くのでイワツバメの巣と見分けられる。

⑤コロニーを形成

野鳥が集団でねぐらを取り、繁殖も集団で行なう場所はコロニーと呼ばれる。ヒメアマツバメはコロニーを形成する。

⑥1日の行動パターン

朝、日の出直後にねぐらから一斉に飛び出して行き、夕方どこからともなく帰ってきて、日没直前に一斉にねぐらの巣に入る。繁殖しているペアは日中、巣の出入りをしている。

2. 八王子への進出

文献資料でみる当地域での初観察は1976年9月26日の高尾山であり、1967年に静岡市ではじめて繁殖が確認されてから9年後である。観察した清水徹男氏が「高尾山でアマツバメの群れに混って飛んでいるのが観察された。時期からみて、渡りの途中の個体だと思われる」と「高尾山における確認鳥類（追録2）、東京都の自然第6号（1978年12月東京都高尾自然科学博物館刊）」に記載がある。

コロニーが初めて観察されたのは1987年頃からで、場所は八王子市東浅川町京王高尾線高架下である。これはカワセミ会が行っているイワツバメの営巣調査と都市鳥研究会会報（vol.5, No.1 1988年5月刊）の記載からの推定である。

カワセミ会では、内陸部でのヒメアマツバメは希少であると判断し、1988年10月から動向を見

守るため継続調査を開始し、コロニーは様々の理由により移動することを明らかにした。

3. コロニーの移動

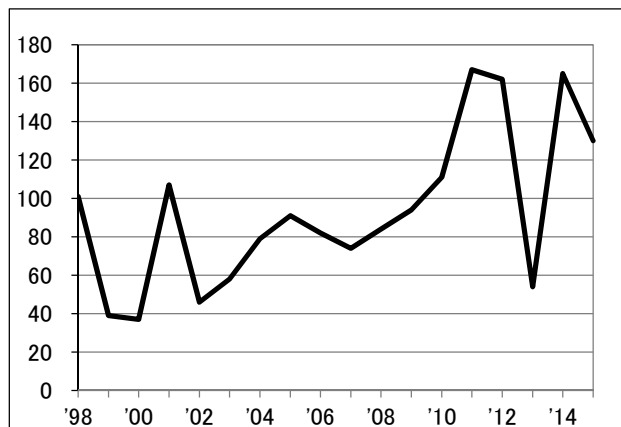
コロニーは消滅・分散する傾向があり、カワセミ会の継続調査で以下のことが明らかになった。1988～94年迄は東浅川京王線高架下のイワツバメ集団営巣地の中で、ほぼ40巣の規模が続いたが、ここは1994年に消滅した。代わって主群は直線距離で約3.5km北東の方向にある私立八王子高校の高床式体育館の下のイワツバメ集団営巣地に移動した。この時以降、京王線高尾山口駅、京王線高尾駅、北浅川・中央高速道、浅川・浅川大橋等のイワツバメの営巣地の中にも一部と思われるものが移動した。また、1994年には京王線南大沢駅のイワツバメの営巣地の中でもコロニーが発見された。その後もJR八王子駅構内、長沼駅などイワツバメのコロニーの中にヒメアマツバメのコロニーが発見された。

4. ヒメアマツバメの羽数の動向

下のグラフ及び次ページの図は、カワセミ会が毎年1回のペースで実施している定期カウント結果からヒメアマツバメを抜き出したものである。数値はコース別に各年12ヶ月の内の最大カウント羽数（最大値）を記録した月のものである。

定期カウントのコースではコロニー初認の1987年から2年後の1989年に3北浅川（松枝橋～鶴巻橋）と14片倉城跡公園で初めて記録された。コース別では、4浅川（鶴巻橋～大和田橋）が最も多く、14片倉城跡公園が最も少ない。多い所は浅川及び多摩川で、高尾山は少ないという傾向が窺える。

下のグラフは定期カウント20コース計の1998年以降の年最大値の経年変化である。2000年代に増加傾向にあり、2011年にピークとなった。今後の動向が注目される。



ヒメアマツバメの定期カウントにおけるコース別羽数

定期カウントコース			'85	'86	'87	'88	'89	'90	'91	'92	'93	'94	'95	'96	'97	'98	'99	'00	'01	'02	'03	'04	'05	'06	'07	'08	'09	'10	'11	'12	'13	'14	'15	計	
1	北浅川	大沢橋	陵北大橋	-	-	-	-	0	0	0	6	0	0	12	0	0	0	3	10	6	5	7	0	0	12	0	0	0	6	0	0	40	0	107	
2	北浅川	陵北大橋	松枝橋	-	-	-	-	0	0	16	2	0	0	3	0	13	3	6	0	0	0	0	0	0	1	4	4	0	0	2	0	0	0	54	
3	北浅川	松枝橋	鶴巻橋	-	0	0	0	3	0	0	2	0	1	5	5	4	6	8	4	15	1	5	5	1	3	10	2	10	6	3	50	7	1	7	164
4	浅川	鶴巻橋	大和田橋	0	0	0	0	0	0	30	6	7	1	0	7	9	11	4	36	23	17	32	11	8	11	35	40	26	25	9	2	7	25	382	
5	浅川	大和田橋	長沼橋	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	1	12	8	30	5	30	6	13	3	3	3	3	16	14	155	
6	浅川	長沼橋	一番橋	-	-	-	-	0	0	0	0	0	0	0	0	20	6	0	0	0	0	0	11	15	0	5	2	25	10	12	7	25	25	163	
7	浅川	一番橋	多摩川合流	-	-	-	-	0	0	0	0	1	0	2	0	35	0	5	30	0	0	0	20	2	1	0	0	26	30	50	11	25	20	258	
8	川口川	川口橋	明治橋	-	-	-	-	-	0	6	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	14	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	25	
9	湯殿川	白旗橋	時田大橋	-	-	-	-	-	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2	2	3	0	0	0	8	
10	多摩川	滝山城跡下		-	-	-	0	0	0	0	12	0	2	3	0	10	1	0	0	0	0	0	0	8	0	1	0	15	50	15	0	16	11	144	
11	多摩川	谷地川合流付近		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	0	0	0	5	8	3	0	10	2	0	0	5	0	8	0	14	8	0	63	
12	多摩川	浅川合流付近		-	-	-	-	-	-	0	0	0	0	0	13	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	7	0	6	0	27	
13	小宮公園			0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	10	3	30	1	30	0	2	10	5	0	0	0	101		
14	片倉城跡公園			-	-	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	7	
15	長沼公園			-	-	-	-	-	-	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2	0	6	0	2	5	10	5	10	21	13	78	
16	高尾山	小仏川		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	5	0	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	11	
17	高尾山	蛇滝コース		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	0	0	0	10	0	0	0	0	0	2	0	0	10	0	10	0	0	0	0	32	
18	高尾山	琵琶滝コース		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	0	4	4	5	0	5	1	3	3	1	0	0	3	0	0	0	0	0	0	31	
19	高尾山	大垂水コース		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	15	15	
20	高尾山	日影沢コース		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	7	0	0	0	5	0	0	6	2	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	25	
計			0	0	0	0	4	1	0	61	22	11	9	31	30	101	39	37	107	46	58	79	91	82	74	84	94	111	167	162	54	165	130		

5. 京王線長沼駅のコロニーの調査

京王線長沼駅のコロニーは規模が小さいが観察しやすい所にあるので、2014年から季節変化、繁殖等について月1回程度の割合で調査を行った。調査は6名のカワセミ会会員（粕谷和夫、門口一雄、浜野建男、山崎悠一、渡辺仁、渡辺敬明）が2ヶ月ずつ担当し、昼の巣への出入り羽数、夕の帰還羽数のカウントを行った。以下は主に2015年の調査結果である。正確な羽数を捕えることは困難で、結果は全て概数である。

(1) 夕方のねぐら入り

下表の通りで4月～9月に増加し、10～3月に減少するという傾向が見られた。最高は6月の55羽であった。2014年も同じ傾向であったが、この年は12月に31羽を記録した。

表2 夕方のねぐら入り

	2014年	2015年
1月	1	22
2月	19	18
3月	15	24
4月	12+	29
5月	13	37
6月	32	55
7月	21	22
8月	23	24
9月	21	37
10月	14	10
11月	19	0
12月	31	15+

(2) 昼の出入り

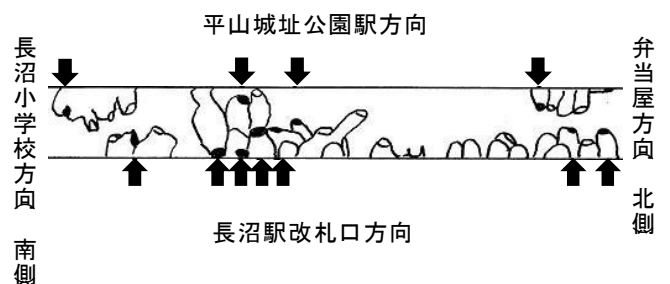
次ページ表の通りで2月から9月の間に出入りを観察した。うち、5月から9月の間の出入りが多かった。8月には巣中の雛が観察された。

(3) 朝の飛び出し

2015年4月17日、5時00分～7時25分に渡辺敬明が朝の飛び出しを観察した。東の空が白みはじめ第一声。小さい声が合唱に変わり、大合唱となり数羽飛び出し(5時5分開始)、上空巡回後交互に巣すれすれに飛翔を繰り返した。以降も出入りがあり、出たものも群れになり、執拗に巣からの飛び出しを誘っているように通過し続けた。後半は、やっと自主的に出るようになり、所要時間は2時間20分で終了(7時25分)。思いの外、長時間を要することとなった。

(4) コロニーのスケッチ

下図は山崎悠一が2015年7月20日の調査時に描いたもので、見上げながら記録していたが、あまりにも変形が激しくて、写真を撮ってから、記録した。ヒメアマツバメが入ったと思われる巣に、「↓や↑」と黒丸を付けてある。

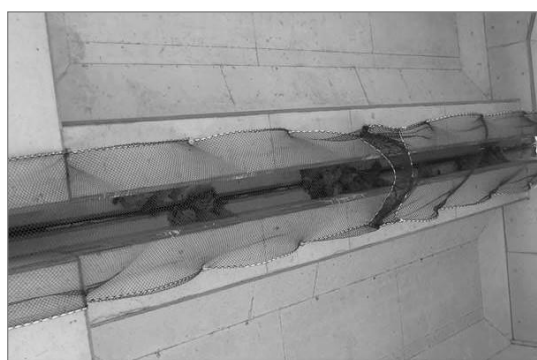


屋のヒメアマツバメの巣出入り（2015年京王線長沼改札口前）

観察月日	観察者	天気	調査時刻	巣に戻る羽数	巣から出た羽数	同左差引	特記事項
1月25日	渡辺仁						(夜間のみ実施)
2月21日	山崎悠一	晴れ	10:19~11:15	13	12	1	10時19分から10時43分の時間を除いて飛び回っていた。10時19分から10時43分の時間は、じっと待っていたが、ヒメアマツバメは何の動きも無く、スズメの騒がしい声のみであった。
3月17日	門口一雄	晴れ	14:15~15:15	10	5	5	・巣の位置は、大きく分けて3つの固まりになっており、便宜上、北側の固まりを①、中央付近の固まりを②、南側の固まりを③とした。それぞれに出入り口が数個ある。 ・屋の調査では、③の固まりの出入りはなかった。 ・調査時間中に巣からの鳴き声はない。(出入りの時も鳴き声なし。) ・巣に頭を入れ、直ぐ戻る餌?を運んだような行動が2回見られた。鳴き声なし。 ・巣に入る場所(口)と出る口が異なるようだ。巣の中はつながっている?
4月17日	渡辺敬明	晴れ	12:00~13:30	2	2	0	出入り回数がかなり少なかった
5月24日	浜野建男 他4名	晴れ	13:51~14:51	21	24	-3	5月はかなり頻繁に巣への出入りしていた。また巣の中に留まっている時間は比較的短い(数分)ことが多いようだ。
6月12日	粕谷和夫	晴れ	13:55~14:54	38	34	4	巣の下の地面に糞が多く落ちていた。同じ巣の下でも落ちている糞は一樣でなく、多く落ちている所とそうでない所が分かれていた。多分糞が多く落ちている所の上の巣の中には雛がいると思われるが、中が見えないので正確なところはわからない。13時55分~14時54分で同時に姿を確認できたのは5~6羽程度であった。この5~6羽が巣に出入りしていたと思われる、巣中の雛に餌運びをしていたものと推定される。使っていると思われる巣が11あり、このうちの幾つか(3程度)が営巣に使われているのかも知れない(残りの巣はねぐらに使用か)。
7月20日	山崎悠一	晴れ	9:45~11:20	17	16	1	ヒメアマツバメの巣の形をスケッチした(別図)。
8月22日	渡辺敬明	晴れ	9:45~10:45	26	24	-2	調査開始直後から幼鳥2羽一緒に顔を出していたが、終了までそのままだった。
9月23日	門口一雄	薄曇り	10:10~11:10	29	23	6	・巣の位置は、大きな固まり8個と、隣のブロックの1個の計9個で出入りが見られた。 ・大きな固まりの巣に両端に侵入除けのネットがかけられていた。そのネットの両端はまとめてあり、今後全面を覆う気配である。(それ用のフック(コンクリートにねじが打ってある。))は架設済。
10月28日	粕谷和夫	晴れ	14:25~15:35	0	0	0	巣のあるコンクリートの繋ぎ目の窪んだ所(高架連結側面)に前月ネットが張られた。15時5分にヒメアマツバメ2羽の巣近くでの飛翔があったが、巣への出入りは無かった。
11月21日	浜野建男、 浜野知恵子	晴れ	13:00~14:00	0	0	0	調査している巣には出入りはないが、同じ高架下の平山城址公園側(約50m東側)の巣に数羽のヒメアマツバメの出入りが確認された。また上空を飛翔する個体も複数確認された。
12月30日	渡辺仁	晴れ					(夜間のみ実施)

(5) 巣への化学繊維ネット張り

コンクリートの繋ぎ目の窪んだ所(高架連結側面)に2015年9月26日に京王帝都電鉄は、化学繊維ネットを張った(下図)。京王帝都西管区主任に問合せたところ、ヒメアマツバメとは関係なく、「数年前より地震対策で検討中であった」とのことである。ネットと壁の間には隙間があり、ヒメアマツバメの出入りは可能で、実際に出入りはしている。しかし、地震対策と化学繊維ネットとの関係は理解しかねることである。



6. 人から嫌われるヒメアマツバメ

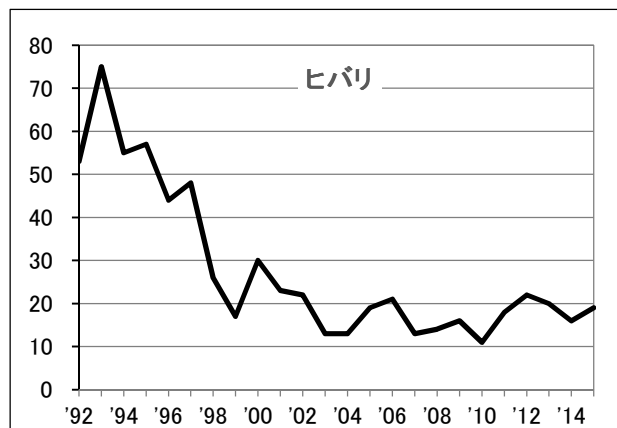
営巣場所やねぐらとして利用される人工建築物の下には糞が大量に落ちるため、人から嫌われる。コロニーは消滅・分散する傾向があると前記したが、人から嫌われて巣が落とされてしまうことが、その原因の一つと思われる。

東浅川京王線高架下のコロニーの下に住宅が建設され、その住人によって巣が落とされた。私立八王子高校の高床式体育館のコロニーは体育館の建て替え時に取り除かれた。京王線高尾山口駅のコロニーは下の駐車場に糞が落ちて車を汚すということで巣が落とされた。京王線長沼駅のコロニーは上記の通り2015年に巣への化学繊維ネット張りが行われた。

コロニーが法的に保護されていることはないの、ヒメアマツバメの受難は今後も続くものと懸念される。

VII. ヒバリの調査

ヒバリは、八王子、日野市内の河原、農耕地、開発造成地（空き地）などに留鳥として一年中生息している。カワセミ会の定期カウントで河原に生息するヒバリの減少が顕著であることが判明している（下図）。そのような中で、八王子、日野市域では芝生的草地として管理され公園化されている環境にヒバリが複数で生息し、かつ営巣していることが観察されている。このような環境で生息しているヒバリの季節別月別生息数変化、営巣状況、人との関係等を調べ、芝生的草地がヒバリとどのような関係があるかを検討するためヒバリ調査（ヒバリプロジェクト）を行った。



1. 調査場所

次の3箇所を調査場所とした。北川原公園と八石下広場は多摩川右岸に隣接する位置にあり、ともに下水処理場の屋根の上を利用して作られた芝生広場である。豊田南1号公園は浅川左岸に隣接する位置にある。広さはGoogleマップから試算した。

①北川原公園（日野市石田、石田大橋付近）

広さ：約 175m×150m=26,250 m²

②豊田南1号公園

（日野市豊田2丁目、平山橋下流側）

広さ：約 180m×144m=26,000 m²

③八石下広場（八王子市小宮町、多摩大橋付近）

広さ：約 280m×133m=37,240m²

2. 調査担当者と調査期間・頻度

調査担当は次の通りカワセミ会の会員が担当した。（ ）内は協力者である。調査期間は2014年11月～2016年7月（八石下広場は2015年1月から）で、調査頻度は2015年までは月2回（上旬と下旬）、2016年は月1回である。

①北川原公園：福本健（青木昭子、管野桂子、木澤隆雄、傍島玲子、玉木雅治、出口富子、中村后子、

浜田早苗、武藤邦子、渡辺敬明）

②豊田南1号公園：玉木雅治（青木昭子、浅野恵美子、粕谷和夫、管野桂子、木澤隆雄、傍島玲子、中村后子、浜田早苗、福本健、武藤邦子、渡辺敬明）

③八石下広場：傍島玲子、木澤隆雄（浅野恵美子、河田徳子、玉木雅治、浜田早苗、福本健、武藤邦子、渡辺敬明）

3. 調査内容と方法

公園内に生息するヒバリの全羽数とさえずっているオスの羽数をカウント、繁殖期には繁殖行動を観察した。芝生の外周から、また必要に応じて芝生内をゆっくり歩いて羽数をカウントした。3箇所とも出入り自由な公園・広場で、調査時にサッカーの練習をする人、散歩する人、幼稚園児の遊び場等、様々な利用されている。調査時には、できる限りヒバリの生息に影響を与えないように注意を払った。

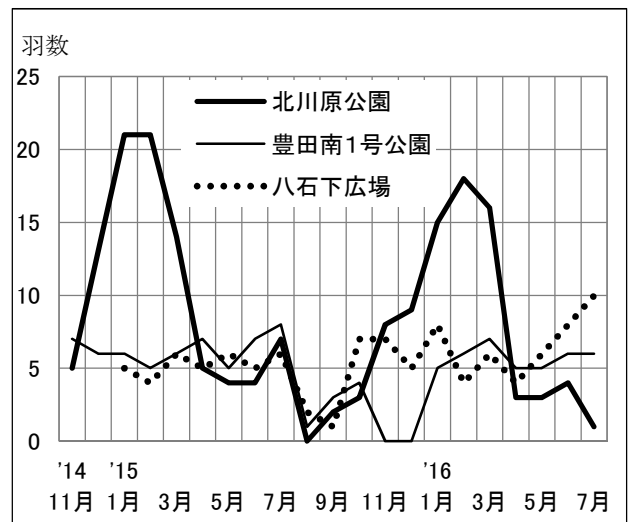
4. 調査結果

観察された毎月の羽数（2015年までは月2回行ったカウントのうち、羽数が多かった方）を月別に並べたのが下のグラフである。

このグラフから以下のようなことが読み取れるが、何故このようになったかは不明である。

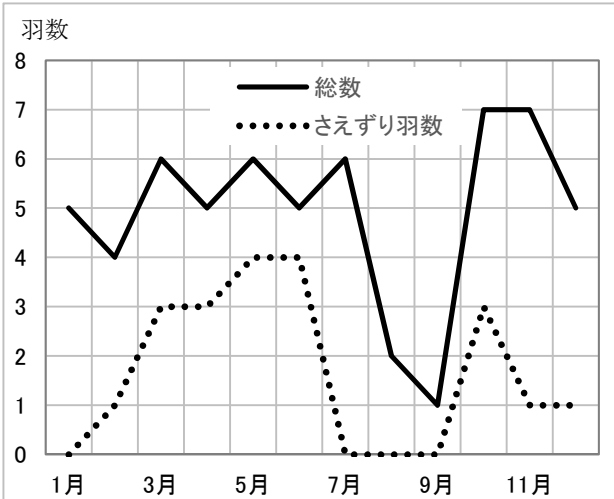
- ①ヒバリは年間を通じて公園・広場を生息場所として利用しているが、季節により羽数に変動がある。
- ②北川原公園で冬季に羽数が増加したが、他の公園・広場ではそのような変化はない。
- ③3箇所とも8月、9月に著しく減少した。

観測羽数の月別変化 2014年11月～2016年7月



下図は八石下広場でさえずっていたオスの羽数を
含むグラフである（2015年）。3月から6月の間に
全体の半数以上がさえずっていることから、この場
所が繁殖地となっていることが読み取れる。さえず
りは、他の2公園でも同じような傾向が見られ、巢
立ったばかりのヒナや若鳥も観察された。

八石下広場 観察羽数の月別変化 2015年1月～12月



5. 今後の検討課題

ヒバリが生息できる草地、河原、農耕地などが減少しているなかで、芝生的草地として管理されている公園がヒバリの生息に重要な役割を果たしていることが判明した。ヒバリ以外にも同時観察の結果、キジ、キジバト、コチドリ、ツバメ、コシアカツバメ、モズ、セッカ、オナガ、ヒヨドリ、ウグイス、シジュウカラ、ムクドリ、ハシボソカラス、ハシブトガラス、ジョウビタキ、ノビタキ、スズメ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、タヒバリ、シメ、ホオジロ、カシラダカ、カワラヒワなど多種の野鳥も公園を利用しており、アオサギ、ダイサギ、ノスリ、チョウゲンボウなども上空に飛来していることが判明した。

この1年半の調査では、隣接する多摩川や浅川との関係を明らかにすることができなかったが、今後の課題としたい。また、公園には広い芝生があり思いっきり走り回ったり、広い空の下での休憩や弁当を広げる人、犬を連れて散歩する人、幼稚園児の遊び場等として利用され、休日にはサッカー場として練習や試合が行われている。このように同じ場所で人と野鳥の共存のあり方のような観点からの検討も今後続けることとしている。

6. 参考

2016年4月～7月に北川原公園と豊田南1号公園で、芝生的な草地にどのような植物があるのか、菅野桂子が調査した。その結果は以下のとおりで、多様な植物が生育していることが判明した。

	4月		5月		6月		7月	
	北川原公園	豊田南1号公園	北川原公園	豊田南1号公園	北川原公園	豊田南1号公園	北川原公園	豊田南1号公園
アオスゲ	花							
アオツツラフジ			蕾					
アゼナルコ					花			
アメリカフウロ	花		花					
イヌホオズキ							花	
イヌムギ	花				花	花		花
ウラジロチチコグサ							花	
エノコグサ							花	
オオイヌノフグリ	花	花		花				
オオバコ			花			花		
オニウシノケサ			花					
オヒシバ							花	
オランダミミナグサ	花	花						
カタバミ	花			花		花	花	花
カモガヤ			花					
カモジグサ			花					
カラスノエンドウ	花	花	花					
ギシギシの仲間						花		
キュウリギサ	花							
キランソウ	花							
キンシバイ					花		花	
クワ			花					
コヒルガオ			花					
コマツヨイグサ			花				花	
コマツツメクサ		花	花	花	花			
シマスズメノヒエ			花	花	花	花	花	花
シロツメクサ	花	花	花	花	花	花	花	花
シロバナマンテマ			花		花			
スイカズラ			花					
スイバ	花		花			花		
スズメノエンドウ	花							
スズメノカタビラ	花	花	花	花	花	花		
スズメノチャシキ			花					
セイバンモロコシ							花	
セイヨウタンポポ	花	花		花		花		花
タイヌノフグリ	花	花		花				
タチチチコグサ			花					
チガヤ			花		花			
ツボミオオバコ	花							
ツメクサ					花			
トキワハゼ				花	花	花		花
ナガミヒナゲシ	花							
ナズナ	蕾	花						
ニホンタンポポ	花							
ニワゼキショウ			花	花	花	花		花
ネジバナ					花	花		
ネズミムギ			花		花	花		
ノイバラ			花		花			
ノゲシ			花					
ノミハツリ	花							
ハキダメギク							花	
ハナイバナ		花						
ハナヤエムグラ	花		花					
ハマスゲ							花	
ハルジオン			花			花		
ヒメドリコソウ		花						
ヒメコバンソウ			花					
ヒメジョオン			花		花		花	
フタナ	蕾		花				花	
ヘラオオバコ	花	花	花	花	花	花	花	花
ホトケノザ	花							
マツバウンラン	花		花					
マメゲンバインズナ						花		
ミコシガヤ			花		花			
ミチタネツクバナ		実						
ムラサキサギゴケ		花						
ムラサキツメクサ			花		花	花	花	花
メマツヨイグサ							花	
ヤエムグラ	花	花						
ヤセウツボ			花					
ユウゲショウ			花		花	花	花	

VIII. イソヒヨドリの繁殖調査

1. イソヒヨドリとは

イソヒヨドリは、ユーラシア大陸の海辺や山地の岩場など幅広い環境に生息している。日本では北海道から九州、沖縄までの各地に生息しているが、磯や港など海岸周辺が主要な生息地域であるとされてきた。

近年、各地からの報告を見ると、内陸部でも生息が見られるようになり、今ではその生息が一時的なものだけでなく、定着して繁殖し始めたことが確認されるようになった。八王子市、日野市域（多摩川河口から40数km）でも1993年に初めて生息を確認して、2009年にJR八王子駅付近で初めて繁殖を確認した。

2. 八王子・日野におけるイソヒヨドリの観察経緯

カワセミ会では1985年の発足から八王子、日野市内の鳥信を蓄積してきている。イソヒヨドリがこの鳥信に初めて記録されたのは1993年12月12日、浅川の新浅川橋付近である。以降2016年7月末までに鳥信に登録された件数の総計は361件である（右表）。ここでは便宜上繁殖期を4-7月、非繁殖期を1-3月、8-12月と区分して年次別に件数を整理した。表からイソヒヨドリは繁殖期、非繁殖期ともに観察されているので、当地では留鳥であることがわかる。なお、2011年以降に繁殖期の件数が増えているのは、同一巣を何回も観察したことによるものである。

イソヒヨドリの主な出現場所は河川の橋付近、鉄道駅とその付近、大型量販店、集合住宅、工場建物等に集中しているという特徴がある。

JR八王子駅構内に現れたメス



イソヒヨドリの「鳥信」登録件数

年	繁殖期 (4-7月)	非繁殖期 (1-3月、8-12月)	計
1993		1	1
1994	1	1	2
1995		1	1
1996	1	1	2
1997		2	2
1998		1	1
1999		2	2
2000			0
2001		1	1
2002		2	2
2003	1	5	6
2004	2		2
2005		5	5
2006	3	4	7
2007		1	1
2008	3	2	5
2009	7	4	11
2010	5	5	10
2011	13	5	18
2012	18	8	26
2013	34	21	55
2014	39	25	64
2015	47	27	74
2016	55	8	63
計	229	132	361

3. 年々増加するイソヒヨドリの営巣

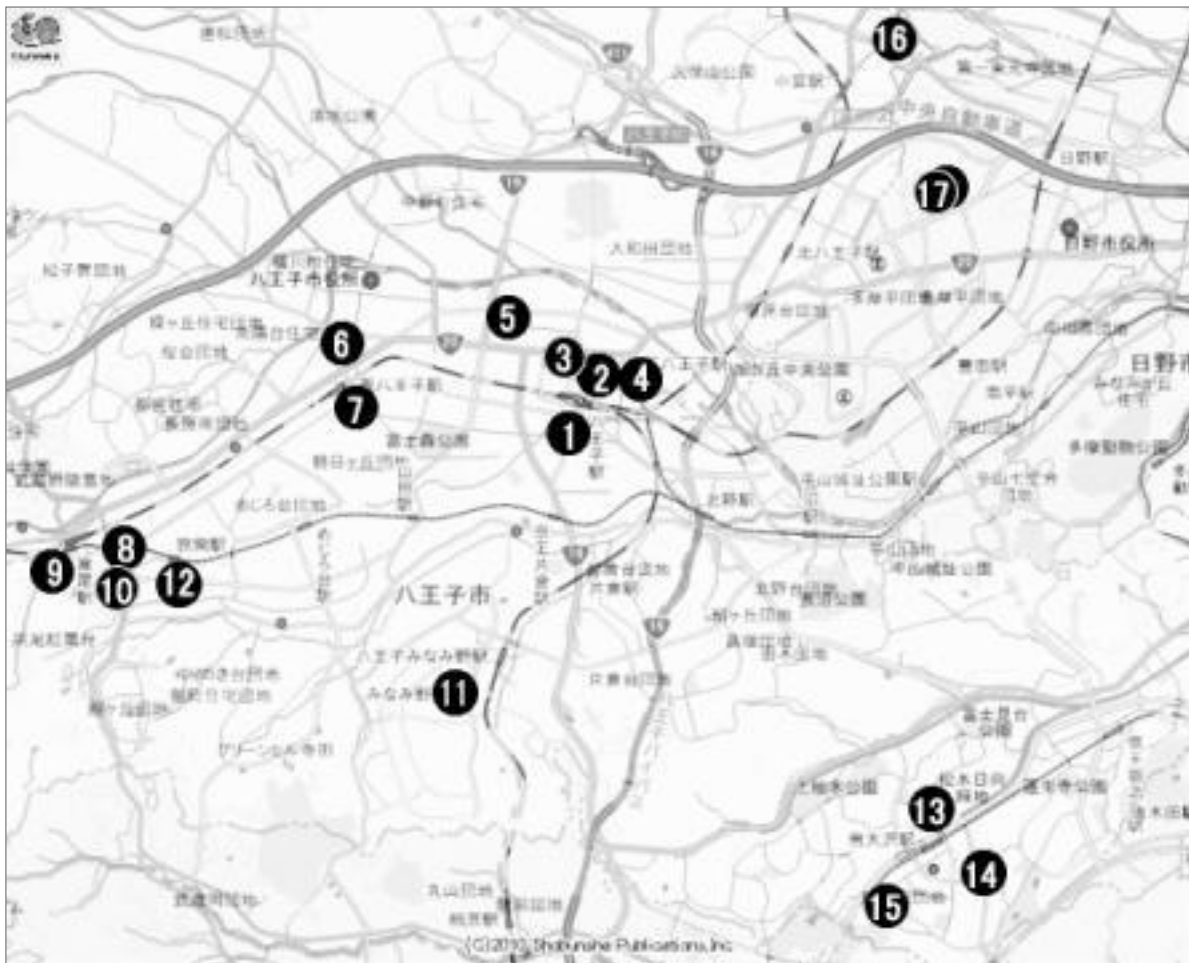
繁殖が初めて確認されたのは2009年JR八王子駅南口付近であり、2016年までの営巣状況は次ページ表のとおりである。2012年から営巣確認数が増加しているのは、当年にNPO法人バードリサーチの調査研究支援プロジェクトの助成を受けて組織的に調査に取り組んだことによるものである。

営巣場所は「鉄道駅付近に多い」、「量販店や集合住宅に多い」という特徴があるが、2016年は「5八王子市南町付近（住宅地事務所混在地）」のように市街地の駅から少し離れた場所でも営巣地が見つかるようになってきた。巣は直接雨が当たらない場所の人工構造物の隙間のようなところに作られる。

イトヒヨドリの営巣地

No	巣の場所	巣の環境	確認できた巣の数							
			2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016
1	JR八王子駅南口付近	集合住宅	1	1						
2	JR八王子駅北口付近	集合住宅				1	1	1	1	1
3	JR八王子駅北口付近	事務所ビル								1
4	八王子市明神町3丁目	不明					1			
5	八王子市南町付近(住宅地事務所混在)	不明								1
6	JR西八王子駅北口付近	不明								1
7	JR西八王子駅南口付近	集合住宅								1
8	高尾駅付近(南口高尾パークハイツ)	集合住宅					1	1	1	1
9	高尾駅付近(KEIO TAKAO BLDG ANNEX)	集合住宅					1		1	1
10	高尾駅付近(スーパーバリュー)	大型量販店								1
11	横浜線八王子みなみ野駅付近	大型量販店						1	1	1
12	狭間町のイトーヨーカ堂	大型量販店			1	2	2	1	1	1
13	南大沢駅付近(三井アウトレット)	大型量販店				2	1	1	1	1
14	南大沢駅付近(イトーヨーカ堂)	大型量販店				1	1		1	1
15	八王子市別所(ぐりんうおーく多摩)	大型量販店					1	1		
16	谷地川新旭橋付近	工業団地				1				
17	日野市日野台	工場						1	1	2
	計		1巣	1巣	1巣	7巣	9巣	7巣	8巣	14巣

イトヒヨドリの巣の位置 (○内の番号は、上表のNo. に対応)



4. 個別営巣場所

(1) No.1 JR 八王子駅南口付近・集合住宅

2009年に駅南口付近の小さな集合住宅の非常階段で初めて営巣が確認され、2010年も同じ場所で営巣したが、2011年以降は巣に姿を見せなくなった。この付近では1994年からイソヒヨドリの姿がカワセミ会の会員により観察されていたので、2008年以前にも営巣していた可能性はある。

JR 八王子駅南口付近の営巣地（左側建物の非常階段）



(2) No.2 JR 八王子駅北口付近・集合住宅

2012年に確認され2016年まで毎年営巣している。駅北口・京王プラザホテル駐車場東側に隣接する集合住宅の裏側の3階の通気孔(ダクト)の中に営巣。

(3) No.3 JR 八王子駅北口付近・事務所ビル

2016年に初めて営巣が確認された。2016年の5/13、5/14、5/16に矢崎恵美子が、オス1羽をクリエイティブホール（八王子市生涯学習センター）1F エレベーターホール脇のガラス張りの中庭（竹垣）、裏口前のコインパーキング等で、地面を掘り起こし虫を捕食し上空へ飛び立つ姿や塀から地面へ飛び降り隣のビルの路地へ歩いている姿を観察。5/18に粕谷和夫が矢崎の情報を基に辺りを探し、クリエイティブホール隣のヨドバシカメラ店裏駐輪場電線に止まっているオス1羽の姿を観察。5/21に粕谷がヨドバシカメラ八王子店裏駐輪場の東側のビル（4階建）の裏の排気口にオスとメスが餌を啜って出入り、直ぐ近くの桑の実（未だ黒くなっていない赤い未熟果）を採って巣に運んでいるのを見つけた。その後の巣立ちまでの状況は観察していない。

また、5/21にはクリエイティブホール東側の電線で交尾しているペアを観察した。このペアが同上のビルの巣に餌運び中のものと同じペアか、異なるペアかは不明。もし異なるペアであれば、八王子駅付近で営巣する別のペアとなる。

桑の実を巣に運ぶオス



ビル排気口の巣



(4) No.4 八王子市明神町3丁目・巣の位置不明

2013年4月27日に板倉正が医院の3階窓付近に出たり入ったりしている2羽を観察した。両隣の建物窓や屋上で鳴いていた。時に地面に降りるなど、しばらく近辺に声を響かせていた。6月3日、4日、5日に医院の直ぐ近くのマンションのベランダに親子が現れた。6月3日5Fの南ベランダ（欄干）で早朝6時～8時頃まで巣立ったばかりと見られる雛1羽と、15～30分おきに餌を運ぶ（餌をちらつかせる時もあった）親（メス）を確認。6月4日早朝6時～午前中（雨）、雛2羽（1羽は6月3日の雛と見られる）に、同じように親（メス）が餌を運ぶ。6月5日朝8時頃～10時頃まで雛2羽（6月4日の雛と思われる）。同じ光景。しばらくして1羽が飛び去り20分程してもう1羽も飛び立った。この日以来、雛は見られなくなった。この付近で営巣したと推定されるが具体的な場所は特定できなかった。2014年以降は巣を確認していない。

(5) No. 5 八王子市南町付近・巢の位置不明

2016年の6/2、6/3に粕谷が野口佐和子からの情報(5/31に南町でイソヒヨドリを観察した)を基に南新町、南町をパトロールし、南町でオスとメスを確認した。その後、粕谷は6/6に南新町の真宮病院駐車場の電線にメスが止まっている姿、6/7に近くの八日町4丁目のビル屋上でメスの姿、6/8に南町でオス1羽を観察した。いずれも餌は啜えてなかったが、狭い範囲の所で繁殖期の9日間(5/31~6/8)オスとメスが観察されたので、付近で営巣しているものと推定した。

(6) No.6 JR 西八王子駅北口付近・巢の位置不明

2016年の4/16に古山隆が北口駅前のビル屋上、「プロミス」の看板の上で盛んにさえずる姿を確認。4/18に粕谷がオス2羽を同時に観察、最初に見かけたのはFLEX西八王子というマンションの外付け非常階段、次がダイエーの屋上で、その後で直ぐ近くの踏切(第1水道踏切)の電柱に2羽のオスが止まって威嚇し合っていた。声も良く聞こえて、2羽は縄張り争いをしているような行動をとっていた。

5/13に粕谷が駅北口から東側にある6階建のマンションの屋上にいるメス1羽を観察。5/25に粕谷が巢の位置をほぼ確認。グルメシティダイエーのビルの北側の2つのビルのいずれかの建物にオスとメスが餌運び中(建物間に隙間が少なく、どの建物に巢があるかの見極めが困難であるが、2つの建物のいずれかと推定)。6/3に萩島伸介がこの付近のビルの隙間(幅1m程度?)を覗き込んだ時に鳥(ムクドリ大)が中央付近(2F?)から上に飛び上がるのを目撃した。ここにイソヒヨドリの巢があると推定。

(7) No. 7 JR 西八王子駅南口付近・集合住宅

2016年の4/29に中山尊人・千晶が西八王子駅南口とみん銀行屋上とその周辺でオスとメスを観察。鳴き声を辿り探したところ、とみん銀行屋上ローン側にて視認。その後、周辺のビル、電線等に移動。とみん銀行南側の民家の2階の窓の庇にメスも確認。3月中旬より朝の通勤時、土日の昼間に鳴き声は聞いていた。6/2に小山正文は、南多摩病院の南側のスーパー西隣り5~6階建マンションの4階ベランダの空調付近にあるらしい巣を発見。同ベランダは空室の模様で、6/1にマンション4階近くにいたイソヒヨドリを発見し、翌2日に確認したら、オス、メス親が餌を啜えて同マンション4階ベランダに入り、そのベランダ上部角のエアコンの上に入出入りするのを確認した。6/3に再確認するとイソヒヨドリの姿はなく、前日の6/2に巣立ったと推定した。

(8) No. 8 高尾駅南口付近・集合住宅

2013年に初めて営巣が確認された。場所は南口高尾パークハイツA棟。2013年3月31日に同マンションに住む市民T氏から同マンション10Fのベランダや隣りの京王ストアの建物(2階建)の屋根にいるという情報を得た。5月1日に粕谷と角田幸男が同マンション屋上にいたオスが南側の10階ぐらいのベランダに飛び移ったところを観察した。5月28日に粕谷は同マンションの北側JR中央線寄りの外側に設置されている非常階段の下から2つ目の階段の曲がり角に餌を啜えたオスとメスが出入りすることをつきとめた。6月1日、2日川上憲がオス、メス親の餌運びを確認、餌取り場はJRの線路を北へ越えた付近や町田街道方面が多く、線路上でも餌取りが見られたことを観察。6月3日以降に巣立った。2014年以降2016年までは同マンションの1~2階に付随するグルメシティダイエー1階の外側ダクト(東側)で営巣している。

(9) No. 9 高尾駅南口付近・集合住宅

2013年に営巣しているらしいことを掴み、2015年営巣場所を特定した。2015年の5/16:京王線高尾駅ホーム下の大光寺の近く、オス1羽がイタドリが群生している所をめぐって何回か降りる。5/18:80分間観察、大光寺の桜の実が熟している木にオスが1回、メスが2回現れた。メスは京王高尾駅ホームの近くにも止まった。近くに巣がありそうなことを確信したが巣の場所はわからなかった。5/22:45分間観察。巣のあると思われる所を確認、KEIO TAKAO BLDG ANNEXの屋上で、オスが5回、メスが1回餌を啜えて出入りした。オスは近くでよく鳴いていた。屋上のどの辺りに巣があるかは不明である。5/25:10分間観察、オスが1回餌運び。6/2:15分間観察、オス1羽と巣立ち雛と思われるメス型2羽の計3羽がKEIO TAKAO BLDG ANNEXビルの周辺の複数のビルの屋上やベランダを移動していた。

(10) No. 10 高尾駅付近・大型量販店

2016年の6/2に横山由美子が町田街道沿いの新しいスーパーマーケット「スーパーバリュー」(畜産試験場跡地)の店舗南側駐車場のフェンスで餌を啜えたメス1羽を発見。周辺では、4月中にはオスが富士重工、サニーハイツ、洋服の青山などで大きな声でよくさえずっているのを見たが5月に入ると全く鳴き声を聞かなくなった。この間、鳴かないイソヒヨドリのオス1羽がスーパーバリューの駐車場のフェンスにとまっているのを見ることもあった。1、2週間ほど前から短いさえずりを時々聞くようになり、2、3日前からヒッ、ヒッ、という鳴き声を聞くよう

になった。6/3 に粕谷は前日の横山の情報を基に観察して巣のある場所を確認した。巣は駐車場1階にあった。町田街道側の入口から入って10本目の柱の所の屋根の下の隙間に餌を啜えたメス親が入って出てきた。90分間で数回の餌運びを観察した。全てメス親でオスの姿は無かった。6/4 に福本順吉はメス1羽が、餌を啜えて前日に粕谷が確認した巣の場所（屋根の隙間）に入るのを確認した。

(11) No. 11 横浜線八王子みなみ野駅付近・大型量販店

2014年に初めて営巣を確認。2011年に八王子みなみ野駅付近でイソヒヨドリを観察して以来、2012年、2013年に営巣場所を探していたが見つめることができなかった。2014年5月28日ついに巣のあると思われる所を特定できた。場所は駅西口の量販店NOJIMAの立体駐車場「アクロスモールみなみ野駐車場」3階であった。同駐車場の屋上からイソヒヨドリのメスの声が聞こえてきたので、10:35~11:05の30分間観察した。この間にメス親が約10回採餌して餌運びをした。空中で餌をフライキャッチすることが多かったが、2回だけ近くの地上に降りて採餌した。この間のオスは姿を見せなかった（粕谷観察）。その後5/31に川上恵が、3階西側空調機のところで、メスが8回ほど餌を啜えての出入りを観察した。

(12) No.12 狭間町のイトーヨーカ堂・大型量販店

2011年に店舗の立体駐車場で初めて営巣が確認され、2016年まで毎年営巣が確認されている。この場所及びその付近では2002年からイソヒヨドリの姿がカワセミ会の会員により観察されていたので、2010年以前からも営巣していた可能性はある。2012年及び2013年は2巣が観察された。

(13) No. 13 南大沢駅付近・大型量販店

2012年に店舗の屋上で初めて営巣が確認され、2016年まで毎年営巣が確認されている。ここでは2011年にイソヒヨドリの姿がカワセミ会の会員により観察されていたので、2011年以前からも営巣していた可能性はある。場所は南大沢三井アウトレットの34番の屋上。北側の首都大学が主な餌場となっている。

(14) No. 14 南大沢駅付近のイトーヨーカ堂・大型量販店

2012年から営巣しているらしいことが観察されていて、2015年に初めて営巣が確認された。2015年の5/21に80分間の観察、巣があるはずと探す。最初は立体駐車場を見張っていたが、屋上の方に餌

を啜え、オスメスが出入りするのを突き止める。ただ、屋上の巣のあると思われる所は立入禁止で近づけないので、具体的な場所は不明である。80分間にオスとメス各4回餌を啜えて巣のあると思われる場所に入って出てきた。

(15) No. 15 八王子市別所（ぐりんうおーく多摩）・大型量販店

2013年に量販店内で初めて営巣が確認された。2014年も営巣が確認されたが、2015年以降は営巣が確認されていない。ここでは2012年にイソヒヨドリの姿がカワセミ会の会員により観察されていたので、2012年以前からも営巣していた可能性はある。以下は2013年の繁殖期の倉本修の観察記録である。

4月23日：量販店の屋上のフェンスの上にいるオスを発見。

6月3日：屋上駐車場の空調設備付近でフライキャッチで虫を捕まえ、屋上駐車場と入口スロープに間に懸かっている鉄筋コンクリートの橋梁の下の約1m位横幅のある隙間へ虫を啜えたまま出入りするメスを観察。

6月4日：量販店の地上駐車場で巣立ちヒナ2羽にフライキャッチして虫を捕え給餌するメスを観察。

2014年の観察記録は以下のとおりである。

4月19日：メスが屋上外壁の内側にある排水管の隙間に入ったところを観察（さえずりは弱く途切れがち）。

5月27日：グラウンドのフェンスの間のブッシュに虫を啜えオスとメスが交互に何度も飛びおりて行き、その先で幼鳥らしき声を観察（巣立った模様）。

5月28日：オス、メス、幼鳥1羽を前日と同じ場所で観察。さらに屋上の西北角の外壁の内側にメスが虫を啜えて入って行くのも観察。

5月30日：前日と同じ場所でオス、メス、幼鳥3羽に給餌を観察。

6月1日：オス、幼鳥2羽に給餌を観察（メスと幼鳥1羽は観察できず）。

6月3日：オス、メス、幼鳥2羽を観察（幼鳥1羽は観察できず）。

2013、2014年ともに巣立ちを観察、2013年は2羽、2014年は3羽が巣立った模様である。2015、2016年は営巣が観察されなかった。

(16) No. 16 谷地川新旭橋付近・工業団地

2012年の1年だけの営巣確認である。場所は日野市栄町の工場団地内。営巣が確認された付近（特に谷地川の新旭橋付近）では1997年から主に非繁殖期に単独個体がカワセミ协会会员によってほぼ毎年観察されていたので、2011年以前からも営巣していた可能性はある。

以下は2012年の繁殖期の福本健他の観察記録である。

- 5月12日：谷地川の新旭橋周辺で、何かを啜えてフェンスに止まっているメスを観察（自ら食べようとしていないので、付近で繁殖していると推測）。
- 5月20日：新旭橋の上流の工場管理棟前の電線に飛んで来て止まるオスを観察。前日観察のメスと合わせてペアであることを確認。
- 5月23日：新旭橋近くで営巣地を探した結果、工場内の3階建てのビルの非常階段の上で水浴びした後の羽づくろいをしているオスを発見、この近くに巣があると推定。
- 6月1日：23日に観察した非常階段で巣立ち直後のヒナ2羽+αに親の給餌を確認。工場事務所に確認を依頼したところ、非常階段の2階と3階の間の踊り場の下に巣があって、巣立ったとのこと。

(17) No. 17 日野市日野台・工場

2014年に工場内で初めて営巣が確認された。ここでは2005年からイソヒヨドリ姿のカワセミ协会会员により観察されていたので、2013年以前からも営巣していた可能性はある。

以下は2014年の繁殖期に神谷古牧の観察記録である。

- 5月13日：4階建ての工場建屋（一般のビルの7階建て相当）の屋根の上にあるアンテナに止まって鳴く姿を観察。
- 6月9日：工場内の電線にオス1羽が止まってさえずっている姿を観察（距離は僅か20m程度）。
- 7月16日：工場内の電線にオス1羽が止まってさえずっている姿を観察（距離は僅か10m程度）。7月21日：工場敷地内でメス親1羽と巣立ち直後のヒナ4羽連れを観察。メスは何かを啜え、そこに巣立ちヒナが現れ給餌。

巣立ち直後の親子連れが観察されたので、「営巣した」と判断したが、具体的な営巣場所は不明である。また、2016年に細田富美代が4/6、9、10に同工場内の北西ビル屋上アンテナで3日間、朝10分くらい鳴いているのを観察、その後声も姿も観察できなかったが、近くに別の巣があると推定した。

(18) その他の場所

八王子・日野市内で営巣が確実に確認されたのは上記17ヶ所である。鳥信には他の場所での観察記録もあるので、さらに数ヶ所で営巣していると推定されるが、現時点では営巣場所は確認できていない。

5. 繁殖行動

(1) 繁殖時期、巣立ちヒナ数

八王子・日野では、3月頃からオスの求愛ディスプレイ（さえずり）が観察され、4月に巣材運び、5月に抱卵が観察される。巣立ちが最も早かったのは、5月17日（2014年狭間町大型量販店）、最も遅かったのは6月26日（2010年狭間町大型量販店）であった。巣立ちヒナ数は、詳しい調査をしていないが、観察結果では2羽～3羽である。

(2) 餌を捕る範囲と内容

巣のごく近く（100～200mぐらいの範囲）で採餌している。子育てのための給餌には植物（桜の実、下の写真）からトカゲ、バッタ、ガの幼虫、ゲジゲジ、ムカデの仲間などを地上で捕って巣によく運んでいる（写真判定）。巣の近くで空中を飛んでいる虫をフライキャッチしている姿も観察される。

巣立ち直後のヒナにサクラの実を給餌



(3) 単独営巣

八王子・日野市内で営巣が確認された17ヶ所は単独の営巣である。しかし、何ヶ所かは近くでも営巣しているので、これは「ゆるい集団」の営巣といえるのか、今後の継続観察の課題としたい。

(4) 人との距離

人を恐れない大胆な行動というか、人を恐れず人の直ぐ近くにやってくるのが度々ある。例えば2013年1月7日、朝7時50分、JR八王子駅3番線ホームで東京行の電車を並んで待っている列の足元にイソヒヨドリのオスが飛んで来るといような行動が観察されている。

一方、巢中のヒナへの餌運び時は、強い警戒心を示す。餌を咥えて巢の近くに来てても巢のある方向を見ている人が近くにいるとストレートに巢に入ることはなく、巢と他の方向に飛んで行ってしまふ。このため、餌運び中の巢を観察する時は、親にストレスをかけないように観察者が身を隠す注意が必要である。

6. 山間地、山間地に近い地域でも観察

八王子、日野に進出してきているイソヒヨドリは、ほとんどが市街地での観察であるが、山間地に近い以下の場所でも観察されている。市街地以外の山間地に近い河川上流部でもイソヒヨドリが観察されることは、大変興味深い。

八王子・日野に進出してきているイソヒヨドリの繁殖が確認されているのは2016年の時点では市街地だけであるが、今後は山間地に近い所まで繁殖分布を拡大させる可能性があることを示唆しているものと思われる。

- ①2009年9月14日 1羽オス、恩方育成園
- ②2014年8月15日 1羽メス、小仏川の摺差付近
- ③2014年8月28日 1羽オス、小仏川の摺差付近
- ④2014年10月4日 1羽、北浅川の松竹橋付近
- ⑤2015年7月2日 1羽メス、鑑水中学校の屋上
- ⑥2015年11月7日 1羽、北浅川の松竹橋付近
- ⑦2016年1月13日 1羽オス、西寺方町の野菜畑

この他にも八王子では1977年5月1日に山間地の小仏城山山頂にあるNTT城山無線中継所に止まっているメス1羽の観察が報告されている(有田一郎、都市鳥ニュース No.17、2014)。また、国土交通省のダム環境データベースにイソヒヨドリが北海道を除く全国の内陸のダムで観察されていることが報告されている(柴田佳秀、都市鳥ニュース No.13、2012)。2010年に群馬県藤岡市南部の下久保ダムで繁殖(2011/1-2 群馬県支部報)という報告もある。

7. 近隣地域への進出の様子

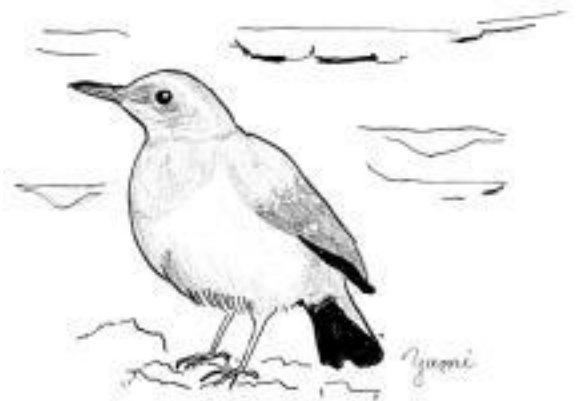
以下の情報は、カワセミ会会員からの情報の他、カワセミ会のホームページで呼びかけている情報提供に依って各地から寄せられたものである。

近年内陸に進出してきたイソヒヨドリは面的でなく、スポット的であるという特徴がある。中でも鉄道駅の周辺に営巣する傾向が強く、中央線沿線の駅周辺が大変興味深い。2015年までにJR中央線では八王子駅、高尾駅、相模湖駅、藤野駅、大月駅と営巣が確認されている。2016年には西八王子駅の他に、東京駅、笹子駅、石和温泉駅前でも繁殖期に姿が見つかった。

中央線以外でも横浜線(八王子みなみ野駅、橋本駅)、京王線(狭間駅、南大沢駅、若葉台駅、聖蹟桜ヶ丘駅、多摩センター駅)、小田急線(秦野駅、渋沢駅、箱根湯本駅)、成田空港(第一ターミナル展望台)などでも確認されている。

関東周辺ではこの他に駅周辺以外でもイソヒヨドリの観察記録が多数寄せられている。イソヒヨドリの内陸への進出は八王子、日野市域だけでなく、近隣の地域でも同じような傾向であることが読み取れる。

なお、2015年9月19日に開催された日本鳥学会2015年度大会の自由集会「イソヒヨドリに関する集会(都市鳥研究会主催)」で、「関西のイソヒヨドリの内陸部への繁殖拡大」が大阪市立自然史博物館の和田岳氏から発表があり、関西地域でのイソヒヨドリの内陸部への進出は関東地域より概ね10年早かったことが明らかにされた。関西の動向をみると、関東でもイソヒヨドリの内陸への進出はやがて珍しくなくなっていくものと推定される。



Ⅹ. ガビチョウ他の外来鳥の分布拡大調査

1. ガビチョウとは

ガビチョウは外来種で、外来生物法で特定外来生物に指定されている。大きさはツグミ大で眼の周りから眉毛のように伸びる白い模様が目立つ鳥である。雑木林の藪の中や見通しの悪い林の中のような所が好きで、独特の大きな声で鳴き続ける。

中国南部から東南アジア北部にかけて広く生息し、日本には、ペットとして輸入された個体がかご脱げにより定着したとされている。日本国内では留鳥として生息し、南東北、関東、中部、九州北部で見られる。浅川流域での初認記録は、カワセミ会の観察では1994年5月1日に八王子市上恩方町の「下案下」バス停付近のものである。

2. 分布の広範な拡大

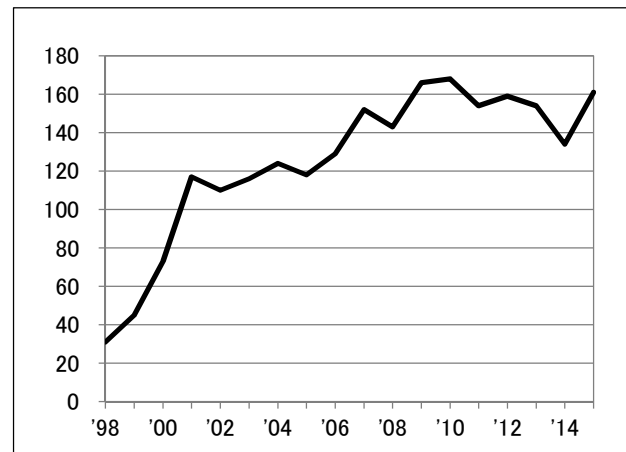
以下の表は、カワセミ会が毎年1回のペースで実施している定期カウント結果からガビチョウを抜き出したものである。数値はコース別に各年12ヶ月の内の最大カウント羽数（最大値）を記録した月のものである。初認翌年の1995年に多摩川の滝山城跡下コースで1羽がカウントされた。3年目の1997年には約半分の9コースでカウントされ、早くも11年目の2005年までには20コース全域に拡大した。単年で全コース完全にカウントされたのは16年目の2010年である。

コース別では、多摩丘陵の一角にある長沼公園が最も多く、浅川・鶴巻橋～大和田橋が最も少ない。多い所は長沼公園の他に小宮公園、北浅川、多摩川（滝山下・谷地川合流付近）、高尾山など樹木や藪の多い所である。少ない所は浅川の中下流部の市街地付近である。

カワセミ会では、野鳥の定期カウントとは別に、野鳥の出現情報を鳥信として記録している。この鳥信では観察場所を国土地理院2万5千分の1地形図（日本測地系）の縦横それぞれ10等分して得られるメッシュで整理している。八王子・日野の行政区には225メッシュが含まれるが、2015年までにガビチョウが出現したメッシュ数は172となった。これを225で除すると、76%となる。別の表現をすると、ガビチョウは2015年までに八王子・日野市地域の76%の地域に分布を広げたことになる。

3. 1990年代後半の急激な増加

次図は定期カウント20コース計の年最大値の経年変化である。1994年に始めて観察され、1990年代の後半に急激に増加し、7年目の2001年には100羽を越えた。その後も増え続け2010年にピークを迎え、以降は横ばい状態になっている。



4. 繁殖行動

カワセミ会の鳥信には 2015 年までにガビチョウの繁殖記録が 21 件寄せられている。内訳は次表のとおりで、巣作り（巣材運び）、親子連れが各 6 件で最も多い。成鳥の餌運び 4 件のうち、啜えているものが青虫と確認できたものは 3 件あり、ガビチョウは青虫を子育てに使っていることが観察された。

観察されたガビチョウの繁殖行動

繁殖行動の内容	観察件数
繁殖期に営巣し得る環境の場所で連日さえずり	1
交尾	1
巣作り（巣材運び）	6
成鳥の餌運び	4
親子連れ	6
巣立ち直後の雛	2
巣立ち直後の巣の発見	1
計	21

営巣している場所は、丘陵地が最も多いが、住宅地にも営巣している（下表）。ガビチョウは山間地、丘陵地、河川敷、住宅地等どこにでも営巣していることが窺える。このことがガビチョウの広範な地域への進出の原因の一つになっていると推測される。

観察されたガビチョウの営巣場所

営巣場所の区分	観察件数
高尾山他の山間地	4
多摩丘陵他丘陵地	9
浅川他の河川敷	3
住宅地	5
計	21

観察された 21 件のうち、6 件については巣のあった環境が明らかになった（下表）。雑木林の藪の中の巣は 1 件だけであるが、これは目立たないことによるもので、実際にはもっと多いものと思われる。住宅地の庭の植木にまで進出していることが注目される。

観察された巣のあった環境

巣のあった環境の内訳	観察件数
雑木林の藪	1
河川の藪	2
庭の植木	3
計	6

5. 習性

（1）集団での行動と鳴き交わり

ガビチョウは単独でいることは稀である。カワセミ会の鳥信によれば 10 羽程度の小集団で行動していることが多い。このような集団は大きな声で鳴き交わしていることが多い。また、ムクドリと同じような声の地鳴きをする。

（2）人との関係

ガビチョウが進出してきた 1990 年代の後半の頃は、警戒心が強く、声は聞こえても姿を見せることは少なかった。姿を見せても 30～50m 以内に近づくことはできなかった。しかし、ガビチョウの数が増加するとともに大胆になってきた。カワセミ会の鳥信 2003 年には「川口丘陵で約 4m に近づいても囀っていて逃げない」という記録も出てきた。この頃になると、住宅地の庭にまで進出してきた。

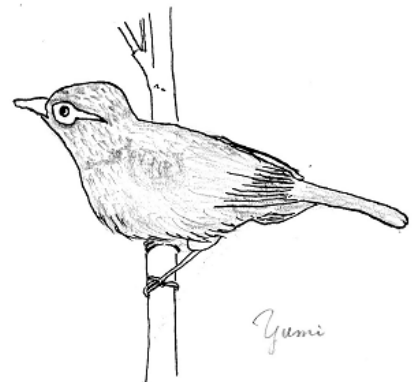
（3）食べ物

ガビチョウは何を食べているか。冬は藪の中で落ち葉をかき回す採餌活動が多く観察されている。落ち葉の下の虫を食べているのか、木の実などを食べているのか不明であるが、落ち葉を高く舞い上げる行動は独特である。冬以外の季節では、ヒマワリの種、ミゾソバの実、ムクドリの卵、オニグルミの実、虫等が食べられている例が観察されている。

このような採餌行動から推察するとガビチョウは雑食性のようなものである。子育てには上記の通り青虫が利用されている。その他のものも利用されていると考えられるが内容は不明である。

（4）他の鳥の真似し鳴き

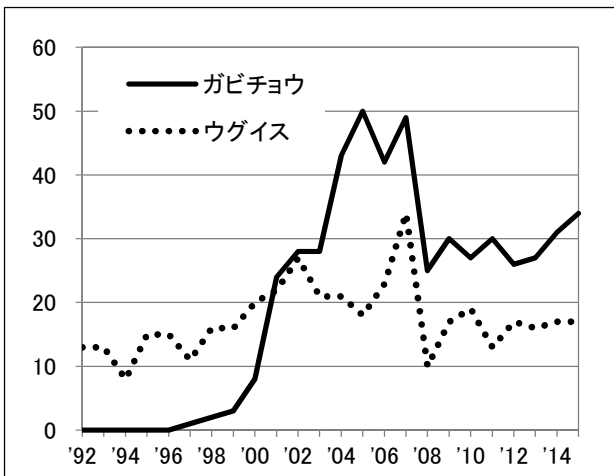
ガビチョウのさえずりはクロツグミやイカルのさえずりに似たところがある。この他にも他の鳥に似たさえずりが観察される。カワセミ会の会員が観察したものではサンコウチョウ、ヒヨドリ、ヤマガラ、サシバ、ウグイスの地鳴きとさえずりが報告されている。



6. ガビチョウと在来鳥との競合

ガビチョウは丘陵地の雑木林や山林のブッシュを特に好む。このような所は、冬はシロハラ、アカハラ、トラツグミ、ウグイス等が、夏はウグイス、クロツグミ等が子育てのために餌場になっているため在来種への影響が心配される。

ガビチョウが最も多く観察される長沼公園の定期カウントデータでガビチョウとウグイスの羽数（年最大値）をグラフ化したものが次図である（ウグイスの羽数はさえずっているオスがカウントされているので、実際はこの羽数より多い）。このグラフからウグイスの羽数にガビチョウの進出が関係ありそうにもみえるが、本当にそうであるかの判断は難しい。



7. その他の外来鳥

(1) カオグロガビチョウ

ガビチョウより一回り大きい。全体に灰褐色で、下腹の橙色がかった淡色部が目立つ。比較的地味。複雑な音色でよくさえずる。

浅川流域での初認は、カワセミ会の観察（鳥信）ではガビチョウより1年早い1993年で北浅川の松枝橋から松竹橋付近で3件の記録がある。しかし、その後の分布拡大はガビチョウのような傾向はなく、北浅川では翌年の1994年に1件、約10年後の2004年に1件あるだけで、その後の観察記録はない。この場所から姿を消してしまったようである。

2006年から多摩川流域で観察されるようになった。主な場所は日野市東光寺グラウンド、谷地川合流付近、右岸中央線鉄橋上流側、昭和用水堰付近、高月水田付近、秋川合流付近等である。この付近一帯ではほぼ毎年観察されるが羽数の増加はない。

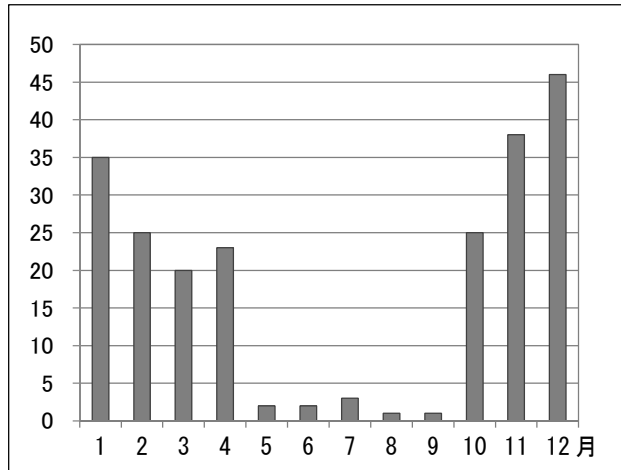
2006年以降、多摩川流域以外では2010年10月に高尾山大平林道で1羽が観察されただけである。

(2) ソウシチョウ

ソウシチョウは、スズメと同じくくらいの大きさの小鳥である。背面の羽毛は暗緑色、眉斑から頬は薄い黄色、咽頭部の羽毛は黄色で胸部は濃いオレンジ色、翼に黄色と濃い赤の斑紋がある。赤いくちばしと翼の赤の斑紋が特に目立つ。

浅川流域での初認は、カワセミ会の観察（鳥信）ではガビチョウより2年遅い1996年で、この年に高尾山、長沼公園、滝山城跡公園で観察されている。その後も毎年数ヶ所で観察されているが、ガビチョウのような急激な羽数の増加はない。観察される場所は高尾山等の山間部、長沼公園等の丘陵地が主で平場の緑地にも時々姿を見せる。10羽以下の小集団でいることが多い。

カワセミ会の鳥信には2015年までに221件が登録されている。観察された時期は10月から翌年の4月までが殆どであった（次図）。



5月から9月の間の繁殖期には僅かながら観察記録はあったが、2012年までは繁殖の記録は無かった。しかし、2013年7月8日、カワセミ会会員が高尾山6号路飛び石道から階段道に移行する付近で、ソウシチョウ親の騒がしい警戒音を聞いた。そこには巣立ち直前と見られ、飛べない雛1羽が地上の草の中にいた。雛が巣から1羽が落ちてしまったものと思われた。また、別の会員は2013年7月13、16、19日に多摩丘陵（片倉町の東京工科大学裏の林）で巣立ち直後の雛連れと思われるソウシチョウを観察した。このように八王子では従来は冬鳥と見られていたソウシチョウの繁殖が確認されるようになった。

第7章 その他の調査

I. 猛禽類の繁殖調査

八王子・日野市域で繁殖が確認されているか、又は繁殖していると推定される猛禽類は、ワシタカの仲間がハチクマ、トビ、ツミ、オオタカ、サシバ、ノスリ、クマタカ。フクロウの仲間がフクロウ、アオバズク。ハヤブサの仲間がチョウゲンボウである。

なお、猛禽類の繁殖行動の観察は、小人数で行い、巣に近寄らない等細心の注意を払っている。

1. ハチクマ

八王子市内でハチクマの営巣につながる情報はあがるが、具体的なことは確認されていない。

2. トビ

1990年代に川口丘陵天合峰、2003年に滝山丘陵で営巣（巣中にヒナあり）記録がある。その後も繁殖の行動は観察されているが、確かな営巣記録は無い。2016年に日野市内で鉄塔に営巣するトビが観察された。

3. ツミ

八王子、日野市域でツミの営巣（巣立ち）が初めて確認されたのは1991年で、場所は日枝神社（八王子市川口町）、1992年まで2年間営巣（巣立ち）を確認したが、その後は消滅した。ツミが営巣する場所は、公園、街路樹、神社境内、企業の工場敷地内等で公園が最も多い。2010年代になっても毎年数ヶ所で営巣し巣立ちが確認されている。ツミの巣の近くにオナガが営巣する例が多い。

4. オオタカ

1990年代以降でオオタカの営巣（巣立ち）が初めて確認されたのは1993年川口丘陵の天合峰、続いて1994年多摩丘陵の宮嶽の谷戸である。以降、丘陵地を中心に毎年数ヶ所で営巣し巣立ちが確認されているが、最近の営巣数は減少傾向にある。

5. サシバ

1990年代に八王子西部で2件の営巣（巣中にヒナ有り）記録があるが、その後の記録はない。

6. ノスリ

2001年、2004年、2005年に八王子西部で営巣（巣中にヒナ有り）の記録がある。その他、求愛ディスプレイ飛翔の記録がある。

7. クマタカ

1950年代に八王子西部で営巣の記録（巣立ち）がある他、2000年代以降も八王子西部で営巣（巣立ち）の記録がある（御手洗望他、八王子市史研究、八王子市（総合政策部市史編纂室）、2011）。

8. フクロウ

川口丘陵、多摩丘陵で営巣（巣中にヒナ有り）の記録がある。高尾山でも巣立ち雛連れの観察記録がある。今でも繁殖期に声を聞くことがあるので、丘陵地等では繁殖しているものと推定される。

9. アオバズク

八王子市内、日野市内で数例の営巣記録（巣立ち）がある。

10. チョウゲンボウ

市街地で営巣する例、丘陵地の建物で営巣する例、河川の人工構造物で営巣する例がある。市街地で営巣する例はJR八王子駅付近のビル5階裏側の通気口に営巣したもので1997年以降毎年営巣（巣立ち）し、2011年になっても継続していた。

丘陵地の建物で営巣する例は、1990年代に大学の体育館に営巣（巣中にヒナ有り）したもので、現在の状況は不明である。

河川の人工構造物で営巣する例は、1990年代に浅川の新浅川橋の記録（親の巣への出入り、巣立ち直後のヒナ連れ親子）がある。多摩川では、2011年に立日橋のモノレールのレールジョイントに営巣（巣への餌運び）した記録がある。



オオタカ

Ⅱ. 野鳥の集団ねぐら調査

八王子・日野地域で集団ねぐらが観察される野鳥はカワウ、ゴイサギ、アオサギ、コサギ、ヒメアマツバメ、ハンボソガラス、ハシブトガラス、ツバメ、イワツバメ、ムクドリ、スズメ、ハクセキレイ、セグロセキレイの13種である。

なお、野鳥は集団でねぐらをとるだけでなく、繁殖も集団で行なう種があり、このような繁殖地は、集団営巣地またはコロニーと呼ばれる。カワウ、ゴイサギ、アオサギ、コサギ、ヒメアマツバメは集団ねぐらとコロニーが同一の場所に形成される。

1. カワウ

(1) 八王子のカワウの集団ねぐら（コロニー）

カワセミ会発足後、浅川でカワウが初めて観察されたのは、1989年1月、大和田橋上流水管橋である。カワウは20世紀前半までは全国的に普通に生息していたが、1970年代を底として急激に減少し、1980年代以降は再び回復したという変遷をしている。浅川でのカワウ出現は80年代以降の回復に一致する。

八王子市で初めて繁殖が確認されたのは、2009年で場所は片倉のつどいの森公園である。同公園内の調整池縁のミズキに営巣、巣が一つあり、巢中に親1、ヒナ数羽、巢外に親1を確認した。巣は1つで集団営巣にはなっていなかったが、この家族とは別に数羽のカワウが一緒にいた。翌2010年同じ場所で営巣する1巣が観察された。2011年は造巣行動が見られたものの、繁殖確認までには至らず、以降は放棄された。

2013年3月、NPO法人バードリサーチの加藤ななえ氏から片倉の東京工科大学調整池にカワウのコロニーが形成されているという情報が粕谷あてにあり、調査の依頼を受けた。

(2) 東京工科大学調整池の集団ねぐらの調査

①東京工科大学の調整池は国道16号、八王子市内から横浜方面に向かって御殿峠の手前左側の同大学内にある。ここで2013年3月から2014年3月まで毎月1回と2014年7月、2015年3月の計15回調査を行った。調査を担当したのは粕谷和夫をキャップに長谷川篤、浜野建男、渡辺正樹であった。調査はNPO法人バードリサーチ2011年5月発行の「カワウ生息状況調査マニュアル（ねぐら・コロニー編）」によって実施し、毎回、夕方からカワウのねぐら入り終了する日没後までとした。

②ねぐら入りのパターン

カワウは池に枝を張り出しているソメイヨシノをねぐらとして、また営巣木として利用していた。夕方（日没2時間前）に現場に着くとカワウは既にねぐらとするサクラに大多数が集まっていて、その後に数羽が日没までの間に帰って来るといったパターンであった。

③カワウコロニーの羽数規模とその季節変動、カワウ飛来阻止とコロニーの消滅

調査項目はねぐら入りした羽数（成鳥、若鳥別、成鳥は内数として生殖羽の羽数）、巣の数である。結果は下表の通りで、2013年3月～10月のねぐら入り羽数は30羽前後で推移し、11月は8羽に減少したが、12月には55羽と一挙に増加した。

東京工科大学調整池のカワウコロニー調査結果

年/月/日	既にねぐらにいた数				調査時に帰ってきた数					ねぐら入り合計羽数					巣の数			巢中の雛数
	計	成鳥	生殖羽内数	若鳥	計	成鳥	生殖羽内数	若鳥	不明	計	成鳥	生殖羽内数	若鳥	不明	計	造巢中	営巣中	
2013/3/27	21	16		5	8	3		5		29	19		10		7	1	6	
4/26	21	12		9	6	4		1	1	27	16		10	1	4		4	
5/28	31	15		16	2	2		0		33	17		16		6		6	
6/25	22	17		5	5	3		2		27	20		7		2		2	
7/26	18	16		2	2	1		1		20	17		3		3		3	1
8/26	26	19		7	1			1		27	19		8		0			
9/24	33	28		5	0					33	28		5		0			
10/23	37	27		10	1	1				38	28		10		0			
11/19	8	8		0	0					8	8		0		0			
12/24	45	40	10	5	10	9		1		55	49	10	6		4		4	
2014/1/21	0				3				3	3				3	0			
2/25	0				2				2	2				2	0			
3/18	0				9				9	9				9	0			
7/11	0				0					0					0			
2015/3/24	0				0					0					0			

しかし、翌年1月以降は激減し、2014年7月以降は0羽になってしまった。これは、大学がカワウ飛来阻止の措置を取ったため、池の上に糸が張られ、ねぐら樹の桜にはブルーとグリーンのビニールテープが張ってあった。12月のカウント時にはこのような措置はしてなかったため、その後措置されたものである。2014年1月21日の16時10分調査開始時点にはカワウは1羽もいなかった。16時30分に2羽が北から飛来したが、数回旋回しただけで西の方へ飛び去ってしまった。16時45分に9羽が北から飛来したが、数回旋回しただけで西の方へ飛び去ってしまった。17時7分に6羽が北から飛来し、うち3羽が先月までと違う場所（テープが張られた場所から離れた所）に入り、3羽は西の方へ飛び去ってしまった。

翌月以降も大学によるカワウ飛来阻止は続いていて、2014年7月以降は放棄された状態になっている。

④カワウの営巣

池に張り出したソメイヨシノの枝に営巣していた。調査開始当初の2013年3月に7巣あったが、翌4月には4巣に減っていた。翌5月には南側に新たに2巣できて、6巣になった。翌6月には4月までにあった4巣が全て放棄され(原因不明)、5月にできた2巣だけになった。翌7月には新たに1巣が出来て3巣となった。翌8月以降11月までは、巣は全て空になっていた。

12月になると次の繁殖期に入ったためか、生殖羽の個体が10羽いて、新たに4巣が確認され、巣中に親がいた。しかし、上記③で記述の通り1月以降大学により飛来阻止の措置が取られたため、巣も放棄された。

⑤八王子市のカワウは東京湾生まれ、餌場は南浅川

ねぐら入りしたカワウに黄色のカラーリングを付けたカワウが2羽観察された。カラーリングには、A97、33Rの文字が刻印されていた。NPO法人バードリサーチに確認したところ、A97は2003年3月に東京湾の行徳鳥獣保護区で標識されたもので行方不明になっていたもの、33Rは2011年5月20日に東京湾の新木場で雛に付けられたもので、2歳になる新木場生まれであることが判明した。

カワセミ会の会員により、33Rは南浅川の舟田川との合流地点の堰でも観察され、南浅川が餌場として利用されていることが判明した(カワセミ会鳥信)。両者の直線距離は約5kmである。

2. サギの仲間

八王子・日野地域では、ゴイサギとコサギが混じるコロニーが数ヶ所観察されたが、2016年時点まで継続しているものはない。

ゴイサギの小規模な集団ねぐらは時々観察されるが、長続きしていない。コサギの集団ねぐらも時々形成されるが、これも単発的で直ぐに消滅してしまう。コサギの集団ねぐらにはダイサギも混じる。

アオサギのコロニーは2ヶ所あり、2016年も継続している。

(1) 東豊田緑地保全地域(ゴイサギ)

日野の自然を守る会会員でカワセミ会の会員でもある金子凱彦は、日本野鳥の会研究部(当時)の成末、黒沢と日野市周辺のスギのコロニー調査(東豊田緑地保全地域ゴイサギ等対策調査)を行った。結果は日本野鳥の会委託調査「東豊田緑地保全地域ゴイサギ等対策調査報告」として1993年に報告書がまとめられた。

本報告書によれば、日野市東豊田緑地(1975年に東京都に指定された緑地保全地域)の段丘崖の西端に位置する清水谷公園にゴイサギのコロニーが形成された。ここで最初にゴイサギの繁殖を確認したのは1992年5月(金子)である。規模は40巣から50巣の小規模である。同年9月から1993年3月下旬までの生息数の調査結果では、繁殖後の渡りを始める時期(9月)には減少し、春には最大150羽と増加した。コサギが1992年にゴイサギのコロニー内に2羽いたが、繁殖したかどうかは不明である。

金子等は、安らぎや愛情の対象としてのサギ類(散歩、給餌、バードウォッチング等)と、嫌悪する対象としてのサギ類(騒音、悪臭)について人間との関係、糞による植物の枯死についての植生への影響について言及している。結論として、「サギ類が集団で繁殖するコロニーの存在は、豊かな水辺とともに営巣可能な緑地があることを示していること、サギ類のコロニーは、日野市の行政テーマである「緑と清流」のバランスのとれた生態系のシンボルである」ことを提示している。さらに、サギのコロニーの持続のためには、市民の理解と環境教育(看板、広報、調査協力等)と被害の対策(消臭、騒音対策)、植物の保護対策、コロニーの分散と代替地の検討等を提言している。

なお、本報告書では、当時、日野市新井橋の林でコサギ約20羽とゴイサギ少数の繁殖の確認が記載されているが、その後多摩モノレール建設工事で消滅してしまったようである。

(2) 程久保川の中程久保橋付近 (ゴイサギ)

1996年6月10日に程久保川の中程久保橋30m下流地点の北北西200mの竹・雑木に営巢中のコロニーを観察したが、その後の状況は不明である。

(3) 日野市の旭が丘小学校の西側竹林 (ゴイサギ、コサギ)

1994年～1995年の頃にコサギ主体でゴイサギの混じるコロニーが形成されていたが、その後消滅した。規模は不明であるが、コサギ20羽～30羽程度と推定された。

(4) 日野市の浅川左岸・中央線鉄橋付近の竹藪 (ゴイサギ、コサギ)

1995年～1997年の頃に100羽以下の規模のゴイサギ主体でコサギの混じるコロニーが形成されていた。この竹藪はその後、伐採され、賃貸住宅が建てられた。

(5) 八王子市大和田1丁目の関根神社付近 (ゴイサギ、コサギ)

1996年6月30日にゴイサギ約60羽、コサギ約30羽のコロニーが観察されたが、翌年以降は消滅した。

(6) その他のゴイサギの屋間の集団ねぐら

ゴイサギは非繁殖期に屋間、小規模のねぐらを形成するが、長続きはしない。

- *1 浅川・平山橋北の林 (1995年2月19日、12羽)
- *2 浅川長沼橋上流左岸湿地 (さいかち池、2012年12月2日成鳥5羽、若鳥5羽)
- *3 日野市神明町・JR中央線に架かる神明橋脇の緑地 (2012年2月1日から2013年3月14日にもちの木をねぐらにしていた。その後、木が雪で倒れ切られてしまった)。

(7) コサギの集団ねぐら

コサギは非繁殖期に小規模のねぐらを形成するが長続きはしない。ダイサギが混じることがある。

- *1 浅川・新井橋下流右岸の竹林 (1999年12月12日、竹林に入った合計：ムクドリ650羽位、コサギ70羽位、ダイサギ2羽、ムクドリは電線に止まってから、コサギはそのままねぐら入りした。)
- *2 浅川右岸浅川大橋付近・元横山公園のヒマラヤ杉 (2013年10月16日から2014年3月29日まで観察、この間最大60羽のことがあった。ダイサギも少数まじる。その後、ヒマラヤスギ3本の枝が落とされ上部が丸

裸の木になり、コサギは来なくなった。)

(8) 多摩動物公園 (アオサギ)

多摩動物公園で飼育下でない野生のアオサギのコロニーが約70巣あり、トンボ橋上からニホンサルヤマの西側に続くコナラ、サクラの雑木林で集団営巢している。そのうち約半数の35巣で造巢中のものや巢中にあるものを確認したことがある (2003年4月4日)。規模は年により変動するが、2016年も営巢している。

(9) 日枝神社・陣馬街道切通しバス停付近 (アオサギ)

日枝神社の小規模な杉林に営巢している。2000年代以降にコロニーの存在を確認した。毎年10巣～20巣の規模で2016年も営巢している。

3. カラスの仲間

八王子・日野市域にはハシボソガラスとハシブトガラスがほぼ半数ずつ観察され、両種とも同じ場所で集団ねぐらを形成するが、同じねぐらの中でねぐら入りする範囲は微妙に住み分けているようである。

今までに観察された主な場所は以下の5か所である。

(1) 加住南丘陵 (八王子市谷野町)

1998年11月3日に約700羽 (ハシブトガラス500、ハシボソガラス200) が雑木林にねぐら入りするのが観察された。1998年前後にこの付近で集団ねぐらが観察されたが、その後は消滅した模様である。

(2) 南高尾尾根 (初沢町)

2002年11月6日に高乗寺付近でハシボソガラス主体の約1,000羽のねぐら入り観察された。2002年前後にこの付近で集団ねぐらが観察されたが、その後は消滅した模様である。

(3) 八王子市大船町

相武カントリー倶楽部に集団ねぐらがあり、2015年時点でも観察されているが、詳細は不明である。

(4) 小宮公園付近

2004年9月8日に約250羽 (2種混在) がひよどり中学校屋上と道を挟んだ小宮公園横の林に集まり、2回ほど一斉に小宮公園上空に舞い上がりその後林にねぐら入り観察された。以降はこの場所での観察記録はない。

(5) 多摩動物公園

2015年時点でも集団ねぐらが観察されているが、詳細は不明である。

4. ツバメ

ツバメの集団ねぐらは、主として大きな川の河原や湖のほとりのまとまったヨシ原等に形成される。八王子、日野市域には2ヶ所の規模の大きな集団ねぐらが観察されている。

(1) 多摩川の日野用水堰（通称「平の堰」）

この場所に集団ねぐらが形成された時期は2000年から2003年の頃で、カワセミ会のカウント調査で2002年のピーク時に約28,000羽がカウントされた。しかし、2004年に激減し、2005年以降は消滅した。

このねぐら地は、八王子側はヨシ原が後退しヤナギ等への遷移が進んだこと、昭島側は「水辺の楽校」の造成で人工化が進んでいること等が消滅の原因と推定された。

(2) 多摩川右岸・多摩大橋下流の河原

場所は日野市東光寺グラウンドから見てほぼ北側の河原で、ニセアカシアを中心とする林になっていた場所である。2014年の春に国土交通省京浜河川事務所によってニセアカシアが伐採され、その跡地にヨシ原が形成されたため、ツバメが集団ねぐらとして利用するようになった。2014年は多数のツバメが夕方飛来していることが観察されたが具体的なねぐら場所は特定できなかったが、2015年に特定できた。規模は約3万羽と推定された。2016年は当初は2015年と同じ場所に集団ねぐらが形成されたが、このねぐらは7月下旬になって約700m上流側の通称ひょうたん池の周りのヨシ原に移動した。

5. ムクドリ

ムクドリの集団ねぐらは巣立ち雛が増える頃から冬季に形成されることが多い。八王子・日野市域では街路樹や竹藪等に形成されが、長続きするものは殆どなく、数年で移動するものが多い。ここでは1,000羽以上の規模のものを取り上げる。

(1) 南浅川・南浅川橋下流側約500m右岸の竹藪

1994年9月23日に約1,000羽が竹藪に入った。

(2) 多摩川右岸・滝山城跡北側の河川敷の竹藪

1996年12月15日に約1,000羽が竹藪に入った。

(3) 多摩川・日野用水堰上流側の中州の林

2002年4月13日に約5,000羽がニセアカシアの林に入った。

(4) 八王子市左入町の竹林

2003年12月28日に約1,000羽が竹林に入った。

(5) あったかホール（北野余熱利用センター）前のけやき並木

2009年8月25日に3,000羽以上がケヤキに入った。

(6) 川口川・左岸唐犬橋上流安養寺の竹林

2011年10月29日に境内の竹林に1,000羽以上がねぐら入り。オナガも数羽同じ竹林で鳴いていた。

(7) 日野市大坂上1丁目8（日野駅下り方向右手の線路脇の竹藪）

2011年11月10日に1,000羽以上が竹藪に入った。

(8) 多摩川・多摩大橋右岸下流の通称ひょうたんいけ付近の竹藪

2012年10月14日に2,000羽以上が竹藪から一斉に飛び出した。朝5時42分。

(9) 八王子駅北側・子安神社境内の林

2013年8月21日に1,000~1,500羽（推定）が境内の樹冠部に一斉に飛び込んだ。

(10) JR八王子駅北口・パーク壱番街の街路樹

2013年から集団ねぐらがこの街路樹に形成された。樹種は落葉樹のナンキンハゼである。2013年10月19日のカウントでは約3,000羽の規模であった。落葉樹であるため葉が落ちる冬季はムクドリがいなくなるが、翌2014年も夏以降に3,000羽規模のねぐらが形成された。

2015年は八王子市（道路交通部補修センター）により、ムクドリの追い払いが行われた。そこでこのような措置をとった理由を市に照会したところ、以下のような回答があった。

「数年前から八王子の中心市街地である東町周辺の市道の街路樹に多数のムクドリが飛来し、街路樹で休息することにより、街路樹の樹幹が悪くなり、糞害により樹勢が衰えるようになった。また、道路が糞による汚れと悪臭がする等の道路の利用者や周辺住民、市民の皆様から苦情が増加したことから、街路樹の剪定や防除ネットを設置するな

どもクドリが街路樹で休息しない対策を行ってきたが、効果が薄かったため、今回音等による防除を実施した。防除方法は音等による防除(音波発生装置のねぐら樹への取り付け)である」

この効果は直ぐに表れて、当地の集団ねぐらは消滅した。代って京王八王子駅直近の旧都立産業技術研究センター八王子支所跡地にねぐら地が移動した。2015年10月21日にカウントすると、ソメイヨシノを主として、隣接するイチョウ、ヒマヤスギ各1本に約2,300羽がねぐら入りした。2015年12月21日の観察では、再びJR八王子駅付近にムクドリが戻ってきた。新たなねぐら入りの場所は駅前の数本の街路樹と西放射線道路の中町の街路樹数本で、ねぐら入り前に上空をムクドリ玉になって飛ぶので羽数をカウントすると約4,000羽であった。ねぐら入りした街路樹には音波発生装置が取り付けられていなかった。

2016年もJR八王子駅付近には、音波発生装置が取り付けられていない街路樹でムクドリが集団ねぐらを作っている。ここには以前からハクセキレイの集団ねぐらがあり、ムクドリの進出でハクセキレイの一部が追い出されるという影響が見られる。

6. スズメ

スズメの集団ねぐらはムクドリと同様に巣立ち雛が増える頃から冬季に形成されることが多い。八王子、日野市域では雑木林、竹林、街路樹、孤立した木につくられ、ビルなどの人工物につくられるものもある。ここでは概ね500羽以上の規模のものを取り上げる。

(1) 北野・つくし野南公園（北野駅南口、湯殿川下田橋近く）

1997年7月27日に700～800羽位のねぐら入りを観察した。

(2) 甲州街道の都立南多摩高校前街路樹のイチョウ

2006年8月19日に500羽以上がイチョウ並木のうちの3本のイチョウに入った。

(3) 高尾駅南口「グルメシティ」の南側入口前のケヤキ

2009年8月28日に700から800羽が2本のイチョウに入った。

(4) 多摩川右岸昭和用水堰上流河原の竹藪

2013年7月16日に1,200羽以上が多摩川右岸で河口から48km道標付近の河原のハチクの竹林

に入った。

(5) 日野駅前（タクシーの待機場所の横）

2013年10月14日に約450羽がキンモクセイ2本に入った。

(6) 八王子市下恩方町・八王子繊維工業団地付近のけやきの並木

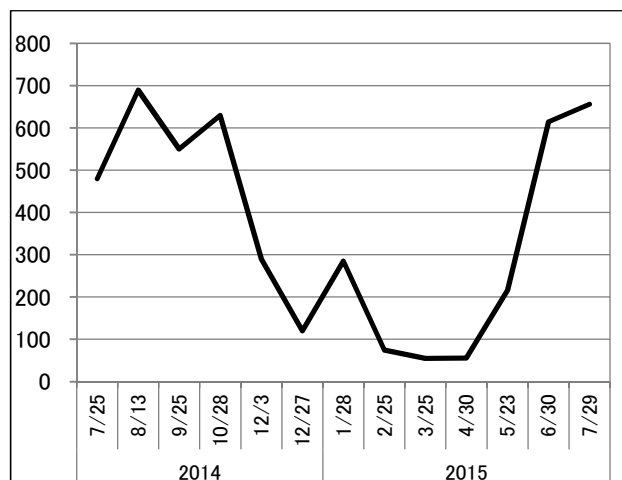
2014年7月26日に約500羽がケヤキに入った。

(7) 京王高幡不動駅南口京王高幡 SC(ショッピングセンター)・人工構造物

京王高幡 SC は高幡不動駅の大改修時の2006年に駅ビルとして完成した。この駅ビルは正面(道路側)4・5階の外壁に目隠しの鉄格子柵がある。この鉄格子柵をスズメが集団ねぐらとして利用していることを2013年12月9日に渡辺敬明が確認した。渡辺が管理会社の担当者に質問したところ、「スズメはずーっと来ているようです」との答え。ねぐら真下の店「銀ダコ」の店員さんも「2年間は間違いなく毎夕同じくらい来る」。清掃担当者も「2年間は毎日。ただ糞の量が夏場は多く冬場は少し減っているようだ。」との答え、2006年の完成以降何時からかは不明であるが少なくとも2年前からはここに集団ねぐらが形成されていることは確実である。

渡辺が2014年7月から2015年7月までの間、毎月1回ねぐら入り羽数をカウントした。結果は下のグラフの通りである。夏から初冬(7~12月)にピークとなり700羽規模となるが、その後減少して冬から早春(2~4月)が50羽台まで減少し、5月以降から夏に向かって増加することが数値として把握できた。

京王線・高幡不動駅 SC のスズメねぐら入り羽数の推移



ここには天敵のチョウゲンボウが最上部の棧に止まり、又執拗に飛び回って格子の外から狙うが、内側のスズメは完全にこれを無視し、賑やかにチ

ンチュン鳴き続けていることがある。ここをねぐらとして利用するメリットの一つに天敵対策があるのではないかと推定される。

7. セキレイの仲間

八王子・日野市域には4種類のセキレイの仲間の集団ねぐらがある。内訳はハクセキレイが数ヶ所、セグロセキレイが1ヶ所、キセキレイとタヒバリの小規模なねぐらが各1か所である。ここではハクセキレイ500羽以上の規模のものと他のセキレイの仲間のねぐらを取り上げる。規模の大きなハクセキレイのねぐらとなる木は、人により時々枝が切られたり、ハクセキレイが入らないようにネットで覆われたりするが、1~3年くらい経って、切られた枝が復活したり、ネットが破れたりするとまたねぐらが復活する。

以下(1)~(5)は、ハクセキレイについての記述である。

(1) 中町の長崎屋(現ドンキホーテ)と「ふたば商店」の間のクスノキ

2003年2月26日に840羽が1本のクスノキに入った。2007年2月7日に約780羽が同じクスノキに入った。

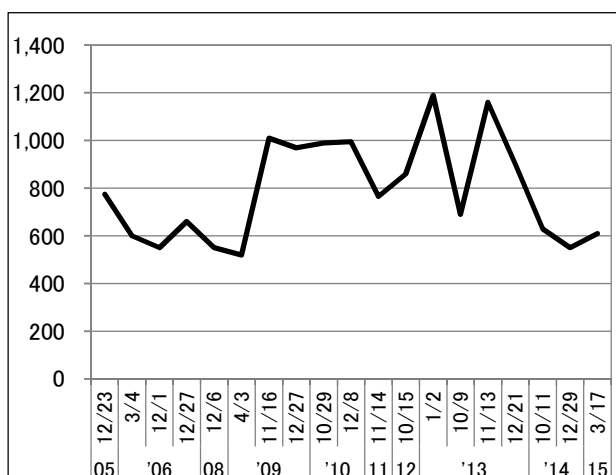
(2) JR八王子駅前京王プラザホテル前のイチョウ

2004年12月12日に約800羽が1本のイチョウに入った。

(3) JR八王子駅北口・くまざわ書店前のクスノキ

2005年12月23日に約775羽が1本のクスノキに入った。以降、2006年3月4日から2015年3月までの間、ねぐら入り羽数をカウントした結果は、下のグラフの通りである。約600羽から1,200羽の間で推移している。

JR八王子駅北口のハクセキレイねぐら入り羽数の推移



(4) JR八王子駅北口・三井住友信託銀行前街路樹のケヤキ

2007年11月21日に約525羽がイチョウに入った。

(5) JR八王子駅北口(くまざわ書店周辺のビルの屋上や窓枠等)

2015年12月21日、ハクセキレイより先に約4,000羽のムクドリが駅前の数本の街路樹にねぐら入りして、くまざわ書店前のハクセキレイの定宿となっているクスノキもムクドリが先にねぐら入りしてしまっていた。このクスノキに約300羽のハクセキレイも入ったが、他のハクセキレイはムクドリが既にいるためか辺りが暗くなった17時15分を過ぎても周辺のビルの屋上や窓枠等にとどまっていた。その羽数は約300羽であった。

(6) キセキレイのねぐら・八王子総合卸売センター(北野町)

2010年7月30日に八王子総合卸売センター前の駐車場一角にあるトイレ横の4本あるイチョウのうち、トイレ側の2本のイチョウに9羽がねぐら入り。

(7) セグロセキレイのねぐら・川町と貳分方町の桑畑

1996年に川町の桑畑に形成される150羽規模のセグロセキレイの集団ねぐらが発見された。このねぐらは1998年まで続いたが、桑畑が伐採されたので、1999年から直ぐ近くの貳分方町の桑畑に移動した。このねぐらは2016年でも続いている。2012年10月21日の161羽のねぐら入りが2016年までの間の最大である。桑の木は落葉樹であるため、霜が降りて葉がなくなるとねぐらも解消するが、このねぐらの移動先は不明である。

8. イワツバメ、ヒメアマツバメ

第6章 野鳥の種類別調査の項に記載。

Ⅲ. 浅川野鳥サンクチュアリ地域の調査

サンクチュアリ (sanctuary) とは「聖域」と訳され、「自然保護区」の意味をもっている。野生生物の保護のために定められる一定の地域を指し、特に野鳥保護のために設けられた区域をバードサンクチュアリという。

浅川ではエンドレスと思われる程河川改修が繰り返されている。今までの河川改修の歴史は河川改修の度に河川のコンクリート化が進み自然度が失われている。また、近隣の町内会等により、河川敷の清掃、草刈、花壇の設置などが行われている。これ等の活動が、野鳥の生息上重要と思われる所には過度な影響がないような配慮が必要である。

そこで、地形的な特質から自然環境の多様性に富み、多くの種類の野鳥が生息している所や希少な野鳥が生息している所をカワセミ会では 2012 年から独自にバードサンクチュアリとして選定して、生き物等の調査活動、野鳥の情報発信活動、自然体験学習、環境学習活動の拠点とすることとしている。

1. 浅川バードサンクチュアリ

選定されたバードサンクチュアリは以下の 6 地域である。選定された地域は河川の合流地、又はワンドがある場所で、他の地域から比べれば比較的自然度が高く、動植物を含めた多様性に富んだ地域である。

- ①北浅川、陵北大橋から東京天使病院裏の用水堰までの間 (八王子市)
- ②北浅川、城山川、南浅川合流地付近 (八王子市)
- ③浅川右岸萩原橋付近のワンド付近 (八王子市)
- ④浅川左岸長沼橋上流の通称さいかち池付近 (八王子市、日野市)
- ⑤浅川右岸一番橋下流のワンド付近 (日野市)
- ⑥浅川、程久保川、多摩川の合流付近 (日野市)

2. バードサンクチュアリで観察された野鳥

2012 年から 2 月、4 月、10 月の年 3 回、各地域の野鳥定期カウントを行った(2015 年まで)。また、1985 年以降のカワセミ会の鳥信から 2015 年までの各地域で観察された鳥を整理した。その結果は次表のとおりであり、鳥信に報告されたか、定期カウントで観察されたかのいずれかで 2015 年までに各地域に飛来した野鳥の一覧である。

飛来した野鳥の種類数が最も多かったのは、①北浅川、陵北大橋から東京天使病院裏の用水堰までの間で 88 種で、⑤浅川右岸一番橋下流のワンド付近も 80 種を越えた。

地域別観察された野鳥一覧(1)

第7版 番号	鳥名	1	2	3	4	5	6
		陵 北大 橋下 流付 近	南 北 浅 川 合 流 付 近	萩 原 橋 付 近 の ワ ン ド 付 近	長 沼 橋 上 流 の さい か ち 池 付 近	一 番 橋 下 流 の ワ ン ド 付 近	多 摩 川 合 流 付 近
5	キジ	★	☆	★	☆	★	☆
10	マガン			★			
22	オオハクチョウ						☆
24	オシドリ	★		★	☆	★	
26	オカヨシガモ	★			☆	★	☆
27	ヨシガモ					★	
28	ヒドリガモ	★		★	☆	★	☆
29	アメリカヒドリ					★	
30	マガモ	★		★		★	☆
32	カルガモ	★	☆	★	☆	★	☆
34	ハシビロガモ	★			☆		☆
35	オナガガモ				☆		
36	シマアジ				☆		
38	コガモ	★	☆	★	☆	★	☆
46	キンクロハジロ	★					
58	ミコアイサ				☆		
62	カイツブリ	★			☆	★	
63	アカエリカイツブリ						☆
64	カンムリカイツブリ			★			
74	キジバト	★	☆	★	☆	★	☆
127	カワウ	★	☆	★	☆	★	☆
139	ゴイサギ	★			☆		
141	ササゴイ		☆			★	
142	アカガシラサギ	★					
143	アマサギ					★	
144	アオサギ	★	☆	★	☆	★	☆
146	ダイサギ	★	☆	★	☆	★	☆
147	チュウサギ					★	
148	コサギ	★	☆	★	☆	★	☆
151	クロトキ				☆		
166	クイナ	★	☆	★	☆	★	
170	ヒクイナ				☆		
174	バン	★			☆	★	☆
175	オオバン	★			☆		
185	ホトトギス	★					☆
188	カッコウ						☆
187	ツツドリ	★				★	
193	ヒメアマツバメ	★	☆	★	☆	★	☆
194	タゲリ		☆		☆		
195	ケリ	★					
197	ムナグロ		☆		☆	★	☆
202	イカルチドリ	★	☆	★	☆	★	☆
203	コチドリ		☆	★	☆	★	
210	セイタカシギ					★	
219	タシギ	★	☆	★		★	
235	アオアシシギ						☆
239	クサシギ	★		★	☆	★	☆
241	キアシシギ	★		★	☆	★	
244	イソシギ		☆	★	☆	★	☆
261	ハマシギ				☆	★	
271	タマシギ		☆				
286	ユリカモメ				☆		
299	セグロカモメ	★		★	☆	★	☆
314	アジサシ			★			
339	ミサゴ					★	
342	トビ	★	☆	★	☆	★	☆
354	ツミ	★	☆		☆	★	
355	ハイタカ	★		★		★	
356	オオタカ	★	☆	★	☆	★	☆
357	サシバ		☆				
358	ノスリ	★		★	☆	★	☆
372	フクロウ	★					

地域別観察された野鳥一覧(2)

第7版 番号	鳥名	1	2	3	4	5	6
		陵 北大 橋下 流付 近	南 北 浅 川 合 流 付 近	萩 原 橋 付 近 の ワ ン ド 付 近	長 沼 橋 上 流 の さ い か ち 池 付 近	一 番 橋 下 流 の ワ ン ド 付 近	多 摩 川 合 流 付 近
374	アオバズク	★					
377	ヤツガシラ						☆
383	カワセミ	★	☆	★	☆	★	☆
385	ヤマセミ						☆
387	ブッポウソウ	★					
388	アリスイ	★			☆	★	
390	コゲラ	★	☆		☆	★	☆
393	アカゲラ	★		★	☆		☆
397	アオゲラ	★					
401	チョウゲンボウ	★	☆	★	☆	★	☆
407	ハヤブサ	★	☆	★		★	☆
420	モズ	★	☆	★	☆	★	☆
427	カケス	★					
429	オナガ		☆		☆		☆
435	ハシボソガラス	★	☆	★	☆	★	☆
436	ハシブトガラス	★	☆	★	☆	★	☆
445	シジュウカラ	★	☆	★	☆	★	☆
452	ヒバリ			★	☆	★	☆
455	ショウドウツバメ			★		★	☆
457	ツバメ	★	☆	★	☆	★	☆
459	コシアカツバメ		☆	★		★	
461	イワツバメ	★	☆	★	☆	★	☆
462	コサメビタキ	★					
463	ヒヨドリ	★	☆	★	☆	★	☆
464	ウグイス	★	☆	★	☆	★	☆
466	エナガ	★	☆			★	☆
485	メジロ	★	☆	★	☆	★	☆
492	オオヨシキリ	★	☆	★	☆	★	
493	コヨシキリ			★			
499	セッカ			★	☆	★	☆
500	キレンジャク	★					
501	ヒレンジャク	★			☆		
506	ムクドリ	★	☆	★	☆	★	☆
508	コムクドリ	★	☆		☆	★	☆
512	カワガラス		☆				
514	トラツグミ	★					
521	シロハラ					★	
522	アカハラ	★	☆		☆		
525	ツグミ	★	☆	★	☆	★	☆
540	ジョウビタキ	★		★	☆	★	☆
542	ノビタキ	★	☆	★	☆	★	
558	キビタキ						☆
566	カヤクグリ	★					
569	スズメ	★	☆	★	☆	★	☆
573	キセキレイ	★	☆	★	☆	★	☆
574	ハクセキレイ	★	☆	★	☆	★	☆
575	セグロセキレイ	★	☆	★	☆	★	☆
580	ビンズイ	★		★		★	☆
584	タヒバリ	★		★	☆	★	☆
586	アトリ	★		★		★	☆
587	カワラヒワ	★	☆	★	☆	★	☆
588	マヒワ	★	☆	★	☆	★	
592	ベニマシコ	★		★	☆	★	☆
600	シメ	★	☆	★	☆		☆
602	イカル	★					
610	ホオジロ	★	☆	★	☆	★	☆
614	ホオアカ					★	
615	コホオアカ				☆		
617	カシラダカ	★	☆	★	☆	★	☆
624	アオジ	★	☆	★	☆	★	☆
625	クロジ	★			☆		
628	オオジュリン		☆	★	☆	★	
901	コジュケイ	★					☆
903	カワラバト(ドバト)	★	☆	★	☆	★	☆
909	ガビチョウ	★	☆		☆	★	☆
927	アヒル	★					
928	雑種ガモ	★					
	計	88	58	66	79	81	69

3. 地域別の特徴と観察された野鳥

(1) 北浅川、陵北大橋から東京天使病院裏の用水堰

陵北大橋から下流の東京天使病院裏の用水堰まで約 850mの区間（出現鳥の表では「1 陵北大橋下流付近」と表記）である。

陵北大橋下流側の直ぐ下で小津川が合流している。陵北大橋の下流約 400mの所に地元住民が作った手作りの橋（仮橋）がある。約 850m下流の右岸に東京天使病院がありその裏に用水堰があって、この堰までを当該地域の範囲としている。川の北側は川口丘陵が迫っている。川の南側には野球場、子供キャンプ場があり、野球場と川の間には小川が流れている。仮橋付近の南西には小規模ながら自然状態の池があり、カモ類、サギ類が飛来する。直ぐ近くの陣馬街道の「切通しバス停」がある日枝神社境内の杉林では小規模ながらアオサギのコロニーが形成されている。

この地域では2015年までに88種が確認されている。この地域で、自然環境の多様性を示すと思われる注目種は以下のとおりである。

アカガシラサギ（2002/7/9 に観察）

クイナ（2014/2/21 他に観察）

ツツドリ（2005/5/25 に観察）

ケリ（1992/4/4 に観察）

クサシギ（2015/12/4 他に観察）

フクロウ（2000/12/6 に観察）

アオバズク（2012/6/26 に観察）

ブッポウソウ（2006/7/1 に観察）

コサメビタキ（2014/10/3 に観察）

キレンジャク（2011/2/6 に観察）

ヒレンジャク（2015/3/18 他に観察）

トラツグミ（2014/2/9 に観察）

カヤクグリ（2013/3/20 に観察）

アトリ（1997/1/1 に観察）

マヒワ（2004/4/7 他に観察）

ベニマシコ（2008/11/23 他に観察）

クロジ（2015/3/20 他に観察）

(2) 北浅川、城山川、南浅川の3川合流地付近

清川町の排水溝から鶴巻橋まで約 800mの区間（出現鳥の表では「2 南北浅川合流付近」と表記）である。

清川町の排水溝から城山川合流地付近には河原にメタセコイヤ化石林がある。北浅川の左岸で南浅川が合流するまでの間には清川河川敷広場（草野球場）がある。南北浅川が合流してから鶴巻橋の間は左岸はオギ混じりの高茎草地、右岸は人工的な浅川河川広場になっている。

この地域では2015年までに58種が確認されている。この地域で、自然環境の多様性を示すと思われる注目種は以下のとおりである。

クイナ (2009/2/11 に観察)
タゲリ (2003/10/3 に観察)
ムナグロ (1990/9/28 に観察)
タマシギ (1984/1/15 に観察)
サシバ (1993/9/27 に観察)
カワガラス (1990/10/29 に観察)
マヒワ (2011/3/6 他に観察)

(3) 浅川右岸萩原橋のワンド付近

右岸萩原橋から上流側、下流側各400m、計約800mの区間(出現鳥の表では「3 萩原橋付近のワンド付近」と表記)である。

鶴巻橋の右岸上流側には堤防の下から湧き出る湧水起源のワンドがあったが、2014年の河川改修でワンドが鶴巻橋寄りの一点に人為的に集約されてしまった。

この地域では2015年までに66種が確認されている。この地域で、自然環境の多様性を示すと思われる注目種は以下のとおりである。なお、ここには多摩動物公園が試験放鳥したクロトキが1996/2/24に飛来したことがある。

マガン (1992/11/5 に観察)
カンムリカイツブリ (2004/12/1 に観察)
クイナ (2014/4/2 他に観察)
クサシギ (2013/1/12 他に観察)
アジサシ (1998/11/2 に観察)
コヨシキリ (2004/5/25 に観察)
アトリ (2003/2/18 に観察)
マヒワ (2013/3/21 他に観察)
ベニマシコ (2014/1/15 に観察)

(4) 浅川左岸長沼橋上流の通称さいかち池付近

左岸長沼橋から上流約500mの区間(出現鳥の表では「4 長沼橋上流のさいかち池付近」と表記)である。

さいかち池は、八王子・日野カワセミ会における通称名であり、正式名称ではない。浅川の長沼橋から左岸約300m上流側にあり、浅川とは土手をはさんで平行に位置する。日野市の川北用水から水がこぼれ落ちて出来ている池で、長さ190m、幅40mほどの細長い形状をしている。近くにサイカチの木があるためカワセミ会では「さいかち池」と呼んでいる。この池の東側は日野市西平山4丁目の住宅地である。

この地域では2015年までに79種が確認されている。この地域で、自然環境の多様性を示すと思われる注目種は以下のとおりである。

シマアジ (1995/9/10 に観察)
ミコアイサ (1991/1/27 に観察)
クイナ (2014/4/2 他に観察)
ヒクイナ (2013/9/12 に観察)
タゲリ (1996/2/17 他に観察)
ムナグロ (1996/8/18 他に観察)
クサシギ (2012/4/7 に観察)
ハマシギ (1997/1/12 に観察)
ヒレンジャク (2007/3/26 に観察)
マヒワ (2011/2/26 に観察)
ベニマシコ (2015/2/14 に観察)
コホオアカ (2011/2/26 に観察)
クロジ (1992/2/5 に観察)

(5) 浅川右岸一番橋下流のワンド付近

右岸一番橋から下流側約800mの区間(出現鳥の表では「5 一番橋下流のワンド付近」と表記)である。一番橋の右岸下流側には湧水起源のワンドがあったが、2010年頃の河川改修で消滅してしまった。日野市民プール前にはシギチドリが多く集まる。

この地域では2015年までに81種が確認されている。この地域で、自然環境の多様性を示すと思われる注目種は以下のとおりである。

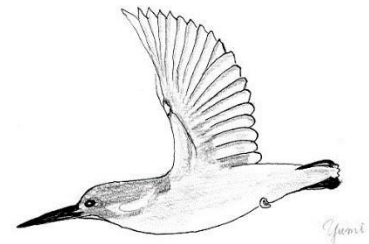
ヨシガモ (2003/12/22 に観察)
アメリカヒドリ (2014/4/6 他に観察)
アマサギ (1996/5/11 に観察)
チュウサギ (2010/9/5 他に観察)
クイナ (2015/1/24 他に観察)
ツツドリ (2014/9/6 他に観察)
ムナグロ (2013/9/1 他に観察)
セイタカシギ (2006/4/7 に観察)
クサシギ (2013/9/1 他に観察)
ハマシギ (2004/11/9 他に観察)
ミサゴ (2012/3/3 他に観察)
アトリ (2015/1/16 に観察)
マヒワ (2013/2/17 他に観察)
ベニマシコ (2015/4/2 他に観察)
ホオアカ (2012/10/8 に観察)

(6) 浅川、程久保川、多摩川の3川合流付近

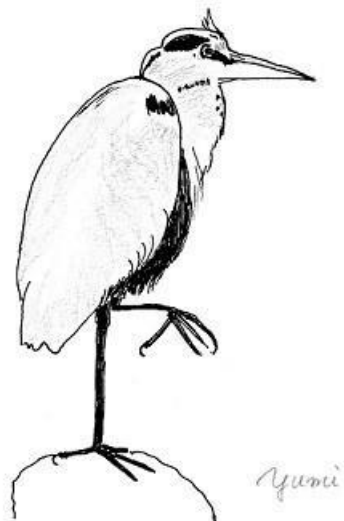
程久保川と浅川の合流地から上流側約800mの区間(出現鳥の表では「6 多摩川合流付近」と表記)である。程久保の浅川合流部の手前には人工的に作成されたワンドがあり、この部分は生態系が豊かである。浅川と多摩川の間には、根川が流れている。浅川と程久保川に挟まれた部分には花壇のような所があるが、これは撤去して自然の状態に戻したいものである。

この地域では2015年までに69種が確認されている。この地域で、自然環境の多様性を示すと思われる注目種は以下のとおりである。

- オオハクチョウ (1996/1/2 に観察)
- アカエリカイツブリ (1993/10/23 に観察)
- カッコウ (1997/5/17 に観察)
- ムナグロ (1993/8/21 に観察)
- アオアシシギ (1995/9/5 に観察)
- クサシギ (2002/3/2 他に観察)
- ヤツガシラ (1994/4/3 に観察)
- ヤマセミ (1993/8/21 に観察)
- キビタキ (2014/10/7 に観察)
- アトリ (2008/12/16 に観察)
- カヤクグリ (2013/3/20 に観察)
- ベニマシコ (2014/2/22 に観察)



カワセミ



アオサギ

IV. 我が家の庭に来た野鳥の調査

1. 調査の実施

(1) 調査の目的

野鳥の都市化現象が顕著である、と言われた 1990 年代。カワセミ会では都市の中の住宅地にどのような野鳥が飛来するか、次の目的で、会員の自宅の庭（含、集合住宅のベランダ）に来た野鳥と庭で繁殖した野鳥の調査を行っている。

- ①野鳥観察（バードウォッチング）の原点を会員の自宅の庭に求め、身近な野鳥の種類や行動を観察することにより、その楽しさを味わったり、安らぎを感じたりしながら、日常的な観察の重要性を知る。
- ②都市（住宅地）の自然環境の変化を知り、良否判断のデータとする。また環境変化の著しい八王子・日野地域の緑の保全を考える基礎資料を蓄積する。
- ③都市鳥研究の一助となるよう、住宅地に於ける野鳥の行動等を都市の変化に合わせて経年的に把握する。

(2) 調査の内容

次の内容で調査を実施した。

- ①庭に来た野鳥の種類
自宅庭やベランダに来た野鳥（庭にある植木、構造物、あるいは地上に飛来した）と、自宅付近に来た野鳥（自宅乃至は自宅の庭にいて、隣近所に飛来したことが確認されるか声を聞くことができた）
- ②庭で繁殖した野鳥
営巣巣立ち、営巣途中放棄、親子連れ来庭、その他の繁殖したと確認できた野鳥

(3) 調査の方法

- ①会員に実施要項と報告様式を配付し、調査の趣旨に賛同した者が、実施要項に従い自主的に調査を行う。調査結果は毎年末にまとめ、次年度すぐにまとめ担当者に提出する。
- ②まとめ担当者は、調査結果をまとめ、会報に掲載することで、結果報告とする。

(4) 調査期間とまとめ担当者

この調査は、1992 年から実施し 2015 年で 24 回となる。尚、「自宅の庭付近」の調査は 1996 年からで 20 回目。繁殖の調査は 1995 年からで 21 回目となる。担当者は、1992 年～1999 年：粕谷和夫、2000 年～2011 年：丸山二三夫、2012 年～2015 年：加藤岸男 である。

2. 調査の結果

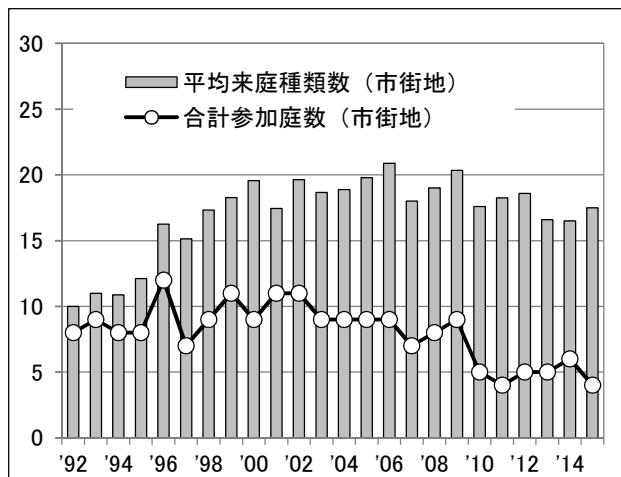
(1) 調査参加者数（第 3・4 表参照）

市街地の参加者は 30 名、郊外の参加者は 76 名、総参加者数は 106 名であった。尚、八王子・日野以外に在住の方の報告は、統計処理上の都合で割愛した。

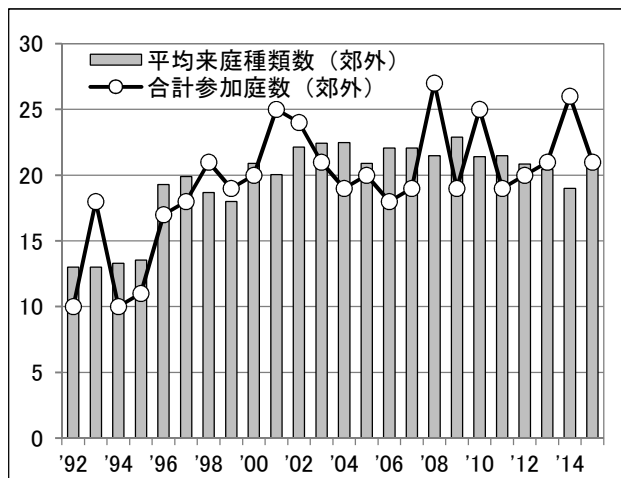
参加者名の記録のない 1992 年を除き、全年（23 回）参加者は 2 名、1 回のみ参加者が 28 名というのもこの調査の特徴である。

(2) 来庭種類数（第 1・2 図、3・4 表参照）

最大来庭種類数は、市街地が 29 種で、郊外が 43 種。最小来庭種類数は、市街地が 6 種で、郊外も 6 種である。平均来庭種類数は、市街地が 17 種で、郊外は 19 種であり、有意差は見いだせない。平均来庭種類数と合計参加庭数の推移を以下に示す。



第 1 図 平均来庭種類数と合計参加庭数（市街地）



第 2 図 平均来庭種類数と合計参加庭数（郊外）

第3表 調査年別「我が家の庭に来た野鳥」種類数 —郊外—

調査報告者名	調査回数	調査年 居住地町名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	参加 回数				
			'92	'93	'94	'95	'96	'97	'98	'99	'00	'01	'02	'03	'04	'05	'06	'07	'08	'09	'10	'11	'12	'13	'14	'15					
1 河村 洋子	泉町		○				20																				2				
2 青木 静子	泉町															17											1				
3 北平 章	犬目町		○			10	9	13																			4				
4 大川征治・香	大谷町						18				20	24	24	22	22	21	20	24	20								10				
5 小山万太郎	大和田町		○																								1				
6 小笠原敏子	片倉町		○	18	17	25	20	22	23	18	17	18	23	20	19	18	19	20	20	21	18	20	16	18	16	23					
7 門口一雄・裕子	片倉町		○				23		20	22	23	20									17				23	23	9				
8 三富 恒男	片倉町		○	13	11	14	21	20																			6				
9 安室 厚子	片倉町																						10	10	12	11	4				
10 上田 昌生	上川町										26																1				
11 栗原勝・正江	川口町		○					18																			2				
12 川戸 恵一	川口町								10																		1				
13 内藤 公三	川口町																				26						1				
14 今井 達郎	川町		○	10	6	17	18	15	19	18	10	15	13	13	16	13	13	13	13	17	16	15			10	20					
15 熊坂 政晃	北野台		○																								1				
16 福井 秀雄	北野台												26	24													2				
17 浜野 健男	北野台																			10	14	11	17	15	11	12	17	6			
18 山崎悠一・久美	絹ヶ丘		○	16	16	15		15	19	18	15	17	15	17	16	17	17	22	20	21	21	22	23	22	20	22	22				
19 萩原 正昭	絹ヶ丘														24			22									2				
20 佐藤 哲郎	絹ヶ丘																26	18									2				
21 高山 早苗	絹ヶ丘																		22		19		18				3				
22 桑原 文夫M	桐田町							20	15																		2				
23 傍島 玲子	久保山町									16		19	17	20	18				13	21	19	16	18	19	17	18	14				
24 浅野恵美子M	久保山町																		27	28	26	28	27	29	29		21	8			
25 鈴木 了一	小比企									17				28													2				
26 前田 善明	下恩方町											25															1				
27 中村 后子	下恩方町																15	19	28	24	18	24	27	27	29	26	10				
28 工藤 正子M	下柚木																		22		25	25	31	23	23	24	5				
29 千葉 楨子	城山手					20	28	25	7	18													9				6				
30 竹内 開	城山手																19				17						2				
31 福本 順吉	高尾町										33	28		37	27	28	30	33	33	42	35		30	39	30	33	14				
32 森 久美	高尾町																			18		18		15		24	21	5			
33 増田 裕子	館町											22															1				
34 山下 弘文	長房町														35	41	43	37	40	37	38		30	39			9				
35 大関 豊	樽原町		○																								1				
36 氷見 博子	樽原町			12	13	18	15	17	19	18	19	18	19	22	18	20	18	18			19	17		14			18				
37 杉森 ユリ	樽原町												22	22	21	20	21	22	22	20	22	18	20	19			12				
38 馬場裕・百合亜	南陽台		○	12	15	37	28																				5				
39 木村 正子	南陽台			14	18	20	23	23	22	18	22	18	20	18	21												12				
40 白川 司・史子	西寺方町				17	20	19	22	17	23	22	23	19	17	17	20	22	25	19	22	22	17	17	20			20				
41 丸山二三夫	西寺方町					12	13	13	18	19	25	19	24	23	21	24	21	21	23	18	19	24	20	16			19				
42 平井 豊	西寺方町							23		21	17																3				
43 坂倉 正	式分方町																				18		18	20		19	16	5			
44 加藤 岸男	狭間町		○																							25	24	4			
45 横山由美子 M	狭間町									21																		1			
46 加納三千代	富士見町					19	20	22																				3			
47 木村 信幸M	松山							13	13	10	10	17	13														6				
48 河田 徳子	丸山町															24												1			
49 井出 龍世	みつい台				20	18	16	21	19	24	22	23	24	26	16	25	24	24	23								15				
50 新田 茂	みつい台						26	23	26	28	30	25	28															7			
51 平井 牧	みつい台									10																		1			
52 島崎 太郎M	南大沢							9	7																			2			
53 波田 哲男M	南大沢														12			14										2			
54 玉手しのぶM	みなみ野																			15	20	19					3				
55 阪田 友道	めじろ台		○	9																								1			
56 志村 進	めじろ台				7	15	15																					1			
57 青木 一男	めじろ台								18																			1			
58 村山 和夫	めじろ台																									9		1			
59 川上 憲	元八王子町		○	14	16	23	26	25	23	24	25	26	25	26	26	26	23	24	25	24	24	24	25	25	24		22				
60 関根 伸一	元八王子町		○											21														2			
61 夏目 昌明	元八王子町						19	24	25		27	27	24	29														7			
62 進藤 丕	元八王子町																			6								1			
63 小高 賢秀	元八王子町																								10	12		2			
64 新井 洋子	山田町										23		24								22					15		3			
65 大塚 行子	横川町				15																							1			
66 門倉美登利	横川町																				24	26	23	20	24	27	27	23	8		
67 西巻 虎彦	日野市新井											17	23	25	24	21	23	25	25		24		22					10			
68 菅野 桂子	日野市石田																									14	14	2			
69 福本 健	日野市栄町																				18	24	20			17	17	6			
70 高橋 英昭M	日野市多摩平											7	14		9	8												4			
71 岡本昭男・昭子	日野市豊田																					23	18	19	16	15	19	19	5		
72 玉木 雅治	日野市豊田																									15		1			
73 中野悠紀子	日野市西平山											21																1			
74 小張義雄・昌子	日野市西平山																			24	21	21	24	24	30	27	25	21	17	27	11
75 長谷川輝子	日野市平山																												1		
76 佐藤サヨ子M	日野市程久保												17																1		
平均来庭種類数(郊外)			13	13	13	14	19	20	19	18	21	20	22	22	22	21	22	22	21	22	21	23	21	21	21	20	19	21	20		
合計参加庭数(郊外)			10	18	10	11	17	18	21	19	20	25																			

※Mは、マンション等集合住宅を示す。

※「市街地」と「郊外」の両方に名前のある方は、引越等の環境変化があった方であろうと考えられる。

※2007年には氏名不明者が1庭ある。(庭に飛来12種、付近に飛来6種、合計16種)

※1992年は参加者の個人名の記録がない。その為、参加回数合計には含めていない。

※1993年は、各参加者の来庭種類数の記録がない。○印は参加したことを表す。

※平均来庭種類数(1庭当たり)は四捨五入。

第4表 調査年別「我が家の庭に来た野鳥」種類数 —市街地—

調査報告者名	調査回数	調査年 住居地町名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	参加 回数
			'92	'93	'94	'95	'96	'97	'98	'99	'00	'01	'02	'03	'04	'05	'06	'07	'08	'09	'10	'11	'12	'13	'14	'15	
1 本島 てるみ	暁町		○	12		21																					3
2 峯尾 良雄	暁町			14	16	21				21	23	23	25			25	29		23	25	22		23	22	25		15
3 久保山 嘉男	暁町															15	18	22	19	24	23	19	13		16		9
4 平井 国二	上野町					6	17	19	19																		4
5 平井 智恵子	上野町												18	22	22	22	18	18	21	24							8
6 宮越 俊一	大和田											16															1
7 久保田ヤス子	散田町							16	16	16	14	16	11	15													7
8 木村 晴美	散田町									14										15							2
9 粕谷和夫・寿美	天神町		○	8	8	11	11	14	14	14	16	16	15	13	13	15	14	13	11	11	15	14	13	12	13	23	
10 大室 君子	長沼町					17		22	26	26	26	21	28	19		25				23							9
11 久保田ヤス子	長沼町		○	12	13	17	18										15										6
12 小池 一男	中野上町		○		14	21	20		20	19	20	20	19	19	21	17	16	19	22	20	19	19	21	20	19	21	21
13 清水 茂	中野上町		○	10	9	17	11																				5
14 三好 恒雄	中野上町		○	12	15	20	13	14	13	17	19	18	19	20	20	17	16	18	18								17
15 佐伯 直寛	中野山王							22	23	24	19	22	20	21		22	25	20	21								11
16 福島 弥四郎	中野山王										16		14														2
17 井上 典子	中野山王											21															1
18 尾又 英雄	長房町		○	10	12	17																					4
19 市橋 ゆみ	榎原町																						12	12			1
20 目黒 廣	緑町										6																1
21 高梨 規子 M	明神町																						15	14	15		3
22 田中 英吉	元横山町		○	9	10	6																					4
23 宇都宮 信子	元横山町																				12						1
24 浜田 早苗	日野市大阪上																					20	24		23		2
25 福島 孝子	日野市神名															23	27										2
26 小川 清成	日野市多摩平											21	20	22	22												4
27 細田 富美代	日野市日野台										17	18		19	17				19								5
28 星野美美子	日野市本町							16		15																	1
29 小塩 菊子	日野市万願寺						16	17																			2
30 石橋 公子 M	日野市南平							16	18																		2
平均来庭種類数(市街地)		10	11	11	12	16	15	17	18	20	17	20	19	19	20	21	18	19	20	18	18	19	17	17	18	17	
合計参加庭数(市街地)		8	9	8	8	12	7	9	11	9	11	11	9	9	9	9	7	8	9	5	4	5	5	6	4	8	

※Mは、マンション等集合住宅を示す。

※1992年は参加者の個人名の記録がない。その為、参加回数合計には含めていない。

※1993年は、各参加者の来庭種類数の記録がない。○印は参加したことを表す。

※平均来庭種類数(1庭当たり)は四捨五入。

(3) 出現種類数(第5表参照)

総出現種類数は、83種。因みに外来種は5種である。ミゾゴイ、ヨタカ、オオジシギ、ヤマシギ、フクロウ等の極希少種も出現しているのは特筆される。

市街地・郊外共に出現率100%(24回)は、キジバト、コゲラ、オナガ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ヒヨドリ、ムクドリ、ジョウビタキ、スズメ、カワラヒワの10種。市街地のみの出現が2種、郊外のみの出現が35種で、1回のみの出現が16種。

年平均出現種類数は約40種である。年毎の参加庭数に大きな差があるので一概には言えないが、緩やかに増える傾向にある。



ヤマガラ

第5表 調査年別「我が家の庭に来た野鳥」出現種一覧

調査回数	調査年															出現年数計	出現率										
	'92	'93	'94	'95	'96	'97	'98	'99	'00	'01	'02	'03	'04	'05	'06			'07	'08	'09	'10	'11	'12	'13	'14	'15	
1	5	キジ																								9	38
2	32	カルガモ																								20	83
3	38	コガモ																								1	4
4	74	キシバト	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	24	100
5	78	アオバト																								1	4
6	137	ミノコイ																								4	17
7	139	ヨイサギ																								7	29
8	144	アオサギ																								14	58
9	148	コサギ																								16	67
10	185	ホトギス																								21	88
11	188	カッコウ																								18	75
12	189	ヨタカ																								2	8
13	192	アマツバメ																								1	4
14	193	ヒメアマツバメ																								3	13
15	202	イカルチドリ																								3	13
16	203	コチドリ																								2	8
17	216	オオジシギ																								1	4
18	271	ヤマシギ																								1	4
19	286	ユリカモメ																								1	4
20	342	トビ																								13	54
21	354	ツミ																								10	42
22	356	オオタカ																								7	29
23	357	サシバ																								3	13
24	358	ノスリ																								3	13
25	372	フクロウ																								12	50
26	374	アオバズク																								11	49
27	383	カワセミ	△																							14	58
28	390	コゲラ	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	24	100
29	393	アカゲラ																								10	42
30	397	アオゲラ	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	21	88
31	401	チョウゲンボウ																								8	33
32	412	サンショウクイ																								4	17
33	420	モズ	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	24	100
34	427	カケス																								6	25
35	429	オナガ	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	24	100
36	435	ハシボソガラス	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	24	100
37	436	ハシブトガラス	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	24	100
38	442	ヤマガラ																								21	88
39	443	ヒガラ																								10	42
40	445	シジュウカラ	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	24	100
41	452	ヒバリ																								6	25
42	457	ツバメ	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	24	100
43	459	コシアカツバメ																								3	13
44	461	イフツバメ																								9	38
45	463	ヒヨドリ	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	24	100
46	464	ウグイス																								23	96
47	466	エナガ																								21	88
48	480	センダイムシクイ																								2	8
49	485	メジロ	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	24	100
50	493	ヨシキリ																								1	4
51	499	セッカ																								1	4
52	500	キレンジャク																								1	4
53	501	ヒレンジャク																								2	8
54	504	ミンサザイ																								3	13
55	506	ムクドリ	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	24	100
56	514	トラツグミ																								3	13
57	518	クロツグミ																								1	4
58	521	シロハラ	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	24	100
59	522	アカハラ																								7	29
60	525	ツグミ	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	23	96
61	533	ノゴマ																								1	4
62	534	コルリ																								1	4
63	536	ルリビタキ																								18	75
64	540	ジョウビタキ	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	24	100
65	549	インビヨドリ																								4	17
66	558	キビタキ																								7	29
67	561	オオルリ																								4	17
68	569	スズメ	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	24	100
69	573	キセキレイ	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	24	100
70	574	ハクセキレイ	△																							24	100
71	575	セグロセキレイ	△																							23	96
72	580	ビンズイ																								4	17
73	587	カワラヒワ	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	24	100
74	588	マヒワ																								3	13
75	599	ウソ																								1	4
76	592	ベニマシコ																								1	4
77	600	シメ	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	24	100
78	602	イカル																								21	88
79	610	ホオジロ	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	24	100
80	617	カシラダカ																								19	79
81	624	アオジ	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	24	100
82	625	クロジ																								1	4
83	628	オオジュリン																									

※市街地・郊外共に、1 庭でも出現した場合を表す。1995 年からは「自宅庭付近にきたり、声を聞いたりした種」も含む。

※各調査年毎に、◎印は市街地・郊外共に出現した種、△印は市街地のみに出現した種、□印は郊外のみに出現した種。

※出現率は、市街地・郊外問わず、1 庭でも出現した種を 24（調査回数）で除した数字。

※2000 年、2002 年、2003 年の「その他」は集計に含めていない。

（4）庭で繁殖した野鳥（第 6 表参照）

「庭で繁殖」とは、①家や庭に営巣し巣立つ ②営巣したが途中で放棄 ③明らかに近くで巣立ちした雛と親が来庭 ④その他、繁殖したと思われる状態を確認、である。

庭での繁殖行動が確認されたのは、18 種。因みに外来種は 3 種。ベスト 3 は、シジュウカラ 44%、スズメ 23%、キジバト 10%。この 3 種で 78%となる。シジュウカラとスズメのみ毎年繁殖行動が確認され

ている。コゲラとイソヒヨドリは 1 回のみである。繁殖回数確認の最大は 2000 年の 67 回。最小は 1995 年の 11 回だが、参加庭数が少ない為であると考えられる。2014 年は、参加庭数が 33 庭であったにもかかわらず繁殖行動確認回数は 20 回で、1995 年に次いで少ない。これは、直近 5 年間の傾向をみても繁殖行動確認回数が減少傾向にある、と言えると考ええる。

第 6 表 調査年・形態別「我が家の庭で繁殖した野鳥」

調査回数	調査年																					形態別 合計	
	'95	'96	'97	'98	'99	'00	'01	'02	'03	'04	'05	'06	'07	'08	'09	'10	'11	'12	'13	'14	'15		
1 キジバト	①営巣巣立ち	2	1	3	3	1	1	1	3	1		1			2	1	1	1		2	2	26	
	②営巣途中放棄	1	1	2	3	2	5		1	1	3			3	1	1	1	1	1	3	2	32	
	③親子連れ来庭				1	1	2	1	2						1		1		1			10	
	④その他		1			1																2	
2 コゲラ	③親子連れ来庭										1											1	
3 モズ	②営巣途中放棄		1																			1	
	③親子連れ来庭										1											1	
	④その他		1																			1	
4 オナガ	③親子連れ来庭					1					1											2	
5 ハシボソガラス	③親子連れ来庭						1							1	1			1				4	
6 ハシブトガラス	③親子連れ来庭									1	1	1		1								4	
7 ヤマガラ	①営巣巣立ち							1			1											2	
	③親子連れ来庭											1	1							1		3	
8 シジュウカラ	①営巣巣立ち	3	7	9	8	8	8	6	8	10	8	8	4	9	8	5	5	4	6	5	6	9	144
	②営巣途中放棄		5	3	3	2	2	5	3	2	2	1	7	1	3	3	2	2		2		1	49
	③親子連れ来庭	1	3	1	3	6	7	4	5	8	8	8	6	6	10	6	8	7	5	7	1	3	113
	④その他					1	1															2	2
9 ツバメ	①営巣巣立ち	1	2	3	1	1	1	1		4	1	1		1						1	1	1	20
	②営巣途中放棄	1	1		2							1			1	1	1		1				9
	③親子連れ来庭						4				1			1	1	1							7
	④その他							1						1								2	2
10 ヒヨドリ	①営巣巣立ち			1		2	2			1	1				1			1	1	1	1	1	12
	②営巣途中放棄					1	2	1	2		1				1		1					1	10
	③親子連れ来庭	1	2	2	1	2	8		1	2	2		1		2								24
	④その他						1															1	1
11 ウグイス	②営巣途中放棄																				1		1
	③親子連れ来庭								1						1							2	2
12 エナガ	③親子連れ来庭										1	1			1								3
13 メジロ	①営巣巣立ち		1		1	2	1	4							1	1			1		1		13
	③親子連れ来庭		1	1	2	1	3		1		1				2								12
14 ムクドリ	①営巣巣立ち						1											1					2
	③親子連れ来庭						1	1															2
15 イソヒヨドリ	③親子連れ来庭																			1			1
16 スズメ	①営巣巣立ち	1	1	2	5	7	8	6	2	5	4	3	7	4	3	3	3	3	3	3	2	2	77
	②営巣途中放棄			1			1															2	2
	③親子連れ来庭		5	4	5	6	5	4	5	5	6	6	2	4	7	6	2	5	3	4	1	2	87
17 キセキレイ	①営巣巣立ち							1				1										2	2
18 カワラヒワ	③親子連れ来庭		1	1		1							1	1									5
繁殖行動確認回数合計		11	34	33	38	43	67	40	33	38	41	36	33	30	37	36	24	25	23	27	20	24	693
繁殖行動確認庭数合計		11	17	18	21	20	29	21	18	19	20	16	16	15	16	17	18	12	13	18	14	17	366
1 コジュケイ	③親子連れ来庭								1														1
2 ドバト	③親子連れ来庭			1																			1
3 ガビチョウ	②営巣途中放棄							1												1			2
	③親子連れ来庭							1										1					2
総繁殖行動確認回数合計		11	34	34	38	43	67	43	33	38	41	36	33	30	37	36	24	26	23	28	20	24	699
総繁殖行動確認庭数合計		11	17	18	21	20	29	21	18	19	20	16	16	15	16	17	18	12	13	19	14	17	367
調査参加庭数合計		19	29	25	30	29	29	36	35	30	28	29	28	27	35	28	30	24	24	28	33	25	572

V. 片倉城跡公園巣箱設置調査

1. 巣箱設置の目的と概要

1989年から27年間、片倉城跡公園にシジュウカラ用巣箱を架け、その利用状況を調査している。この調査の目的は、1) 公園を利用する人に野鳥に関心を持ってもらうこと。2) 都市化が進み営巣場所が少なくなった野鳥の繁殖を助けること。3) 会員が、巣材の内容、利用する巣の設置場所などの条件や天敵など他の動物との関係など、シジュウカラの生態を学ぶことである。

調査は、毎年12月に前年に架けた巣箱を外し、

- ①産座の有無から繁殖利用の有無の確認
- ②巣材以外の糞などからねぐら利用の確認
- ③ハチの巣や越冬昆虫など野鳥以外の生物の利用の有無を確認
- ④巣材の量(厚さ)、産座の材料の確認
- ⑤不定期であるが、巡回して損傷や落下、ヘビなどの害の有無の見回り

その後、清掃し、壊れたものを補修して再度設置して翌春の利用に備える。

なお、巣箱の設置は八王子市公園課の許可を得て実施している。

2. 片倉城跡公園の概要と巣箱設置場所

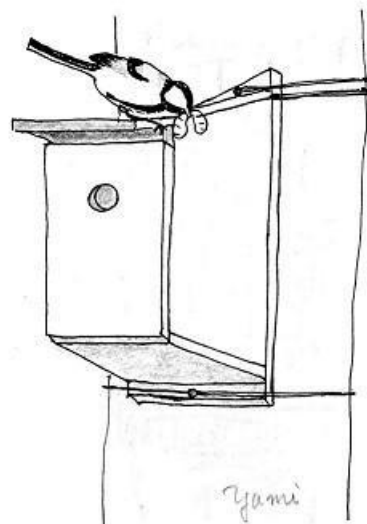
片倉城跡公園は、八王子市が管理する都市公園で、JR横浜線片倉駅から徒歩数分のところに位置し、面積は約69,000㎡、標高110~140mの小比企丘陵にある。15世紀中ごろに構築されたとされる空堀、土塁などが残る城跡である。低地部は湯殿川に面し湧水池、湿地がある。上部は畑に面している。園内にはコナラなどの雑木林、芝生広場や神社があるが大半は北斜面であり、多様な環境を有する公園である。

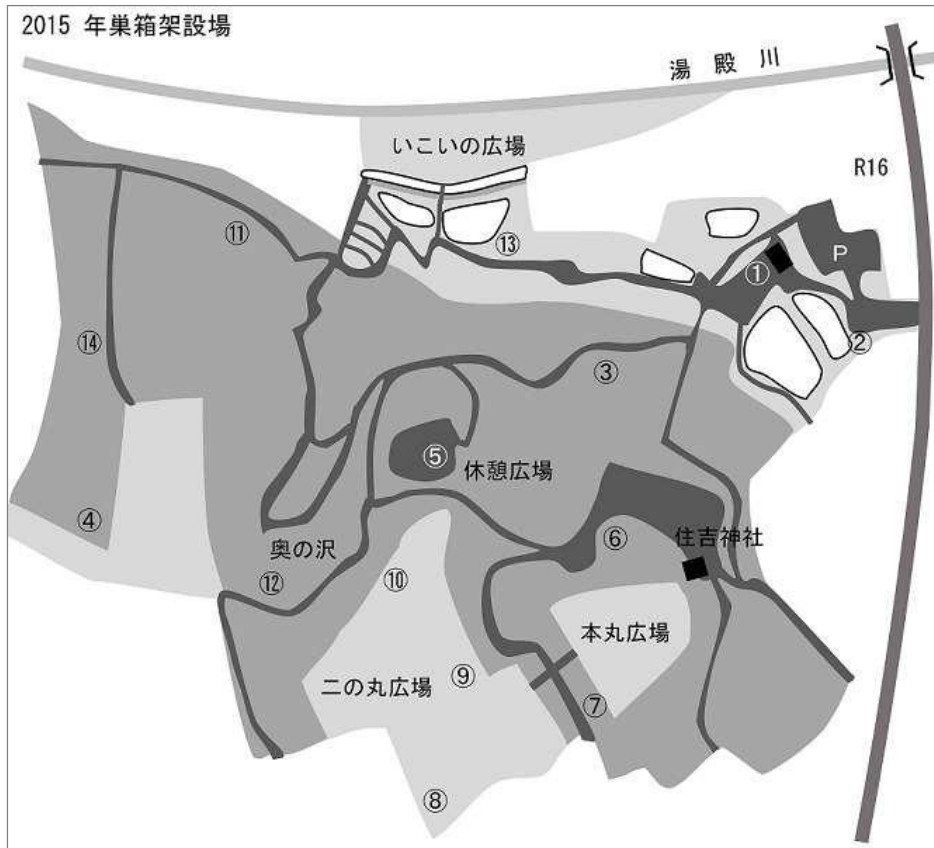
巣箱の設置場所は、当初は公園内に適宜に設置してきたが、近年は次頁の図の通り林縁部と雑木林の中に分けて架けている。設置数は、巣箱の準備状況により増減があったが、近年は14個で一定しており、約5,000㎡に1個の設置である。また、個々の設置場所は、概ね一定しているが、公園の工事、樹木の生長、枯死など周りの環境の変化や利用状況により、利用されやすい場所に移動することもある。

片倉城跡公園の場所



利用率90%以上の設置場所、開けた場所で人通りが多い。





開けた場所 6 個：①②⑦⑨⑩⑬ 林の中 5 個：③⑤⑥⑧⑫ 3 年前移動 3 個：④⑪⑭

3. 巣箱の利用状況

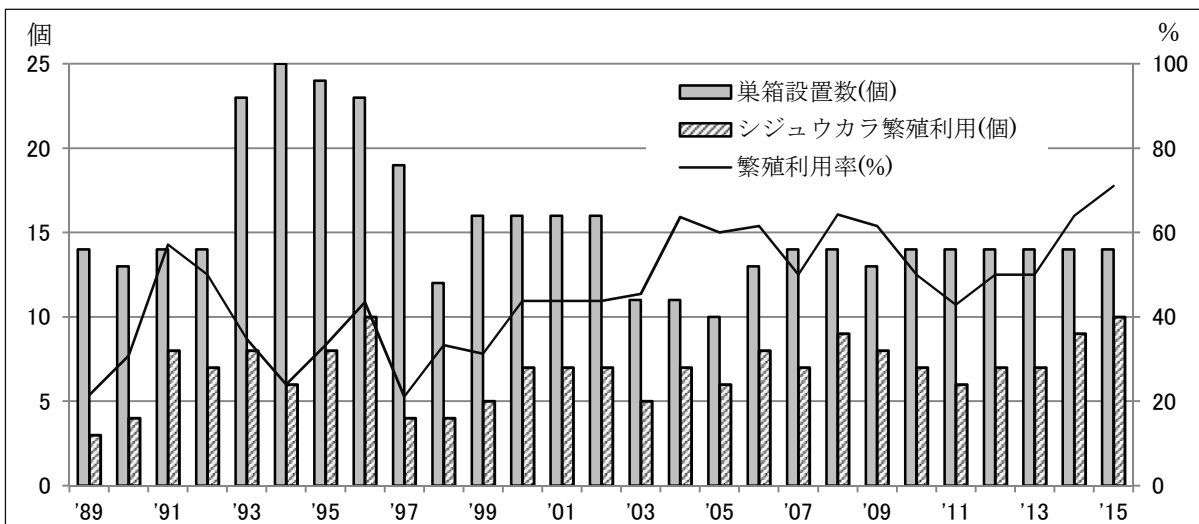
(1) シジュウカラの繁殖利用

下のグラフの通り 1989 年から 2015 年までの 27 年間の延べ設置数 443 個の内、繁殖に利用した数は 184 個で利用率 44.3% である。年別では設置数 10 個～25 個の内、利用数 3～10 個と年により異なる。利用率も、1994 年 21% (19-4)、2004 年 64% (11-7) と多く架けたからといって利用数が増えるわけではない。

設置数がほぼ一定している 2006 年から 2015 年までの 10 年間では、138 個の内、繁殖に利用したも

の 78 個、利用率 57% と巣箱設置数の多かった 1993 年～2002 年より向上している。年別では、2015 年が 14 個の内 10 個利用 (71%) が最高で、2011 年が 14 個の内 6 個が最低 (43%) である。

なお、2013 年に公園が拡張されたので、比較的利用状況の悪いものや巣と巣が近い巣箱 3 個を移動分散した。このこともあり、2014、2015 年と利用率が高くなったと思われる。



(2) 設置場所別のシジュウカラ繁殖利用状況

下表は、直近10年間(2006~2015)ほぼ同じ場所に架けた巣箱11個の年別利用状況である。内訳不明の2011年を除く9年間、計99個の巣箱で繁殖に利用した巣箱は60個で利用率61%である。その内比較的開けた場所では54個中39個で利用率72%である。特に、管理事務所の近くに架けた①の巣箱では、2013年(フタの具合が悪く開放状態となっていた)以外は毎年利用した。同じく公園上部の広場中央付近に架けた⑨の巣箱も2015年(扉開放による利用無)以外は毎年利用した。この2つの巣箱を架けた場所は、そばにベンチがあり、家族連れなど公園利用者が多いところである。

一方、林の中に架けた巣箱は、45個の内21個利用で利用率47%である。開けた場所に架けた巣箱は、林の中に設置した巣箱より利用率が25ポイント高い。

(3) ねぐら利用

巣箱は、繁殖以外にねぐらとしても利用されている。直近の10年間(2006~2015)で、利用されない空の巣箱は下表のように39個である。その内10個の巣ではシジュウカラの糞が残っていた。これをねぐら利用と推測した。実際には、繁殖利用した後にねぐらとしても利用されている巣箱もあるが、ここではカウントしていない。

10年間ほぼ同じ場所に設置した巣箱の年別利用状況(繁殖利用:○、ねぐら利用:☒、利用なし:×)

	仮番	場所	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	○計	×計	
比較的開けた場所	①	管理事務所前	○	○	○	○	○	内訳不明	○	×	○	○	8	1	
	②	公園入口	○	☒	×	○	○		×	○	☒	○	○	5	4
	⑦	本丸南	×	○	×	○	○		×	○	○	○	○	6	3
	⑨	芝生広場中央	○	○	○	○	○		○	○	○	○	×	8	1
	⑩	芝生広場西	×	○	○	○	○		○	○	×	☒	○	6	3
	⑬	ヨシ田通路	○	×	○	×	○		○	×	○	○	○	6	3
	利用率:72%	計	○	4	4	4	5		6		3	4	4	5	39
☒、×			2	2	2	1	0		3	2	2	1		54	
林の中	③	片倉沢	×	×	☒	☒	○	内訳不明	☒	×	○	○	3	6	
	⑤	頂上休憩広場	☒	○	○	×	○		○	×	○	○	○	6	3
	⑥	神社裏	○	×	○	×	○		×	×	○	○	○	5	4
	⑧	芝生広場東	○	○	×	☒	○		○	×	☒	×	×	4	5
	⑫	奥の沢	☒	×	○	○	×		○	○	×	×	×	3	6
	利用率:47%	計	○	2	2	3	1		4		3	0	3	3	21
☒、×			3	3	2	4	1		2	5	2	2		45	
合計	利用率:61%	○	6	6	7	6	10		6	4	7	8	60	-	
		☒、×	5	5	4	5	1		5	7	4	3	-	39	

(4) シジュウカラ以外の利用

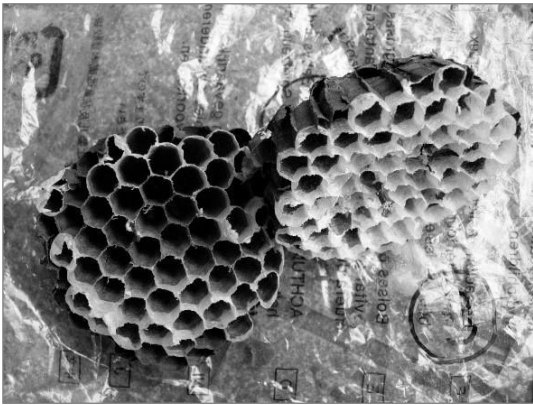
1993年にヤマガラ、1996年ムクドリ(アオゲラ等による出入り口拡大)が繁殖に利用しているのが確認されている。その外、2010年カマドウマ、

スズメバチ、2013、2014年ヨコヅナサシガメ、2015年スズメバチ等、巣箱の中に巣をつくり繁殖や越冬に利用していた。なお、クモは毎年のように越冬に利用している。

ヨコズナサシガメが利用



スズメバチの二段の巣



4. 巣材に使われているもの

利用した巣材は、大部分がコケである。産座には犬の毛、羽毛、綿などが使われており、中にはカラフルな化繊も混ざっている。巣材の量（巣の厚さ）は、2～15 cmと色々である。



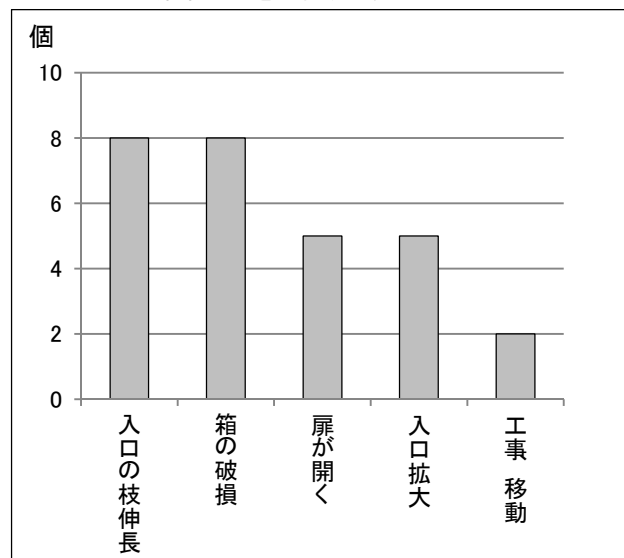
5. 繁殖利用を阻害する要因

右のグラフは2006年から2015年までの10年間で、繁殖に利用されなかった巣箱39個の内、その原因と思われる事跡28個のグラフである（複数項目該当有）。他の11個は原因不明である。利用されなかった巣箱は、①出入口前の枝が伸びたもの

8個、②巣箱破損（扉の蝶番不良、割れ、底抜けなど）8個、③扉のフック外れによる開放5個、④キツツキなどによる出入口の拡大5個などである。繁殖利用を阻害する要因の多くは、見回りが不十分のため発生し拡大することが大半である。今後は見回りを増やし、このような要因を早期に発見し対処する必要がある。

なお、巣立ち前の雛がへびに襲われた情報が2例ある。巣立ちまではいかなかったが、繁殖のための巣箱利用があったものとした。また、巣立ちの有無の確認もこの調査の対象外とした。

繁殖利用を阻害する要因



注) 複数項目該当有り

6. 巣箱掛け調査で分かったこと

- ①巣箱は毎年古い産座を取り除き清掃することで、継続して利用される。
- ②よく利用される設置場所は、人通りが多く開けた場所である。
- ③巣箱の出入口の前は枝、止まり木など無く、開けているとよく利用する。
- ④出入口の方向はどちらでもいいが、雨が入らないように若干下向きにする。
- ⑤巣箱は、シジュウカラ以外の色々な生き物も利用している。
- ⑥見回りを頻繁に行うことが大切である。
- ⑦公園内で行き交う人から「風で巣箱が落ちているよ」「へびが入ったよ」「エサを運んでいた」など、声を掛けられた。公園利用者の巣箱への関心は高まっていると思われる。

VI. 自宅軒下の巣箱にシジュウカラ、ヤマガラが17年連続営巣中の記録

シジュウカラ、ヤマガラなどは営巣に樹洞を利用するが、都市部のように樹洞が少ない場所では、これ等の野鳥にとっては住宅難になっている。この状態を改善する方法が巣箱の設置で、カワセミ会では1989年から八王子市片倉城跡公園にシジュウカラ用の巣箱を設置している。本会の会員の中には個人の住宅でも巣箱を設置している人が多く、毎年シジュウカラやヤマガラが巣箱から巣立っている。中でも八王子美山町のS氏、高尾町のF氏が自宅に設置している巣箱には10年以上の連続利用が記録されている。

ここでは、高尾町のF氏の自宅の巣箱から1999年～2015年まで17年連続して巣立った記録を以下に示す。F氏の自宅の環境は周辺を緑に囲まれた住宅地である。同氏は自宅の東側と西側の2ヶ所に巣箱を設置している。2013年に両方の巣箱を新しくして、ウェブカメラを設置してパソコンと繋いで撮影記録もとっている。

巣立ちの記録

年	月/日等	シジュウカラ		ヤマガラ	
		東側 巣箱	西側 巣箱	東側 巣箱	西側 巣箱
1999	5/13午後	7羽			
	6/30午後	6羽			
2000	6/4午後	7羽			
2001	5/13午後				5羽
2002	5/21午前	8羽			
2003	5/23午後	5羽			
2004	5/7日午後	7羽			
2005	5/19午前	6羽			
2006	6/19午前	6羽			
2007	5/23午後	5羽			
2008	6/12午後		5羽		
	6/21午前	5羽			
2009	7/18午後	5羽			
2010	4/29午前				6羽
2011	6/22午前		7羽		
2012	5/24午前	8羽			
2013	4/30早朝				7羽
	7/20早朝	5羽			
2014	7/2午前		5羽		
2015	5/23午後	8羽			

この表から以下のことが読み取れる。

- ①シジュウカラだけでなく、ヤマガラも3回利用した。
- ②巣立ち雛数が最低でも5羽、多い年は8羽と多く、4羽以下の年はない。

この表からは読み取れないが、F氏の記録では2015年は全部で12個の卵を産んだが3個の卵は孵化に失敗、1羽は遅れて孵化したが他の雛に踏まれて落鳥して巣立ち出来ず、8羽の巣立ちと

なった。

- ③巣立ち時期は最も早いのが4月29日、遅いのが7月20日で約3ヶ月の幅がある。
- ④西側巣箱と東側巣箱の利用率の違いは、この表からは読み取れないが、F氏は西側の巣箱の利用が少ないのは道路沿いにあるためではないかと推定している。
- ⑤巣立ちした雛の累計羽数
シジュウカラ 105羽
内訳：東側巣箱の巣立ち 88羽
西側巣箱の巣立ち 17羽
ヤマガラ 18羽
内訳：西側巣箱の巣立ち 18羽
合計 123羽

以下はF氏の手記である。

以前、八王子市内の古書店で何気なく棚を見ている時、棚に「窓をあけたら君がいる」という本があり、その中に「巣箱の作り方」や「小鳥の来る庭作り」などが記載されていたので購入しました。平成9年(1997)頃から平成10年頃にかけて、若き頃より巣箱を作って見たいと思っていたので、本で作り方を見ながら自分なりに設計をし、多少なりの改良を加えながら巣箱を完成させた。シジュウカラやヤマガラの繁殖、巣立ちに貢献できるかなと思い、平成11年(1999)1月中旬に1個の巣箱を東側の軒下に架けて様子を見ていた。

すると3月下旬頃にシジュウカラが巣作りを始めて5月13日(木)の午後に7羽が巣立って行った。そこで味をしめて? もう一つ巣箱を作り平成12年(2000)の1月下旬に西側軒下に架けて様子を見ていたら、平成13年3月にヤマガラが巣作り、繁殖をして5月13日(日)に5羽が巣立って行った。

西側の巣箱は道路沿いにあるためか、やはりなかなか巣作りをしなかったがこのヤマガラの繁殖、巣立ちが西側巣箱での最初となった。

その後の西側での繁殖、巣立ちは平成20年(2008)6月12日(木)にシジュウカラ5羽、平成22年(2010)4月29日(日)にヤマガラ6羽、平成23年(2011)6月22日(火)にシジュウカラ7羽、平成25年(2013)4月30日(火)にヤマガラ7羽、平成26年(2014)7月2日(水)にシジュウカラ5羽、それで16年の間に西側の巣箱よりシジュウカラ、ヤマガラをあわせて35羽が巣立った。

私には、当初から4つの疑問があった。その1：巣の内側が丸く綺麗に出来ているがどのように作るのか?

それは沢山のコケを厚めに積んでそこへ棕櫚のような毛や犬の毛、羽毛などを取って来て羽を広げ嘴で細かい毛などを押さえながらくるくる回るように固めて作っていたのです。

その2：卵の温め方はどうやるのか？

卵を産んだ当初は抱卵せず、8個か、10個になった時に抱卵を始める。始めてからは抱卵中に卵を転がす様にして温める位置を確認しながら抱卵している。それを孵化するまで繰り返し行なっているため平均に温められるようです。

その3：抱卵は雌がするのか、雄がするのか？または交代をするのか？

抱卵は主に雌が行なっているようです。私が観察した範囲では雄らしきシジュウカラが抱卵している姿は確認していない。

その4：親鳥の雛に与える餌の配分方法などは？

雛が孵化した当初は餌が小さく、成鳥してくるとその大きさに合わせて餌も大きくなっていく。時々雄親が雌親に餌を渡して雌親が噛み砕いて？雛に与えているところを確認している。巣立ち近くなると親鳥は餌を与えなくなり大きくなった幼鳥達の巣立ちを促すようになる。

東側の巣箱は隣家との間にあり、道路から離れているので巣作りがしやすいのかも知れません。

東側の巣箱からの巣立ちは17年で88羽となり、西側の35羽を加えると合計123羽の巣立ちに成功し、巣箱から自然界への旅たちに貢献した事になった。

平成11年のシジュウカラの2回目の繁殖、巣立ち6羽は同じ親からの2番子と思われます。

これらの巣箱作りの話を学生時代の友人にしたところ製作依頼があり、今年も友人から1個依頼があり製作、現在までに12個ほど製作した。その巣箱が各地で繁殖、巣立ちに成功して友人達から喜びの連絡が来ています。

平成25年(2013)からは両方の巣箱を作り直してウェブカメラを設置してパソコンに接続し、パソコンから巣箱の様子を確認、写真もパソコンに写った画面を撮影していますのでシジュウカラやヤマガラに直接、害を与えるような事はありません。しかし、少し短いためか、明るさとピントがうまくあわず今年から再度巣箱を新しく作り、以前の巣箱より少し長めにして、明るく、ピントも良くしてパソコンの画面に綺麗に映るように工夫して鳥達が巣作りをするのを待っている状況です。

これからも我が家と友人宅の巣箱から沢山のシジュウカラやヤマガラなどが繁殖、巣立っていく事を心から願っている次第です。

【追記】

(1) 巣立ち雛の数の数え方

シジュウカラやヤマガラの繁殖行動でウェブカメラを使用しなかった時期と使用始めてからの対応とでは少し違いがある。

使用していない時期は親鳥がいないときに巣箱のふたをあけ、産卵状態、と卵の数、全卵の孵化した時に再度、孵化した羽数の確認をし、10日位間を於いて再度羽数を確認して、これを巣立ちした雛の羽数とした。

ウェブカメラを取り付けてからは殆どパソコンでの確認とし、なるべく巣箱はあけないようにした。繁殖しているときは毎日一度はパソコンから巣箱の状況を見て現在卵が何個あるか、全部孵化したか、等を確認、一週間か10日ぐらいで羽数を再確認した。どうしても判らない場合は止む得ず親鳥が巣箱から出た隙に産卵の数や羽数等を確認して、これを巣立ち羽数とした。

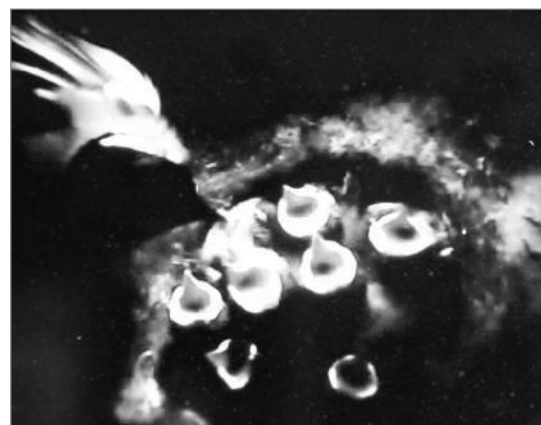
(2) 毎年の巣箱の清掃は何時行ったか

毎年の巣箱の清掃は8月初旬頃に行い、蜂の巣作りを防ぐため次年の1月末ごろまでは巣穴を塞いでいる。

【左上】2013.4.19 餌を持ってきたヤマガラ

【右上】2013.4.19 糞を捨てにいくヤマガラ

【下】2015.5.16 雛に餌を与えるヤマガラ



第8章 長期間継続調査結果から分かる野鳥の動向と環境変化との関連の考察

今回の取りまとめで最も注目されるのは、「第2章 野鳥定期カウントで分かる野鳥の増減」の「II. 種類数と総羽数の増減傾向」に記載されている通り、「地域によって多少の違いはあるものの、多くの地域で記録された種数に大きな違いはないのに個体数の方は減少している」ということを数値で表すことができたことである。野鳥の羽数が減少しているという事実は、私達の住む自然環境の変化に何らかの警鐘を鳴らしているのではないかと懸念される。

以下は調査結果から見た野鳥の動向と環境変化との関連を示す個別の事例である。カモの仲間、ユリカモメ、ハマシギ、スズメ、ヒバリなど身近な鳥が減少している、一方、アオサギ、ダイサギ、カワセミ、外来種のガビチョウなどは増加傾向にある。

このような増減傾向は何によってもたらされたかについては複合的な原因があると推定され、ここではその解析は不可能であるが、個別の関連事項を事例として以下に示す。

なお、野鳥調査を通じ、人の行動が野鳥に様々な影響を与えていることも明らかになったものがあり、以下にはそのような事例も含まれている。

(1) カルガモ、コガモは零にならない

ヒドリガモ、オナガガモなどのカモが皆無に近く減少してしまったのに対し、カルガモ、コガモは減少が著しいものの一定数は生息している。カルガモ、コガモは浅川の本支流や多摩川で採餌している姿が良く観察されるので、この2種については浅川の本支流や多摩川での餌の確保が可能なことで、一定数が生息できているのではないかとと思われる。

(2) 人による給餌の影響の減少

1990年代には、浅川・浅川橋付近でオナガガモ、浅川・浅川大橋やふれあい橋付近等でカワラバト(ドバト)、浅川・一番橋下流でオナガガモ、ヒドリガモ、コガモ、カルガモ等に給餌する人がいたが、現在はいずれもいなくなった。人による給餌が少なくなると、これらに集まっていた野鳥が減少したことは間違いなさそうである。

(3) サギ類の種別の変化の違い

浅川、多摩川の代表的なサギはアオサギ、ダイサギ、コサギである。アオサギ、ダイサギは増加傾向にあるのに対し、コサギは1990年代に増加傾向にあったが、2000年以降は減少傾向にある。コサギだ

け何故このような傾向を示すのか大変興味深いところである。

(4) カワセミは増えている

主に河川に生息するカワセミは増加傾向にある。カワセミは赤土の崖や河原の土手に巣穴を掘って巣を作る。カワセミ会が1998年に行った調査では浅川の数ヶ所で繁殖行動が観察された。最近でも浅川の本支流の土が露出している所で営巣している姿が観察されるが、河川改修でこのような土が露出する場所は少なくなっている。それにも拘わらず増加傾向にあるのは何故か。最近のカワセミの行動を観察すると、河川から離れた場所の赤土が露出している場所で営巣している例が見られる。河川内に営巣場所を失ったカワセミは、止むを得ず河川の外に出て営巣適地を見つけていることも増加の一因かも知れない。

(5) ミサゴが多摩川、浅川に飛来

主に海岸に生息するミサゴが2000年代になると秋に浅川や多摩川(八王子・日野市内)でホバリングを繰り返した後、急降下して魚を捕獲する姿が観察されるようになった。捕っている魚はアユと思われる(デジカメ写真で確認)。東京都のホームページによると「近年、多摩川では河川環境の改善、魚道の整備等により、多くのアユが遡上するようになった。」とある。大量のアユが遡上するようになってそのアユを狙うミサゴも飛来するようになったという関係がありそうである。

(6) 河川改修とワンドの消失・保全

最近の浅川の河川改修は大規模化していて、堤防はコンクリート化し、ワンドが消滅してしまっている。ワンドは水生植物が繁茂し、魚の産卵や稚魚が生育する場所であって、野鳥の絶好の餌場や休息場になっている。嘗ての浅川には大小のワンドがあちこちにあった。

2014年になって、画期的とも言えることが起った。河川改修後にもワンドが残ったのである。この事例は川口川の浅川合流部河川改修の時のことである。ここにも規模は小さいながらワンドがあったが、当初計画では河川改修によりワンドは消滅してしまうことになっていた。しかし、河川管理者である京浜河川事務所の担当者も我々の説明により、ワンドの維持の必要性を理解した。その結果、工事の進行状況を見ながら、対策を共に検討して当初のワンドは消

滅したが、少し離れた場所にワンドを復元することができた。このような方式で今後も生きものに配慮した河川改修が行われることを期待したい。

(7) 高尾山のオーバーユース

2007年3月に出版されたミシュランの日本ガイドブックに高尾山が三つ星観光地として取り上げられた。高尾山への入山者数の指標として、玄関口である京王線高尾山口駅の乗降客数の推移を追ってみると、2006年までは横ばいであったのが、2007年には約20%の増加となり、ピークの2012年には2006年に比べ約60%もの増加となっている。

乗降客数と高尾山地域の定期カウント5コース全体の総羽数の推移を対照させてみると、野鳥の総羽数が2009年を境にして漸減傾向が明らかとなっている。今年年間250万とも350万とも言われる入山者数は聖域とされてきた高尾山にとってオーバーユースになっているのではないかと懸念される。

(8) 人による巢落とし(ツバメ、イワツバメ、コシアカツバメ、ヒメアマツバメ)

日本野鳥の会は、2016年5月9日にツバメ全国調査2013-2015の結果を発表した。この中に、「ツバメが子育てに失敗した原因の約8%は「人」によるもので、フンが汚いといった理由から、ツバメの巢を撤去するケースが増えているとみられている。」と記されている。

八王子・日野市地域でもツバメ、イワツバメ、コシアカツバメ、ヒメアマツバメの巢の調査をしていると、人によって巢が落とされたか、または巢を作らせないようにネット張りが行われている所がある。フン除けの工夫などで何とか対策を進めたいものである。

(9) 野鳥写真撮影のマナー

例えば1998年7月に多摩御陵付近で営巣中のアオバズクの巣中の雛3羽を数人のカメラマンが棒でつつき、カメラアングルを決めるといった通常では考えられないような行動があった。また、八王子城跡では野鳥を呼び寄せるためスピーカーで野鳥の声を流すというようなこともあった。

日本野鳥の会では、近年、問題視されている野鳥の撮影マナーの向上を呼びかける小冊子を作成しマナーの向上につとめている。

カワセミ会では、野鳥の巢を狙って繁殖に悪影響を与えらると思われるもの、餌付けなど野鳥の行動に悪影響を与えらると思われるものの撮影は自粛している。

(10) ツバメの集団ねぐらのためのヨシ原の保全

ツバメは、繁殖が始まる4月上旬頃から繁殖期終了後の9月下旬頃まで、河川や湖沼周辺のヨシ原等の1か所に集まり集団ねぐらを形成する。その数は季節により変化し7月末から8月上旬がピークになり、場所によっては数万羽を超える規模になる。

八王子・日野市域には2ヶ所の規模の大きな集団ねぐらが観察されている。

①多摩川の日野用水堰(通称「平の堰」)の環境変化

この場所に集団ねぐらが形成された時期は2000年から2003年の頃で、ピーク時に約28,000羽がカウントされた。しかし、2004年に激減し、2005年以降は消滅した。このねぐら地は、八王子側はヨシ原が後退しヤナギ等への遷移が進んだこと、昭島側は「水辺の楽校」の造成で人工化が進んでいること等が消滅の原因と推定された。

②多摩川右岸・谷地川付近の河原と通称ひょうたん池の保全対策

場所は日野市東光寺グラウンドから見てほぼ北側の河原で、ニセアカシアを中心とする林になっていた場所である。2014年の春に国土交通省京浜河川事務所によってニセアカシアが伐採され、その跡地にヨシ原が形成されたため、ツバメが集団ねぐらとして利用するようになった。2014年は多数のツバメが夕方飛来していることが観察されたが具体的なねぐら場所は特定できなかったが、2015年に特定できた。規模は約3万羽と推定された。2016年は当初は2015年と同じ場所に集団ねぐらが形成されたが、このねぐらは7月下旬になって約700m上流側の通称ひょうたん池の周りのヨシ原に移動した。

2005年から2014年までの間は下流の府中四谷橋付近のヨシ原に集団ねぐらが形成されたので、この間はそちらに移動したものと推定される。このように集団ねぐらが年により移動するのはヨシ原が安定してないことによるものと思われる。多摩川にツバメが安心してねぐらとして利用できるようなヨシ原の保全対策が急務である。

(11) 街路樹の役割

街路樹は都市の美観の向上や道路環境の保全、歩行者等に日陰を提供すること等様々な役割が期待されている。ここでは、野鳥の棲みかとして果たす街路樹の役割を取り上げる。

カワセミ会の会員K氏は2002年から毎月1回街路樹の多いルートと少ないルートで野鳥の調査を行った。街路樹の多いルートは、上野町の金剛院前から200m南に進み二つ目の信号の市民会館入口信号の交差点を左折して三小通りをJR八王子駅南口ま

で約1.2kmである。金剛院から200mはサトザクラ、市民会館入口信号（現：八王子消防署入り口信号）の交差点から国道16号交差点までの500mはハナミズキ、国道16号交差点から八王子駅南口まで500mはイチョウが植えられていて、全コース街路樹がある。街路樹の少ないルートは、国道20号の八日町四丁目交差点から200m南に進み、二つ目の信号の南新町交差点を左折して富士見通りをJR八王子駅北口まで約1.2kmである。国道20号の八日町四丁目交差点から南新町交差点まで200mはハナミズキが街路樹として植えられているが、富士見通りには街路樹がない。

調査結果は、2002年から2011年までの10年間に出現した野鳥の回数がまとめられている（下表）。街路樹の多いルートには途中に寺が3寺あって街路樹以外の要素もあるが、街路樹の少ないルートに比べ野鳥が圧倒的に多いことが明瞭となった。

このように野鳥と共存できるまちづくりに街路樹が大きな役割を果たしていることが明白である。地球温暖化の影響を受けて真夏の暑さの期間が年々長くなってきている。街路樹は歩道に日陰を作り、葉の蒸散作用で気温を下げる役割を果たしている。さらに野鳥を呼び寄せる効果が大きく、街路樹が身近な自然を作り出していることに寄与しているといえる。このような効用の大きい街路樹をまちづくりの基盤として位置づけたいものである。

二つのルートの野鳥出現回数の比較
2002～2011年（月1回全120回調査）

	三小通り	富士見通り	三小通り/富士見通り
	出現回数	出現回数	倍率
キジバト	59	29	2
コゲラ	7		
ヒヨドリ	115	90	1.2
ツグミ	6	2	3
ウグイス	1		
シジュウカラ	54	17	3.2
メジロ	35	14	2.5
カワラヒワ	35	3	11.7
スズメ	120	93	1.3
ムクドリ	65	7	9.2
オナガ	8	1	8
ハシボソガラス	47	30	1.6
ハシブトガラス	65	54	1.2
計	617	340	1.8
種数	13	11	

（12）ヒバリの生息場所と人との共存

ヒバリが生息できる草地、河原、農耕地などが減少しているなかで、芝生の草地として管理されている八王子・日野市内にある3ヶ所の公園がヒバリの生息（繁殖を含む）に重要な役割を果たしていることが判明した。これ等の公園には広い芝生状の草地があり、広い空の下でランニング、ウォーキングをする人、休憩や弁当を広げる人、犬を連れて散歩する人がやって来る。幼稚園児の遊び場等として利用され、休日にはサッカー場として練習や試合が行われている。このように人が活動している同じ場所でヒバリが餌場としているだけでなく営巣もしている。これを果たして共存といえるかどうかは別として、このような場所をしたたかに利用するヒバリの動向を今後も見守りたい。

（13）生きものの生息場所としての田んぼの役割

田んぼでは米だけではなく多くの生き物が育っている。「湿地」といわれているところは多くの生命を育む機能を持っているが、田んぼにも「湿地」の役割があるからである。

昭和30年代以降の都市開発の進展で田んぼなどの農地が減少するという変貌の中で八王子市高月町には、東京都では最大規模級のまとまった田んぼが残っている。川町の谷戸にも規模は小さいが田んぼがある。ここは浅川支流の城山川のさらに支流の大沢川流域にある。南側の丘陵は八王子霊園他の大規模霊園になり、北側はグリーントウン高尾という住宅団地になったが、田んぼとその周辺の雑木林はスポット的に残っている。

田んぼにどのような生きものが生息しているか、カワセミ会の会員K氏は高月水田で2001年から、川町谷戸で2006年から野鳥を中心とした生きもの調査を始めた。カウント対象地域は稲が植わっている田んぼだけに限定せず、畦、農道、隣接する農家の庭はもとより高月水田であれば、養豚場、乳牛舎、鉢物栽培温室地域、溜池など、川町谷戸であれば隣接する雑木林、椎茸栽培地、野菜畑も含めた。

結果は次表の通りであり、野鳥は高月水田で64種、川町谷戸で53種が記録された。

田んぼの生きもの調査結果

	高月水田	川町谷戸
調査期間	2001.8～2011.12	2006.1～2011.12
場所	八王子市高月町	八王子市川町
地形	平地	谷戸
調査対象面積	約35ha	約3ha
内水田面積	約30ha	約1ha
野鳥	64種	53種
トンボ	16種	23種
チョウ	34種	44種
カエル	4種	5種
植物	204種	275種

種別は次表のとおりである。特徴的なところを幾つか列挙すると、高月水田で旅鳥としてアマサギ、チュウサギ、アマツバメ、コシアカツバメ、ノビタキ、コムクドリなどが立寄ること、カワセミが用水路に来て採餌すること、モズの繁殖する場、チョウゲンボウやオオタカの採餌場になっていることである。2016年には千葉県野田市で放鳥された個体であるが、コウノトリも飛来した。

川町谷戸では夏鳥としてキビタキ、サンコウチョウが飛来すること、2006年、2007年と2年連続オオタカが雑木林で営巣したこと、カワセミが赤土の壁で何回か営巣したこと、冬にはカシラダカの群れが毎年やって来て採餌場としていること等が挙げられる。

観察された野鳥の種別

	高月水田	川町谷戸
観察期間	2001.8～2011.12	2006.1～2011.12
環境と面積	平地水田で約30ha	谷戸で水田約1ha、雑木林約2ha
留鳥	36種： カワウ、ゴイサギ、ダイサギ、コサギ、アオサギ、カルガモ、トビ、オオタカ、ノスリ、チョウゲンボウ、キジ、キジバト、ヒメアマツバメ、カワセミ、コゲラ、ヒバリ、キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、モズ、セッカ、エナガ、シジュウカラ、メジロ、ホオジロ、カワラヒワ、イカル、スズメ、ムクドリ、オナガ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、コジュケイ、ドバト、ガビチョウ	33種： ダイサギ、コサギ、アオサギ、カルガモ、トビ、オオタカ、ノスリ、キジ、キジバト、カワセミ、アオゲラ、コゲラ、ヒバリ、キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、モズ、ウグイス、エナガ、ヤマガラ、シジュウカラ、メジロ、ホオジロ、カワラヒワ、イカル、スズメ、ムクドリ、オナガ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、コジュケイ、ガビチョウ
夏鳥	6種： ササゴイ、コチドリ、ホトギス、ツバメ、イワツバメ、オオヨシキリ	7種： コチドリ、ホトギス、ツバメ、ヤブサメ、オオヨシキリ、キビタキ、サンコウチョウ
冬鳥	16種： マガモ、コガモ、ハイタカ、ハヤブサ、タシギ、アカゲラ、タヒバリ、ジョウビタキ、ツグミ、ウグイス、ホオアカ、カシラダカ、アオジ、オオジュリン、ベニマシコ、シメ	12種： ヤマシギ、ミソサザイ、ルリビタキ、ジョウビタキ、シロハラ、ツグミ、ヒガラ、カシラダカ、アオジ、マヒワ、シメ、カケス
旅鳥	6種： アマサギ、チュウサギ、アマツバメ、コシアカツバメ、ノビタキ、コムクドリ	1種： ノビタキ
計	64種	53種

(14) 復活の兆しか(アカショウビン、コウノトリ)

アカショウビンは昭和13年(1938)頃には高尾山でよく観察され、繁殖もしていた。その後も1970年代までは日本野鳥の会東京支部の探鳥会で観察されたが、1980年代以降は稀に出現する鳥になってしまった。1995年以降のカワセミ会の観察では八王子西部で数例の記録があるが、これ等は一時的な通過時のものである。

そのアカショウビンが2015年には5月末から7月上旬の間、高尾山とその周辺で観察された。1ヶ月以上の観察は1980年以来35年振りである。2016年も高尾山で約1ヶ月アカショウビンが観察された。アカショウビンが高尾山に復活するのか、今後の動向を見守りたい。

八王子の高月水田にコウノトリがやって来た。このコウノトリは野田市「こうのとりの里」から2016年の6月4日に、放鳥された当年生まれの幼鳥2羽の内の1羽(オス)で愛称が「きずな」、埼玉県川島町から2016年7月23日に八王子に到着、2日間滞在して、その後静岡県沼津市に向かった。コウノ

トリは、江戸時代(1868年以前)までは北海道以外の全国各地に生息していた。しかし、明治以降の乱獲と生息環境の悪化により、1971年に日本の空から姿を消した。

兵庫県豊岡市、福井県越前市、千葉県野田市などで人工飼育(繁殖)されたコウノトリや新潟県で進められているトキの野生復帰は、かつての生息地である自然豊かな人里に戻していこうという世界的にも例をみない取り組みである。コウノトリやトキが棲める環境が、私たち人間にとっても安全で安心な環境であるとの認識のもと、失われた自然や環境を見つめ直し、環境創造型農業の推進や水田、河川の自然再生、里山の復元等の取り組みが進められることが期待される。

表紙「ブッポウソウ」 倉本 修

秋の終わりに「カワセミ会」に入会し鳥を見始めた者にとって、翌春から夏にかけての季節は、期待に満ちたワクワクするシーズンとなる筈だ。図鑑でしか見たことのない夏鳥と呼ばれる鳥たち・・・オオルリ、キビタキ、クロツグミ・・・などと、生まれて初めて出会うチャンスが巡ってくるのだから。私もそうだった。

丁度その頃、高尾山で探鳥会が実施された。平成9年（1997年）5月17日のことである。私はひと月前の4月18日、4号路の吊り橋上で憧れのオオルリをスコープに入れ、初めて見ることができ気持ちは高揚していた。

朝、高尾山口駅前に集合し表参道口を登って行った。しばらく歩いた後、展望の良い金比羅台へ抜けることになった。狭い山道をゆっくり登っていると、列の後ろの方から、粕谷さんの興奮した声が聞こえてきた。「ブッポウソウ」ですっ・・・驚いて振り返ると、視界が開けた後方の山頂尾根の方向にスコープが向けられ、2～3人が覗かせてもらって浮き浮きしていた。私も駆け寄り見させてもらった。まぎれもなくブッポウソウだった。初めてこの目で見た。急いで自分のスコープの所に戻り焦点を合わせた。赤い嘴、青みがかかった緑色の羽毛、尾根のひときわ高い樹の梢にとまりこちらに体を向けていた。南国風の鮮やかな色彩に魅了されてしまった。

もう20年近くなるのに何故かこの時の光景は鮮明に憶えている。そしてもうひとつ、この探鳥会で私の記憶に残った出来事があった。「タコ杉」を通り過ぎた茶屋のあたりで、4～5人連れの大学生に出会った。双眼鏡をぶら下げ、スコープを持っているので、一目で鳥見のグループだとわかった。

粕谷さんが「ブッポウソウ」を見ましたよ・・・と声を掛けた。するとリーダーらしき学生が「それはおめでとうございます」と返答したのだ。聞いた瞬間、意表をつかれたが、その言葉はとても新鮮で心地よく響いた。私のような初心者にとって、バードウォッチャー同士の「マナー」を教えてもらった気がした。思いがけない鳥に出会った人に対して「おめでとう」と言って素直に称賛すること・・・見習おうと思った。

彼らはひと晩中高尾山を歩きまわり、夜の探鳥をしてきて今から降りるところですと言って去って行った。

後日、藤野の秋川橋に営巣していたブッポウソウを見に行ったら。そこで初めて飛翔する姿を見た。

光線の具合で青、紺、緑に輝く金属光沢の羽が美しかった。「ゲゲゲゲゲゲ」という鳴き声も初めて聞いた。

30周年記念誌の表紙絵を依頼された時、まっ先に思い浮かんだのがあの梢に止まっているブッポウソウの姿だった。

信州大学の中村浩志氏が2004年に「甦れ、ブッポウソウ」という本を出された。それによると2004年現在、日本に生息するブッポウソウは、多く見積もっても250つがい以下で、繁殖個体数にすると500個体ほどだそうである。危機的な状況になっているらしい。

その本の中で、1章だけ、あの有名な声の取り違いについて書かれていて、私は興味津々で読み終えた。日本では1千年以上にわたって、ブッポウソウは夜になると「仏法僧」と鳴く鳥であると信じられてきた。鳥名の由来である。ところが、声の主は違うのではないかと、気づくきっかけになったのはNHKのラジオ放送であったらしい。1935年（昭和10年）6月7日と8日の2日間、愛知県の鳳来山から「仏法僧」と鳴く声がラジオで全国に放送された。勿論、ブッポウソウの声ですということ。その放送を聞いた山梨県のNさんという方が、日頃から疑問を持っていたので5日後の6月12日午後7時15分、「トチ」の太木の上から「仏法僧」と鳴く声に気づき近づいたが、暗くてわからない。悔しくて思わず幹を叩くと、その振動に驚いたのか同じ木の枯枝の先に飛び出してきてとまった。シルエットがくっきりと見えた。息を殺し、もう一度「仏法僧」と鳴くのを待ってから撃ち落とした、するとそれは「コノハズク」であった。そして、それとは別に、NHKラジオから「仏法僧」という声が流れてくると、飼っている鳥が籠の中で、ラジオの声につられ、なんと「仏法僧」と鳴き出した。当時の鳥類学者の黒田長禮博士がその飼い鳥を借り受け、自宅で観察していたところ、奇しくも同じ6月12日朝5時10分、ついに「仏法僧」と鳴くのを確認した。その飼い鳥とは「コノハズク」であった。5日後に開かれた日本鳥学会で、この2件の事例が報告され正式に認められた。中村浩志氏はそれほどの長い年月、何故間違いに気づけなかったのか、いろいろ考察されていて、私にはとても興味深かった。

ブッポウソウは清水盛通さんの写真を参考にしました。



八王子・日野カワセミ会とは

本会は、主として浅川流域の野鳥の観察を通じて自然に接して楽しむこと及びそのために浅川流域の野鳥が安心して住める環境を作ることに協力することを目的として活動しています。以下、本会について幾つかのことを Q&A 形式で紹介します。

1. 八王子・日野カワセミ会はなぜ「カワセミ会」と名付けられたのですか

会の名称は、一度見ると美しさや素晴らしさに感動するカワセミを野鳥のシンボルとして、その名前を使わせてもらっています。「カワセミ」に活動地域を表す八王子を冠し、「八王子カワセミ会」として 1985 年に発足しました。

しかし、主な活動の場所である浅川は日野市にも続いているので、2001 年に「八王子・日野カワセミ会」と名称を変更しました。

2. カワセミ会は、「カワセミだけ」を見る会ですか

カワセミだけではなく、野鳥を観察（バードウォッチング）することを基本にして各種の幅広い活動をする会です。

3. どこで活動していますか

浅川流域の全域と多摩川、谷地川、大栗川を含めた八王子市、日野市の全域を活動領域としています。しかし、探鳥会の場合は、八王子市・日野市以外の日本各地にも出かけます。海外での探鳥会も実施しています。

4. どのような活動をしていますか

探鳥会、調査研究活動、支援活動、野鳥保護活動、勉強会、他の自然保護団体との連携、企画展の開催など幅広い活動を行っています。

(1) 探鳥会（野鳥観察会）の実施

浅川を中心に毎月第 2 日曜日に月例探鳥会を行っています。そのうち 3 回は広く一般の方々を対象とした公開探鳥会としています。

高尾山や多摩川など浅川周辺での浅川周辺探鳥会、北海道や九州、沖縄など遠方に行く遠出探鳥会、平日に行う平日探鳥会も実施しています。

(2) 調査研究活動

浅川流域を中心に 20 コースで毎月 1 回、野鳥定期カウントを行っています。

冬鳥一斉調査、多摩川のカモを中心とした越冬鳥調査、カルガモ繁殖調査、イワツバメ繁殖調査、オオルリ他夏鳥生息数調査、片倉城跡公園巣箱利用状況調査、浅川バードサンクチュアリの野鳥調査、我が家の庭に来た野鳥調査、秋のサシバ渡り調査、ツバメ集団ねぐら調査、ムクドリ・スズメ・ハクセキレイの集団ねぐら調査、ヒバリ生息調査、緑地保全地域における野鳥の生息調査、内陸のイソヒヨドリ繁殖調査などの調査研究活動を行っています。

また、渡り鳥の初認、希少種の観察、繁殖、集団ねぐらなどの毎日のように行っている野鳥の観察記録を鳥信として蓄積しています。記録性をさらに重視したフォト鳥信を 2010 年から開始しました。これまでの鳥信の情報にデジカメで撮れた写真をプラスした鳥信であり、証拠写真が添付されるので、鳥信の信頼性を一層高めることができました。

上記の活動は各会員、各年ばらばらにやっているのではなく、調査実施要領を作り統一した内容、方法、報告様式を定めて実施しています。

(3) 支援活動

小学校、各種団体、福祉施設、公立の公園、カワセミ会ジュニアクラブ等への野鳥観察支援を実施しています。

(4) 野鳥保護活動

- ・夏鳥の渡来時期に合わせ、野鳥の密猟防止パトロールを毎年実施しています。
- ・多自然型川作りなど野鳥が安心して生息できる環境をつくることに協力しています。
- ・宇津貫みどりの会と毎年、篠竹刈り探鳥会を共催して雑木林の保全活動に参加しています。

(5) 勉強会

外部講師を招聘した講演会、会員による活動の成果発表会、パソコンの操作法勉強会など適宜実施しています。

(6) 他の自然保護団体との連携

他の自然保護団体と連携し以下の活動を行っています。

- ・多摩川流域ツバメ集団ねぐら調査連絡会に参加して、多摩川のツバメ集団ねぐら調査に連携して取り組んでいます。
 - ・関東地域タカの渡り調査連絡会に参加して、サシバの渡り調査に連携して取り組んでいます。
- 八王子市、日野市等行政との以下の連携活動を行っています。
- ・毎年6月に開催される「八王子市環境フェスティバル」に参加しています。
 - ・毎年10月に開催される日野市の「まちづくり市民フェア」に参加しています。
 - ・「八王子浅川水辺の楽校」に理事として参加しています。
 - ・八王子市生涯学習センター、八王子市エコひろばの活動に協力しています。
 - ・八王子市、日野市内の小中学校の野鳥観察を支援しています。
 - ・東京都南多摩西部建設事務所に事務局をおく「浅川流域連絡会」に参加しています。

(7) 企画展の開催

カワセミ会の発足以来、5年毎に企画展を開催し、活動の成果を広く市民に公開しています。第1回は1990年に八王子市横山町の三角広場で「浅川の野鳥展」を開催、2016年9月に開催した「八王子・日野の野鳥展」は6回目の開催になります。

5. 調査研究活動にかなり重点がおかれていますが、どこからかに依頼されて実施しているのですか

どこからも、誰からも依頼されず自主的に、かつボランティアで実施しています。野鳥の専門家として野鳥の学問的な研究を主眼に取組んでいる訳ではありませんので、観察(調査)結果に疑問の残る部分も含まれることは承知の上でこのような活動を行っています。「先ずカウントして、記録し、公表してデータを次の世代に残そう」が、本会の活動のモットーです。このような活動は少数の専門家や研究者ではなし得ないことで、多くのアマチュアの活動の集積によってなし得るのではないかと考えています。

6. 傷害保険の対象になりますか

探鳥会、調査研究活動、支援活動、野鳥保護活動などは傷害保険の対象になります。

7. 活動の結果は公表していますか

調査結果を広報し、また一般社会での活用の促進を目的に各種の方法で公表しています。方法の内容は、本書の「第1章八王子・日野カワセミ会の調査研究活動」の「3. 調査研究活動の結果のまとめと公表」に記載されています。本会のホームページでは常時、活動の成果を公表しています。ホームページ・アドレス：<http://kawasemi.fan-site.net/>

8. 日本野鳥の会の支部ですか

日本野鳥の会とは全く関係のない独立した地域限定の団体です。

9. 自然保護団体ですか

当会の規約第2条には、「主として浅川の野鳥の観察を通じて自然に接して楽しむこと、及びその為に浅川の野鳥が安心して住める環境を作ることに協力することを目的とする」と規定されています。このことからわかるように当会は自然保護団体であり、単なる趣味の会ではありません。

10. NPO法人ですか

「任意団体」ですが、規約を設け、総会（事業計画決定と事業報告）、幹事会、各種委員会を開催して組織的な運営をしています。

11. 野鳥の専門家はいますか

アマチュアの団体でプロの専門家はいませんが、野鳥や自然に精通している会員は多くいます。また、いろいろな得意技や経験をもった会員がいて、各種の活動の中でスキルを発揮しています。

12. どんな雰囲気のかですか

権威主義的でなく、会員がうまくまとまっています。学校の先生から勉強を教えてもらうような参加ではなく、活動に参加して楽しむ中で生きた知識を得ようとする会員が多い会です。お互いに教えあう雰囲気があり、親切な先輩が多い会です。

13. どのような評価を受けていますか

会報かわせみ 50 年記念号（2013 年 3 月）に数名の方から頂いた寄稿に本会に対する幾つかの評価が載っています。そのうちの一つを以下に紹介します。「カワセミ会の活動は、専門の学者・研究者や行政委託調査コンサル等がけっしてまねのできない、〈地道・長期的・総合的〉で〈実証科学的〉な調査実績を着実に積み重ねており、これは市民運動の一つの到達点を示していると思われれます。私たちが活動を続けるなかで〈こうありたい〉と願っている領域に、カワセミ会はすでに先んじて一歩踏み込んでいると評価できます。今後とも、市民・住民のモットーでもある〈しつこく〉をとことん追求して、日本の自然誌にその歴史を刻んでください。（多摩川の自然を守る会 柴田隆行）」

14. どのような方法で運営していますか

毎年、1月の第2日曜日に総会を開催し、前年度の活動報告、会計報告、当年度の活動計画、予算案の議決を経て会の運営をしています。具体的な運営は毎月1回開催する幹事会の検討を経て実行されます。会員には「探鳥会あんない」を毎月送付しています。活動の実績は年2回発行される「会報かわせみ」で会員に報告されます。

15. 運営費などは、どうしているのですか

通常の運営費は会費、探鳥会参加費、支援活動の謝礼金などを収入源として自前で賄っています。記念事業などでは自然保護基金などに応募して支援を受けています。特定の政治団体や宗教団体との関係は、全くありません。

16. 会員は何人いますか

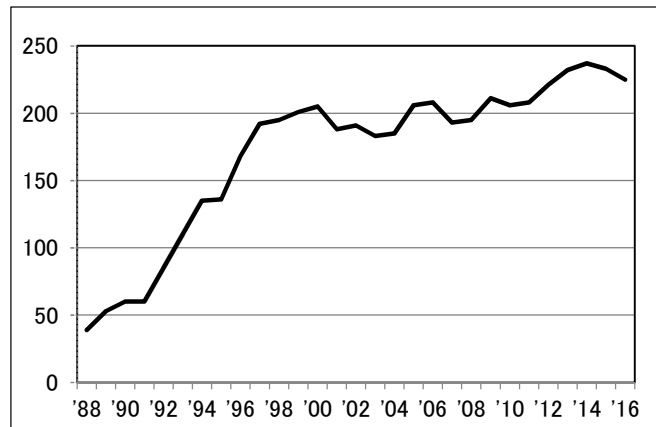
最近のカワセミ会の会員数は230名前後です。発足年の1985年から数年間は30名程度の団体でしたが、10年目で100名の規模になり、15年目で200名の規模となりました。

毎年10~20名程度の退会者がいますので会の活動の活性化と高齢化の防止のために新規会員の募集を行っています。

新規会員の募集には毎年3回実施している公開探鳥会、他団体への支援活動、本会ホームページ

ジの広報が大きな役割を果たしています。

会員数の推移



17. 誰でも入会できますか

野鳥が好きで野鳥のことを知りたいという気持ちがあれば、だれでも入会できます。初心者歓迎です。八王子市・日野市在住以外の人でも入会できます。

入会金 1000 円、年会費 1000 円（会員の家族、高校生は 500 円）です。

18. 入会の申し込みはどうするのですか

本会では何時でも入会を受け付けています。ホームページに「入会案内と入会申込フォーム」が掲載されています。

ホームページの閲覧が困難な方は、本会の会員に話しかけて下さい。本会の会員は全員ではありませんが、「八王子・日野カワセミ会のバッジ（ネームプレート）」を付けています。

入会申し込みをすると、事務局から「探鳥会あんない」などが送付されますが、約半年間は「体験入会」という位置付けにさせていただきます。その後の 1 月又は 7 月に改めて正式入会の手続き（入会金と年会費の納入）をして頂きます。従いまして、体験入会の期間は入会金、年会費の納入は必要ありません。<http://kawasemi.fan-site.net/>

19. 入会するとどのようなメリットがありますか

会員になると、以下のようなメリットがありますが、メリットを受けるというだけでなく、本会の運営に積極的に参加することが期待されています。

- ・毎月「探鳥会あんない」が届きます。
- ・毎月 1 回以上開催される探鳥会に参加できます。
- ・各種の野鳥研究調査活動に参加できます。
- ・各種の野鳥観察支援活動に参加できます。
- ・年 2 回発行される「会報かわせみ」を受け取ることができます。「会報かわせみ」に投稿もできます。
- ・パソコンが可能であれば、本会のホームページの会員専用頁を閲覧できます。
- ・eメールが可能であればメーリングリストで最新の野鳥情報を受信できます。
- ・鳥仲間がふえていきます。本会の運営に参加することもできます。

20. 入会すると探鳥会や調査活動に参加する義務がありますか

探鳥会活動、調査研究活動、支援活動等を積極的に行っていますが、これ等の活動の全てに参加する義務はありません。会員の日常の都合に合わせて参加して頂くことを原則としています。

21. カワセミ会 30 年のミニ歴史を教えてください

- 1985.1.5 「八王子カワセミ会」発足（会員数 10 名）探鳥会、定期カウント開始
- 1988.3.6 第 1 回公開探鳥会開催
- 1988.8 会報「かわせみ」創刊号発刊
- 1989.1 第 1 回定期総会開催（以後毎年 1 月に開催）会員数 39 名
- 1990 「カワセミ会シンボルマーク」決定
- 1990 他団体に対する野鳥の観察支援の開始（第 1 回は八王子市立檜原中学校 PTA）
- 1990.4 第 1 回 浅川の野鳥展（会員 60 名）
- 1991.7 「浅川わくわくワークショップ（環境フェスティバルの始まり）」参加
- 1991 「八王子市の鳥」制定をカワセミ会が市に要望。同年、オオルリが市の鳥に決定
- 1992 オオルリ他夏鳥調査開始
- 1993 サシバの渡りルート発見・秋のサシバ渡り調査開始
- 1993 東京都環境保全団体助成金を受ける
- 1994 バードソン実施、131 万円の募金集まる（10 周年記念事業の基金に活用）
- 1994.4 10 周年記念植樹（小田野中央公園にヤマザクラ 5 本植樹）
- 1995.5 10 周年浅川の野鳥展を開催
- 1996.3 「数え上げた浅川の野鳥」発刊
- 1996.5 緑化功勞により東京都知事表彰
- 1996 10,000 羽規模のツバメ集団ねぐらを発見
- 1999.10 15 周年浅川の野鳥展を開催
- 2000.6 ホームページ開設
- 2001.1 八王子カワセミ会から八王子・日野カワセミ会に名称変更
- 2001.6 コカ・コーラ環境教育財団から第 8 回環境教育賞（奨励賞）を受賞
- 2001～2002 年 八王子市・日野市全域でツバメの巣を調査（2,204 個の巣確認）
- 2002.10 紙芝居「カワセミさんとオオルリ君」を作成、特定非営利活動法人「八王子子ども劇場」主催の第 1 回「子育て万博 in 八王子（クリエートホール）」で上演
- 2003.7 財団法人日野自動車グリーンファンドから「燕の巣作り支援と燕、鴉の巣の住民登録」で助成金を受ける
- 2005.6 20 周年浅川流域の野鳥展（会員 201 名）
- 2006.3 「数え上げた浅川流域の野鳥 2」発刊
- 2008 カワセミ会ジュニアクラブ支援開始
- 2009.5 イソヒヨドリの営巣を八王子市で初めて確認（JR 八王子駅南口付近）
- 2010 フォト鳥信を開始
- 2010.12 第 7 回サシバ渡り全国集会の開催
- 2011 浅川流域の野鳥保護に関する啓発事業で八王子市民企画事業補助金を受ける
- 2011.11 25 周年八王子・日野の野鳥展を開催（会員 208 人、浅川野鳥カルタ作成）
- 2012.1 八王子市の新八王子市史（自然編）の刊行のための自然部会副会長にカワセミ会 会長 粕谷和夫が八王子市長から任命される
- 2013.1 第 4 回多摩川流域市民学会（生きものたちとその生息環境を考える）を支援
- 2013.3 会報かわせみ第 50 記念号を発刊
- 2014.1 DVD 八王子・日野の野鳥の記録（1985 年～2012 年）を作成
- 2016.6 第 5 期浅川流域連絡会（東京都南多摩西部建設事務所事務局）に参加
- 2016.7 公益財団法人とうきゅう環境財団から「浅川流域における野鳥の長期間継続調査結果から見た動向及び環境変化との関連を考察する調査研究」で助成金を受ける
- 2016.12 「数え上げた浅川流域の野鳥Ⅲ」、「八王子市・日野市 鳥類目録」を発刊

本書の制作に協力して頂いた方々

市橋ゆみ (カット)

大川征治

岡本昭男

荻島伸介

神谷古牧

川上恵

久保山嘉男

倉本修

清水盛通

白川司

千葉槿子

登坂久雄

内藤公三

長谷川篤

福本順吉

福本健

古山隆

宮越俊一

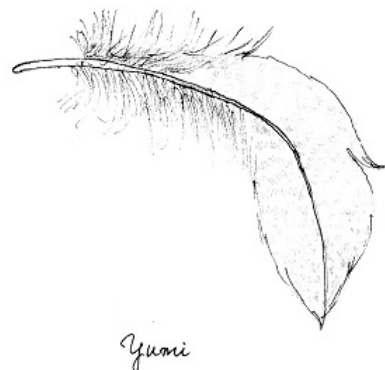
山浦秀雄

柚木育子

若狭誠

渡辺敬明

八王子・日野カワセミ会 旧・現会員の皆様 (定期カウント・その他調査への参加)



編集委員

○粕谷和夫
阿江範彦
加藤岸男
門口一雄
木澤隆雄
佐藤哲郎
玉木雅治
浜野建男
浜野知恵子
丸山二三夫
山崎悠一

(○：編集委員長 50音順)

編集後記

今回の編集作業で最も時間を要したのはデータの整理でした。エクセルに収められた膨大なデータの統一フォーマットへの変換、データの入力ミスのチェックに1年以上を要しました。それにしてもデータの整理と分析にエクセルの力を実感した。

本書に収められた調査結果はカワセミ会の調査に参加された多くの会員の努力の結晶です。一人や二人ではとてもできないが、力を結集すると大きな成果が生まれることを実感しています。

(粕谷 和夫)

野鳥観察の記録は「教え上げた浅川の野鳥」に続き第三版となりそれぞれの編集に携わる機会があった。初版はその大半を粕谷会長が書き上げカットなどの一部を担当した。第二版はみんなで話し合って作り上げた。色々な考え方があるのに感心し、複数の原稿を一つにまとめることの難しさを実感した。それから10年、粕谷会長の気力と体力に驚きながら、記録誌Ⅲにも関わる機会を得た。今回は、厳しいスケジュールで良くまとまったと思う。

(阿江 範彦)

今回「数え上げた浅川流域の野鳥Ⅲ」編集のほんの一端ですが担わせていただき、心よりお礼申し上げます。ただ、PC操作不如意につき、他の委員の方にご負担をお掛けしたことを大変心苦しく思っています。

それにしても、カワセミ会はすごいですね！この膨大な調査資料と内容の濃さ。会長の発想の豊かさと会員の皆さんの充実した日常活動に脱帽です。（加藤 岸男）

この30年間数え上げた八王子・日野の野鳥の記録・数値が目に見える冊子になりました。仲間と共に猛暑や寒さの日も続けた定期カウント、その結果を生かす作業に参画でき感慨深かったです。川の蛇行が少なくなり、周りの田畑が住宅に変わり、何百羽といったカモの仲間やユリカモメが飛来しなくなった記録、ガビチョウが突如現れ里山の主となったこと等、作業を通して再認識し、鳥を見る目、川・自然を見る目が広がった様な気がします。編集に携わった皆さん楽しい2年間ありがとうございました。

（門口 一雄）

今回、八王子・日野カワセミ会の30年間に亘る活動の集大成とも言うべき本書の編集に携わらせていただき大変感謝しています。旧・現会員の方々による日々の地道な調査・観察によるデータの蓄積が、このような大きな成果につながることを感得できました

本書を通じて、多くの方に八王子・日野カワセミ会の活動について知っていただき、また野鳥観察に興味を持っていただけたらと願っています。（木澤 隆雄）

今回、編集委員として10年前の「数え上げた浅川流域の野鳥2」に続き「同Ⅲ」の編集に携わったが、前回にも増して「継続する力」を感ずることが多かった。30年という年月の中で、大きな変化が見えてくるのは、「継続する力」の所産に他ならない。カワセミ会の強みもこの継続力にあることは明らかであろう。この先40年、50年と愚直に継続することで、さらに見えてくるものもあるはずだ。一方で、高齢化は着実に進行しており、活力を維持するために求められる課題は多いが、30年の節目で初心に立ち返り、改めて継続することの大事さを再確認したい。

（佐藤 哲郎）

「簡潔は、知恵の神髄」 - 本書の文体は、これが立脚地です。編集会議は原稿の贅肉を削り、曖昧さを断つ繰り返しでした。

しかし、例外がひとつ。「イソヒヨドリの繁殖調査」です。かつて東北、北海道にいたハクセキレイが、この 50 年間で東日本各地へ生息域を広げたように、イソヒヨドリはいま、海岸から内陸へ進行中。ですから、ここの文体だけはドキュメント、いわば「肉声を伝えたい」という熱意をご理解いただけたでしょうか。 (玉木 雅治)

2014 年から開始された編集委員会のメンバーとして非力ながら参加させていただきました。

足掛け 3 年、編集作業で委員長の粕谷会長、編集委員の方々の豊富な知識を吸収でき、大変勉強になりました。さらに 30 年間蓄積された野鳥の記録がいかに重要なものであるか、その記録を継続して残してきた会員の皆様の努力を、編集委員会の度に再認識することができました。なるべく多くの方にこの内容を見ていただければと思います。 (浜野 建男)

途中から編集メンバーに参加させて戴きました。積み上げた調査データの分析や観察の記録から改めて知ることが多く、とても勉強になりました。探鳥の楽しみ方が増え、会の皆様に感謝です。 (浜野 知恵子)

北浅川最上流部の定期カウントに参加して 17 年ほどになります。この間、住宅地の開発などで少しずつ自然環境が姿を変えてきていることと、野鳥の数が減ってきていることが最大の懸念事項です。一方、各種調査活動の中で思わぬ野鳥との出会いも数々あり、感動を受けたことを、編集作業を通じて思い起こすこともできました。作文の苦手な私にとってかなり重荷でしたが、いい体験をさせていただきました。

(丸山 二三夫)

毎月の定期カウント調査をはじめ、野鳥生息その他の調査活動に、時間の許す限り参加してきた。特に、定期カウント等で散歩中の通行人に野鳥を見せると「こんなに近くに見えるのですか」と驚いてくれる。野鳥に興味を持ってくれる人は、自然環境の変化にも注意を払い、そういう人が増加することが喜びである。 (山崎 悠一)

あとがき

カワセミ会の各種の野鳥調査は全て羽数のカウントが基礎になっています。「数え上げた・・・」という本書の名称は、野鳥の羽数を「数えて、記録し、それを蓄積」したものであるという意味が込められています。本書は以下の3点に主眼をおいて取りまとめました。

1. 次世代の共有財産となる

30年間の膨大な資料は、カワセミ会会員が積み上げた貴重なデータで、見方を変えれば今後の自然環境を考えるための宝の山です。このデータをカワセミ会会員だけのものとせず、社会で共有し、活用するための財産として取りまとめることにより次世代の共有財産となることを期待します。

2. 身近な自然環境の大切さを啓発する資料となる

野鳥の動向は人の活動によってもたらされる身近な環境の変化と密接な関係があると言われています。本書が身近な自然の大切さを啓発する資料となることを期待します。

3. カワセミ会等の今後の活動継続の足がかりとなる

カワセミ会が行っている調査研究は継続が必須です。本書が今後も活動を継続するための足がかりとして、これからの活動を担う会員のための必携書として、また他地域でこのような活動を始める人の参考書として役立つことを期待します。

カワセミ会発足から10年毎に「数え上げたシリーズ」を刊行し、今回で3回目となりました。今回は読みもの的なものを少し多くする試みとして「囲み記事（コラム）」を挿入しました。

「数え上げた浅川流域の野鳥2」では、野鳥のカウント羽数等のデータをCDに収録して添付しましたが、「Ⅲ」ではそれがありません。データの共有化と利用の促進を図るため、2017年以降にデータを収録した「DVD 八王子・日野の野鳥の記録」を作成して、公開する予定です。

裏表紙の写真：

- ・高月水田に飛来したコウノトリ（2016年7月23日）
- ・アユを掴むミサゴ（2012年11月3日）
- ・巢中のヒナに餌を運ぶイソヒヨドリ（左から2014年4月5日狭間駅付近、2016年5月21日JR八王子駅付近、2014年4月8日狭間駅付近）

八王子・日野カワセミ会 30 年間の観察記録
数え上げた浅川流域の野鳥 III

2016 (平成 28) 年 12 月発行

企画編集 八王子・日野カワセミ会 30 周年記念事業
数え上げた浅川流域の野鳥 III 編集委員会

発 行 八王子・日野カワセミ会
発行人 粕谷和夫 (八王子・日野カワセミ会 会長)
八王子市天神町 3-6

助成(一部) 公益財団法人とうきゅう環境財団

<http://kawasemi.fan-site.net/>

本誌に掲載されている記事及びデータを引用や利用される方は次の点を必ず守って下さい。

1. 個人(研究者含む)や学校等の教育現場で利用される場合は、利用先(利用媒体)に出典(八王子・日野カワセミ会編集、数え上げた浅川流域の野鳥 III)を明示して下さい。
2. 行政当局、調査会社等が業務として作成する報告書等に引用する場合や自然保護団体等が引用する場合は、引用責任者、引用事項(内容)、引用目的、引用先、引用時期等を明記した申請書(様式任意)を本会の事務局を通じ会長あてに提出し承認を受けて下さい。

